

# 十三本塚北

—新潟県柏崎市十三本塚遺跡群・十三本塚北遺跡発掘調査報告書—

2001

柏崎市教育委員会

# 十 三 本 塚 北

—新潟県柏崎市十三本塚遺跡群・十三本塚北遺跡発掘調査報告書—

2 0 0 1

柏崎市教育委員会



## 序

縄文人たちの生活の跡は、大小さまざまな遺跡として残されています。これらの多くが集落跡、つまりムラの跡であり、住居や建物などの柱穴、食料の貯蔵穴、あるいは遺骸を埋葬するために掘られた墓坑などが、台地に穿たれた穴として発見されています。これらの存在は、縄文人が、ある程度の期間、定住的な生活を送っていたことの証明とすることができます。

そして、便利の良いところ、つまり食料の獲得が容易で、生活の安全性が確保されている場所は、ムラづくりの最適地となります。縄文人は、そのような土地を選ぶ名人でもありました。人気のある土地は、たとえ一時的に無住となっても、その後には別の縄文人たちが新たな生活を始めるなど、何度も集落を形成することがあります。柏崎平野の南部に横たわる低い丘陵地帯には、このようにして繰り返された縄文集落の跡が、数多く残されています。ここに報告する十三本塚北遺跡もその一つですが、規模が大きなことから、本地域では中核的な集落であったと考えられます。

軽井川川内に所在する本遺跡は、老人保健施設建設の事前調査として発掘調査を実施しましたが、本報告書がその正式な記録となります。調査の結果、縄文時代後期の大集落が姿を現し、数多くの住居跡、直径が80cmにも達する太い柱で建てられた建物跡などが発見されました。また、出土した遺物も多く、特に東北南部や関東、信州や北陸といった各地の土器は、当時の交流の広さを強く印象づけるに十分な物証となりました。この成果を報告する本書そのものは、ささやかではあります。しかし、地域の歴史を理解する一助となり、遺跡保護のため活用されるとすれば、この上なく幸いに思うところであります。

調査は、残暑が厳しい8月末から始まり、みぞれが降りしきる年末までと、そして翌春の3月から4月まで延長して続けられ、天候に恵まれたとは言えない状況ではありましたが、無事終了することができました。そして、この成果を本書として報告することができましたことも、事業主体でもあります医療法人公仁会のご理解とご協力の賜物であります。心より感謝申し上げたいと思います。また、みぞれの降りしきる中、懸命に作業を続け、最後まで調査に参加されました柏崎市シルバー人材センターの会員の皆様および調査員各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成13年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

# 例 言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字軽井川字十三本塚2870番地他に所在する十三本塚北遺跡発掘調査の記録である。
2. 本事業は、老人保健施設建設事業に伴う用地造成工事の事前調査として実施した。医療法人公仁会から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査は、平成7年8月28日から同年12月24日まで現場作業を行ったが、補足調査を翌年の3月21日から4月26日まで実施しており、この日時が最終的な現場作業の終了である。整理作業は、現場作業が終了した後、平成8年1月から出土品の水洗等の作業を開始したが、諸般の事情から平成9年度の中断を挟みつつ、平成12年度まで整理作業および報告書作成作業を行うこととなった。
4. 発掘調査現場作業は、社団法人柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町3丁目喬柏園内文化振興課遺跡調査室において行った。また現場作業は、文化振興課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員とし、整理・報告書作成作業についても、職員（学芸員）を中心に遺跡調査室のスタッフで行った。発掘調査体制等については、本文に記載した。
5. 発掘調査によって出土した遺物は、註記に際し遺跡名を「十三北」と略記し、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（文化振興課遺跡調査室）が保管・管理している。
7. 本報告書の執筆は、下記のとおりの方担執筆とし、調査担当の品田が編集もあわせて行った。

第1章～第3章・第4章第1節～第2節・第5章第1節・第3節

・写真図版（調査・遺構）……………品田高志

第4章第3節・第5章第2節・写真図版（遺物）……………平吹 靖

8. 本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
9. 発掘調査から本書作成まで、事業主体である医療法人公仁会（金光男理事長）から、さまざまなご協力とご理解を賜った。またこのほかにも、石井寛氏、木下哲夫氏、そして中村五郎氏をはじめとした多くの方々から、多大なご協力とご協力並びにご教示等をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる次第である。なお、整理・報告作業が長期に渡ったことから、全ての方を網羅できなかったことが考えられるが、非礼を詫びつつも、ご寛恕願う次第である。

諫山えりか・石井 寛・石坂圭介・江原 英・小田由美子・加藤 学・金内 元・金子優子  
木島 勉・木下哲夫・國島 聡・佐藤雅一・菅谷通保・鈴木徳雄・関根慎二・高橋保雄  
滝沢規朗・田中耕作・谷藤保彦・寺崎裕助・土肥 孝・宮樫秀之・中村五郎・堀越正行  
前山精明・増子正三・宮尾 亨・山下歳信・綿田弘実・渡辺朋和・渡辺美穂子  
朝日村教育委員会（奥三面遺跡調査室）・柏崎市立博物館・柏崎市立図書館  
株式会社植木組・株式会社セビアス・新潟県教育庁文化行政課

（五十音順・敬称略）

# 目 次

I 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
1) 十三本塚台地における既往の調査	1
2) 本発掘調査に至るまで	3
2 発掘調査業務の概要と調査体制	4
1) 本発掘調査業務	4
2) 整理・報告書作成業務	7
3) 調査体制	7
II 遺跡群をとりまく環境	9
1 地理的な環境	9
2 柏崎平野南部の縄文時代遺跡	10
3 十三本塚遺跡群概観	13
III 遺跡と遺構	14
1 調査の方法と調査区	14
1) 調査区とグリッドの設定	14
2) 調査の方法と調査状況	15
2 遺構の概要と層序	17
1) 遺構の概要と分布	17
2) 層 序	19
3 縄文時代の遺構	20
1) 建物跡	20
2) 住居跡	28
3) 土坑類	35
4) 廃棄場	38
5) 風倒木痕	41
4 中世・近世以降の遺構	42
1) 焼土坑	42
2) 溝跡	43
IV 遺 物	44
1 縄文土器	44
1) 出土状況と資料の提示	44
2) 土器群の大別と群別	45
3) 焼成と色調と胎土	46
4) 中期縄文土器	47
5) 後期縄文土器	48
2 土製品類・ミニチュア製品	83
1) ミニチュア土器	83
2) 土製品類	83
3 縄文時代の石器	84
1) 各 説	84
2) 石器群の様相	92
V 総 括	97
1 十三本塚北遺跡の土器様相と時期区分	97
1) 後期縄文土器の群構成	97
2) 時期区分と在来系土器群の変遷	98
3) 時期区分の大別と細別	104
2 十三本塚北遺跡における石礫生産活動	107
1) 石器組成・石材組成からみる石礫の位置付け	107

2) 成品にみる諸データ/110	3) 製作技術/113
4) 製作工程復元/115	5) 小 結/117
3 十三本塚北縄文集落の構成と消長.....	119
1) 遺構群の配置と様相/119	2) 縄文集落の景観/123
3) 十三本塚北縄文集落の消長と盛衰/125	
引用・参考文献/127	
附表1 遺構観察表/129	附表2 縄文土器観察表/151
附表3 石器観察表/191	調査報告書抄録/192

## 図 版 目 次

図面図版	45 建物跡柱穴断面図 5
1 十三本塚北遺跡と旧地形	46 建物跡柱穴断面図 6
2 十三本塚北遺跡調査区	47 住居跡柱穴断面図 1
3 遺構配置全体図	48 住居跡柱穴断面図 2
4 遺構全体分割図	49 住居跡柱穴断面図 3
5 遺構配置分割図 1	50 柱穴断面図 1
6 遺構配置分割図 2	51 柱穴断面図 2
7 遺構配置分割図 3	52 柱穴断面図 3
8 遺構配置分割図 4	53 柱穴断面図 4
9 遺構配置分割図 5	54 貯蔵穴・土坑個別図
10 遺構配置分割図 6	55 廃棄場 1
11 遺構配置分割図 7	56 廃棄場 2
12 遺構配置分割図 8	57 廃棄場 3
13 遺構配置分割図 9	58 廃棄場 4
14 遺構配置全体図 1	59 廃棄場 5
15 遺構配置全体図 2	60 風倒木痕個別図
16 住居・建物跡等配置全体図	61 礎土坑・溝跡個別図
17 住居・建物跡配置分割図 1	62 縄文土器 遺構 1 (SKp-1734)
18 住居・建物跡配置分割図 2	63 縄文土器 遺構 2 (SK-932ほか)
19 住居・建物跡配置分割図 3	64 縄文土器 遺構 3 (柱穴・ピット)
20 住居・建物跡配置分割図 4	65 縄文土器 遺構 4 (柱穴・ピット)
21 住居・建物跡配置分割図 5	66 縄文土器 遺構 5 (柱穴・ピット)
22 住居・建物跡配置分割図 6	67 縄文土器 廃棄場 1 (Aベルト①)
23 住居跡個別図 1	68 縄文土器 廃棄場 2 (Aベルト③・Bベルト①)
24 住居跡個別図 2	69 縄文土器 廃棄場 3 (Bベルト②)
25 住居跡個別図 3	70 縄文土器 廃棄場 4 (Bベルト③)
26 住居跡個別図 4	71 縄文土器 廃棄場 5 (A・Bベルト追加)
27 住居跡個別図 5	72 縄文土器 廃棄場 6 (Aベルト③)
28 住居跡個別図 6	73 縄文土器 廃棄場 7 (Aベルト④)
29 住居跡個別図 7	74 縄文土器 廃棄場 8 (Aベルト⑤)
30 住居跡個別図 8	75 縄文土器 廃棄場 9 (Aベルト⑥)
31 住居跡個別図 9	76 縄文土器 廃棄場 10 (Aベルト⑦)
32 住居跡個別図 10	77 縄文土器 廃棄場 11 (Bベルト①)
33 住居跡個別図 11	78 縄文土器 廃棄場 12 (Bベルト②)
34 住居跡個別図 12	79 縄文土器 廃棄場 13 (Bベルト⑥)
35 住居跡個別図 13	80 縄文土器 廃棄場 14 (Bベルト⑦)
36 住居跡個別図 14・建物跡個別図 1	81 縄文土器 廃棄場 15 (Bベルト⑧)
37 建物跡個別図 2	82 縄文土器 廃棄場 16 (Bベルト⑨)
38 建物跡個別図 3	83 縄文土器 廃棄場 17 (Bベルト⑩)
39 建物跡個別図 4	84 縄文土器 廃棄場 18 (C6-14G①)
40 建物跡個別図 5	85 縄文土器 廃棄場 19 (C6-14G③・C6-15 G①・C6-18G④)
41 建物跡柱穴断面図 1	86 縄文土器 廃棄場 20 (C6-18G⑤)
42 建物跡柱穴断面図 2	87 縄文土器 廃棄場 21 (C6-14G③)
43 建物跡柱穴断面図 3	88 縄文土器 廃棄場 22 (C6-14G④)
44 建物跡柱穴断面図 4	89 縄文土器 廃棄場 23 (C6-14G⑤)

- 90 縄文土器 廃棄場24 (C 6-14G⑥)
- 91 縄文土器 廃棄場25 (C 6-14G⑦)
- 92 縄文土器 廃棄場26 (C 6-15G②)
- 93 縄文土器 廃棄場27 (C 6-15G③)
- 94 縄文土器 廃棄場28 (C 6-15G④)
- 95 縄文土器 廃棄場29 (C 6-15G⑤)
- 96 縄文土器 廃棄場30 (C 6-18G③)
- 97 縄文土器 廃棄場31 (C 6-18G④)
- 98 縄文土器 廃棄場32 (C 6-18G⑤)
- 99 縄文土器 廃棄場33 (C 6-18G⑥)
- 100 縄文土器 廃棄場34 (C 6-18G⑦)
- 101 縄文土器 廃棄場35 (C 6-18G⑧)
- 102 縄文土器 廃棄場36 (C 6-18G⑨)
- 103 縄文土器 廃棄場37 (C 6-19G①)
- 104 縄文土器 廃棄場38 (C 6-19G②)
- 105 縄文土器 廃棄場39 (C 6-19G③)
- 106 縄文土器 廃棄場40 (C 6-19G④)
- 107 縄文土器 廃棄場41 (C 6-19G⑤)
- 108 縄文土器 廃棄場42 (C 6-19G⑥)
- 109 縄文土器 廃棄場43 (C 6-19G⑦)
- 100 縄文土器 廃棄場44 (C 6-19G⑧)
- 111 縄文土器 廃棄場45 (C 6-19G⑨)
- 112 縄文土器 廃棄場46 (C 6-19G⑩)
- 113 縄文土器 廃棄場47 (C 6-19G⑪)
- 114 縄文土器 廃棄場48 (C 6-19G⑫)
- 115 縄文土器 廃棄場49 (C 6-20G①)
- 116 縄文土器 廃棄場50 (C 6-20G②)
- 117 縄文土器 廃棄場51 (C6-20G③・C6-22G①)
- 118 縄文土器 廃棄場52 (C 6-20G④)
- 119 縄文土器 廃棄場53 (C 6-20G⑤)
- 120 縄文土器 廃棄場54 (C 6-20G⑥)
- 121 縄文土器 廃棄場55 (C 6-22G②)
- 122 縄文土器 廃棄場56 (C 6-23G①)
- 123 縄文土器 廃棄場57 (C 6-23G②)
- 124 縄文土器 廃棄場58 (C 6-23G③)
- 125 縄文土器 廃棄場59 (C 6-23G④)
- 126 縄文土器 廃棄場60 (C 6-23G⑤)
- 127 縄文土器 廃棄場61 (C 6-23G⑥)
- 128 縄文土器 廃棄場62 (C 6-23G⑦)
- 129 縄文土器 廃棄場63 (C 6-23G⑧)
- 130 縄文土器 廃棄場64 (C 6-23G⑨)
- 131 縄文土器 廃棄場65 (C 6-23G⑩)
- 132 縄文土器 廃棄場66 (C 6-23G⑪)
- 133 縄文土器 廃棄場67 (C 6-23G⑫)
- 134 縄文土器 廃棄場68 (C 6-23G⑬)
- 135 縄文土器 廃棄場69 (C 6-23G⑭)
- 136 縄文土器 廃棄場70 (C 6-23G⑮)
- 137 縄文土器 廃棄場71 (C 6-24G①)
- 138 縄文土器 廃棄場72 (C 6-24G②)
- 139 縄文土器 廃棄場73 (C 6-24G③)
- 140 縄文土器 廃棄場74 (C 6-24G④)
- 141 縄文土器 廃棄場75 (C 6-24G⑤)
- 142 縄文土器 廃棄場76 (C 6-24G⑥)
- 143 縄文土器 廃棄場77 (C 6-24G⑦)
- 144 縄文土器 廃棄場78 (C 6-24G⑧)
- 145 縄文土器 廃棄場79 (C 6-24G⑨)
- 146 縄文土器 廃棄場80 (C 6-24G⑩)
- 147 縄文土器 廃棄場81 (C 6-25G①)
- 148 縄文土器 廃棄場82 (C 6-25G②)
- 149 縄文土器 廃棄場83 (C 6-25G③)
- 150 縄文土器 廃棄場84 (D6-16G①・D6-17G①)
- 151 縄文土器 廃棄場85 (D 6-16G②)
- 152 縄文土器 廃棄場86 (D 6-16G③)
- 153 縄文土器 廃棄場87 (D6-16G④・D6-17G④)
- 154 縄文土器 廃棄場88 (D 6-17G②)
- 155 縄文土器 廃棄場89 (D 6-21G①)
- 156 縄文土器 廃棄場90 (D6-21G③・D6-22G③)
- 157 縄文土器 廃棄場91 (D 6-21G④)
- 158 縄文土器 廃棄場92 (D 6-21G⑤)
- 159 縄文土器 廃棄場93 (D 6-21G⑥)
- 160 縄文土器 廃棄場94 (D 6-22G②)
- 161 縄文土器 廃棄場95 (D 6-22G③)
- 162 縄文土器 廃棄場96 (D 6-22G④)
- 163 縄文土器 廃棄場97 (C 7-2 G①・C 7-3 G①・C 7-4 G①)
- 164 縄文土器 廃棄場98 (C7-4G③・地点不明その他)
- 165 縄文土器 廃棄場99 (C 7-2 G②)
- 166 縄文土器 廃棄場100 (C7-2G③・C7-3G③)
- 167 縄文土器 廃棄場101 (C 7-3 G③)
- 168 縄文土器 廃棄場102 (C 7-3 G④)
- 169 縄文土器 廃棄場103 (C 7-4 G③)
- 170 縄文土器 廃棄場104 (C 7-4 G④)
- 171 縄文土器 廃棄場105 (C 7-4 G⑤)
- 172 縄文土器 廃棄場106 (C 7-4 G⑥)
- 173 縄文土器 廃棄場107 (C7-5G①・C7-9G①・D7-1G①・D7-2G①)
- 174 縄文土器 廃棄場108 (C 7-5 G②)
- 175 縄文土器 廃棄場109 (C7-5G③・C7-9G③)
- 176 縄文土器 廃棄場110 (C 7-9 G③・D 7-1 G③・D 7-3 G③)
- 177 縄文時代 石器 1
- 178 縄文時代 石器 2
- 179 縄文時代 石器 3
- 180 縄文時代 石器 4
- 181 縄文時代 石器 5
- 182 縄文時代 石器 6
- 183 縄文時代 石器 7
- 184 縄文時代 石器 8
- 185 縄文時代 石器 9
- 186 縄文時代 石器10
- 187 縄文時代 石器11
- 188 縄文時代 石器12
- 189 縄文時代 石器13
- 190 縄文時代 石器14・ミニチュア土器・土製品他
- 写真図版**
- 191 十三本塚北遺跡航空写真
- 192 a. 建物跡X群 (SB-78~81) 全景  
b. 廃棄場出土縄文土器群
- 193 十三本塚北遺跡透景
- 194 調査 1
- 195 調査 2
- 196 遺構群 1  
a. 調査区西辺部遺構群  
b. 調査区南東部遺構群
- 197 遺構群 2  
a. 調査区中央部遺構群  
b. C~D-10~11グリッド遺構群
- 198 遺構群 3  
a. 調査区西辺部遺構群  
b. 調査区西平部中央遺構群
- 199 遺構群 4  
a. 調査区西平部遺構群  
b. E-7~8グリッド周辺遺構群
- 200 遺構群 5  
a. 調査区西平部遺構群  
b. 調査区南西部遺構群
- 201 遺構群 6  
a. C~D-9~10グリッド遺構群  
b. C~D-9~11グリッド遺構群
- 202 遺構群 7  
a. C~D-7~8グリッド遺構群  
b. E~D-6グリッド周辺部遺構群

203	遺構群 8	a. 調査区北辺部遺構群	228	柱 穴11
		b. 調査区北西部遺構群	229	柱 穴12
204	遺構群 9	a. 調査区東半部遺構群	230	土 坑
		b. 調査区東辺部遺構群	231	廃棄場 1
205	遺構群10	a. 調査区北東部遺構群(建物跡X群)	232	廃棄場 2
		b. 調査区北東部遺構群(土坑群B)	233	廃棄場 3
206	建物跡・住居跡 1		234	廃棄場 4
207	建物跡・住居跡 2		235	風倒木痕
208	建物跡・住居跡 3		236	焼土坑・溝 跡 1
209	建物跡・住居跡 4		237	溝 跡 2
210	建物跡・住居跡 5		238	遺構出土縄文土器
211	建物跡・住居跡 6		a. SK-1734出土縄文土器	
212	建物跡・住居跡 7		b. SK-932出土縄文土器	
213	建物跡・住居跡 8		239	廃棄場出土縄文土器 1
214	建物跡・住居跡 9		240	廃棄場出土縄文土器 2
215	建物跡・住居跡10		241	廃棄場出土縄文土器 3
216	建物跡・住居跡11		242	廃棄場出土縄文土器 4
217	建物跡・住居跡・土坑群12		243	廃棄場出土縄文土器 5
218	柱 穴 1 (建物跡 1)		244	廃棄場出土縄文土器 6
219	柱 穴 2 (建物跡 2)		245	廃棄場出土縄文土器 7
220	柱 穴 3 (建物跡 3)		246	廃棄場出土縄文土器 8
221	柱 穴 4 (建物跡 4)		247	廃棄場出土縄文土器 9
222	柱 穴 5 (建物跡 5)		248	廃棄場出土縄文土器10
223	柱 穴 6 (建物跡 6・住居跡 1)		249	廃棄場出土縄文土器11
224	柱 穴 7 (住居跡 2)		250	縄文時代石器 1
225	柱 穴 8 (住居跡 3)		251	縄文時代石器 2
226	柱 穴 9 (住居跡 4)		252	縄文時代石器 3
227	柱 穴10		253	縄文時代石器 4
			254	縄文時代石器 5

## 挿 図 目 次

第1図	十三本塚台地における縄文集落概念図/2	第23図	J群土器の器形分類図/78
第2図	十三本塚の塚群分布図/2	第24図	K群土器の器形分類図/78
第3図	十三本塚北遺跡発掘調査業務工程図/5	第25図	椀形土器の分類図/81
第4図	柏崎平野地形分類図と十三本塚北遺跡の位置/11	第26図	注口土器の分類図/81
第5図	十三本塚北遺跡と周辺の縄文時代遺跡/11	第27図	蓋形土器の分類図/81
第6図	十三本塚北遺跡のグリッド区分図/14	第28図	石鏝長幅分布図/85
第7図	建物跡分類図/21	第29図	石鏝重量分布図/85
第8図	住居跡分類図(1)/28	第30図	石鏝長幅分布図/88
第9図	住居跡分類図(2)/29	第31図	石鏝重量分布図/88
第10図	住居跡法量分布図/30	第32図	ビス・エスキューム長幅分布図/91
第11図	A群土器の器形分類図/49	第33図	ビス・エスキューム重量分布図/91
第12図	B群土器の器形分類図(1)/53	第34図	機能別比率グラフ/95
第13図	B群土器の器形分類図(2)/54	第35図	十三本塚北B群土器の変遷試案/101
第14図	B群土器の器形分類図(3)/55	第36図	十三本塚北C・D群土器の変遷試案(1)/102
第15図	B群土器口縁部分類図/57	第37図	十三本塚北C・D群土器の変遷試案(2)/103
第16図	C・D群土器器形分類図(1)/62	第38図	十三本塚北遺跡と石鏝組対比較対象遺跡位置図/108
第17図	C・D群土器器形分類図(2)/63	第39図	石鏝とビス・エスキュームの長幅分布図/112
第18図	C群土器の器形分類図/65	第40図	石鏝着柄方法推定模式図/113
第19図	D群土器の器形分類図/69	第41図	両極銅鑼技法・ビス・エスキューム模式図/114
第20図	E群土器の器形分類図/69	第42図	十三本塚北遺跡柱穴類法量分布図/122
第21図	F群土器の器形分類図/73	第43図	住居跡分類別分布図/124
第22図	I群土器の器形分類図/76		

## 表 目 次

第1表	十三本塚北遺跡周辺の縄文時代遺跡地名表/10	第6表	グループ別石材・器種/94
第2表	建物跡X群における柱穴の重複関係/22	第7表	十三本塚北遺跡出土石器集計表/95
第3表	建物跡Y群における柱穴の重複関係/24	第8表	十三本塚北遺跡土器群変遷試案/105
第4表	十三本塚北遺跡建物跡・住居跡一覧/33~34	第9表	石鏝石材組成表/109
第5表	土器群の大別と群別/45	第10表	ビス・エスキューム石材組成表/110

# I 序 説

## 1 調査に至る経緯

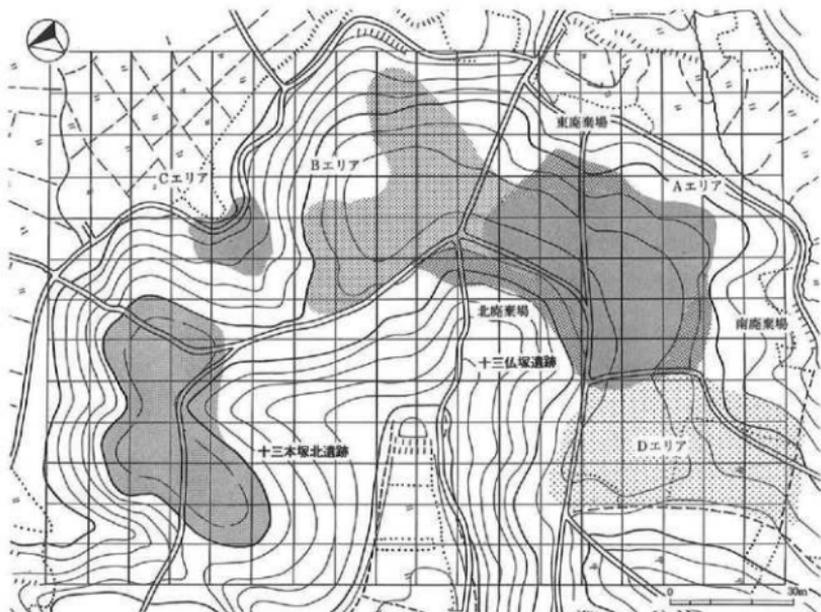
### 1) 十三本塚台地における既往の調査

十三本塚北遺跡が属する十三本塚遺跡群は、ほかに十三仏塚遺跡と十三本塚、十三本塚の塚が含まれ、合計4件の遺跡で構成される。所在地は、新潟県柏崎市大字軽井川字十三本塚地内、市街地から西南西におよそ4 kmに位置し、平野南部に横たわる中位段丘上に立地する。

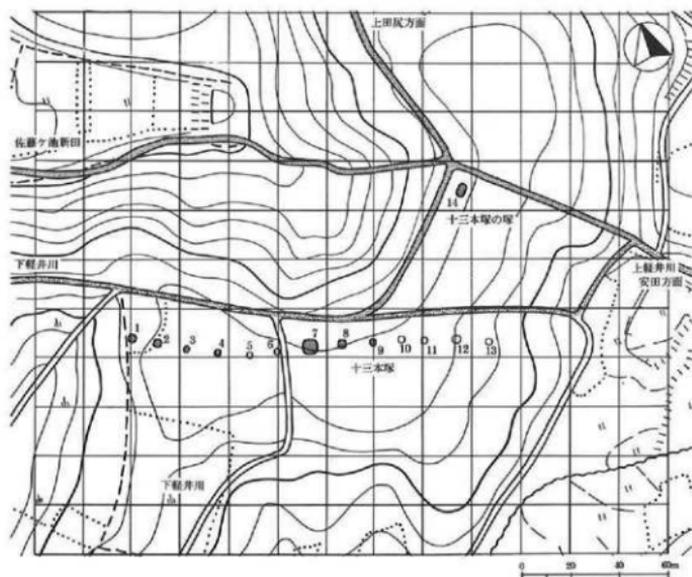
本遺跡群の中で最も古くから知られていた十三仏塚遺跡は、縄文時代中期の遺跡として柏崎市を代表する縄文遺跡の一つであり、新潟県内でも広く知られている存在である。本遺跡の名称は、本来小字名である「十三本塚」が正しく、昭和48年の周知化に際して作成された「新潟県埋蔵文化財保護地調査カード」にも「十三本塚遺跡」と明記されていた。しかし、発見以来、研究者間では先入観が先行したかたちで「十三仏塚」と呼び習わされていたとされ、柏崎市史編さん段階における名称の検討でも、このような研究史的経緯を踏まえ、「十三仏塚」を冠することになったものである〔品田1987〕。

十三仏塚遺跡の発見は比較的古く、その中でも第二次大戦前後に行われた開墾が大きな契機であったと考えられ、昭和20年代にはすでに小規模な発掘調査が実施されている。調査の実施主体は、三井田忠氏を中心とする有志によるもので、出土した大量の土器が十三仏塚遺跡研究の始まりとなった。調査地点は、昭和47年に柏崎市教育委員会が作成した遺跡地図に記された遺跡範囲からすれば、東側斜面に相当しそうであるが<sup>①</sup>、小規模調査の割には出土物の量が多いことから、廃棄場（土器捨て場）が対象となった可能性が高い。昭和57年、田尻地区に計画されていた工場団地造成の大規模開発が実施に移されようとしていたが、当該用地内に十三仏塚遺跡の一部が含まれていることが判明した。このため、事業主体者と市教委は協議を重ね、遺跡範囲と推定される台地部分と斜面を含め、緑地帯として残すことで合意することができた。この結果、田尻工場団地の用地に含まれた十三本塚遺跡群の一部は、永久に保存できる状況となった。ただし、昭和60年に工業団地の周辺整備事業の一環として農道の付け替え工事が実施されたが、その際古代における鉄生産関連遺構と目される長大な半地下式木炭窯1基が発見され、調査されている〔品田1989〕。塚群については、特徴的な遺跡名により早くから注目されていたが、周知化や具体的な調査等はかなり遅れることとなった。その意味では、昭和57年に行われた神奈川大学日本常民文化研究所による十三塚の分布調査は、大きなきっかけとすることができ〔同研究所編1984〕、初めて十三本塚の配列等の紹介がなされた。

しかし、これまでの調査等は、各遺跡を個別に見ていくに過ぎず、全体を総合的に取り扱うという機会は少なかった。ところが、平成2年11月に実施された確認調査は、その発端に民間事業者による宅地造成事業計画の存在はあったが、本遺跡群を総合的に見ていく端緒となった〔柏崎市教委1991〕。この調査結果から十三仏塚遺跡の状況をうかがうと、遺構密度によって3段階のエリアが設定でき、最も遺構密度の濃いエリアに接して南・東・北の三方に廃棄場（土器捨て場）が存在することが確認されたのである（第1図）。また、この調査では塚群の位置を明らかにするための測量が実施され、現存する塚の位置の把握、そして十三塚とされる塚列と消滅した塚の位置の推定が地籍図を参考としつつ試みられた。また、



第1図 十三本塚台地における縄文集落概念図 [柏崎市教委1991に加筆して転載]



第2図 十三本塚の塚群分布図

同時に、直線配列する塚群とは別に三叉路に伴う単独塚も把握された。これら塚群の総称を「十三本塚の塚群」とし、直線配列の群集塚を「十三本塚」、単独塚については「十三本塚の塚」という名称を与え、本台地における塚群の把握がなされたのである（第2図）。

## 2) 本発掘調査に至るまで

十三本塚北遺跡の発見 平成2年に実施した確認調査は、26,000㎡余りという広大な面積を対象としたが、種々の制約から、細い尾根を経て連続する北側の小丘は対象外とせざるを得ず、十三本塚遺跡が立地する南側の主要台地に限定して実施された。本書で報告する十三本塚北遺跡とは、この北側の小丘で発見された。本遺跡の地籍は、十三本塚遺跡と同じ「十三本塚」であったことから、十三本塚遺跡の北側に所在する遺跡として「北」を付し、「十三本塚北遺跡」とした。

本遺跡発見の発端は、平成4年5月に実施した試掘調査においてである。当該調査は、特別養護老人ホーム建設用の用地造成計画に伴うもので、造成用地3,880㎡に対し、おおよそ3,500㎡を調査対象として実施された。発掘は、長短12本のトレンチを重機により任意に設定したもので、延べ383.5㎡程が調査され、大小のピット・土坑が希薄ながら検出された。また、出土した遺物は少なく、わずかに後期前葉と判る縄文土器小片が含まれていたが、遺跡全体の時期判定を行うには難しい結果であった〔柏崎市教委1993〕。

ただし、この時の試掘調査は、調査担当が急な入院により不在のまま実施せざるを得なかったという経緯があり、担当者不在のまま調査を強行したことによる遺構の確認漏れや認識のずれなどは、本発掘調査段階で明らかとなる。しかし、この時点での試掘調査段階の認識は、本遺跡のイメージとして深く刻まれてしまう事になったのである。

その後、当該造成事業計画は、遺跡の発見に伴う本発掘調査実施の問題その他諸般の事情等が重なり、建設地も変更されるなど本遺跡は試掘調査実施後の状況のまま、しばらく開発がなされない時期が続いた。

確認調査の実施 しかし、平成7年に至って新たな開発計画として、老人保健施設の増築に伴う敷地造成事業が計画された。事業用地の面積は約3,700㎡であるが、以前に試掘調査を実施した区域と一部重複しつつも、その南側が予定されていた。このため、平成7年4月において、台地上の平坦地およそ2,245㎡を対象に、確認調査を実施することとした。当時の認識としては、調査対象区域が台地の南端に位置すること、および平坦面の広い北半での遺構密度が希薄であると考えていたことから、遺跡内にあってもその縁辺に該当する可能性が高いと予想しての調査となった。発掘は長短あわせて3本のトレンチを設定して実施されたが、意外に遺構密度が高く、大型の柱穴も複数発見されるに及んだ〔柏崎市教委1996〕。これらの調査結果から、遺跡本体が南側に偏っている可能性と、かつて実施した試掘調査結果の認識に誤差があった可能性が生じることとなった訳であるが、北半での認識はすでに先入観として支配的であった。

本発掘調査の準備 確認調査結果を受け、遺跡の取り扱い協議が事業主体である医療法人公仁会と市教委の間で行われた。当初、確認調査対象区域に限定した本発掘調査の実施を予定していたが、当該地の北側も含めたおよそ5,000㎡にわたる全面調査が要望された。北半部の取扱いは、遺構分布が希薄との先入観もあり、ここに全面調査を実施することとして準備が進められることとなった。

調査経費は、平成7年度の6月補正予算に計上、8月から本発掘調査に着手するとして文化財保護法等の諸手続き等に入った。そして、平成7年8月後半までには、本発掘調査の準備が整えられた。

註) ただし、後述する確認調査結果では、最も良好な産廃場は南側斜面にあり、誤記の可能性を否定できないが、出土した縄文土器に様相差が認められるため、ひたすら判断できない。

## 2 発掘調査業務の概要と調査体制

### 1) 本発掘調査業務

本発掘調査は、当初2カ月間程の予定で、平成7年8月28日着手から開始された。調査対象面積は、遺跡のほぼ全域におよぶ約5,000㎡である。表土除去作業は、平成7年度当初に確認調査を実施した西側から着手し、順次東側へ拡張していくこととして進められた。平成4年実施の試掘調査結果からすれば、調査対象区域の大半を占める東側は、遺構密度が希薄であるとの認識がなされており、むしろ確認調査を実施した西端付近の狭い範囲が遺構密度が高いものと考えられていた。しかし、調査着手から4日目、表土除去作業が調査区のおよそ半分までおよんだ9月1日に至ると、大型建物跡が検出され、密集度の高い柱穴群の分布が、さらに東側へと連続していることが明かとなるなど、遺跡の実態は大規模集落の様相を見せ始めた。そして、調査開始9日目となる9月8日において表土除去作業が終了したが、この段階で遺構密度に若干の疎密はあっても、密集度の高い遺構群が調査区の全面にわたって分布することが明らかとなった。

このようにして、本発掘調査が着手されてから十日足らずの間に明らかにされた事実は、これまでに得られていた試掘や確認調査による認識を大きく覆すものとなった。そして、遺構数から見たボリュームや、大型建物跡の存在に象徴される縄文集落としての重要性などは、本遺跡のイメージを大きく転換せざるを得ないものとなった。このような状況の変化は、調査期間や経費といった当初の調査計画に対し、多大な影響を与えないはずはなかった。

まず、調査職員は土曜日や祝日も可能な限り調査を実施し、少しでも効率を上げることとした。しかし、9月12日に至って、遺構総数の見積りがおよそ2,000個と算定されるにおよび、調査関係職員の総動員と調査職員による日没までの調査時間の延長といった対応も行うこととしたが、このような対応は自ずと限界があり、抜本的な見直しを迫られたのである。

平成7年10月20日に至って、発掘調査事業計画の変更協議を事業主体者側と実施することとなった。協議では、調査で検出された遺構数量のボリュームと遺跡の重要性、そして今後の仕事量等から事業計画の見直しに至った事由を説明し、発掘調査現場作業終了予定期日の変更と、当初見積りをはるかに上回る遺構数と遺物量から、整理業務と調査報告書刊行の単年度処理が不可能となったことによる発掘調査業務完了期日の延長が話し合われた。その結果、発掘調査現場作業終了予定期日については、敷地造成工事の新年度実施に支障がないことなどを条件としつつ、さまざまな配慮が得られ、当初予定の平成7年11月15日を、同年12月15日までの1カ月間延長とし、業務完了についても、現場作業終了段階に再協議することで基本的合意に至った。また、当該協議では、発掘調査現場の現地公開実施も議題に含まれていた。

発掘調査の進捗状況としては、第1回目の変更協議が行われた10月半ばまでに、遺構総数およそ2,000個のうち、半数に達する約1,000個を1カ月半ほどで発掘していた。残されたおよそ1,000個の遺構は、11月末までに概ね完掘することができた。しかし、12月初旬を迎えた頃になると、天候が大きく崩れ、11月の作業員稼働日数が延べ15日間であったことにに対し、12月8日現在における12月の稼働日数はわずか1日に激減するというありさまであった。また、空中写真撮影の実施も、当初11月30日を予定していたが、11月26日以降悪天候が続き、調査が再開できたのは12月4日となってしまい、遺構内には雨水によって土砂が流入し、大半が埋没するという状況となっていた。

このような事態の悪化により、発掘調査の事業計画は再び大きく見直さざるを得なくなった。平成7年12月8日、事業主体者側との再協議が実施された。作業の進捗状況としては、約2,000個の遺構がほぼ完掘されており、残された主な作業は大量の遺物が出土している廃棄場（土器捨て場）の発掘作業、空中写真撮影、平面図作成等の測量であった。測量作業は、現場が降雨によってぬかるんでおり、測量をするだけで現場を荒らしてしまうことなどから、空中写真撮影前では無理ができず、ほとんど実施できない状況にあった。撮影後に実施したとしても、廃棄場の発掘作業と並行することとなり、今後は最低でも1カ月余りの期間が必要と見込まざるを得なかった。さらに、間近に予想される降雪と根雪のことを考慮すれば、年内における発掘作業終了は困難であった。このため、協議では調査継続と延長が主要議題となり、空中写真撮影を12月12日実施予定とし、その後は作業員を半数の10人程度に縮小、降雪・根雪となった以後は作業を中断し、雪消えから造成工事着工に至る間において補足調査を実施することが了解された。ただ、最初の契約変更を行った11月9日にも、現地説明会の実施にあたっての協力依頼を行っていたが、年内における現場作業終了の見込みがなくなったこと、そして悪天候という事態に断念するに至っていた。

空中写真撮影は、実施予定日を12月12日（火曜日）としていた。現場は、連日の悪天候で遺構内に土砂や雨水が溜まっており、空撮にあたってはこれらの除去と清掃が不可欠である。天気予報を検討しつつ、晴れとされた12月10日（日曜日）に、応援の作業員を5名増員のうえ動員し準備に入った。翌12月11日（月曜日）は時々小雨が降る生憎の天気で、空は厚い雨雲に覆われていた。しかし、空撮実施予定日とし

年度	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
4			■ 試掘調査										
5													
6													
7		■ 試掘調査								■ 本発掘調査			■ 補足調査
8			■ 補足調査							水洗・注記			接合復元
9													水洗・注記
10													接合復元 土器拓本
11										遺構図面 遺物実測	トレース		遺構図面トレース 遺物実測
12										遺構図面トレース			遺物実測 遺物図版作成 遺物写真撮影
													本文執筆 報告書校正 印刷・発行

■ 本発掘調査    ■ 試掘確認調査    — 水洗・注記    ..... 接合復元作業  
 ..... 拓本作業    — 実測・トレース    ..... 図版作成・原稿執筆（報告書作成作業）

第3図 十三木塚北遺跡発掘調査業務工程図

た翌12日の天気予報は、西高東低の冬の気圧配置が強まるとされるもので、最悪の天候となることが明白であった。12月11日朝8時30分、空撮日を一日繰り上げ、本日強行することを決断、当日の変更という無理を承知の上、この決定を委託会社へ連絡した。空撮を依頼した会社は新潟市にあり、天候は土砂降り、しかし空撮を行う飛行機は調布にあって、天候は晴れ、急な連絡を受けたセスナは、予定を変更して北へ向けて飛び立つことになる。しかし、新潟方面の上空は、厚い雨雲が全域を覆っており、操縦士が飛行困難と判断した場合は、途中で引き返し、空撮を断念することを条件としてのフライトであった。

雨雲を眼下に飛行を続けるセスナは、十日町付近に生じた雲の切れ間から降下、そのまま低空にて十三本塚北遺跡を目指した。午前11時過ぎ、遠くに飛行機のエンジン音が聞こえ、上空を旋回するセスナを監視する。撮影は11時10分開始、不安が高まる小雨の中、およそ30分が過ぎた11時40分、セスナは見守る調査員に翼を振って無事終了を合図、そのまま南南西の空に飛び去った。

空撮を無事終了した12月11日午後、調査の早期終了を目指して作業を再開し、廃棄場の発掘、および調査区南東部に検出された大型建物跡の図化作業等を行った。その後、天候の回復を見ながら発掘作業等を行い、平面図の作成を進めた。しかし、廃棄場の発掘作業は、堆積層が予想以上に深く、かつ遺物出土量が多いことから難航を極め、最下層の検出は12月20日に至ってもなお下面の検出ができないままであった。発掘作業が可能なのは、根雪の直前まで、それまではと悪天候が続く中、12月24日（日曜日）までは祝日も返上して連日強行した。その結果、今冬最大の寒波来襲となった24日、ついに工事掘削面までの発掘作業を終えることができた。しかし、それに続く廃棄場の土層断面図の作成や、居住域の平面図作成およびレベリング等は、明年の雪消え後に残された。12月25日朝、昨夜からの降雪により、遺構だらけの遺跡は一銀世界となって、雪に埋もれていた。

ようやく春の訪れを感じさせ始めた平成8年3月13日、平成7年度の調査経費の精算協議と合わせ、平成8年度の事業計画及び造成工事着工に至るまでの間に実施する補足調査の打ち合わせを行った。補足調査の実施は、3月20日以降可能とされ、工事は5月中の着工が見込まれるため、4月末までの実施が了承された。また、調査費が報告書刊行に伴う若干の経費を残し、ほぼ底を突いていた事情から、休憩場所やトイレ等については、さつき荘の施設を一部利用させてもらう配慮がなされた。

平成8年3月21日、越冬後の補足調査が開始された。残された主な作業は、廃棄場土層断面の記録と補足的な発掘、また平面図作成に関わる測量等、そして南東部に検出されている大型建物跡の精査などである。これらの調査は、おおむね4月下旬までに収束に向かうことができた。

そして、調査開始以来、遺跡の重要性が高まるとともに懸案となっていたのが発掘調査現場の現地公開である。昨年は、調査そのものが終了せず、天候不順も重なって断念していたことであった。しかし、補足調査の予定期日を間近に控えてしまったこと、その他諸般の事情もあって、大々的に実施することは極めて困難な状況にあった。このため急ぎょ、報道関係者への現地公開を実施し、一般公開に代替することとし、これを4月26日に実施し、調査の終了とした。

平成7年8月28日から着手された十三本塚北遺跡の発掘調査は、平成8年1月から3月半ば過ぎまでの中断を経て、延べ9カ月間で調査を終えることができた。発掘調査延日数は98日間となった。この日数には、豪雨による中断や待機、土日等における調査職員のみによる作業と言った日々が含まれている。発掘作業に携わった延べ人数は、柏崎市シルバー人材センターから派遣された会員が延べ931人、調査担当以下の職員および調査員等が延べ780人ほどとなり、合わせて1,720人余となった。このほかに、担当課である社会教育課などからも若干の職員が動員されている。

## 2) 整理・報告書作成業務

十三本塚北遺跡における整理業務については、平成7年末にいったん現場作業が中断した後、出土遺物の一部水洗や注記といった作業に着手している。平成8年度も、縄文土器を主体とした遺物の水洗と注記作業を継続し、当該作業を概ね終了させることができたが、当該年度は1カ月半ほど続いた十三本塚北遺跡の補足調査を含め、本発掘調査は6遺跡におよび、この中に大規模調査が1件含まれている。試掘や確認調査も6件と現場作業が集中しており、現場作業優先とされたため、他の整理業務はほとんどできない状況であった。

平成9年度は、本発掘調査2件と試掘確認調査4件の実施であり、現場作業そのものは半減した。しかし、大規模開発に伴う5遺跡の調査報告書を刊行する作業が集中し、当該作業の遅れが次年度へ繰り越される事態となったため、結局十三本塚北遺跡の整理業務は手付かずとなった。

平成10年度は、前年度から継続した報告書作成業務のほか、大規模開発1件を含む本発掘調査4件と、試掘・確認調査7件が集中し、しかも長期間にわたって断続的に実施した試掘調査1件が含まれるなど、調査業務の急増が際立った。このため、出土品の整理業務もあまりはかどらず、縄文土器の接合と復元を主に実施したほかは、拓本を3,500点ほどをとるのがようやくであった。ただし、年末に至って遺構図面の図化トレースや土器実測支援の外部委託が可能となり、整理業務もようやく本格化の運びとなった。

平成11年度は、規模の大きな発掘調査2件が5月から12月末まで続いたことから、整理作業は年明けからようやく集中的に実施することが出来た。作業的には、遺物実測図の見直しと、図化トレース作業に集中した。平成12年度上半期は図版作成と遺構・遺物の観察表作成、下半期は報告書本文の執筆等を行い、本発掘調査着手からおよそ6年にわたる十三本塚北遺跡発掘調査業務の完了に漕ぎ着けることが出来た。

この間、長期に及んだが、事業主体である公仁会からは、さまざまな配慮を頂き、そのご理解の賜物として、本報告書という成果を掲げることが出来た。最大限の感謝を申し上げる次第である。

## 3) 調査体制

平成7年度当初における試掘調査、8月からの本発掘調査を経て、平成7年度末から8年度当初にかけての補足調査の実施というように、現場作業優先で事業を進めてきたが、他事業との兼ね合いもあり、整理業務と報告書作成業務は長期にわたることとなった。以下、各年度を、ある程度の時期に区分しつつ、調査体制等を記したい。

### 平成7年度～平成8年度発掘調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会（教育長 渡辺恒弘：平成7年10月29日まで）

（教育長 相澤陽一：平成7年10月30日から）

総 括 西川辰二（社会教育課長）

監 理 坂口達也（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱）

庶 務 宮山 均（社会教育課社会教育係主査）

調査担当 品田高志（社会教育課文化振興係主査・学芸員）

調 査 員 中野 純（社会教育課文化振興係学芸員）

斎藤幸恵（社会教育課文化振興係学芸員）

伊藤啓雄（社会教育課文化振興係学芸員）（平成8年4月1日から）

	渡辺富夫 (社会教育課文化振興係嘱託)
	帆刈敏子 (社会教育課文化振興係嘱託)
	村山英子 (社会教育課文化振興係嘱託) (平成8年3月31日まで)
	徳間香代子 (社会教育課文化振興係嘱託) (平成8年4月1日から)
調査員補	黒崎和子 (社会教育課文化振興係遺跡調査室)
	堀 幸子 (社会教育課文化振興係遺跡調査室)
	清水あゆ美 (富山大学学生：当時)
発掘業務	相崎与吉・伊原一三・植木政栄・大園朝谷・大橋 勇・大橋太郎・大矢 昇・木村勝治 小林辰雄・柴野篤一・須田哲夫・高橋孝信・西巻徳一・野村 直・布施達栄・山崎忠吉 渡辺寛之丞 (社団法人柏崎市シルバー人材センター会員)
整理業務	竹井 一・萩野しげ子・赤沢フミ・高塩加代子・吉浦啓子・片山和子・樋口昭子 (社会教育課文化振興係遺跡調査室)

#### 平成9年度～平成12年度整理・報告業務体制

調査主体	柏崎市教育委員会 (教育長 相澤陽一)
総 括	小林清禧 (文化振興課長)
監理庶務	飯塚純一 (文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長事務取扱) (平成11年3月31日まで) 猪爪一郎 (文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長事務取扱) (平成11年4月1日から)
調査担当	品田高志 (文化振興課埋蔵文化財係主査・学芸員) (文化振興課副参事兼埋蔵文化財係主査・学芸員) (平成10年4月1日から)
調査員	中野 純 (文化振興課埋蔵文化財係学芸員) 伊藤啓雄 (文化振興課埋蔵文化財係学芸員) 平吹 靖 (文化振興課埋蔵文化財係学芸員) 横田忠義 (文化振興課埋蔵文化財係工務員) 渡辺富夫 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託) 帆刈敏子 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託) 徳間香代子 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託) (平成12年3月31日まで) 村山幸子 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託) (平成12年1月31日まで) 高橋恵美 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託) (平成12年2月1日から) 吉田正樹 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託) (平成12年4月1日から)
整理業務	黒崎和子・竹井 一・萩野しげ子・大野博子・吉浦啓子・片山和子・高塩加代子 月橋香奈子・小林 薫 (文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)

## II 遺跡群をとりまく環境

### 1 地理的な環境

**柏崎平野概観** 柏崎市は、新潟県のはば中央部に位置する人口9万人ほどの小都市であり、行政的な地域区分では中越に属している。この中越地方とは、魚沼郡域の南部と信濃川中流域から柏崎平野を含む北部に大別できるが、柏崎平野は北部でも西半部に位置することになる。

新潟県に分布する平野は、信濃川水系や阿賀野川水系などの大河によって形成された広大な新潟平野（越後平野もしくは蒲原平野）と、関川水系に属する高田平野（頸城平野）といった大きな平野が形成されている。柏崎平野は、これら二つの大平野とは山地や丘陵による分水嶺によって隔されており、一つの独立平野となっている。

柏崎平野は、鯖石川と鶴川を主要河川として形成された臨海沖積平野である。この平野を取り巻く丘陵・山塊とは、東頸城丘陵の一部に相当し、北流する鶴川と鯖石川によって東部・中央部・西部に三分して考えることができ、それぞれ米山・黒巖山・八石山の刈羽三山を個々の頂点とする。東部は、南西-北東方向の背斜軸に沿って椎谷丘陵・曾地丘陵・八石丘陵といった3丘陵が北側から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川や長島川を主とする鯖石川の支流が南西方向に流路をとっている。中央部の丘陵地形は、黒巖山を頂点に北へ緩やかに高度をさげ、沖積地に接する一帯には広い中位段丘が形成されている。この中位段丘地帯には数多くの縄文遺跡が分布するが、十三本塚遺跡群もその一つである。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊が海岸部まで張り出して断崖を形成し、低位・中位・高位の各段丘の形成が顕著である。米山は、火山ではないが、今もわずかながら隆起していると言われており、東部・中部とは異なった地形的な景観を持っている。沖積平野部の北西面は、日本海の荒波にさらされ、海岸線に沿って現柏崎市街地が広がる柏崎砂丘や荒浜砂丘が横たわっている。この砂丘から丘陵部に至る沖積地は、砂丘後背地としてかなり湿地性が強い低地となり、鯖石川や鶴川などによる自然堤防の形成が顕著である。

**平野南部丘陵と遺跡群の立地** 鯖石川と鶴川にはさまれた中間地帯は、平野の南縁に沿って広く中位段丘が形成されている。現在のところ、呼び習わされたような的確な名称を持っていないが、柏崎平野の南部に相当することから、便宜的に「（柏崎平野）南部丘陵」と呼称している。これらの台地の標高は、おおむね20～30mを計り、周囲の水田面との比高差は、10～15mほどと低平である。南部丘陵の特徴としては、大小の沢によって著しく浸食を受け、台地が樹枝状をなし、平坦地の幅が極めて狭いことにある。これらの中で最大の沢を形成した河川が、鶴川の支流となる軽井川である。南部丘陵は、この軽井川によって形成された沢状の沖積地により南北に区分することができる。

南部丘陵の北半部は、軽井川上流右岸城の東部と中流右岸城の北部に分かれるが、十三本塚遺跡群とは両者が接する東部の西端部に形成された台地上に立地する。本遺跡群が立地する台地のほとんどは、その小字が「十三本塚」であり、本台地を便宜的に十三本塚台地と仮称している。位置的には鶴川支流の軽井川上流域に接するが、北東側500mには鯖石川本流が形成した沖積地が広がっており、鯖石川水系との関わりを持ちながら営まれた遺跡群であったと考えられる。

## 2 柏崎平野南部の縄文時代遺跡

中位段丘地帯である南部丘陵に分布する縄文遺跡は、本遺跡を含めて24カ所が現在までに把握されている。遺跡分布の傾向としては、鶴川下流左岸の河岸段丘域と南部丘陵西縁域に密集域を見出すことができ、鮎石川本流に近い東部では、十三木塚遺跡群と田塚山周辺に分布する数カ所の遺跡が知られるのみである。

**鶴川下流左岸域** 当該区域における縄文遺跡は、前期前半から始まり晩期中葉までの8遺跡が知られる。前期前半および後半期については、剣野A遺跡<sup>(2)</sup>でわずかながら出土した遺物からうかがうことができる。ただし、剣野A遺跡そのもの実態が、過去の土取りによってほぼ壊滅していることから計りかね、規模などは一切不明とせざるを得ない。当該区域で中核集落が出現するのは、中期前葉期であり、その始まりは遺跡数が増える中期初頭段階にある。中期初頭の遺跡は、剣野B遺跡<sup>(1)</sup>で出土した遺物が土器編年に活用され著名であるが、剣野B遺跡<sup>(4)</sup>でも小規模な集落の形成に至っており、続く前葉期では広場を持つ環状集落に発展していることが確認されている。中期中葉から後半の状況は明らかにし得ない。しかし、剣野A遺跡の南東縁部から中葉期の土器が出土しており、広大な剣野A遺跡範囲の一面に当該期の集落が形成されていたことを否定できない。中核的集落が再び出現するのは後期前葉期であり、剣野D遺跡<sup>(5)</sup>が該当する。しかし、後期中葉以後の遺跡は未確認であり、晩期中葉後半の剣野C遺跡<sup>(6)</sup>、晩期後半の剣野沢遺跡<sup>(3)</sup>を最後に、縄文集落は確認されなくなる。なお、当該区域の南端に位置する桐山<sup>(7)</sup>・宮山<sup>(8)</sup>両遺跡は、ともに中期前葉期の小規模集落と考えられる遺跡である。

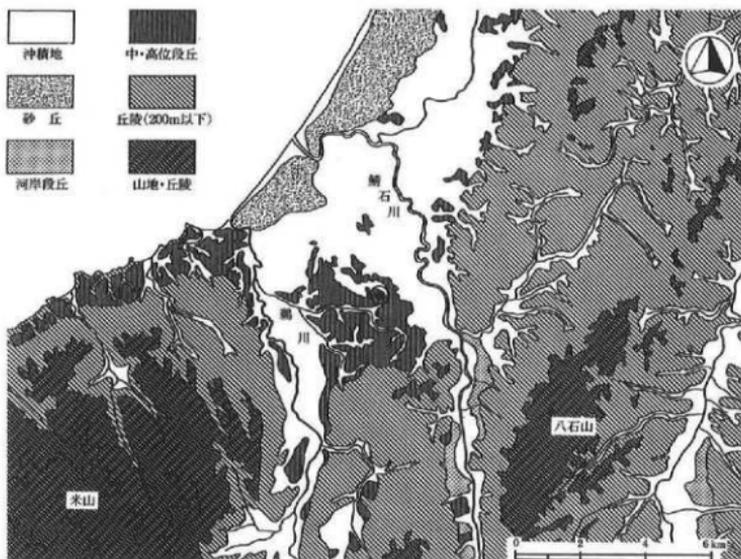
**鶴川中流域右岸の南部丘陵西縁域** 当該区域では、草創期から晩期前葉までの遺跡12カ所が知られている。これらのうち南部に所在する原<sup>(9)</sup>、辻の内<sup>(2)</sup>、大原<sup>(3)</sup>、千古塚<sup>(4)</sup>の4遺跡については、縄文集落に対する発掘調査が実施されておらず実態は明らかでない。

草創期～早期の遺跡としては、神子柴型の丸壜形石斧が出土した大原遺跡のほかは、土坑形陥し穴が検出された呑作A遺跡<sup>(9)</sup>、呑作G遺跡<sup>(20)</sup>、京ヶ峰遺跡<sup>(17)</sup>、千古塚遺跡が早期から前期頃の可能性を持つ遺跡となるが、同時期の集落跡については確認されていない。大宮遺跡<sup>(11)</sup>では、前期後半期に環状集落が形成されており、中核的な集落であったとすることができるが、他に同時期の遺跡は確認されていない。続く前期末～中期初頭期の遺跡としては、小規模集落の典型例とした尻振坂遺跡<sup>(14)</sup>を掲げることができるが、近在には本拠地となるような中核的集落は確認されていない。

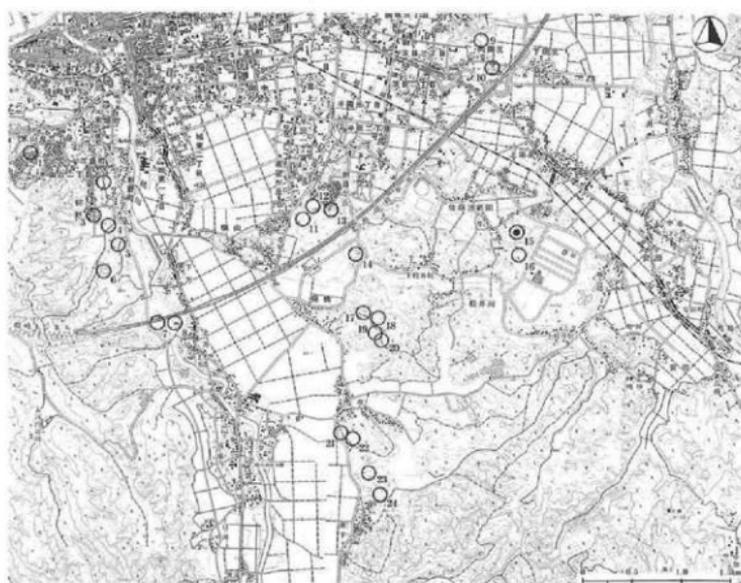
藤橋東遺跡群に属する呑作A遺跡と隣接して営まれていた京ヶ峰遺跡は中期初頭の集落であり、ともに

No.	遺跡の名称	時代・時期	No.	遺跡の名称	時代・時期	No.	遺跡の名称	時代・時期
1	剣野B遺跡	中期初頭～前葉	9	田塚山遺跡群	前期後～後期前葉	17	京ヶ峰遺跡	中期前葉
2	剣野A遺跡	前期前半～中期前葉～中葉	10	小見石遺跡	前期後葉	18	呑作D遺跡	後期中葉
3	剣野沢遺跡	晩期後半	11	大宮遺跡	前期後半	19	呑作A遺跡	中期初頭
4	剣野B遺跡	中期初頭～前葉	12	大沢遺跡	中期前葉	20	呑作G遺跡	早期後半～前期頃
5	剣野D遺跡	後期前葉	13	雨池遺跡	中期前葉	21	原遺跡	中期前葉～中葉
6	剣野C遺跡	後期中葉	14	尻振坂遺跡	前期末～中期初頭	22	辻の内遺跡	前期後葉～中期中葉～後期前葉
7	桐山遺跡	中期前葉	15	十三木塚遺跡	後期前葉	23	大原遺跡	草創期
8	宮山遺跡	中期前葉	16	十三仏塚遺跡	中期前葉～中葉	24	千古塚遺跡	中期前葉～後期中葉～晩期初頭

第1表 十三木塚北遺跡周辺の縄文時代遺跡地名表



第4図 柏崎平野地形分類図と十三本塚北遺跡の位置



第5図 十三本塚北遺跡と周辺の縄文時代遺跡

広場を意識した集落形成がなされる。横山東遺跡群でも、互いに隣接した位置に、中期前葉に営まれた雨池遺跡⑬と大沢遺跡⑭が確認されている。雨池遺跡は広場を持たないが、焼土を充満した地床炉を備えた大型住居1棟が存在する。大沢遺跡は、雨池遺跡より若干新しいと考えられる集落で、環状に住居群が配されていた。しかし、両者とも中期前葉期のうちに廃絶しており、藤橋東遺跡群の2遺跡例と同様、短命に終わる特徴がある。

以後、中期中葉は原遺跡・辻の内遺跡で、後期前葉は辻の内遺跡でも土器片が採集されているが、集落としての実態は不明となる。後期中葉も同様であるが、呑作D遺跡⑯で堅穴住居1棟が調査されている以外、千古塚遺跡で土器片が採集されている程度となる。晩期についても、千古塚遺跡で土器片が採集されているが、中期中葉以降、南部丘陵における縄文集落の実態は不明瞭であることに変わりない。

田塚山周辺域 縄文遺跡が確認されているのは、現在までのところ当該域最大の丘である田塚山とその南の小丘小見石である。田塚山の大半はすでに開発されて、ほとんど旧状を留めていないが、田塚山遺跡群⑨として5地点が調査されている。縄文遺跡は、B・C・D・Eの4地点で確認された。B地点は後期初頭の土坑1基のみで、集落とは言い難いが、特殊な異形の縄文土器が墓坑と考えられる土坑内から出土している。C地点とD地点からは、希薄ながら柱穴群が確認されている。両者は中期前葉期に属するが、C地点のほうが相対的に古い。E地点からは、前期後半期に属する柱穴群が比較的多く検出されている。これら3地点は、すべて尻振坂類型に分類される小規模集落である。小見石遺跡⑩については、前期末葉の遺物が若干出土しているが、検出された遺構は土坑形陥し穴であり、住居関連遺構等深度の浅い遺構群については、中世墓地造営等の影響のためか確認できていない。当該域では前期後半から中期前葉まで小規模な縄文集落の営みを確認できる。しかし、湿地性の強い沖積地に浮かぶ島状の小台地という環境のためか全て小規模集落だけで、広場を持つような中核的な集落の形成には至らなかったことが理解される。

南部丘陵東部域 十三本塚遺跡群が所在する当該域では、大規模な工場団地が造成され、縄文遺跡の有無を判断できない広大な区域があるためか、縄文集落は2カ所のみとなっている。十三本塚遺跡群については、後述するため詳しくは述べないが、中期前葉～中葉の十三本塚遺跡⑱と後期前葉の十三本塚北遺跡⑲は、ともに本地域を代表する中核集落であり、大規模集落とすることができる。しかし、周囲に小規模集落が1件も確認されていないことは不自然ではないかと思われることから、本区域における縄文集落の動向等は今後の展開に負わざるを得ないようである。

集落動向概観 鶴川下流左岸域と鶴川中流右岸の南部丘陵西緑域の遺跡について、中核的な縄文集落から動向をうかがってみたい。まず最初に出現した中核的な縄文集落とは鶴川右岸の大宮遺跡であり、前期後半段階のこととなる。前期末の状況は不明であるが、中期初頭期では、右岸域に所在する呑作A・京ヶ峰の両遺跡で広場を意識した集落形成への試みがうかがわれる。しかしながら、この試みも短命に終わることとなるが、同様な営みは京ヶ峰・大沢の各集落で中期前葉期まで、鶴川右岸域において地点を北上させながら試みられている。鶴川右岸域で短命な中核的な集落形成の試みが行われていると同じ中期前葉期に、剣野B遺跡において大規模な環状集落を形成しており、集落の拠点は鶴川左岸域に移動した可能性が高い。この傾向は、中期中葉を若干不明とするが、後期前葉でも維持された可能性が高い。

このような中核集落の移転という背景には、自然環境の変動が考えられる。当該域では鶴川の流路が中期初頭から前葉期にかけて、東側から現在の河道に近い西側へと移動した可能性が高いことを指摘しておきたい。このような環境の変化とは、十三本塚遺跡群における中期前葉～中葉期と後期前葉期における断続的な中核集落の形成をみると、鱸石川の流路と大きな関係があった可能性を示唆するものと評価したい。

### 3 十三本塚遺跡群概観

十三本塚台地に展開する遺跡群は、縄文遺跡2件と塚群2件が周知の遺跡として確認されている。塚群については、民俗学で「十三塚」と総称される十三本塚が中世後期頃、十三本塚の塚とした単独塚が、中世末から近世初期の時期が類推されるが、ともに確証欠く。十三本塚北遺跡での調査結果では、中世・近世に相当する遺構も存在するが、塚群とは直接的には無関係であるため、本節では割愛し、縄文時代について概観しておきたい。

縄文時代 縄文遺跡は、中期前葉から中葉期の十三仏塚遺跡と中期末から後期前葉の十三本塚北遺跡であり、このほかに未確定ながら北台地の東側で南台地との境界をなす仮称A沢内（小字「尼ヶ谷」）からも後期初頭の土器が出土している。これらのことから、本台地においては、中期後半期の空白期を挟みながら中期前葉から中葉と中期末から後期前葉という二つの時期に大きなピークがあったことが確かめられる。西台地については、すでに土取りによって全壊し、損なわれていたため、遺跡の存否すら確認できない。

周囲の地形を見ると、北東側には佐藤池のある大きな沢が存在し、南側には軽井川の狭い流域沖積地が延びている。しかし、両者とも水量豊かな河川を想定するには少し無理があり、中核集落が形成されたという観点からすれば、柏崎平野最大の河川である鱒石川との関連を想定せざるを得ない。現在の鱒石川は、本遺跡の東1500mを北北東に流路をとっており、距離的にはやや離れている感もあるが、許容の範囲と見ることも可能な距離といえる。ただ、鱒石川は、狭い鱒石谷から広い沖積平野に抜け出た安田付近で東西に流路が振られており、現流路は概して東寄りとなっている。西寄りの丘陵沿いを見ると、丘陵に沿って水田が帯状に連なり、それに接して鳥越一中道一三ツ家一上田尻の集落域がやはり列状に連なっていることが看取される。これらの集落域の形状は、現在の鱒石川右岸に形成されている平井から中田や剣、あるいは下流左岸域の上藤井から下藤井に至る集落域の連続する姿が、すべて鱒石川の自然堤防に沿っており、これらと対比すれば、古い鱒石川自然堤防上に立地していた可能性が高いことを指摘できる。つまり、丘陵下に連続する帯状の水田が、かつての鱒石川の河道とすれば、北東500mに鱒石川の流路が存在したことになり、川の幸は意外に近くで採取できたことになる。十三本塚遺跡群では、中期後半期の空白期を挟み二つの時期にピークがある。現段階での証明はできないが、十三本塚台地に縄文集落が栄えた二つのピーク期とは、鱒石川が最も西寄りに流路を変え、安定していた時期と重なる可能性が指摘できるのではないだろうか。

翻って、台地上を連続する尾根筋に視点を移すと、本台地が位置する地点は南側の丘陵本体に連なる基部に相当する。そして、小規模な沢を挟んで、今は工業団地と化した一塊の丘陵が横たわっている。この広大な団地内における遺跡の存否は、調査がまったくなされていないことから一切不明である。しかし、当該地帯は鱒石川が流路を西寄りに変えた場合、かなり近接した位置関係になることから、中核的縄文集落の存在は否定できない。しかし、その旧地形を見ると、平坦部がある程度確保された台地は北側に少ないことから、大規模集落の立地としてはあまり良好とは言えないかも知れない。それよりも、大規模集落を支える生業の場、つまり陥し穴猟といった狩猟や植物食の採集等の場を想定したほうがより良いように思われる。すでに確認することがほとんど不可能となってしまっているが、十三本塚台地における二つの中核的縄文集落が形成されていたという事実は、その立地する位置が、川と山野の幸に恵まれた環境であったことを示しているのではないだろうか。

### Ⅲ 遺跡と遺構

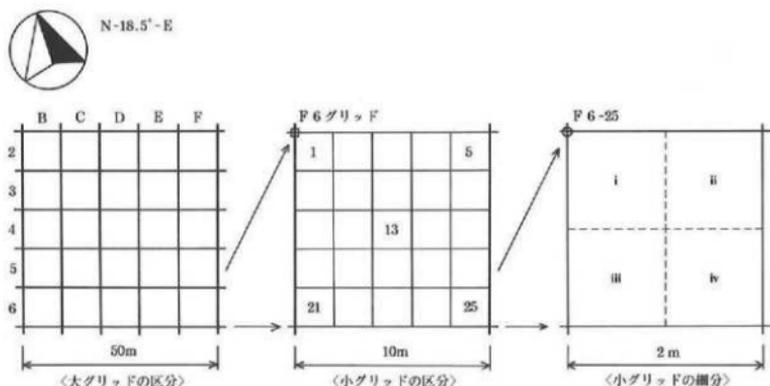
#### 1 調査の方法と調査区

##### 1) 調査区とグリッドの設定

調査区の概要 柏崎平野の南部に横たわる丘陵は、中段段丘が樹枝状に刻まれ、尾根状を呈した台地として分布することが特徴である。十三本塚遺跡群は、尾根状地形を呈する台地の一つである（仮称）十三本塚台地に立地する。当該台地に立地する縄文集落は、本書で報告する十三本塚北遺跡のほかに、十三本塚遺跡がその南側に所在する。両者とも、規模が大きな中核的集落であるが、現状では大河川に直接面した位置にない。集落内居住者の食料確保等を考えれば、鯖石川の流路が大きく変遷していた可能性を考慮する必要性がありそうである。

前述したように、本遺跡は十三本塚遺跡の北側にある。この一帯は、尾根状地形を呈した台地が多く分布する台地の中でも、比較的平坦な台地が目立つところでもある。最大規模は、十三本塚遺跡が所在する南台地であり、十三本塚北遺跡が立地する北台地がそれに次ぐが、規模からすれば半分程度でしかない。また、北台地の西側には、それよりもやや規模を小さくする西台地が位置する。北台地とは南北から切り込む小さな沢によって分断されるが、ここにも未知の縄文集落が存在した可能性は充分ありえるであろう。ただし、かなり以前に2mほど削平されていた場所であり、今となっては確認することができないが、十三本塚北遺跡と同時代前後の集落が連続していた可能性も捨て切れないものと見られる。

十三本塚北遺跡発掘調査として、今回調査対象となった区域は、北台地の大半を占める一帯ということになる。発掘調査で設定したグリッドは、平成2年度に十三本塚遺跡群に対して実施した確認調査のグリッ



第6図 十三本塚北遺跡のグリッド区分

下に整合させた。位置的にはA～J-3～12グリッドの範囲ということになる。

ただし、当時のグリッドは、真北とは16.5°の偏差であったが、今回のグリッドは18.5°東側へずれており、2°の誤差が生じている。

**グリッドの設定** グリッドは、10m四方を大グリッドとし、東西にアルファベット大文字によりA・B・C……、また南北は算用数字により3・4・5……とし、各大グリッドはB6グリッドなどと表記した。小グリッドは、大グリッド内を2m四方に25分割し、1～25小グリッドを第6図のように設定した。小グリッドの表記は、C7-5グリッドなどとした。また、廃棄場など、遺物出土量が多く、層位的な発掘を実施するなど特別な場合に限り、小グリッドを1m四方に細分した。記号は、ローマ数字小文字とし、i・ii・iii・ivまでの4区分とした。したがって、廃棄場などの出土遺物は、C6-19iiiグリッドなどと表記して取り上げを行った。

なお、グリッドの南北ラインは、真北と対比した場合前述のようにN-18.5°-Eとなり、国土座標軸等との整合はとっていない。

## 2) 調査の方法と調査状況

本発掘調査における現場作業の基本的な流れは、表土剥ぎ-遺構確認-遺構発掘-記録が主な項目となる。十三本塚北遺跡の発掘調査においても、そのメニューに特別はなかったが、調査方法等の内容を含め概観したい。

**発掘作業体制** 十三本塚遺跡発掘調査に動員した人員は、調査担当以下の調査職員3名、調査員の嘱託3名、そして遺跡調査室スタッフから調査員補2名と現場事務所事務1名のあわせて9名である。発掘作業に従事する人員の総員は、あわせて19名であり、すべて柏崎市シルバー人材センターから派遣を受け、6～7人のグループにまとめた作業班を3班に編成した。

**表土剥ぎ** 台地平坦部における表土の堆積状況は、これまで実施した2度の試掘や確認調査によって、概して薄くて層序に大きな変化がなく、遺物包含層はほとんど残されておらず、出土遺物も少ないことが確認されている。確認調査等で検出された遺構についても、堅穴住居と直ちに判断できるような明確な落ち込みは存在せず、ほとんどが床面を失った柱穴群で検出されていた。このため、平坦部における表土除去は、原則として重機（バック・ホウ）によって実施することとし、除去する掘削下面も直接遺構確認面である黄色系の地山面までとした。排土は、調査面積が5000㎡ともなるとかなりの量に達することから、クローラードンプを活用して調査区外へ搬出した。

なお、表土中における遺構の有無については、存在する可能性が薄くとしても、それでも黒色土中における炉跡等の検出は考慮する必要があり、表土除去においてはこの点も充分留意したつもりである。

**遺構確認** 表土の除去作業は、南西側から着手、順次北側へ拡張し、最後東側へ抜けるように進めたが、遺構確認作業もこれを追う形で進んだ。表土除去後は、掘削面の乾燥等を考慮し直ちに遺構確認を実施し、あわせて切り株の整形や除去を行った。これらの作業時に生じる土砂の搬出については、ベルトコンベヤー等の機械力を一切使用せず、すべて人力で行うこととしていた。このため、排土については、重機による表土剥ぎルートを蛇行させるなどの工夫を凝らし、隣接した未掘区域に順次搬出し、大移動は機械力に任せ省力化を果たした。

確認される遺構は、そのほとんどが柱穴や土壇といった穴であり、前述のとおり床面全体を地山面以下まで掘り下げる所謂「堅穴住居」は一切検出されなかった。これに替わる一般住居については、柱穴が円

形状に巡るものが該当すると考えられる。しかし、円形に巡る形状のゆがみなど規則性が緩慢であり、遺構総数が2000個に達するなど、遺構の密集度が高いことなども併し、把握は難航した。これに対し、所謂「掘立柱建物跡」は、個々の柱穴の規模が概して大きく、両側の柱穴列がほぼ直線に配置されているなど、比較的規則性があるため、遺構確認段階での把握は一般住居に比して容易であった。このほか、縄文時代遺構としては土坑や廃棄場が、また近世以降では溝や焼土坑等が確認された。

これら多数の遺構群は、密集度が高く重複も多い。遺構所在地点の混乱を避け、作業の実施を円滑に進めるため、スケールを1/100とした遺構分布見取り図を作成した。遺構番号は、連番として見取り図に記入するとともに、遺構番号を記入したプラスチックのプレートを個々の遺構すべてに釘で打ち止めた。

**遺構発掘** 遺構の発掘作業は、遺構確認作業の進捗状況を見ながら、一班ずつ順次着手した。しかし、検出された遺構総数は、およそ2000個あまり、これらを調査職員以下30名足らずの人員で、しかも2カ月あまりで完掘させることは並大抵のことではない。そこで調査職員3名は、半截担当、覆土観察・完掘担当、図化作業担当にそれぞれ分担を定め、シルバー人材センターから派遣された発掘作業員3班がこれを補佐することとして発掘体制を整えることとした。

遺構の発掘作業は、表土剥ぎや遺構確認作業と同じく、南西側から北へ、そして東側へという流れで進めた。調査区の東側には大形建物跡の一群があり、また西側には廃棄場が確認されている。この2件はともにもかなりのボリュームがあることから、まず台地上全体に広がる遺構群の発掘終了を目指し、これらの作業後に集中的に調査を進めることとした。作業手順としては、調査職員1名を担当に作業班1～2班集体制で、まず遺構の半截作業を先行するかたちで掘り進め、続く第2隊は調査職員を中心に半截状況の確認、土層観察、遺構カードの記入と写真記録等の処理を行い、この後を図面班が追うこととし、最後に作業班1班が完掘作業を行うというローラー作戦を展開した。このローラー作戦により、遺構の発掘はかなりのハイペースで進めることが出来た。しかし、与えられた期間と予算の枠組みの中では致し方ない部分もあるだろうが、住居一棟分の柱穴について、覆土の状況や規模等を検討し、1棟に伴うべき柱穴を選別し、住居単位で調査を進めるといふ余裕はほとんどなかった。

**記録** 記録作業としては、各遺構個々の土層断面図・遺構の平面図・遺構全体図などの図面の作成作業のほか、個々の写真撮影があり、遺跡全体の空中写真撮影も予定した。遺構の個別図や全体図等の図化作業はすべて平板実測等の手取りで行うこととし、空中写真撮影のみ委託した。遺構個々の覆土土層断面の図化と写真撮影および完掘状況の写真撮影は作業終了の都度適宜行った。しかし、遺構個々の平面図の作成については、特殊な場合を除きすべて遺構全体図として一括して作成し、省力化を図ることとした。遺構個々の断面図および個別図のスケールは1/20、遺構全体図の作成は1/40を基本とした。

遺構全体図の作成は、遺構の発掘作業終了後に実施したが、基本的には遺構発掘作業中には実施できなかった。また、遺構発掘が終了する段階は、天候が極めて不順となり、空堀以前では現場を荒らすこととなるため、実際にはほとんど実施できなかった。このため、遺構平面図・全体図の図化作業が本格化したのは、12月11日の空堀終了直後からであった。

空中写真撮影は、密度の濃い遺構群の存在、大形建物跡の存在など遺跡の重要性が高いことから、大パネルでの展示も可能な大口径レンズ使用による写真撮影とし、セナ機によって行った。

なお、これら記録等の作業は、平成7年末までに終了させることができず、越冬後に補足調査を実施した。補足調査の主な作業内容は、調査区東側の大形建物跡と廃棄場の精査および平面図の補足、そして遺構全体図のレベリング等であった。

## 2 遺構の概要と層序

### 1) 遺構の概要と分布

十三本塚台地において、北台地の大半を調査することとなった今回の十三本塚北遺跡発掘調査は、調査面積がおよそ5000㎡におよんだ。発見された遺構は多数にのぼり、それらの構築時期は、縄文時代と中・近世に大きく二時期に分けることができる。

縄文時代の遺構としては、柱穴（記号：SKp）や貯蔵穴・墓坑といった土坑類（記号：SK）を含む穴類が大半を占め、このほかに廃棄場（記号：SX）や風倒木（記号：SX）といったものが掲げられる。また、中・近世における遺構の種類としては、焼土坑（記号：SK）や、道路に伴う側溝状の溝や根切り溝といった溝類（記号：SD）が確認されている。

発見された遺構等の総数は、およそ2119基に達し、攪乱その他を除いた有効遺構数は、1762基となった。縄文時代と考えられる遺構総数は、合計で1721基で有効遺構数全体の97.7%を占め、中核的縄文集落の存在を浮かび上げらせ、その重要性が明らかにされた。これらの内訳は、主体を占める柱穴類が1685基、土坑類は25基、炉と考えられる焼土7カ所、そして風倒木痕は4カ所であった。

中・近世については、焼土坑6基、溝類は20条であり、居住関係を示す遺構は存在せず、山野での生業や交通路に関わる遺構のみとなっている。

#### a. 縄文時代

縄文時代の遺構のうち、住居跡や建物跡に伴うであろう柱穴が大半を占めている。その他の遺構としては、前述のとおり貯蔵穴や墓坑といった土坑、そして廃物や残滓等の廃棄場、そして遺構とは少し異なるが大木の倒れた痕跡としての風倒木痕などがある。

後期縄文集落認定の課題 縄文時代後期の縄文集落を復元する試みや検討を行うに際しては、集落を構成する最重要要素である住居跡の認定に大きな課題が存する。普通一般的な縄文集落をイメージした場合、当然複数の住居の存在が必要不可欠であり、そして縄文集落を構成する住居跡とは、常識論的に言えば竪穴住居跡ということになる。

本遺跡で居住等に関わる建物等の構造物とは、住居と掘立柱建物の二つが考えられる。ところが、日常的な住居跡として普通一般的に言い習わされている所謂「竪穴住居」は一切確認されなかったのである。そして、住居の床と考えられる固くしまった土面も把握されていない。炉跡と考えられる焼土等については、遺跡全体で7基ほどしかなく、しかも焼土の絶対量が少ないもので占められており、明確に炉跡と断定するにはやや弱い面を持つものであった。このため、住居と関連づけられる遺構は、最後に柱穴を残すのみである。ところが、柱穴の配列から把握される平面プランにはゆがみがあり、柱穴の規模や深度も一定しないなど規則性が乏しく、定型的な住居を抽出することは困難である。このためか、柱穴の配列だけで住居を認定しても、なかなか支持を得られないというのが現状でもある。しかし、明確な炉跡や床面がなく、柱穴の規模や深度、そして配列等に規則性が乏しい中、一定条件で柱穴が巡らされるものを住居跡とすることができなければ、本遺跡において、縄文人の生活の本拠とも言うべき住居がなくなってしまいまい兼ねないのである。

これに対し、建物跡の柱穴は、規模が概して大形であり、両側の柱列が直線的に並ぶなど規則性がはっ

きりしているため、その把握は容易であり、本遺跡でも建物を復元できない1群を除くと、7群14棟がこれまでに確認されている。しかし、これらに使われた柱穴の数は、確認された柱穴の総数から見ればわずかで、大半は掘立柱建物ではない建造物の建設にともなって掘られたものと考えられるのである。その正体としてまず掲げられるのが、日常的な生活を営む住居である。掘立柱建物にて日常的な生活を営んでいなかったと完全に否定することはできないが、しかし、掘立柱建物に復元できない膨大な数の柱穴が存在するという事実は、日常的な一般住居は別の形で建てられていたと見ざるを得ない。

本縄文集落における日常的な一般住居とは、すべて床面を地山以下まで掘り下げない構造の住居で占められ、床面や炉跡はその後に行われた畑耕作等による攪拌で失われ、遺構確認面である地山面では炉跡の痕跡がわずかに残される程度であったと想定したい。このような遺跡では、柱穴の配列を積極的に検討して住居を復元していかない限り、意味不明の柱が乱立する正体不明の縄文遺跡になってしまうのである。

そこで、十三本塚北遺跡発掘調査の本報告にあたっては、掘立柱建物跡として復元し切れなかった柱穴について、一般的な住居の柱穴として積極的に評価し、でき得る限りの住居跡を把握することとしたい。ただし、当然のことながら、柱穴と認定した中には、木根痕や掘り過ぎた穴が含まれている可能性は充分にあり、また切り株の直下や遺構確認段階の見落としによって、柱穴の認定に至らなかったものが、それ相当に存在するものと考えられる。また、本遺跡の柱穴群の密集度は概して高く、同じ地点において重複していた複数の住居を復元する際、平面プランを正確に把握できず、一方の辺が入り代わってしまうなどの誤認等が多々生じてしまうことを否定できない。したがって、復元が試みられた本集落の住居跡とは、個々においては多くの課題を持ち断定には至っていないものとするが、遺跡総体としての状況は、かなりの割合で実態を映すものであると考えたい。

**十三本塚北縄文集落** 当該縄文集落の構成は、住居と建物跡の建造物、墓坑や貯蔵穴そのほかの土坑類、そして廃棄場が主な内容であり、このほかに風倒木が該期に属するものとして確認されている。

当該集落の調査にあたっては、確認された柱穴の大半を半截し、覆土断面の観察を行い、その多くを遺構カードに記入しつつ調査を進めた。その結果、柱穴に認定した大半の穴からは、柱痕が検出された。その構造をまとめていえば、柱痕部は黒褐色土など表土系の暗色土が固く締まって充満していたが、その周囲には比較的純粋な地山土が詰められており、掘り方の把握に苦勞するほどであった。これら柱穴の分布は、主に西側に集中し、特に廃棄場を帯状に巡るような状況を呈していた。

柱穴総数1685個から復元された住居跡は72棟、掘立柱建物跡14棟である。住居跡を復元するために使用した柱穴は、合計659個で、総数の約39.1%、1棟平均9.2個であった。また、建物跡については、98個の柱穴を使用し、総数の5.8%を占めた。これら住居跡等の復元に使用した柱穴の数は、合計757個であり、全体に占める割合は44.9%と半数に満たなかった。

住居跡の分布は、柱穴とはほぼ同じ状況を呈し、西側の廃棄場周辺で密度をもっとも濃くして存在し、東半部では6棟ほどをようやく復元できたのみであった。この事実からすれば、日常的な生活の中心的エリアは、廃棄場を巡る区域にあったことがうかがわれる。また、東側において、円形に巡る柱穴列から復元された住居について、その直径が10mを超えるものが存在する。屋根などの上屋構造が不明であるが、柱穴の規模がそれほど大きくないことなどから、これらが日常生活を行い得る一般的な住居跡として理解できるのか、判断の難しい事例が含まれている。

これに対し、掘立柱建物跡の分布は、住居跡の密集区域から縁辺にも建てられているが、東端など遺構が希薄なところにも特大規模の建物跡が確認されている。このような分布状況とは、廃棄場から比較的離

れた位置に分布する特徴を示すものであり、一般的な住居とは明らかに異なる分布傾向を見ている。また、住居群が激しく重複する区域に位置する建物跡は、ほとんどが単独で継続せず、建て替えがなされないもので占められている。これに対し、住居密集区域から外れた位置にある建物跡は、最大4回以上の建て替えが確認されており、両者は地点差だけではなく、集落内における位置付けでも明らかに差異がある。

土坑類は、合計25基を数えることができる。種別としては、土壇墓や貯蔵穴がその主体と考えられるが、形態等が整い、用途をある程度類推できる事例は少ない。分布は概して散発的であり、まとまりを見せる事例も少ない。土壇墓と考えられる土坑群は、調査区の中央付近と東端に2群に分かれて検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、数基単位で主軸の方位をほぼ同じくしながら並置されている。一部で土壌サンプリングを行ったが分析に至っていないため、墓坑である保証はいまのところない。貯蔵穴と考えられるものは1基で、廃棄場に隣接した位置から検出された。出土遺物では、食料関係は確認されていないが、土器片が比較的まとまって出土した。

このほかに、柱根が検出されず、断面形態から土坑と判断したものの、土器が埋設されていたものがわずかに存在するほかは、不定形なプランを持つものなどがある程度である。

#### b. 中・近世

当該期の遺構は縄文時代よりも新しいものを一括したものである。ただし、時期を特定できる事例は少なく、中世まで遡り得る遺構の存在は不明であり、大半は近世以降の可能性が高い。遺構としては、溝類と土坑類がある。溝類には、土地の境界を示す区画小溝と側溝状の溝がある。前者は、調査区北辺と南側に分布するが、両者は東西方向、南北方向の方位をおおむね整合させ、方眼状に配置されている。基本的には台地全体が区画された中で、一部の所有者個人等が根切り溝を兼ねて小溝による境界を明示したものと考えられる。側溝状の溝は、おおむね8ラインに沿って東西に延びる。当該ルートには、最近までの尾根路が存在したことから、路に沿って掘られた側溝という意味合いが付加されていると推量されるが、基本的には土地の境界区分が主眼であった可能性が高い。

土坑類とは、焼土坑である。今回の調査では東側の区域にややまとまった状況で6基が検出された。消費炭を生産するような簡易な炭焼き窯などの用途が考えられる。SK-1745焼土坑からは、伊万里焼の小片が出土しており、江戸中期以降の所産と考えられる。

#### 2) 層 序

本遺跡の基本層序は、台地平坦部と廃棄場に大きく区分してみる必要がある。平坦部の層序について、確認調査の段階で把握した第2トレンチの層序を中心に見ていくと、大きく4分することができる。第1層は廃棄土層で、遺跡全体をおおむね5～10cmほどで覆う。第2層は暗褐色土層で、遺物包含層に相当する。層厚は15～20cmほどのところもあるが、概して薄く10cmに満たない区域もあった。遺物の出土量は少なく、概して摩滅した小片が多く、この点は確認調査でも把握されていた。第3層は地山漸移層、第4層を地山層としたもので、橙褐色から黄褐色・明黄褐色を呈する。性質としては、大半が粘性の強い粘質土であるが、地質的には更新世第三紀の安田層であり、山砂的な部分もある。

廃棄場については、最下層部に灰色粘質土が堆積し、その上位の黒褐色土からは大量の遺物が出土している。最上層には、暗茶褐色土など明色土の堆積が見られる。なお、廃棄場における層序の詳細については、遺構の項にて述べることにする。

### 3 縄文時代の遺構

縄文時代の所産とされる遺構は、建物跡、住居跡、そしてこれらに復元できなかった柱穴群を主体とし、墓坑や貯蔵穴等の土坑類と廃棄場がある。また、人為的な掘り込みによる遺構ではないが、大木の倒れた痕跡として残された風倒木痕がある。本節では、これら縄文時代の遺構について、それぞれの種別にしたがって個別的に説明を行うこととする。

なお、集落を構成する遺構の主体となる建物跡と住居跡については、それぞれ個別的に扱うが、ともに上屋を持つ構造物であるため、前者を第Ⅰ類、後者を第Ⅱ類として大別し、第4表の建物跡・住居跡一覧に示したように分類した。

#### 1) 建物跡

具体的に復元することができた建物跡は、合計14棟である。これらの内、複数の建物跡がほぼ同一地点に建て替えがなされ、重複して確認された建物跡群とは、SB-78~81の4棟と、SB-84~87の4棟という二つの事例である。報文の記述にあたっては、便宜的な名称として、前者を建物跡X群、後者を建物跡Y群と適宜呼称することとした。

##### a. 建物跡の分類

建物跡の分類については、上屋が残されていないため、柱穴の配列とそれらが示す平面プランから分類を試みたい。確認された14棟の平面形は、六角形や長六角形状を呈するA類と、方形～長方形形状を呈するB類に大別することができる。両者が大きく異なる点は、棟持柱の有無である。この差異は上屋構造に大きく関わるのが容易に推量され、当然のことながら建築方法の差異に至るものと理解することができる。

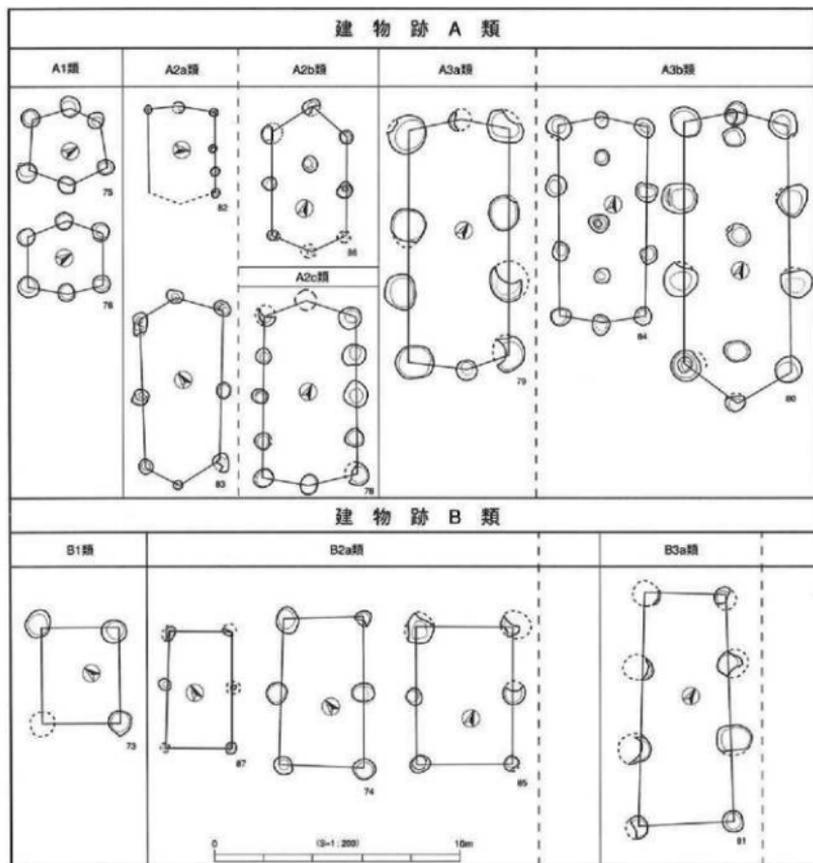
**建物跡A類** 正六角形に近い1類と、長六角形を呈し、長辺の柱間が2間の2類と3間の3類に分類することができ、両者はそれぞれプラン内部における柱穴の有無によって、柱を持たないa類と有するb類に細分することができる。a類における建物プラン内の柱とは、主柱が支えきれない荷重を補助的に補う意図が感じられる。また、その意味では主柱の間隔を狭めた事例（SB-78）も同様な意図を想定することが可能である。事例としては1例であるが、建物内の支柱とは補強の意図が異なり構造的な差異があると認められることから、これをc類とする。

**建物跡B類** B類は方形と長方形に大別することが可能である。方形についてはB1類とするが、長方形についてはA類と同じ基準にしたがい、長辺の主柱間が2間のものを2類、3間のものは3類とした。本類では、建物内に柱穴を配した事例、あるいは長辺の柱間隔を狭めるようなA類におけるc類に相当する建物跡は確認されなかった。

建物跡14棟における分類状況を見ると、A類が9棟（64.3%）、B類は5棟（35.7%）で、圧倒的にA類が多い。A類は規模の大きくなる3類に3棟が集まり、2類でも比較的規模の大きいものが多い。2棟が確認されている1類は、個々に見れば概して小規模である。しかし、当該事例は同一地点に並置されていたことから、両者が一体化して連結され、実態としては1棟で機能していた可能性は否定できない。その場合は2類でも規模が大きな部類に入ることから、A類とは概して規模が大きく、かなりの荷重に耐え得る堅固な建物であった可能性が高い。

これに対しB類については、中規模クラスの2類に3棟が集中し、1類としたSB-73建物跡は、明らかに単独であり、規模が大きくなる3類は1棟のみであった。さらに、棟持柱など主柱を補強する柱が付随した事例が皆無であったことは、各柱にかかる荷重が構造的にA類よりも少なかったり、そもそも負荷が少ない用途に用いられた可能性などが考えられる。

このように、両者は柱穴配置から見た平面プランや棟持柱の有無、あるいは堅固さなどといった面で大きく異なっており、建物としての構造は別個であった可能性が高い。しかし、建物跡X群やY群では、A類とB類の建物が混在し、これらが同じ場所に継続的に立て替えられていた事実を見ると、基本的には同じ機能あるいは用途を持ち、同じ意図で建てられていたと見ることが可能なようである。



第7図 建物跡の分類図

なお、第4表には、住居跡と建物跡の一覧表として、調査区内における位置、規模、主軸方位、柱穴番号等を提示したが、各建物跡等の柱穴の規模等は、附表1の遺構観察表を参照願いたい。

#### b. 建物跡名説

建物跡の分布状況としては、同じ場所に継続的に建てられ、群として把握された二つの事例のほか、個々に単独で存在した建物跡がある。本項では、まず群として把握されたX群とY群の建物跡群を一括的に述べ、それらの個々について説明したあと、単独で確認された建物跡を個別的に扱うこととする。

##### 建物跡X群 (SB-78~81)

本建物跡群は、調査区の東側において、柱穴群の密集域とは離れたJ7グリッドを中心とした位置に検出された。建物跡としてはSB-78~81までの4棟を復元することができた。しかし、その他にも柱穴がわずかながら残されており、調査された柱穴の重複等により、確認に至らなかった柱穴が存在した可能性があり、1棟程度の建物跡が隠れている可能性は否定できない。

X群の建物跡が集中していた地点は、尾根筋の平坦部をやや南に外れた緩斜面に相当する。この事情もあってか、縄文時代遺構が少ないエリアとなっており、他遺構との重複状況は、平坦部からの広がりを待つSI-72とした円形状に巡る柱穴列のほかは、近世の焼土坑が中心であった。

確認された4棟の新旧関係について、それぞれの柱穴の断面観察から見てみたい。本群内における柱穴の重複関係をまとめると下表のようになる。新旧の関係は、旧→新である。

79→81	81→80	80→78	78→72
1709b→1709a	1709e→1709c	1751b→1751a	1738→1737
	1711←1712(逆)		
	79→80		
	1718→1717a		
	1717b→1717a	1723→1721	79→78
	1722→1721	1731→1732	1717b→1715
	1741→1742	1749→1750	

第2表 建物跡X群における柱穴の重複関係

この表に従えば、1例だけ新旧の関係が逆転しているが、その他はおおむね整合し、矛盾しないことがわかる。逆転した結果が得られている1例については、解釈が微妙であり、他の多数の事例からすれば誤認とせざるを得ない。したがって、X群内における変遷は、古い段階からSB-79→SB-81→SB-80→SB-78へと順次立て替えられ、SI-72とした住居跡が最も新しいこととして解釈したい。

**SB-78建物跡** 建物跡X群内においては最も新しい建物となる。建物跡の分類では、唯一A2c類に分類されるもので、主柱の間隔を狭め強固な建物としている。両側の主柱は各5本、両端の棟持柱は、北側が不明ながら、両端に設けられていた可能性が高いため、合計12本で建てられていた建物跡と判断したい。棟持柱穴と主柱穴との規模の差異は特になく、最大直径1.10m、最小は0.56mで、合計11個の平均は0.79mであった。柱穴の深度については、これも主柱穴と棟持柱での区分はなく、最大0.77m、最小0.45m、平均では0.59mとなっている。

主柱の間隔は、中心の距離がおおよそ1.60mほどで一定しており、かなり正確な設計のもとに建設されたことがうかがえる。ただし、南辺中央のSKp-1740柱穴については、やや主軸から外れているが、これ

は直前まで建っていたSB-80建物跡の補助柱 (SKp-1739) を避けたためと考えられる。各柱内底面には、柱の自重によって圧迫され、還元化するとともに固く締まった柱の痕跡が良好に残されていた。それらの直径は、30cm前後のものも含まれるが、おおよそ40cm前後を計るものが多くなっている。

**SB-79建物跡** 建物跡X群内では最古に位置つけられる建物跡で、A3 a類に分類される。主柱は両側各4本、両端に棟持柱各1本を備え、合計10本の柱で建てられていた。北東側の主柱穴列は、底面の中心を通るよう的確な配置をとるが、南西側についてはSKp-1730がやや内側に、SKp-1734はやや外側に位置がずれている。また、両側における主柱の配列を見ると、各間隔にばらつきが見られ、特に南西側のずれが大きいため、中央の2本が左右非対象となっている。ただ、今回これらの事由は明らかにできない。

主柱穴と棟持柱の規模をみると、両者には差異が認められる。主柱穴の最大直径は1.62m、最小でも1.22mを計り、これらの平均直径は1.07mとなるが、棟持柱は平均0.80mと、主柱穴の3/4ほどの規模となっていた。しかし、深度については、主柱穴は最大0.90m、最小0.44mで、平均でも0.61mで、棟持柱の最大深度0.58mと大きな差がない程度となっている。したがって、本建物跡の柱穴は、直径そのものは本遺跡で最大級であるが、深度は概して浅いという特徴を示している。

柱穴底面に残された柱の痕跡は5個で確認されたが、それぞれの直径は、SKp-1709b: 0.91×0.70m、SKp-1714: 0.87×0.85m、SKp-1753: 0.83×0.79m、このほかではSKp-1717b: 0.80m、SKp-1722: 0.66mを計り、本遺跡最大であった。

なお、本建物跡のSKp-1734からは、比較的まとまって土器類が出土している。時期は十三木塚北下層期の新段階(第II c 2期)に比定できる。

**SB-80建物跡** 本遺跡最大級の規模を誇る建物跡で、A3 b類に分類される。主柱は両側各4本、両端各1本の棟持柱のほか、建物内部にも3本の支柱があり、合計13個の柱穴が検出されている。各柱穴の配置をみると、建物内部の3個についてはやや通りが悪いが、主柱穴と棟持柱が概して整っていることがわかる。この点は、建物内部の柱と棟持柱では、構造上の意味が異なることを示唆しているものと見られる。主柱と支柱・棟持柱の規模には、大きな差異がある。主柱8本の規模は、平均値での最大直径1.42m、最小1.02m、平均1.23mである。深度は、最大1.31m、最小1.00m、平均で1.13mを計る。これに対し、棟持柱・支柱の規模は最大直径0.96m、最小0.60m、平均0.86mで、深度は最大0.85m、最小0.58m、平均0.74mであった。両者の差異は、直径や深度の平均値でそれぞれ0.40mほどの差異があることがわかる。

柱穴底面で検出された柱の痕跡は、主柱の場合、SKp-1709a: 0.52×0.50m、SKp-1712: 0.67×0.59m、SKp-1717a: 0.43×0.41m、SKp-1721: 0.72×0.65m、SKp-1742: 0.70×0.62m、SKp-1750: 0.42×0.40m、SKp-1754: 0.48×0.44m、棟持柱・支柱では、SKp-1728: 0.48×0.46m、SKp-1739: 0.37×0.35m、SKp-1751: 0.45×0.43m、SKp-1952: 0.52×0.40mであった。これらの規模を一瞥すると、柱穴の規模に比して柱の痕跡が小さいように見受けられ、しかも主柱と支柱や棟持柱との差異がほとんどないものまでが認められる。このままの数字を事実とすれば、用材が整わず、柱の太さが不均一な材料のまま建物が建てられた可能性が指摘されることになる。

なお、SB-80建物跡は、SB-81建物跡の建て替えと考えられるが、SB-81のSKp-1731とSB-80のSKp-1732の重複では、後者の掘り方プランが前者の柱根部分を切っておらず、柱根が残った状態のまま建て替えがなされた可能性が高い。このような状況は、北東側主柱列の各柱穴で看取することができる。

**SB-81建物跡** 建物跡X群では唯一B類に分類される建物跡である。B類では最大規模を誇り、B3 a類に分類される。主柱は、左右両列とも4本、合計8本で構成される。配列はほぼ直線であるが、南東

側に比して北西側が3.24mと、南東側の3.88mよりやや狭まり、正確な長方形を呈していない。また、北西端をなす2本の支柱穴の位置は、他の支柱穴と比して少し間隔が狭くなっている。事由等は不明である。

支柱穴の規模は、平均値における最大直径1.21m、最小0.70m、平均でも0.93mとなる。深度については、最大0.75m、最小0.61m、平均では0.66mと概して安定している。

柱穴底面における柱の痕跡は、SKp-1709e : 0.50m、SKp-1711 : 0.62×0.53m、SKp-1718 : 0.90×0.82m、SKp-1723 : 0.48×0.48m、SKp-1731 : 0.40×0.38mである。これらの中でSKp-1718の柱痕だけが突出して大形となっている。しかし、当該柱穴と対をなすSKp-1742bは、そのほとんどをSKp-1742aと重複して不明となっているが、残存部からすればかなり大形であることから、基本的には矛盾しない。

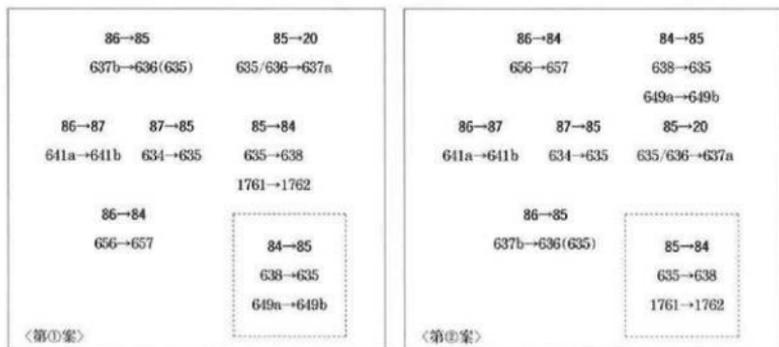
#### 建物跡Y群 (SB-84~87)

E8~F8グリッドにまたがって検出された。当該地点は、南東側への緩やかな斜面部に相当するが、等高線のラインを見ると内側へ少しへこんでいることがうかがわれるとおり、若干沢状の地形をなしている。柱穴群など縄文時代遺構との関係については、これら遺構群の大半が緩斜面上の平坦地に集中しており、本建物群の位置は密集域に近接しつつも、その外側となっている。

建物跡Y群に属する建物跡は、現在までSB-84~87までの4棟が把握され、復元することができた。しかし、これらの復元に際し、活用することができた柱穴以外にも、やや大形の柱穴が複数残されており、X群同様復元し切れない建物跡の存在は否定できない。これら4棟の規模は、建物跡X群の建物跡と比すればやや小さいが、しかし、本遺跡内では大形の部類に属するものが含まれている。建物跡の形式としては、A類とB類の両者があり、双方2棟となっている。

確認された建物跡4棟の新旧関係について、各柱穴の重複関係から検討を行ってみたい。今回の調査では、発掘作業に迫られ、建物跡の把握とは別に、各柱穴を個々に調査したためか、建物の新旧関係と柱穴の関係で、一部に整合していない部分が存在することが判明した。これらについては、最終的な検討でも消化仕切れていない。

各柱穴の新旧関係と建物跡としてみた場合、不整合が生じたのは、SB-84とSB-85においてであり、同じ柱穴であっても逆転してしまった事例まであった。そこで、想定できる2案を下表にまとめたが、変遷において位置が定まらない建物跡とはSB-84に集約された。



第3表 建物跡Y群における柱穴の重複関係

第3表に示した柱穴の重複関係から判断される建物跡の変遷とは、第①案ではSB-86→SB-87→SB-85→SB-84→SI-20となる。これに対し第③案では、SB-86→SB-87→SB-85→SI-20の関係は大きく変化しないが、SB-84の位置がSB-86とSB-85との中間に位置し、SB-87との前後関係が不明ということになる。両案の可否等については、もう少し検討を加える必要があるが、調査を終えた今となってははにわかには判断できない。

そこで、建物跡X群における変遷の状況と対比して、大まかな判断を示しておきたい。X群における変遷は、類別で見るとA3a類→B3a類→A3b類→A2c類であり、A類のあとB類に変化してA類に戻っている。この変化は本遺跡の1例であり、普遍化することはできないが、X群での変遷はほぼ確実視でき、A類とB類が交互に建設されると言うことも考えにくいため、Y群での変遷も第①案か、もしくは第③案でもSB-84の位置はSB-86とSB-87の中間が妥当と考えられる。また、X群において最新のSB-78は他に例のないA2c類であり、その直前にSB-84と同じタイプのA3b類が位置することからすれば、Y群においては第①案の変遷である可能性が高いのではないだろうか。調査の成果等から得られた根拠に乏しいが、とりあえず現状での判断としておきたい。

**SB-84建物跡** 建物跡Y群における変遷的な位置付けが定まっていない建物跡であるが、本群では最大の規模を誇り、A3b類に分類される。支柱は両側各4本、両端に棟持柱を備え、建物内部には3本の支柱が設けられている。柱穴の配列は、建物内部の支柱1本（SKp-654b）の位置が若干西へ振れているほかは、間隔を含めてほぼ整っており、かなり丁寧に建設されたことがうかがわれる。

支柱穴と棟持柱・支柱の規模等については、本建物跡の立地が緩斜面の等高線にほぼ直交するように設定されているためか判別し難いが、斜面上方に穿たれた柱穴の観察結果からすれば、支柱の規模がやや大形に設定されている。支柱穴の規模は、平均値における最大直径1.05m、最小0.62m、計算上における平均直径は0.80mとなるが、斜面下方ではもう少し加算され、実際には柱穴の直径は若干大きくなるものと考えられる。深度は、斜面上方の2個（SKp-638・649a）が、それぞれ0.76mと0.65mを計る。下方のSKp-662・665については、それぞれ0.30mと0.25mと浅くなるが、底面標高の差は最大で0.20mに過ぎない。棟持柱については、上方となる北端のSKp-645より下方南端のSKp-664のほうが規模が大きく、深度を示す底面標高も7.5cmほど低くなっていた。この点は、建物建設当時の地形が現在と同様緩やかな斜面であり、下方における棟持柱の意味が通常より高かったのかも知れない。建物内部の支柱は、平均の直径で0.62～0.74mの規模があり、深度でも0.67～0.79mと意外に深い。この事実は、当該建物内の床にかかる荷重が相当であり、その備えとして堅固な設定がなされたものと考えられる。

**SB-85建物跡** B2a類に分類され、支柱は両側各3本、合計6本で建造された建物跡である。支柱穴は、斜面上方では規模が大きいが、下方では徐々に小さくなることから、建築当時の斜面は、遺構確認面の傾斜よりかなり緩かったことが予想できる。支柱穴の規模については、上方部を参考にすると、最大直径がSKp-635で示される1.26mのとおり、1mを超える規模が想定できる。深度についても同様に、0.5～0.6mの掘り込みが考えられる。ただし、底面標高をみると、深度が0.20mと浅いSKp-1761の場合、最も低いSKp-659より0.3mも高く、ばらつきが認められる。

**SB-86建物跡** A2b類に属し、支柱は両側に各3本、南北の両端に棟持柱を備え、建物内部では支柱が床を支えていた構造と考えられる。建物内部の支柱は、上方部の1本であり、下方部は斜面のため遺構確認面に達していなかった可能性が考えられるが、場合によってはSKp-654cが不足する支柱の候補となるかも知れない。また、斜面下方となる南端部の棟持柱や支柱もそれぞれ1本が遺構確認面までの掘り

込みがなかったと判断した。

各柱穴の規模は、斜面上方部における柱穴が重複等により全形をうかがえるものが少なくなっているが、直径そのものはおおむね0.7mほどの規模であったと考えらる。主柱穴の深度は、最大でも0.23mと浅く、大半は0.1mに満たないもので占められている。これに対し、棟持柱の深度は0.43m、支柱では0.27mと相対的に深くなっていた。

**SB-87建物跡** Y群の中では最小の規模となるが、遺跡全体でも最小の部類に属する。主柱は両側各3本、B2 a類に分類される1間×2間の建物跡である。確認された柱穴は、斜面下方南端の1本が地山まで達しておらず未確認となっている。柱穴の規模は、ほとんどが重複等により全形をうかがうことができず明確ではないが、斜面上方北端に位置するSKp-641bを参考にすれば、最大径が0.64mを計ることから、ほかの5本もおおむね類似した規模となるものと考えられる。深度については、0.70mを超えるものが2本、そのほかは0.34~0.46mとややばらつきがある。

#### 単独の建物跡 (SB-73・74・75・76・82・83)

建物跡X群とY群は、ともに4棟づつ継続的な建て替えがなされた建物跡であるが、このほかの建物跡6棟は、それぞれ単独で建てられていた。前述したように、これら単独の建物跡は、一般住居群と混在しており、継続的な建て替えがなされないなど、X群やY群とは意味合いが多少異なる存在である。分類では、A類が4棟、B類は2棟であり、A類が多くなっている。また、A1類やA2 a類、B1類とB2 a類に分類されるとおり、規模も建物跡X群やY群より、比較的小さくなっている。

なお、後述するとおり、SB-75とSB-76の両建物跡は、一体化することにより1棟として機能していた可能性を否定できない。以下、個別的に概要を説明する。

**SB-73建物跡** 調査区西端付近において、D5グリッド東側からE5グリッドにかけての範囲に位置する。主柱4本だけによる建物跡と考えられ、B1類に分類される。ただし、主柱のうち、最も西側に位置する1本については、斜面に近い調査区外となるため、検出には至っていない。また、さらに西側へ規模を拡大し、B2類やB3類となる可能性は否定できないが、自然地形の斜面に接しているため、おそらくB1類の平面プランで収まるものと考えている。主柱穴は、概して規模が大きく、平均値における最大直径1.04m、最小でも0.96mを計る。

**SB-74建物跡** E6グリッド北部からE5グリッドにまたがる位置にあり、SB-73の南側において、おおむね近似した主軸方位で確認された。主柱は両側各3本、棟持柱を持たないB2 a類の建物跡である。主柱穴の規模は概して大形で、最大0.99mを計る。本建物跡の柱穴のうち、SKp-1031については直径0.63mと小形である。深度は、SKp-1035が約1mと深く、SKp-1031が0.63mとやや浅くなるが、その他はおおむね0.80m前後で一定した柱穴となっている。柱穴底面での柱痕は、SKp-986bで検出されている。その直径は、0.60mを計るが、本建物跡における柱の規模が想定できる。

**SB-75建物跡** F4グリッドの南半部に位置する。地形的にはやや北側へ緩やかな傾斜が始まる地点に相当する。本建物跡は、SI-58・59・60の3棟の住居跡が同心円的に把握された中央に所在するが、柱穴の重複がなく、前後関係は一切不明である。柱穴の配置は、両側各2本、両端に棟持柱風の柱穴が各1本が配され、正六角形に近い亀甲形を呈し、A1類に分類される。柱穴の規模は、平均値における最大直径0.80m、最小は0.62mとなるが、概して均一的で差異が小さく、直径の平均は0.72mである。両側の主柱と両端に配される柱穴の規模もほぼ同じであり、むしろ両端の柱穴の規模がやや大きいほどである。平均深度は0.78mを計るが、底面標高では両端2本の柱穴がやや浅くなる。

なお、後述するように、SB-76と一体化し、1棟となる可能性がある。

**SB-76建物跡** G6グリッド南西部からG5グリッドにかけて建設されていた建物跡である。前述のSB-75建物跡の東側に、棟持柱を接する位置で検出された。当初、両者の建物跡は、一体化した1棟と考えたが、その場合、主柱の間に支柱が2本位置することになる。しかし、ほかの事例をみると、支柱は主柱間に1本であることから、当該事例も同形の2棟が並置されていたと理解したものである。ただし、両者両側の主柱列はSB-75となる北側でゆがむことになるが、主柱の軸はほぼ一致することから、同時存在、もしくは連結され、外見が1棟の建物として機能していた可能性は否定できない。

SB-76は、前述のごとくSB-75と同型式の建物構造をとり、A1類に分類される。主柱は両側各2本、両端に棟持柱風の柱各1本を備える。しかし、主柱穴と棟持柱穴における規模には、基本的な差異がなく、本類が正六角形を呈していることによる特殊な構造であった可能性も考えられる。平均径から見た柱穴の直径は、最大0.83m、最小0.70mであるが、SKp-1853を除けば0.70mほどで一定していた。深度は、最深0.78m、浅いものでも0.64mで、主柱穴と棟持柱での基本的な差異はなく、むしろ棟持柱の位置にあるSKp-1512は0.75mと深くなる。

なお、本建物跡の柱穴断面の観察結果では、6本からすべて柱痕が明瞭に確認されている。

**SB-77建物跡** 調査区北辺に位置するH4グリッド内から検出された柱穴群は、概して大形のものが多く含まれている。位置的には北側への緩やかな斜面部であり、柱穴群の分布状況にも、南西から北東へ連なるある程度の並びが看取できる。このため、1棟もしくは2棟程度の建物跡を想定することができる。しかし、未検出の柱穴や掘り過ぎ等による混乱のためか、建物跡を復元することができなかったものである。したがって、建物跡としての把握はなされていないが、存在した可能性が高いこと、また集落景観復元の一助とするため、便宜的に設定したものである。今後改めて検討することとしたい。

**SB-82建物跡** 調査区南側の斜面下方において検出された小規模な建物跡である。位置的にはF10グリッド北部に所在する。南側の大半が未発掘域にあるため、全貌は明らかでないが、北側については4個の柱穴が検出されている。これらのうち、SKp-344については、間隔がやや狭くなることから、本建物跡とは無関係、もしくはA2c類の主柱穴事例にあるとあり、主柱を補う補助的な柱であった可能性がある。そこで本建物跡については、原則的には主柱両側各3本、東西となる両端に棟持柱が各1本設定されA2a類の建物跡として復元した。

柱穴の規模は概して小さく、直径は0.30m前後のものが大半を占め、最大となるのはSKp-335の0.47mである。深度は、補助的な柱と考えられる位置から検出されているSKp-344が0.64mと最も深く、SKp-345が0.27mと最も浅い。そのほかは、おおむね0.40m前後から0.50m程度となっている。

**SB-83建物跡** 調査区ではほぼ中央に位置し、地形的にはほぼ平坦な場所に建設されていた。本建物跡はSI-63・64・65の3棟がおおむね重なる位置にある。柱穴の所属が各々正しいとすれば、各施設の前関係は、SI-64→SB-83→SI-65となり、SI-63はSI-64より新しいが、SB-83とSI-65との関係は不明とすることになる。

柱穴の配置は、主柱が両側各3本、両端に棟持柱各1本を配置したA2a類に分類される建物跡ということになる。主柱穴の規模は、0.70～0.80mクラスのもの3本、0.60m前後のもの3本である。深度は、0.30m前後から0.40mのものが4本のほか、西側の角柱となるSKp-1338・1306が0.60m前後と深くなっていた。

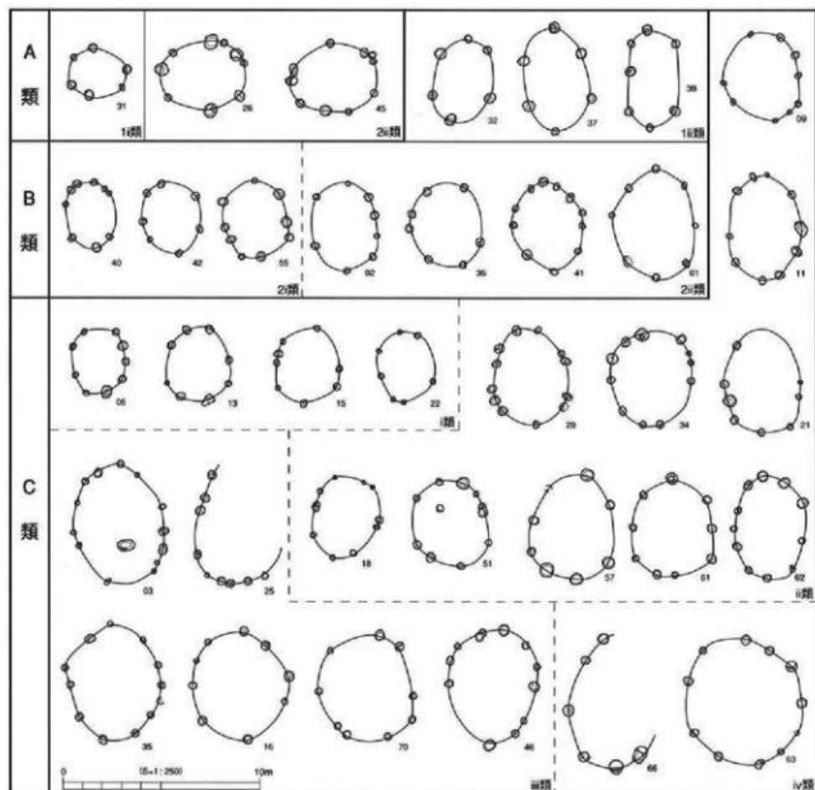
棟持柱は、南西端の柱穴が、直径0.40m前後とやや小形である。北東端については、平均径0.60m、深

度も0.32mで、南西端よりも深くなっていた。

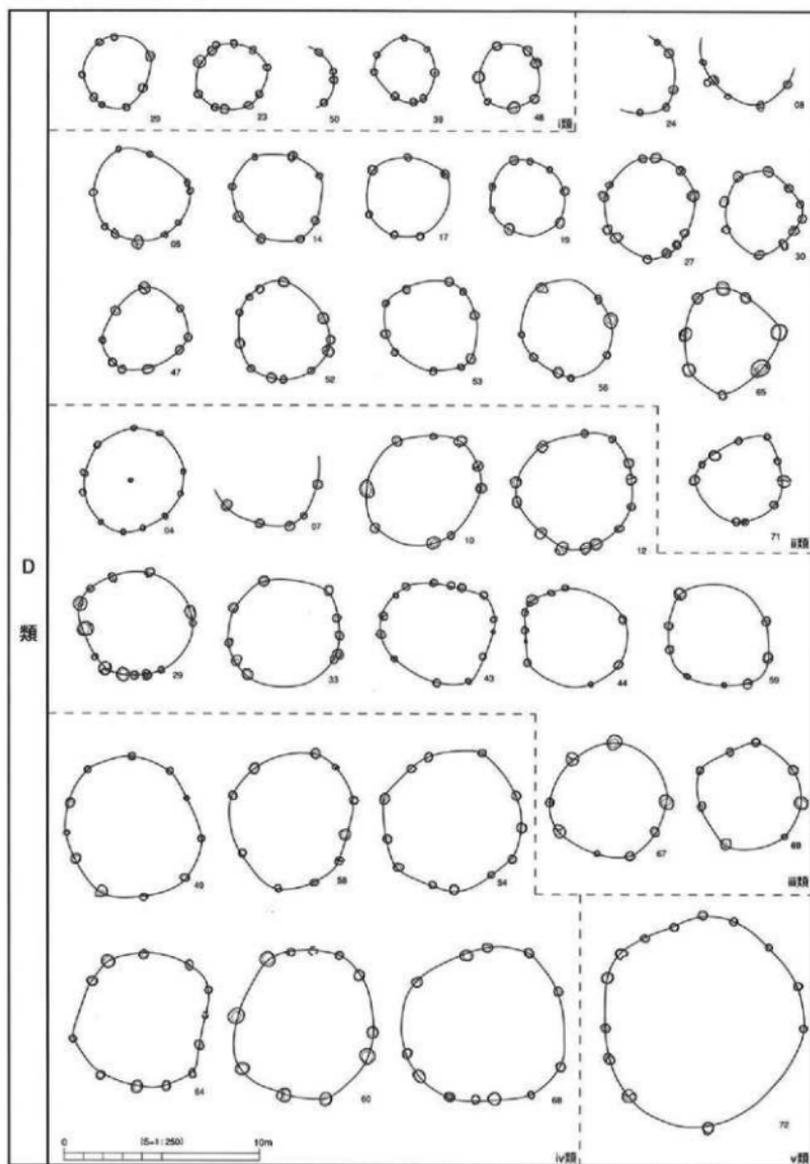
## 2) 住居跡

建物跡の柱穴は、直線的な配列や定型的なプランによって、かなりの確率で特定できる。しかし、それら以外にも相当数の柱穴が存在しており、これらのことから建物跡ではない構造物の存在が証明される。それらの構造物を、当該集落における一般的な住居と考え、積極的な把握を試みた。

無数に穿たれた柱穴群の中から、柱穴の配列により想定した住居跡は、合計で72棟となった。これらは、すでに述べてあるように、住居として認定する際に、さまざまな課題がそれぞれの住居跡に含まれており、個々の柱穴の帰属やプランが確実であると断定することまでは至っていないものである。このため、住居跡を個別的に述べても、砂上に楼閣を建てるようなものであることから、大まかな分類等から概括的に述べ、これら住居群の存在を肯定的に捉えた場合の様相等について若干言及することとしたい。



第8図 住居跡の分類(1)



第9図 住居跡の分類(2)

### a. 住居跡の分類

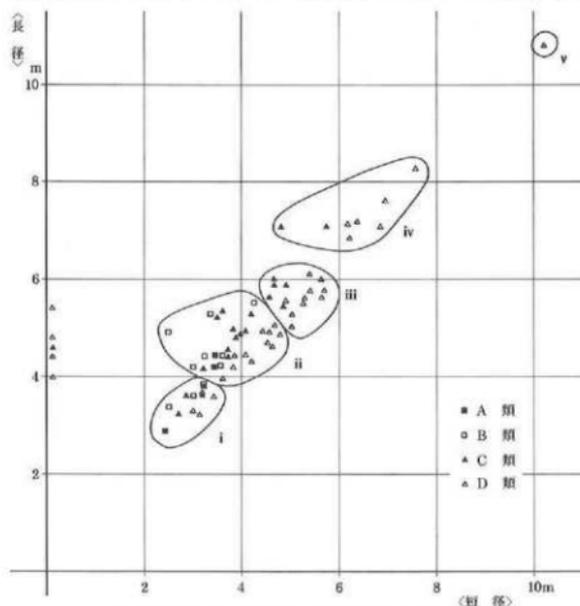
十三本塚北縄文集落において、一般的居住施設としての住居跡の認定は、確認された柱穴の配置によって認識することとした。これは、すでに幾度となく述べているとおり、床面が地山面を掘り窪めた形式の住居ではなく、明確な炉跡も少なく、床面の範囲を特定できる事例が皆無であったことによる。認定の前提としては、県内や関東地方における当該期の事例を参考とし、主に円形や建物跡に類似した配置などから検索を進めた。このため、住居跡として認定した平面形等については、認定の方法からしても既定の住居形態に規定されたものということになる。

住居跡の分類は、平面形と柱穴の配置を視点とする。まず、平面形では、楕円形と円形に大別される。楕円形プランの住居は、6本の柱が六角形状に配列する一群と、壁柱状に多数が配置されるものに二分され、更に前者は主軸の位置が長軸と短軸かで区分することができる。これらによって、住居跡は、大きく4類に大別することができ、これらをA～D類とする。これら各類は、柱穴の配置により、細分できる場合がある。

また、柱穴配置で示される平面形の規模による区分も可能であり、小形から大形まで5類の細別を試みた。各類の区分について、長径を基準に概略を述べると、i類：3m前後から4mほど、ii類：4m前後から5.5m、iii類：5m前後から6m前後、iv類：7m前後から8m程度、v類：10m超の規模となる。iv類については、法量分布でも2つのブロックに分かれることから、細別の余地を残す。同様に、最も事例が多いii類についても、分布図の見方によっては、4mから4.5m前後と、4.5mから5.5m前後までの2ブロックに区分することも可能である。v類は規模が極端に大きいことから、一般的な住居とすることができると判断できない。本集落において普通一般的な住居の規模は、長径で3m前後から6mほどとなるi類からiii類までと考えられ、互いの区分は漸移的であり、その総数64棟は全体の88.9%を占める。

### b. 住居跡概観

**住居跡A類** 柱穴6本を基本として配置され、かつ主軸が短軸に設定されるものとした。事例は少なく3棟が抽出されたのみである。1類は、柱穴6本で構成さ



第10図 十三本塚北遺跡住居跡法量分布図 (1:50)

れ、2類は6本を基本としつつ補助柱が伴う。規模ではi類1棟、ii類2棟で小規模なもので占められるが、本類における両者の比率は、前者が33.3%、後者は66.7%であった。A類の住居跡は、総数72棟のうち3棟で、その割合は4.2%に過ぎず、本集落における住居形式としては少ないことになる。

**住居跡B類** 柱穴6本で構成され、かつ主軸が長軸に設定されている一群である。細分はA類と同様で、6本を原則とする1類と、6本に補助柱が付加された2類に細別できる。この後者となるB2類は、次いで述べるC類と近似するもので、両者の中間的な意味合いがある。1類は3棟で、全体の4.2%、2類は7棟で9.7%、B類全体では10棟で13.9%の割合で確認された。ただし、C類に近似するB2類を除けばB類全体で6棟となる8.3%に過ぎず、やはり一般的な住居形式とはなっていないと判断できる。

規模としては、2類に最小のi類3棟があるが、ほかの7棟はすべてii類である。i類とii類はともに大きな部類ではないが、本類における両者の比率は、前者が30.0%、後者は70.0%であり、A類とB類ではほぼ同率であることから、両者が基本的な底辺部を占める一連の住居形式である可能性を示唆している。

**住居跡C類** 平面形が楕円形を呈し、柱穴がプランに沿って楕円形に連続的に配置されるものを本類とした。前述のB2類に近似するが、基本的には円形プランとした次ぎのD類より近い。柱穴の位置や本数等で細別できる余地を残すが、基本的には行わず、規模の大小にて細分した。本類に分類される住居は、22棟であり、全体の割合では30.6%を占めることになり、概して主力足り得る住居型式である。

規模としては、i類からiv類までが確認できる。各類における棟数と割合は、i類：4棟(5.6%)、ii類：10棟(13.9%)、iii類：6棟(8.3%)、iv類：2棟(2.8%)となる。ここで注目したいのは、本類におけるi類とii類の比率である。確かに、C類22棟の中でi類とii類が占める割合は、それぞれ18.2%と45.5%であるが、両者だけで見るとi類の28.6%に対し、ii類は71.4%であり、これはA類とB類で見られた両者の比率に近似する値が得られる。したがって、規模がi類とii類である住居に特別な変化があるのではなく、これらに規模が大きな部類であるiii類とiv類が付加された状況として理解できるのではないだろうか。

**住居跡D類** 平面形がほぼ円形もしくは円形を指向する一群を本類とした。柱穴はプランに沿って円形に連続的な配置を見せる。当該縄文集落では、住居跡の形式として最も多いタイプであり、把握された住居数の合計37棟は、全体割合で過半数を超える51.4%を占めており、最も一般的な住居であったとすることができる。本類についてもC類と同様に柱穴の数や配置状況等による細別が可能かも知れないが、今回は規模による細分のみを行った。

規模による細別では、超大形となるv類が存在し、はじめてi類からv類までがそろうことになる。本類における各々の棟数とその割合は、i類：5棟(6.9%)、ii類：14棟(19.4%)、iii類：11棟(15.3%)、iv類：6棟(8.3%)、v類：1棟(1.4%)となる。i類とii類の19棟だけを取り上げ、両者の割合をみると、前者が26.3%、後者は73.7%となる。各類におけるii類の比率は、A類からB類、そしてC類へと、徐々に上昇傾向にあることをうかがうことができるが、相対的にはほぼ同じ比率で推移していることがわかる。この点について、各類におけるiii類以上の比率をみても、A類・B類では皆無であったものが、C類中では36.4%となり、D類で46.0%に達していることからしても、徐々に大形化していく傾向をうかがうことができる。

このような傾向は、A類とB類の住居形式が大型化に適さず、C類とD類ではある程度対応が可能であったと見ることかできる。この点は、Dv類としたSI-72住居跡の直径が10mを超える規模を誇っていることでも明らかである。ただし、SI-72住居跡の場合、確認されている柱穴は13個であり、ほぼ等間隔で柱

穴が配置されていたとしても、17～18本程度である。柱穴の規模は最大で0.64mを計るが、最小のものは0.33mに過ぎず、平均でも0.46mでしかない。また、柱穴深度は、最深の柱穴で0.36m、浅いものは0.10m、平均深度となると0.24mであり、大形住居の柱穴としては、明らかに小規模である。したがって、これら柱穴からどのような上屋が立上げられ、どのような構造で安全基準が満たされていたのか明らかにし得ないが、現状として、大形住居との認定には慎重を期す必要があるのかも知れない。

### c. 住居跡の所属時期

さて、柱穴の配置から想定した住居跡について、平面形態と柱穴の配置によって大きく4類に大別し、各類ごとに大まかな概略を述べたところである。個々の説明は、第4表に代えたいが、それでもなお各住居跡の時期については十分でない。この点は、住居跡の掘り込みがなく、したがって覆土と言うものが存在しなかったことから、各住居に帰属する遺物、特に時期判定に有効な縄文土器類を得ることができなかったことに起因する。わずかに得られた土器類とは、各住居を構成する柱穴内から出土したものであるが、それぞれ細片であり、柱根を固めた土砂内出土と、柱痕内出土の遺物を明確に区分することができず、また古い時期の土器片が柱穴内に混入した可能性などを捨て切れないものである。また複数の柱穴から出土した土器類によって、各住居の所属時期を判定できるだけの出土量はなく、各住居の柱穴一つぐらいから時期の判明する土器片が1個も得られていないものが大半を占めていた。したがって、土器小片で各住居の時期判定は慎重を期さざるを得ず、その意味では各住居の時期を特定することは、まずできないと言わざるを得ない。

このような状況の中で、各住居跡の帰属する時期について、柱穴内出土の土器細片により、あえて挙げるとすれば、10例ほどを例示できる。大まかに三十稲場式期（第Ⅱ期）に該当する住居跡は、SI-48・49住居跡の2例であり、三十稲場式期から南三十稲場式期古段階（第Ⅱ期～第Ⅲ期）と考えられる事例ではSI-33・54住居跡の2例がある。南三十稲場式期古段階（第Ⅲ期）とされる住居跡は、SI-06・09・21・28・66・62住居跡の6棟になる。また、南三十稲場式期新段階（第Ⅳ期）以降と考えられるのは、SI-29住居跡である。これらの事例と、上記4類との関係については、A類とB類では具体的に挙げることができなかったが、C類で例示された6棟全てが第Ⅲ期の事例となり、D類では第Ⅱ期が2例、第Ⅱ期～第Ⅲ期が2例、第Ⅳ期以降が1例ということになる。これらの結果が全てではないが、C類は大まかには第Ⅲ期を中心とした時期に、D類は第Ⅱ期から第Ⅳ期まで長期にわたって普遍的な住居跡であった可能性を示しているとも言えそうである。

ところで、C類とD類とは、基本的には平面形だけの相違であり、基本的な構造は大きく変わらない住居である。その出自あるいは系譜としては、かつて設定した城之腰類型で示せば、A類型第Ⅱb類の変異と考えられる。この類型は、後期中業から後業までその系譜が引き継がれており〔品田1999〕、したがって三十稲場式期から南三十稲場式を主体とする本縄文集落で一般的なことは当然のことかも知れない。

これに対し、A類とB類も、両者は構造上近縁な関係にあるが、これらは同じく城之腰類型で示せばB類型第Ⅰ類の系譜を引き継ぐものと考えられる。しかし、これらの類型は、後期中業以降ほとんど見られなくなっており、本縄文集落の時期幅の中で廃れてしまった可能性が高い。今回、A類・B類の時期をある程度見通せる資料が得られていないが、本集落の時的な主体は、出土した土器量からしても、南三十稲場式期であり、A類・B類がこれらの主体的な時期とは基本的なずれがあったことを示唆しているのではないだろうか。

第4表 十三本塚北遺跡建物跡・住居跡一覧

遺蹟名	グリッド	平面形	分類	尾 積(m)		面積 (㎡)	主軸方位	柱穴数	柱 穴 番 号	伊 集 考
				長 径	短 径					
Ⅱ-01	D-11	南門形	ⅡB2#期	5.52	4.26		N-80.3°-E	8	50・51 a・b・54 a・57・61・66・68 a・70	
Ⅱ-02	C-10	南門形	ⅡB2#期	4.44	3.24		N-42.5°-W	8	115・122・127・130・142・140 a・167・181	
Ⅱ-03	C-10・11	南門形	ⅡC#期	6.00	4.68		N-29.5°-W	13	87・92・93・116・117・134・135・137・138・153・154・180・1786	143
Ⅱ-04	C-10	門形	ⅡD#期	5.28	5.04		N-88.7°-E	11	95 b・113・121・129・131・139・141・158・169・176・179 a	152
Ⅱ-05	C・D-10	門形	ⅡD#期	4.92	4.56		N-22.0°-E	10	104・105・110・114・156・160・161・163・217・222	
Ⅱ-06	C・D-10	門形	ⅡC#期	3.24	2.70		N-89.6°-E	9	106・107・108・109・112・223・229・230・231	
Ⅱ-07	C-10	門形	ⅡD#期(5.40)	—	—		—	5	178・182 a・186・196・198 a	
Ⅱ-08	C-10	門形	ⅡD#期(4.80)	—	—		—	5	177・179 b・182 b・187・197	
Ⅱ-09	C-9・10	南門形	ⅡC#期	4.56	3.72		N-34.3°-W	9	81・235・285・297 b・288・301・304・306・2001	
Ⅱ-10	C・D-8・9	南門形	ⅡD#期	6.12	5.40		N-59.3°-W	9	425・433・435・447・459・495・467 b・475・487 a	
Ⅱ-11	C-8・9 D-9	南門形	ⅡC#期	5.34	3.60		N-69.5°-W	10	426・430・434 b・446 b・456・460・465 b・468・470・474 a	
Ⅱ-12	C・D-8・9	門形	ⅡD#期	5.76	5.40		N-86.9°-E	13	416・424・428・441・455・456・662・607 a・482・488・489・533・535	
Ⅱ-13	C-8	南門形	ⅡC#期	3.72	3.24		N-4.3°-W	8	469・474 b・476・477・481・483・485・487 b	
Ⅱ-14	C・D-8・9	門形	ⅡD#期	4.68	4.56		N-64.2°-E	8	412・429・439・471・478・534・549・551	
Ⅱ-15	D・E-9	南門形	ⅡC#期	3.84	3.24		N-52.5°-W	8	375・381・382・386・388・398 c・401・403	
Ⅱ-16	D-8	南門形	ⅡC#期	5.46	4.86		N-82.2°-W	9	519・521・524・532・543・548・532・557・564	
Ⅱ-17	D-8	門形	ⅡD#期	4.32	4.20		N-12.1°-E	6	565・565 a・569・573・579・582 a	
Ⅱ-18	D・E-8	南門形	ⅡC#期	4.20	3.24		N-23.0°-W	12	300・394・571・575・609・610・618・619・621・624・1757	
Ⅱ-19	E-8・9	門形	ⅡD#期	3.96	3.60		N-61.1°-E	8	620・622・625・625・628・692・1769・1771	
Ⅱ-20	E-8	門形	ⅡD#期	3.72	3.24		N-30.2°-E	8	604・605・607・614・616・637 a・640・669	
Ⅱ-21	E-8	南門形	ⅡC#期	4.98	3.84		N-81.5°-W	8	606・609・611・617・639・644・691・693	
Ⅱ-22	F-8	南門形	ⅡC#期	3.60	2.88		N-47.4°-W	7	353・354・355・360・361・362・363	
Ⅱ-23	C-8	門形	ⅡD#期	3.60	3.42		N-0.6°-W	11	490・491・492・494・1384・1395・1397・1402 b・1495 a・1411 b・1416	
Ⅱ-24	C-8	南門形	ⅡD#期(3.96)	—	—		N-67.8°-W	5	1383・1387・1403・1406・1410	
Ⅱ-25	C-7・8	南門形	ⅡC#期(4.56)	—	—		N-86.1°-W	9	1299・1401・1409・1414 b・1422 b・1426・1428・1432・1435 b	
Ⅱ-26	C-8	南門形	ⅡA2#期	4.20	3.48		N-28.0°-E	9	493・495・499・505・1407・1412 a・b・1425・1429・1434	
Ⅱ-27	C-7・8	門形	ⅡD#期	5.04	4.68		N-66.8°-E	12	510・509・1413・1419・1420・1421・1433 a・1438 a・1772・1775 a・1777・1788	
Ⅱ-28	C・D-7	南門形	ⅡC#期	4.80	3.90		N-62.1°-E	12	684・697 c・1776・1778 a・1789・1790・1804・1817・1824・1825・1917・1918	
Ⅱ-29	C・D-7	門形	ⅡD#期	5.52	5.28		N-58.7°-E	13	602・697 a・699・703 b・704・705・707・708・1783・1787・1803・1807・1808	
Ⅱ-30	D-7	門形	ⅡD#期	4.20	3.84		N-60.9°-W	10	703 a・719・712・718・783・785 b・789・791・1439・1793	
Ⅱ-31	D-7	南門形	ⅡA1#期	2.88	2.46		N-51.9°-W	6	790・799・801・805・809・810	
Ⅱ-32	D・E-7	南門形	ⅡB1#期	4.20	3.00		N-60.1°-E	6	793・793・802・811・812・815	
Ⅱ-33	D-7	門形	ⅡD#期	5.64	5.64		N-7.7°-W	10	709・721・722・726・729・743・745・774・775・785 a	
Ⅱ-34	D-7	南門形	ⅡC#期	4.92	4.08		N-41.3°-W	11	711・718・720 a・724・725 b・730・746・768 a・771・773・779	
Ⅱ-35	C-6・7	南門形	ⅡC#期	5.88	4.92		N-44.7°-W	12	723・728・731・735・736・751・753・762・764・765・768 b・1830	
Ⅱ-36	E-7	南門形	ⅡB2#期	4.20	3.54		N-5.4°-E	7	844・847・854・876・873・881・883	
Ⅱ-37	E-7	南門形	ⅡB1#期	5.28	3.36		N-67.4°-W	6	839・831・837・843 a・855・889	
Ⅱ-38	E-7	南門形	ⅡB1#期	4.92	2.36		N-61.9°-W	7	836・832・839・842・843 b・846 a・b・850	
Ⅱ-39	E-6・7	門形	ⅡD#期	3.30	3.00		N-24.5°-E	8	856・857・858・862・869・872・906・908	
Ⅱ-40	E-6・7	南門形	ⅡB2#期	3.36	2.52		N-41.9°-W	9	859・860・861・868・871・907・909 a・912・1832	
Ⅱ-41	D・E-6・7	南門形	ⅡB2#期	4.44	3.60		N-33.5°-E	11	792・737・740・741・744・911・914・921・925 a・937・949 c	
Ⅱ-42	D・E-6・7	南門形	ⅡB2#期	3.60	3.00		N-18.5°-W	7	729・861・870・939 b・918・938 b・940	
Ⅱ-43	D・E-6	門形	ⅡD#期	5.76	5.70		N-89.9°-E	14	903・905・910・931 b・936・948・963・965・966・929・955・999・993・1001	
Ⅱ-44	D・E-6	門形	ⅡD#期	5.52	4.92		N-57.5°-W	10	959 a・b・960・962・967・973・974・981・991・999・2002	
Ⅱ-45	E-5・6	南門形	ⅡA2#期	4.44	3.48		N-53.3°-W	10	1016・1018・1019・1020・1022・1024・1029・1030 a・1033・1097	

通称名	グリッド	平面形	分類	架 脚(m)		面 積 (㎡)	主軸方位	柱穴数	柱 穴 番 号	伊 備 考
				長 径	短 径					
SI-46	D・E-5・6	楕円形	HC Ⅲ類	5.64	4.56		N-65.3°-W	12	904・955・956・972・1037・1039・1051・1054・1055・1059・1060・1065	
SI-47	E-5	楕円形	HD Ⅲ類	4.44	3.84		N-65.5°-W	9	1063・1068・1070・1077・1079 b・1080・1091・1110 b・1143	
SI-48	E-5	円形	HD Ⅰ類	3.24	3.12		N-37.6°-E	7	1135・1137・1144・1145・1146・1148・1154	
SI-49	E-4・5 D-5	楕円形	HD Ⅲ類	7.20	6.36		N-89.7°-E	11	1056・1062・1069・1072・1110 a・1127・1133・1150・1155・1164・1846	
SI-50	D-4・5	円形	HD Ⅰ類	—	—		—	4	1149・1152・1155・1169 a	
SI-51	E-5	楕円形	HC Ⅲ類	4.44	3.72		N-2.3°-W	10	1071・1074・1083・1088・1111・1112・1124・1126・1130・1139	1149
SI-52	E-5	楕円形	HD Ⅲ類	(4.44)	—		N-49.7°-E	8	1089・1092・1106 a・1114・1118・1120・1121・1129	
SI-53	E-5	円形	HD Ⅲ類	4.62	4.62		N-49.2°-E	10	1085・1088・1093・1104・1105・1113・1119・1122・1128・1142	
SI-54	E-4・5 F-5	円形	HD Ⅲ類	7.08	6.84		N-40.2°-W	12	1087・1090・1094・1102・1132・1139・1141・1184・1185・1190・1271・1273	
SI-55	E-4	楕円形	HB 2 Ⅰ類	3.84	3.24		N-8.6°-W	8	1165・1166・1169・1172・1174・1183・1187 b・1189	
SI-56	F-4	楕円形	HD Ⅲ類	4.92	4.44		N-83.9°-W	8	1204・1205・1207・1209・1211・1219・1220・1234	
SI-57	E・F-4	楕円形	HC Ⅲ類	5.28	4.20		N-11.8°-E	7	1193・1194・1202・1203・1210・1213・1216	
SI-58	F・G-4・5	楕円形	HD Ⅲ類	7.14	6.18		N-40.9°-W	10	1231 a・1236 a・1237・1242・1265・1285・1294・1302・1305・1307	
SI-59	F-4・5 G-4	円形	HD Ⅲ類	5.58	5.28		N-54.2°-E	8	1131 b・1236 b・1253・1259・1264・1491・1497・1504	
SI-60	F・G-4・5	楕円形	HD Ⅲ類	7.62	6.96		N-81.6°-E	10	1229・1235・1241・1263・1407・1493・1509・1525・1527・1898	
SI-61	F・G-5・6	楕円形	HC Ⅲ類	4.86	3.96		N-18.6°-W	9	1283 b・1284・1287・1291・1303・1310・1315・1317・1460	
SI-62	G-5・6 F-5	楕円形	HC Ⅲ類	5.22	3.48		N-16.5°-W	11	1278・1285・1296 b・1298・1314・1451 a・1452・1459・1465・1467・1488	
SI-63	F・G-6	楕円形	HC Ⅲ類	7.08	5.76		N-18.8°-W	11	1309・1319・1324・1328・1350 a・1343・1348・1442・1447・1448・2003	
SI-64	F・G-6	楕円形	HD Ⅲ類	6.84	6.24		N-29.8°-E	12	1301・1302・1307・1316・1326・1333 a・1334・1336・1338 b・1341・1350・1449	
SI-65	F-6	円形	HD Ⅲ類	4.96	4.80		N-26.2°-E	8	1306・1318・1322・1325・1332・1335・1343・1351	
SI-66	G-4	楕円形	HC Ⅲ類	(7.08)	(4.80)		N-18.4°-W	6	1335・1338・1540・1541・1543・1865	
SI-67	H-4	円形	HD Ⅲ類	6.00	5.64		N-17.9°-E	8	1355・1500 a・1565・1577・1583・1589・1590・1594	
SI-68	G・H-5・6	楕円形	HD Ⅲ類	8.28	7.56		N-3.4°-W	12	1598・1599・1600・1601・1602・1603・1604 a・1605・1606・1607・1608・1609	
SI-69	H・I-5	円形	HD Ⅲ類	5.04	5.04		N-74.6°-E	8	1629・1630・1633・1634・1636・1637・1642・1643	
SI-70	J・K-5	楕円形	HC Ⅲ類	5.88	4.68		N-43.1°-W	9	1685 b・1689・1691・1692・1693・1696・1697・1806 b・1807 a	
SI-71	J・K-4	円形	HD Ⅲ類	4.44	4.08		N-46.7°-W	10	1699・1670・1677・1679・1867・1869・1876 b・1899・1904 b・1905	
SI-72	I・J-6・7	円形	HD Ⅲ類	10.80	10.20		N-62.6°-E	13	1620・1701 a・1703・1705・1706 c・1737・1738 b・1847・1848・1889・1890・1891・1865	1701 b
SB-73	D・K-5	長方形	I B Ⅰ 類	3.90	3.18	12.21	N-51.8°-E	3	1945・1961・1845	
SB-74	E-5・6	長方形	I B 2 a 類	6.00	3.96	19.90	N-80.2°-E	6	970・975・986・1005・1031・1025	
SB-75	F-4・5	六角形	I A Ⅰ 類	3.48	2.94	7.58	N-83.5°-W	6	1224・1228・1239・1242・1247・1251 a	
SB-76	G-4・5	六角形	I A Ⅰ 類	3.00	3.00	7.37	N-60.0°-W	6	1492・1495・1501・1511・1512・1853	
SB-77	H-4	—	—	—	—	—	—	—	—	
SB-78	J-6・7	長六角形	I A 2 b 類	7.44	3.84	26.40	N-26.1°-W	11	1715・1716・1733・1738・1740・1751 a・1955・1956・1957・1959・1959	
SB-79	I-7 J-6・7	長六角形	I A 3 a 類	10.14	4.08	39.16	N-32.8°-W	10	1709 b・1714・1717 b・1722・1725・1730・1734・1741・1751 c・1753	
SB-80	I・J-6・7	長六角形	I A 3 b 類	11.88	4.20	46.08	N-26.2°-W	13	1706 a・1709 c・1712・1717 a・1721・1728・1732 a b・1739・1740 a・1790・1751 b・1754・1962	
SB-81	J-6 I・J-7	長方形	I B 3 a 類	9.36	3.60	32.67	N-30.9°-W	8	1709 c・1711 a・1718・1723・1731・1742 b・1748・1754 b	
SB-82	F-10	長六角形	I A 2 a 類	(3.96)	(2.64)	9.30	N-84.0°-E	6	204・235・240・243・344・345	
SB-83	F-6	長六角形	I A 2 a 類	7.68	3.36	22.22	N-35.5°-E	8	1306・1312・1323・1327・1329・1338 a・1341・1347	
SB-84	E-8・9	長六角形	I A 3 b 類	8.28	4.14	28.41	N-14.3°-W	13	632・639・645・649 a・652・654 b・657・660・662・664・665・666・1762	
SB-85	E・F-8	長方形	I B 2 a 類	5.58	3.84	21.35	N-17.9°-W	6	609・635・649 b・658・1759 a・1761	
SB-86	E-8	長六角形	I A 2 b 類	(6.00)	3.00	15.22	N-19.5°-W	7	631・637 b・641 a・651・653・656・1765 a	
SB-87	E-8	長方形	I B 2 a 類	(4.68)	2.64	12.18	N-10.9°-E	5	627・634・641 b・649 c・649 c・1765 b	

### 3) 土坑類

本遺跡から発見された人為的な穴類の中で、柱穴以外について土坑とした。その合計数は全遺構数2119基のうち25基を数え、占める割合は1.18%と僅かである(有効遺構総数1721基を母数とすれば1.45%)。これら土坑類とは、墓坑、貯蔵穴、および土器埋設坑以外に用途不詳の人為的な穴があり、そして若干の自然的生成の穴が含まれている可能性がある。また、土層断面の観察において、柱痕を検出しつつも、単独的に組合わさる柱穴がなく、完掘形態から土坑に含めたものがあるが、これらについては柱穴との分類別けが完璧とは言い難い事情を含んでいる。

本項では、ある程度用途や目的等が類推できるものを中心に述べていくこととする。各説的に述べる種別としては、貯蔵穴、墓坑、土器埋設坑、その他である。

#### a. 貯蔵穴

SK-932土坑 今回調査した5,000㎡の調査区内で、貯蔵穴と大まかに類推できた事例は、SK-932土坑の1基だけである。本貯蔵穴は、廃棄場に近い調査区西側のD6-19グリッドから検出された。平面形は楕円形を呈し、断面の形状は、底面がほぼ平坦で、壁の下部は直立的に立ち上がるが、開口部においてやや外側に開く。規模は、長径1.12m、短径1.02mを計り、深度は21.5cmとやや浅い。

覆土の斯も割りは、長軸に沿うほぼ南北のラインで行った。土層の堆積状況は、概して薄い土層がおおむねレンズ状に堆積する。分層された層序は、第1層から第9層まで、さらに細分された結果、合計15層となるが、発掘にあたっては、各土層の特徴等から3層に大別して作業を行い、出土遺物についても分層して取り上げた。上層は、第1層から第4層まで、暗褐色を呈し木炭の含有量が少ない土層群である。中層は、第5層から第6層まで、木炭の含有量が多い土層群である。そして、下層は、第7層から最下層である9層までとし、地山土である灰色粘質土等を含む埋土状の土層群である。下層群については、その上層位を占める第7層群に地山土の含有が多く、本土坑の使用過程に伴う土砂、もしくは当該土坑の廃棄にあたって、埋め戻しに供された土砂である可能性が高い。これに対し中層位の土砂は、木炭等の炭化物を多く含有していることから、廃棄後の窪地内へ残滓等が廃棄される過程で生じた土砂である可能性が高い。上位を占める上層部についても、炭化物等の含有は少ないが、土器片の包含が多いことから、これらも廃棄行為に伴う土砂と廃棄物の堆積とすることができる。これら覆土が堆積する時間的経過については、出土した縄文土器の諸特徴に大差がなく、ほぼ南三十稲場式期新段階の前半(第Ⅳ期)に相当しており、土器型式で示せば一型式内で埋没していたとすることができる。出土した土器類は、細片ながら量的には多く、本遺跡では遺構内一括で把握することができる数少ない事例となっている。

当該土坑を貯蔵穴とする根拠については、これを証明する出土遺物はなく、確実とすることができる物証は何も得られていない。しかし、覆土の堆積状況が自然堆積のレンズ状を呈している事実は、当該土坑が埋め戻されることなく開口していたことの証であり、墓坑や柱穴といった類ではないことが明らかである。このため、貯蔵穴の可能性が最も高いと判断した。

なお、当該土坑の掘り込みについては、第2層や第5層の堆積状況から、遺構確認面の上位にあることが看取される。その差異についてはつまびらかにできないが、15~20cmほどと推定したい。また、本土坑と重複する遺構としては、北辺のSKp-931と南側にSX-930があり、共にそれらを切って掘削されたものである。

## b. 墓 坑

墓坑の可能性が高いと判断した土坑は、おおむね2カ所に数基程度のみとまりとして把握されている。まず第1地点は、調査区のほぼ中央部、遺構群密集域に接するG6グリッド南西側に所在する土坑群である(墓坑群A)。第2の地点は、K5グリッド杭近辺に所在する(墓坑群B)。このほかにも、墓坑の可能性を残す土坑類が存在するかも知れないが、上記土坑群を含め人骨片等の出土がなく、確証を得ることができなかった。

### 墓坑群A

本群を構成する墓坑は、SK-1352とSK-1446bの2基であるが、これらに近接するSK-1445も可能性は残されている。墓坑の可能性が高い2基は、互いに長軸方位を同じくしながら並列するもので、平面形態も隅丸状の長方形を呈している。ただ、SK-1445については、平面形が楕円形状を呈し、主軸方位が一致していない。

なお、SK-1352とSK-1446bの2基については、土壌のサンプリングを行ったが、分析は行っていない。

**SK-1352墓坑** 主軸方位はN-59.0°-Wを指向し、平面形は長方形を呈し、その規模は、長辺1.32m×短辺0.86m、深度0.50mを計る。

土坑内における覆土は、概して細かく分層され、第1層から第12層までがある。堆積状況としては、第1層から第6層まではビット状の落ち込みを呈し、上部は縦位を基調とした堆積をなす(覆土a群)。これに対し、第7層から最下層となる第12層は、地山土主体の明色土と暗色土が交互に堆積し、水平状ながら底面中央がくぼむレンズ状の堆積を見せるものとなっている(覆土b群)。覆土a群については、柱穴との重複である可能性を否定できないが、土坑プランの中央に位置し、同タイプの土坑であるSK-1446aでも、同じ状態で覆土a群が検出されていることから、本土坑に伴うものと解釈したい。そこで覆土a群形成の意味であるが、該期の縄文集落の場合、敷石住居や集石遺構など礫を多く伴う遺構が多く見受けられるのが一般的である。しかし、本遺跡では礫を伴う遺構が非常に少なかった。このため、覆土a群は有機物からなる何らかの物質が建てられていた跡、具体的には木柱が標として建てられていた可能性があるのではないかと考えられるのである。あくまでも可能性であり、検証は今後の課題として残されるが、墓標の存在を想定しておきたい。覆土b群については、地山土が多く含まれ、互層状態を呈することから、人為的意図的に埋め戻された土砂と考えられる。また、基本的には水平状を呈するが、中央部でくぼむことから、有機物の腐蝕による陥没した痕跡と考え、本土坑の意味も墓坑の可能性が高いと判断したものである。遺物には土器細片が少量出土しているが、時期等については判断できない。

なお、南側においてSKp-1353と重複するが、本土坑が新しい。

**SK-1446b墓坑** SK-1352土坑の北東0.7mに位置する。主軸方位はN-57.0°-Wを指向する。平面形は、長方形であるが、北西端部はSKp-1444の発掘によりプランの一部が歪められ、若干不整形となった。規模は、長辺1.32m、短辺0.92m、深度0.49mを計る。覆土は、第4層から第12層までの9層に細分される。第4層から第6層までが覆土a群、第7層から最下層の第12層までが覆土b群である。層序の状況等は、SK-1352とほぼ同じであり、やはり同様に理解される。底面の形状を見ると、南東端部において細く浅い溝状の窪みが確認されている。墓坑とすれば、板材等による木組み等があった可能性が考えられる。遺物は少なく、時期を判別できる資料はない。

本土坑は、上層位をSK-1446aに覆われ、北西端部にはこれより新しいSkp-1444が穿たれている。

SK-1445土坑 当初柱穴と考えていた土坑であり、やや大形の柱痕状の落ち込みを伴う。形状は楕円形を呈し、主軸方位はN-32.2°-Wを指向する。規模は、長径0.84m、短径0.64m、深度0.25mである。時期は不詳であるが、SK-1446aよりも新しい。

#### 墓坑群B

本群を構成する墓坑は、SK-1902とSK-1904aの2基（I群）、およびSK-1875a・SK-1879b・SK-1878aの3基の一群（II群）を合わせ、合計5基で構成される。II群はK5グリッド杭の位置に、I群はその東側に位置する。これら5基は、平面形が長方形もしくは楕円形を呈し、長軸もほぼ類似した方位を指向する。また、建物跡や住居跡としての柱穴の配列に属さないことなどから、墓坑の可能性が高いと判断したものである。

なお、SKp-1904bについては、住居の柱穴の可能性を考慮しているが、形態からすれば墓坑という考えも否定できない。また、I群とした2基、II群とした3基はすべて重複の関係にあるが、新旧の関係は把握できていない。

SK-1902墓坑 I群に属する土坑である。平面形は重複が著しく捉え難いが、底面形態からすれば、若干隅丸となる長方形と考えられる。南北両端の短辺に沿って、浅い溝状の痕跡が底面で検出されている。側面の当て板といった構造物の存在が推量される。規模は、長辺1.20m、短辺は推定で0.8m程度、深度は0.36mである。主軸の指向する方位は、N-20.0°-Wである。

出土遺物は少なく、時期を特定できない。

SK-1904a墓坑 SK-1902の東側において、過半を重複して構築されている。平面形は長方形を指向したような楕円形を呈する。規模は、長径1.12m、短径0.70m、深度0.58mを計る。長軸の方位は、N-8.6°-Wを指向する。SK-1902との新旧関係等については明らかにし得なかった。また、遺物はほとんど出土せず、時期等は不詳である。

SK-1875a墓坑 II群に属する。平面形は、重複により判然としなが、長方形を指向した楕円形と考えられる。底面の検出がうまくいっていない。規模は、推定を含めて長径1.08m、短径0.70m、深度0.45mを計る。長軸はN-19.0°-Wを指向する。出土遺物が少なく、時期は特定できない。

SK-1879b墓坑 II群では最大規模の土坑である。平面形はおおむね楕円形である。規模は、長径1.32m、短径0.92m、深度0.70mを計る。長軸はN-6.9°-Wを指向する。当初、柱痕の存在から柱穴と把握して調査を進めていたが、組み合う柱穴がなく、建物等の柱穴列がまったくくわがえないことから、墓坑の可能性が高いと判断した。柱痕については、断面の観察結果では底面に達していないことから、墓坑群Aに見られた覆土aと同じと考え、とりえず木柱等の墓標を想定しておきたい。

SK-1878a墓坑 やや小形の楕円形を呈する土坑で、SK-1878aの北東側に重複しつつ位置する。長軸が指向する方位は、N-21.6°-Wである。出土遺物は僅かであり、時期等は特定できない。

#### c. 土器埋設土坑

SX-1157土坑 深鉢形の縄文土器1点が正位に埋設されていた土坑である。土器そのものは二次焼成を受けたためか、残存状態が劣悪であり、復元することができなかった。このため、当該縄文土器が、土器埋設炉の炉体である可能性が考えられる。しかし、本土坑を中心とした住居は把握されず、炉跡と判断するには至らなかった。

土器を埋設するために穿たれた土坑は、平面形を円形とし、その規模は、直径0.52×0.46m、深度0.32

mであり、それほど大形ではなかった。断面の形状は、底面をほぼ平坦とし、壁の立ち上がりは、若干オーバーハンク状を呈し、開口部でやや不整形に開く。覆土は大きく二分され、土器内上層と土坑の上層は、地山の混土を基調に、木炭や焼土粒を多く含む同じ黒褐色土で充填されていた。このため、土器口辺部が露出していた可能性が考えられる。出土遺物としては、土器内中層位から礫が1点出土している。

なお、埋設されていた土器そのものは粗製土器であり、時期を特定することはできなかった。

#### d. その他の土坑類

土坑総数25基の内、貯蔵穴、墓坑、土器埋設土坑と判断された10基について、個別的な説明を行ったが、このほかに15基の土坑がある。上記以外については、1例のみ補足的な説明を述べるが、その他は巻末の「遺構観察表」に代えさせていただきたい。これは、土坑に限定されず、本遺跡の遺構のほとんどに言えることであるが、遺構内から出土する遺物が極端に少なく、しかもそのほとんどが細片もしくは小片で、残存状況が不良なもので占められていたことから、遺構と遺物を連携しながら特徴を見出せなかったことなどの要因がある。本遺跡における縄文集落の理解に対し、はなはだ不都合ではあるが、今後の課題の意味を込めておきたい。

S K-60土坑 調査区南側において、D11-12グリッドから検出された土坑である。平面形は円形、規模は、直径0.64×0.52m、深度0.41mである。断面の形状は、底面がやや窪み、壁は概して大きくオーバーハンクして立ち上がり、開口部は底面より狭まるものである。覆土断面の観察では、柱痕がなく、土坑と判断した。覆土は地山土の含有が多いものであり、上位からピット状に入り込む第1層から第6層は、第4層を除くと流れ込み状を呈する。底面には第7層がおおむね水平に堆積する。断面の形態は袋状を呈することから、貯蔵穴もしくはそれに類した目的を持つ土坑の可能性が考えられる。

#### 4) 廃棄場

本遺跡が立地する十三本塚の北台地は、その西側に西台地が連続していた。両台地の境界は、南北から切り込まれた小規模な沢であるが、南側の沢は、西台地から北台地の一部に切り込む形で削平され、旧状をとどめていない。北側の沢は、沢頭に近い一部が僅かに残存し、今回の調査区域の一部に取り込まれていた。本集落の廃棄場が確認されたのは、この北側から切り込む沢の右岸斜面である。調査区西縁において、やや張り出すように調査された区域に検出された廃棄場は、C6~7グリッドを中心とした位置にある。廃棄場は、遺構群の密集度や地形から当該地点を除けば他地点ではほとんど形成されなかったと考えられるが、ただ南側に入り込む沢にも同様な廃棄場が形成されていた可能性は十分にあり得そうである。

以下、廃棄場の状況について、発掘の状況、層序、遺物の出土状況などにわけ、その概要を述べる。出土遺物については、次章で取り扱うが、本遺跡出土遺物の9割5分以上は、この廃棄場からの出土品で占められる。

##### a. 調査の方法と調査状況

廃棄場における発掘作業等については、表土除去及び遺構確認段階で、大まかな範囲を設定した後は、多量に検出されている柱穴などの遺構群の調査を先行して進めることとし、作業を中断した。調査の再開は、調査も終盤に迫る平成7年11月10日となった。

まず、包含層の深さ、層序の把握をかね、A・B・Cとした3本のサブトレンチを設定した。出土する

遺物については、一括性が高い大破片類を若干残しつつ、ほか各トレンチで設定した1m間隔の小区と上層・中層・下層に分層し便宜的な取り上げを行った。しかし、廃棄場における包含層は厚く、斜面下方では深度が1mを超えても下面の検出に至らなかったことから、サブトレンチの発掘を一時中断する形で層序の確認作業に入った。この中途段階で把握された層序は、攪乱層を除くと18層に細分されたが、各層の諸特徴等から4層に大別することができ、出土遺物の取り上げについては、大別された4層に区分した分層発掘を行うこととした。

出土遺物の平面的な区分については、遺跡全体を覆うグリッドを基準とし、2m四方の小グリッドをさらに4分割し、1m四方に細分した最小グリッドを設定した。さらに出土状況から、一括的に廃棄された状況を見取することができる遺物群の塊を、一つの単位として捉え、これをブロックと称し、グリッドによる区分を超えた平面的な位置を確認することとした。発掘作業にあたっては、認識された層位にしたがって掘り下げを行ったが、しかし実際的な問題として層序の境界部分から出土した土器片等の取り扱いが層位的に上下するどちらの層と認識されて取り上げがなされるかは、微妙である。したがって、同じ層位で取り上げがなされた遺物群を、一線を引きいて区分し、廃棄場全体で統一的に理解することには無理が生じている。しかし、各最小グリッド単位で把握された遺物群の相対的な上下の層位の変化は、層位的に分層しつつ掘り下げた順番であり、個々の場面や個人への判断が異なっていたとしても、層位的な発掘結果とすることができる。これらの結果、一般的な遺物群は、最小グリッドを一つの範囲とし、4大別された分層で取り上げを行うが、集中出土した遺物群については、更にブロックとして把握されることとなった。

平成7年末までの発掘作業は、工事掘削面までの掘り下げを行ったが、セクションベルトの発掘などは残された。これら残務は、平成8年の3月から4月末までの補足調査で消化した。補足調査では、セクションベルトの詳細な分層発掘、Aベルトの南西側に残存する廃棄場包含層の発掘、そしてC6-19グリッド内における工事掘削面以下となる包含層の部分的な発掘を行った。C6-19グリッドにおける最下層の発掘は、昨年までの層序との正確な整合に不安があったため、層位の表記を変更し、独自した層位名で取り上げを行った。

以上の作業により、廃棄場斜面下方では、1.5mほどの深さまで発掘された。当該地点の発掘後の大穴は、調査終了後、工事着手に際し砂によって埋め戻された。

## b. 層 序

セクションベルトA・B・Cにおいて、それぞれ確認された層序18層は、4大別されて把握された。各層個々の土層註については、図版を参照願いたい(図版56・57)。ここでは、大別4層を中心に補足的に述べる。

第1層 縄文集落廃絶後、台地上から流出した土砂が堆積したもので、大半は廃絶後間もない段階で生じた可能性が高い。したがって、廃棄行為に伴う土砂ではないと考えられる。斜面上方での堆積は、斜面の傾斜が相対的に強いこともあってか薄く、大半は表土剥ぎ段階で除去されていた。下方部では1mを超える厚さとなる。B・Cベルトの状況を見ると、表土除去後の実態ではあるが、上面の傾斜がかなり緩くなり、特にCベルトではほぼ平坦となるまで厚く堆積していた。この事実は、対岸となる沢左岸の斜面が概して近接し、再堆積した土砂が流出しにくくなり、ほとんど埋め尽くされた状況を示唆しているものと考えられる。調査直前における地形でも、当該地点は緩やかな斜面であった。

遺物の出土量は少なく、出土している土器片も摩滅度が高い。土器の年代観では、時期的に新しいと判

断できる土器群も含まれているが、本遺跡で主体をなす土器群も少なくはなく、再堆積土層を多く含むものであった可能性を高めている。

第2層 廃棄場が機能していた最終段階の廃棄土層である。大形の土器片が出土するとともに、木炭・焼土や骨片のほか、地山土も多く含まれている。本遺跡で概して新しく位置づけられる土器群は、廃棄場斜面の上方でなく、調査区壁に近い下方部から出土する比率が高い。このような状況からすれば、斜面上方部は度重なる廃棄行為によりほとんど埋め尽くされ、それらより外側となる斜面に廃棄がなされたことを示唆している。

第3層 地山土の流入が少なく、暗色を強める。大形の土器片が数多く出土した。本層が分布する範囲は狭く、部分的である。このため、本層出土の遺物群は、概して不安定と考えられる。また、本層が分布しない区画では、第2層と第4層が直接触れ合うため、遺物の帰属は要検討である。

第4層 廃棄場の最下層を形成する。第4 d層にはやや大粒の木炭と焼土が多く含まれており、廃棄土層とすることができるが、当該層の下面は地山層に達する。この事実によれば、旧表土層の存在が不確かとなり、地山面が露出していた状況の中で、廃棄行為が開始された可能性を示すことになる。

C6-19下層部の土層群 補足調査で発掘した廃棄場下層部の層序である。セクションベルトA・B・Cの各層との対比はある程度可能であり、図版の土層註にもその対比を示したが、すべて確認が取れているわけではない。また、本層群下部の層序は、サブトレッチの発掘面より深くなり、セクションベルトでは未確認の下層群となる。遺物の出土量は少なく、集落内における一般的な居住に伴う廃棄場というより、集落の開闢に伴う廃棄行為等の可能性も考慮する必要がある。

### c. 遺物の出土状況

11月10日から再開された廃棄場での調査は、サブトレッチの発掘および土層観察を経て、断面図の作成が終了し、実際的な分層発掘に着手できたのは11月21日となった。まず第1層の発掘を開始した。しかし、天候に恵まれず、空撮準備等のため人手を割けなかったなどの事情により、第2層上面における遺物出土状況の写真撮影が実施できたのは12月14日となった。各層上面等における遺物の出土状況の写真撮影は、天候のほか時間的制約等が大きかったことから、以下の層では行っていない。

第2層上面における遺物は、概して多くの出土遺物が得られ、ブロックとして把握した集中出土地点は、第1・4～12・24ブロックとした11カ所であり、遺物量が少なく実態があまり明確ではないが、第15・16・20・27ブロックの4カ所も第2層上面を主体としていたと考えられる。第3層出土として捉えられたブロックは、第13・14・17～19・21・23・25・26・29ブロックまでの10カ所である。実態が不明なブロックとしては、第22ブロックがある。第4層としたブロックは、第28・30～33ブロックとした5カ所である。

なお、図版58-下図で示したブロック図のうち、第2・3ブロックはトレッチ内の一括遺物である。

各層におけるブロック数は、遺物出土量とほぼ正比例するが、最もブロック数が多いのは第2層であり、廃棄場内において比較的広い範囲に分散している。第2層における実態は、上層位であることによってある程度理解できるが、散布範囲が狭い第3層や、廃棄行為初段階の遺物と考えられる第4層の遺物ブロックまで、斜面中位以下から把握されており、上位での存在が不明確な点は課題を多く含んでいる可能性が高い。これら調査で把握された各ブロックが、時期的にもまとまりを見せるのか、あるいは層別の把握が妥当であったのかは、各遺物群の検討によらなければならない。これらの諸課題は、遺物の検討を完了後、改めて検討を加えることとした。

## 5) 風倒木痕

風倒木痕とは、その字句のごとく大風など外的な要因により、立木が強引に倒された木根の痕という意味である。倒れた痕跡として残された穴のパターンは、いくつかに分類することができるが、事例の多くは、表土であった暗色土が地山層より下位に堆積すると言う、所謂逆堆積現象を伴う場合である。この現象とは、大地に食い込んだ立木の根が、地山土を抱き込んだまま横転し、その窪みに表土の土砂が流入した結果と考えられている。したがって、同様な現象は根こそぎ倒された立木であれば、大抵は生じるものである。しかし、小規模な場合、その痕跡もやはり小さい。地山土の巻き込みが小さければ、木根に巻き込まれる地山土の量は少なくなり、必然的に小規模となった穴は、それだけ検出が難しくなる。つまり、遺跡の調査では、一定程度の規模を持つ立木だけが、この痕跡を確認できるものと言える。

当該縄文集落の場合、大規模な風倒木痕としては、SX-1666とSX-1672とした対をなす不定形な落ち込み1例を挙げることができる。両遺構を合わせた最大径は、北東-南西でおおよそ10mを計ることから、相当量の土砂が巻き込まれたことになる。小規模な事例は、調査区内における土坑状の落ち込み、特に不整形な場合、風倒木痕である可能性が高く、遺構群が密集する区域にもいくつか見出すことは可能である。そして、大規模な事例は、意外と遺構群が密集する区域にはなく、外延などに分布する傾向があり、本遺跡の場合でも、廃棄場や遺構密集域から最も離れた調査区東端で発見されている。

ところで、風倒木痕の時期の認定についてであるが、原則としては木根痕内から出土した遺物が判断基準となる。しかし、風倒木痕から出土する遺物とは、当該痕跡の生成プロセスから見ても、無意図的な遺物に過ぎず、しかも表土等の流入に際し流れ込む偶然性の高いものである。そして、風倒木痕内に遺物が流れ込むタイミングとは、その立木が横転した後のことであり、その立木にとって終焉を迎えた段階以降と言うことになる。

一般的な遺構の場合、意図的に埋納された遺物があれば、その遺物が製作された直後以降の時期であり、特別な例外を除けば、ほぼその遺物の年代観で押さえることができる。また、柱穴など意図的な遺物が普通は出土しない遺構の場合でも、それら混入遺物の時期以降として、年代の上限は押さえることができる。しかし、風倒木痕の場合、たとえ縄文土器が出土したとしても、その場所が縄文時代遺跡であれば、倒れた時代が古代や中世であっても、縄文土器が流れ込むチャンスがあり、しかもその場所が縄文時代以降に人々の営みがなく、遺物も残されていなかったとしたら、流れ込むことのできる最新の遺物が縄文遺物となってしまうかかわないのである。このように考えてみると、たとえ出土遺物があったとしても、時期を限定できないことになる。

さらに、風倒木痕の場合、その立木の終焉段階以降でなければ遺物は混入しないが、クリなど有用樹木であれば、縄文人にとって必要なのは終焉以前までであり、大木ともなればかなりの年代幅を持つことになる。風倒木痕を形成した樹種を特定することすらできない状況下では、これら樹木と縄文人との関わりを想定することは極めて困難であると言わざるを得ない。

しかし、本遺跡における大規模な風倒木痕の事例は、1例ながら遺構密集域を離れたような位置にある。そして、落ち込み内からは縄文土器などが出土している。覆土内の暗色土は、当然ながら他遺構の覆土に近似したものである。これらの状況からすれば、当該風倒木痕は、当該縄文集落との関わりがあった可能性は指摘できるのではないだろうか。遺構密集域が主たる居住空間とすれば、その空間内には大きくない立木が存在する程度であり、大木はその外周にあった景観を現状では想定しておきたい。

## 4 中世・近世以降の遺構

中世以降の遺構について本節でまとめたいが、中世遺物は今回の調査で確認されておらず、ほとんどは近世以降、近現代の所産と考えられる遺構群が主体である。以下、焼土坑と溝跡に大別し概略を述べたい。

なお、規模や法量等については、巻末の遺構観察表に代えたい。

### 1) 焼土坑

**位置と分布** 焼土坑とは、壁や底面が火熱によって焼けて赤色化し、覆土内に木炭層が顕著に残る土坑である。本遺跡では合計6基を検出したが、SK-1745と重複するSK-1746aもその可能性が高い。これら焼土坑群の分布域は、調査区東端の南側隅部分に集中する。位置的には、偶然ながら縄文後期の建物跡X群の周囲に接して分布していた。当該地点は、西側から伸びてきた尾根道が、SK-1755とSK-1745の間を通過して、SK-1720の南側を経て三叉路に至る場所でもある。分布域の状況からすれば、これら焼土坑群はさらに東側への広がりが予想できる。焼土坑が群集して検出された事例は、本遺跡周辺域の遺跡で多く、尾根坂遺跡のほか〔柏崎市教委1996〕、尾根を通る古道の際に構築されていた事例としては、横山東遺跡群内の雨池遺跡が確認されている〔柏崎市教委2000〕。

**分類** 平面形態は、円形（A類）と楕円形（B類）の2種に大別できる。楕円形状を呈する焼土坑は、SK-1702とSK-1720の2基であり、ほかの4基はすべて円形である。したがって、円形が主流と言うことはできる。しかし、円形プランの形状にも若干不整形な乱れがあり、楕円形の形状にも同様な不整形な乱れが認められることから、後者は円形プランを意図しつつもルーズに作られた結果に過ぎないのではないと思われる。ただ、藤橋東遺跡群のうち、京ヶ峰遺跡では長方形を呈した焼土坑が調査されており〔柏崎市教委1995〕、長方形態あるいは楕円形状の焼土坑は存在する。このため、本遺跡の楕円形焼土坑は、長方形態がルーズになった結果である可能性も否定できない。しかし、いずれにしろルーズに構築された可能性が示唆されることになるが、この事実が直ちに変遷観と結びつかは早計に過ぎ、慎重な検討が必要である。

**断面の形状**については、底面が比較的平坦で広く、壁の立ち上がりが直線的でメリハリのある「たらい」状形態（I類）と、底面が概して平坦であるがやや凹凸があり、壁の立ち上がりが緩やかなもの（II類）、そして狭い底面中央がやや窪み、緩やかに立ち上がって壁に至るもの（III類）の3類に分類できる。

なお、焼土坑の分布と分類された形態でのまとまりなどは、特に顕著ではない。

**遺構各説** SK-1702はB I類に分類されるものである。底面からは縄文後期の柱穴も検出された。壁の焼土化はそれほど顕著ではなく、底面はほとんど焼けていない。覆土下層は木炭層で覆われていた。SK-1704はA II類に分類できる。浅く、壁の残存が僅かで、焼土化の状況が分かり難いが、焼土の痕跡は少ない。覆土に含まれる木炭粒も微量である。SK-1719は、A III類とした。底面の焼土化はほとんど見受けられないが、壁では若干赤く変色している状況が看取できた。覆土内における木炭粒は顕著でない。SK-1720はB II類とした。本土坑の深度も浅く、壁の状況については見極めにくい。中央に暗色土が貫入する。底面には若干の木炭粒を含む層が薄く覆う。底面・壁ともに焼土化は顕著ではない。SK-1745はA III類に分類される。今回調査した焼土坑の中では最も深度があるが、底面の面積は狭い。底面中央における焼土化は顕著ではないが、壁は概して良好に焼土化する。覆土下層は木炭層で覆われ、その上層に

も木炭や焼土が顕著である。この上層位において、肥前系の染め付け砕破片が出土しており、17世紀代後半～18世紀前半頃の所産とできそうである。人工遺物が出土した土坑は、本遺跡では唯一である。SK-1755は、A I 類に分類される。ただし、遺構確認面での平面形は円形であるが、焼け爛れた壁中位の平面形は方形を呈しており、概して丁寧に構築された焼土坑ではないかと思われる。底面には薄く覆う木炭層が堆積し、上層位でも焼土粒の含有が多い。

## 2) 溝 跡

**分類** 今回の調査区内から検出された溝類は、不連続のものや交差するものなどがあって計数が難しいが、およそ20条となる。これら溝類は、遺跡内でのあり方と機能とによって大別が可能である。まず第一として掲げられる溝類は、道路に伴う溝、つまり側溝的な意味合いを持つ溝類である。これを溝I類とする。次いで掲げられる溝類とは、方眼を組むようにして散在する小溝群である。おそらく土地利用との関わり、あるいは土地区画といった意味合いを持つものであり、これらを溝II類とする。

これら溝類の所属時期については、遺構に伴う遺物がほとんど皆無であったことから特定することは難しいが、覆土が柔らかく締まりに乏しいものがあることから、近現代を中心とし、近世に至るものは少ないものと見られる。

**分布と配置** 道路に関係するとした溝I類は、7グリッドから8グリッドラインにかけて、おおむね東西に延びる一群である。途中が欠如していることから、西側をA群、東側B群と便宜的に呼称する。

溝II類は、調査区南半に分布する一群と、東北部の緩斜面に広がる一群があり、前者をC群、後者をD群としたい。溝II類の分布は、東西の道路で区切られる南側と、その北側を空白域としつつ北辺部に広がる傾向が見受けられる。

以下、大別した分類と群別にしたがって、若干の説明を加える。

**溝I類** 道路に直接関わる溝類としたものである。まずA群としたSD-594とSD-595については、図版48でも示したように、新旧2本の溝跡が重なっていたもので、平面図的には深いSD-594が図化されている。SX-590の浅い落ち込みについては、SD-594がSX-590より古いことになっているが、一連の遺構であった可能性が残されている。当該溝2条は、ともに壁の立ち上がりがしっかりし、深度も深く設定された溝となっている。これら溝の北側には、SX-1440としたテラス状の平坦地が削り出されているが、この間には1.5mほどが帯状に掘り残されている。おそらくこの範囲が旧道であったと考えられる。したがって、SD-594とSD-595とは、南側からの雨水を道路敷きから排除するとともに、道路範囲の境界を明確に設定する意図を持っていたと考えられる。また、当該側溝を改修していたことはSD-595の存在で明らかであり、断面形態とともに当該地点の重要性が示唆される。B群についても、SD-1366とSD-1364で明示されるテラス状の平坦地との間に道路が想定できる。そして、SD-1366は北側からの雨水を排除するとともに、道路範囲と土地区画を明瞭にすることを意図したものと考えられる。A群・B群とも斜面に近いところで設定された道路側溝である点は示唆的である。

**溝II類** C群は、C～F-8～11グリッドに分布する。一定方位を指向していることがうかがわれるが、東西道路が基準にされていたと考えられる。D群は、G～J-4～5グリッドの範囲に検出された。斜面の傾斜がC群よりきついためか、区画は小さくなっている。これら溝群は、畝耕作などともない、耕作土の流出を防ぐ意味合いで設定された可能性が考えられる。これら溝群内からは、遺物は出土せず、時期を特定できないが、覆土は概して締まりがなく、現代もしくはそれに近い時期を想定せざるを得ない。

## IV 遺 物

十三本塚北遺跡から出土した遺物は、縄文時代の土器類を主体として、このほかに土製品類や石器類が主な種別となる。縄文時代以外では、近世の陶磁器類がわずかに出土した程度である。本章では、時代別ではなく、種別に分けて遺物の概要を記述したい。项目的には、縄文土器、土製品類、石器類である。

なお、近世の陶磁器類については出土量が僅少であり、紙幅の関係もあって記述を割愛した。

### 1 縄文土器

縄文土器は、本遺跡出土遺物の大半を占める。その出土量は、縦65cm×幅40cm×深さ18cm（内測）の木箱に換算しておよそ116箱分となる。個々の個体を詳細に記述するには紙幅の制約が大き過ぎるため、分類による概括な説明にせざるを得ない。このため、土器個々の各説は割愛し、個別については、巻末の遺物観察表を参照されたい。

#### 1) 出土状況と資料の提示

**出土状況の概観** 縄文土器の出土位置は、廃棄場と遺構内、および包含層出土の大きく三大別が可能である。土器類の大半は、前者の廃棄場から出土し、後二者からはかなり少なかった。この場合の後二者とは、台地上の平坦部において遺構が構築される居住域であり、つまりは居住域からの出土量が僅少であったことになる。この要因の一つとして、表土および包含層の掘削を重機に頼り、結果的に包含層内の遺物を正確に回収できていなかったことを挙げることができる。この点を否定することはできないが、包含層から出土する遺物量が少ないという事実は、確認調査等で把握されていたことである。また、今回2,000個を超える遺構を調査しながら、遺構内一括で捉えることができる資料に、ほとんど恵まれなかったということも事実である。そして、柱穴を主とする遺構内からの出土遺物が少なかったということは、覆土に混入すべき遺物が少なかったことの結果と受け取れることもできる。これらのことからすれば、遺構が分布する居住域には、当時も遺物が散乱するような情景ではなかったことが指摘でき、衛生的な居住環境への配慮をうかがうことができる。

これに対し、廃棄場とした遺構密集域に接する沢頭の斜面からは、大量の土器類、石器類等が出土し、小片ながら骨片も散見された。出土した土器群の量比としては、全体のおよそ95%を占める110箱におよんでいた。これは、明らかに生活上生じる残滓等の廃棄物が大量廃棄されたことを示し、出土量の多さとともに、一カ所に集中していた事実は、縄文人の廃棄に対する観念の表出とすることができる。

**土器資料の提示と記述** 本遺跡から出土した縄文土器は、前述のごとく遺構内一括等で捉えられる事例が少なく、大半が廃棄場から出土した。資料の掲載にあたっては、各土器群の出土した位置から遺構内と廃棄場に大別することとした。まず、遺構内出土土器群については、一括的に把握することのできた2遺構（SK-932、SKp-1734）について、各遺構毎に提示し、その他の遺構については、数量的なまとまりがないため、実測図と拓本に別掲掲載した。また、小片資料については、拓本のみ参考資料として提示した。そして、廃棄場出土の縄文土器については、発掘段階において、1m四方に区分した範囲内を層位的

に取り上げたものであるが、図化資料となると量的なまとまりに乏しい小区もあることから、今回は2m四方の小グリッドにまとめ、層位順に提示することとした。

なお、整理作業における進捗状況の事情から、各小グリッド別の掲載にあたっては、実測図主体と拓本主体の2部構成となっている。また、1m四方の小グリッド細分区や、ブロック別に取り上げた番号については、巻末遺物観察表に表記した。

## 2) 土器群の大別と群別

**大別の概念** 本遺跡から出土した土器群は、時期的には中期(略号:C)と後期(略号:K)に大別され、さらに在来系(略号:Z)と外来系(略号:G)に区分することが可能である。在来系の土器群とは、本遺跡において主体をなす土器群であることを意味し、時期的な変遷を追うことが可能な存在であり、短期的に流入した客体的な土器群については、外来系の土器群として認識するものである。在来系土器群は、文様等の諸特性からいくつかの群に区分することができる。また、外来系については、他地域の土器型式として認識することができ、それぞれの土器型式毎に群としてまとめることとした。

**中期の土器群** まず、中期については、北陸系である新崎式・上山田式系の土器群(M群土器)があり、このほかに東北系の大木10式系土器群(N群土器)と関東系の加曾利EIV式系の土器群(O群土器)とがある。これらはいずれもその出自から、在地において生成した土器群とは言えないが、新崎式系の土器群は越後地域において主体を占め、在地化した主体的な土器群であることからすれば、これを在来系土器群として把握する。しかし、大木10式系や加曾利EIV式系の土器群は、在地において主体をなすに至らず、あくまでも客体的な存在として影響を与えていたものとして外来系の範疇で捉えたい。

**後期の土器群** 本遺跡で主体を占める土器群が後期の縄文土器であり、出土土器群のほとんどを占めることから膨大な量が出土したことになる。在来系の土器群としては、在地で生成した三十稲場式系の土器群(A群土器)のほか、小仙塚類型の信州系在来型土器群(B群土器)と沈線文系土器群(C群土器)、そして沈線文系土器群から派生した多条細沈線文系土器群(D群土器)、また在地的な半粗製土器として口縁部に指頭圧痕が施される特徴的な土器群(E群土器)を設定した。在来系として本来的な土器群はA群土器であり、B群土器とC群土器については、新たに流入し土着した土器群である。しかし、前述したように、在地における該期の土器様相を語るには抜きにできない存在であり、その後D群土器を生成することからしても、在来系土器群の範疇にあるものとしておく。なお、B群土器の呼称名については、現在その名称が検討中であり、今回は単に信州系土器群と便宜的に呼称する。

外来系土器群としては、北陸系の気屋式系土器群(H群土器)、東北部系の綱取式系土器群(I群土器)、関東系の堀之内1式系(J群土器)と同2式系(K群土器)の土器群が把握されている。H群土器は小片で出土量は極めて少ない。これに対し、東北部系としたH群土器は意外に目立つ存在であり、当時における地域間交流の強弱をうかがうことができる。関東系としたJ群土器とは、堀之内1式土器を念頭に置くものであるが、当該期の土器型式

	在来系土器群	外来系土器群
中期	M群:新崎式・上山田式系	N系:大木10式系 O群:加曾利EIV式系
後期	A群:三十稲場式系 B群:(仮称)信州系 C群:沈線文系 D群:多条細沈線文系 E群:口縁指頭圧痕文系	H群:気屋式系 I群:綱取式系 J群:堀之内1式系 K群:堀之内2式系

第5表 土器群の大別と群別

は基本的に堀之内1式土器で構成されているものであり、原則的にはB群・C群・D群、およびI群についても、広義の意味では堀之内1式土器の範疇にある。したがって、J群土器を抽出し単独で設定することは、余り意味をなさないかも知れないが、該期における関東的な土器群であって、前述した土器群内に含まれないものによって、便宜的に示すこととしたい。

該期の土器群としてはこのほかにF群土器とG群土器、およびL群土器を設定した。F群土器は、半精製あるいは半粗製・粗製土器を一括したものであり、またG群土器も底部破片を一括した。したがって、これらには中期の土器が含まれる可能性を残し、かつ前述した各土器群のうち外来系土器群の一部などを内包しているものである。また、L群土器は、群別に至ることができなかったものなどを一括したもので、その他の土器群である。なお、I群土器とした綱取式系という名称については、いくつかの課題が含まれている。今回は、東北南部、特に宮城県南部から福島県域といった地域的な土器群を指し示す意味で便宜的に使うこととし、内的な問題は今後の課題とし、後地での検討を期待したい。

### 3) 焼成と色調と胎土

焼成と色調 焼成は、遺存状況によっても判断が左右される場合がある。このため、観察表には焼成具合と遺存状況の2項目を合わせて記載した。各群によっては、遺存状況と焼成具合がともに良好な場合もあるが、大概はやや焼成が甘く(○～△)、摩滅を受けて遺存状況がやや不良なもの(○～△)が一般的である。ただし、J群やK群といったミガキ調整が多く施される土器群では、概して良好なものが目立つ。色調は、焼成具合に大きく左右されるとともに、胎土中に含まれたさまざまな物質の化学変化等によっても変異することが考えられ、同じ条件によって焼成されたとしても、色調が異なる場合を否定できない。

胎土と混和材 胎土については、焼成や色調に左右されにくい混和材に注目し、それぞれの量比を視覚的に判断して観察表に記載した。注目した混和材とは、砂粒、白色土粒、橙色土粒、浅黄橙色土粒、褐色土粒、黒色土粒、白色岩粒、金雲母、黒雲母、繊維、石英を主要とした11種であり、このほかに花崗岩や安山岩質の岩粒、および黒色岩粒と火山灰なども気が付いた範囲で記載したが、後者の黒色岩粒や火山灰などについては、全てを網羅できていない。

砂粒は、当該土器群において最も一般的な混和材であり、大半の土器胎土に含まれている。これら砂粒の構成物を観察すると、多くの種別と構成比率等に差異が認められ、いくつかに類別することが可能である。砂粒の構成比は、土砂の採取地あるいは生産地の同定に有効と考えられるが、これらの分類を行うには時間的な制約や煩雑さもあって断念し、今回は粒径により大粒・中粒・細粒に3細分するのみとした。

白色岩粒については長石の可能性があり、ガラス質の石英とともに、砂粒の構成物でもある。しかし、前者は土器を観察すると目立つ存在であり、またやや種多なものが含まれている可能性を含むことから、砂粒とは分離し色調による分類で表記したい。同様なことは、石英としたガラス質の粒子についてもいえるが、胎土中にガラス質の粒子が大量に含まれ特に目立つ個体が存在することから、このような事例に限り別枠で表示したものである。

土粒としたものは、色調により上述のとおり5種に区分した。これらの多くは、土器片の破砕粒や焼土粒等の可能性が高いもので、このほかに自然界で生じたラミナなどの軟質な酸化鉄分の粒子と考えられるものがある。土器粒と考える粒子の色調については、土器粒そのものの焼成具合による色調と、これらを混入した生地から作られた土器の焼成具合による変化などが複合しており、色調による分類が妥当であるのかは難しい問題が含まれている。また、色調で分類した各土粒それぞれの正体については、十分な吟味

には至っておらず、この点は今後の課題としておきたい。

金雲母と黒雲母については、その存在が目立つものについて特に注意した。繊維については、若干の砂粒等を含むが、土器そのものが軽量で、土器断面に気泡状の隙間がうかがえるものについて、繊維包含と認定したものである。

土器の胎土中に意図的に混ぜられる混和材とは、土器製作者の個人的な恣意により選定されていたと見るより、その製作者が属する集団の土器作りに伴う流儀の一つである可能性が高い。したがって、これら混和材抽出の意義とは、産地同定を主眼にしている胎土分析が、土器そのものの移動から地域間交流等の解明を目指していることとは観点を異にし、縄文土器の製作者たる各単位集団の存在、あるいはそれら集団の地域内移動など縄文人そのものの動きを見極める手立てとするものである。今回は十分な分析を行うには至っていないが、観察表作成の意図はこのような課題取り組みの一步でもある。

#### 4) 中期縄文土器

中期の土器群には、在来系としたM群の新崎式・上山田式系と、外来系であるN群の大木10式系、およびO群の加曾利EⅣ式系の3群が把握されている。在来系としたM群は中期前葉から前半の土器群であるが、外来系のN群とO群は両者共に中期末葉を中心としており、中期後半期は空白期を隔てていることからもうかがわれるように、本遺跡に対する関わり方、あるいは性格が異なっている可能性が高い。また、把握された土器は、主に精製か半精製品に限られ、出土量も少ないが、粗製土器についてはF群の中に分類されている可能性がある。以下、各土器群の概略については、量的には少ないため、器種等の分類は特にならず、羅列的に概要を述べるにとどめたい。

##### a. M群土器：新崎式・上山田式系土器群

出土量そのものは数点という単位であり、この時期において当該台地に集落が形成されたというわけではなさそうである。特に、本遺跡の南にある十三仏塚遺跡の主体的時期が、中期前半から中葉にかけてであることからすれば、その広がりや関わりというニュアンスで捉えざるを得ないであろう。

1761は新崎式の深鉢形土器の破片である。文様構成等からすれば後半期の所産と考えられる。2306は、新崎式の新段階から上山田式まで下る可能性を持つ鉢形もしくは深鉢形土器の破片である。両者は共に廃棄場の第4層から出土しており、後世の流入と言うことではなかったことがうかがわれる。

##### b. N群土器：大木10式系土器群

確認された土器片は僅かに4点ほどであるが、时期的に併存するO群土器との峻別が困難なものが含まれ、また粗製土器類についてはF群に分類されている可能性がある。器種としては、深鉢と鉢形土器が主体となる。深鉢形土器の2点(2201・2215)は、ともに微隆起線文が施されるもので、2201は縦位の微隆起線文の区画内に、斜縄文を縦位交互に施している。2215は胴部上半の破片である。鉢形土器の732は、器面を概して平滑に磨く。1138については、胴部の器形がかなり影らむものとなるが、特異な壺形土器などの可能性がある。

##### c. O群土器：加曾利EⅣ式系土器群

N群土器より若干出土量が多くなるが、10点に満たない。器種は、口縁部が強く内弯したキャリパー形

を呈した深鉢形土器が主体となる。典型的な事例は、1314と2045の大小の深鉢であり、2073・2340も同形である。2200は口縁部が内湾しない。文様としては、加曾利EⅣ式系で特徴的な沈線区画と磨消文が施された事例が多いが(1314・2045・2073・2302)、微隆起線文が施されたもの(2200)などがある。なお、長い雨垂れ状の短沈線文が施されたもの(2216・2217)については、万塚寺林183土城出土例があり、後期初頭の可能性を持っている。

## 5) 後期縄文土器

後期の縄文土器は、A・B・C・D・E群とした在来系土器群と、H・I・J・K群とした外来系土器群があり、このほかに、大半が在来系と判断される半精製・粗製土器群のF群と、底部を一括したG群がある。本節では、鉢形・深鉢形土器、碗形土器、壺形土器、注口土器、蓋形土器(以下、「形土器」については、煩雑を避けるため省略する場合がある)の器種に別け、それぞれの器種にしたがいつつ、器形の分類を中心にして述べる。破片類については、文様要素を取り入れながら概観する。

### a. 鉢形・深鉢形土器

本遺跡から出土した縄文土器の大半は、鉢形もしくは深鉢形の形式をとる。これらの中でも在来系としたA・B・C・D群は特に出土量が多く、各土器群により微妙に器形が異なることから、各群別に器形分類を試みることにした。また、鉢形と深鉢形の分別は可能であるが、文様の要素等では互いに共通していることから、今回は両者を一括的に取り扱うことにした。なお、記述の順序については、まず在来系の各土器群を述べ、その後、外来系の各土器群について、若干の説明を順次加えることにしたい。

#### ① A群土器：三十種場式系土器群

本土器群は、基本的には三十種場式土器であるが、これらと直接的な系譜がたどれ、形態的な特徴を残している土器群、および三十種場式定型化段階の土器群で、三十種場式の範疇内で理解することに一部議論を残す最古相の一群を含めている〔田中1999〕。A群土器の分類は、各器種別に器形の細分を重視した分類を試みたが、その視点の中心を本群で最も特徴的な橋状把手とした。このため、器形分類の原則を一部逸脱している場合があるが、これらの解消等については、今後の課題としたい。

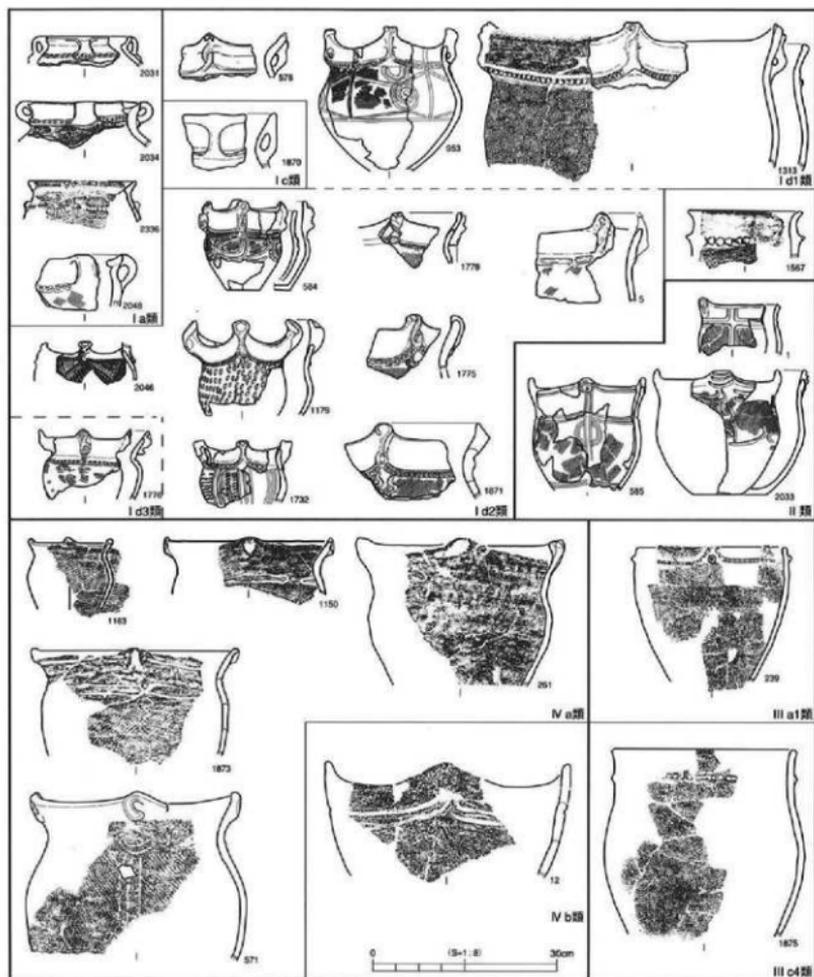
鉢形・深鉢形土器については、大きく6分類とした。第Ⅰ類は、橋状把手を特徴とする一群であり、第Ⅱ類はそれがなく外来系の要素等を多分に含んでおり、特にB群土器の影響が若干認められる。第Ⅲ・Ⅳ類は、半精製・半粗製の土器群であり、第Ⅴ類は磨消縄文など中期末的な様相を残す一群を一括した。また、第Ⅵ類には、その他の所属等が明らかでないものを一括したものである。

#### 第Ⅰ類：橋状把手を有する鉢・深鉢形土器

a類 把手が平板で装飾性が乏しいもの。口縁部内面に蓋受け状の隆帯を持つ。出土量は多くないが確実に存在する。典型的な事例は2034であるが、定型的でない事例としては、243や2048が認められる。

b類 橋状把手の平面形が三角形を呈し、上端部がねじれ状に変化するなど若干の装飾性が認められるもの。本遺跡ではほとんど認められなかったが、小千谷古城之腰遺跡では主体をなしている。

c類 橋状把手の幅が狭くなり装飾性が乏しいもの。本遺跡では数が少なく、図示した事例は1点(1870)のみである。a類からの系譜も考えられるが、形態的には単純であり、橋状部の幅が狭いなどの点は、dⅠ類との関連も否定できない〔長澤2000〕。



第11図 A群土器の器形分類図

d類 橋状把手が細い隆線状となり、S字や8の字状におじれ、装飾性を強くしたもの。十三本塚北遺跡からの出土量は多く、以下の3類に分類することができる。1類：橋状部をなす穴が残るもの。橋状の把手という意識がまだ少し残存しているものである。しかし、橋状下の穴は小さく形骸化し、装飾効果の意味合いを強くする(617・953など)。このため、形状の変化が多く、更なる細分も可能と見られる。今回の分類では、器種や器形ではなく把手部での細分のため、本類には大小様々な器種が含まれ、1313は大形品となる。また、胴部文様も多様であるが、爪形文は少なくなっている。2類：穴が塞がれたもの。基本的に1類と大きく異ならない。しかし、爪形文の伝統を強く残す1179の事例があり、このほかでも沈

線区画等と組み合わせながら、やや力を失った爪形文が施される事例が1732などに見受けられる。このほかには、把手下に蛇行垂線が施されたものが多い(1775・1816・1871・1886)。3類:把手部の装飾が頸部の隆帯に達せず形骸化したもの。出土量は少ない。1776では、胴部に縄文地文が施文されるのみとなっている。

e類 装飾性の高い把手を有するもの。数量的に少なく、全体をうかがえる事例がないことから明確ではない。579や259などがある。

x類 橋状把手を欠失した口縁部破片。形状からI類に含めることができるが、把手部を欠失しているため、細分ができなかったものを一括した。頸部の外反度はさまざまであり、胴部文様にもバラエティーがうかがわれることから、多種の器形が一括されている(1567・2076・2332など)。

y類 頸部破片一括。下部に刻目もしくは刺突文を伴う隆線がめぐる。把手部を欠失して細分できなかったものである。便宜的に2類に細分した。1類:内弯もしくは内傾した頸部破片(314・445・2002・2301など)。2類:内傾外反頸部破片(1444・2001・2213など)。

z類 刺突文が施された胴部破片一括。文様的にはさまざまな事例がある。刺突が粗いものは新しい部類と考えられるが、更に新しいものには刺突が施されない場合が多くなるため、本類に含まれていない可能性が高い。文様的には、従来からの伝統的な爪形文が主体的であるが(2204・2285など)、間隔が粗くなったり(515)、あるいは力を失って細いものなどが見られる(2007)。この他では、円形刺突文(2333)や押し引き状の施文などが見受けられる(2089)。

#### 第II類 橋状把手を持たない鉢形土器

三十種場式の鉢形態と近似するが、B群土器の影響などが認められ、沈線文が施される。本類とは、在来系を基盤にしつつも外来系の要素が加味された折衷土器群と考えられる。文様としては、口縁部と胴部を連携させつつ、4単位ほどに区画しているものが多い。585は口縁部の文様にB群的な要素が見受けられ、2033の胴部文様にはJ群とした堀之内1式的な要素が看取される。

#### 第III類 口縁部・頸部に隆線文を有する鉢・深鉢形土器

a類 頸部に隆線がめぐるが4単位程度で渦巻文などの文様で構成されるもの。1類:円形刺突文が施される隆線によるもの(672・1997・2142・2299)、刺突等が施されず微隆起線文状の隆線で文様をめぐらせるもの(15・39・239・388・1148・1152・2209)があり、それぞれいくつかの文様パターンがみとめられる。また、橋状把手状を呈しながら、橋状部側面に微隆起状の渦巻文を施したのもとりあえず本類に含めた(1996)。本類は、A群の中でも古式と考えられ、I a類と組み合わせる可能性が高い。2類:隆線文が三角波状に結合し(531)、形骸化した橋状把手状の文様構成をとるものなどがある(2312)。1類との関連性等は不明である。

b類 頸部の隆線文を境に、口縁部を無文帯とし、胴部には縄文が地文として施されるが、蛇行沈線などの沈線文が垂下する一群を一括した。隆線に施される刺突文はやや大粒となり、列点状を呈するとともに、施されない事例が見受けられる(747)。器形ではおおむね2類に細分される。1類:口縁部が内傾もしくは内弯状に内傾する深鉢(1825)。大波状口縁形態もある(1893)。2類:頸部が緩くくびれ、口縁部が若干外反する深鉢(740・1891)。

c類 列点状の刻目文等が施される横位隆線文が頸部にめぐらされる鉢・深鉢形土器で、口縁部は無文帯となる。ただし、横位の隆線が直線的な部分の破片であり、これらの一部にa類やb類のものが含まれている場合が考えられる。器形は、口縁部の形態が概して多様であり、4類に細分できる。1類:内弯・

内傾する深鉢形土器（33・675・2143・2337）。2類：若干内湾しつつ直立気味か、やや外傾する器形の深鉢（387・2210など）。3類：内湾しつつ外反し、ほぼ直立する深鉢。隆線に刻目文が施されるものもあるが（1149）、2条の沈線で隆線を意識させ、横位列点が施されるものが目立つ（1119・1821・1892）。4類：口縁部が緩く外反する深鉢（1820・1875）。口縁端部が若干内湾し、受口状を呈するものも本類に含めた（673）。

x類 頸部一括。頸部に相当する部位に、刻目文等が施された隆線が巡るものとしたが、刺突文等が施されるものは別分類としたため、胴部文様は斜縄文（1849・2003）や条線文（303）などとなる。

#### 第IV類 隆線を持たない鉢・深鉢形土器

半精製的な意味合いが強く、器形によって大きく2類に分類することができる。

a類 頸部が概して強くくびれ、口縁部が外反する鉢・深鉢。4単位ほどの小突起を有する場合が多く、頂部には隆線のな単位文様が施される（261・1150など）。胴部文様としては、縄文地上を蛇行や平行しつつ垂下する沈線文が施され（571・1873）、また頸部には、隆線を意識したような沈線文が施される一群が認められる（1150・1155）。なお、1155については、B群土器の影響が認められる。

b類 頸部がくびれず、口縁部が単純に内湾しつつ、やや外傾した形態のものを一括した（12・1768）。文様構成等の特徴はa類と特に変わらない。

#### 第V類 磨消縄文が施される鉢・深鉢形土器

B群土器などとは異なった磨消縄文が施される一群を一括した。相違点としては、沈線区画内に施された縄文帯の幅が概して広く、沈線も明瞭なものが多い。ただし、大半は最下層とした第4層から出土しているが、出土層位が2～3層で、渦巻文が施されるものの一部については（1035・1424など）、B群土器の範疇に含まれる余地が残されている。

本類は文様によって抽出したことから、器形はさまざまであり、鉢や深鉢などが一括されている。縄文の施文は区画内に充填されるもの（752・949・2224・2227など）と、沈線区画後に縄文を磨消するもの（749・1785など）の2種がある。544は口唇上端内側に蓋受け状の粘土帯が巡らされ、文様に類似した事例が越路町・多賀屋敷遺跡で知られる〔越路町教委1993〕。また、このほかにも、沈線区画がやや狭く、施文される縄文が単節であるといった相違があるなど課題を含むが、多賀屋敷類型とされる一群との関連性が考えられる資料であり、今後さらに検討を加えたい。

#### 第VI類 その他・所属不明の土器

本類については、A群で把握できそうでありながら、今一つ明瞭でないものを一括した。したがって、意味合い的には、L群の範疇に近い。237は微隆線状の粘土帯によって文様が描かれるが、全体の構成および器形等も明らかでない。このほかには、口縁部の無文帯下に刺突状の列点が施されるもの（20・379）などがあるが、実態の把握は今後の課題である。

#### ② B群土器：信州系土器群

本土器群は、信州系もしくは中部高地系と表現されるように、本来は外来系として捉えられる土器群である。しかし、本遺跡では出土量が多い主体的な土器群であるとともに、本来の在来系であるA群土器や後述するC群土器にも多大な影響を与えるなど、在地における存在感は大きい。この状況は、本遺跡において出土量がかなり多いが、本地域に与えた影響も大きいことも予想され、当該期の土器群を構成する主要素の一つと見ることができることから、在地化した在来系土器群として扱うこととしたものである。

形態的な特徴としては、口縁部が肥厚化したり、二重口縁状に屈曲することにより、側面が幅広い形状を呈し、当該部分に口縁部文様帯が設定されるものである。頸部は緩くくびれ、口縁部は概して強く外反する器形が一般的で、頸部は無文帯をなすものである。鉢形、深鉢形、半精製土器に大別される。鉢形と深鉢形については、胴部形態の差異によって区分はできるが、口縁部はほぼ同じであり、明確に分離することは困難である。また、胴部等の文様も両者共通であり、このため口縁部と頸部から胴部の破片とは、それぞれ別途に分類することとし、大きく5分類とする。文様や形態の細部における分類は、口縁部や胴部で行うこととし、復元個体については器形重視で分類した。

#### 第I類 鉢形土器

胴部の形態と口縁部の外反度などを視点に、a～eまでの5類に細分した。器形の大小では、小形から大形まで3～4種が認められる。

a類 胴部がやや扁平なものとした。小形の鉢に多い。頸部のくびれが弱く、胴部が張らない形態と(587・2251)、胴部がやや張り出すもの(2253)がある。胴部文様では三者三様であるが、2253は文様帯下部を区画するような弧線文が配されており、ほかとはやや趣を違える。

b類 胴部がやや扁平ながらa類より器高を高くし、やや中形の器形をなす。底部はやや大きめで、胴部が若干張り出す割りには寸胴形である(1276・1727)。

c類 中形の鉢形土器で、底部がやや小さく引き締まる形状をなす。胴部の張り出しはやや弱い。口縁部はやや長く外反が強い。例示した2点は、器形・文様構成とも差異が大きい。特に、262は口縁部にB群土器特有の文様がなく、口唇部上端と突起部に凹線的なデコレーションが施されている。855はd類とした1180に近い胴部文様が施されるが、1183および563は、二重三角による区画文とされている。

d類 中形でもやや大きい部類の鉢形土器。口縁部の外反はc類よりやや弱いが、形態的には近似する。胴部の膨らみについては、弱いもの(1180・2083)、若干膨らみを強くするもの(532・1274・1565)、やや張るもの(226)などが看取できる。

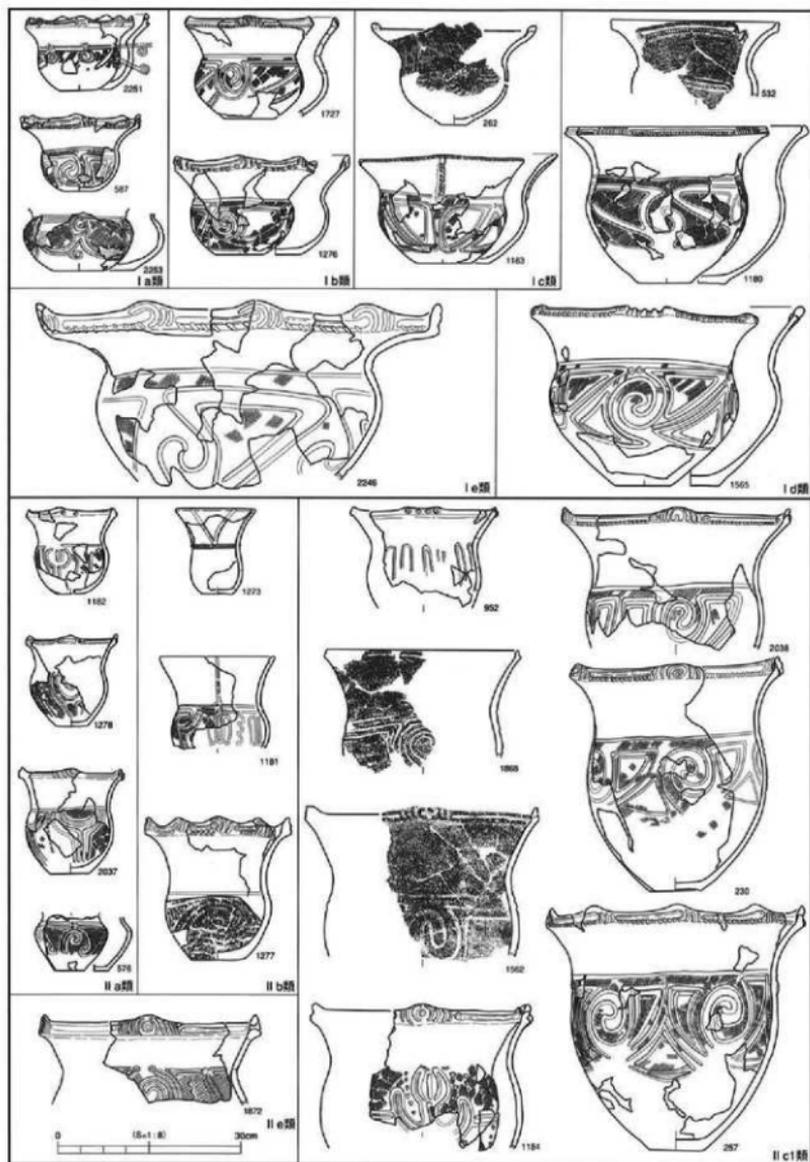
e類 大形の鉢形土器で、口縁部の外反が水平近くまで反る。2246は代表的な事例であるが、量的には少ない器形である。

#### 第II類 深鉢形土器

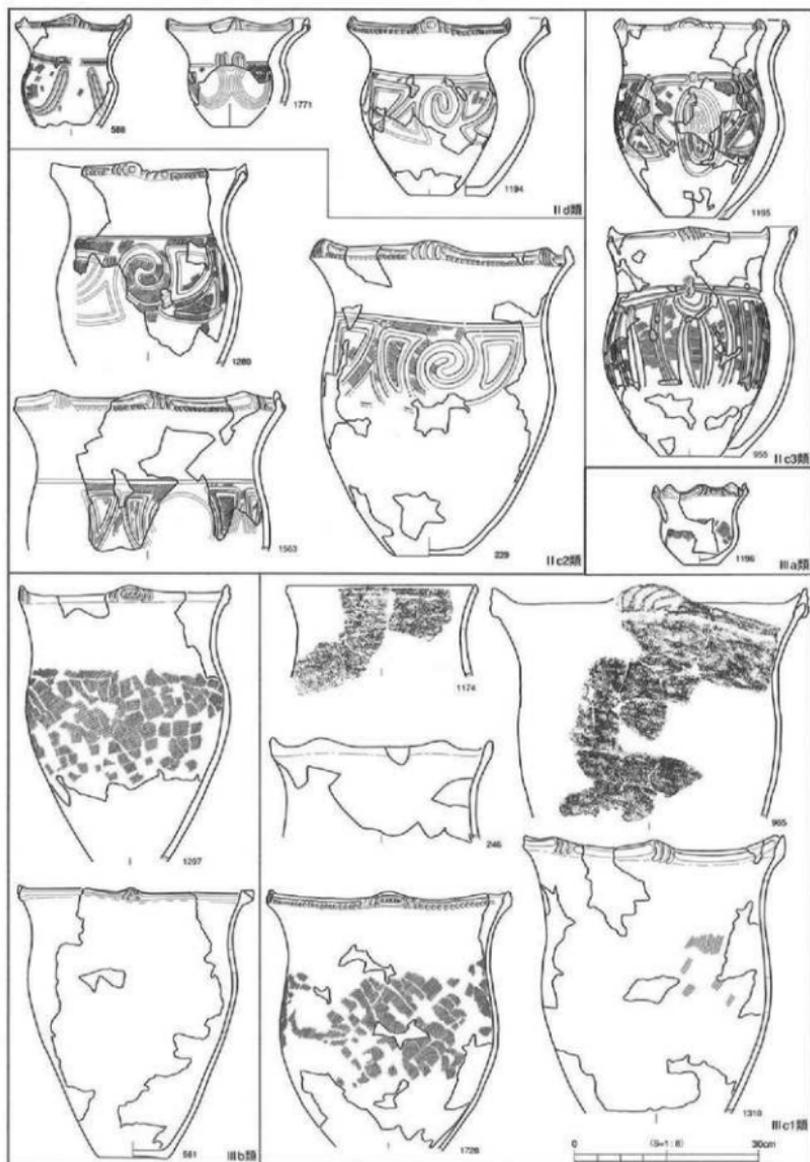
a類 概して小形の深鉢形土器。器高と口縁部直径がほぼ同じになる。底部がやや丸みを持つもの(1182・1278・2037)や、肩の張りが明瞭なもの(576)がある。後者については、本土器群の器形としては一般的ではないことから、その出自等については検討の余地が残されている。

b類 口縁部が長いものを一括した。ただし、器高と口径の比率はほぼ同じとなる。口縁部文様帯では、本群で特徴的なやや幅のある側面に文様を施す事例(1277)と、平坦面を持たない無文のものがある(1181・1273)。概して小形かやや中形程度の器種が多い。

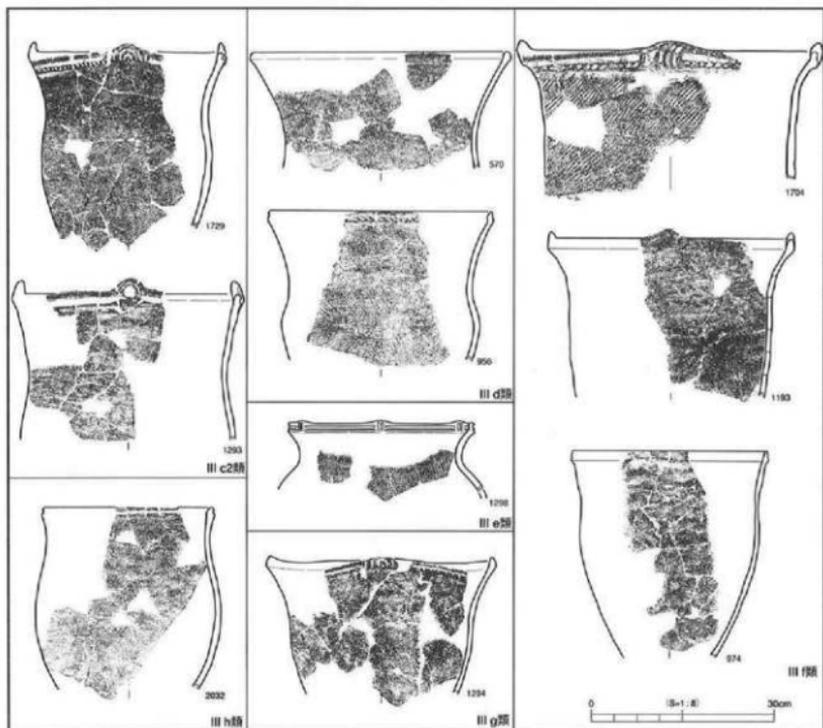
c類 中形から大形の深鉢である。本土器群では主体的な部類で、個体数も多い。形態と一部文様を加味して3細分を行った。I類：器高と口径の比率がほぼ同じのものである。形態的にはII a類と基本的に同じとなる。胴部の膨らみについては、若干膨らむタイプ(257・1867・2247)とほとんど張らないでそのまま緩やかに底部へ移行するタイプ(230・1184・1562・1594・1769・1868・2038)の2種がある。後者の中形品としては、226とやや長胴系の583がある。なお、1880の胴部文様については、B群に一般的ではなく、J群等で理解することが妥当かも知れない。2類：器高が口径をしのぐやや長胴形態の深鉢である(229・1280・1563)。I類の中でも、胴部形態が明らかでないものが一部が含まれている可能性がある。



第12図 B群土器の器形分類図(1)



第13図 B群土器の器形分類図(2)



第14図 B群土器の器形分類図(3)

3類：基本的には2類と同じであるが、胴部が口縁部とほぼ同じ程度まで張る形態を呈し、胴部文様が形散化するなど本群では特異なことから別分類とした(955・1196)。口縁部文様もやや簡略された状況が看取される。

d類 口縁部の外反が強いものを一括した。胴部形態では、それぞれ若干異なるが、胴部がやや長く延びるタイプ(1194)と一般的な部類(588・1771)の2種にまとめられる。

#### 第III類 半精製・粗製の鉢形・深鉢形土器

胴部文様帯が縄文地文もしくは無文となるもので、口縁部文様帯を有するものと肥厚するのみのものがある。後者は粗製土器かそれに近い存在となる。

a類 小形の鉢形態に近い土器である。1196は、形態からすればI a類に分類でき、口縁部の文様帯も装飾が多く精製土器の類に近い。しかし、胴部文様がLR単節斜縄文の地文のみであったことから第III類に分類したものである。

b類 胴部最大径が上位にあり、肩部の張りが概して明瞭な深鉢形土器である。口縁部に描かれる文様は、やや簡素化がうかがえる(581・1297)。

c類 頸部から口縁部の形状が概して緩やかなものであるが、口縁部形態により2細分した。1類：頸

部で緩やかにくびれ、胴部に若干の膨らみがあり、口縁部も緩やかに外反するもの。口縁部に文様が施されるもの(965・1310・1728)と素文のもの(246・1174)がある。2類:口縁部の外反が弱く、やや直線の外傾する形態を呈するもの(1293・1729)。

d類 口縁部が概して長く、外反度が大きいもの(570・956)。

e類 頸部のくびれが強く、胴部最大径をなす肩部の張りが明瞭なもの(1298)。

f類 頸部のくびれが弱く、胴部はほとんど膨らまない。口縁部は若干外反する形態の深鉢である。口縁部に文様が施されるもの(1704)と無文のままのもの(974・1193)がある。

g類 f類に近いが、胴部下半がすぼまる形態の深鉢である(1294)。個体数は少なく、本群では一般的でない。

h類 頸部のくびれが緩やかで、口縁部の外反も弱い、胴部中位がやや大きく張り、最大径をなすものである(2032)。個体数は少ない。

#### 第IV類 口縁部破片一括

a類 信州系特有の口縁部で、小突起を中心に左右対称の文様構成をとるものを一括した。文様のパターンや表現にいくつかの種類があり、その構成等で細分した。なお、突起間の文様を結ぶ沈線及び沈線下の刻目文とその有無等の細分は別に行う。1類:突起中央に「の」の字状の渦巻文を配し、縦位弧文を左右対称とし、かつ次の突起文様までは沈線で結ぶ。沈線下には、刻目文を施すものと施さないものがある。刻目文の細分はc類で行う。中央の「の」の字文については、右回り(320・328・1788など)と左回り(1749・2172・2129など)の両者が認められるが、大半は左回りとなっている。2類:突起中央の文様が逆位の「U」字状沈線で表現されるもので、内部に凹文が施されるもの(1576・2327など)と、そうでないもの(1451・1743・1972など)の2種がある。前者は、IV a 3類との間わりが認められる。各突起間は、沈線文で結ばれ、沈線下には刻目文が施される場合がある。3類:突起中央の中心文が凹文で表現され、左右を内向型の縦位弧文で囲み、突起間を沈線で結ぶとともに、沈線下に刻目文を施すものなどがある(1334・1869・2177など)。1185は当該文様が対で表現される。なお、1057は縦位弧文が外向となる数少ない事例である。4類:文様構成の総体は前1～3類と同じであるが、対をなす縦位弧文のみが残存し、中央の文様が欠失したものを一括した。突起の形状が、小さな三角形を呈し、施文面が狭いことによる省略と考えられる。5類:突起下の文様構成は原則として4類と同じであるが、突起間を結ぶ文様が沈線等ではなく、縦位弧文が形骸化した短線文で刻目状に施すものを一括した。突起下の中心文様も短線文と化している(517・1916)。6類:突起下の主文様であった「の」字文系の文様要素が欠失し、また弧線文も直線化した文様構成をとるもので、中心部の文様は5類に準じるが、各文様間を沈線で結ぶ点異なる(859・1338・1398)。突起を持たない器形もある(2250)。b類文様の形骸化した文様の可能性もある。7類:突起下の中心文様が横長の渦巻文をなすものである。縦位弧文は内向型(1599・2346)と外向型(1598)があり、前者が多い。沈線の幅が概して細いものが多く、突起間を結ぶ沈線下に施される刻目文も短沈線化したものが多く、これらの中でも細線で表現されるものがある(1598・1599)。

b類 a類では中心となる文様の両側に弧線文が従属するように施されていたが、本類ではこの弧線文が主文様となり、対構成をとらないものである。量的にはa類より少ないが、B群土器の口縁部文様としては主体を占める一群である。やや離れた対の突起によって1単位の文様構成をとるもの(968)と、同一方向で連続するもの(1055)がある。線の太さによって更に細分できる。1類:太線のもの(518・630・1236など)。2類:中細線のもの(275・555・1100など)。3類:細線のもの(867・1913)。



c類 口縁部文様帯施文部の幅が狭くなる。主文様は、やや小形化した凹文のみとなる。大きく3類に細分したが、3類そのものは少しニュアンス的に異なるものが一括されている。1類：突起部の凹文とそれを結ぶ沈線や刻目文列が主文様となる。凹文については、沈線端部を凹文状に表現し、3点を施すなど複数化されたものがある(14・683・751・1907など)。刻目文の種類は多様である。2類：凹文は口縁端部の沈線の幅と同程度まで小形化したもの。B群土器の口縁部文様としては、形骸化の感否否定できない。器種には、口縁部が緩く長い深鉢形(435・1923)と、頸部がくびれ口縁部が短く強く外反し鉢形に近いもの(519・1796)などがある。3類：小形化した凹文が一對もしくは3点ほど施され、細線による沈線文が伴う(660・682)。類例は少ない。関東的なのかも知れない。

d類 突起部が残存したものはa～c類の何れかに分類されるが、本類は平縁もしくは突起間の平縁部分について、沈線文と沈線下に刻目文が施される一群を一括したものである。したがって、これらはa～c類のいずれかに大半が属するものの破片であるが、本類については沈線と刻目文を中心に細分を試みたい。1類：概して太い沈線を巡らせ、その下部に施される刻目文が円形状を呈し、列点状のものとした(377・500・2288など)。刻目文については、若干の疎密がある(503・862と1234・1674など)。1843は、施文方法がやや特異である。2類：1類とほぼ同様であるが、刻目文がやや短線化して施されるものである。刻目の方向については、左斜行(437・2084)と右斜行(1457・1601・1797など)に傾斜する場合と、ほぼ垂下する場合(2099・2180)が認められる。3類：刻目文が列点状を呈するもので、施文具を左側から強く切り込んだ後、右側へ引き抜くことによって、三角形の列点文となる(1460・1464・2104など)。類例は少ない。4類：横位に巡らさせる沈線は概して細く、列点も細く長めとなる。短沈線は、右斜位(715・1345など)が多く、左斜位(1344)は少ない。

e類 口唇部文様が沈線のみで、刻目文を伴わない部類である。口唇部の微形態から3類に細分した。1類：口唇部が肥厚し、沈線を施す口唇部側面の幅が概して広いもの。沈線の太さで、太線(510・535など)、中細線(1102・1746など)、細線(491・2108など)に細分することもできる。2類：沈線が口唇部の上端部に施されるものである。口唇部が肥厚すると言うより、沈線の施文により押し広げられたような形態を呈する。沈線の太さにより、太線(999・1593など)、中細線(498・1905など)、細線(327)程度に細分できる。3類：沈線の施文位置が、肥厚しない口縁部の側面に施されるものである。太線(666)と細線(322)が認められる。

f類 外反を強くした口縁部の内面に文様帯を有する一群である。B群土器特有の口縁部文様を施すものと沈線主体のものに大別することができるが、前者はさらに外面の文様帯の有無により区分した。1類：口縁部内面に文様帯を有し、外面が無文となるもので、口唇部の沈線もない。口縁部内面の文様帯がやや大振り幅があるi類(624・1048・1333)と、狭いii類(1679・2182・2266など)に細分できる。2類：口縁部の内外面に、B群土器特有の文様帯が施されるものである(1784・1799など)。3類：内面に2条程度の沈線が巡らさせるものである(1737・2109)。

g類 口縁部が概して強く外反する小形の鉢形もしくは深鉢形土器を一括した。器形が復元された個体がないため、全体の形態等は不詳である。口縁端部は「く」の字状に短く屈曲するものが一般的である。装飾の有無により2類に細分した。1類：4単位の装飾的な文様が口縁部に付されるもので、突起状を呈したり(431・1206)、内面にも文様が施されたりする(621・921・1884)。1884については、頸部が「く」の字状を呈する。2類：口縁部がほとんど無文帯をなし、ミガキ状の調整が施されるものである。口唇部を短く屈曲させるが(428・687など)、内面に沈線をめぐらせたと同じ効果を狙ったもの(923・9

89など)などがある。なお、口縁部外面は原則無文ではあるが、刻みを施した微隆線が4単位で垂下させたものが1類(469・921)、2類(989・990・1555)ともに散見される。

h類 やや大振りの深鉢形土器が主体となる。本類は、口縁部に文様が施されている口縁部破片について、前記までに分類されていないものが一括されている。都合4類に細分した。1類:口縁部が肥厚もしくは屈曲した施文部に沈線が1~3条程度施されるものである(1009・1681・2134など)。器種や形態等にはバリエーションがある。2類:口縁部に4単位ほどの突起があり、その部位に凹文状の円文が1~3点ほど施されるもので、沈線はほとんど巡らされていない(755・1128・2164)。Πc 1類とした1880と同じであり、B群土器特有の口縁部文様の範疇で捉え切れるのかは検討の余地がある。3類:口唇部側面の端部に刻みや列点文が施されるものを一括した。刻目文の下に沈線を施すもの(857・1343)、列点の上下を沈線で区画したもの(1123・1665)、端部に刻みを施したもの(612・1317)などがある。4類:口縁部が折り返し状に肥厚し、その側面に斜行短沈線が左右交互の傾斜で施されるものである(1339・1468)。C群土器にもごく少量認められるが、出土事例は少ない。

i類 口縁部が肥厚し、側面が明瞭に形成されるが、無文のものを一括した。口唇部の形態により5類に分類した。1類:口唇部の内面にも、肥厚した部分に稜を残し、短く屈曲したような形状のものとした(1610・1933など)。側面の幅は概して狭く、内傾する。2類:口縁部側面の幅が1類より狭く、端部が上面で平らとなって、断面が角状を呈するものとした(762・2286など)。出土量は少ない。3類:1類の形状に近似するが口唇端部は丸みを帯び、側面が外傾するものとした(765・868・1471など)。4類:1類の形状に近いが、内面までは肥厚せず、内傾して平坦となる側面の幅が器厚程度まで狭くなるものを一括した(1885・1984・2154など)。5類:形状的には4類に近いが、全体に丸みを帯びるものを一括した。側面の稜線は残るが、明瞭さに欠ける(1083・1437・1810など)。

#### 第V類 頸部・胴部破片一括

胴部文様の分類は、文様のおおよそを知り得る復元個体を参考に、類例の多い主要な文様を抽出して4類に大別し、特徴的であっても、類例の少ない事例等については、その他に一括した。

a類 沈線で描かれた渦巻文と重三角文を基調に、磨消縄文が施される一群である。B群土器では最も一般的な文様で事例が多い。描かれる意匠の差異により5細分を試みた。1類:渦巻文も三角文も定型化しておらず、渦巻文が鉤の手状にまとめられ、三角文は完結していないものとした。代表的な事例は1180・2246であるが、破片資料ではほとんど抽出されておらず、類例は少ない。2類:渦巻文および三角文が定型化し、類例の最も多い文様パターンである。渦巻文を基本に描き、その文様間の空間に三角文を2~3区画で充足させる。三角文の配置パターンとしては、渦巻文を千島掛けに繋ぐことを重視して、①三角文が未発達なもの(587・1727)、②方形を対角線で区切って2個を描くもの(230・1280・1565・1194)、③横位に2個を配し、三角の頂点を渦に巻き込ませているもの(1563)、④その下にもう一個を追加して3個の三角文が配されるもの(229・257)などがある。最も事例が多いのは②のパターンである。このほかには、渦巻文が省略され、三角文のみで文様帯を構成するもの(563・1183)、渦巻文が楕円形文と化して形骸化したもの(1195)などがあるが、事例は少ない。3類:渦巻文が発達するも、中間を埋める三角文の存在が不明確となり、上位を横位沈線帯で結ぶ程度のもの(262・1868)。1872は蛇行沈線なども施されている。破片資料が多く、胴下半部の文様構成が余り明確ではない。4類:渦巻文が発達し多條化したものを一括した。文様の全体をうかがえる資料がない(2115・1803など)。5類:a類に含まれるであろう破片類のうち、上述の1~4類以外もしくは検討の余地を残すものを一括した。

**b類** 三角文がなく、渦巻文も上方に開口する弧線文などに置き換わっており、a類とは別個の文様系列に属するものである。出土量はa類ほど多くないが、本群では主要な文様とすることができる。1類：口を上を開いたように、上位を開口した弧線文等が描かれる(1182・2037)。b類では、本類が最も多いパターンである。人形状の構成をとるものが存在することから(1184)、物語性が強いのかも知れない。蛇行沈線を施すものもある(1181)。2類：1類とした1184の人形状の文様を祖型としたような構成で文様を描くものを一括した(1428・2123)。全体をうかがえる事例がなく、不明確さを残している。3類：渦巻文的な文様要素も認められるが、重弧文的な文様が主体を占め、沈線文様が描かれる度合いが多い。定型化していないもの(919・1005)と、垂下した縦位区画沈線を基準に弧線文を描くものなどがある(402)。後者については、J群土器とした1553の文様構成との関連性が強い。4類：1類と3類の折衷的な文様、もしくは形骸化した文様構成をとるもので、4単位程度で重弧文を描いたほかの空間には、縦位に3本一単位の沈線文が幾条も施されるものである(955)。事例は少ない。

**c類** 3本一組の沈線帯を、2ないし4分割程にした胴部の器面に弧状に文様を描くものである(588・1771)。個体数はそれほど多くないが、特徴的な文様構成はa類やb類とは異なった文様系統に属していることをうかがわせる。沈線帯は、3本一組といっても、端部が閉じられた帯状区画内に沈線を平行に挿入したものである(1682・1756・2036)。なお、基本的には弧状に描かれるが、縦位に幾条も施される952についても、とりあえず本類に含めておく。

**d類** 磨消縄文が未発達で、縄文地上に沈線で文様が描かれ、渦巻文も小さい。a類の系譜からは大きく外れていないと考えられるが、文様構成上の差異は大きい(622・576・2185・2251・2253など)。若干の検討の余地を残す。

**e類** B群第V類とした胴部破片のうち、事例が少なかったり検討の余地を含むものなどを一括した。

### ③ C群土器：沈線文系土器群

本群とは、単純に言えば沈線を多用した文様が施される土器群である。B群土器では、文様の展開が横位にあったことに対し、本群では縦区画が重視される。文様的には関東西部地方等の沈線土器〔石井1993〕とほぼ同じ構成をもち、縄文地上に沈線で文様を描いただけのものも見受けられるが、磨消手法を用いたり、区画内を縄文で充填するものなど、東北地方南部との関わりが強く認められるものがある。

本土器群の大別については、B群土器の影響を受け、口縁部に信州在来型特有の口縁部文様が施されるものと、それらをまったく施さず、口縁部の突起などが装飾性を強くするものがあり、これらによって2大別がなされる。また、沈線が多条化・細線化した一群が本類の系統から派生する。これらについてはD群土器として次項で述べるが、器形などは本群からの系譜で捉えられ、かつ復元個体が少なかったという事情から、分類図では一括した。ただし、細部の分類等については各群とも別図を用意した。本項では、復元個体から器形等の分類を行い、その後口縁部の形態等と胴部文様等の分類を概観する。

#### 第I類 沈線文系土器群の鉢形・深鉢形土器

本類は、純正な沈線文系土器群を意味する。B群土器の要素がまったく認められないものと、本類を主体としつつもB群の影響が若干取られるものに大別され、その他にE群土器と関連したものがある。

**a類** 純正な沈線文系土器群であるが、胴部下半の形状から2類に細別した。1類：本群の中でもっとも純正な沈線文系の土器群とすることのできる深鉢形土器である。器形は、胴部中位にたくびれを強くし、下半部で強く張り出す特徴がある。文様はさまざまであるが、これら文様パターンが、C群土器の基本形

である。口縁部には、装飾性の高い突起が付される場合が一般的で、正面に1個の場合(247・250・971・1172・1547・1774)が多く、3単位のもの(589・1281・1548)も少なくない。574は、わずかに認められた4単位の事例である。1549の突起は、装飾性に乏しく、高さがなく、2個一対で3単位となる。1275は数少ない平口縁の深鉢であるが、文様が口縁部に集約されているなど、本類では特異な存在である。文様については、後述することになるが、本類については突起等によりさらに細分できる余地が残されている。2類：a類は、第1群の最も特徴的な器形の深鉢が分類されたが、2類は胴部にくびれと張り出しがやや弱くなったものを一括したものである。575は、口縁部の突起などとともに、文様などはa類に近い存在である。しかし、595については、胴部のくびれがやや上位となり、小さな楕円区画内に3点の列点文を施す文様を多用する点と、口縁部の状況からすればb類に近い形態を呈している。

b類 本類は、胴部の文様や、口縁部にB群土器的な文様が施されていないなど、基本的な主体を沈線文系土器群におくが、器形を見ると胴部のくびれが上位にあり、B群土器に特徴的なフォームが取り入れられた土器群である。胴部文様の形勢において、a類の伝統が強く残されているもの(232・971・1290・1551・1556)と、B群土器の文様要素が取り入れられているもの(565・1282)がある。前者については、沈線文様が簡略化の様相が看取され、やや複雑な232については頸部が意識され、三角文が描かれるなど、B群土器の影響がわずかに認められる。後者については、1282がB群土器V b 1類の文様を、また頸部を無文帯とした565の胴部はB群土器V b 4類に近似した文様構成となっているが、口縁部の突起を重視してC群に分類したものである。

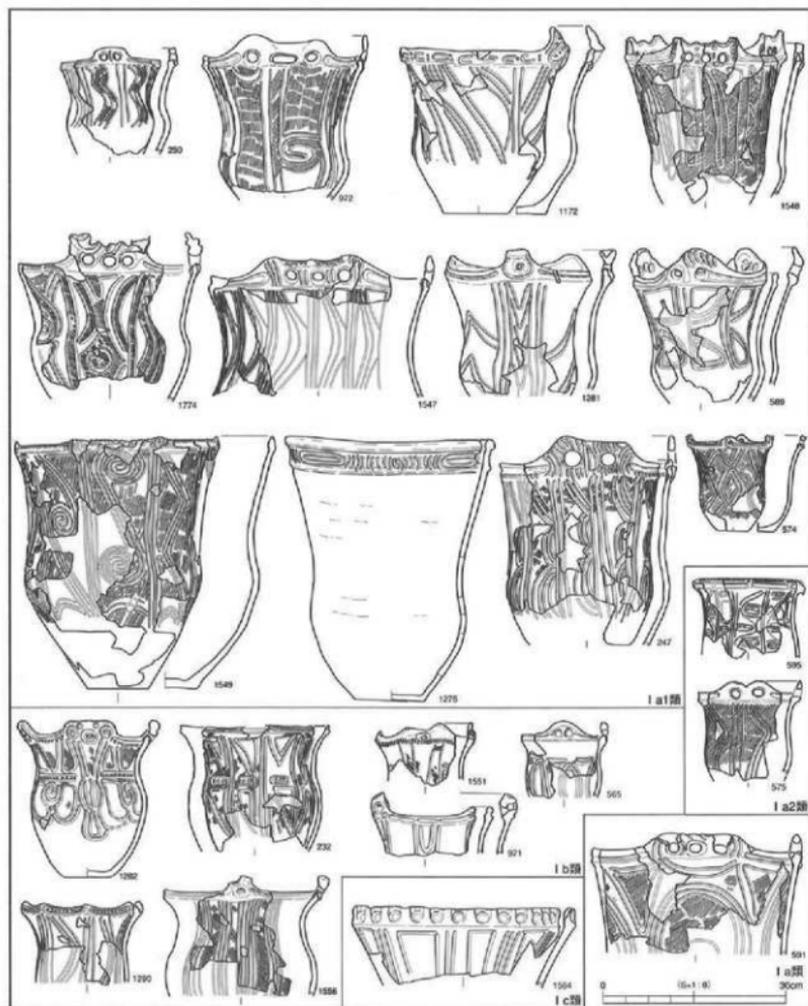
c類 頸部以下の文様は沈線を多用しており、C群土器の範疇で捉えられるが、口縁部にはE群土器とした連続指頸瓦痕文がめぐらされているものである(1564)。出土した事例は少ないが、本群の胴部文様とE群の口縁部文様が組み合わされていることから、C群第1類とE群土器が精製品と半粗製品類との関係にある可能性を示唆している。

## 第II類 B・C群土器折衷系の鉢形・深鉢形土器

本類は、純正の沈線文系土器群の文様を踏襲して沈線文が多用され、頸部に無文帯を形成しないが、口縁部にはB群土器特有の文様が配され、器形もB群の形態を写す土器群である。純正な沈線文系土器群の文様は、多くが幾何学的な構成をとり、渦巻文等円形状の文様は概して少ない。これに対しB群土器は、渦巻文を中心に据え、その間を埋める文様として三角文が客体的に配置されていた。沈線文系を主体とする第II類では、B群土器で主体的地位を占めていた渦巻文のシェアは小さくなり、三角文や縦位に垂下する文様が多くなっている。以下、器形を主に5類に大別する。

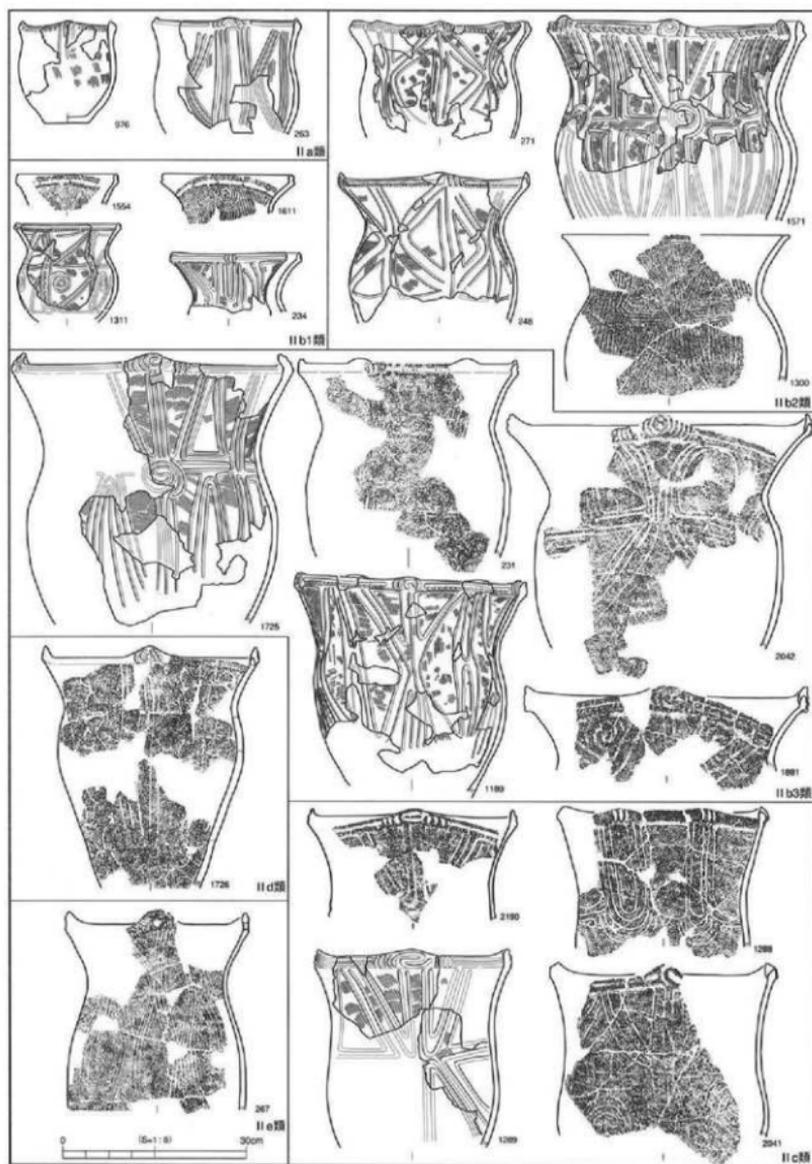
a類 頸部のくびれが弱く、口縁が緩く外反し、胴部が丸みを持つ鉢形土器を一括した。口縁部の文様については後述するが、基本的にはB群土器のパラエティーの範疇にある。263は、突起下に3条2帯の沈線文を垂下させ、その間には「く」の字状に折れた沈線を施し、文様的にはやや簡素であるが、胴部と頸部の文様に区分はない(i類)。1190は、頸部を区切る横位の文様が伴うもので、頸部をより意識するとともに、英国旗をイメージさせるような「米」字状に三角文を積み上げた文様構成を呈する(ii類)。976は、文様が少なく、胴部の大半が縄文地文で覆われることから、半粗製の土器である(iii類)。

b類 頸部のくびれが強い鉢形・深鉢形土器で、B群土器の器形を写した土器群である。胴部の形状で大まかに3類に細分した。1類：小形から中形の鉢に近い部類であるが、器種が小さな割りに口縁の外反が強いため、広口壺に近い形状を呈する。234は、口縁部の外反が強く、胴部の張りは概して小さい。頸部と胴部の文様は一体化している(i類)。1311は、胴部が丸く膨らむ器形で、文様としては頸部と、文



第16図 C・D群土器の器形分類図(1)

様帯の下部を区切るような区画がある(ⅱ類)。2類：中形から大形の深鉢形土器で、胴部は1類よりやや長くなる。文様については、頸部と胴部が一体化し、「水」字状の構成をとるⅰ類(248・271)と、頸部で区切られ、「米」字状の文様構成をなすⅱ類とがある(1300・1571)。前者は、縦位に三角文を重ねた文様構成で、第1類の雰囲気をも多く残す。しかし、後者については1300のように沈線が多条化したり、1571のように密度を濃くするようである。3類：胴部がやや長く延びる深鉢形土器とした。頸部・胴部が



第17図 C・D群土器の器形分類図(2)

一体化した文様が描かれるもの(1181・1189)と、頸部が意識された文様が施されるもの(231・233・1725・2042)の二者がある。

**c類** 頸部でのくびれが弱く、胴部の張りが小さなものを一括した。口縁部は、概して長く緩やかに外反する。文様構成では、頸部の区切りの有無で二分することができる。頸部で区切らないi類は2190、区切られるii類には1288・1289・2041がある

**d類** 頸部のくびれが上位にあり、胴部の最大径が上半部に位置するものである。1726の文様は、沈線文系の一般的な文様ではない。

**e類** 頸部のくびれは比較的強いが、口縁部が長く、胴部の最大径も下位にあるため、全体に緩やかなS字状のプローションをとる(267)。完形品は少ないが、破片資料は一定量出土している。

### 第三類 純正な沈線文系土器群の口縁部破片一括

沈線文系でもB群土器の影響をほとんど受けていない第1類と同じ口縁部の破片を一括したが、突起部が大きく、装飾性の高いものが多く含まれるようになった。その他の頸部を含め6類に分類したが、第1類と関連が強いE群土器系についても、本類に合わせることにした。

**a類** 装飾性の高い突起部を本類とし、大きく3つに細分した。第1a1類との関わりが強い。1類：大形の板状突起。3個以上のやや大きな穴が穿孔されるなど、大胆なデザインが多い。沈線も太く、しっかりした重厚なものが目立つ(830など)。2類：装飾性が高く、繊細なデザインが多い。個体数はかなり多い。頸部に施される文様には沈線が多条化したものが多いことも特徴的である(594・960・1176・1568など)。3類：装飾は簡素となるが、1～2個の穿孔が施される(737・1220・2070など)。

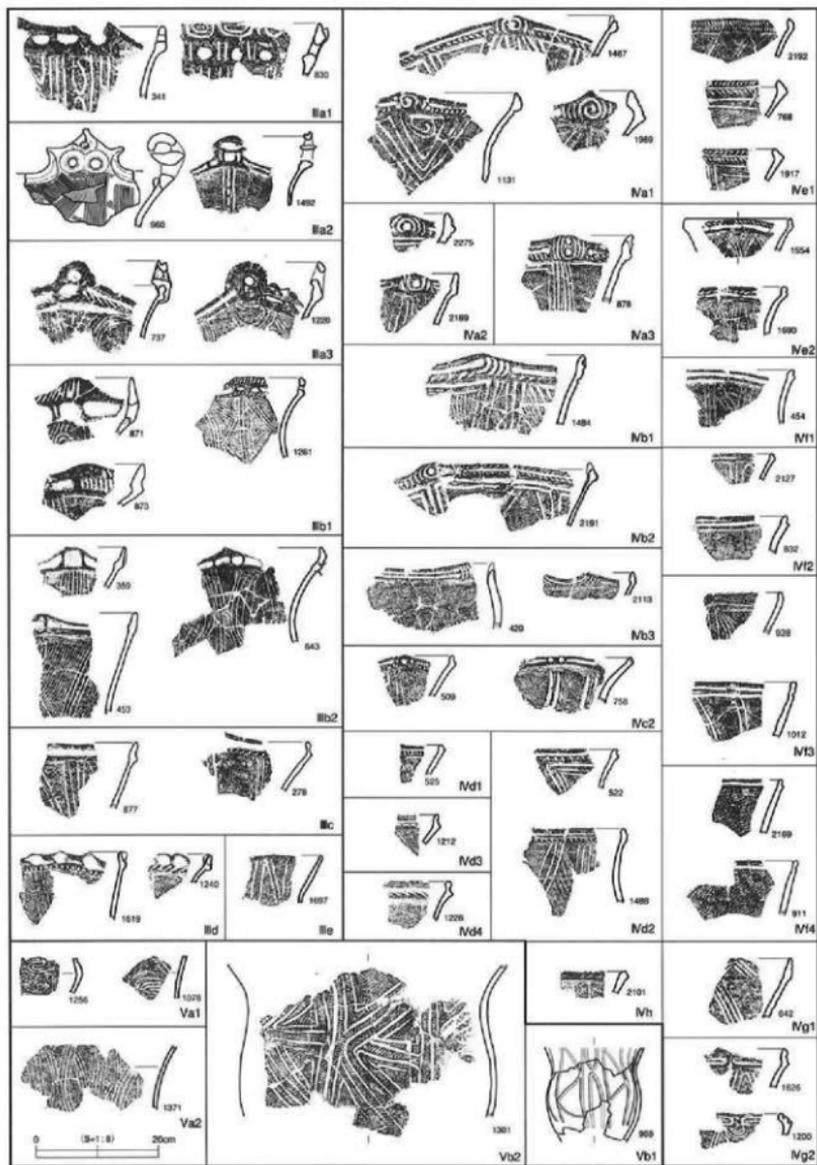
**b類** やや丸い山形の突起を持つものと平口縁状の二者があり、前者が多い。頂部下に1個の穴もしくは大きめの凹みを配し、その両側には幅広の凹線が口縁に沿ってめぐらされるものである。突起頂部には刻目状の短沈線文が施されるものと、素文のものに細分した。第1a2類や第1b類との関わりが想定される。1類：刻目状の短沈線文が配されるものである。山形状の突起を有するもの(456・871・1491など)と、若干装飾される突起を持つもの(409・1366など)、そして平口縁(1213・1261・1360など)がある。このほかに、短沈線文が頂部ではなく穿孔される部位に施されるものが少量出土している(873)。2類：基本的には1類と同じであるが刻目文が施されない一群を一括した。突起部が山形状を呈するもの(870・874など)と、山形状の突起がやや小さなものがある(453・1586)。このほかに、頂部下の凹状文が、突起の頂部近くまで拡大された事例がある(359)。

**c類** 口縁部に幅広の凹線がめぐらされるものである。凹線下の隆線に刻目を施すもの(278・493・2086)と無文のもの(447・877・2162など)があり、後者が多い。また、凹線が配される部位に細長い沈線区画を施し、その内部に列点が施文されるものがわずかに認められる(1215)。本類については、B群土器の第IVb～d類に近似した内容を持つものが一括的に含まれており、第1b類との関わりで理解される可能性が高い。したがって、原則的にはB群土器同様の分類も可能であるが、今回は全体の個体数が少ないことから細分は行わなかった。

**d類** 口縁部に指頭圧痕を連続的に施す一群で、E群土器との折衷型と考えられる。口縁部を巡る隆線の刻目文が列点状の1類(1619・1621)と短線状を呈する2類(1071・1240など)に区分できる。

**e類** 口唇部がほとんど肥厚せず、口唇部の文様帯が欠落し、直接頸部以下の文様を施す一群である(645・930・1697)。出土量は少ない。

**f類** C群第1類と関わりが強い把手や口縁部について、上記に分類できなかったものを一括した。



第18圖 C群土器分類圖

#### 第Ⅳ類 B・C群土器折衷系土器群の口縁部破片一括

本類は、口縁部にB群土器と同じ文様が巡らされているが、頸部に無文帯が形成されていないことを基準に、C群土器と認定した口縁部破片を一括した。分類の視点は、口縁部に施された文様を対象とするため、若干記号の前後はあっても、基本的にはB群土器の分類と同一基準である。a～iまで9類の分類を試みた。

a類 口縁の突起下に施される「の」の字状文、もしくはその系譜下にある変異文様を含めて本類とした。B群第Ⅳa類と基本的に同じため、それらに習いつつ5類に細別した。突起間については沈線と刻み目文等で結ばれるが、これらの分類は別個に行い後述する。1類：「の」の字状文が施され、その左右に弧線文が対称形で施される。B群第Ⅳa1類に対応する。「の」の字状文については、時計回り(1131・1793など)と反時計回り(1363・1487・1989)があり、後者が多いのはB群土器と同じである。2類：「の」の字類似文として、逆「U」字状文を施すもので、B群第Ⅳa2類に対応する。U字の中に凹文を施すもの(1064・2189など)と、施さないもの(1739)があるが、前者が一般的である。3類：2類の系譜下において、逆「U」字状文が施されるが、U字内もしくはその部位に施されるのは凹文よりも小形となり、横位に2～3個(1068)、または縦位に2個程度(878・1924・2152など)と複数でまかなわれるものである。B群第Ⅳc3類に近似するが、C群独自の文様構成である可能性も残されている。4類：突起下に凹文その他の中心文を施すと、左右対称に弧文が配置されるものである(1494・2347など)。内向が一般的であるが、外向文の事例(396)が少量確認されている。B群第Ⅳa3類に対応する。5類：文様構成の総体は1～4類と同じであるが、中心文である「の」・「U」、凹文といった文様が欠落し、短線化した弧文のみが施されるものである(1223・1787など)。口縁部の突起は小さいか、もしくは平口縁が多い。B群Ⅳa6類に対応する。6類：やや低い山形突起の頂部に、横長となった「S」字状の中心文(508)もしくはその変異文(836)が施されるものである。出土例は少ない。B群第Ⅳa7類の変異である場合も考えられる。

b類 B群土器第Ⅳb類に概ね対応する。突起頂部を中心として、左側もしくは右側に「ノ」の字状に弧線文を重ね、突起間を太めの沈線(もしくは凹線)で結ぶが、その端部は凹文状に深く抉った文様を施すものである。文様パターンの変異が少ないことから、沈線の太さにより区分することとして3類に細分した。1類：太線(1484・1688など)。2類：中細線(1162・2191など)。3類：細線(420・2113)。

なお、420の器形は、他とはかなり異なっており、鉢形を呈する可能性がある。

c類 口縁部の主文様が凹文もしくは列点に置き変わったもので、B群土器第Ⅳc類に対応し、同様な視点から2類に細分した。1類：中心的な文様が凹文のもの(1921)。文様が施される突起部分は小さく、出土例は少ない。2類：中心的な文様が列点状の円形文となり、2～3個程度で表現される(758・1216など)。口縁が突起状をなすものもあるが(509)、概して平口縁が多い。448はやや特異である。

d類 突起部が欠落した破片もしくは平口縁のうち、口縁部に沈線を巡らせ、その下の隆線に刻目文を施す部類とした。刻目文の種類により4類に区分したが、各類はB群第Ⅳd類の各細分類にそれぞれ対応する。1類：刻目文が円形状の刺突文であるものとした(525・1693)。931についてはやや異なるかも知れない。2類：刻目文が円形より長い楕円形状を呈するものとした。刻目の方向が右斜位のもの(1479・1488など)と左斜位のもの(1631・1912など)に分かれるが、前者が主体的である。出土例は、本類では最も多い。3類：横位に列点を施す部類としたが(452・834・1212など)、同じB群第Ⅳd3類とは趣が異なる。内外面に同種の文様が施されるものもある(922・1328)。4類：刻目文がやや長くなって、斜位

の短沈線状に変化したもの(1228・2105)。出土例は少ない。

e類 口唇部側面に刻目文を施す一群である。刻目文の段数で細分した。1類:二段構成をなし、矢羽根状に施文されるものとした。二段目の刻目文は、口縁の屈曲部で隆線状を呈していることから、第IV d類における施文位置と同じであり、その上下に施される沈線も同じ意味で引かれたものと考えられる(768・1475・1917など)。このことから、一段目となる口唇部にある刻目文が、矢羽根状の表現とともに新しい要素ということになる。2192は中間の沈線が省略されているが、520・2265については、当初より矢羽根文を意識して施文されているようである。なお、692は三段構成であり、中間の刻目文は、第IV a 1類のそれである。2類:口唇部の端部に一列のみ施すもので、凹線もしくは沈線をはさんで下段となる部分には、刻目文が施されない。この点は、第IV f類の口唇部に新しい要素として刻目文が施されるようになった可能性が考えられる。刻目文の方向としては、右斜位(866・1554など)と左斜位(1690)、そして縦位(1396)の場合がある。なお、口唇部に施される一段目の刻目文については、新しい要素の可能性を指摘したが、D群土器ではより顕著となる。

f類 口縁部に沈線もしくは凹線が巡らされるが、刻目文が施されない類である。基本的には、B群第IV e類と同じであり、口唇部の彫形態、特に沈線が施される位置等により細分した。1類:沈線もしくは凹線が施される口唇部の肥厚部が概して広いものとした(284・454・1632など)。口縁部の傾きや外反度等には、いくつかのパターンがある。また、凹線の太さでも差異が認められることから、太い凹線(1632・1841・2136など)、中細の沈線(285・339・1919・2085など)などに細分が可能である。出土量は概して多い。2類:口唇部上方の端部に沈線が施されるものとした(507・832・2127など)。沈線に若干の太細はあるが、概ね平均化している。3類:余り肥厚しない口縁部に、2本以上の沈線が巡らされるものとした。口縁部上位で内凹するものが目立つ(506・541・769・928)。4類:肥厚しない口縁部の側面に1条の沈線が施されるもの(911・914・1478・2325など)。C群土器で理解すべきかは検討の余地がありそうである。

g類 口縁部に文様が施されるもので、上記までの分類以外を一括する。1類:口縁部に斜行短沈線文を左右交互に施文するもので(642)、B群第IV h 4類に対比できる。事例は極めて少ない。2類:口縁部には、横位に長い楕円区画文が施されるものを一括した(1200・1524・1624など)。

h類 口唇部がやや肥厚するが、沈線文が施されないものを一括した。頸部には沈線文が描かれる(639・1156・2101など)。

i類 口唇部がやや肥厚するが、沈線文が施されないもので、頸部以下には縄文地文のみが施されるものを一括した(1473・1474)。

#### 第V類 鉢形・深鉢形土器の頸部・胴部破片一括

胴部破片は、にわかに判断できない小片が多いため、本類ではC群第I類、同第II類にそれぞれ主要な文様から大別を行い、事例が少ないなどの場合は、その他として一括的に取り扱うこととした。

a類 第I類土器群の文様として主たるものを一括した。特徴としては、縦位に区画するルールが強い規制として働くが、縦位区画内の文様は自由で伸び伸びと描かれる。1類:沈線区画内に縄文を充填する磨消縄文により、概して複雑な文様が描かれるものとした。復元個体の事例としては、972・1774が挙げられ、破片類では1256・1699・1078・1705などを例示したい。2類:縦位に垂下する沈線文帯で文様帯を区画し、その区画内に2～3条の沈線で文様を描く。縦位もしくは斜位に流れるように垂下させる場合(i類)と、若干意匠的な構図をとる場合(ii類)とに分けられる。i類に属するものは、復元個体の

事例を挙げれば、247・250・263・267・574・575・1172・1290・1547・1556などとなる。ii類については、589・1548・1549などと、1281といったものも含めておきたい。3類：本類については、基本的にはC群土器の伝統が強いが、B群土器の文様要素が取り込まれ、頸部が意識されたものとした。事例としては、232・595・1282などを例示しておきたい。

**b類** 第II類土器群の主たる文様を基準に分類した。特徴としては、沈線で描かれる基本は第I類と同じであるが、蛇行などといった曲線的な部分が少なくなり、三角形の頂部などの角をしっかりと表現したような直線的な文様構成が主体となる。頸部を意識した文様構成の有無等により2細別する。1類：縦位区画内を斜行沈線で区画し、三角文を重層させた文様が主流となるが、頸部を意識せず、「水」字状の文様構成をとる。事例としては、271・248などが挙げられる。1189も本類に属するが、縦位区画文にH状文が配されている。2類：1類の文様を基本とするが、頸部を区切る横位の区画文を施すことによって、縦位の区画と横位の区画が設定され、三角状の文様配置が固定された「米」字状の文様構成をとるものである。復元個体では、1289・1300・1311などが例示されるが、このほかに小さな渦巻文を合わせたものが存在する(1571・1725)。

**c類** C群土器胴部破片のうち、細片で全体の構図を計りかねるものを一括した。とりあえず施される沈線の太さにより3細分した。1類：太線。2類：中細線。3類：細線。

#### ④ D群土器：多条細沈線文系土器群

本土器群は、SK-932貯蔵穴からまとまって出土した。また、廃棄場では、第1層および第2層からの出土が多く、全体としては上層位に集中する。位置的には、C6-18グリッドとC6-23グリッドから破片が多く出土している。

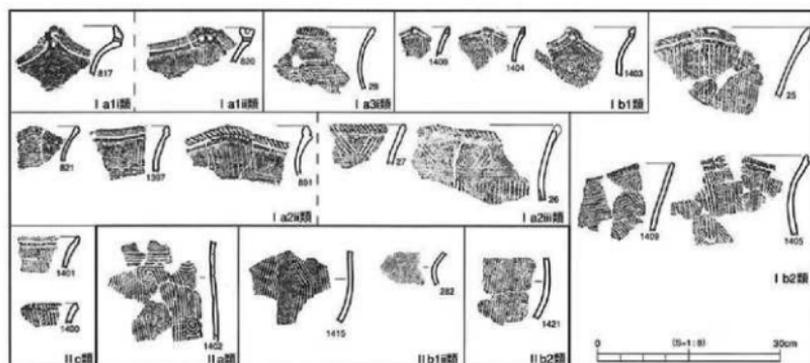
本土器群の特徴は、細い沈線を多条化して施文した文様構成にあり、B群土器とC群土器における両者の文様の特性が受け継がれている。このことは、B群とC群からの系譜がたどれることを意味するが、直接的には両者の折衷型であるC群土器第II類からの変遷である可能性が高いことになる。器種としての鉢形と深鉢形の区分は明確でなく、大形品というより中・小形品が主体を占める。器形については、ほとんど破片資料で占められ、全形をうかがえる事例がなかったことから詳らかではない。ただ、B群とC群の系譜を受け継ぎつつも、独自の器形を形成していたと考えられる。

以下、器種と器形を中心に分類し、本土器群を概観するが、鉢形・深鉢形については口縁と胴部破片に大別し、文様等を加味した分類としたい。なお、器形の分類は、復元個体数が少なかったことからC群土器と一括したが、本項の説明は破片資料とともに細分類した第19図の分類で行う。

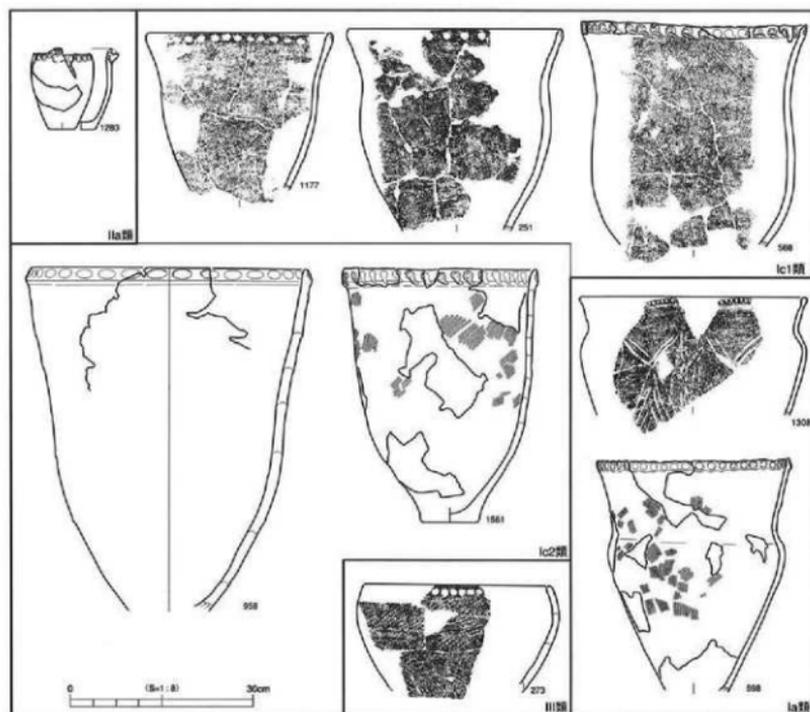
##### 第I類 鉢形・深鉢形土器の口縁部一括

頸部文様帯の有無により二分し、口縁部の形状で細分した。

**a類** 頸部文様帯を形成するもの。B群土器の系譜で理解される。口縁部形態や突起装飾により細分し、さらに文様によっても区分した。1類：突起部分の装飾性がやや認められるものとした。突起頂部は、肥厚して盲孔が穿たれる。口縁部に沿って沈線が巡らされるが、口唇部側面には細沈線による刻目状の短沈線が縦位方向で密に施されている。頸部が無文帯のi類(399・817)と、頂部下に多条細沈線文が密に施されるii類(820)がある。2類：緩やかで丸みを持つ山形状の波状口縁部を一括した。1類と同様に、口縁部に沿って沈線が巡らされ、口唇側面に多条細沈線文による刻状の文様を巡らしているが、この文様は縦位のみ(1397)だけではなく、右斜位(26・891)であったり、口縁部の傾きに合わせたもの(821)



第19図 D群土器分類図



第20図 E群土器の器形分類図

などが認められる。頸部における文様によって細分が可能で、無文帯を形成するⅰ類(821)と、頂部下に多条細沈線の集合文を施すⅱ類(891・1397)、そして左右の傾斜を交互に鋸歯状に施すⅲ類(26・27)に区分できる。3類:平口縁のものである。口縁部には沈線を巡らせ、口唇部側面に左斜位の刻目状の細沈線が密に施される。頸部は無文帯を形成しており、ⅰ類に分類される(28)。

**b類** 頸部文様帯が形成されず、頸部と胴部の文様が一体化したものの。C群土器第Ⅰ類や第Ⅱ類の系譜と理解される。口縁部の形状等により細分した。1類:波状口縁を呈し、頂部に装飾を伴う突起が付されるもの。縦位に垂下する細沈線文帯により器面を分割し、中間には斜位(1403・1404・1408)や矢羽根状(1614)の沈線文を密に施している。口唇部に沿って沈線を巡らせるが、刻目状の文様は施されない。渦巻文がまま認められるが(1403・1614)、ともに波頂部下に位置し、1614は口縁部に沿って4本の沈線を平走させる。2類:緩やかな波状口縁を呈するもの。口縁部に沿って沈線を巡らせることは、当該土器群の特徴と見られるが、口唇部側面に施される刻目状の文様は、頂部のみ(1405)、右斜行(25・1253)、無文(1409)とバラエティーに富む。1409については、波頂部下にやや大きな渦巻文(もしくは多重同心円文)が配置され、波状の口縁部に沿って平行する沈線文が12条にわたって幅広く施されている。3類:平口縁のもの(1611)。C群土器共通では、第Ⅱb1類とした。口縁部下に幅広い凹線文を区切りながら巡らせ、口唇部側面には刻状の短沈線文を密に施している。口縁部の外反はかなり強い。

**c類** 平口縁部を一括した。波頂部を欠失したものである可能性を持つ。頸部に無文帯を有するもの(798・822)と、頸部・胴部文様一体のもの(280・799・1401など)とがある。口唇部の文様では、下端を沈線で区切らないものが認められる(1400・464)。464については、刻目状の縦沈線文帯を施し、それをやや太い沈線で結ぶB群土器第Ⅳa6類的な文様があり、280もそれに近い。

#### 第Ⅱ類 胴部破片一括

胴部破片を一括した。分類については、部位や描かれる文様要素により便宜的に区分したものであるため、以下に分類の視点と土器片について羅列的にまとめておく。

**a類** 頸部文様帯が描かれているもの(404・693・800・818・892・1399・1402・1412・1413・1581)。

**b類** 頸部文様帯の施されない胴部破片。1類:文様描出がある程度なされているもので、渦巻文が描かれているⅰ類(286・609・706・813・815・816・1414など)と、幾何学的な文様構成のⅱ類(282・440・824・1415・1505)に分けられる。2類:胴部下半の破片。縦位に平行する多条細沈線文が多様に施されているもの(415・828・1410・1411・1421・1422・1423など)。3類:沈線が繊細でやや粗雑なもの(398・419・801・1016)。398については、朝日村・アチャ平遺跡下段出土資料(報告書955番土器)〔朝日村教委1998〕に近似した文様構成と雰囲気がある。

#### ⑤ E群土器:口縁指頭瓦痕文系土器群

本群については、当初半粗製土器類としてF群に分類していたが、口縁部の文様が指頭瓦痕文を連続的に施す点が単純ではありながら特徴的であること、概して個体数が多いこと、そしてB群やC群土器への影響が認められることなどから、主体的要素を含むと判断し、E群土器として独立させたものである。

頸部に無文帯を形成するものと、胴部と同じく縄文で覆われるものなどがある。今回は区分していないが、B群土器やC群土器の影響の現れと考えられる。また、口唇部側面に直接列点文や刺突文あるいは刻目文が施される一群(B群第Ⅳh3類、C群第Ⅳe2類など)は、本類の影響によるものである可能性が考えられる。

本群の分類については、まず復元個体により器形の分類を行い、最後に口縁部により細分類を試みる。当然のことながら、本群は口縁部によって抽出されており、頸部以下については対象としていない。

#### 第Ⅰ類 頸部がくびれる鉢形・深鉢形土器

a類 頸部で強くくびれ、肩部分が屈曲気味に張り出すもので、口縁はほぼ直線的に外傾する。598は頸部の大半まで縄文が施文されるが、1308は頸部を無文帯とし、胴部には乱雑な沈線文が描かれる。

b類 頸部が弱い「く」の字状にくびれる器形で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。頸部は無文帯で、胴部には縄文を地文として施している。1146は、胴部下半が欠失しているため、全形をうかがえないが、鉢形に近い器形となる可能性がある。

c類 頸部が緩やかにくびれ、口縁部が外反気味に立ち上がるものとしたが、頸部のくびれ具合と胴下半部の膨らみ等から、2細別した。1類：口縁部が外反し、胴部がやや膨らむものとした。568の胴部は、下膨れとなるが、251・486・661・958・1177などの大半は底部に向かって徐々にすばまるものとなっている。2類：口縁部の外反がほとんどなく、頸部のくびれが弱いまま底部へ移行する器形で、寸胴なものとした。1659は口縁部が無文帯をなし、胴部に縄文が施される。1561は、頸部以下すべて縄文で覆われる。842については、胴部下半が欠失し、地文の有無は明確ではないが、頸部以上は無文となっている。

#### 第Ⅱ類 胴部上位が膨らむ鉢形・深鉢形土器

頸部がくびれないタイプを一括した。

a類 小形土器の深鉢である。1283は口縁部に1カ所突起を持つ。

b類 やや大形の深鉢である。485には地文がなく、擦痕状の調整痕が残される。

#### 第Ⅲ類 口縁部が内湾する鉢形土器

器形的には、碗形態に近い。口縁部が強く内湾する。273には縄文の地文があり、615は縄文を施した後、指ナデ等により器面を調整し、地文の大半を消去している。

#### 第Ⅳ類 口縁部一括

a類 指頭の痕跡が明瞭なものとした。施文手法としては、外面を押圧するだけの場合、親指と人差指で握みながら圧痕文を施すもの、指のあたる位置をずらして内外面をヒダ状にしてしまう場合などがある。1類：指頭の押圧後、指を抜く際、斜位にはみださせるもの。左側に抜く場合（736）と右側に抜く場合（1561）とがある。2類：指の当て方により文様効果が異なる。指を斜位に押圧する場合、右斜位となるもの（659）と、左斜位となるもの（1533・2078）とに分かれるが、正位で円形に施す場合（422・658・771・1736）が一般的である。

b類 なんらかの工具によって施文されるもの。1類：左側から挟りながら、右側で抜くように連続的に施文するものとした（710・1043）。B群第Ⅳd3類と同じ手法である。2類：工具は不明ながら、刺突状に施文されるものを一括した（16・1654）。ただし、16については、E群本来のものとは少しかけ離れる観があり、検討の余地を残している。

c類 基本的には上述のⅣa2類と同じであるが、別の文様と組み合っているものを便宜的に一括した。1類：刻目文を伴うもので、刻目文が上方の口唇部側に施されるもの（410）と、口縁が屈曲した下側の張りだし部分に施されるもの（468・839）に分けられる。2類：口唇部下から頸部にかけての位置に、横位の沈線文が施されるものとした（1258・1742）。

d類 棒状工具により、肥厚した口縁部側面に刻目状の施文がなされるものを一括した。左斜位（842・1353）と縦位（1352）が認められる。

## ⑥ F群土器：半精製・半粗製・粗製土器群

本土器群は、見出しでも記したように半精製・半粗製・粗製土器を一括するが、半精製品類は精製品と一括した場合が大半でありほとんど含まれない。また、半粗製品についても、口縁部等の形態から精製品類の群別にできる限り含めたため、対象とされる土器群はわずかである。したがって、これまでの土器群に分類されなかった半粗製品の一部と粗製土器について概観することになる。

以下、全体を6類に区分するが、第Ⅰ類と第Ⅱ類が半粗製土器群、第Ⅲ類以降第Ⅳ類までが粗製土器群である。前者は破片類のみのため、分類図は省略した。

### 第Ⅰ類 半粗製土器群

本類は口縁部のみ抽出した。基本的には、口縁部がミガキ等により調整された無文帯を形成し、あるいは口縁部に沈線文等を伴うものである。分類は器形を主として進めるが、口縁部形態の分類とした。したがって、口唇部の微細な形態については、かなり多様となっている。分類ではa～c類まで3類に分類したが、それぞれの1類とした口縁部の無文帯下に沈線を施す類型は、一つの群を構成し、何れかの精製土器群に伴う可能性が高く、2類についてもその可能性は否定できない。

a類 口縁部が直立気味ながら内湾するものを一括した。1類：口唇部をミガキ調整等により無文とし、下端に沈線(677)もしくは縄文の施文具合等(1165)により境界を明示するものである。2類：口縁部がやや幅広く無文帯を形成するもので、以下は縄文地文が施される(1110・1111・2019)。

b類 口縁部が内湾傾向を残しつつ外傾するものを一括した。a類と同じ視点で分類する。1類：口縁部を無文帯とするが、下端を沈線(301・2157・2326など)や縄文の綾線文(2098)などで区切るものである。488は口唇部が肥厚した段の綾線を境界としている。2類：口縁部にやや幅広い無文帯を形成するもので、a類のような境界を明示する文様等が施されない(36・1946・2236・2321など)。

c類 口縁部が外傾上位で外反するものを一括した。1類：無文帯下に沈線が1条巡らされるものである(302・2021)。口縁部がやや開く器形となる。2類：無文帯下に沈線等が施されず、そのまま縄文地文で覆うものとした(389・1764)。

### 第Ⅱ類 大波状口縁の半粗製土器

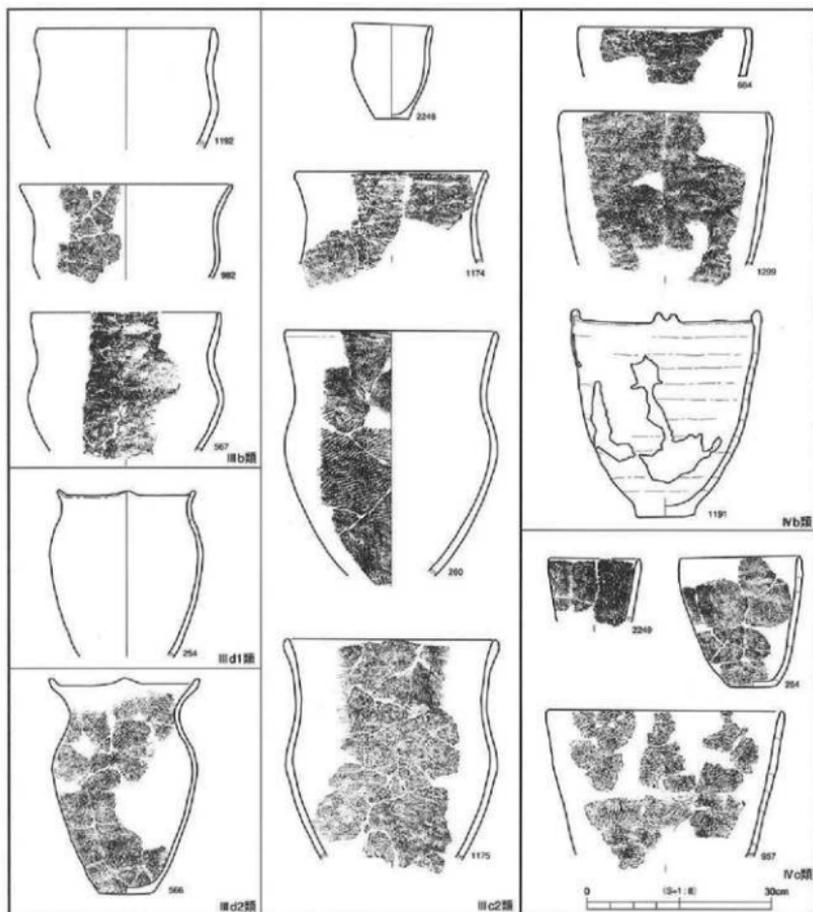
緩やかな大波状口縁を有する深鉢形土器を抽出したものである。個体数が少ないため細分は行わないが、内湾気味に口縁部が立ち上がる深鉢形土器で、胴部中位で若干のくびれをみせるが、基本的には底部から外傾したまま立ち上がる器形となっている。口唇部まで縄文地文で覆われるもの(1713)と、同じく口縁部まで縄文に覆われるが、口縁部が外反気味で端部が肥厚するもの(1612)がある。出自等詳細は不明である。

### 第Ⅲ類 頸部がくびれる鉢形・深鉢形粗製土器

本類の分類については、中形～大形品をa～d類まで区分し、e類については小形品を中心に頸部の屈曲が強いものを一括した。これらのうち前者とした4類については、大半が口縁部・頸部を無文とし、口縁部まで縄文地文で覆う事例は少ない。精製土器群でこのような特徴を持つものはB群土器であり、したがって本類に区分された個体の多くがB群土器の粗製土器群を構成していた可能性を指摘できそうである。

a類 口縁部が外反し、胴部上位の肩部が「く」の字状に屈曲して張り出すもの(2322)。類例は少ない。器種は深鉢形である。口縁部は無文帯で、肩部以下に縄文地文が施される。

b類 頸部がくびれ、かつ口縁部が外反する鉢形土器を一括した。胴部の最大径は中位からやや上位にあ



第21図 F 群土器の器形部分類図

る。口縁部形態では、やや内弯傾向が認められるもの（567・1192）と、外反したままのもの（982・1950）がある。口縁部以下も無文のものが多く、胴部に縄文地文が施されているのは1950が唯一である。

c類 頸部がくびれる深鉢形土器を一括した。口縁部の外反度や胴部の膨らみ等で3類に細分した。1類：口縁部の外反度がかなり強いものとした。例示できるのは1例である（1830）。無文帯はなく、全面縄文地文が施されている。2類：口縁部がやや外反し、胴部の張り出しが認められるものとした。ただし、胴部の張り出しについては膨らみに差異があり、胴部の中位からやや上位にかけて明確に張り出すもの（260・1175など）と、わずかな膨らみをへて底部へ移行するもの（2040・2248など）とがある。口縁部を無文とし、多くは胴部に縄文地文が施されるが（260・782・1175・2040など）、全面無文とされたもの

も若干存在する(2248)。3類:胴部がほとんど張り出さないか、かえってすぼまる器形を一括した。前者には1269・950があり、後者では1535などを挙げるができる。

d類 頸部のくびれが上位にあり、胴部最大径も上位に位置するものとした。全体のプロポーションとしては寸胴傾向が強い。口縁部が短く外反するものとそうでないものとに区分した。1類:口縁部が短く外反するもので、最大径は胴部にある(254)。口縁部には4単位の小さな山形突起が付される。無文。2類:口縁がやや長く伸びるため、頸部のくびれが強くなるもの。最大径は口縁部にあり、4単位の小さな山形突起が付される(566)。縄文が全面に施される。

e類 口縁部がくびれる小形の鉢形・深鉢形土器を一括した。4・5類については、口縁部が無文帯であることから、B群土器に近い存在が想定される。1類:頸部が強くくびれ、口縁部が短く外反するもので、胴部の張り出しが大きいことから壺形態を呈する(489・1763)。口縁部の内面は、蓋受け状の形態を有しているが、これはA群土器第I a類との間わりを指摘できそうである。2類:頸部が「く」の字状にくびれ、口縁部が短く外傾するものである(1762・1937)。胴部の張りが強いので、形状としては広口短頸壺の形態に近い。3類:2類に近似して頸部が「く」の字状を呈するが、角度が緩く、胴部の張り出しも弱い鉢形態を一括した(364・2023・2231)。2023については、斜行するハケ目状の文様が施される。4類:やはり「く」の字状の頸部を有するが、口縁部がやや長く外傾し、壺形に近い形状を呈するものである(1832・2345)。胴部以下は不明。5類:4類に近似するが、「く」の字状にくびれた頸部から内弯気味に口縁が立ち上がるものとした(1809・1897)。頸部以下は不明。

#### 第IV類 所謂バケツ形の深鉢形土器

器形としては頸部がくびれないものということになる。地文的な文様もしくは器面の調整痕としては、無文、縄文、捺糸文、条線文などがある。これら地文等は、頸部が意識されていない器形のためか、口縁などを無文として施されると言うことではなく、大概は全面に及んでいる。この点は、B群土器の特徴とは大きくかけ離れていることになる。これらの一部は、口縁部にも縄文を施すC群やD群土器と組み合わせる可能性を否定できないが、器形そのものが異なることからすれば、外来系土器などとの間わりを考慮する必要があり、今後は各土器群の組成等の検討が必要と考えられる。口縁部の傾きにより細分した。

a類 口縁部が短く外反するもの(580・1866・2020)。口縁部に2個一対の突起が付されるものがある(1866)。

b類 口縁部がほぼ直立するものであるが、内弯傾向が強い(1147・1299など)。2個一対の突起を4単位付されるものがある(1191)。

c類 口縁部が外傾するものとしたが、端部の形状としては、直線的に外傾するもの(957・1143など)と、内弯傾向にあるもの(264・662・1142など)とに区分できる。

#### 第V類 その他の口縁部破片一括

大半が頸部以下を欠失しているため、全体の器形を想定し得なかったものなどを一括した。大きく3類に区分したが、雑駁な部分を含む。なお、頸部から口縁部まで縄文地文で覆われる事例は、一部を除けば(699)ほとんどない。したがって、大半が口縁部・頸部が無文もしくは全面無文のもので占められていたと考えられる。頸部・口縁部が無文の土器群とは、B群土器の特徴であることからすれば、これらの土器類は、かなりの部分がB群土器に伴う粗製土器である可能性が高くなる。

a類 口縁部の内弯が概して大きなもの(1833・2148など)。個体数は少ない。

b類 口縁部が内弯気味に外傾するもの(426・936・2163など)。

- c類 口縁が直線的に外傾するもの(1097・1161など)。  
d類 口縁部が外反するもの(17・495・937・2096など)。

#### 第VI類 胴部破片一括

本類は、器面調整もしくは地文によって単純に分類したもので、器種・器形は考慮していない。

- a類 ミガキ調整やナデ調整等により無文のもの(934・983・1433・1834など)。  
b類 条線文。1類:文様のな効果を図意した施文がなされているもの(1169・1724・1767・2234・2305など)。2類:縦位もしくは斜位に施され、器面調整的な意図が優先されているもの(304・785・1168・2242など)。  
c類 各種縄文地文。1類:斜縄文。LR単節が主流(702・2197・2022・2342など)。2類:施文方向を斜位にとり、縄目文様の条が縦位に施されるようにしたもの。縄目の玉がやや大粒のもの(788・789・2057)と並製(943・1436)がある。前者は、H群土器とした北陸・気屋式土器との関連性が注目される。3類:施文方位の調整により、縄目文様の条が概ね水平となるように施文されたもの(309・310・2244など)。4類:綾線文を伴うもの(252・1164・1720など)。主に縦位に施文されている。5類:附加条の原体で施文されたと考えられるもの(1537・1865など)。  
d類 熱糸文(1112・2241・2323など)。主に絡条体で施文されている。

#### ⑦ G群土器:底部一括

本群については、器種による区分を行わなかった。このため、鉢形・深鉢形土器以外に壺形などの底部が含まれているが、煩雑を避ける意味で一括してまとめておくことにする。

##### 第I類 胴部が内湾気味に立ち上がる底部破片

- a類:胴部が大きく外傾して開くもの。壺形もしくは、鉢形の可能性がある。底部が大きなもの(1307)と小さなもの(2044・1197)がある。  
b類:最も一般的な鉢形・深鉢形の底部(963・973・1225・1560など)。若干内湾傾向で立ち上がる。  
c類:直線に近い形で外傾する深鉢形の底部(573・980・1442など)。

##### 第II類 側縁の稜線が明瞭な底部破片

- a類:胴部の立ち上がり急なもの(240・255・2030など)。  
b類:胴部の立ち上がり外反するもの(942・1439など)。  
c類:底部側縁が張り出すもの(1589・2245など)

##### 第III類 台付き底部

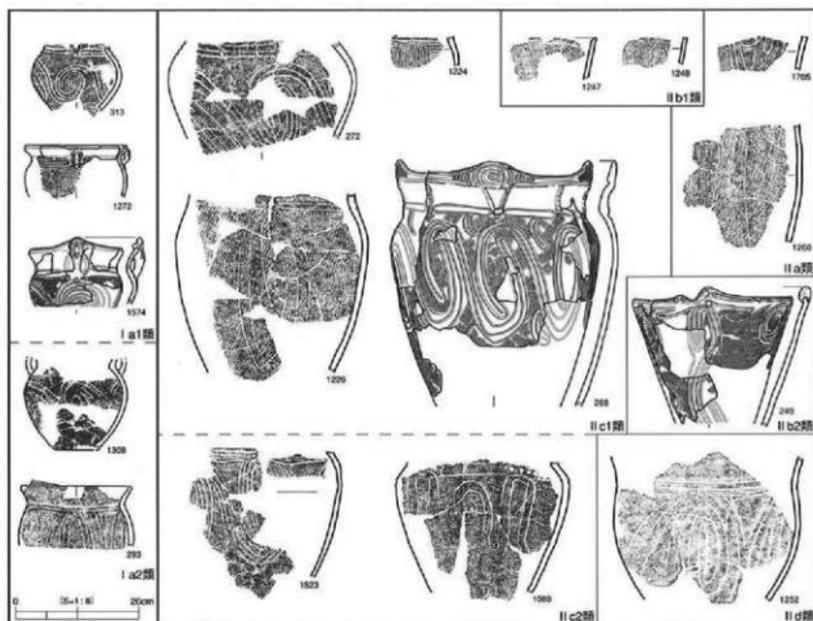
「ハ」の字に開く高台が付くもの(784)。出土量は極めて少ない。

##### 第IV類 その他の底部

胴部破片を欠失し器形が不明なものを一括した。底部のみが離れやすい器種の可能性が高く、胴部の外傾度が大きいことから、鉢形土器が多く占めているものとみられる(44・1044・1045など)。

#### ⑧ H群土器:気屋式系土器

気屋式土器と判断されたものを一括した。掲載資料中で把握された破片は10片程に過ぎず、この他に粗製土器に分類したF群第IV c 2類の数片、および文様要素に影響等が想定される資料等を含めても、20片に満たない程度である。それぞれの土器片についても小片が多いことから、本群の記述にあたっては、細



第22図 I群土器の器系部分類図

分はしない。文様的に見ると、口縁部に円形の刺突列点文を多く施すものが多い部類で確認されている。これらの口縁部は、受口状に内湾するもの（1744）と外傾し口唇部が肥厚するものがある（1447・1745・2343）。また、口縁部に楕形の刺突列点文を施す事例が、パターンはかなり異なるがいくつか確認できる（1915・2352）。このほかとしては、隆線に刻みを施すものが若干量認められた（496・1667）。

#### ⑨ I群土器：網取式土器群

東北地方南部、特に宮城県南部から福島県域における後期前葉期の土器群を表す名称として、便宜的に網取式土器群と呼称する〔本間1990〕。出土量は、在来系とした各土器群からみれば僅少であるが、比較的分離が容易な文様と、復元率が高く大破片が多いことから、存在感が大きい土器群である。器種・器形を中心に若干の文様要素を含めていくつかに分類し概観したい。なお、網取式土器の編年〔本間前掲〕に対し、便宜的な対比を行った。

##### 第1類 鉢形土器

a類 頸部がくびれるものを一括する。橋状把手状で装飾性の高い把手1個ないしは一对が付けられる場合が多い。1類：網取式土器文化圏の製作者によるものである可能性の高いものとした。文様や器形が洗練され、搬入等の可能性も高い。横位に連結された渦巻文が特徴的である（313・1272・1574）。242は装飾性の高い把手を有する。網取Ⅱ式新段階に相当する。2類：網取式土器文化圏外の製作者によるものと判断した。1309は、文様的には1類の渦巻文の原則を守るが、渦巻文にB群土器系の要素が取り入れら

れている。293も同様で、文様はB群土器に特徴的な文様（特に第V a 2類の文様）との折衷と考えられる。やはり、網取Ⅱ式新段階に相当すると判断される。

**b類** 頸部が「く」の字状に角張る鉢形を一括した（490・1522・1772）。把手を有するものと持たないものが認められるが、後者に把手がないとの確証は取れていない。なお、本類は、文様要素的にI群と認定したが、福島県域で一般的であるのかは明らかでなく、検討の余地を残している。

#### 第Ⅱ類 深鉢形土器

**a類** 頸部がくびれない深鉢形土器およびそれらの胴部破片と判断したものを一括した。口縁部には一帯の隆線が巡らされ（1092）、口縁部はミガキ調整等で無文帯を成すが、短い口縁部に凹線状の沈線を巡らせたものもある（523）。また、口縁部の無文帯に「ノ」の字状に隆帯を配した事例が確認されている。胴部文様としては、沈線による蕨手状の区画文（1031・1268・1705）があり、太い沈線1条により蕨手状のモチーフを描くものも認められる（2092）。なお、地文である靱目文の条が縦走する傾向が認められる（1268・1705）。網取式では、Ⅱ式古段階に併行するものが主体と考えられる。

**b類** 胴部が底部から直線的に外傾し、口縁に至る深鉢形土器。1類：弧状の沈線文と盲孔が特徴的である。1644は、口縁部に「ノ」の字状の沈線を配し、口縁部に施される横位の沈線文との交点に盲孔が穿たれる。このほかに、弧状に垂下する沈線文の起点に盲孔を施すものや（510・1247・1248）、口縁部に盲孔がある2071も本類に含めた。おおむね網取Ⅱ式新段階と併行するものと考えられる。2類：口縁部に大小の差異がある2個一対の突起が付されるもので、底部からほぼ直線を外傾するものである（249）。文様としては上下2段の渦巻文をS字状に連結した文様と蕨手文から変異した沈線文が施される。

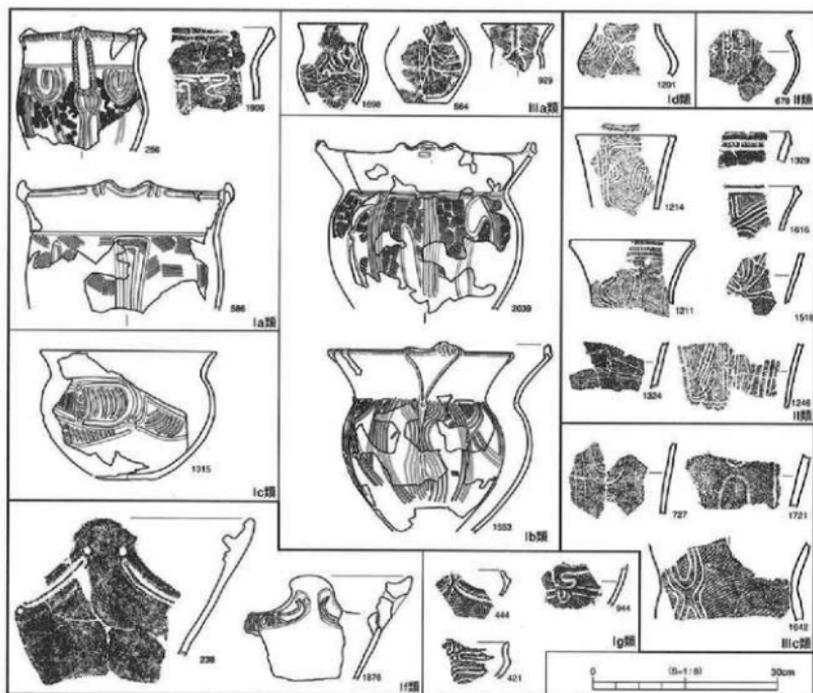
**c類** 頸部が強くくびれ肩が張る深鉢形土器。網取式土器文化圏の製作者によるものと判断される1類と、文様が稚拙で在地化の傾向がうかがわれる2類に区分した。1類：3本一組の入り組みS字文を横位に施すもの（268・272）と、頸部に巡らされた2本の平行沈線文を縦の刺突文により4単位に区分し、胴部には1本沈線による上下を屈折させた「の」の字状の入り組み文が描かれるものがある（1226）。前者は網取Ⅱ式新段階に、後者はそれより古く古段階程度と併行しそうである。このほかには、縦位や斜位に垂下させる沈線文が多用され（287・1224・1245など）、渦巻文を伴うものがある（924）。2類：本類とした2点は（1089・1523）、器形そのものは網取式の形態を呈するが、両者ともに横位連結のS字文を範型とし、その模倣的な沈線文が描かれている。

**d類** 頸部が緩やかにくびれる深鉢形土器（1252）。文様的には、1226と272の文様帯が融合したようなモチーフが描かれている。479・848については、文様から本類に分類したのものである。文様は、網取式からの系譜で捉えられるが、器形はB群土器の深鉢形態を写したものとなっている。

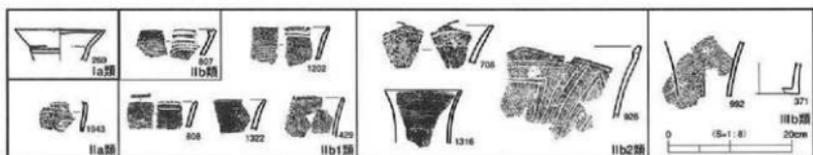
#### ⑩ J群土器：堀之内Ⅰ式系土器群

十三本塚北遺跡出土の主體的な土器群とは、そもそもが堀之内Ⅰ式期の土器であり、様式論的なくくりは堀之内Ⅰ式土器の範疇にある。したがって、これらの土器群の中から堀之内Ⅰ式土器の抽出を行うことは、一つの矛盾を抱えることとなる。そこで、本項で抽出する堀之内Ⅰ式系土器群とは、これらを前提としつつ、これまでに述べてきた各土器群に分類することが困難で、かつ関東的な要素が認められるものなどを中心としてまとめた。分類については、器種的な要素から3類に区分し、器形による細分を行い、概括的に記述することとした。

#### 第Ⅰ類 鉢形土器



第23図 J群土器の器形部分類図



第24図 K群土器の器形部分類図

a類 頸部が緩やかにくびれ、口縁部が外傾する鉢形を主とする土器である。口縁部は無文帯を主流とする。口唇部文様としては、B群土器的な文様をもつもの(256)と、その範囲では捉えられない2個一対の突起を持つもの(586)、そして口唇部に刺突文が施されているもの(745・1929)などがある。胴部文様はバラエティーに富み、共通項は見出し難い。

b類 頸部が「く」の字状に屈曲し、外傾を強化した口縁が内弯気味に開く器形である(1553・2039)。胴部の張り出しはやや強く丸い。器厚は概して薄く、焼成等は良い。胴部文様には、網取式要素が入り込んでいる。

c類 「く」の字状を呈する頸部に、やや外反する口縁部が付き、器高が低い甕形に近い器形の鉢である。311の主文様は、その大半を欠失して不明であるが、1315は沈線区画内を沈線文で充填した文様が横

位に展開したものとなっている。

d類 口縁部を欠失するが、壺形に近い器形を呈する(1201)。連結渦巻文が横位に展開する。

e類 頸部が屈曲した鉢形土器の胴部破片と判断されたものを一括した。文様的には、沈線文系(497・723・1379・2282)、渦巻文(626・1900)と垂下する蛇行沈線文(679・1139・2017など)が目立つ。

f類 胴部が直線的に大きく開く器形の鉢形で、4単位の裝飾突起を有するものである(238・1876)。

g類 頸部が角張り、口縁部が内傾しつつ外反気味となる鉢形である(421・444)。

## 第II類 胴部が直線的に外傾・外反する深鉢形土器

ここでは出土量がそれほど多くないため区分はせず、口縁部と胴部片で便宜的に分類した。

a類 器形的には、直線的に外傾するものと(1214・1406など)、外反して大きく口縁が開くもの(1616・1211など)とがある。口縁部に刻みを施した隆線(705・1211)や沈線(1311)を巡らせる。その他、沈線文を多用した1406や709などを本類とした。

b類 胴部破片を一括した(811・1246・1324・1518・1570)。文様としては、蕨手文からの系譜と考えられる文様(1214・1246)などが認められる。

## 第III類 頸部・胴部がくびれる深鉢形土器

a類 小形品で、形状としては広口壺に近似したものを一括した(564・929)。口縁部が肥厚したり(1350)、無文帯とするもの(1698・2170)などがある。

b類 大形の深鉢形土器としたが、事例は少ない(1279・2119)。

c類 胴部破片を一括した(727・934・1264・1642・2156・2320など)。

## ① K群土器：堀之内2式系土器群

本土器群には、堀之内2式土器のほか加曾利B1式土器の可能性を含むものなどを一括的にまとめた。廃棄場からの出土層位は、大半が上層位となる1～2層であり、層位的にはD群土器と同じ傾向を示している。出土量は少ないが、特徴的な文様が多く、ミガキなどの調整が丁寧に施されていたことなど、意外に判別が容易であるため、僅少土器群としては図化された破片数が多い部類となる。ただし、土器片のほとんどは小片であり、復元がある程度なされた個体はほとんどない。この点は出土量との正比例的な関係がうかがわれる。文様としては、細沈線文帯を施し、繊細な入り組み文を施すなど、所謂石神類型〔秋田1996・百瀬1996〕と呼ばれる一群が属する。分類としては、器種により大別するが、大半が小形の深鉢形に限定されているため、これらは口縁部を主にした器形によって区分することとする。

### 第I類 鉢形土器

a類 口縁部が大きく開口し、胴部は底部を欠失して不明ながら小さく丸みをもつ形態となっている。頸部下に2～3条の沈線、口唇部内面にも1条の沈線を巡らせ、端部に刻みが施されている(269)。

b類 口縁部の内面文が発達したものを一括した。器形全体をうかがえる個体はない。加曾利B1式に近い部類が含まれていると考えられる。外面の文様は、無文のもの、細い沈線文(791)と斜位短線帯(807・1320・2355)を伴う構成をとるものがある。本類については、鉢形としたが、一部深鉢が含まれている可能性が残されている。

### 第II類 深鉢形土器

a類 口縁部から胴部上半が内湾する器形の一括した(730・1943)。詳細は不明である。

b類 1類：口縁部がやや外反する傾向を持つがおおむね直線的に外傾するものを一括した。口唇部内

面に沈線を巡らせるものが多い。文様としては、胴部上半に縦長の対弧文を横位に連続的に描く磨消縄文が描かれるもの(429・991・1207)と、細沈線文帯が施され(392・1202・1204)、繊細な入り組み文を伴うもの(986)などがある。このほかには、沈線区画内に条線文を施すもの(808)、縄文が施されるもの(731)などが認められる。2類：口縁部がやや大きく外反するものである。926は4単位の波状口縁を持ち、三角形を重ねた磨消縄文が施されている。このほかには、口縁部内面に沈線を巡らせ、外面が無文のもの(1203・1326)、沈線を数条巡らせるもの(397・708)、沈線文を多く巡らせ、繊細な入り組み文を伴う「石神類型」とされるもの(1316)などがある。

c類 その他を一括した(683・2027・2354)。

### 第III類 胴部破片一括

a類 胴部の傾きが内湾もしくはおおむね直線的であるものを一括した。沈線区画による縄文帯が巡るものが多い(629・812・1321・1653など)。

b類 外反傾向のものを一括した。重菱形文を描くもの(992)のほか、縄文帯を上下2段巡らせるもの(790)、沈線文帯を巡らせるもの(393・814・825・985・1205・1255など)などがある。また、底部の形状は下端が反って張り出している(371・372)。

## ④ L群土器：未分類の土器・その他の土器

これまでに群別した土器群に含まれるものであるが、検討不足等によりその峻別に至らなかったもの、所属不明のものなどを一括した。紙幅の関係もあって、記述を割愛し、遺物観察表に代える。

### b. 壺形土器

壺形としては、鉢形や深鉢形の類でも、壺形態に近いものは存在したが、本項では頸部がないか、もしくは無頸壺的なものを一括した。出土例は少ない。器形は個々バラエティーに富み、同一のものがないことから分類しない。

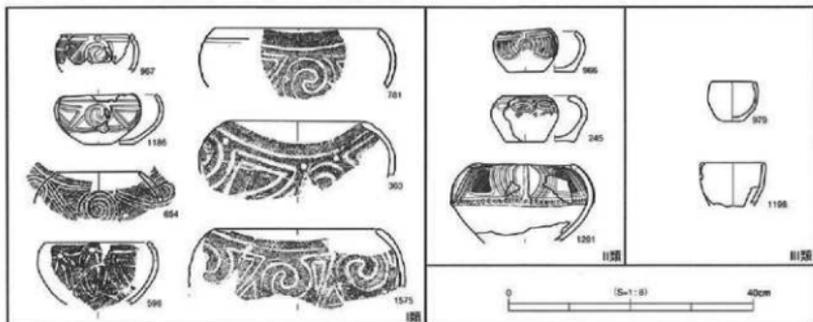
B群土器 1528は、扁平な胴部に外反しながら短い口縁部が内傾して付くものである。文様から本群としたが、縦の隆帯などは特異であり、詳細は不明である。

C群土器 975の無頸壺は、渦巻文が横位の沈線文で連携することから本群としたが、出自は定かでない。口縁はかならずばまり、4単位の把手が付く。1024は、口縁部が強く屈曲して外傾し、短いものである。文様から沈線文系としたが、明確ではない。

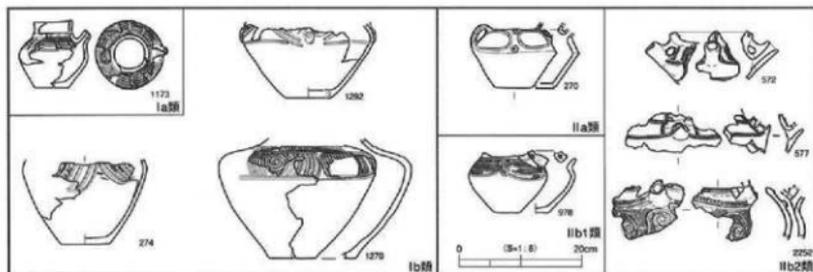
### c. 碗形土器

碗形とは、口縁が内湾内傾する丸みを持った器形の鉢を一括したものである。器形は大きく4類に細分される。第I類は底部もやや小さく丸みを持つが、第II類はやや大きく立ち上がり、境界をなす稜線も明瞭なものとした。第III類は、碗形というより小形の鉢に近い。これらの類別は、群別した土器群にも対応するところがあるため、群別にしたがって概観する。

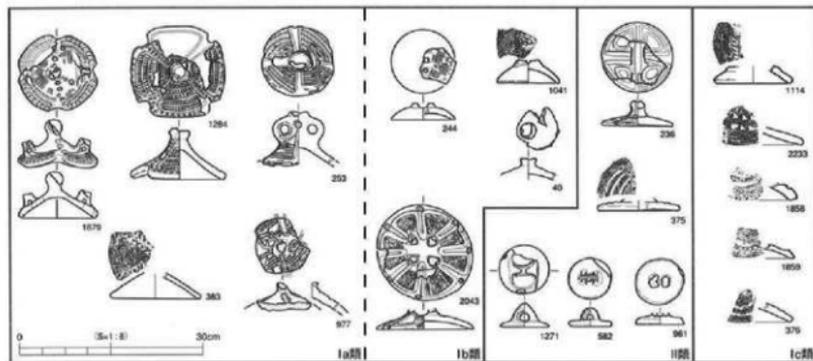
B群土器 碗形では主体を占める一群で、全て第I類に属する。文様の主体は、渦巻文と三角文が連携し、充填縄文による構図が主流となる(367・781・1575など)が、縄文地文に沈線文を描き磨消を加えるもの(967・1814)もわずかに認められる。このほかに列点が要所に配されたもの(363・1536・2120など)や、やや太い沈線文で描かれたもの(656・1186)などがある。なお、654や1814は、沈線が中細で文様の



第25図 椀形土器の分類図



第26図 注口形土器の分類図



第27図 蓋形土器の分類図

構図そのものも主体的な文様から変異しており、時期差もしくはI群土器(313の文様など)との折衷的な土器である可能性が考えられる。

**C群土器** 口唇部に斜位の短沈線を巡らせ、口縁部には長い楕円状の区画と短沈線を配し、胴部を沈線文で埋め尽くすものが一般的である(41・425・655・657など)。第I類で占められる。

**D群土器** 全体的な構図は、C群と大きな変化はないが、沈線が細線化し、矢羽根状に細かく施されるものである(31・607・608)。全て第I類に分類される。

**F群土器** 口縁部が若干内湾、もしくはほぼ直立する第III類の小形無文鉢形である(979・1198)。

**I群土器** 深鉢形土器などの文様(1247・1248)に近似することから本群としたが(596・2296)、文様の大元はB群土器の模倣である可能性が高く、本群独自の器種ではないかも知れない。

**J群土器** 堀之内I式系と考えられるものを一括した。底部の形状が判明しているのは、小形の2点のみである(245・966)が、底部を欠失した口縁部のもの(484・1263・1291)も、一応第II類に分類した。

**L群土器** 特異な形態や装飾を持つものがあり、群別に躊躇したものを一括した(1134・1711・2316)。

#### d. 注口土器

注口部を除く基本的な形態を分類すると、壺形(第I類)、鉢形(第II類)に大別され、定型化した土瓶形は確認できなかった。壺形では、胴部上位の肩が強く張るa類と、中位が膨らむb類に区分される。また鉢形では、胴部が屈曲しソロバン玉形を呈するa類と、丸い碗状を呈するb類に細分することができる。注口土器のほとんどは関東系とされるJ群・K群に属し、他に在地のA群で理解できそうなものが若干認められる程度である。

**A群土器** 全て第IIb類となるが、J群とは別類の2類に区分した。刻み目を持つ隆帯や刺突文等が施される(557・572・2252)。

**J群土器** 注口土器の大半を占める。第Ia類は、ほぼ完形の1点(1173)を除けば、胴部の破片等で占められ(721・1381など)、全形をうかがえるものは少ない。第Ib類については、口縁部が欠損して全形をうかがえないが(274・1270・1292)、頸部の内傾がきついもの(514・547)や、肩が張るもの(1944)などを一括した。第II類については、a類の1点(270)のみであるが、b1類も少ない(978・2079)。978については、「の」の字文に近い単位文が施されている。第III類としたものは、本群に含めるも、判別できないものなどを一括したものである。

**K群土器** 全形をうかがえないため、器形そのものは明らかでない(796・994・1327)。頸部の内傾がきついため、一応第I類に含めておく(c類)。

#### e. 蓋形土器

蓋形土器の分類については、刺突文等が施されておれば、在来系のA群土器である可能性が高いとして分類することもできる。しかし、磨消縄文が描かれていたり、沈線文のみのものが、B群やC群に区分できるのかというと、文様構成的に整合しているわけではなく、さらに無文のものが存在する。これらのことから、蓋形の分類については群別をせず、器形による分類とし、笠形状(第I類)と円盤状(第II類)の2形態による大別から概観したい。

第I類 内面天井部の形状により2類に細別が可能である。まず、天井が高く三角状を呈するa類と、天井部が丸みを持って浅くくぼむ程度のb類に区分できる。a類:概して豊富な文様が描かれ、身の波状

に合わせ、4カ所が小さくめくれる形状を呈しているなどの特徴がある(1284・1879)。この2点は、沈線が太く、短線化した刺突文が描かれている。やや形骸化した刺突文(977)や隆線を刻むもの(383)、沈線のみもの(253)など、文様としてはバラエティーに富む。b類：縄文地文のままのもの(244・1041)や無文のもの(40)が多いが、幅広の沈線で区画したあと縄文を磨消したものが認められる(2043)。c類：天井部が欠失して、2細分ができないものを一括した。幅広の沈線を施すもの(376)、刻みを有する隆帯が巡らされているもの(1114・1859)、三角形の刺突文が施されているもの(2233)などがある。

第Ⅱ類 第Ⅰ類との形態差は、身となる容器の器種が異なっている可能性が高く、また系統的にも出自に差異があった可能性が想定される。一般的な形状としては、若干粗雑さがうかがえる円盤に把手1個を付けたもので、無文の場合が多い(582・961・1271)。これらは小形品の部類であるが、やや直径が大きいものでは、幅広の沈線文が描かれている(236・375)。

## 2 土製品類・ミニチュア製品

本遺跡から出土した土製品類は、廃棄場から出土した多量の土器群と対比しても、極めて少なかった。種別としては、ミニチュア土器、土器片円盤、装身具、土玉、土偶、土鍾があり、個数は少ないが多種多様である。これらは、土器群の群別に合わせ、便宜的にP群として一括し、各種別についても群内における細別として区分した。なお、分量や色調等の基本的な属性については、遺物観察表に記載してある。

### 1) ミニチュア土器

小形の鉢類2点をミニチュア土器(P群第Ⅰ類)と認定した。2356は、幅広の沈線と刻み状の刺突文が施される小形の鉢で口縁部に1単位の突起が付く。また底部の縁辺には4カ所に抉ったようなスリットが刻まれている。この底面縁辺には、タール状の煤が付着し三カ所で胴部上方へ煤の吹き上がりが見取される。文様的にはA群土器の系譜に連なるが、幅広の沈線文などは、B群土器の影響と見られる。2357は、口縁部が無文帯、胴部は縄文地文に太い沈線文が施される。この文様の特徴からすれば、B群土器の範疇で捉えられ、胴部文様の構図は、B群Vb1類を祖型としていたことがうかがえる。口縁部は突起状を呈した1単位の波状となる。

### 2) 土製品類

土器片円盤(P群第Ⅱ類) 3点が確認されたが、内1点は中央が穿孔された有孔土器片円盤である(2361)。本品は、柏崎市大宮遺跡など前期後半期に通用であるが、用途や機能についてはほとんど言及されていない。他2点は、B群(2360)とC群(2359)の土器片が再利用されたものである。

土製装身具(P群第Ⅲ類) 出土が確認されたのは2点のみである。2364の穿孔部はやや大きく、耳飾りと考えられる。2363についての穿孔は針の孔程度と小さく、脊椎の形状に近似していることなどから類推すれば、複数が細紐などに連ねられて使用されたことも考えられる。

土玉・土偶(P群第Ⅳ類) 2366は不整形な土玉であるが、用途・機能は不明。2365については、土偶にともなう手足のパーツである可能性が考えられる。

土鍾(P群第Ⅴ類) 楕円形状に整形した粘土版の両端に、紐等を巻き込むスリットを刻む(2362)。

### 3. 縄文時代の石器

縄文時代の石器類は石核、剥片も含めると合計3477点出土している。重量で約417kgとなる。石器（トゥール）2235点に対し、石製品は5点である。土器と同様に大半が廃棄場からの出土であるが、当遺跡の石器組成や石器製作の状況を示す資料としてとらえられるものである。ピット類からの出土も2割程度を占めるが、特殊な出土状況を示すものはなかった。

概観すると石皿の点数が突出して多いが、何らかの要因で破損、分割された資料をそれぞれカウントしたため、結果的に数量が大幅に増えたものと考えられる。出土位置毎に接合を試みたが、接合されたものは僅かだった。また、石鎌および生産に関わる大小の剥片や未成品が多く出土しており、遺跡内での積極的な生産活動が読み取れる。ピエス・エスキューも多く出土しており、石鎌生産と関わりをもつ資料が相当量含まれるものと想定される。

なお、実測図掲載資料は、観察表に各データを個別掲載している。

#### 1) 各説

石器類は全16種類に分類された。この各説では図化掲載した15種・300点の資料について、器種別、項目別に説明や分析等を行う。剥片は約1300点出土しているが、今回は掲載を割愛した。原石は特筆すべき石材のものに限定し掲載した。

##### a. 石鎌（1～79）

総数で123点出土している。加工の度合いや形態などから成品と判断されるものが58点、未成品は65点である。ただし、不定形石器やピエス・エスキューとした資料の中にも石鎌の未成品が多く含まれるものと想定される。成品は全て掲載した。

形態分類 未成品の中にも成品の形態がうかがえるほど加工が進んだものも存在するが、ここでは成品58点のみに限定して分類作業を行った。

①無茎鎌 I類 凹基鎌 a 基部の袈りが大きいもの（1～13）

b 基部の袈りが小さいもの（14～34）

特徴：aには大形のものが目立ち、身部に袈りを有するものや鋸歯縁状加工されたものが含まれる。

II類 平基鎌（35～54）

②尖基鎌 III類（55） 特徴：基部下端が若干尖がる。IIとIVの中間形態と思われる。

③有茎鎌 IV類（56～57） 特徴：凸基有茎鎌のみで、基部にやや未発達な込入が施される。

④円基鎌 V類（58） 特徴：概略片面加工である。

無茎鎌が主体を占める。中でも凹基無茎鎌が過半数を占め、次いで平基無茎鎌が多い。一方、有茎鎌は2点のみの出土である。尖基鎌とした1点は側縁下半にやや発達した袈りをもつもので、平基鎌と凸基有茎鎌の中間形態としてとらえられるものである。概して茎部をもたないものが多いことから、矢柄の先端に切れ目を作り出し、石鎌の基部下端を差込んで固定されたものと想定される。基部加工の特徴の一つとして、平基鎌はほぼ均等の大きさ、鋭利角の連続剥離を行い、直線状の基部を形成している。一方、凹基

族は中心付近の剝離を大きく鈍角に行い、抉入を作り出している。

①無茎鎌（1～54） 1～13は基部の抉入の発達した凹基鎌である。大振りなものも含まれる。1～3は側縁が強く内湾するものであり、3は寸詰まりな形となる。5は先端部の欠損個所に再加工痕がみられ基部周辺に黒色付着物が観察される。8は最も小形の成品であり、長さ・幅ともに僅か1cm強を計る。比率はほぼ1：1である。9は唯一の黒曜石製の資料である。先端や基部の形態が特異であり、石質も本遺跡から出土する原石、破片とは明らかに異なるものである。10～12は大形で細身となる一群である。内2点に搬入石材が用いられている。13は両側縁にも抉入が施される資料であり、断面が比較的厚手となっている。

14～34は抉入の未発達な凹基鎌である。24・25は素材の主要剝離面を残す斜片鎌である。25は横長斜片素材の周辺のみ平行した2次加工が施されており、パルプの厚みがそのまま残されている。32・33は小形の凹基無茎鎌である。やや不揃いな剝離が施されるが、全体的に丁寧な整形が行われている。34は、側縁に微細な剝離が連続して施され、非常に鋭利な鋸歯縁状を呈する。

35～54は平基鎌である。36は薄手の横長斜片を素材としたもので、側縁にはほぼ同じ大きさ、角度の調整剝離が整然と連続されている。下半部に黒色付着物が散漫に観察される。40は微細な剝離が顕著ではなく未成品の可能性もあるが、側縁には本遺跡で特徴的にみられる斜位平行剝離が明瞭に観察される。48～53は側縁が直線的に整形されたものである。基部の剝離角が側縁部のものよりも急となる特徴をもつ。

②尖基鎌（55） 僅かに基部が尖るものである。長さ比べて幅が比較的広く、基部の調整が粗雑である。

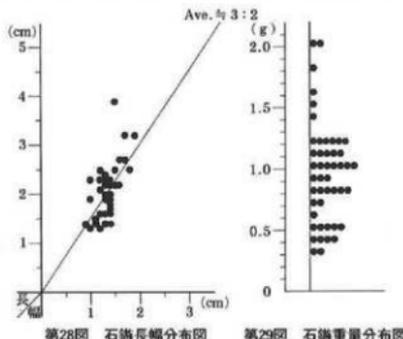
③有茎鎌（56・57） 2点出土しており、何れも凸基部に抉りが入る凸尖有茎鎌である。側縁に直行し側縁から中央部まで貫ける調整剝離が特徴的にみられる。

④円基鎌（58） 片面に主要剝離面を大きく残し、横断面はカマボコ形を呈する。基部の剝離角はかなり急斜である。横長斜片を素材としたものと想定される。

遺存状態 成品の欠損部位は先端部が非常に多くみられ（欠損率：28/58）、使用等により何らかの対象物に接触した結果欠損したものと想定される。反対に、装着された側となる基部の遺存率は高い（欠損率：12/58）。また、欠損した資料が多く出土していることから、遺跡外で欠損したものが矢柄とともに回収され遺跡内に持ち込まれた後、廃棄されることが多いものと考えられる。大幅に欠損した資料は確認されておらず、その場合は遺跡内に持ち込まれずに遺跡外で廃棄されたものと想定される。

素材 石材は、在地石材の玉髄とチャートが大半を占める。搬入石材としては安山岩や頁岩などが挙げられるが、比率的にはかなり低い。黒曜石製の成品が1点出土しているが、形態や成形の特徴が特異であり搬入品の可能性が高い。在地石材は小礫から両極打法により作出された素材が多く用いられている。その一方で、搬入石材は拳大の石核から剝離された斜片を素材とするものが目立つ。形態との関連性として、主体となる無茎鎌以外のものは全て搬入石材で製作されていることが指摘される。

付着物 成品の中には、不明瞭ながらタール状の黒色付着物が肉眼で確認できる資料が4点みられた（5・30・35・36）。成品全体に占める割合は約6.



8%となる<sup>1)</sup>。付着部位は先端部以外に点在するように観察されるが、基部中央にやや密集するように看取される。

**法 量** 全体に小型のものが目立ち、尖頭器の特徴を示すような形態や大きさをもつものは確認されなかった。形態と法量にも関係がうかがわれ、I a 類には大形のものが目立った。長さの平均値は2.1cm、幅の平均値は1.4cmであり、長幅比は3:2となる。

**再加工** 再加工痕が認められる資料が1点出土している(5)。先端の欠損部に押圧剝離を連続している。鈍角な剝離が繰り返されているのみで、全体の形態を変化させるには至っていない。

**未成品** 未成品は、成品に近いものから不定形石器等との区別が難しいものまで出土している。両極技法を用いて小礫を半砕し素材を作出した後、周縁部から求心状に二次加工が行われているものが目立つ(59-63)。中段階として、粗雑な加工により概ね二等辺三角形の未成品形態を作出しているもの(70・71・74)。全体に整形を行い形態や側縁部の厚さを決定していく過程で、基部の抉り等が作出されているもの(76・77)。最後に側縁にほぼ直行する斜行剝離が丁寧に施され、成品として完成されている。

#### b. 石錐 (80-87)

全8点出土している。明瞭な握み部をもつものは3点(80-82)出土している。握み部が不明瞭なものとしては、棒状のものが1点<sup>2)</sup>(87)、二等辺三角形を呈するものが2点(84・85)、先端のみに集中した加工を施し錐部を形成した粗製のものが2点(85・86)検出されている。

特徴として、頭部まで入念に整形されたものは、横断面が三角形を呈する三稜剝片が素材となるものが目立つ。錐部の下半が欠損するものや、先端部が明瞭に摩耗した資料も存在し、刺突・穿孔等の機能が想定される。穿孔が施された石製品は1点のみの出土であり、主に骨角器や木製品の穿孔に使用されたものと想定される。

#### c. 打製石斧 (88-93)

成品6点が出土しており、小振りのものに限られる。薄手の大形剝片と平坦礫を素材とし、平面形態は分銅形・短冊形のみがみられ、刃部形態は円刃、片刃のものに限定される。石材は搬入石材である良質な頁岩が5点中4点を占め、肉眼的な色調や質感から同一産地と推定される。頁岩製のものは側縁部が抉り調整により緩やかに内湾し、楕形に近い分銅形を呈するものが多いことを特徴とする。

89-92は頁岩製の資料である。89は横長剝片を素材とするものであるが、下半部が欠損し刃部再生行為が行われている。91は頭部に激しい摩耗痕が残り、92には刃部周辺に摩耗痕と線状痕が明瞭に確認できる。頁岩製の成品は概ね分銅形形態を呈するものに限られる。93は、輝石安山岩製のもので、薄手の横長剝片に粗雑な2次加工が施され刃部が形成されている。形態は短冊形を呈する。

#### d. 磨製石斧 (94-133)

全39点が出土している。未成品4点を含む。蛇紋岩製のものが大半を占め、大形品から小形品まで大きさにバラエティーがみられる。未成品と原石が少量出土しているものの、成品の製作等に伴って生じた剝片やチップなどは僅かしか確認されていない。このため搬入品が大半を占め、積極的な製作活動は行われていなかったと思われる。一方で凝灰岩製の未成品が目立ち、自給的小規模生産が行われていた可能性も考えられる。

**形態** 大形品は、概して平面形・断面ともに丸みをおび、小形品は平面形・断面は直線形である。刃部形態は概ね凹刃であるが、直刃のものが数点みられる。後者は刃部再生後の特徴を示すものにとらえられる。最大幅が長さの中間付近に一致するものが1点存在するが(99)、概ね最大幅は刃部付近に集中する。面取りが非常に丁寧に行われており、頭部まで左右対称となるものがみられる。

**遺存状態** 刃部が欠損した資料が多くを占める。大形品は刃部の破損が特に顕著であり、伐採時に生じる非常に強い衝撃を示すものとして捉えられる。ところが、刃部のみ出土は少ない。これは遺跡外で使用されたものが破損し、破損した部分はその場で廃棄され、残存部分は柄とともに遺跡内に回収され廃棄されたものと想定される。しかし、刃部のみ出土も認められるが、これらについては遺跡内で使用し破損したものが廃棄されたものと考えられる。

**法量** 欠損品が大半なため不明となるものが多く、まとまった法量データはとれなかった。便宜的に推定の長さが5cmを超えるものを大形品(94~122)とし、5cm以下のものを小形品(127~132)として分けて掲載した。

**石材** 蛇紋岩とこれに類似する角閃石岩が大半を占め、凝灰岩も若干量認められる。特筆されるものとしては、当該地では玉類に多用される珪長岩製の資料が1点みられる(95)。他の器種には珪長岩製のものは存在せず、形態も非常に薄手・細身と特異性が強い。

**使用痕** 資料の中には頭部や刃部に使用の際に生じたと思われる使用痕が観察されるものが確認されている。刃部には線状痕がみられる資料が数点存在する。大形品には刃線に対して斜方向のものが、小形のものには直行するものが多く観察された。頭部や基部上半には敲打痕が観察される資料がある。これは、着柄部分で柄とを分散したために生じたものと想定されるものである。

**再加工** 定角式磨製石斧本来の形態から明らかに変化し、成品として再利用された資料を再加工品と判断した(119・130)。

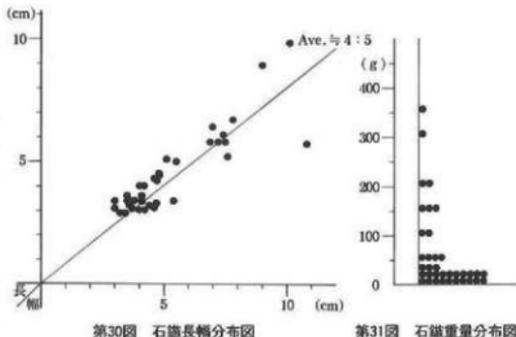
また、出土資料の中には再加工によるものか、破損によるものか判断不可能な剝離が見られるものが非常に多い。その中には意図的な再加工が行われていた資料も存在するものと想定されるが、肉眼観察から客観的に判断することは困難と言わざるを得ない。

**転用** 欠損資料の中に表裏面に顕著な敲打痕や凹みがみられる資料が存在し(94・99・103・111・117・121)、敲石として再利用されたものが含まれるものととらえられる。側面や頭部に敲打痕がみられる資料が多く存在するが、着柄等による2次的使用痕や再加工途中で廃棄された資料の可能性もあり、転用品との判別が不可能である。

**大形品(94~122)** 蛇紋岩を主たる石材とするが、法量や形態にバラエティーをもつ。概ね側面が発達したものが目立つ。

94は大形・厚手の成品で、資料中央に顕著な敲打痕が目立つ。95は珪長岩製の磨製石斧である。資料全体に欠損が目立つ。99は資料の中間部が肥大する形態を呈するものである。表裏面中央に敲打により形成された凹みが存在し、敲石に転用されている。100は安山岩製の資料であるが、蛇紋岩製磨製石斧の形態とは異なり、短冊形を呈する。基部は大きく欠損しており、欠損部に剝離・敲打が行われている。104・106は欠損した部分に再加工(刃部再生)が施されている資料である。破損面から数回の剝離が行われているが厚みを取り去るには至っていない。107は火山礫凝灰岩製の資料である。全面が研磨されていたものが、激しい風化により一部を残しほとんどが剝落している。110は砂岩製の資料であり、側面がやや未発達で基部上端は二等辺三角形に尖る。117は先細りした基部をもつ資料で、泥質凝灰岩製である。刃部

が破損した後も使用されており、欠損部にも摩耗痕がみられる。刃部に刃線と直行する線状痕がみられる。119は刃部を大幅に再加工または、再生を繰り返したために寸詰りになったものである。113・122は刃部破片であり、本体から遊離した破損品までもが回収され、遺跡内で廃棄された状況を示すものである。



#### 小形品 (127~132) 小形の資

料の特徴として、比較的面取りが丁寧に行われていること、材質が良質な蛇紋岩に限定されることが挙げられる。2点から刃部に線状痕が明瞭に確認されるが、何れも刃部に直行するものである。

127は唯一完形で出土した資料である。面取りが丁寧に施されており、側面が発達し平坦に仕上げられている。130は刃部の幅が狭く、特異な形態を呈するものである。本来の基部が何らかの理由で刃部に変更・再加工された可能性が高い。形態・線状痕の方向などから縦斧(手斧)として使用されたものと考えられる。

未成品 (123~126・133) 長さ10cm以下の小振りなものが5点出土している。石材の内訳は凝灰岩が2点、蛇紋岩が3点である。蛇紋岩は相対的にやや粗悪な質といえるものが主である。

123・124は、やや偏平な自然礫の周辺から剥離・敲打が行われている。蛇紋岩製となる124は、敲石として用いられた可能性もある。125は横長剥片を素材の両側縁に敲打・剥離が行われている。緑色凝灰岩製で、礫面には擦痕がみられる。126はほぼ全面が敲打により整形されている。刃部側には敲打が施されず、基部側は丁寧な敲打により細身に整形されている。133は磨製石斧として取り扱ったが、磨製石斧の未成品としては形態が不自然であり、むしろ磨製石斧の基部を装飾品として転用しようとしたものと考えられる。

#### e. 石 錘 (134~169)

全46点出土している。石材は輝石安山岩が大半を占め、偏平な河原石が用いられている。概ね長軸方向に粗雑な打ち欠きにより縄かけ部が形成される、いわゆる礫石器に限られる。特に小さなものは両側剥離によって縄かけ部が形成されたものも存在する。小形の石皿の転用品が2点含まれている。

法量・重量 法量の平均値は長軸4.4cm、短軸5.2cm、重量75.9gとなり、鶏卵大以下の小振りなのが多い。また長軸4.5cm、重量50g以下のものが特に多く、素材としてこの程度の礫が選択されていたことを示している。

転用品 小形の石皿から転用したものが2点確認された(134・137)。偏平な円礫を素材とした石皿の長軸方向端部を打ち欠き縄かけ部を形成している。法量的に他の石錘よりも一回り大きいものとなる。

#### f. 磨石類 (170~202)

総数で66点が出土している。従来、磨石・凹石・そして特殊磨石と呼ばれるものを一括した。概ね片手

に収まる拳大程度の河原石を素材としたものが多い。人為的加工により素材の形態が変更されたものは確認されなかった。形態は扁平な楕円形もしくは球状を呈するものが多いが、角柱状を呈するものも少量検出されている。前者は叩く(割る)・磨り潰すといった機能が推定され、石皿と相関性が強い食物加工具であると思われる。後者は使用痕から研磨や敲打などの複合機能を備えたものと想定される。石材は在地石材の輝石安山岩が大半を占める。

分類 使用方法を示唆する形態と使用痕により分類を行った。

①扁平もしくは球状の河原石を利用したもの。

I類 平坦面中央に顕著な凹みが形成されたもの。いわゆる凹石に位置づけられる。(170~172)

II類 主に平坦面に顕著な摩耗痕が観察されるもの。凹みや敲打痕をもつものを含む。(173~199)

②棒状や角柱状の河原石を利用したもの。

III類 棒状や角柱状を呈し、特殊な機能が予想されるもの。いわゆる特殊磨石。(200~202)

1~3は自然礫の表裏面と側面の中央に深い凹みをもつ、凹石と呼ばれるのである。複数の凹みは概ね敲打により形成されたものと観察された。4~14は顕著な摩耗痕と敲打による浅い凹みが形成された資料である。凹みは摩耗痕とともに平坦面に存在するものが多く、特に中央部に集中するものが目立つ。15~30は摩耗痕のみが観察される資料であり、摩耗痕は扁平礫では表裏両面に、球状礫では全面に観察されるものが多い。31~33は角柱状に近い自然礫に摩耗痕と敲打痕を併わせもつものである。比較的狭い平坦部に使用痕が観察されることが特徴といえる。

#### g. 敲石 (203~206)

4点出土している。食物加工具である磨石類の中に敲打痕をもつものや、磨製石斧の中にも敲石に転用されたものは多く存在するが、その他で明確に敲打のみの機能を示す加工具としての石器は4点の検出にとどまった。概ね自然礫の長軸方向端部に敲打痕が集中し、手持ちのハンマー・ストーンとして使用されたものと想定される。石材は凝灰岩と片岩系石材が占める。

203は下方端部に顕著な敲打痕が存在し、側面にも強い敲打による剝離・潰れが存在する。角閃石岩製である。204・205は下方端部に敲打痕が集中する。何れも縦長・扁平な自然礫を素材とする。206は整形された形状と石材(結晶片岩)などの特徴から石棒の転用品と考えられる。上下の両端部に顕著な敲打痕が観察される。

#### h. 石皿類 (207~218)

遺存度が低く完形のものが非常に少ないため、本来の形態が復元できるものは少なかった。厚手のものの中には敲打痕が残るものが存在し、台石として使用・兼用されたものも存在すると思われる。全1622点と最も多い出土量を示し、全体の約72%を占める。破損等により幾つかに分割されたものが多く、同一個体であったとしても接合することもほぼ不可能であったため、本来の数よりもかなり多く総数としてカウントしていると思われる<sup>3)</sup>。研磨面が頻繁な使用により湾曲するものが存在するが、整形作業により明確に全体の形状が変化したものは確認されなかった。扁平礫や節理で分割された礫を素材とし、そのまま利用したものと想定される。石材は磨石同様に輝石安山岩を主体とする。

207・208は扁平な河原石を素材としたもので、石皿としては小形のものである。210~212・214は表裏

が平坦な角礫を素材としており、側面は節理に沿って意図的に分割された可能性がある。216は磨り台石であり、厚みのある角柱状の礫の平坦面に顕著な敲打痕やツブレがみられる。

#### i. 研石 (219~229)

171点が出土している。石材は砂岩が大半を占め、硬質なものからやや軟質のものまで様々である。

217~224は偏平礫の平坦面に摩耗痕が観察される研石の一群であり、出土した研石の主体となるものである。完形資料が少なく小振りなものが多い。226・228は細長い偏平礫を研石としたものである。228は片面が激しい摩耗により偏平となっている。225は本遺跡では唯一の筋研石である。摩耗による数条の溝がみられる。溝は深さ3mm以下、幅は1cm程度となる。石材は径10mm以下の小礫が凝結した安山岩質の礫岩であり、平坦な自然面を砥面として利用している。227は断面四角形を呈する小形の研石である。研磨面は緩やかに内湾もしくは外反する。229は蛇紋岩製の研石である。偏平な楕円礫の全面に研磨痕・擦痕が観察され、側面は顕著な摩耗により偏平となっている。

#### j. 不定形石器 (230~251)

機能がある程度想定されるものでも、定形的でない剥片石器を一括した。両面加工石器やスクレーパーも含む。意図的に素材を切断加工している資料も確認されている。

分類 加工の特徴や使用痕等により分類を行った。

I類	両面加工石器	素材剥片の両面から連続剝離が行われたものを一括した。厚手の素材の周縁部に急斜な剝離が施されたもの、薄手の素材の一部を刃部として鋭角に加工したものが存在する。(230~237)
II類	スクレーパー	概ね素材の片面から調整剝離を行い刃部を形成した、削器・掻器。(238~243)
III類	使用痕ある剥片	剥片の一端に使用痕としての微細な剝離、ツブレ等がみられるもの。刃器として使用されたものと考えられる。調整、整形加工はほとんど見られない。(244~251)

231~233は薄手の剥片に両面から調整加工が行われたものである。231は薄手小形の剥片に細かい剝離が全周する。234~237は、調整により先端部を形成するものである。石錐のように穿孔するというよりも、突く・切るという機能が想定される。

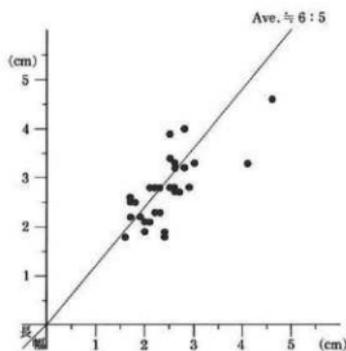
238~243はスクレーパーとした概ね片面加工の石器である。239~240は短い縁辺に急斜な調整を行っているエンド・スクレーパーである。244は、半定形的なスクレーパーである。素材の背面右側と先端部に丁寧な二次加工が施され、横断面は三角形を呈し、中央部は厚みを残す。概ね片面加工であるが、腹面は基部にも僅かに剝離が施される。剝離角は左側面約42°、右側面約38°、先端角33°である。使用痕と思われる微細な剝離が左右側縁部に観察できる。素材の形状は正確に復元できないが、概ね縦長剥片が用いられたと想定される。その際、素材と石器の長軸方向は一致せず、30°程度ずれるようである。材質は黒灰色を呈する良質のチャートである。

244~251は使用痕ある剥片である。縦長剥片素材のもの(244~245)、横長剥片素材のもの(247・250~251)、その中間的なもの(246・248~249)が存在し、剥片の縁辺に微細剝離痕が明瞭に観察される。

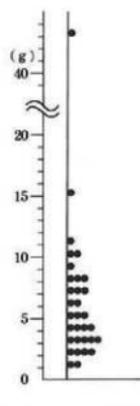
#### k. ビース・エスキュー (252~283)

全86点が出土しており、内32点を掲載した。両極剝離が行われた痕跡を示す石器類で、従来両極石器、

楔形石器、両極剥片等と呼ばれるものを一括してピエス・エスキューとして扱った。素材のほとんどが扁平な小礫であり、そのまま礫面を残すものが非常に多い。単純に両端に1対の両極剝離が認められるものから、数度にわたって打撃方向を変えて剝離が繰り返し行われた資料まで多種多様である。第1回目の両極剝離作業は、長軸方向に行われたものがほとんどである。また、両極技法が繰り返された資料は、剝離面が複雑に切り合い、末端がツブレの状態を示すものが多い。加撃部は一様にある程度の幅を持ち、幅のあるハンマーなどで剝離作業が行われたものと想定される。



第32図 ピエス・エスキュー長幅分布図



第33図 ピエス・エスキュー重量分布図

ある程度の幅を持ち、幅のあるハンマーなどで剝離作業が行われたものと想定される。

分類 両極剝離痕の状態と形態により分類した。

- I類 1対の両極剝離がみられるもの。(252~271)  
 II類 2対の両極剝離がみられるもの。(272~279)  
 III類 概略楔形を呈するもの。(280~283)

量量・石材 最大長が4.6cm、最小長1.8cmとなり、平均は約2.8cmとなる。重量は最大が43g、最小が1.7gとなり、平均は7.1gとなる。石礫の量量より一回り小さいまとまりを示し、石礫の未成品となる資料が含まれる可能性も考えられる。石材は、玉髓やチャート、鉄石英が大半を占め、小礫が素材となるものが多い。

252から260は比較的剝離が少ないものであり、全て長軸方向のみに両極剝離が行われている。素材の形状がうかがえるものが多い。259のように半分に分断された資料が存在し、その後273・275のように剝離が進んだ過程が確認できる。

271~272・280~281・283は、平面形が四角形を呈し縦断面が概ね凸レンズ状を呈する、楔形石器の典型的な形態をもつものである。何れも末端部が非常に鋭利であり、微細な連続剝離は概ね階段状を示す。

### 1. 石核 (284~292)

全23点が確認されており、内9点を掲載した。大形のものはない。石材は搬入石材が目立つ。

284は凝灰岩製の石核であり、本遺跡ではかなり大形のものとなる。打面転移・打面調整が繰り返され、概ね逆三角錐状を呈する。285・287は板状の残核である。概ね両極から剥片剝離を繰り返して行っており、本来の厚みが失われている。286・291・292はほぼ無調整の礫から剥片剝離を行っている石核である。平坦部を打面とし作業面は概して単一面となる。288は板状原石の平坦面を打面として、90°以上の急斜な剝離を繰り返したものである。剥片剝離が行われたというよりも、むしろ分割されたとも考えられる。290は頁岩製の石核である。打面転移を繰り返して残核の状態を示すものである。

#### m. 石棒 (293~296)

4点出土している。他に1点敲石に転用されたものが出土しており、敲石として掲載した(206)。完形品が無く、本来の形態が復元されるものは皆無である。結晶片岩製のもの、径7cm以上の大形のもの2点(295~296)、径2cm強の小形のものがある(206・294)。輝石安山岩製のものは径5cm程度のもの1点である。

293は頭部と身部が1条の溝で区画される有頭石棒である。下半を欠損する。295は側面の一部に被熱痕がみられる。296は頭部以下に顕著な敲打痕が見られるが、成品製作に伴うものかそれ以降に行われたものかは不明である。頭部と身部が溝により区画されているが、敲打が施された部分の上部も溝の縁であった可能性が高い。ピット内からの出土である。

#### n. 玉類 (297)

ヒスイ製の太珠が1点出土している。諸特徴から未成品(半成品)ととらえられる。形態は寸詰りで扁平なカツオブシ形を呈する。面取りを意識して整形されており、全面に研磨痕が確認されるものの、部分的に素材時の凹凸が残る。中央に片面から直径6mm程度の穿孔が行われているが、深度約3mmで作業を中止している。穿孔の中央には小突起が残る。石材の色調は白色地に半透明の緑色部を含み、非常に良質のものといえる。出土品には加工に伴うような工具に乏しく、ヒスイの破片類が皆無であるため、本遺跡で原石から製作されたものとは考えにくい。むしろ研磨整形直前もしくは出土状態のままのかたちで搬入されたものと想定される。

#### o. 原石 (298~300)

搬入石材の原石が11点出土しており、小形のものに限られる。蛇紋岩は小礫のみが9点出土しており、大半が無加工のまま廃棄されている。

298は蛇紋岩の半砕礫である。破断面が変質し光沢をもち加熱された可能性が高い。蛇紋岩は小礫のみ9点が出土しているが、小形装身具などに加工されたものは出土しておらず、用途は不明である。299~300は黒曜石の原石であり、ほぼ全面が風化作用を受けている。ともに半透明な黒色を呈し不純物が多い。類似した質の黒曜石破片が少量出土しているが、この2点以上の大きさの破片や石核は出土していない。

## 2) 石器群の様相

出土した石器群は集落で消費された石器の姿を表すものであり、当時の生業や流通のうかがう重要な手がかりと成り得るものである。石器群のまとめとして、石器石材と石器組成について整理し、若干の検討を加えることとする。

### a. 石器石材

十三本塚北遺跡出土の石器群における使用石材は、製作された各器種との間に密接な関係がみられ、石器製作に伴って積極的な石材の選択・使い分けが行われていたことが取次される。出土した石器に使用された諸石材は、石質などの特徴により大きく3つのグループに分類される。そして、これらの石材は、遺跡周辺の生活圏で入手可能な石材(在地石材)と、生活圏外となる遠隔地から運び込まれた石材(搬入石材)の2種類にそれぞれ大別することができる。本稿では使用頻度が比較的高いもののみを抽出し、以下

のように分類した。

在地石材	玉髓・チャート・鉄石英・安山岩A・輝石安山岩・砂岩
搬入石材	黒曜石・頁岩・安山岩B・流紋岩・凝灰岩・蛇紋岩・角閃石岩・結晶片岩

**在地石材** 玉髓・チャート・鉄石英などの珪質の石材と、安山岩類の2種に大別される。これらの珪質石材は柏崎平野で採取可能な石材であり、河原や海岸では大小の転石の状態でも容易に採取できる。鉄石英は本来遺跡周辺で産出するものではないが、海岸には佐渡島から漂着した転石がみられ、在地石材に含めることとする。安山岩類は米山山系で産出する鮮新世の火山活動を示す代表的な石材である。中でも輝石安山岩<sup>6)</sup>は露頭が複数確認されており、河原でも転石の状態でも容易に採取できる。しかし、剝片石器に僅かに用いられている無斑晶質で緻密な安山岩(安山岩B)については、在地石材としては認めることは困難で、むしろ搬入石材としてとらえられる。ただし、礫石器の石材には輝石安山岩と安山岩Bの中間的な石質で、ごく僅かに斑晶を含む粗粒な安山岩が認められた。このため、これらは安山岩Aとして区分することとした。砂岩は米山山系西側の海岸段丘における露頭から採取可能なものである。

**搬入石材** 在地石材と比較すると量的には決して多いものとはいえない。剝片石器の石材として適した細かい加工が施し易い珪質石材と、主に磨製石斧の石材となる蛇紋岩、それに類似する石質をもつ角閃石岩、そして凝灰岩などに分類される。剝片石器の石材となる黒曜石は、原石、石核、石鏃未成品およびビエス・エスキューユが数点出土している程度で、出土量は非常に貧弱といえる。原石から観察される石質的特徴は、全体の色調が半透明な黒色を呈し、表面は転石特有の風化を示している。また、石鏃の成品が1点出土しているが<sup>4)</sup>、調整の特徴や石質が特異なため搬入品である可能性が高いものと判断される。頁岩は成品の他に小形の石核が出土している。剝離面に光沢をもつ珪質頁岩と判断されるものは確認されおらず、硬質で黄色や黒色の色調のものが出土している。小形で転石の状態のものが主体的に搬入されている。蛇紋岩とそれに類似する角閃石岩は姫川周辺の地域で採取可能な石材である。大半を占める磨製石斧は積極的な生産活動は認められず、本遺跡には磨製石斧として成品の状態でも搬入されているものとしてとらえられる。また、結晶片岩も石棒に限定的に用いられる石材であり、生産の痕跡が認められないことから、成品の状態でも搬入された可能性が極めて高い。頁岩や安山岩B、そして凝灰岩<sup>7)</sup>は、小形の石核や剝片が若干量出土しており、遺跡内における製作活動が確認できる。原石や大形の石核は出土しておらず、石核は残核に近い状態まで剝片剝離を繰り返している資料が多い。石核もしくは原石の状態でも少量搬入されていたものと考えられる。

#### グループA

**在地石材** 玉髓・チャート・鉄石英

**搬入石材** 黒曜石・頁岩・安山岩B・流紋岩・凝灰岩

石鏃・石鏃や不定形石器などの小形剝片石器に使用され、在地石材と搬入石材に大別される。入手の容易な在地石材の占める割合がかなり高い。石質的特徴としては、無斑晶質で緻密な構造のため剝離性が高く、細かい加工が可能な石材といえる。

在地石材は未成品資料や未加工礫が多くみられ、海岸や河川で容易に採取可能な河原石の状態のものが多い。特に小形で扁平な小礫が目立つ。搬入石材は、未成品や石核の状態のものが少ない。大形の原石・石核は確認されず小形の石核のみがみられる。石核も剝片を取り尽くした残核の状態のものが多くみられ、石材の希少性がうかがわれる。黒曜石や珪質頁岩のように、遠隔地からもたらされた石材も存在するが、量的には少量で客体的ある。

	在地石材	搬入石材	器種
グループA	玉 髓 チェート 鉄石英	頁岩 凝灰岩 安山岩B 流紋岩 黒曜石	石 鏝 石 鏡 不安定石器
グループB	輝石安山岩 安山岩A	頁岩 凝灰岩 蛇紋岩 角閃石岩 結晶片岩	打製石斧 磨製石斧 石 製 品
グループC	輝石安山岩 砂 岩		石 鏝 類 磨 石 類 石 皿 類 研 石

第6表 グループ別石材・器種

#### グループB

在地石材 輝石安山岩・安山岩A

搬入石材 頁岩・凝灰岩・蛇紋岩・角閃石岩・結晶片岩

打製石斧・磨製石斧などの採集具、伐採・加工用の石材となるもの。および、石製品の石材となるもの。搬入石材が多くを占める。搬入石材製の未成品が若干出土しているが、原石は非常に少ない。打製石斧には頁岩、磨製石斧には蛇紋岩（角閃石岩）、石棒には結晶片岩が多く用いられている。とくに磨製石斧・石棒は未成品や剥片の出土がほとんどなく、成品の状態での搬入された可能性が高いものと想定される。なお、良質の翡翠が硬玉製大珠として1点出土している。中央の孔が貫通していないことから純然たる成品とはいえないものの、翡翠の剥片や加工具が出土していないことから、そのままの状態での搬入された可能性が高い。蛇紋岩類は産地周辺で加工されたものが各遺跡に搬出されていたものと考えられる。

在地石材である輝石安山岩製の打製石斧と磨製石斧が、数点出土しているが、積極的な生産活動を行っていたとはいえ、代用品的なものとしてとらえられる。

#### グループC

在地石材 輝石安山岩・砂岩

石鏝・磨石類・石皿類・砥石などの加工が単純ないわゆる礫石器の石材となるもの。転用品以外は在地石材で占められる。輝石安山岩は米山山系で最も多く産出する岩石の一つであり、山塊中に露頭がみられ周囲の河川から容易に採取可能な石材といえる。輝石安山岩は本来表面がザラつており、摩擦が生じるため対象物に食いつきやすく、ものを敲いたり磨り潰す石材として適している。また、磨石・石皿は共に重量のある石器であるため、石材を遠隔地から運んでくることは非常に非効率である。このようなことから、柏崎平野の縄文時代全般において輝石安山岩が磨石・石皿類の石材主体を占めてきたといえる。

石材と器種の関係 以上のように、石器の器種と使用石材の間には対応関係ともとれる密接な関係が看取される。これは器種毎に積極的な石材の選択がなされていたことを示すものとしてとらえられる。また、石器素材は石材の種類だけではなく、その形態までも考慮して入手されている状況がうかがえる場合が多い。製作工程の第一段階に石材の選択行為が行われていたといえる。入手した石材で何が製作可能なのか、また、特定の石器を製作するための石材をにどのような入手すべきなのかは日常的に考慮されていたと想定される。石器製作におけるこのような状況が、石器石材と器種の間にもみられる対応関係や概ね3つのグルーピングを可能としていることを強調したい。

#### b. 石器組成

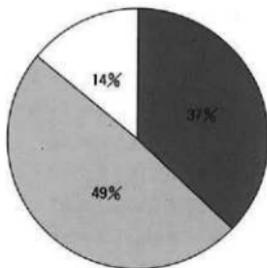
本遺跡における石器組成は第7表の通りである。出土遺物は廃棄場からの出土が大半を占め、遺跡の存続期間内に廃棄されていったものとしてとらえられる。集落廃絶時において、主要な道具・必要不可欠な道具は遺跡外に持ち去られたものと想定されるが、遺跡の存続期間内に遺跡内で消費された遺物の組成を大まかに確認することが可能であると思われる。

組成率 組成率は石器組成率を基にして単純に算出すると第7表のようになるが、石皿の組成率が飛び

器種	石鏃	石錐	打斧	磨斧	石鏃	磨石	敲石	石皿	研石	不定形	ピエス	玉類	石棒	合計	割片	石核	総合計
点数	123	8	6	39	46	66	4	1622	171	63	86	1	4	2239	1262	23	3524
比率%	5.5	0.4	0.2	1.7	2.1	3.0	0.2	73.4	7.6	2.8	3.8	0.1	0.2	100			

第7表 十三本塚北遺跡出土器種集計表

抜けた数値になってしまう。これは石皿が完形で出土したものがほとんど存在せず、何らかの理由で分割された状態で発掘されたためである<sup>\*)</sup>。このため、分割された資料が実際よりも多くカウントされているものと想定され、組成データとしては一考を要する。縄文時代の遺跡の調査事例では石皿類が磨石類の出土量を超える事例は極めて少ない。このため、機能別比率グラフ(第34図)からは石皿類を除外した。また、石皿は磨石と相関性が高い器種と考えられ、一方が突出する数値にはならないものと思われる。2つの石器で1つの機能をもつものと仮定すれば、別々にカウントする必要はないものとも考えられる。



■ 狩猟具 □ 採取・加工具 □ 調理具

第34図 機能別比率グラフ

**機能別分類** 出土した石器は形態や諸特徴から、全13種(割片・石核を除く)に分類される。掲載順に石鏃、石錐、打製石斧、磨製石斧、石鏃、磨石、敲石、石皿、研石、不定形石器、ピエス・エスキュー、玉類、石棒と分類した。これらの器種に分類された石器は、想定される機能別に概ね3種類にまとめることが可能である。機能が不明確な器種はここでは対象とせず割愛した。なお、祭祀、装身具等の石製品が出土しているが、他のグループと対比できるほどの量ではないためにグラフに載せることはできなかった。

- |          |                    |
|----------|--------------------|
| ① 狩猟・漁撈具 | 石鏃・石錐              |
| ② 採取・加工具 | 石錐・打製石斧・磨製石斧・敲石・研石 |
| ③ 調理具    | 磨石・石皿              |

狩猟・漁撈具は、文字どおり狩猟・漁撈に用いられた石器群である。石鏃を狩猟具、石錐を漁撈具とすると、出土数から狩猟7:漁撈3の割合となる。漁撈具には石器以外の骨角器等が多く用いられたと想定されるが、本遺跡からは確認されていない。主に遺跡外で行われる生業に関わる道具といえる。

採取・加工具は、土木工事で根茎類の採取等に用いる土堀具、そして伐採具や木材加工具、石材加工具などである。打製石斧は出土量が少なく、磨製石斧は豊富に出土しており、建築活動は盛んであったが、土木工事が頻繁ではかったことを示唆するものともいえる。ピエス・エスキューには、楔として用いられた加工具が多く含まれるものと思われる。しかし、石鏃の未成品等と区別することが不可能なため、ここには含めなかった。これらは遺跡の内外で使用される道具である。

調理具は、主に食物を敲く、磨り潰すなどして加工する道具である。スクレーパーを含む不定形石器は調理具としても使用されたものを含むと思われるが、個々の機能が明確でないために除外した。概ね遺跡内で用いられた道具といえる。

グラフからみる機能別の比率は、採取・加工具が約半数を占め(約49%)、次いで狩猟具が約37%と多い。調理具は約14%となる。最も多い採取・加工具は、磨製石斧と研石がその主体を占める。狩猟具では石鏃の占める割合が高い。このことから、根茎類の採取は活発でなく、狩猟活動が活発に行われていたも

のと想定される。

器種別にみると石鏃を主とした狩猟具が多く、石錐、打製石斧、磨製石斧の量を大きく凌ぐ。磨製石斧は安定した出土量を示す一方打製石斧は少ない。これは、海岸部付近に位置する遺跡の状況を示すものと考えられる。また、石匙は1点も出土していないが、これは当該期における越後の組成の特徴を反映するものとしてとらえられる。

その他の石器として、祭祀等に関わる道具と想定される石棒4点と玉類1点が出土している。

なお、出土した刮片石器と刮片の比率は約2：9となる。刮片石器の製作中に生じた刮片の総点数としては量が少なく、本遺跡外で製作され持ち込まれた石器が出土している可能性も考えられる。

石器組成からみる生業活動 遺跡から出土する石器は、概ね遺跡内やその周辺で使用された後、遺跡内に廃棄もしくは遺棄されたものとしてとらえられる。交易等に伴う成品の搬出や、遺跡廃絶時にある程度の必需的な石器は集団と共に持ち去られ、実際に消費された数量が若干変動する可能性は高い。しかしながら、集団の生活を維持する上で、期間を重ねて消費されていった石器群の様相が十分把握可能な資料となろう。それらを分類、集計した石器組成は、集落における生業活動の状況のある程度反映する重要なデータとしてとらえられる。このデータを用いて本遺跡の出土石器から集落における生業活動の復元を試みることにしたい。

まず挙げられるのが、狩猟・漁撈具が豊富であることである。周辺地域での狩猟・漁撈が積極的に行われていたことが想定される。遺跡周辺は森林となる小高い中位段丘が広がり、付近に小河川・軽井川も流れている。古環境においても獲物には事欠かない環境にあったといえよう。当時の植生に関しては全くの不明であるが、森林に囲まれていたことを反映して木材加工具が豊富に備えられている。周囲の資源を活用して建物等の建築が盛んに行われていたことと思われる。しかし、土堀りに関わる石器が乏しいことから、土量を伴う大規模な土木工事は行われていなかったものと想定されよう。また、磨石、石皿も安定した数値を占めることから、食物は加工され多くの種類が食されたものと想定される。一方これらの道具に比較して、精神文化に関わると思われる石製品は少なく、埋葬に伴うような出土事例もみられない。これは土製品にも同様のことがいえるようである。

このような石器組成からみると、当遺跡は日常の生活に深く根差した領域であったことが想定される。なお、不整形で形態上の規格性が弱い刮片石器・不定形石器は、様々な物質に対する多岐におよぶ加工を担う重要な石器であると考えられる。その機能・用途等を追求するには、今後多くの資料を集積し統一した観察方法で分析、検討を行っていく必要があろう。

- 註 1) 水洗いの段階で数少ない付着物が失われてしまい、その後観察不可能となった資料の存在も考えられ、整理作業における反省事項といえる。なお、35は付着物が極めて微量なため図上で表現できなかった。
- 2) 87は残存部分が棒状を呈しているが、実際には上半に鈍み部をもつ形態であった可能性も考えられる資料である。
- 3) 相同関係の強い磨石類とかけ離れる個体数となるものではないと予想され、調査事例からみても石皿類が磨石類の総数よりも多くはならないのが通例である。
- 4) 形態的特徴からピエス・エスキューユとしたが、石鏃未成品である可能性も考えられる。
- 5) 石器石材として認定されている、朱山山系で産出される珪晶を含む安山岩は、従来一括して輝石安山岩とされるが、実際には石基中に角閃石を含むものも共存する。しかし、石質や見た目では明確に区別できるものではなく、従来どおり輝石安山岩として扱うこととする。
- 6) 肉眼観察においても、不純物を多く含む他の原石や未成品とは明らかに石質が異なり、不純物を含まない濃黒色を呈する。
- 7) 緑灰岩は朱山山系でも産出する石材であるが、磨製石斧等の成品に使用されるものは負質の緑色緑灰岩が目立ち、概ね搬入石材として理解される。
- 8) 出土グリッド毎に接合を試みたが、接合関係を確認できる資料は非常に少なかった。また、研石に関して多少の破損品が多く、ある程度のオーバーカウントが予想される。

## V 総 括

### 1 十三本塚北遺跡の土器様相と時期区分

十三本塚北遺跡は、中期前葉から後期前葉までの時期幅を持つ縄文集落であるが、出土した縄文土器の大半が後期の所産であり、しかも後期初頭から前葉期の土器群にほぼ限定されたものであった。これらの土器群とは、在地の土器型式で示せば三十稲場式及び南三十稲場式の二型式を指すことになる。前者の三十稲場式土器については、すでにいくつかの論考が世に出され、変遷観についてもある程度の共通理解が得られている〔駒形1983・田中1985・1989など〕。しかし、後者の南三十稲場式土器については、良好な資料群が不足し、三十稲場式と混在的に出土する傾向が多いという現象もあって、一時期その存在が否定されるなど、研究史的には混乱があったとされ〔田中1999〕、型式を構成する土器群の実態そのものが判然としない状況にあった。ところが、本遺跡から出土した縄文土器の大半は、この南三十稲場式土器が占めており、量的にまとまった土器群は、当該期の土器様相を明らかにする上で重要な意義を持つものとなったのである。そこで、本節では、本文でも述べた土器群の群別から、後期初頭から後期前葉期における土器様相を把握し、各土器群の変遷観について検討するとともに、本縄文集落の消長を見極めるため、時期的な区分を行うこととする。

#### 1) 後期縄文土器の群構成

まず最初の課題として、当該期における在地の土器が、どのような土器群によって構成されているのかを見極めたい。本遺跡から出土した後期の縄文土器は、A群土器からL群土器までの12群に大分類された。これらの内、H群土器からK群土器までの4群は外来系の土器群であり、他地域における型式名をそれぞれに宛てることができる。L群土器は、その他とした土器群の一括、またG群土器も底部破片を一括したもので、各群の破片が混在したり、時期や型式が不明なものである。F群とした土器群は、半粗製・粗製土器を一括したものであり、中期や外来系土器群に伴う粗製土器等の混入を否定できないが、基本的には在来系土器群に伴うもので占められていると判断した。したがって、在地において主体を占める在来系の土器群とは、A群土器からF群土器までの6群ということになる。

さて、これら6土器群の内、A(三十稲場式系土器群)・B(信州系土器群)・C(沈線文系土器群)の3土器群は、精製・半精製土器を主体とする本遺跡を特徴付ける土器群であり、またC群土器から生成されたと考えられるD群土器(多条細沈線文系土器群)も、同等に扱うことが可能である。これら精製土器類には粗製土器類等が組成する。B群土器には、すでにこれらを含めて分類したが、このほかにF群第Ⅲ類や第Ⅴ類の一部が伴うものと見られる。A群土器は、中期末以降の伝統を強く引き継ぐ在地の土器群であり、当然粗製土器類が伴っている。その場合、F群の第Ⅰ類(半精製土器類)や第Ⅳ類(粗製土器類)等が主に該当してこよう。また、半粗製のB群土器は、文様の互換性が認められるC群土器と関連が強いことが明白である。したがって、A・B・C・Dの各土器群は、半粗製・粗製土器類としたE群やF群土器の各類と結びつくことにより、精製・半精製土器類と半粗製・粗製土器がセットとして組成する完結した存在であったと見なすことができそうである。この判断が正しいとすれば、後に生成したD群土器を

含め、A・B・Cの各土器群は、それぞれ独立した型式に近い内容を持っていたことになる。そして、三十種場式土器から南三十種場式土器への変遷過程と、南三十種場式土器の実態の解明には、これらA・B・C・Dの各土器群を主体に検討することが必要不可欠であるといえることができるのである。

## 2) 時期区分と在来系土器群の変遷

### a. 時期区分の大別

さて、十三本塚北遺跡における縄文集落を考察する際には、消長や盛衰の見極めが不可欠であるが、そのためにも時間軸の設定が必要となる。その作業上最も有効な対象とは、前述したA・B・C・Dの各土器群であり、具体的な検討資料とは、ある程度一括性が保証される二つの遺構出土土器群（SKp-1734・SK-932）、および大量の遺物が層位的に取り上げられた廃棄場出土の土器群である。

SKp-1734は、SB-79大型建物跡の柱穴であるが、土器の出土量は意外に多い（図版62）。土器群の構成を見ると、B群土器の口縁部破片をわずかに含むが、大半はA群土器で占められていた。A群第Ⅰ類は、すべて橋状把手が形骸化し、装飾性を強めたd類に分類されるもので、これらは三十種場式の新段階〔田中1989〕に対比可能な資料である。このほかには、隆帯文系の系譜を引く土器や口縁部下に指頭押印文や刺突を施したのなど、在地色を色濃く残す土器類が認められる。これに対し、貯蔵穴としたSK-932出土土器群（図版63）は、文様構成上のバラエティーを除けば、すべて多条化した細い沈線で描かれるD群土器で構成されており、A群やB群・C群は含まれていなかった。要するに、各遺構出土土器群の群構成は、A群を主体としつつB群をわずかに含む場合と、D群のみで構成されるという二つの場合があり、明確な様相差を確認できるとともに、B群とC群が主体をなす場合が存在することを証明していることになる。

廃棄場からはA～D群までの全ての土器群が出土しており、調査ではブロック別と第1層～第4層までの層位を組み合わせて、遺物の取り上げを行ったが、ブロックや層位のデータだけでは、スムーズな土器変遷を追うことが困難と判断せざるを得なかった。ただ、小グリッド程度に範囲を限定すれば、層位的な土器様相の差異をある程度看取することができる。

そこで、前述の遺構出土土器群の様相から明らかにされた各土器群の出土状況を見ると、SKp-1734で主体をなすA群土器は、第4層を中心とする下層位から出土している。また、SK-932で主体を占めたD群土器は、1～2層とした上層位を中心としている傾向を認めることができ、両者の様相差が時期差に起因していることを示している。そして、廃棄場で主体的に出土したB群・C群土器は、両者の中間に位置付けることが妥当と考えられ、両土器群が廃棄場の各層から出土するという状況は、中間層に包含されているという実態の反映であったと見ることができよう。

以上のような検討結果から、A群土器を主体とする下層段階、B群・C群を主とする中層段階、そしてD群で構成される上層段階に大きく区分することが可能であり、後期以前の中期を加えた4期に大区分して理解したい。したがって、本遺跡の時期区分は、第Ⅰ期：中期、第Ⅱ期：十三本塚北廃棄場後期中層段階、第Ⅲ期：十三本塚北廃棄場後期中層段階、第Ⅳ期：十三本塚北廃棄場後期中層段階の4期とする（以下、「十三本塚北」および「廃棄場」等を適宜省略する）。

### b. 在来系土器群とその変遷

**A群土器（三十種場式系土器群）** 第Ⅱ期の主体を占める本土器群を三十種場式系土器群としたが、一

部隆帯文系の土器群が含まれており、全体的なニュアンスとしては中期末以降後期初頭期までにおける在地の土器群およびその系譜下にある土器群という意味合いになる。三十稲場式の成立やその変遷観については、これまでの研究史からうかがえるようにおおそ把握されている〔田中1999〕。最近では、橋状把手の形態分類による型式学的な変遷観も示されているが〔長澤2000〕、基本的な流れはおおむね一致している。本遺跡における変遷観も基本的には同じであるが、遺構一括等同時性のある程度うかがえる資料がほとんどなく、資料的なまとまりも希薄となっている。そこで、本土器群において最も特徴的な第Ⅰ類を取り上げ、大まかな時間軸の設定を便宜的に行うこととし、今回は特に橋状把手を取り上げ、その分類による変遷観から本土器群の時間幅等の目安を把握することとした。

橋状把手の形態は、本文中述べたとおりa～dまでの4類に分類し、d類については1～3類まで細分して、その変遷を捉えることとする。a類は、板状を呈した橋状把手と、口縁部内面の蓋受けとなる隆帯に特徴付けられるもので、三十稲場式期古段階に編年されている〔田中1990〕。b類は、小千谷市城之腰遺跡R24P30の一括土器〔新潟県教委1991〕に代表されるもので、田中編年では古段階に組み入れられている。c類は、極めて単純なことから、変遷を明確に捉えることができず、保留せざるを得ないが、ただ細い粘土細状の形状からすれば、それほど古くならないものと思われる。d類は、装飾性を強くしたものを分類したが、把手の形状が橋状形態を留めるもの(1類)から、橋状を喪失し突起状を呈し(2類)、やがて突起装飾としての貼付文と化したもの(3類)へと変遷するものと捉えた。前述の田中編年では全て三十稲場式新段階に編年されるものである。

本遺跡から出土した橋状把手についてみると、大半がd類に分類されるものであり、b類はほとんど欠落し、a類は僅少という状況にある。また、今回のA群土器には、三十稲場式直前段階〔田中1989〕とされる資料も含めているが、その出土量もわずかである。したがって、充分な変遷を示せる状況にはないが、三十稲場式土器が占める第Ⅱ期については大きく3段階に区分して理解したい。まず第Ⅰ段階とする第Ⅱa期は、三十稲場式系の諸要素が個別的に出現し、a類とした板状の橋状把手が完成するまでの段階とする。第Ⅱ段階である第Ⅱb期は、b類をメルクマークとした橋状把手の最盛期であり、若干の装飾を施す余裕を持っている。本遺跡ではほぼ欠落するが、城之腰R24P30一括資料を宛てがうとともに、刈羽村刈羽大平遺跡出土資料〔柏崎市教委1985〕により当地域での存在と資料の補完を考えたい。第Ⅲ段階となる第Ⅱc期は橋状把手d類を宛てがう。このd類については3類に細分し、それぞれ変遷過程として捉えられるが、1類と2類についてはSKp-1734で共判関係にあり、実態として時期区分ができる現状にない。ただし、3類については、後出する可能性が高いが、それを示し得る資料は不足している。

各段階の時間幅等については、第Ⅱa期がニュアンス的には、城之腰編年の第Ⅵ1期と同じで〔國島1991〕、田中編年の〔田中1990〕における直前段階と古段階の一部が含まれることから、出現期(第Ⅱa1小期)と完成期(第Ⅱa2小期)の二細分で理解したい。ただし、本遺跡での資料数が少なく、保留部分が多い。第Ⅱb期は良好な遺構一括を標準資料としたため、概して時間幅が狭く、第Ⅱc期とのギャップを大きくするが、両者を繋ぐ資料の存在を想定しておきたい。第Ⅱc期については、A群土器の終末を意味するため、実は下限を捉え切れない。地域差を考慮する必要もあるが、順次量を減らしつつも概して長く系譜を残している可能性が高いであろう。実態の解明には確実な一括資料の抽出が今後重要となる。

以上の3段階において、大きな画期を見いだすとすれば、それは第Ⅱb期から第Ⅱc期の間である。その事由としては、橋状把手の出現から完成する第Ⅱa期と、そして最盛期となる第Ⅱb期まではプラスの変化として、橋状把手の機能を活かした展開とみることができる。しかし、第Ⅱc期における状況は、明

らかに橋状把手の退化であり、マイナスの変化と捉えることができる。つまり第IIc期以降、橋状把手の意味は大きく転換したことを意味しており、ここに大きな変化が認められるのである。ただし、当該期の変化を橋状把手のみで判断することは当然のことながら不十分である。しかし、これらの変化を基準に、一括資料等の検討を行うことが可能となれば、他土器群等との組成などを把握することができる。

**B群土器（信州系土器群）** 本土器群は、地域名を便宜的に用いて表示しているように、在来系本来の土器群ではない。しかし、出土量の多さと完形率の高さ、そして後述するように精製～粗製土器がセットで存在することは、本遺跡独特の現象ながら主体的な土器群として認定せざるを得ず、その意味で在来系の土器群と同等の扱いを行いたい。

本群の特徴は、鉢・深鉢ともほぼ統一された器形に、ほぼ同類もしくはその系列に属する口縁部文様帯と頸部無文帯を有するもので、胴部文様帯に限りいくつかのパターンに区分することができる。このような当該土器群は、典型的には小仙塚類型〔鈴木1990・1999〕の地方型として認識することができる。しかし、文様構成などについては趣きをかなり違えており、これらと同種の土器群が信州方面で卓越した存在であることからすれば、小仙塚類型信州系土器群という意味合いが強い。特に、長野県中野市栗林遺跡〔長野県埋文センター1994〕からは、B群土器と器形や文様等が類似する事例が多く出土しており、当該土器群の出自が信州方面にあることをうかがわせる。また、これらの初源的なタイプの土器は、長野県小県郡東部町和中原遺跡で完形品が得られており〔綿田1985〕、当該土器群について初めて言及された学史的な意味も持ち合わせている。このようなB群土器であるが、現在具体的な名称はなく、名称を与えるとすれば、出自を明示する地域的な呼称が妥当と考えられる。今後、長野県域等での検討を経た中で、最終的な名称の決定、判断が下されることを待ちたいと思う。

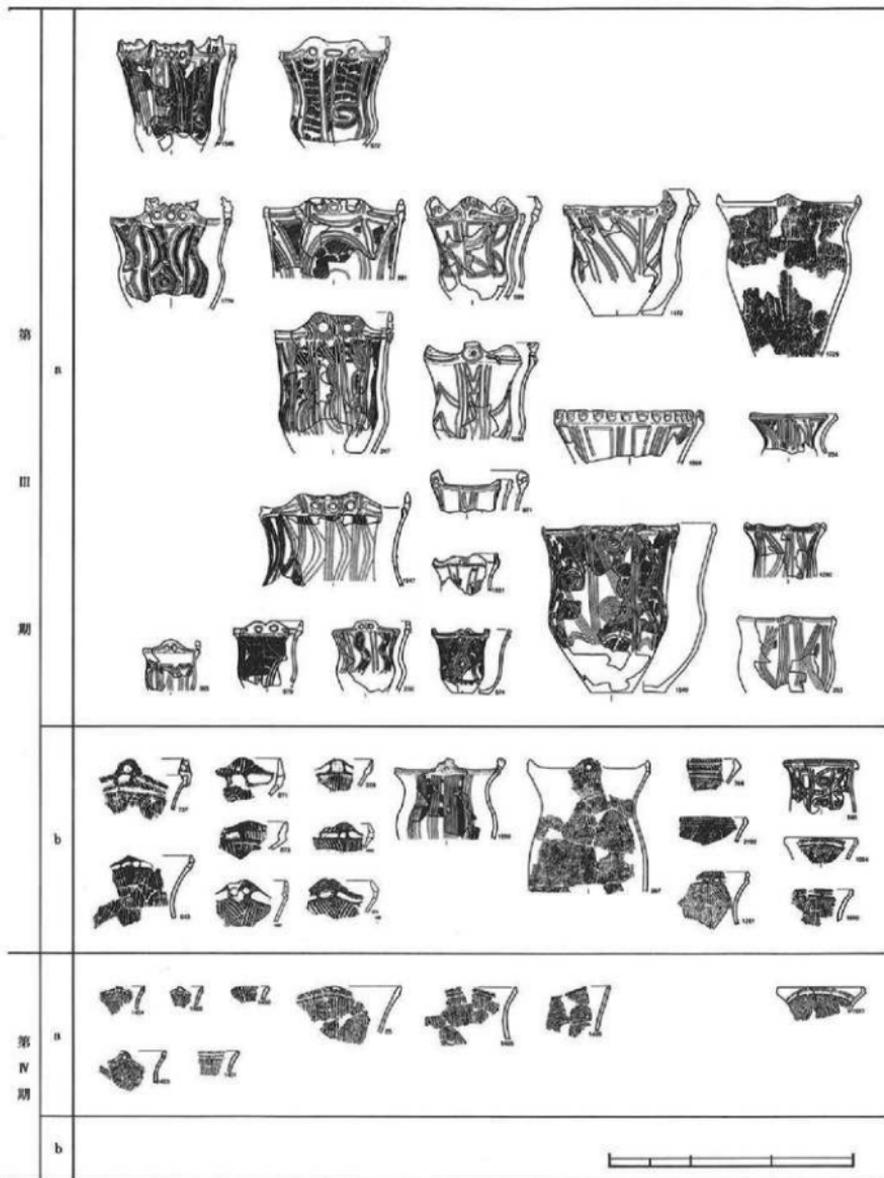
これら当該信州系土器群の変遷については、すでに幾つかの試案が提示され、大まかな流れが把握されている。その流れからすれば、十三本塚北遺跡の土器群は、和中原遺跡の土器より後出で、栗林遺跡の土器群と、おおむね併行する関係にありそうである。また、土器様相からすれば、信州で深鉢がほとんど見当たらないことに対し、十三本塚北遺跡では金魚鉢形をした鉢類のほかに、深鉢が多く組成しており、越後における特徴と見なすことができよう。このような差異については、信州からの流入後、越後において在地化した結果、新たに深鉢形を生じた可能性がある。ただし、文様構成等が、栗林遺跡の土器群と近似していることは、両者がかなり緊密な関係にあったことをうかがわせている。また、B群土器は、半粗製や粗製土器を伴う完結した土器群であり、単なる土器や文物の搬入ではなく、多くの人員が移住するなどの背景を考慮する必要がありそうである。

本土器群の文様等を観察すると、口縁部文様帯が簡略化されたり、省略されたもの、あるいは沈線文様が細線化あるいは多条化したものが若干認められる。これらは、第IIIb期へ下ると考えられるが、その他の大半はほぼ同じ時期で、第IIIa期の所産と考えられる。そして、第IV期まで下る事例はほとんど見受けられない点は、出現当初の第IIIa期を過ぎると順次衰退し、消滅の道をたどったことがうかがえる。

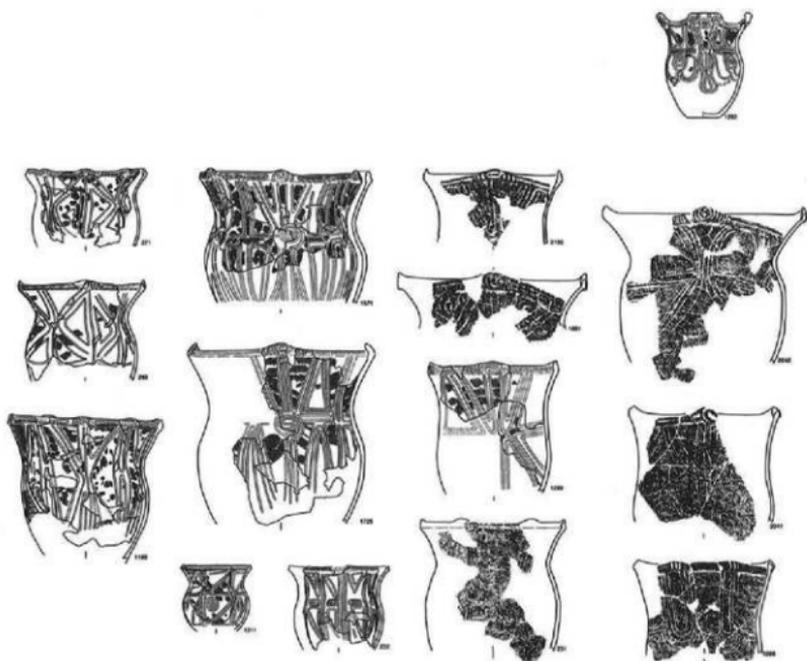
なお、越後における当該期の集落から、和中原系列に属する土器群がまとめて出土した事例が他になく、本遺跡では遺構内一括等の資料に恵まれていない。このため、本土器群の変遷等は、信州での偏面的な研究が必要不可欠であり、彼の地での進展に期待したい。

**C群土器（沈線文系土器群）** 南三十種場式土器といった場合、本土器群がその主体となる。特徴としては、主文様が沈線が多用して描かれるもので、器形や文様構成等から、それぞれC群第I類・第II類及びD群土器に大別できる。これらの中で、C群第I類が本来的な沈線文系土器群とすることができるもの





第36圖 十三本塚北C・D群土器の変遷試案(1)



第37図 十三本塚北C・D群土器の変遷試案(2)

である。第Ⅱ類は、器形と口縁部に信州系に特徴的な要素が取り入れられており、実態としてはB群・C群の中間的な土器群である。D群土器は、C群土器の文様が細線化・多条化して生成され、器形的な変化も生じた多条細沈線文土器群である。このD群については別項で後述することとし、本項ではC群第Ⅰ類と第Ⅱ類について個々に変遷を見ていく。

まず第Ⅰ類は、沈線文系の範型ともいえる土器群で、基本的には東北部系の出自を持つ土器群である。B群土器の影響が認められない、もしくは多少の影響は看取されても、あくまでも沈線文系を主体とし、その伝統色が強い。本類における特徴としては、器形が胴部中位でくびれ下半部がやや減り衰りをもって膨らみ、文様構成は縦位を基調として描かれる点にある。口縁部の把手装飾も、意外に大型で派手なものが目立つ。しかし、把手装飾が単純化の傾向を見せ、口縁部が突起状もしくは波状口縁を呈し、幅広の凹線状文を巡らせたり、また突起頂部や口唇部に短沈線文を巡らせる一群（C群第Ⅲb類）は、沈線がやや細く、多条化の傾向をみせ、かつ若干の粗雑観を与えるものとなっている。これらは、次時期に向けた新たな土器群形成への始まりと考えられ、これらを第Ⅲb期の土器群とする。

第Ⅱ類は、信州系の中中原系列に特徴的な文様を、口縁部に巡らせる沈線文土器群である。器形としては、C群第Ⅰ類の影響を認めつつも、B群にかなり近似した器形的な特徴を呈することを基本とする。文様構成や要素から見ると、口縁部以下胴部全体が一段縦位構成をとるもの（ $\alpha$ 系）と、頸部を区切る二段構成で文様が描かれるもの（ $\beta$ 系）があり、二大別が可能である。前者の $\alpha$ 系は、縦位に垂下する沈線文帯の区画内を、緩い「く」の字もしくは逆「く」の字に緩く垂下させる場合（ $\alpha 1$ ）と、交互に対向させて「水」字状の構図をとるもの（ $\alpha 2$ ）とに分類することができる。後者の $\beta$ 系については、本来的に頸部を区切る文様系列があり（1282）、その系譜もしくは影響を受けていたことが考えられるが、文様のには「米」字状の構図をとるもの（ $\beta 1$ ）と、B群の文様要素が取り入れられたもの（ $\beta 2$ ）が看取でき、 $\beta 2$ については、 $\alpha$ 系と $\beta$ 系の融合というニュアンスが強い。

当該土器群の時期については、文様要素からすればほとんど同じであり、時期差を見出しがたいが、細沈線が多条化した1300などが第Ⅲb期に下り、これ以外の大半は第Ⅲa期の所産と考えられる。

**D群土器（多条細沈線文土器群）** 本群に分類した土器群は、細い沈線を多条化させて文様を施文させることを特徴とする。しかし、大半が破片資料で占められ、完形品類をほとんど得ることができなかった。このため、本遺跡資料のみでは、実態等を明らかにすることは難しい。口縁部の形態については、平縁と波状口縁があり、後者には若干の装飾を持つ突起が付される場合がある。当該土器群については、文様要素や突起の変化等で細別できると予想されるが、本遺跡出土土器群の文様をみると、頸部無文帯や頸部を区切る細沈線文帯等の有無で大別することができるが、基本的には同じ部類の文様が施されている。したがって、本土器群については、段階区分を行うことは、資料数から見ても現状で無理を伴う。今回は、取り敢えずD群土器のすべてを一括し、一段階で把握しておくこととし、C群土器の第Ⅲb期に後続させ、第Ⅳ期に編年したい。ただし、この後続には、さらに細線化し、口縁部には平行細沈線文が多帯化して施される段階が想定されることから、第Ⅳ期を新古に二分し、本遺跡資料については古段階として第Ⅳa期としておく。なお、第Ⅳb期については、新たに資料が報告された段階で言及することとして、今回は詳細を留保する。

### 3) 時期区分の大別と細別

さて、A・B・C・Dの各土器群の検討から、それぞれ幾つかの段階を設定することができた。そこで、

時 期 区 分		越後の土器型式名等	標 識 的 資 料	関 東	東 北 南 部	北 陸
十三本塚北中期段階Ⅰ	a	中期前葉段階				新崎・上山田
	b	中期中葉～後半段階		—		
	c	中期末葉段階		加曾利BⅣ	大木10	
十三本塚北後期下層段階Ⅱ	a	1 三十稲場式成立期	万隆寺林SK188	称名寺1	綱取Ⅰ古段階	
		2 三十稲場式古段階	原J13p7			
	b	三十稲場式古段階	城之腰R24p30	称名寺2	綱取Ⅰ新段階	
			+			
	c	1 三十稲場式新段階	馬下稲場遺跡	堀之内Ⅰ古段階	綱取Ⅰ古段階	
2 三十稲場式新段階	岩野原10ML1 十三本塚北SKp1734	堀之内Ⅰ中段階				
十三本塚北後期中層段階Ⅲ	a	古 南三十稲場式古段階	+(向原IID4p3)	堀之内Ⅰ中段階	綱取Ⅱ古段階	気屋Ⅰ
	新 南三十稲場式古段階	向原II C1p1 城之腰C32p10				
	b	南三十稲場式古段階	岩野原6PL69(一部)	堀之内Ⅰ新段階		
十三本塚北後期上層段階Ⅳ	a	南三十稲場式新段階	アチャ平下段(一部) 十三本塚北SK92	堀之内Ⅰ末段階～2	綱取Ⅱ新段階	気屋Ⅱ
	b	南三十稲場式新段階	+(元屋敷200・211)	堀之内Ⅱ～加曾利BⅠ	綱取Ⅱ新段階 ～鋼取直後	
+	v			加曾利BⅠ		

第8表 十三本塚北遺跡土器群変遷試案

これらの検討結果を前提に、大区分した第Ⅰ期～第Ⅳ期の各期に小期を設定し、十三本塚北遺跡における縄文集落の時期を細分し、若干の補足を行いたい。第8表は、その試案を総括的にまとめたものである。

第Ⅰ期 まず、縄文中期とした第Ⅰ期（十三本塚北中期段階）は、前葉期（第Ⅰa期）と末葉期（第Ⅰc期）、そして両小期の狭間で空白期となる中葉から後半期（第Ⅰb期）の三小期を便宜的に設定した。当該期の土器群は廃棄場下層の出土であり、後世における持ち込み等はほとんどなく、したがって本遺跡と縄文人との関わりを証明するものである。しかし、中期前葉の第Ⅰa期は、本遺跡南側に隣接する十三本塚遺跡との間接的な関係に過ぎず、当該地における集落形成は空白期を隔てた中期末葉の第Ⅰc期からとなる。なお、第Ⅰc期とした土器群は、本遺跡では僅少であり、中期と後期の境界あるいはその区分等、およびこれら土器群と第Ⅱa期とした土器群との関係等については、言及せず保留する。

第Ⅱ期 当該期は、3段階の小期を設定したが、それぞれ新古に二細分して時期区分を行いたい。第Ⅱa期は、三十稲場式成立期（aⅠ期）と古段階初葉（aⅡ期）に相当する。併行関係としては、称名寺1式（1段階～5段階）〔鈴木1990〕に相当するが、本遺跡出土資料は少なく、細部の検討はできていない。第Ⅱb期は、本遺跡の空白期もしくは衰退期で、明確な土器群を抽出できていない。基準資料については、城之腰R24p30一括土器群を宛てがう。併行関係としては、称名寺2式（第6段階）となる。

第Ⅱc期から徐々に資料が増加する。橋状把手の分類ではd類の時期となり、資料数は少ないが十三本塚北SKp1734を基準に考えたい。ただし、同様な資料群が出土している五泉市馬下稲場遺跡〔五泉市教委1983〕の事例とは、相対的な新古の差があるため、それぞれを1期と2期に細分した。第ⅡcⅠ期はおおむね堀之内1式2段階、第ⅡcⅡ期は同じく3段階に相当すると考えられる。第Ⅱc期の併行関係を以上のように設定した場合、第Ⅱb期とした城之腰R24p30一括土器群とのギャップが大きく、称名寺2式（7段階）と堀之内1式（1段階）が空白となる。この空白期を埋める資料については、おそらく城之腰遺跡に存在すると考えられるが、本遺跡での出土例が明確でなく、このため変遷試案も空闊とし、資料の

増加や研究の進展を待って再検討したい。

第三期 当該期から南三十稲場式期となる。本遺跡では、土器型式が急転することになる。当該期も a・b の 2 小期に細分したが、該期の一括性が保証される遺物群が少なく、実態は必ずしも明らかでない。

特に、三十稲場式が終焉に至る過程が不分明である。このため、第三期 a 期については、三十稲場式の名残りを強く留める段階（a 期古相）と、展開をほぼ終えた段階（a 期新相）とで、便宜的となるが概念的な細分を行っておく。十三本塚北遺跡では、第 II c 2 期から二度目の集落形成が始まるが、第三期 a 期新相段階で最盛期を向かえることになる。第三期 b 期については、良好な資料に恵まれておらず、本遺跡でも破片資料が多い。したがって、すでに衰退期へと向かう過程にあると考えられる。土器様相としては、深鉢の形態に B 群土器の名残りを部分的に認めることができるが、文様要素としては信州系の要素はほとんど見受けられず、強いて言えば口縁部に巡らされる沈線や短沈線文に形骸化した姿を留める程度となっている。したがって、第三期 b 期の土器群とは、C 群土器第 I 類の系譜が引き継がれるのであり、第 II 類の系譜はほとんど途絶え、第四期ではまったく消滅することになる。併行関係については、第三期 a 期が堀之内 1 式 4 段階、第三期 b 期については同じく 5 段階頃に比定しておき、資料の増加を待って再検討したい。

第四期 D 群土器とした多条細沈線文系土器群の時期であり、南三十稲場式新段階に比定されている。文様の系譜としては、第三期 b 期における C 群土器第 I 類の系譜から追うことができる。第四期については a 期と b 期に細分したが、本遺跡で確認されるのは、ほとんど第 IV a 期までとなる。併行関係については、第 IV a 期を堀之内 1 式末から堀之内 2 式のある段階まで想定するが、上限についての検討は今後の課題である。また、第 IV b 期は堀之内 2 式後半頃に對比させつつも、下限は加曾利 B 1 式まで下る可能性を指摘しておきしておきたい。

なお、第三期から第四期への変遷は、C 群第 I 類の系譜で連続的に理解することができるが、両者の器形や文様の差異は極めて明瞭である。南三十稲場式土器の細分については、これまで古段階と新段階という用語で示されてきたが、もっと明確な区分—例えば、I 式あるいは II 式などの呼称—を行っても良い時期に至っていると考えるのではないだろうか。

課題 ところで、各土器群の文様や器形等は個性に溢れている。しかも、B 群と C 群は外来系の土器群として流入し、在地化したものであり、D 群は主に C 群を母体として生成したと考えられる。さらに、SKp-1734 で A 群・B 群の両者が出土し、また廃棄場では各土器群が混在していたことも事実である。したがって、A～D の各土器群は、互いに有機的な関連を有しつつも、それぞれ独自の変遷過程をもち、それぞれが個々に併行関係を有するなど、単純な図式で語れない変遷過程にあることを示唆している。特に、A 群土器から B 群・C 群土器への変遷過程、つまり第二期から第三期への移り変わりについては、三者がそれぞれ別個の独立した型式に近い存在であり、後二者が外来的な出自を持って越後に土着した存在であることが明らかである以上、在地に展開していた三十稲場式土器との併行関係は当然あり得る。この状況については、今回明らかにし得なかったが、今後の大きな課題と言うことができるだろう。

また、前述した変遷試案は、具体的な変遷過程を叙述するまでには至っておらず、大まかな見通しを述べたに過ぎない。あくまで南三十稲場式土器を考えていく前段的な作業ではあるが、充分な叩き台を示すにも至れなかったことをお詫びしたい。

そして、今回の検討では、石井寛氏・木下哲夫氏等多くの方々から有益なご教示をいただいた。しかし、それらを十分に理解し、活用しきれなかったことが多々あると思われ、誤解もあり得る。このような結果となったことについて、文末ながら、非力をお詫び申し上げるとともに深く感謝申し上げる次第である。

## 2 十三本塚北遺跡における石鏃生産活動

十三本塚北遺跡からは、未成品65点を含む123点の石鏃が検出されており、出土石器の約5.5%を占める。石器組成の中でも石皿、研石に次ぐ数量を示し、集落における生業活動で大きな割合を占めた器種といえるものである。未成品の中には両極剝離技術により小形円礫から素材が作出されているものが多く、一連の石鏃製作技術の中でも占めるウエイトが高いことがうかがえた。一方、同様の石材から作出されたピエス・エスキューコ86点も確認されている。同一の技術により形成されたピエス・エスキューコには、石鏃の未成品に類似する資料も存在し、両者の判別が困難なものが少なくない。

柏崎の海岸部に漂着するチャート質の円礫は、両極打法を背景とした石鏃製作を目的に周辺地域に搬入される石材であり、その分布は中越平野部に広がるものとされている〔佐藤1999〕。縄文時代における柏崎平野内では岩野遺跡（中期中葉～中期後葉）、剣野D遺跡（後期前葉～後期中葉）の調査事例において海岸部から採取されたチャート質石材の円礫を用いて石鏃製作が行われていることが確認されている。

本稿では、当遺跡における出土品整理作業を通して明らかとなった、両極剝離技術を介した石鏃生産活動の状況やその特徴について若干の考察を交えて報告することとする。

### 1) 石器組成・石材組成からみる石鏃の位置付け

#### a. 石器組成

本遺跡の機能別にみる石器組成は、採取・加工具（49%）>狩猟・漁撈具（37%）>調理具（14%）となる（第34図参照）。特に極端な偏りが見られないことが特徴として挙げられる。狩猟具となる石鏃の出土量は概して多く（123点）、石皿、研石に次いで出土量を示す器種である（第7表参照）。石皿、研石は破損品が大半を占め、実際よりも数量を多くカウントしている可能性が高い。このため、石鏃の組成率はそれ以上に高くなるものと想定される。これは、石鏃の出土量が多く打製石斧を圧倒するという平野部に位置する遺跡の組成の特徴を示すものとしてとらえられる。漁撈具と想定される石鏃の出土は石鏃の約1/3となり、狩猟・漁撈具における狩猟具側の優位性がうかがえる。また、定形石器の未成品としてまとまった量が検出している器種は石鏃以外には存在せず、傾動的な製作活動の様子を示している。

次に、当該期における近隣遺跡の石器組成と比較することとしたい。信濃川中流域に位置する小千谷市城之腰遺跡（中期後半～後期前半）は、石器総点数4624点が出土している〔鈴木1991・1999〕。石鏃が石器の約4%となるが、石鏃はその5倍もの出土量を示す（約14%）。打製石斧（約8%）と磨製石斧（約6.8%）がほぼ2倍も出土しており、磨石類は全体の約63%を占める。用途別に多寡をみると、調理具>採取・加工具>狩猟・漁撈具となる。

沿岸部付近に位置する巻町上原遺跡（後前～後中）は、215点の石器が検出されている〔前山1994〕。石鏃が約37%と非常に高い割合を占め、磨製石斧は約5%を占める。打製石斧は1点のみの出土であり、磨石類は約9%を占める。狩猟・漁撈具>採取・加工具>調理具となり、新潟県における沿岸部地域の組成の特徴を示す。またピエス・エスキューコが石器総数の約27%を占める量が確認されている。この遺跡の石器組成は石鏃とピエス・エスキューコが多出現象と、これらの製作に関わる大量の石核・剥片によって特徴付けられると指摘されている。さらに、石鏃と同石材となるピエス・エスキューコには小形の石核



- 1 上ノ原遺跡 (徳町: 後前~後中)
- 2 小丸山遺跡 (柏崎市: 後中~後末)
- 3 岩野遺跡 (柏崎市: 中中~中後)
- 4 十三本塚北遺跡 (柏崎市: 後前)
- 5 刺野D遺跡 (柏崎市: 後前~後中)
- 6 城之腰遺跡 (小千谷市: 中後~後前)



第38図 十三本塚北遺跡と石器組成比較対象遺跡位置図

(石織の素材)が含まれる可能性があるとの見解がなされている。なお、小形石核とピエス・エスキューには黒曜石製のものが含まれ、下越産の玉砂利状原石を素材とするものである。

今度は、時期がやや新しくなるが同じ柏崎平野に立地する小丸山遺跡と石器組成と比較したい。小丸山遺跡は荒浜砂丘上でも海岸付近に立地する遺跡で、縄文時代では後期中葉~末葉を主体に営まれた遺跡である。石器総点数は139点で、石織は未成品を含み104点出土しており全体の約75%を占める。打製石斧は出土しておらず、磨製石斧が3点出土している。磨石類は7点出土している。漁撈に関わる石器、つまり石鎌は1点のみの出土である。石織はこの時期としては異例なほど大振りのものが目立ち、抉りの発達した凹基有茎鎌が大半を占める。このため、獣を対象とした狩猟のみならず漁撈具としての機能も予想される。近接する刈大平遺跡も同様の組成の傾向がみられている〔伊藤1985〕。狩猟・漁撈具>採取・加工具>調理具となり、沿海部型の組成を示す。石器組成率から石織を使用した生業が著しく盛んであったか、石材産地で大量に製作し遺跡外に搬出していた状況が想定される遺跡といえる。

この組成の極端な偏りは、特定の器種のみ傾倒した生産活動の連続としてとらえられる。報告書内では生活必需品と考えられる石器類は遺跡外に持ち出されたと想定されている〔伊藤1985〕。これを受け、石織のみが遺跡内に大量廃棄されたとすれば、他の石器とは異なった目的で遺跡内において製作されたものとしてとらえられる。荒浜海岸にはチャート質の円礫が多く漂着することが知られており、石材の採取が容易であったことが積極的な石織製作の要因となったものと想定される。なお、玉髓・チャートの小礫を素材とするピエス・エスキューが約6%出土している。中央部に礫面を残し素材本来の形態が何

えるものが多く、典型的な楔形を呈するものは存在していない。これは岩野遺跡と剣野D遺跡でも類似した資料が多数確認されている。

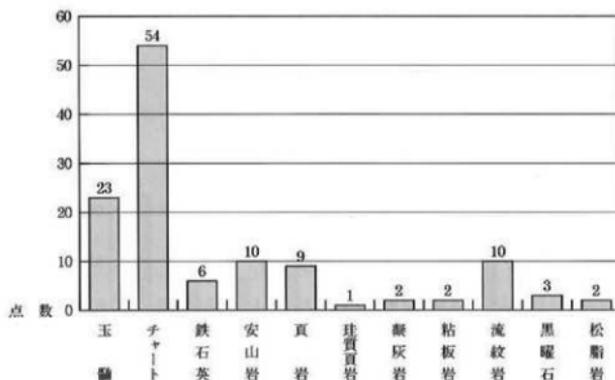
#### b. 石材組成

本遺跡出土の石鏃における使用石材の内訳は第9表のようになる。成品58点と未成品65点、全123点を対象とした。在地石材となる玉髄とチャートが主体を占め、搬入石材の頁岩・流紋岩・安山岩が若干量認められる。何れも細部の加工が可能な珪質の石材である。黒曜石製の製品が1点出土しているが、形態や加工技術が特異であり、搬入品としてとらえられるものである。同石材の未成品が2点出土しているが、その他に黒曜石を石材とする器種は確認されておらず、希少で良質な石材を優先的に石鏃の素材とした状況がうかがえる。素材の状態は玉髄・チャートが小礫または剥片、頁岩・流紋岩・安山岩は剥片素材が多く確認できる。このため、在地石材は海岸等から小礫の状態では採取したもの、搬入石材は石核の状態では持ち込まれたものと想定される。

小丸山遺跡では、海岸で採取可能な石材、チャート・玉髄・メノウ・鉄石英は約63%を占めるが<sup>1)</sup>、搬入石材の頁岩・硬質頁岩も19%とある程度の比率をもつ。その他凝灰岩や黒曜石が少量みられる。剣野D遺跡でも石鏃の石材は在地石材の玉髄・チャートが主体を占めるが、搬入石材が客体的に認められる。搬入石材の中でも遠隔地からの搬入が想定される石材・黒曜石は、縄文時代後期前葉から後期中葉の柏崎平野においては出土量が極めて限られ、1遺跡で成品1・2点程度の出土となる。このことは原産地周辺の遺跡との交易が希薄な時期であったことを示す様相としてとらえられよう。

以上のような使用石材の状況から、剥片石器、殊に石鏃の製作においては石材と成り得る在地石材が多量に産出される地域であっても、より良質な搬入石材での並行した製作活動が認められる。利器や刃器は、石材や精密な加工が貫通力や切れ味等に直接影響するため、常により良質な石材を他地域から求めていた

石材	玉髄	チャート	鉄石英	安山岩	頁岩	珪質頁岩	凝灰岩	粘板岩	流紋岩	黒曜石	松脂岩	合計
点数	23	54	6	11	9	1	2	2	10	3	2	123



第9表 石鏃石材組成表

ものと考えられる。なお本遺跡では、在地石材が無加工のまま廃棄されたものが目立つ一方で、搬入石材の石核はほぼ極限まで剥片素材を獲得し尽くした残核の状態のものも多く見受けられる。搬入石材の希少性、重要性を示す状況としてとらえられる。

一方、ピエス・エスキューの石材組成は第10表のようになる。ここでは図を掲載した32点の資料のみを対象とした。注質石材に限定され石鎌の石材構成に類似するが、搬

入石材は希少で在地石材の占有率が非常に高いことが読み取れる。本遺跡出土のピエス・エスキューは小形礫を素材としたものが多く、剥片素材のものは少ない。小丸山遺跡でも同様の様相が確認できる。石鎌とピエス・エスキューの素材における類似性・共通性が強いことに着目を感じる。

## 2) 成品にみる諸データ

### a. 形態

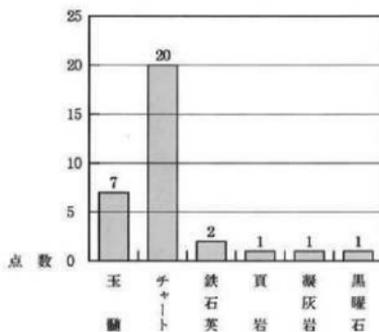
出土した石鎌は基部形態をもとに形態分類を行い、全58点が概ね5種類に分類された。

まず、石鎌の特徴となる茎部の有無によって分類すると、茎部を有しない無茎鎌が大半を占める。有茎鎌は2点のみの出土である。越後では有茎鎌の普及は縄文時代後期中葉頃から始まると言われている。また、無茎鎌主体から有茎鎌主体となる形態変化は漸移的なものではなく、むしろ急進的なものとしてとらえられる。そして、後期中葉から末葉にかけては有茎鎌が主体を占めるに至る〔鈴木1990〕。甲信越地方では新潟県の普及が早く〔鈴木1983〕、小千谷市三仏生遺跡（後期中葉）では有茎鎌が半数を超える比率となる〔中村1967〕。この変化は着柄方法の技術的变化や、アスファルトの普及などにもなった変化であったと想定される。

大半を占める無茎鎌の中では凹基鎌が全体の約59%を占め、次いで平基鎌が多く約34%となる。凹基鎌でも抉りが発達したものは主体的とはならず、抉りの未発達なものや不明瞭なものが多い。また、抉りの発達したものは大形となるものが多く、法量的にも個々のバラつきが目立つ。これは形態的な規格・斉一性が弱い状況としてとらえられる。その一方、主体を占める抉りの小さなものや平基鎌は法量にある程度のみとまりがみられ、これらが本遺跡で主体的に製作されていた石鎌の形態として理解される。有茎鎌は前述したように2点（約3%）が出土しているが、その基部形態は何れも凸基部分にやや発達した抉りをもつ程度で明瞭な茎部の作り出しといえるものではない。

信濃川中流域に位置する中期後葉から後期前葉に営まれた城之腰遺跡でも、全122点中、有茎鎌は2点

石材	玉	チャート	鉄石英	頁岩	凝灰岩	黒曜石	合計
点数	7	20	2	1	1	1	32



第10表 ピエス・エスキュー石材組成表

のみの出土となる。しかし、後期中葉から後葉を主体とする小丸山遺跡では、状況が一転し有茎鎌が67%を占めている。また、後期前葉から後葉までに比定される上原遺跡では、有茎鎌が全体の約38%と高い比率を示す。このデータは遺跡の主体は前葉にあるものの、存続時期は後葉まで伸びることが大きな要因となるものととらえられる。このように新潟県内の遺跡では後期中葉以降に有茎鎌が急速的に普及していく様子がうかがえる。

#### b. 未成品およびピエス・エスキューとの法量の比較

小形円礫を両極剝離技術によって加工・製作していく石器類として、本遺跡の出土資料から石鎌およびピエス・エスキューが代表的なものとして挙げられる。次に、これらの資料を長幅比における分布の状況を示し、絶対的数値として比較することとしたい。法量の分布状況は、形態や加工の度合いを反映するデータとなるものととらえられる。石鎌は成品と未成品に分けて分布の比較を行った。

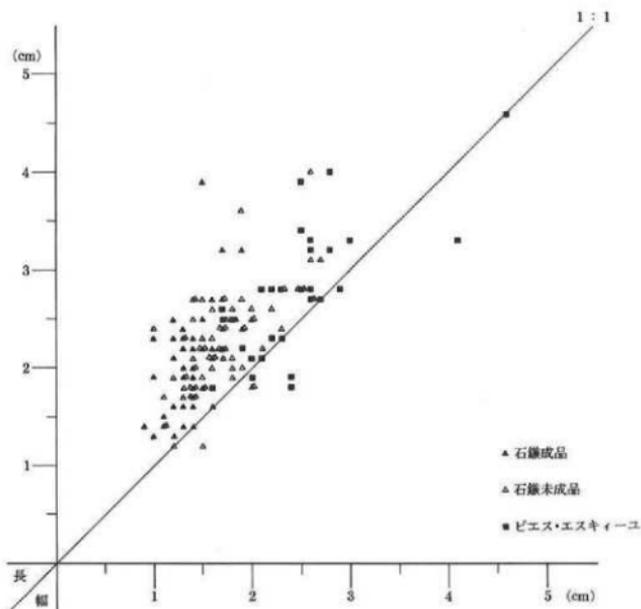
石鎌の成品は法量の分布に強いまどまりがみられ、規格・斉性の強い平面形態が数値に反映された結果として判断される。多少の法量の個体差は認められるものの、その長幅比はほぼ一定値を示しており、平面形態に対する規範性の強さがうかがえる。石鎌は一般に縄文時代の剝片石器の中でも最も規格性が強い器種としてとらえられ、遺跡では非常に類似した成品形態のひとつとまりが確認されることがある。これは集団で行う狩猟活動に備え、土器の如く定量を一時期に製作していた可能性を示すものと推定される。

ピエス・エスキューは大小の差がみられ、石鎌の成品ほど法量にまどまりが見られないが、決して大きくバラツキが認められるものではない。これは素材となる円礫の法量を強く反映するものであり、素材選択時にある程度の法量のまどまりを意識していた状況を示すものと想定される。石鎌同様に長幅比が1:1とならないものが多いことには注目を要する。

一方、石鎌未成品の法量分布は、石鎌成品とピエス・エスキューの中間的様相を示すものとしてとらえられる。全体に成品よりも若干大きい法量となり、加工の未発達なものはピエス・エスキューと重複する分布を示している。

ピエス・エスキューは従来「両極剝片」、「楔形石器」と呼ばれ、楔としての役割をもつ石器、小形石核の一形態、そして小形剝片石器の未成品資料と概ね3種に該当するものと考えられている[岡村1976・田中1979・織笠1992]。当遺跡で出土したピエス・エスキューも、小礫に一方の両極剝離が確認されるものから、両極剝離を繰り返した結果として典型的な楔形石器の形態を呈する資料まで多岐に渡り、その属性は一様とは言えないものと判断される。出土資料を素材という観点からみると、小礫を素材としたものが大半を占め、剝片素材のものは希少であることが大きな特徴として挙げられる。また、その石材は両極技法を多用して製作する石鎌と同様の、玉髓・チャート・鉄石英といった在地の珪質石材が主体となる。さらに、素材形態も石鎌素材と同様となる偏平で楕円形のものが多いことで石鎌と共通し、その法量は出土した石鎌の成品、未成品よりもひとまわり大きい法量分布を示すものが多い。法量分布にみる長幅比は石鎌のものとはほぼ一致するなど両者の共通点は多い。

これらの点から、ピエス・エスキューとして分類した資料には、製作段階初期の石鎌未成品または素材としてとらえられるべき資料が多く含まれていると想定されるのである。しかし、明確な根拠を見出すことはできず、鎌としての形態が見い出せるもののみを石鎌未成品と判断し、抽出しているため、これらはそのままピエス・エスキューの中に散えて含めることとした。



第39図 石鏃とビエス・エスキューの長幅分布図

### c. タール状付着物と装着方法の推定

**タール状付着物** 当遺跡では成品4点(約6.8%)にタール状の黒色付着物が確認された。科学的な鑑定は行っていないが、アスファルトと断定してはば間違いないものである。付着率が低いことから、着柄における補助的な役割を担う程度を示すものとしてとらえられる。付着部位の状況が明瞭といえるものは存在しないが、ほぼ資料の中心軸に沿った基部から中央部にかけて付着する傾向が読み取れる。

石鏃の着柄にアスファルトが用いられ始めたのは縄文時代中期初頭頃であるが、付着率が高くなるのは後期中葉から晩期にかけてとされている〔田中2000〕。柏崎平野の遺跡でアスファルトの使用が確認・報告されているのはこれまで刈羽大平・小丸山遺跡のみであり、本遺跡の石鏃にみられるものは当該地における使用の初源を示すこととなる<sup>2)</sup>。先に述べた小丸山遺跡では出土した石鏃成品の約54%にアスファルトの付着が確認されている。石鏃の形態は有茎鏃が3分の2を占める状況にあるが、茎部の有無や平面形態とアスファルトの付着率には明確な相関関係がみられないようである<sup>3)</sup>。付着部位は基部内側から先端付近にかけて広範囲に付着するものが多く、先端部と側縁部を残すほぼ全面に付着するものも確認されている。しかし、広範囲にアスファルトが付着したものの中には、十二分な使用により着柄部の外側まではみ出したものも多く存在すると想定される。

**装着法の推定** 出土した石鏃は特殊な出土状況等を示すものがなく、成品のほとんどが何らかの方法で矢柄に固定され弓矢としての機能を持った狩猟具であると考えられる。アスファルトの付着状況により矢柄の接着部分の様子がある程度うかがえる。併せて成品資料の法量や形態的特徴などをもとにして、矢柄

の装着位置や装着方法について若干の推定を行いたい。

まず着柄の大前提として、基部の幅よりも細い矢柄が用いられることとなる。その理由としては、石鏃の先端部から基部にかけての鋭利な側縁部分が全体に露出していなければ貫通力が大きく鈍ってしまうこと。弓の反発力を利用して直進的に素早く弓矢を打ち出すには、先端部にある程度の重心を持たせなければならないことなどが挙げられる。石鏃は平均1グラム程度の重量であるが、木製の矢柄の比重と比較すれば十分な重心がとれる重さと考えられる。平基鏃と凹基鏃でも挟りの小さなものは、全幅が概ね1~2cmに収まり、

最下部となる基部幅は1cm前後に集中する。このことから矢柄はほとんどの場合径1cm未満の細いものと推定される<sup>4)</sup>。一方、挟りの発達した凹基鏃は概して法量が大きく幅も広いものが多い。これは、発達した長い逆刺しを露出させつつ挟入部分の内側を矢柄(根挟み)に収めなければならないため<sup>5)</sup>、このような幅広い平面形態を取ったものと思われる。また、矢柄に石鏃を差込む際、挟り中央部から先端部まで(身部)の差込部の長さを確保するため、自ずと先頭部を含む全長が長くなる傾向を読み取ることができる。

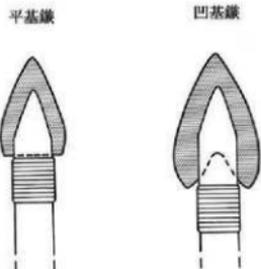
前述したアスファルトの付着状況を考慮に入れると、着柄部分は石鏃の上半部分にまで及ぶものが多いものと予想される。着柄面積を確保することで材質の違った石鏃と矢柄という二者を強固に接着、固定することが可能であったと考えられる。石鏃の形態からみると、中間部分の幅は1cm以内に収まるものが大半を占め、細い矢柄の上端部は更に先細りする形態に整える必要があったものと予想される。また、法量が長さ・幅ともに1cm程度となる小形成品の存在から、着柄のために石鏃と根挟みの密着する部分は石鏃全体のかかなりの比率を占めていたものと考えられる。このような状況から、石鏃が実際に直接露出していた部分は概ね先端部と両側縁程度であり、中央部から下半部(有茎鏃の場合は某部)は矢柄内に収められ着柄されることが多かったと推定される。

### 3) 製作技術

出土した石鏃の成品・未成品資料、および製作で生じた大量の剥片等からうかがえる製作技術として、両極剥離技術および押し剝離技術を併用した製作の様相が浮かび上がってきた。つぎに、主要な製作技術としてとらえられる、両技術の主な特徴や役割などについて個別に記述していくこととする。

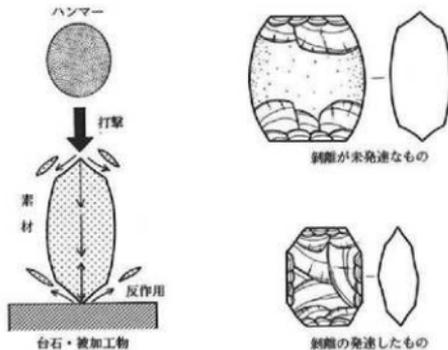
#### a. 両極剥離技術

石鏃製作技術を復元する上で、両極剥離技術が加工の前段階に置かれた未成品資料が多く確認された。これは、小形の円礫を主な素材とすることがその大きな要因となるものと考えられる。小形円礫は扁平な形態のものがより多く選択されていることが第一の特徴として挙げられる。石材は在地石材ととらえられる玉髄・チャート及び鉄石英などである。一方、搬入石材となる頁岩や凝灰岩の未成品には両極剥離がほとんど確認されていない。このようなことから、両極剥離技術は在地石材となる小形円礫を加工する際に積極的に用いられた重要な技法としてとらえられよう。



第40図 石鏃着柄方法推定模式図

両極剥離技術は、台石上に加工対象物（素材）を固定し上方から振り下ろすハンマーで挟み打ちにすることにより、下方からの反作用による力を利用して上下同時に剥離する技術である（第41図）。一般に両極剥離の痕跡としては、上下両端に未発達なバルブと打撃点に向かって集中するフィッシャーが生じるなどの特徴がみられる。また、対応する上下の両端縁が潰れたり、その周辺に対して直行方向に縦割れを生じる場合もある〔網川2000〕。両極剥離を繰り返し行くと、剥離される両端は相



第41図 両極剥離技法・ピエス・エスキューユ模式図

対的に中間部分よりも厚みを減じていき、作業方向の縦断面が変形状、凸レンズ状を呈するようになる（第41図参照）。平面的にみると、作業方向の両端に対となる鋭い縁辺が形成されていく特徴をもつ。さらに打撃部位を90°展開させると平面形は概ね四辺形状を呈するようになる。こうして求心状の剥離作業が打撃点を移して繰り返されるにつれ、円礫は次第に小形化、多辺形化していく。原石にみられた礫面はほとんど除去され、側縁はそれぞれ大小の階段状剥離や細かいツブレの状態を示す。こうして形成された側縁はこのまま押し剥離が行える状態に整っている。本遺跡出土のピエス・エスキューユは、強度の加撃により半截され剪断面を残すもの、反作用を受けた部分が概ね鋭い直線状の側縁となるものが目立った。剥離面の切り合いは不明瞭なもの、リングのはっきり観察できるものが比較的多くみられた。剥離が進み楔形を呈する資料は、長軸が2～3cm程度となり小形化したものが目立つ。

剥片石器素材となる大形石材に乏しい柏崎平野では、前期後半頃から明確に小形円礫から両極打法を用いて石鏃を製作する様相が調査事例から認められている。しかし、その量が増加するのは概ね中期以降とみられ、剣野D遺跡、岩野遺跡では小形偏平礫素材の石鏃未成品やピエス・エスキューユ、そして原石そのものが多く出土している。一方、弥生時代中期の玉造り集落として著名な下谷地遺跡からも楔形石器が大量に出土している。その多くは玉造りにおける素材の分割に用いるパンチの役割を担う道具としてとらえられており、主に安山岩剥片素材のものと珪質礫素材のものが存在する〔斎藤1979〕。石鏃は時期を反映した大振りの有茎鏃が主体となり、剥片素材から製作されたものが多い<sup>6)</sup>。

当遺跡で主に石鏃の素材及びピエス・エスキューユの素材となる円礫は、全体に丸みを帯び、表面は平滑であることが物質的特徴として挙げられる。大きさは概ね3～4cm程度と小形であることから、打面を設定し剥片剥離作業を行っていくことは非常に困難である。よって、直接打法により手持ちで剥片剥離を行うことは物理的に難しく、必然的に両極剥離技法を選択する必要があると考えられる。

以上のような両極剥離技術の諸特性から、石鏃製作上の主なメリットとして次の4点が想定される。

- ①直接手に持って打撃剥離を行うことが困難な小形円礫の分割・剥離・整形が容易に可能である。
- ②偏平な円礫であれば、側縁を徐々に薄く整形していくことが可能である。
- ③繰り返し作業を行うことで断面形態が凸レンズ状を呈し、石鏃の断面形態と共通するものとなる。

④両極剥離により階段状に潰れた縁辺は、次の作業となる押圧剥離が直接行い易い状態となる。

小形円礫を素材とした石鏝製作においては、こうした利点を予め製作者が認識した上で、両極剥離技術が多用されていたものと推定される。

#### b. 押圧剥離技術

押圧剥離技術は石鏝生作における2次加工の技術として中～後半段階に多用される技法で、規格性の強い成品を作り上げていく加工技術として非常に効果的なものである。特徴として平坦で細長い剥離を可能とし、その剥離面には明瞭な打点やバルブを残さないものが多い。石鏝としての形態を形成・整形していく上では、初めやや大きく平坦な剥離を求心方向に連続していき、その後細かい調整剥離が行われていく。この技術は小礫を素材とするもの、素材剥片を素材とするものの両者の石鏝加工技術として認められるものであり、剥片石器の2次加工技術として縄文時代において広く一般的に用いられた製作技法である。剥片素材の成品の中には主要剥離面や大きな剥離面を資料中央に残し、側縁のみに小さな押圧剥離が連続的に行われる剥片鏝に類するものも数点認められる。両極剥片素材のものはほぼ全面に求心状に剥離が施され、素材の未だ不整形な状態を押圧剥離によって入念に整えている。また、両極剥離痕の残る側縁は階段状やツブレの状態を呈するものが多く、押圧剥離剥離が行い易い状態となっている。

前述したように当遺跡の石鏝製作にみられる押圧剥離は概ね2段階に分けられる。

まず大まかな全体の形態を整えるためのやや大きな剥離が行われる。これは一般的に直接打撃法によるやや粗い調整剥離が行われた後に施されるものであるが、両極剥片を素材とするものは調整剥離がかなり省略化される傾向がうかがえる。初期の押圧剥離は側縁に対して常に直交する平行剥離よりも、剥離方向が左右で異なり互いの方向が $180^\circ$ の関係となる斜位平行剥離が施される資料が多い。相対的にみると、右斜め上方向と左斜め下方向からの対方向に連続した剥離が多く認められる。しかし、薄手の剥片素材から製作されたものは側縁のみに細かい剥離が施されるが、その場合は平行剥離が原則とされる。

その後、微細な押圧剥離により全体の細部が整形され、側縁はさらに鋭利で整ったものとなる。先端部や基部（挾入部）に細かい剥離が集中するものが多く、この段階に入念な整形が行われている。剥離は細かく急角度となり、先端の尖った押圧剥離具が使用されたものと想定される。資料の中には入念に微細な剥離が側縁全体に連続して施し、縁辺が鋭い鋸歯状となるものも存在する。しかしその一方で、成品の中にはごく部分的に細かい剥離が認められるものやほとんど施されなるとの資料も存在し、それぞれに個体差が認められる。なお、搬入品の可能性が高い黒曜石製のものは側縁に微細な調整が多くみられた。

#### 4) 製作工程復元

出土遺物を整理していく上で、本遺跡における石鏝の製作は、両極技術を背景とする製作工程と、素材剥片から製作していくもの2種類が主体的に存在するものと想定された。これは素材として用意される石材の状態（形態）が2種類あることに大きく起因するものとしてとらえられる。前者の素材形態は小礫状のものが多く、後者は石核から剥離された目的剥片をその素材とする。概して搬入石材となる石核は、在地石材の小礫素材と比較して量が少なく、大形となるものは確認できない。このため、搬入石材の入手が困難な状況であったことを推定させるものとしてとらえられる。さらに、黒曜石・珪質頁岩といったより良質な石材は特に限られた出土量を示す<sup>71)</sup>。このような状況から、定形的な小形剥片石器、特に石鏝の素材としては、常に安定した量が入手可能となる在地石材による生産活動が、主体的に行われていたと想定

されるのである。

在地の石材となる小形珪質円礫を用いた石鏝製作は、概ね両極剝離技法を背景とした生産活動としてとらえられる。そして、両極技法を用いた一連の成品製作には、獲得した素材を有効・効率的に加工していく各製作工程の特徴を多くうかがうことができた。製作工程は概ね5つが想定され、各工程の特徴などについて以下に個別記載した。

**第1工程 素材の準備** 適切な形態や石質の素材（石材）を予め準備することにより、成品までの製作時間の大幅な短縮を図ることが可能であり、素材の形態は加工の施し易さや成品の形状にまで大きく影響するものである。このため、素材の準備は製作工程の重要な役割を占める一工程としてとらえることができる。作業としては、まず石鏝の素材となる小形円礫が採取地で選別・採取される。その後、遺跡内でもより良質なものを再選択し製作が開始されたものと想定される。

本遺跡で両極技法を用いて製作する場合は、主に五百円玉大からマッチ箱程度の偏平円礫が選択され素材となる。石材は主に珪質石材の玉髄・チャート・鉄石英である。その多くは柏崎海岸部の波打ち際に打ち上げられた小形の円礫・偏平礫が遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。これらの石材は河原や沖積地上でもしばしば採取可能なものではあるが、海岸部のそれと比較して大きさや形状が不揃いであるものが多い。素材の形態は偏平で左右対称なものがより多くみられ、石鏝の素材として理想的な成品形態を想定した上で採取・搬入がなされたものととらえられる。石質は、節理の目立つような粗悪なものは極めて少なく、予め肉眼観察により選別された上で搬入されたものと考えられる。両極剝離の際、素材は節理の方向に分割される確立が高いため、極端な節理が観察されるものは予め除外されていたと考えられる。遺跡内では良質な未加工礫も多く検出されていることから、必要以上の素材が採取されストックされていたものと想定され、素材となる円礫が容易に入手可能な状況にあったものと考えられる。

**第2工程 両極剝片製作** 素材となる小形礫に両極剝離を繰り返すことにより、薄手の両極剝片を作り出す作業である。剝片素材の製作工程における素材剝片剝離から二次加工の初期段階までに相当する工程としてとらえられる。つまり素材の獲得とその調整を兼ねた製作技法といえる。剝離が連続するにつれ両端が直線的側縁を形成することから、比較的打撃面積の大きなハンマーで加撃され、反作用を生じる側は平坦で硬質なものが据えられていたと推定される。

第1回目の剝離は素材の長軸方向から始められる確立が極めて高く、その後も同方向に続けて剝離作業を繰り返すものが多い。最初の打撃が強度に行われ、素材が表裏2枚に半截されたものが多くみられる。それ以降は中～小規模な両極剝離が徐々に進行していくものが多くみられる。こうして長軸方向の剝離が進んだものが短軸方向の剝離へと移行していく。複数方向に剝離が進んだものは、概ね礫面が除去されるまでに至っている。この工程では既に二次的加工となる剝離が両極剝離技術により進行した段階ととらえられる。製作された両極剝片は、楔などの工具として使用されるものと、石鏝を中心とした小形剝片石器の素材となるものに大きく分類されるものと想定される。遺跡内からは両極技法によって半截された両極剝片を石鏝の素材としたものが多く確認されており、比較的容易に理想的な大きさの目的剝片も獲得できる。

**第3工程 調整剝離** 側縁から厚みを減るように求心状の剝離を行い、素材全体を薄く整形していく作業である。素材が小形であるため、概ね押圧剝離により慎重な作業がなされる。前工程で滑らかな礫面がほぼ除去されており、縁辺部分から押圧剝離具を中心方向に当て連続的な剝離を行っている。交互剝離は多く確認されず、片面ずつ周縁を剝離していくものが目立った。当遺跡では側縁から概ね平行した剝離

が繰り返して行われているが、斜位平行剥離が整然と施されるものも多く見られた。剥離角はかなり鋭角で、素材の中心まで届く縦長でやや大きい剥離が整然と施される。結果として、全体の素材厚みが減じられ、形態が左右対称な三角形形状を呈し断面は凸レンズ状に概ね整えられる。

第4工程 整形剥離 周縁部からやや小さな剥離を丁寧に行い、成品としての形態を確立していく作業である。調整剥離がうまく行われた場合にはこの工程が省略化されることがある。前工程で生じた全体の厚みのアンバランスや側縁の凹凸を解消し、細部の形態や縁辺の角度なども整えられる。凹基礫の挟入も概ねこの工程で形成される。主に押し剥離技法が用いられるが、剥離される面積は小さいものが多い。このため、調整剥離とは異なったより小形で先端が尖った剥離具が使用されたものと推定される。また、剥離角は平坦なものも多く観察されるが、部位によって意識的に変化を加えている。凹基礫における基部の挟りには急斜な剥離が行われ、特に中央部分は直角に近い剥離角を呈する。平基礫の基部は概ね均一で急斜な調整剥離が行われている。石礫の基部は、着柄・固定される部分であり、鋭斜よりもむしろ強度を必要とする部分である。このため基部は、先端部や側縁部とは異なった強度をもたせるための調整が行われていたと考えられる。

第5工程 仕上げ整形 全体の形態がほぼ整った半完成品の周縁に細かい剥離を施し、最終的な細部の整形がなされる工程である。主に先端部や基部両端といったより鋭利な部分に、細部整形を目的とする急斜で微細な剥離が集中する。剥離が非常に細かく角度も浅いため、剥離面の稜線が不明瞭なものも確認される。整形剥離同様、仕上げ整形の度合いは成品によって格差がみられ、成品としての形態が整っている石礫でも、細かい剥離がほとんどみられないものも存在する。剥離はかなり微細なものが存在するため、肉眼観察では刃こぼれとの区別が不可能なものも存在する。

## 5) 小 結

小稿では整理作業を通して確認された本遺跡における石礫製作の状況や、製作された成品の特徴等を若干の考察を交え述べてきた。不定形石器を含む剥片石器全体との比較、他遺跡との詳細な相互比較などを行うことができず様々な課題は残るが、これ以降石礫製作活動の背景にある状況等について考え、整理・報告のまとめとしたい。

石礫は採取・狩猟活動を主たる生業としていた縄文時代を代表する石器であり、縄文人が生活を維持していく上で欠く事のできない第一次生産具の一つとして認知されるものである。弓という道具の使用により致密で俊敏な小形獣の狩猟が可能となり、貴重な動物性タンパク源を頻りに獲得することができたと考えられる。また、小型獣を対象とした狩りでは、獣の生活圏と周辺の地形や季節によって変化する環境を熟知しておくことが重要であり、集団での定住生活という生活様式が重要な背景となっていたに違いない。成品形態は時期や地域の特徴を反映しつつ、各遺跡毎に規格化された様相を示す。これは製作者の意図が強く反映されることに大きく起因するものと想定できる。そして画一的な形態を実現するため、殺傷力を高めるために駆使される製作技術は、遺跡内の剥片石器製作における技術レベルを物語るものといえる。つまり、石礫の製作技術はその遺跡における剥片石器製作での最高水準を表すものと判断されよう。

本遺跡でも他の器種と比較してかなり安定した生産活動が確認され、さらに製作工程からその生産性の高さもうかがうことができた。製作活動の副産物としてとらえられる剥片や砕片も多く検出され、遺跡内に石材を持ち込み一貫した自給生産が行われていたことを示している。定形的な剥片石器の出土量は決して多いものとはいえない中で、石礫の占める割合が非常に高く、遺跡内における傾倒した生産活動として

とらえられる<sup>4)</sup>。こうした盛んな生産活動の状況から、常に安定した生産量を確保するための生産方法が自ずと選択され、主体を占めていたといえよう。

小礫素材を用いた両極剥法を背景とする石鏝生産は、柏崎平野では縄文時代前期後半から確実に認められるが、実際にはそれ以前の石鏝生産が開始された当時から徐々に洗練されていった製作方法であったと想定される。言い換えれば、両極剥法を背景とした製作方法は、当該地域で容易に入手可能な石材を有効かつ効率的に利用していく上で次第に確立され、発達していったものと考えられるのである。そして、石核から剥離された目的剥片を使用して製作する手法と併用され、搬入石材の獲得状況等によってその占有率も変化していたと考えられる。

当遺跡では搬入石材が比較的乏しい状況にあり、在地石材を用いて両極剥法を背景とする製作が必然的に行われている状況を読み取ることができた。この状況は、搬入石材が少なく小礫状の在地石材が石鏝素材として多く出土していること、そして成品・未成品の石材組成から明瞭に読み取ることができる。ピエス・エスキューユと判断されるものは石鏝製作に係るものが極めて多いと思われる。こうした背景から、容易に入手可能な小礫素材を石材とし、より安定した生産活動を維持していたと想定されるのである。積極的に用いられた両極剥法技術は時期を問わず需要と消費の多い石鏝を、在地石材から効率的に生産するために選択された製作技術であるといえよう。言い換えれば、搬入石材に乏しい遺跡における多くの制限下での石鏝製作の様相を示す事例といえることができる。その一方で、良質の搬入石材を用いた剥片素材からの製作も営まれている。このように、石鏝は貴重で良質な搬入石材をまず優先的に用いて製作され、需要に大きく足りない部分を在地石材の製作で補充しているものとしてとらえられる。そして両者の生産方法から、素材本来のもつ形態や特徴を生かした製作技法が常に選択され、複数の製作技法を組み合わせた一連の製作工程がそれぞれ確立していたものと想定されるのである。

以上のように、当遺跡における石鏝生産活動の状況とその背景を、出土品からうかがえる諸特徴などを基に予察も交え述べてきた。出土した資料を視察・分析することにより、当該地域にみられる小形円礫と両極剥法を背景とした製作方法がある程度明らかとすることができた。今後は、こうした生産方法等が周辺遺跡ではどのように相違・変化するのか検証し、また製作の背景についても考えていく機会をもつ必要があろう。こうした機会を積み重ねることにより、柏崎平野における石鏝生産活動のあり方を次第に明らかとしていく手がかかりとしたい。

## 注

- 1) 多くは海岸で採取できる小形円礫の状態に類似する。現在も浜辺で日常的に漂着物としてみられるもので、玉髄、チャート、鉄石英を石材とするものが多く確認できる。
- 2) 出土石器についての詳細な分析や記載が行われた報告事例が少なく、今後改めて検証していく必要がある。
- 3) 大形のものが多く尖基有茎鏝は、茎部のみ限定してアスファルト付着のものが多い。このことは他の形態のものと同製法等の相違を想定させるものである。
- 4) 入手が容易で直線的かつ細身の棒とすれば、主に竹の小枝や若竹の幹などが予想される。
- 5) 矢鏝の先端部は、滋賀県浜買里遺跡出土の木製品例のように、根狭み状の形態をもつと推定される。
- 6) 小礫素材のものには、石鏝の未成品の可能性がうかがえる資料も見受けられる。
- 7) 貴重な石材となる石核は集団とともに遺跡外に移動していったとも考えられるが、石器製作時に生じる剥片・チップの出土量も少なく、本来客体的な石材であったことは間違いないものといえる。
- 8) その背景には小形礫を対象とした狩猟のみならず漁撈活動といった生業活動、さらには外敵からの防衛の役割も担っていたものと想定される。

### 3 十三本塚北縄文集落の構成と消長

十三本塚北遺跡は、中期前葉から後期前葉期までの時期幅を持つ縄文集落である。最盛期は後期前葉期にあり、柏崎平野地域における中核的集落の形成に至る。柏崎平野における山野や河川の規模からすれば、自然経済で生み出される生産性には限界がある。したがって、当該期における中核的集落数を多く想定することは困難であり、同規模の遺跡が調査される確率はさらに低くなることから、本地域において面的な調査が初めて実施された本遺跡の意義は大きいことになる。つまり、本遺跡における縄文集落の遺構構成や様相等の把握、および各遺構群々のあり方などの検討は、本地域内における同時代集落を理解したり、また他地域との対比等を行う上で有効な課題とすることができるのである。

ただし、全ての課題を網羅的に行うことは、さまざまな制約から困難であり、本節では調査成果のまとめをかね、表層的ながら主に遺構群の配置や分布等から集落構成の一端を垣間見ることとし、あわせて集落の消長等について言及したい。これら以外の課題については、数多く残されることとなるが、それらの検討は今後に期待することとしたい。

#### 1) 遺構群の配置と様相

本集落を構成する遺構は、建物跡や住居跡といった建造物を中心に、貯蔵穴や墓坑などの土坑類、そして住居跡等に復元できなかった数多くの柱穴やピット群を主体とする。このほか特殊な遺構としては、土器埋設土坑や廃棄場などがあり、また人為的な所産ではないが大きな風倒木の痕などが確認されている。本項では、各遺構の種別にしたがって、分布や配置状況をまとめてみたい。

**住居跡** 住居跡として復元された事例は、合計72棟である。これらは、本文でも言及しているとおり、柱穴の規模や配列等を参考にしてつづ推したものである。したがって、各住居における各柱穴の帰属については、すべてが正確に把握された姿を示しているという意味ではなく、かつ柱穴の本数や配置も流動的なものである。これら住居の問題点等は本文を参考としていただきたい。

さて、類推された72棟の住居跡は、平面形と柱穴の配置から、A～Dまでの4類に大別された。各類別の内容やそれぞれの所属時期等の課題については本文に記したとおりである。しかしながら、後期中葉住居形式への連続性を考慮した場合、C類とD類の形態は、その前段に位置付けられても矛盾は生じない。また、両類あわせて59棟、全体では81.9%を占めるという事実は、本集落では一般的な住居形式であり、本集落の最盛期にあたる第IIc期から第三期の住居形式とおおむね重なるものと理解したい。したがって、C類とD類は三十稲場式新段階から南三十稲場式期、それとは時間的なズレが看取されるA類とB類はおおむね三十稲場式期古段階から新段階以前に対比しておきたい。今後、この時期比定は、再検討が不可欠であるが、A類とB類が三十稲場式期もしくはそれ以前の住居形式を踏襲し、C類とD類が三十稲場式新段階以降、南三十稲場式期の住居形式として新たに普及し、中葉以降へと継続するとすれば、三十稲場式期から南三十稲場式期への画期は、土器型式の転換だけではなく、生活様式全般におよぶ大きな変革期であったことも意味するのである。

そこで、住居跡各類の分布状況について、若干概観しておきたい。まずA類の3棟は、廃棄場を巡るように一定の距離をおいて各1棟が配され、重複はない。計10棟のB類も調査区西側の遺構群密集域に全て分布する。群別を行うとすれば、北部（1棟）と南部（2棟）、そして中央部（7棟）の3群に分かれる。

南部の2棟については、若干の距離があるため、それぞれ別群とし、中央部の住居跡群についても、3棟が少しづつ重複する2例と、単独例の3小群に区分できる。これらA類とB類は、形態差はあっても時期差ではない。したがって両者をあわせて群別を試みると、一定の距離を隔てて分布するa～hまでの8群に区分できる。複数が重複する事例は中央部の3群(c群・d群・e群)だけで、他の5群は全て単独である。A類・B類の時期はおおむね第II期の所産と考えられ、大半は第IIb期以前の可能性が高い。今回の調査結果だけを見れば、この時期幅において、中央部におけるc・d・eの3単位の小集団が、住居を3回ほど立て替えを行う間、周囲において1～2単位の小集団が住まうような状況を想定できそうである。また、3棟が重複するc群とd群、隣接するg群とh群については、2棟一対構成の可能性が考えられる。

次いで、C類とD類の分布状況を見ておく。C類は、合計22棟が復元された。分布状況は調査区の西部から北部のほぼ全般にわたる。2棟が重複もしくは接するような事例は5例9棟で、13棟は単独で存在する。群別を行うとすれば、一棟単独が4例で4棟、一部重複もしくは隣接する事例では、2棟の場合3例6棟、3棟では4例12棟となる。D類は37棟の事例があり、その分布も調査区の大半に及んでいる。分布上のまとまりを見ると、おおむね15群に区分することが可能である。各群の住居数を見ると、最大が7棟の1例、4棟2例、3棟4例、2棟3例、単独4例となる。C類とD類も、両者を単純に時期差とすることができないため、両者を一括して住居群を把握せざるを得ない。ただ、住居跡数の合計が59棟となるため、密集区での視覚的な分別は判断が難しくなるが、大まかには12群ほどで理解できそうである。この場合、単独で群をなす事例が2例(j群・s群)と単独ながら重複する事例(p群)が認められるが、単純な2棟1対(i群・k群・1群)、もしくはそれが重複を著しくした場合(m群・o群・q群・r群・t群)が多くなっている。C群・D群の所属時期については、おおむね第IIc期から第III期の所産である可能性が高く、一部第IVa期まで下る事例が考慮される。

なお、課題としては、後述する建物跡との関係が重複により併存できない事例が認められる点と、柱穴列の直径が10mに達するような大形の事例(特にSI-72)について、これらが住居とすることができるのか、といった点が掲げられる。建物跡については、前後4棟ほどの建て替えが認められ事例があり、集落の存続期間中の大半は、連続的に存在したと考えられることから、これらと重複する住居跡については住居プランの認定初期に立ち返って再検討が必要かも知れない。また、後者については、今回住居跡として報告するが、住居以外の目的、特に上屋を持たないような構築物一例えば、環状列石と対比されるような環状木柱列といった存在一などを、考慮しつつ検討を深める必要があるようである。この点は、集落の中心部に位置する住居跡n群の位置付けとも関わっている。

建物跡 分布の傾向を見ると、住居との重複が著しい台地平坦部と、遺構密度が少なくなる緩斜面に位置するものに大別が可能である。前者の建物跡は、A1類・A2a類やB1類及びB2a類の一部であり、後者ではA2・3類とB3類とB2類の一部が該当する。前者は概して規模が小さくなっているが、これは居住区内に位置することによる制約を考慮する必要があるのかも知れない。これらに対し、後者は概して規模が大きくなり、特に長軸を長くする建物が多。この事実は、床面が地形に左右されない高床構造であった可能性が高いことを示唆する。また、立地の意味も居住空間を避けるだけではなく、緩斜面を意図的に利用していた可能性が高い。

また、建物跡は、建物跡X群・Y群、そして実態を把握できなかったがSB-77建物跡群などは、4棟程度が位置を同じくし、ほぼ連続的に建て替えられていた。この事実は、建物を建てる「場」や用途・機能あるいは目的等に变化がなかったことを意味し、当該集落の継続性を強調するものと評価できよう。

建物跡の時期は、出土遺物が少なく、個々を特定して変遷を追うことはできない。しかし、建物跡X群における最古の建物跡であるSB-79建物跡が第IIc期であることは、第IIc期から大型建物跡の建設が始まり、第III期の最盛期までは継続的に建て替えられた可能性が高い。

これら建物跡の用途や機能については、直接証明できる成果は上げられていない。このため、これらへの言及は、単なる類推を繰り返さざるを得ないが、貯蔵穴が少ないことからすれば、食料の貯蔵庫、特に越冬を意図した食料等の保管倉庫のような目的を備えた建物跡の可能性が高いように思われる。居住域内や居住域の縁辺に位置する中規模程度の建物跡は、一定の距離を隔てて分布することから、集落内に集合した各単位集団が管理する貯蔵庫であり、居住密集域からやや距離を隔てた大型建物跡群（X群）は、規模が格段に大きなことから、集落全体の保管庫などのような意味があった可能性を指摘しておくこととする。そして、高床構造や緩斜面の立地については、冬季における雪対策を意図していたのかも知れない。

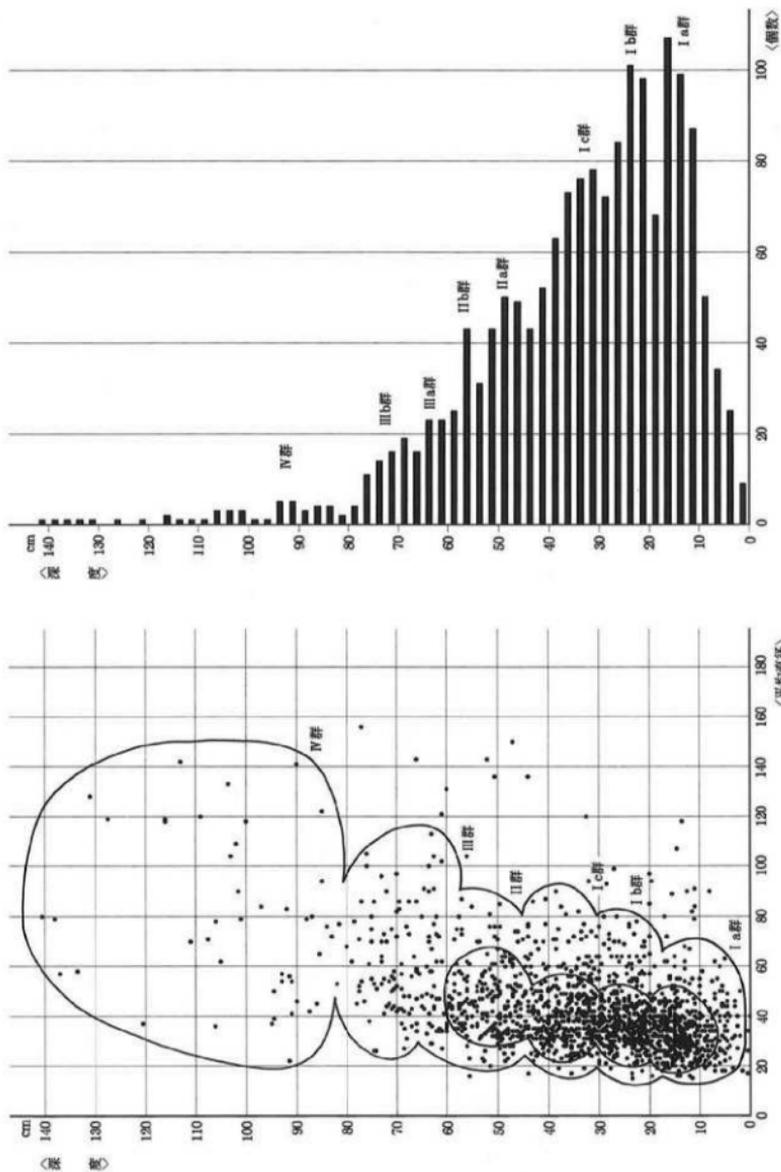
**貯蔵穴** 貯蔵穴と断定できる土坑は前述のごとく少なく、SK-932土坑1基がほぼ確実視されるだけで、ほかにSK-60土坑が可能性を残すものとして指摘できる程度である。SK-932土坑の位置は、居住域の密集区にあって廃棄場にも近い位置にあり、住居のそばに作られていたものと理解できよう。このSK-932土坑の時期は、概してまとめて出土した土器類から、本集落では終末期となる第IVa期の所産とすることができる。大型の建物跡の時期は、第IIc期から第III期であり、おそらく第IIIb期までは継続しても、第IV期まで存続する可能性は低い。したがって、建物跡と貯蔵穴がほぼ同じ意図や目的を持っていたとすれば、集落の終焉を向かえる第IVa期には、大型の建物跡を建設できるような集落人口を抱えてはおらず、越冬等の食料は住居の屋内もしくは僅かな貯蔵穴に保管する程度で事足りたのではないだろうか。

**墓坑群** 墓坑は数基単位で群を構成し、調査区中央の1群（A群）と、東辺に2群（B1群・B2群）のあわせて3群が、居住空間の密集域から外れた位置で確認されている。各群の位置と住居との関わりなどについては、特別な関係は見出されない。しかし、A群と二つの群が隣接するB群は、本縄文集落に居住する単位集団の存在と、それらとの関係を示唆していると考えられるだろう。今回は十分な検討を行う余力を持ちえないが、建物跡（群）、住居跡群、墓坑群、および群別された土器群などとともに総合的な分析が今後の課題である。

**柱穴・ピット群** 本文でも述べたとおり、今回の調査で検出された柱穴の総数は1685個に達した。しかしながら、住居跡や建物跡として復元に使用された柱穴は合計で757個、全体の約44.9%に過ぎず、過半数を超える928個の柱穴が活用できない結果となった。遺構観察表では、これら柱穴のデータ全てを掲載したが、第42図としてデータが明らかな1636個についての法量分布図を掲載しておく。

同様なデータについては、これまで尻振坂遺跡〔柏崎市教委1996〕・雨池遺跡〔柏崎市教委2000〕・大沢遺跡〔柏崎市教委2000〕で作成されている。しかし、これら3例は全て前期末から中期前葉の事例であり、直接的対比はできない。今後、同時期の事例を増やし、対比を行いたい。

**廃棄場** 住居群など遺構群が密集する沢頭内に形成されており、居住域に接して廃棄場が設定されたことを端的に物語っている。当該廃棄場からの遺物出土量は非常に多く、これに対し居住域である台地平坦部からの出土量は極端に少なかった。この事実は、部分的には調査方法との関わりもあるが、無秩序な廃棄行為が、日常生活における衛生面で弊害を起す恐れがあることからすれば、すでにそれらへの対応として一定の場所へ廃棄を行うとした規範がかなり厳格に機能していたことを示唆している。この点は、当該集落が建物の建設だけでなく、日常的な生活一般まで一定程度の組織化がなされていたことを示し、社会的なレベルの高さを意味していると評価することができそうである。



第42图 十三本华北游踪柱穴群法属分布图

**風倒木痕** 大形の風倒木痕の検出は意外に少なく、調査区東端において対をなすSX-1666とSX-1672の不整形土坑が該当するのみである。小規模なものについては、遺構群が密集する調査区内に散在するが、それらの多くは時期を特定できない。しかし、当該風倒木痕の場合、摩滅の少ない縄文土器が出土しており、根回りの直径が10mに達する巨木とすれば、当該縄文集落と併存した可能性は高いと考えたい。

## 2) 縄文集落の景観

十三本塚北縄文集落における各種遺構群について個別的に述べたが、本項では集落全体の景観について、他遺跡の事例と対比しながら相違点を見出し、当該期の特徴についても若干の検討を試みたい。

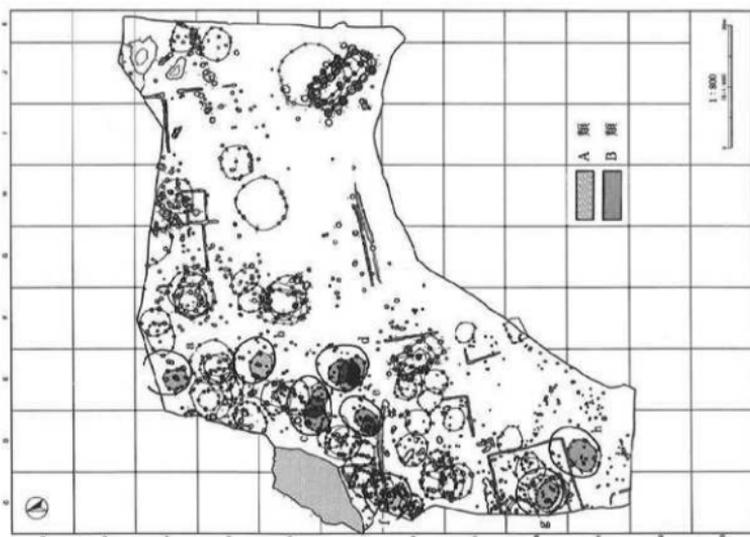
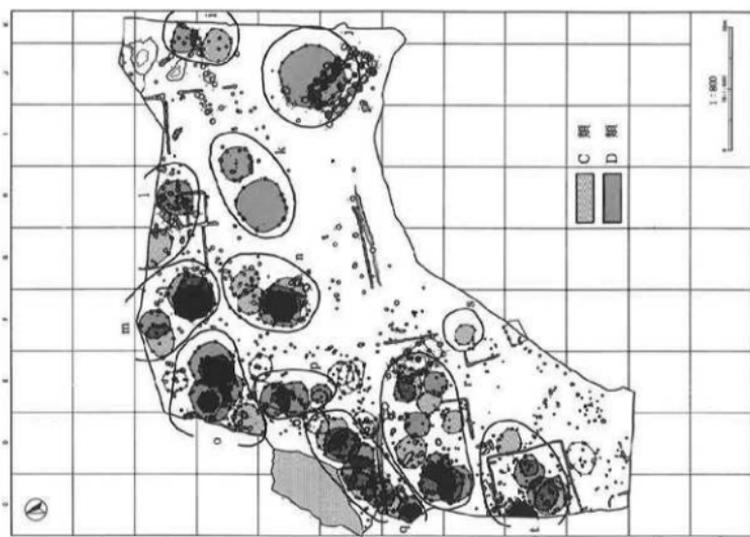
**越後の後期前葉期縄文集落** 十三本塚北遺跡の主要時期である後期前葉期もしくは当該期を含む縄文集落のうち、ほぼ全面調査された事例は、県内では長岡市岩野原遺跡〔長岡市教委1981〕と小千谷市城之腰遺跡〔新潟県教委1991〕の2カ所を例示できる。

城之腰遺跡は、15,000㎡にわたって遺構群が密集する県下最大級の縄文集落で、時期的には中期末葉から後期前葉期を主体的な時期とする。ただし、後期前葉となる南三十稲場式期の遺構・遺物は多くなく、後期初頭末から前葉期に最盛期をむかえる十三本塚北遺跡より相対的に古い時期が主体となっている。調査では、膨大な遺構及び遺物が検出されており、遺構の密集度は極めて高い。

集落構成の様相をうかがえる遺構としては、住居跡、建物跡、土坑群（墓坑）が掲げられる。しかし、住居については、床面を掘り窪めたものがほとんどなく、一部柱穴配置で判断されたのが含まれるが、大半は炉跡の検出により把握されたものでかなり限定されている。このため、集落の景観をうかがうには判然としないが、中期末以降は、このような住居が再び多くなり、ほとんど主体を占めていたことを示唆するものとして重要である。建物跡については、あわせて89棟という数が確認され、中央に広場状の空間を持ち、直径40mほどの環状に配置する傾向が6カ所ほどで看取できる。また、墓坑群は、3地点で環状を意識した配列が確認できるが、これらは建物跡群に囲まれた広場状の空間内に位置するものである。したがって、城之腰縄文集落を個別的に分解すれば、中央広場に土坑群を持つものと持たない環状集落で構成されていたことになる。ただし、これらを時期差等で区分するにしても、土坑個々の時期を見ると、中期後半から後期前葉までの各期にわたっており、単純に時期的な変遷で捉え切るのは難しいようである。

城之腰縄文集落の特徴は、遺構群が極めて濃厚であることと、建物跡の検出数が多数に上っていることである。前者については、建物跡の環状配置が示唆するように、普通規模の中核的集落6個分以上に相当し、それぞれが若干の位置を違え、繰り返して形成された結果と見るべきである。この点は、当該地帯が日本一とされる信濃川を抱え、広い河岸段丘と奥の深い丘陵地帯に囲まれた生産性の高い環境であったことを端的に物語っている。また、建物跡の棟数が多いという実態については、十三本塚北遺跡で貯蔵穴が少ないことなどを事由に、食料貯蔵庫などの性格を想定しているが、城之腰遺跡の場合は貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑が48基検出されており、同様な意味付けでは根拠をなさない。しかし、城之腰遺跡は十三本塚北遺跡より相対的に古く、十三本塚北遺跡の主体的な時期である南三十稲場式期のフラスコ状土坑が少ないことなどを考え合わせると、中期末葉から後期前葉期における建物跡の性格は、南三十稲場式期と異なる機能や用途を持っていた可能性を考慮する必要があるようである。

岩野原遺跡の後期集落は、後期初頭から後葉まで継続されるが、中核的な集落形成は主に後期初頭から中葉期までである。集落の全体像については、北側の一部が失われ、廃棄場が確認されていないなど不明確な部分もあるが、土坑（墓）群の配された広場状の空間を中心に、その周囲を建物跡群と住居群がめぐ



第43圖 住居跡分類別分布圖

り、さらにその外縁をLピットなどと称される貯蔵穴群が囲むといった景観を呈している。居住空間となる遺構群がある程度密集する区域は、直径160mほどの広がりを見せ、遺構分布が濃密度な部分だけでも10mに達する巨大な集落である。同心円中央の広場状の空間は直径およそ35mを計る。このような規模の縄文集落は、単体の環状集落としては県内最大級を誇る。周囲の環境を見ると、東4kmの信濃川本流と、河岸段丘下を北東に流れる支流洗海川があり、背後に東頭城丘陵が控えているなど、本遺跡の南10kmに所在する城之腰遺跡とはほぼ類似した環境下にあり、大規模集落形成の条件を指し示している。

住居数は後期初頭から前葉期だけで相当数に上ると考えられるが、中期の住居が床面をある程度掘り窪めたものが多いのに対し、後期後半を除けばほとんどが平地式と考えられる柱穴と炉跡のみのものとなっており、実態を明らかにしにくい状況となっている。建物跡は、4棟が報告されているが、このほかにも広場をめぐるように配される幾つかの建物跡が看取でき、状況的には城之腰集落に近似する集落形態と見なすことができる。しかし、建物跡数は城之腰遺跡から見れば極端に少なく、また住居群の外縁に配されるLピットなどと呼称されている貯蔵穴類はかなりの数に上っており、十三本塚北遺跡とは対照的な集落とすることができる。

**十三本塚北縄文集落の景観と特徴** 十三本塚北遺跡周辺の地形は、尾根状となるまで浸食を受けた中段段丘である。尾根上の平坦地は、小さな沢によりさらに分割され、〈仮称〉十三本塚台地における平坦地のまとまりは、十三本塚南と北および西台地を認識することができる。今回の調査区は、十三本塚北台地の大半にわたるが、遺構の密集域は、西台地側となる西縁部に偏っていた。

このような調査結果から、十三本塚北遺跡における縄文集落の景観を類推した場合、二つの想定が可能である。まず第一としては、西辺部窪地の廃棄場、それをめぐる台地縁辺の住居跡群に象徴され、それら住居群域やその東側にやや密度を落として遺構群が分布することから、廃棄場のある沢を中心にして、住居群と建物群がめぐる同心円的な配置がなされていたという想定である。この場合、短絡的には中期集落に特徴的な広場の形成はなく、前述した城之腰や岩野原の集落パターンと様相を違えることになる。

第二としては、広場を形成し、そこに土壇墓群が配置されるという事例の存在から、G6グリッド南西部で検出された土壇墓群（A群）および隣接する住居・建物跡群（n群）を中心に据え、その周囲を取り巻く遺構群の少ない空間を広場とした環状集落の想定である。この場合、建物跡は、広場に側面を向けて環状に配されていたと見ることができる。この想定から計測される環状集落は、直径100mほどの規模となるが、幅の狭い尾根状台地の制約から完結には至らなかったことになる。

これら二つの集落景観について、どちらが適正かという判断は、すでに失われて不明な西台地の状況との関わりがあって容易ではなく、全面調査とはなり得なかった本遺跡調査の限界が指摘できそうである。しかし、城之腰遺跡が複数の環状集落の複合、岩野原遺跡が単体の環状集落とすることが妥当とすれば、十三本塚北遺跡の縄文集落も第二案の環状集落である可能性が高い。現段階での判断としておきたい。ただし、環状集落を意識した展開は、住居跡C・D類が全面展開する最盛期の三十種場式新段階（十三本塚北第Ⅱc期）から南三十種場式期古段階（十三本塚北第Ⅲ期）であり、廃棄場周縁に分布が限られる三十種場式期古段階以前（十三本塚北第Ⅱb期以前）では、小規模な集落の形成に留まっていたと考えたい。

### 3) 十三本塚北縄文集落の消長と盛衰

さて、これまで集落内における各遺構群と、集落の景観について検討してきたが、最後に当該集落の消長および盛衰について、遺構・遺物から若干のまとめをしておきたい。ただし、遺構に伴う遺物が僅少か

つ細片であるため、遺構個々の時期はほとんど特定できていない。このため、廃棄場等から出土した遺物量を参考に盛衰等を推し量ることとした。

**第Ⅰ期（十三本塚北中期段階）** a～c期までの3小期に細別される。第Ⅰa期は、中期前葉期であり、場合によっては前半期まで若干の時期幅を持つ。当該期は、集落が形成されたのではなく、南接する十三仏塚遺跡との関わりから、遺物が持ち込まれたと考えられる。第Ⅰb期は、十三仏塚遺跡も廃絶し、当該台地一帯における縄文人の活動がほとんどなされなかった空白期であり、おおむね中期中葉頃から後葉期に至る時期に相当する。そして第Ⅰc期に至ってようやく集落形成が始まるが、遺物量の僅少さに比例して小規模な集落が、廃棄場周辺で営まれたものと考えられる。

**第Ⅱ期（十三本塚北後期下層段階）** 当該期の細別も、a～c期までの3期に区分して理解したい。第Ⅰc期から始まった小規模な集落は、後期初頭である三十稲場式成立期から古段階前半期頃に相当する第Ⅱa期まで継続する。遺物量が少ないことから、第Ⅰc期から第Ⅱa期に形成された集落は小規模であったと考えられ、大形の建物跡は建てられず、A類やB1類のような住居で生活が営まれたのではないだろうか。第Ⅱb期については、当該期に併行する土器群が抽出できなかったことから、集落形成は一旦途絶えるなど、空白的な状況に至っていた可能性が高い。本遺跡で再び集落が形成されたのは、第Ⅱc期とした三十稲場式新段階に至ってからである。第Ⅱc期では、建物跡X群に属するSB-79建物跡が当該期に属することがほぼ確実であることから、類似した重複関係を有する建物跡Y群などとともに、複数の建物跡を備え、かつ環状集落を意図して住居を配置した中核的集落の形成が始まったものと考えられる。

ところで、第Ⅱb期の土器群は、本遺跡ではほとんど確認されなかったが、三十稲場式古段階後半の城之腰R24p30土坑一括土器群と、三十稲場式新段階の土器群では大きなギャップがあり、土器様相的には単なる時期差以外に外的な影響等大きな変容を受けていた可能性があるのではないだろうか。今回の調査結果では、住居跡各々の時期を特定できていないが、当該期の住居構造については、A類やB1類を踏襲したもの以外に、C類的な様相が看取されるB2類や、新たにC類やD類のような住居の出現期にあたるのではないだろうか。

**第Ⅲ期（十三本塚北後期中層段階）** 当該期は、出土した土器群の大半を占める事実が示すように、本集落では最盛期にあたる時期に相当する。編年的には、南三十稲場式古段階に相当するが、土器様相からすれば最古段階は少ないように見受けられる。当該期は、土器群の構成でも明瞭のように、信州系と東南北部系の土器群が席巻し、在来系の土器群はほとんど姿を見せなくなっている。この前段的な現象はおそらく第Ⅱc期段階にあったと見られるが、住居がC類とD類にはば限定され、環状集落を完成させた段階と見なすことができよう。時期区分では、大きくa期とb期に細分したいが、土器群の出土量からすれば、第Ⅲa期が最大ピーク期であり、第Ⅲb期では集落規模を縮小させ始めていたと見られる。

**第Ⅳ期（十三本塚北後期上層段階）** 当該期は、南三十稲場式新段階に相当し、2小期に区分して理解したい。十三本塚北縄文集落は、当該期の前半にあたる第Ⅳa期までは土器群の出土を確認できるが、第Ⅳb期以降はほとんどなくなり、終焉を向かえている。住居については、第Ⅲ期と区別できないことから、C類・D類を踏襲していたと考えられる。当該期の確実な遺構は、廃棄場近くで検出された貯蔵穴1基のみであり、近在に僅かな住居を営み、建物跡も建てられない小規模集落が形成されていたと考えられる。そして、当該地における縄文集落は、後期中葉を向かえるまでには完全に廃絶されることとなり、その後再び集落が営まれることはなかった。

## 《引用・参考文献》

- 秋田かな子 1996「南関東西部の加賀利B式土器—構造の理解に向けて—」『後期中葉の諸様相』（第9回縄文セミナー）縄文セミナーの会
- 朝日村教育委員会 1998『奥三田ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ（アチヤ平遺跡中・下段）』（朝日村文化財報告書第14集）
- 石井 寛 1993「堀之内1式期土器群に関する諸問題」『牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡』（港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XⅣ）（財）横浜市ふるさと歴史財団
- 市川考古博物館 1982『シンポジウム堀之内式土器資料集—各地の堀之内式土器とその変遷—』
- 市川考古博物館 1983『シンポジウム堀之内式土器の記録』
- 伊藤恒彦 1985「石器・および石器類のまとめ」『刈羽大平・小丸山』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5）柏崎市教育委員会
- 織笠 昭 1922「弥三郎第2遺跡 縄文時代草創期」『支氣南遺跡群Ⅱ』（財）千葉市文化財調査協会
- 岡村道雄 1976「ビエス・エスキューニについて—岩手県大船渡市碓石遺跡群出土資料を中心として—」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編 寧楽社
- 柏崎市教育委員会 1985『刈羽大平・小丸山』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5）
- 柏崎市教育委員会 1991『十三塚遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第14）
- 柏崎市教育委員会 1993『柏崎市の遺跡Ⅱ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第18）
- 柏崎市教育委員会 1996『柏崎市の遺跡Ⅴ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第22）
- 柏崎市教育委員会 1996『尻振坂』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第23）
- 柏崎市教育委員会 2000『横山東遺跡群Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34）
- 神奈川県常民文化研究所編 1984『十三塚—現状調査編—』（神奈川県常民文化研究所調査報告第9集）平凡社
- 須川一徳 2000『両極打法』『旧石器考古学辞典』旧石器文化談話会編 学生社
- 國島 聡 1991「城之腰遺跡の縄文時代中期末～後期前葉土器の編年」『関越自動車道関係発掘調査報告書（城之腰遺跡）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集）新潟県教育委員会
- 越路町教育委員会 1993『多賀屋敷遺跡—第二次発掘調査報告書—』（越路町文化財調査報告書第20輯）
- 五泉市教育委員会 1983『馬下稲場遺跡』（五泉市文化財調査報告書3）
- 胸形敏朗 1983「まとめ」『多賀屋敷遺跡調査報告書』（越路町文化財調査報告書第10輯）越路町教育委員会
- 斎藤基生 1979「玉作りの工具」『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（下谷地遺跡）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第19）新潟県教育委員会
- 佐藤晋一 1999「草創期の石器群（縄文時代 道具と技術）」『新潟県の考古学』新潟考古学会編 高志書院
- 佐藤晋一・石坂圭介 1993「縄文時代中期後葉から後期前葉への土器変遷試論」『多賀屋敷遺跡—第二次発掘調査報告書—』（越路町文化財調査報告書第10輯）越路町教育委員会
- 塩沢町教育委員会 1988『万塚寺林遺跡』（塩沢町文化財調査報告書第7輯）
- 品田高志 1987「十三塚遺跡」『柏崎市史資料集 考古篇1』柏崎市史編さん委員会
- 品田高志 1989「柏崎市・田尻1号木炭窟」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1999「越後における縄文後期住居の検討—柱穴配置による住居認定への検索—」『新潟考古学談話会会報』第20号 新潟考古学談話会
- 鈴木俊成 1990「石器組成について」『関越自動車道関係発掘調査報告書（清水上遺跡）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集）新潟県教育委員会
- 鈴木俊成 1991「信濃川中流域における縄文中期から後期の石器の変遷について」『関越自動車道関係発掘調査報告書（城之腰遺跡）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集）新潟県教育委員会

- 鈴木俊成 1989「早期から晩期の石器組成（縄文時代 道具と技術）」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 鈴木道之助 1983「石鏃」『縄文文化の研究』第7巻 旭山閣
- 鈴木徳雄 1990「称名寺・堀之内1式研究の諸問題—南関東地域の資料を中心にして—」『縄文後期の諸問題』（第4回縄文セミナー）縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 1999「称名寺式円沢型の高一堀之内1式期における小仙塚類型群の形成—」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 田中英二 1979「縄文時代の割片石器製作」『風早遺跡』昭和町風早遺跡調査会
- 田中耕作 1985「所謂三十桶場式土器の成立について」『信濃』第37巻第4号 信濃史学会
- 田中耕作 1989「三十桶場式土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館
- 田中耕作 1990「三十桶場式土器研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第5号 新潟考古学談話会
- 田中耕作 1999「中部地方 後期（三十桶場式・南三十桶場式）」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 田中耕作 1999「縄文土器 後期 編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 田中耕作 2000「古代におけるアスファルトの利用」『石油技術協会誌』第65巻第4号 石油技術協会
- 長岡市教育委員会 1981『岩野原遺跡発掘調査報告書』
- 長澤展生 2000「まとめ」『向原1遺跡発掘調査報告書』（松代町埋蔵文化財報告第1集）松代町教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター他 1994「県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—栗林遺跡・七瀬遺跡—」（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19）
- 中村孝三郎 1967『三仏生』（長岡科学博物館考古学研究室調査報告書第1冊）長岡市立科学博物館
- 新潟県教育委員会 1991「岡越自動車道関係発掘調査報告書（城之瀬遺跡）」（新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集）
- 新津市教育委員会 1982「平遺跡」（新津市文化財調査報告書1）
- 本岡 宏 1990「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『縄文後期の諸問題』（第4回縄文セミナー）縄文セミナーの会
- 松代町教育委員会 2000「向原II遺跡発掘調査報告書」（松代町埋蔵文化財報告第1集）
- 百瀬長秀 1996「長野県の様相」『後期中葉の諸様相』（第9回縄文セミナー）縄文セミナーの会
- 綿田弘実 1985「小県郡東部町和中原遺跡出土の後期縄文土器」『上小考古』No18 上小考古学研究会
- 綿田弘実 1997「縄文土器について」『滝沢遺跡』長野県御代田町教育委員会

附表1 十三本塚遺跡 遺構観察表

凡例  
 規模 1 完形状態の規模(平面図)  
 規模 2 遺構カードから作成  
 木炭粒 ●多量 ○やや多い △少量 ・若干なし  
 土 確認面の色調(主に柱底部)  
 柱根の規模 平段断面計測値

遺構番号	グリッド	種類	平面図	規模1(m)				規模2(m)				柱根(m)	土	本表記	柱脚跡	備考			
				長径	短径	平均径	深径	上端	下端	長径	短径						平均径	深径	
1	C-11	溝		34	34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
2	C-11	溝		30	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
3																			
4	C-11	竪穴																	
5	C-11	溝															左遷		
6	C-11	竪穴	横内側	34	30	32	56.5	20.965	20.450	27		27	47	14	47	黒褐色粘質土	○		
7	D-11	その他																木版	
8	D-11	竪穴	横内側	32	30	30	26.0	20.750	20.550	32		32	16	20	18	黒褐色粘質土	○		
9	D-11	溝																	
10	D-11	柱穴	内側	40	34	37	96.0	20.705	19.755	41		41		13	24.0	暗褐色粘土	-		
11																			
12	D-11	柱穴	内側	18	16	16	18.5	20.905	20.610										
13	D-11	その他																木版	
14	D-11	その他	不整面															遺構方一下なし	
15	D-11	竪穴																左遷	
16																			
17	D-12	竪穴																左遷	
18																		左遷	
19																		左遷	
20	E-11	ピット	横内側	34	30	32	27.0	19.895	19.625									左遷	
21																		左遷	
22																			
23	E-11	竪穴																	
24	E-11	竪穴																	
25	E-11	竪穴	内側	30	30	30	15.5	20.135	19.980									竪穴	
26	E-11	竪穴																	
27	E-11	竪穴																	
28	E-11	竪穴																	
29	E-11	竪穴																	
30	E-11	柱穴	内側	34	24	24	17.0	20.260	20.120	20		20	30	17	20	黒褐色粘土	○		
31	E-11	柱穴	内側	38	32	35	19.5	20.370	20.175	35		35	17					埋没なし	
32	E-11	柱穴	内側	26	24	25	14.0	20.110	20.060										
33	E-11	ピット	内側	32	22	22	22.3	20.190	19.965										
34	E-11	柱穴	横内側	34	46	30	53.0	20.225	19.695	46		46	45	20	45	灰色粘質土	○		
35	E-11	柱穴	内側	26	24	25	14.0	20.110	20.060										
36	E-11	柱穴	内側	26	18	19	27.7	20.545	20.268										
37	E-11	ピット	内側	34	23	28	14.5	20.675	20.530										
38	E-11	柱穴	横内側	34	30	32	43.5	20.560	20.125	32		32	40	17	42	黒褐色土	○		
39	E-11	柱穴																	
40	E-11	柱穴	内側	30	30	30	30.0	20.475	20.125										
41																		左遷	
42	D-11	ピット	横内側	32	18	25	47.0	20.645	20.175									木版	
43	D-11	竪穴																埋没	
44	D-11	竪穴																	
45	D-11	柱穴	内側	34	20	25	37.0	20.725	20.358	34		34	40	11	40	黒褐色粘土	-		
46	D-11	柱穴	内側	32	28	30	35.0	20.750	20.490	34		34	34	10	30	黒褐色粘土	-		
47	D-11	柱穴	横内側	34	26	30	34.3	20.798	20.650										
48	D-11	竪穴																	
49	D-11	柱穴																	
50	D-11	柱穴	内側	38	36	37	11.3	20.860	20.747										
51 a	D-11	柱穴	内側	22	20	21	25.0	20.985	20.785	28		22	25	18	18	7	黒褐色土	○	S801
51 b	D-11	柱穴	横内側	40	32	36	13.0	20.985	20.835	18		18	18	11	18	黒褐色土	○	S801	
52	D-11	柱穴	内側	18	18	18	13	20.860	20.925										
53	D-11	柱穴	横内側	40	30	35	68.4	20.919	20.735										
54 a	D-11	柱穴	内側	48	34	41	91.0	20.965	19.990										
54 b	D-11	柱穴	内側	62	48	55	15.0	20.865	20.715										
55	D-11	柱穴	内側	34	20	27	36.7	20.885	20.628	31		31	35	11	35	黒褐色土	-		
55 a	D-11	柱穴	内側	22	20	21	11.9	20.869	20.750										
56	D-11	柱穴																	
57	D-11	柱穴	内側	30	30	30	27.9	20.969	20.830										
58	D-11	竪穴																	
59	D-11	柱穴																	
60	D-11	柱穴	横内側	64	62	38	46.5	20.915	20.610										
61	D-11	柱穴	内側	38	32	35	61.4	20.964	20.350	37		37	62	14	62	暗褐色粘質土	-	S801	
62	D-11	柱穴	内側	38	32	35	19.4	20.950	20.750										
63	D-11	柱穴																	
64	D-11	柱穴																	
65	D-11	柱穴	内側	44	40	42	47.3	20.965	20.544										
66	D-11	柱穴	横内側	32	32	32	5.0	20.815	20.871										
67	D-11	柱穴	内側	62	56	59	81.5	21.035	20.510										
68 a	D-11	柱穴	横内側	26	22	29	20.9	21.070	20.867										
68 b	D-11	柱穴	内側	38	34	34	13.8	21.035	20.920										
69	D-11	柱穴	横内側	18	16	17	15.0	21.020	21.015										
70	D-11	柱穴	内側	42	36	39	10.6	21.055	20.949										
71	C-11	柱穴																	
72	C-11	柱穴	内側	28	28	28	47.0	20.925	20.455										
73	C-11	柱穴	内側	26	20	23	18.7	20.896	20.709										
74	C-11	柱穴	内側	38	34	36	106.1	21.020	19.965	35		35	108	11	71	黒褐色土	-		
75	C-11	柱穴	内側	16	14	15	23.4	21.029	20.978										
76	C-11	柱穴	横内側	34	30	32	51.0	21.055	20.425	34		34	52	17	52	黒褐色土	-		
77	C-11	柱穴	内側	28	24	26	74.2	21.080	20.538	29		29	63	11	63	黒褐色土	-		
78	C-11	柱穴	内側	32	28	29	18.4	21.010	20.866										
79	C-11	柱穴	内側	30	26	28	23.0	21.062	20.825										
80	C-11	溝																	
81	E-11	溝																	

























選標番号	グランド	種別	平面図	規程1 (cm)				規格2 (cm)		仕立 (cm)		表土	本照付	仕様詳細欄	備考			
				厚		深さ		厚		深さ								
				最大	平均	上層	下層	最大	平均	上層	下層							
1187	b	一般	側溝	40	36	21	38.5	21.100	20.950	39	30	30	19	原積土	-	S255		
1188	b	一般	側溝	50	46	39	44	38.5	31.150	30.500	39	30	33	24	19	原積土	-	S255
1189	b	一般	側溝	51	48	51	50.0	31.050	30.950	38	38	51	21	39	原積土	△	S255	
1190	b	一般	側溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
1191	b	一般	側溝	61	56	57	54.5	31.100	30.850	45	45	18	23	31	原積土	△	S255	
1192	b	一般	側溝	68	60	59	60.5	31.140	30.935	45	45	52	30	37	原積土	△	S255	
1193	b	一般	側溝	48	42	35	33.0	30.800	30.620	32	32	30	15	37	原積土	-	S257	
1194	b	一般	側溝	68	58	62	61.0	31.060	30.450	50	50	58	-	-	原積土	-	S257	
1195	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1196	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1197	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1198	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1199	b	一般	側溝	41	40	42	38.0	21.310	20.900	-	-	-	-	-	-	-	S24	
1200	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1201	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1202	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1203	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1204	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1205	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1206	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1207	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1208	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1209	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1210	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1211	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1212	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1213	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1214	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1215	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1216	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1217	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1218	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1219	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1220	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1221	a	一般	側溝	60	49	51	51.0	31.050	30.950	65	65	60	15	60	原積土	△	S256	
1222	b	一般	側溝	60	52	56	51.0	31.050	30.840	47	47	34	32	43	原積土	-	S256	
1223	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1224	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1225	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1226	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1227	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1228	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1229	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1230	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1231	a	一般	側溝	38	30	34	31.0	21.070	20.840	-	-	-	-	-	-	-	S258	
1232	b	一般	側溝	40	40	43	37.0	21.115	20.845	-	-	-	-	-	-	-	S259	
1233	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1234	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1235	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1236	a	一般	側溝	60	49	51	51.0	31.050	30.950	-	-	-	-	-	-	-	S255	
1237	b	一般	側溝	61	56	60	54.0	31.100	30.810	33	33	34	10	34	原積土	△	S255	
1238	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1239	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1240	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1241	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1242	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1243	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1244	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1245	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1246	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1247	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1248	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1249	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1250	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1251	a	一般	側溝	80	78	78	80.0	31.210	30.965	-	-	-	-	-	-	-	S274	
1252	b	一般	側溝	42	42	42	33.5	21.205	20.950	-	-	-	-	-	-	-	S275	
1253	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1254	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1255	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1256	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1257	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1258	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1259	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1260	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1261	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1262	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1263	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1264	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1265	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1266	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1267	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1268	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1269	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1270	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1271	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1272	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1273	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1274	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1275	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1276	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1277	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1278	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1279	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1280	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1281	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1282	---	---	---	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		











流域番号	グリッド	種別	平断面	地形 (Gw)		浸没 (Green)		地盤 (Gw)		日数 (Gw)	農 土	水田	住居	備考
				長さ	幅	平均	高さ	浸没	浸没					
1712	J-7	林	池内	132	106	119	116.0	20,106	19,435					
1713	J-7	林	池内	4	4	4	4.0	20,650	20,650					
1714	J-7	林	池内	142	120	131	66.0	20,106	20,106					
1715	J-7	林	池内	83	80	83	63.5	20,170	20,170					
1716	J-7	林	池内	84	79	77	62.5	20,660	20,635					
1717	J-7	林	池内	126	110	118	100.0	20,106	18,705					
1718	J-7	林	池内	161	124	143	66.0	20,660	20,660					
1719	J-7	林	池内	142	100	121	61.0	20,660	20,650					
1720	J-7	林	池内	96	90	93	16.0	20,140	20,090					
1721	J-7	林	池内	106	80	83	63.0	20,740	20,610					
1722	J-7	林	池内	142	105	104	103.0	20,120	19,690					
1723	J-7	林	池内	150	140	150	47.0	20,150	20,340					
1724	J-7	林	池内	84	80	82	70.0	20,110	20,610					
1725	J-7	林	池内	82	80	81	30.5	20,690	20,325					
1726	J-7	林	池内	60	44	47	38.5	20,616	20,350	30				
1727	J-7	林	池内	123	62	93	28.5	20,620	20,325					
1728	J-7	林	池内	106	84	81	33.0	20,660	19,810					
1729	J-7	林	池内	40	44	44	22.5	20,625	20,400					
1730	J-7	林	池内	154	132	143	33.0	20,590	20,670					
1731	J-7	林	池内	97	80	81	62.5	20,611	19,950					
1732	J-7	林	池内	124	120	122	83.0	20,305	19,855					
1733	J-7	林	池内	66	68	66	10.0	20,505	19,435					
1734	J-7	林	池内	80	78	78	16.0	20,660	20,115					
1735	J-7	林	池内	150	122	136	44.0	20,590	20,340					
1736	J-7	林	池内	-	-	-	-	-	-					
1737	J-7	林	池内	60	60	65	23.5	20,680	20,445					
1738	J-7	林	池内	70	68	66	48.5	20,660	20,125					
1739	J-7	林	池内	84	88	91	64.5	20,655	20,101					
1740	J-7	林	池内	61	56	57	20.5	20,120	20,120					
1741	J-7	林	池内	141	130	136	69.5	20,670	20,165					
1742	J-7	林	池内	142	142	142	11.0	19,490	19,490					
1743	J-7	林	池内	430	100	100	63.5	20,670	20,635					
1744	J-7	林	池内	42	34	38	46.0	20,490	20,690	28				
1745	J-7	林	池内	112	112	112	35.0	20,590	20,230					
1746	J-7	林	池内	101	101	101	30.0	20,660	20,105					
1747	J-7	林	池内	54	50	52	34.5	20,590	20,235					
1748	J-7	林	池内	-	-	-	-	-	-					
1749	J-7	林	池内	86	86	86	74.5	20,615	19,810					
1750	J-7	林	池内	146	150	153	103.5	20,650	19,615					
1751	J-7	林	池内	80	80	80	72.0	20,670	19,850					
1752	J-7	林	池内	72	72	72	92.0	20,140	19,820					
1753	J-7	林	池内	80	80	80	67.0	20,685	20,110					
1754	J-7	林	池内	52	38	45	86.0	20,690	19,830					
1755	J-7	林	池内	68	60	64	24.0	20,740	20,690					
1756	J-7	林	池内	162	169	166	77.0	20,680	19,910					
1757	J-7	林	池内	140	116	128	131.0	20,745	19,435					
1758	J-7	林	池内	-	-	-	-	-	-					
1759	J-7	林	池内	118	110	114	29.5	20,150	20,435					
1760	J-7	林	池内	26	24	25	24.2	21,480	21,198					
1761	J-7	林	池内	61	58	61	31.0	20,670	20,100					
1762	J-7	林	池内	28	28	28	12.5	20,485	20,360					
1763	J-7	林	池内	61	58	61	29.5	20,685	20,390					
1764	J-7	林	池内	36	34	35	13.0	20,675	20,460					
1765	J-7	林	池内	26	24	25	13.5	20,748	20,650	34				
1766	J-7	林	池内	96	92	94	19.5	20,185	20,490					
1767	J-7	林	池内	88	74	81	33.5	20,585	20,340					
1768	J-7	林	池内	24	24	24	18.5	20,895	20,110					
1769	J-7	林	池内	48	44	46	37.0	20,810	20,490					
1770	J-7	林	池内	70	56	63	6.0	20,835	20,785					
1771	J-7	林	池内	22	22	23	11.5	20,860	20,440					
1772	J-7	林	池内	32	30	31	39.5	20,965	20,570	20				
1773	J-7	林	池内	41	40	42	36.5	20,935	20,570	37				
1774	J-7	林	池内	28	28	28	38.5	20,960	20,565					
1775	J-7	林	池内	30	30	30	27.0	20,905	20,630	21				
1776	J-7	林	池内	59	18	19	9.0	20,990	20,900					
1777	J-7	林	池内	42	30	36	67.0	20,985	20,295					
1778	J-7	林	池内	48	44	46	44.0	20,815	20,635	36				
1779	J-7	林	池内	-	-	-	-	-	-					
1780	J-7	林	池内	-	-	-	-	-	-					
1781	J-7	林	池内	44	36	40	6.0	20,570	20,510	25				
1782	J-7	林	池内	50	48	49	14.0	20,570	20,490					
1783	J-7	林	池内	50	48	49	14.5	20,570	20,490	40				
1784	J-7	林	池内	28	28	28	12.5	20,635	20,410					
1785	J-7	林	池内	40	34	37	66.5	20,540	19,875					
1786	J-7	林	池内	40	40	40	39.0	20,590	20,190	26				
1787	J-7	林	池内	49	49	49	5.5	20,595	20,080					
1788	J-7	林	池内	46	47	47	13.0	20,660	20,115	31				
1789	J-7	林	池内	38	34	36	22.0	20,520	20,390	30				
1790	J-7	林	池内	44	40	42	6.5	20,605	20,440	34				
1791	J-7	林	池内	30	41	42	17.0	20,620	20,480	29				
1792	J-7	林	池内	42	42	42	38.0	20,570	20,190					
1793	J-7	林	池内	52	42	47	32.5	20,610	20,525	66				
1794	J-7	林	池内	60	48	54	17.0	20,590	20,420					
1795	J-7	林	池内	62	48	55	6.5	20,620	20,265					
1796	J-7	林	池内	90	90	90	8.0	20,610	20,520					
1797	J-7	林	池内	50	50	50	58.5	20,715	20,195	25				























項次	種類別	製造所	備註	規格	品質標準	品質標準	品質標準		品質標準		品質標準		品質標準		品質標準	品質標準
							品質標準	品質標準	品質標準	品質標準	品質標準	品質標準				
1	201	201	201	201	201	201	201	201	201	201	201	201	201	201	201	201
2	202	202	202	202	202	202	202	202	202	202	202	202	202	202	202	202
3	203	203	203	203	203	203	203	203	203	203	203	203	203	203	203	203
4	204	204	204	204	204	204	204	204	204	204	204	204	204	204	204	204
5	205	205	205	205	205	205	205	205	205	205	205	205	205	205	205	205
6	206	206	206	206	206	206	206	206	206	206	206	206	206	206	206	206
7	207	207	207	207	207	207	207	207	207	207	207	207	207	207	207	207
8	208	208	208	208	208	208	208	208	208	208	208	208	208	208	208	208
9	209	209	209	209	209	209	209	209	209	209	209	209	209	209	209	209
10	210	210	210	210	210	210	210	210	210	210	210	210	210	210	210	210
11	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211
12	212	212	212	212	212	212	212	212	212	212	212	212	212	212	212	212
13	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213
14	214	214	214	214	214	214	214	214	214	214	214	214	214	214	214	214
15	215	215	215	215	215	215	215	215	215	215	215	215	215	215	215	215
16	216	216	216	216	216	216	216	216	216	216	216	216	216	216	216	216
17	217	217	217	217	217	217	217	217	217	217	217	217	217	217	217	217
18	218	218	218	218	218	218	218	218	218	218	218	218	218	218	218	218
19	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219
20	220	220	220	220	220	220	220	220	220	220	220	220	220	220	220	220
21	221	221	221	221	221	221	221	221	221	221	221	221	221	221	221	221
22	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222
23	223	223	223	223	223	223	223	223	223	223	223	223	223	223	223	223
24	224	224	224	224	224	224	224	224	224	224	224	224	224	224	224	224
25	225	225	225	225	225	225	225	225	225	225	225	225	225	225	225	225
26	226	226	226	226	226	226	226	226	226	226	226	226	226	226	226	226
27	227	227	227	227	227	227	227	227	227	227	227	227	227	227	227	227
28	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228
29	229	229	229	229	229	229	229	229	229	229	229	229	229	229	229	229
30	230	230	230	230	230	230	230	230	230	230	230	230	230	230	230	230









項目別	項目名	数量 (単位)	建設中の区画		完成中の区画		完成済 区画	建設中の区画		完成中の区画		完成済 区画
			11	12	13	14		15	16	17	18	
建設中	001 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	002 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	003 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	004 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	005 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	006 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	007 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	008 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	009 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	010 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	011 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	012 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	013 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	014 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	015 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	016 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	017 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	018 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	019 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	020 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	021 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	022 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	023 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	024 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	025 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	026 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	027 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	028 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	029 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	030 住宅(新築)	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

產品代號	產品名稱	單位	數量	單位產品淨重	包裝單位	包裝單位淨重	毛重	淨重	包裝單位	總重	淨重	包裝單位	總重	淨重	包裝單位	總重	淨重
300	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...



















































100	鹿児島市	Bバス上区	1車	00.0	5.3	2.7	272.0	鹿児島市	鹿児島市	大塚地区に運行区間あり
101	鹿児島市	C	2車	4.0	44.0	2.5	47.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
102	鹿児島市	C6-11b	2車	0.40	44.0	1.8	34.7	桜島	鹿児島市	
103	鹿児島市	C6-11c	1車	0.60	45.0	2.8	128.1	櫻島	鹿児島市	瀬戸・中央地区に運行あり
104	鹿児島市	S.K.p-120	2車	0.60	4.8	2.3	14.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
105	鹿児島市	D6-20	4車	4.0	44.0	2.5	19.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
106	鹿児島市	S.K.p-126	4車	0.7	44.0	2.5	101.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
107	鹿児島市	Bバス下区	4車	0.20	4.3	2.2	114.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
108	鹿児島市	S.K.p-117	1車	4.0	3.7	1.2	43.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
109	鹿児島市	C6-23b	1車	4.0	43.0	0.9	31.0	桜島	鹿児島市	
110	鹿児島市	Bバス下区	4車	0.7	44.0	2.7	130.0	鹿児島市	鹿児島市	
111	鹿児島市	C6-241	2車	0.60	3.9	1.3	30.5	桜島	鹿児島市	
112	鹿児島市	S.K.p-127	2車	0.6	44.0	2.5	77.0	鹿児島市	鹿児島市	
113	鹿児島市	桜島	2車	0.20	0.4	1.2	10.0	桜島	鹿児島市	
114	鹿児島市	D6-22b	1車	0.40	4.5	1.8	80.0	桜島	鹿児島市	
115	鹿児島市	Aバス下区	3車	0.40	0.60	1.1	24.0	桜島	鹿児島市	
116	鹿児島市	S.K.p-102	1車	0.60	0.60	1.5	31.0	桜島	鹿児島市	
117	鹿児島市	C6-21b	2車	0.40	3.4	1.1	54.1	高野船場	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
118	鹿児島市	C6-231	2車	0.40	0.40	1.1	53.1	桜島	鹿児島市	
119	鹿児島市	C6-241	2車	4.0	3.5	1.0	21.8	桜島	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
120	鹿児島市	S.K.p-105	1車	0.60	44.0	3.3	60.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
121	鹿児島市	D6-221	4車	4.0	5.1	3.0	108.0	鹿児島市	鹿児島市	
122	鹿児島市	Tレレ区	1車	4.0	44.0	0.9	19.0	桜島	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
123	鹿児島市	TレT区	1車	7.8	3.2	1.2	73.0	桜島	鹿児島市	
124	鹿児島市	S.K.p-104	1車	6.6	4.1	1.2	73.0	桜島	鹿児島市	
125	鹿児島市	S.K.p-129	7.7	3.8	1.0	46.0	鹿児島市	鹿児島市		
126	鹿児島市	D6-211	2車	8.4	5.3	2.5	167.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
127	鹿児島市	C6-241	1トレ	3.0	2.4	0.9	17.5	桜島	鹿児島市	
128	鹿児島市	Bバス上区	3車	0.60	2.6	1.0	11.0	桜島	鹿児島市	
129	鹿児島市	南島	0.20	2.1	0.6	3.0	桜島	鹿児島市		
130	鹿児島市	C6-15b	1車	0.1	0.9	0.3	桜島	鹿児島市		
131	鹿児島市	C6-201	4車	0.40	2.4	0.5	3.5	桜島	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
132	鹿児島市	C6-21	2車	0.2	1.4	0.5	2.5	桜島	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
133	鹿児島市	S.K.p-120	2車	5.8	2.5	1.1	28.0	桜島	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
134	鹿児島市	C7-71	4車	9.8	10.1	2.0	380.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
135	鹿児島市	C6-19b	2車	5.7	10.8	2.0	277.0	鹿児島市	鹿児島市	
136	鹿児島市	Bバス上区	4車	0.1	7.4	7.7	160.0	鹿児島市	鹿児島市	
137	鹿児島市	C6-19b	2車	8.9	9.0	2.1	380.0	鹿児島市	鹿児島市	
138	鹿児島市	C7-71	4車	5.1	5.1	1.2	43.0	鹿児島市	鹿児島市	
139	鹿児島市	S.K.p-135	4車	4.5	4.8	1.1	43.0	鹿児島市	鹿児島市	
140	鹿児島市	S.K.p-114プロ	2車	3.8	6.8	2.1	111.0	鹿児島市	鹿児島市	
141	鹿児島市	S.K.p-130	5.2	7.0	1.3	90.0	鹿児島市	鹿児島市		
142	鹿児島市	S.X-110	5.0	5.5	1.9	80.0	鹿児島市	鹿児島市		
143	鹿児島市	桜島	6.4	7.0	2.5	160.0	鹿児島市	鹿児島市		
144	鹿児島市	S.K.p-100	3.8	7.4	2.9	167.0	鹿児島市	鹿児島市		
145	鹿児島市	Bバス上区	4車	6.7	7.8	2.9	217.0	鹿児島市	鹿児島市	
146	鹿児島市	C6-211	2車	5.8	7.8	2.1	123.0	鹿児島市	鹿児島市	
147	鹿児島市	Bバス上区	2車	0.5	4.8	1.5	34.0	鹿児島市	鹿児島市	
148	鹿児島市	C6-191	2車	4.4	4.8	1.2	41.0	鹿児島市	鹿児島市	
149	鹿児島市	桜島	4.0	4.2	1.9	42.0	鹿児島市	鹿児島市		
150	鹿児島市	S.K.p-100	4.0	4.0	1.5	33.0	鹿児島市	鹿児島市		
151	鹿児島市	C6-18114プロ	3車	4.7	4.7	1.6	35.0	鹿児島市	鹿児島市	
152	鹿児島市	D6-161	4車	3.4	3.4	1.2	32.0	鹿児島市	鹿児島市	
153	鹿児島市	D6-161	4車	3.1	4.6	0.9	34.0	鹿児島市	鹿児島市	
154	鹿児島市	Aバス上区	3車	3.6	4.1	1.5	30.5	鹿児島市	鹿児島市	
155	鹿児島市	C7-71	3車	0.8	4.1	0.8	18.1	鹿児島市	鹿児島市	
156	鹿児島市	桜島	3.2	4.4	0.7	15.2	鹿児島市	鹿児島市		
157	鹿児島市	D6-161	4車	3.4	4.1	1.0	22.0	鹿児島市	鹿児島市	
158	鹿児島市	S.K.p-120	4車	3.6	3.8	1.9	15.0	鹿児島市	鹿児島市	
159	鹿児島市	Aバス上区	4車	3.4	3.8	0.8	13.4	鹿児島市	鹿児島市	
160	鹿児島市	S.K.p-124	2車	3.1	3.7	0.6	8.0	鹿児島市	鹿児島市	
161	鹿児島市	C6-19b	2車	2.9	3.4	1.3	30.8	鹿児島市	鹿児島市	
162	鹿児島市	Aバス上区	3車	3.0	4.2	1.1	20.5	鹿児島市	鹿児島市	
163	鹿児島市	D6-161	4車	3.4	3.8	1.0	21.2	鹿児島市	鹿児島市	
164	鹿児島市	D6-161	4車	3.2	3.6	1.0	18.0	鹿児島市	鹿児島市	
165	鹿児島市	S.K.p-130	3.4	3.0	0.7	12.0	鹿児島市	鹿児島市		
166	鹿児島市	C6-22114プロ	3車	3.0	4.0	1.1	18.0	鹿児島市	鹿児島市	
167	鹿児島市	D6-161	2車	3.4	3.5	1.0	19.0	鹿児島市	鹿児島市	
168	鹿児島市	C6-25b	4車	2.9	3.2	0.7	19.0	鹿児島市	鹿児島市	
169	鹿児島市	C6-251	2車	3.1	3.0	0.6	19.0	鹿児島市	鹿児島市	
170	鹿児島市	C6-251	2車	3.4	3.6	0.5	19.0	鹿児島市	鹿児島市	
171	鹿児島市	C6-21114プロ	2車	2.8	3.4	0.4	27.0	鹿児島市	鹿児島市	
172	鹿児島市	C7-71	1車	0.1	0.5	0.2	14.0	鹿児島市	鹿児島市	
173	鹿児島市	C7-71	7.9	8.1	3.7	271.0	鹿児島市	鹿児島市		
174	鹿児島市	C6-21114プロ	2車	0.9	8.4	4.2	332.0	鹿児島市	鹿児島市	
175	鹿児島市	S.K.p-112	1車	10.4	8.0	4.2	506.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
176	鹿児島市	Aバス上区	2車	6.8	11.0	4.6	654.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
177	鹿児島市	D5-221	4車	6.0	8.8	3.7	157.0	鹿児島市	鹿児島市	
178	鹿児島市	C6-241	2車	8.8	8.6	3.3	326.0	鹿児島市	鹿児島市	
179	鹿児島市	S.K.p-124	1車	10.1	7.2	4.2	480.0	鹿児島市	鹿児島市	
180	鹿児島市	S.K.p-120	9.5	8.6	6.5	688.0	鹿児島市	鹿児島市		
181	鹿児島市	S.K.p-100	10.6	7.0	3.5	322.0	鹿児島市	鹿児島市		
182	鹿児島市	C6-15114プロ	1車	6.7	7.6	3.6	672.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
183	鹿児島市	桜島	1車	6.7	7.7	3.7	280.0	鹿児島市	鹿児島市	鹿児島市に運行あり
184	鹿児島市	C6-25b	2車	8.8	7.9	5.4	573.0	鹿児島市	鹿児島市	
185	鹿児島市	S.K.p-100	6.9	6.5	5.8	361.0	鹿児島市	鹿児島市		
186	鹿児島市	C6-14114プロ	2車	9.4	3.6	3.4	170.0	鹿児島市	鹿児島市	
187	鹿児島市	C6-114	2車	6.4	6.2	3.8	232.0	鹿児島市	鹿児島市	
188	鹿児島市	S.K.p-107	12.1	8.1	8.1	802.0	鹿児島市	鹿児島市		
189	鹿児島市	S.K.p-124	1車	11.0	8.4	4.8	692.0	鹿児島市	鹿児島市	
190	鹿児島市	C6-21114プロ	2車	8.7	6.9	4.8	527.0	鹿児島市	鹿児島市	
191	鹿児島市	S.K.p-200	12.8	11.3	9.0	1008.0	鹿児島市	鹿児島市		
192	鹿児島市	Aバス上区	4車	8.0	6.0	4.4	348.0	鹿児島市	鹿児島市	
193	鹿児島市	C7-71	1車	8.0	6.1	1.8	158.0	鹿児島市	鹿児島市	
194	鹿児島市	S.K.p-100	7.8	6.9	5.4	280.0	鹿児島市	鹿児島市		
195	鹿児島市	D6-171	2車	8.1	6.0	1.5	184.0	鹿児島市	鹿児島市	
196	鹿児島市	C6-15114プロ	1車	0.30	6.3	4.2	301.0	鹿児島市	鹿児島市	
197	鹿児島市	Bバス上区	2車	8.9	6.7	4.2	444.0	鹿児島市	鹿児島市	
198	鹿児島市	C6-21114プロ	2車	8.6	6.4	4.8	448.0	鹿児島市	鹿児島市	
199	鹿児島市	S.K.p-100	11.9	7.0	4.2	490.0	鹿児島市	鹿児島市		
200	鹿児島市	Bバス上区	1車	12.1	6.2	6.8	656.0	鹿児島市	鹿児島市	特設運行

201	赤石山	S-X-1060		13.4	6.0	4.5	480.0	輝石(実山岩)	光面	特殊岩石
202	赤石山	C-ベルト		11.4	7.1	5.6	739.0	輝石(実山岩)	光面	特殊岩石
203	赤石山	某層部		12.9	4.8	2.6	222.0	角閃(片岩)	光面	
204	赤石山	C-6-11(3トレ)	4層	2.5	12.5	7.5	50.0	輝石(片岩)	光面	
205	赤石山	北ベルト上区	2トレ部	6.6	4.0	2.3	95.0	輝石(実山岩)	上下面	
206	赤石山	A-ベルト		9.4	2.4	2.2	81.0	角閃(片岩)	光面	石巻多相用
207	赤石山	S-Kp-120		12.0	9.7	1.8	251.0	輝石(実山岩)	光面	
208	赤石山	C-6-10		11.0	7.8	5.0	413.0	輝石(片岩)	光面	
209	赤石山	D-6-10	2層	(13.7)	(8.1)	7.5	239.0	輝石(実山岩)	光面	
210	赤石山	S-Kp-138		(6.0)	(3.7)	3.5	161.0	輝石(実山岩)	光面	
211	赤石山	C-6-11	4層	(11.0)	(11.2)	3.1	133.0	輝石(実山岩)	光面	
212	赤石山	S-Kp-120		22.5	12.5	7.0	384.0	輝石(実山岩)	光面	
213	赤石山	F-6		(6.4)	(7.7)	3.0	298.0	輝石(実山岩)	光面	中央に黒打痕あり
214	赤石山	D-6-10	2層	(13.7)	11.6	4.3	367.0	輝石(実山岩)	光面	
215	赤石山	S-Kp-125		(6.1)	(15.5)	5.5	318.0	輝石(実山岩)	光面	
216	赤石山	C-6-11(3トレ上区)	1層	3.1	14.5	7.0	698.0	輝石(実山岩)	光面	台石
217	赤石山	C-7-1	1層	7.0	6.9	1.9	80.0	輝石(片岩)	光面	
218	赤石山	C-6-2(1)	4層	9.0	7.0	2.4	139.0	輝石(片岩)	光面	
219	赤石山	C-6-10	1層	14.2	6.4	1.8	71.0	輝石(片岩)	光面	
220	赤石山	C-6-10	1層	8.8	8.7	2.0	26.0	輝石(片岩)	光面	
221	赤石山	C-7-1	4層	7.8	6.8	1.6	96.0	輝石(片岩)	光面	
222	赤石山	C-6-2(黒打ゾロ)	3層	6.4	3.1	2.8	165.0	輝石(実山岩)	光面	
223	赤石山	C-6-10	3トレ部	6.5	5.0	2.0	78.0	輝石(片岩)	光面	
224	赤石山	某層	表層	6.7	3.6	1.5	93.0	輝石(実山岩)	光面	
225	赤石山	E-1-10		(6.0)	(13.0)	6.4	178.0	輝石(片岩)	光面	黒打痕
226	赤石山	S-Kp-110		19.5	5.9	3.2	56.0	輝石(実山岩)	光面	
227	赤石山	S-Kp-12		14.0	7.9	2.0	67.0	輝石(実山岩)	光面	断面西側部
228	赤石山	C-6-10	4層	(11.5)	4.3	1.7	77.0	輝石(片岩)	光面	
229	赤石山	某層	表層	8.1	3.8	2.0	105.0	輝石(片岩)	光面	
230	不定形石	C-6-10	4層	4.5	4.6	1.1	20.4	輝石(片岩)	光面	塊状、赤色、黒打痕あり、 石巻多相用
231	不定形石	C-7-1	2層	2.8	2.1	0.3	2.7	玉動		
232	不定形石	D-6-11	4層	3.3	3.1	0.6	7.8	玉動		
233	不定形石	3トレ上区	中層	2.7	1.7	0.5	2.9	玉動		
234	不定形石	C-7-1	1層	4.1	3.4	1.1	10.4	輝石(片岩)		
235	不定形石	C-7-1	3層	3.1	1.9	0.8	4.7	輝石(片岩)		
236	不定形石	C-7-2(黒打ゾロ)	3層	3.6	3.3	0.7	9.0	チャート		
237	不定形石	S-Kp-117		2.8	(6.1)	0.5	2.7	実山岩	半次	
238	不定形石	C-6-10(黒打ゾロ)	2層	2.8	2.9	1.2	12.1	輝石(片岩)		
239	不定形石	C-7-1	1層	4.2	3.1	0.8	12.9	チャート		
240	不定形石	D-6-11	4層	4.3	3.2	1.2	15.9	玉動		
241	不定形石	3トレ上区	下層	4.2	3.7	0.7	10.3	玉動		
242	不定形石	C-6-10	3層	2.5	1.6	0.5	2.2	チャート		
243	不定形石	C-6-11	4層	4.8	4.6	1.6	5.4	チャート		
244	不定形石	C-6-10	1層	5.2	2.1	0.6	8.5	チャート	光面	ナイフ痕面に黒打痕 延長割片素材
245	不定形石	A-ベルト上区	3トレ部	3.7	1.9	0.6	5.0	輝石(片岩)		
246	不定形石	B-ベルト下区	2層	3.9	4.1	0.7	15.4	輝石(片岩)		
247	不定形石	C-6-11	1層	1.9	2.7	0.6	2.4	玉動		
248	不定形石	S-K-1		3.1	3.4	0.7	7.0	玉動		
249	不定形石	C-6-10	2層	4.3	4.3	0.6	14.2	チャート		
250	不定形石	D-6-11	4層	4.2	5.2	0.9	17.8	輝石(片岩)		
251	不定形石	C-6-11	4層	3.3	1.7	0.6	10.7	玉動		
252	ピエス I	3トレ上区	中層	4.6	4.6	1.3	43.0	輝石(片岩)		
253	ピエス I	C-6-20	2層	2.5	1.7	0.6	3.8	鉄石英		
254	ピエス I	C-6-10	2層	2.8	2.1	0.5	3.7	チャート		
255	ピエス I	S-Kp-107		2.2	1.7	0.3	1.5	玉動		
256	ピエス I	C-6-11	2層	2.8	3.1	0.9	7.5	チャート		
257	ピエス I	C-6-10	1層	2.8	2.3	0.5	4.1	チャート		
258	ピエス I	S-Kp-105		2.1	2.1	0.6	2.8	チャート		
259	ピエス I	C-6-11	2層	4.8	2.8	0.6	11.7	玉動		
260	ピエス I	C-6-10	3層	2.8	2.5	0.7	4.2	チャート		
261	ピエス I	S-Kp-110		2.7	2.7	0.8	8.2	玉動		
262	ピエス I	C-6-20	2層	3.3	2.6	0.7	8.2	チャート		
263	ピエス I	C-6-11	2層	3.2	2.9	0.9	10.6	チャート		
264	ピエス I	C-6-21	3層	2.8	2.3	0.7	7.2	チャート		
265	ピエス I	C-6-20	2層	2.3	2.3	0.4	3.2	玉動		
266	ピエス I	S-Kp-20		1.9	2.0	0.2	2.7	チャート		
267	ピエス I	C-6-11	2層	2.6	2.6	0.6	3.9	チャート		
268	ピエス I	S-Kp-09		2.5	1.8	0.7	4.5	チャート		
269	ピエス I	S-Kp-20		2.9	2.5	1.3	15.1	チャート		
270	ピエス I	C-6-20	3層	3.4	2.5	0.2	3.0	チャート		
271	ピエス I	S-Kp-130		2.3	2.2	0.8	4.1	チャート		
272	ピエス II	S-Kp-105		1.8	2.4	0.8	3.8	チャート		磨面
273	ピエス II	C-6-19	2層	2.3	3.0	0.5	7.1	玉動		
274	ピエス II	C-6-20	3層	2.7	2.6	0.7	6.6	チャート		
275	ピエス II	C-6-11	2層	3.3	3.3	4.1	17.0	玉動		
276	ピエス II	C-6-21	2層	2.6	1.7	0.8	4.2	鉄石英		
277	ピエス II	C-6-21	2層	2.2	1.9	0.5	2.9	玉動		
278	ピエス II	C-6-11	2層	2.8	2.8	0.7	8.1	チャート		
279	ピエス II	C-6-10	1層	2.8	2.9	0.9	9.4	輝石(片岩)		
280	ピエス II	C-6-21	2層	2.8	2.2	0.6	5.7	チャート		磨面
281	ピエス II	C-6-21	2層	2.1	2.0	0.5	2.6	チャート		磨面
282	ピエス II	S-Kp-102		1.9	2.4	0.7	3.6	チャート		
283	ピエス II	C-6-20	2層	1.8	1.6	0.5	1.7	玉動		磨面
284	片岩	1トレ上区	中層	4.9	6.3	4.1	190.0	鉄石英		
285	片岩	S-Kp-102		4.6	4.6	1.5	24.7	輝石(片岩)		
286	片岩	C-6-21	半層	2.1	4.1	4.1	58.2	チャート		打角:55°
287	片岩	S-Kp-20		3.0	4.4	6.0	14.0	玉動		
288	片岩	1トレ上区	中層	3.5	4.9	1.5	20.0	鉄石英		打角:55°, 鉄石英混入
289	片岩	C-6-20	3層	1.9	1.7	2.0	6.4	輝石(片岩)		
290	片岩	C-6-21	1層	3.1	2.5	3.5	14.0	輝石(片岩)		打角:55°
291	片岩	3トレ上区	2トレ部	2.8	4.9	4.7	60.0	玉動		打角:55°
292	片岩	C-7-1	1層	4.8	3.7	2.5	60.4	鉄石英		
293	片岩	C-6-10	1-2層	(7.3)	4.8	4.1	183.0	輝石(実山岩)	下表面	
294	片岩	C-6-11		(5.0)	2.2	3.2	31.2	輝石(片岩)	上下面	
295	片岩	D-6-21	2層	(14.0)	7.8	(5.0)	196.0	輝石(片岩)	上下面	断面に黒打痕あり
296	片岩	S-Kp-20		(8.4)	7.1	(5.5)	118.0	輝石(片岩)	下表面	黒打痕あり
297	片岩	C-6-10	3層	4.7	3.2	1.5	26.0	チャート	断面	黒打痕あり、 輝石多相用、 穿孔痕
298	片岩	C-6-11	3層	4.0	3.8	1.6	37.0	輝石(片岩)	半次	
299	片岩	C-6-21	2層	4.5	3.4	1.9	21.0	輝石(片岩)		
300	片岩	S-Kp-03		4.2	2.8	1.3	16.0	輝石(片岩)		

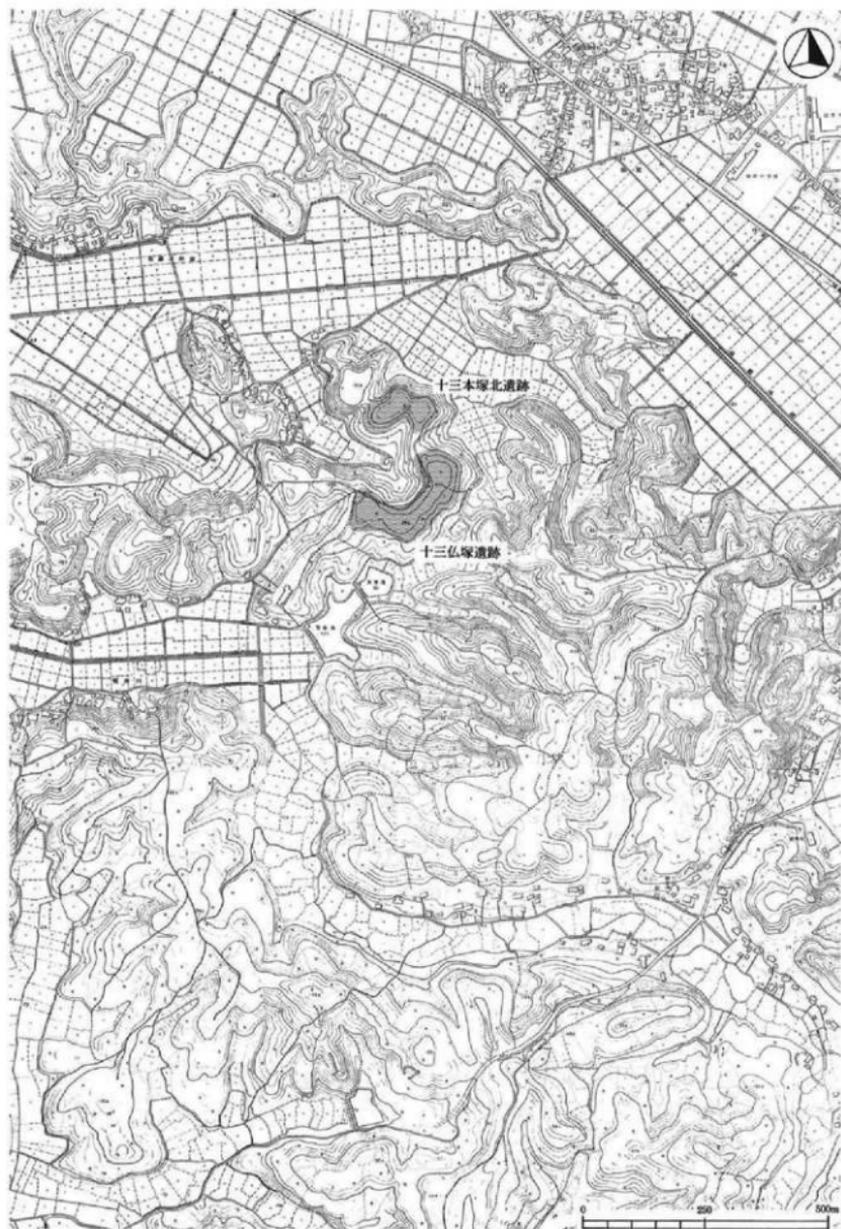


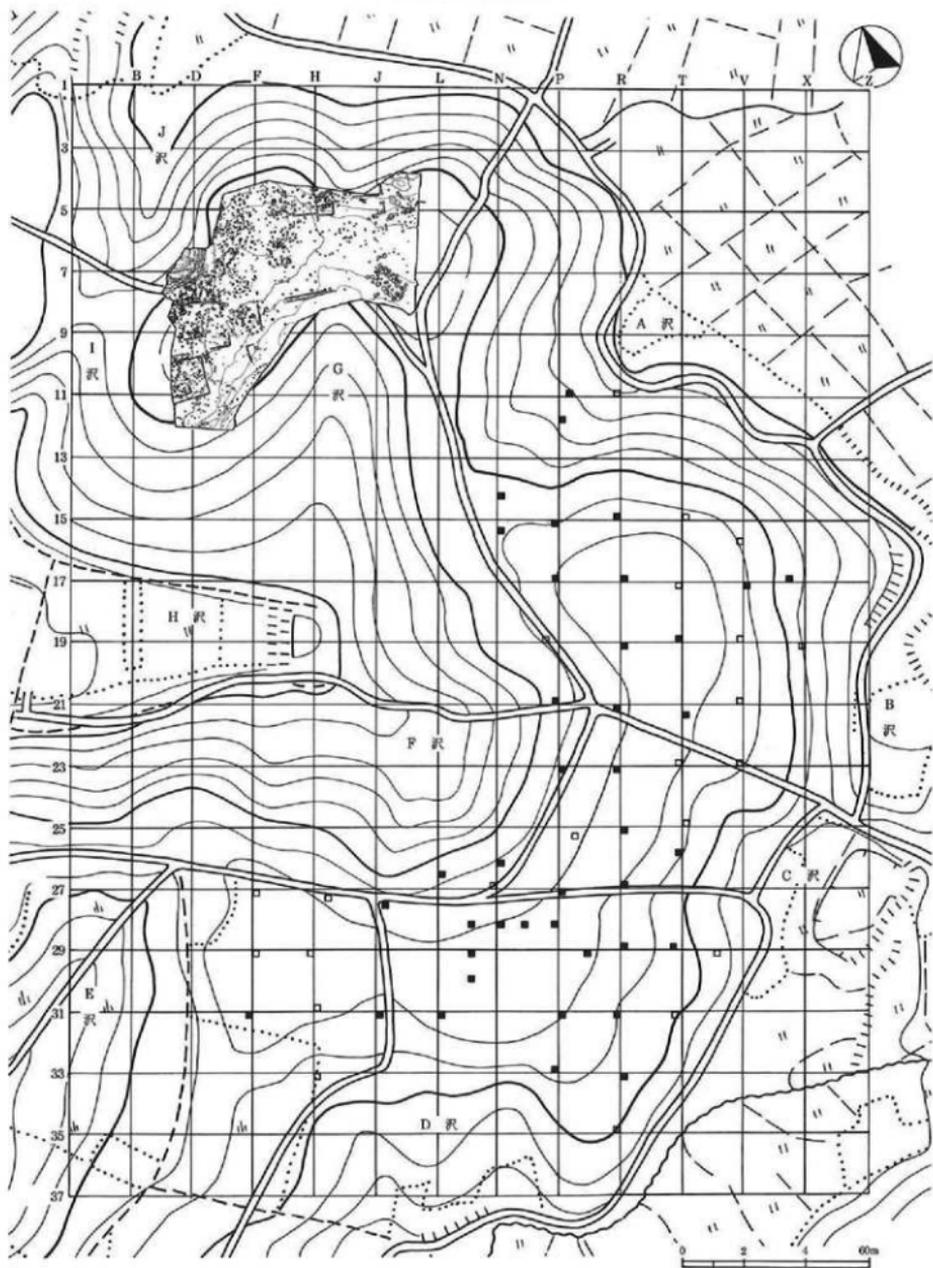
# 図 版

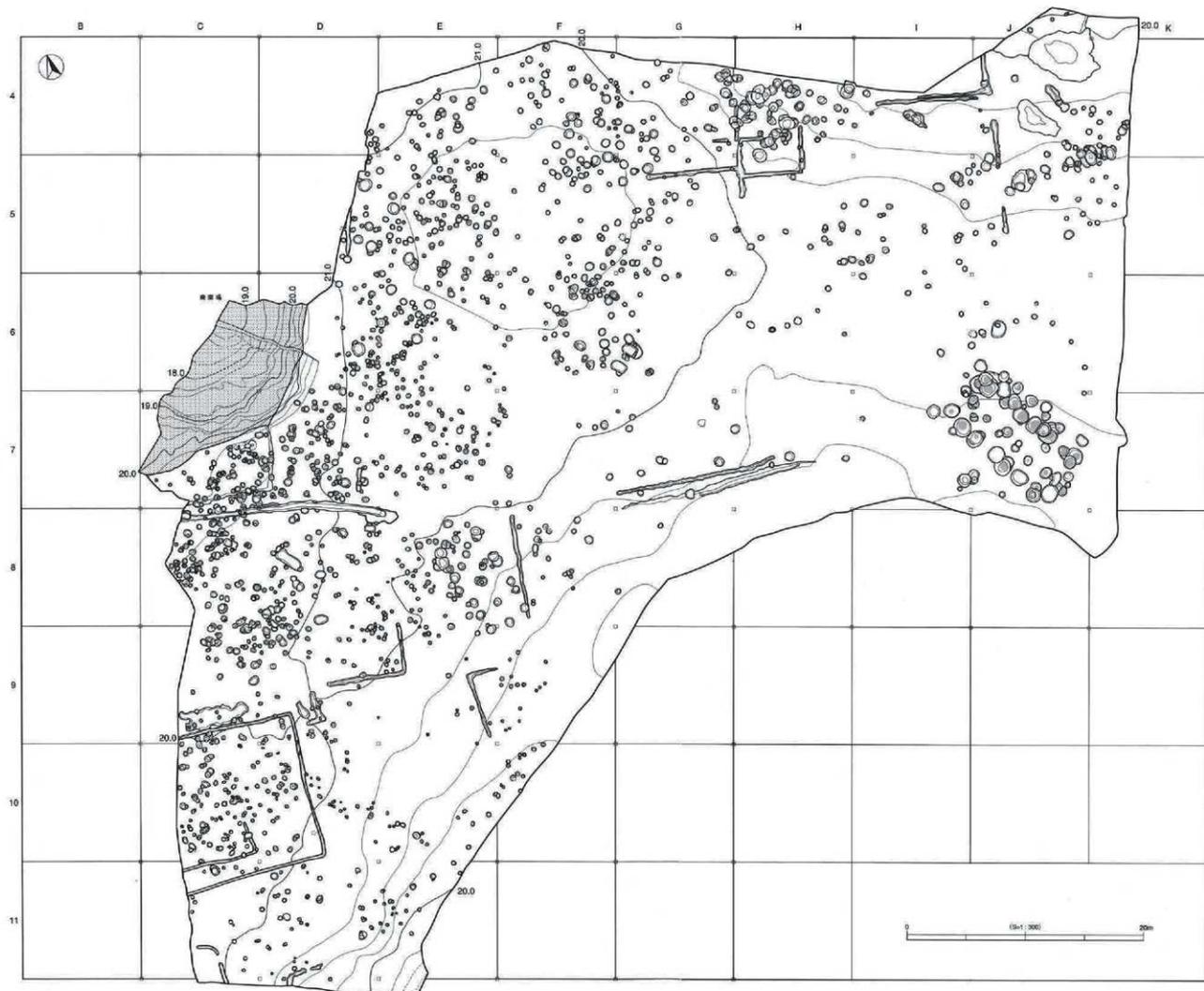
## 凡 例

1. 図版の構成は、図面図版と写真図版の2部構成である。図版番号は通し番号とした。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位はすべて真北である。
3. 出土遺物の縮尺については、各図版の下端にした。
4. 写真図版に記した方位は、対象物に向かった方向を大まかに示したものである。





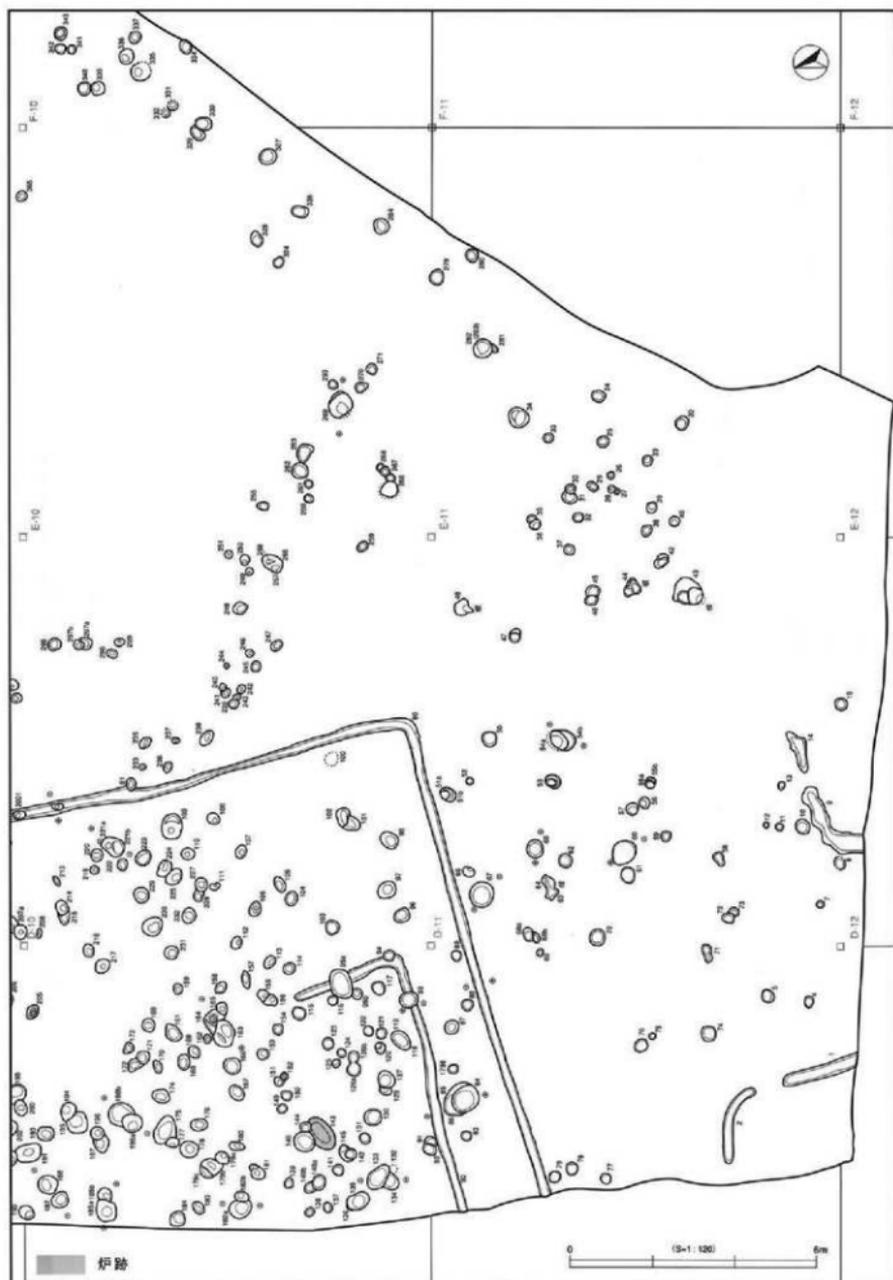




遺構配置全体図

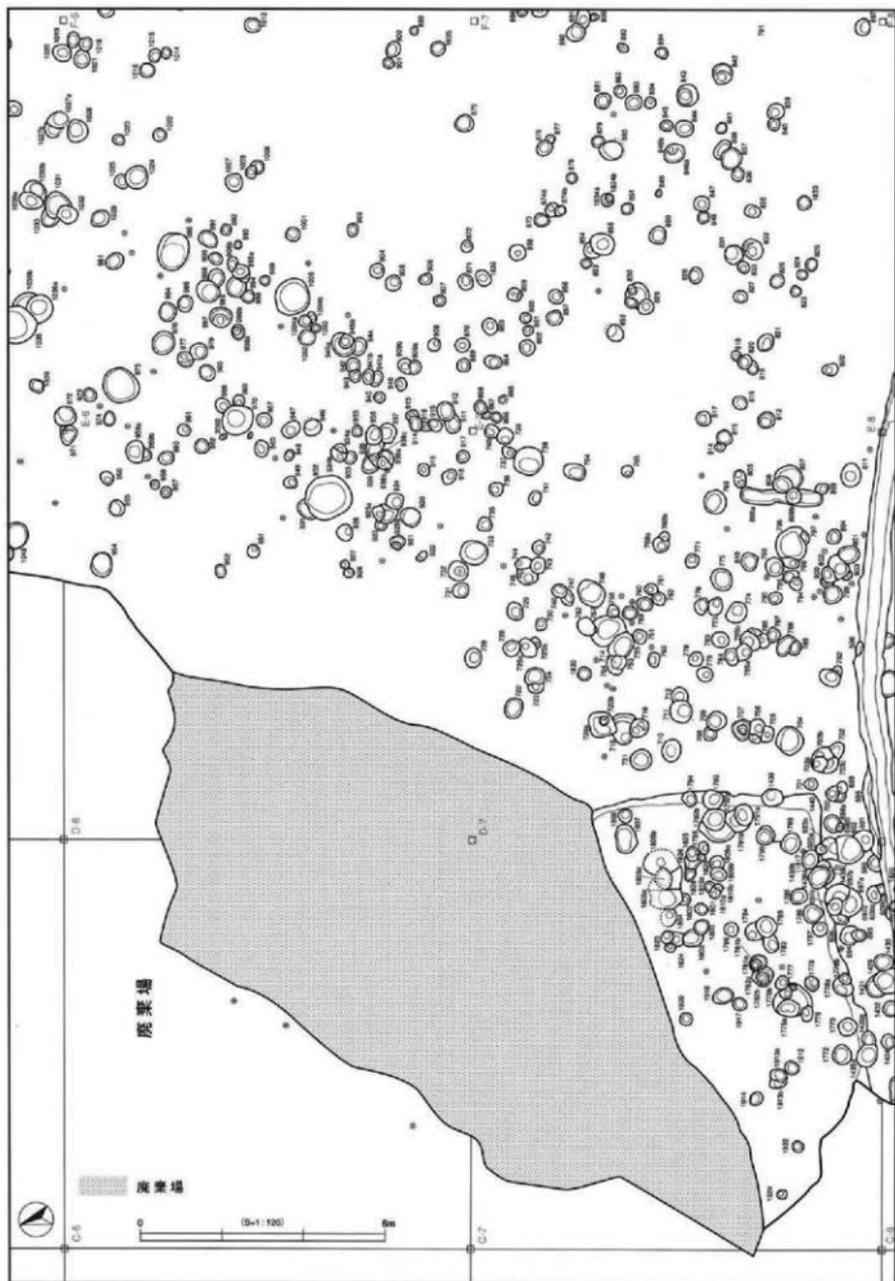


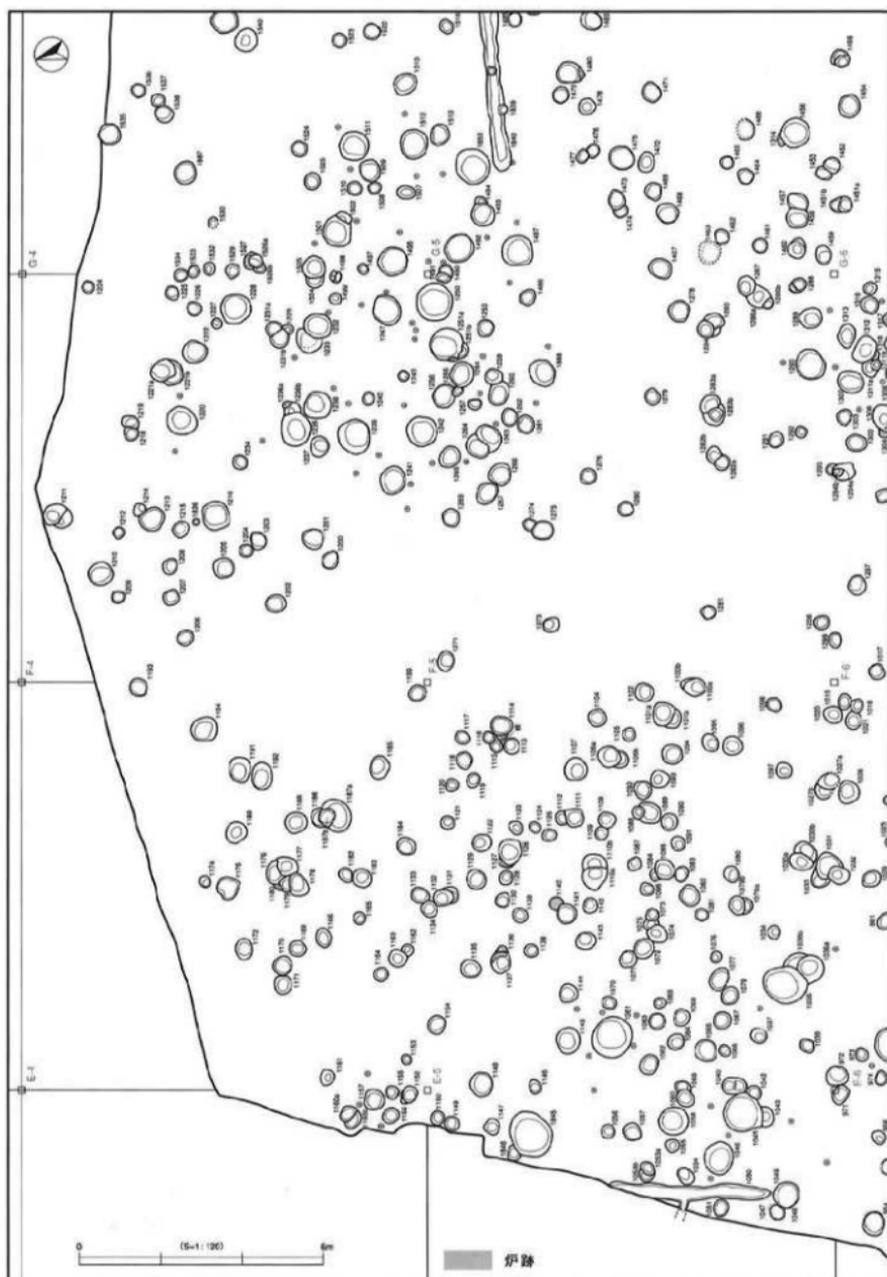
遺構配置分割図1



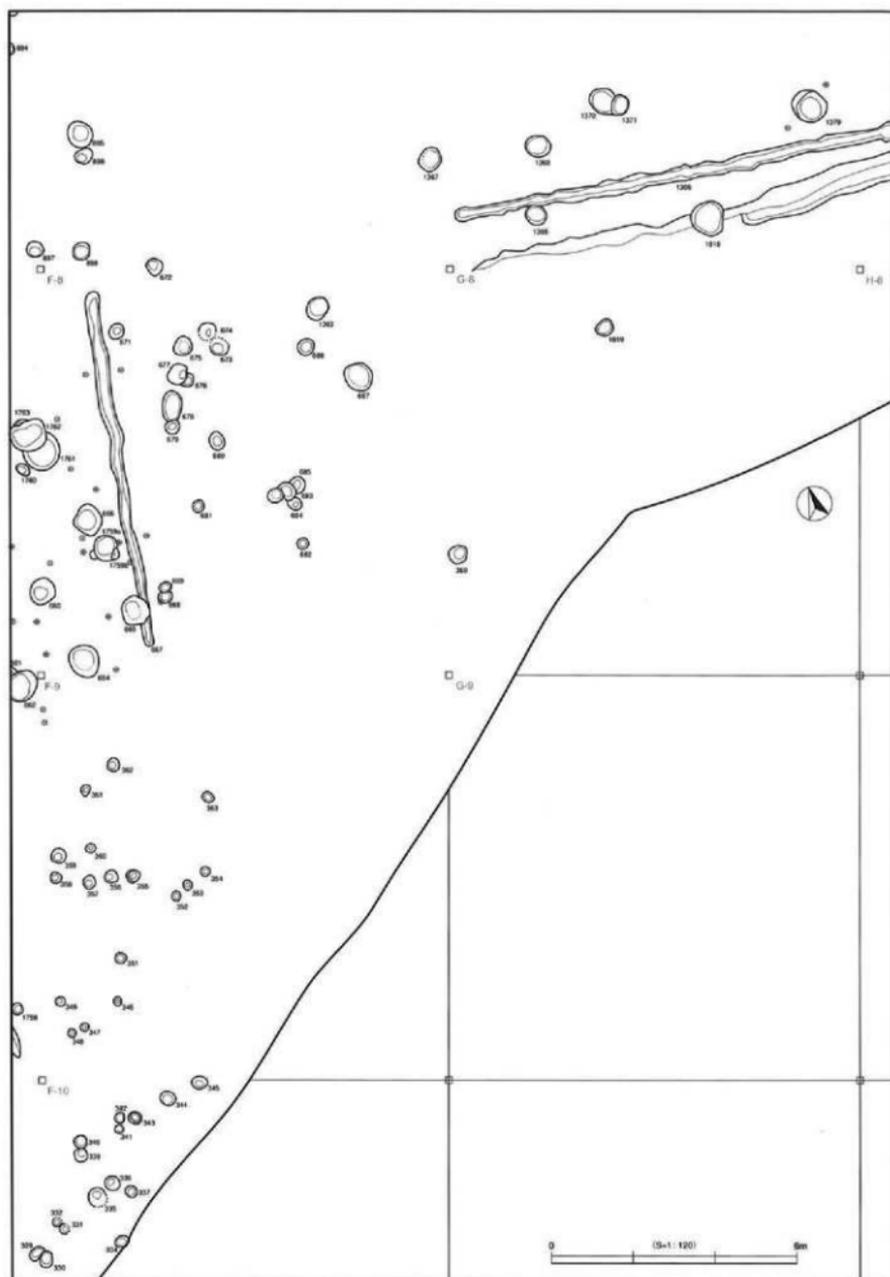


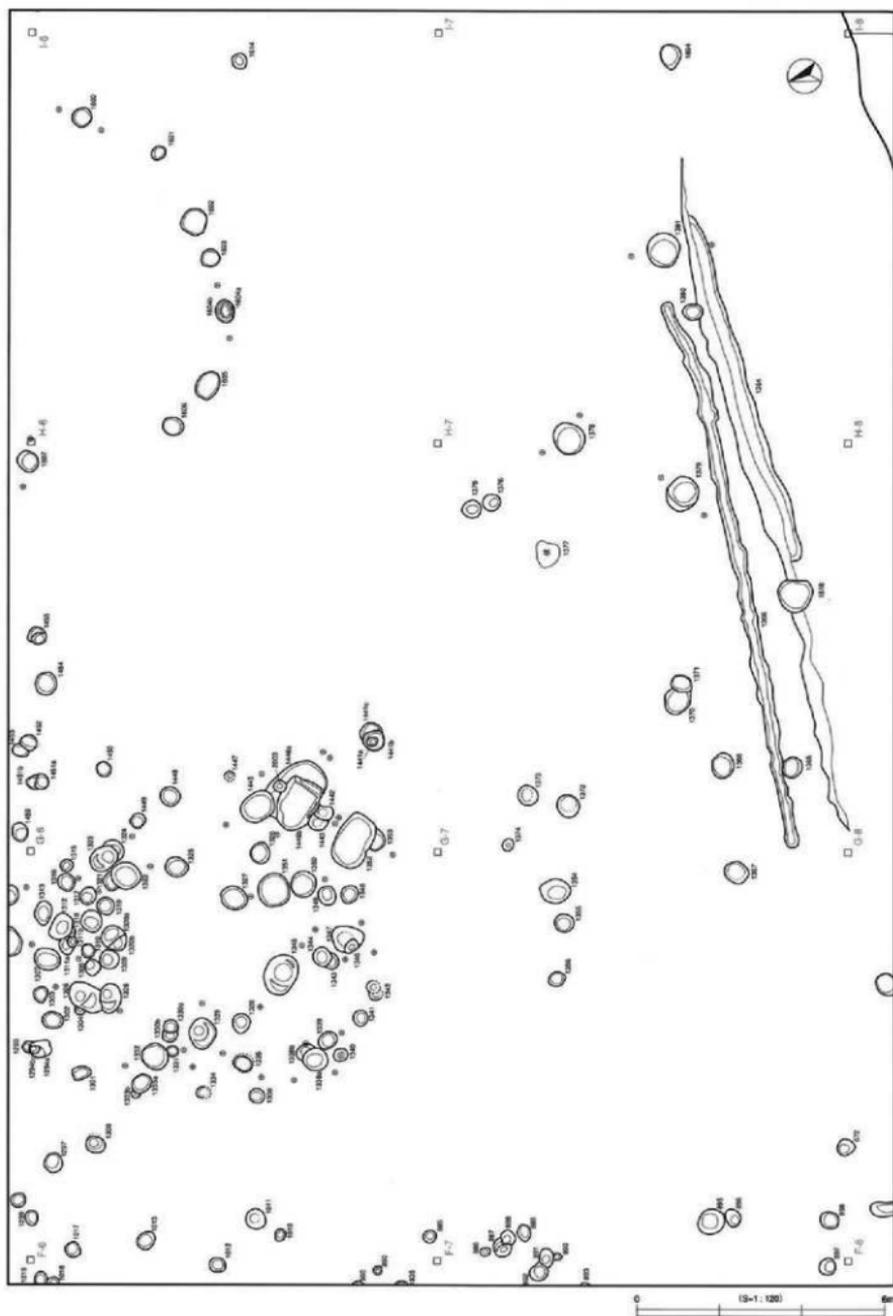
遺構配置分割図3





遺構配置分割図 5



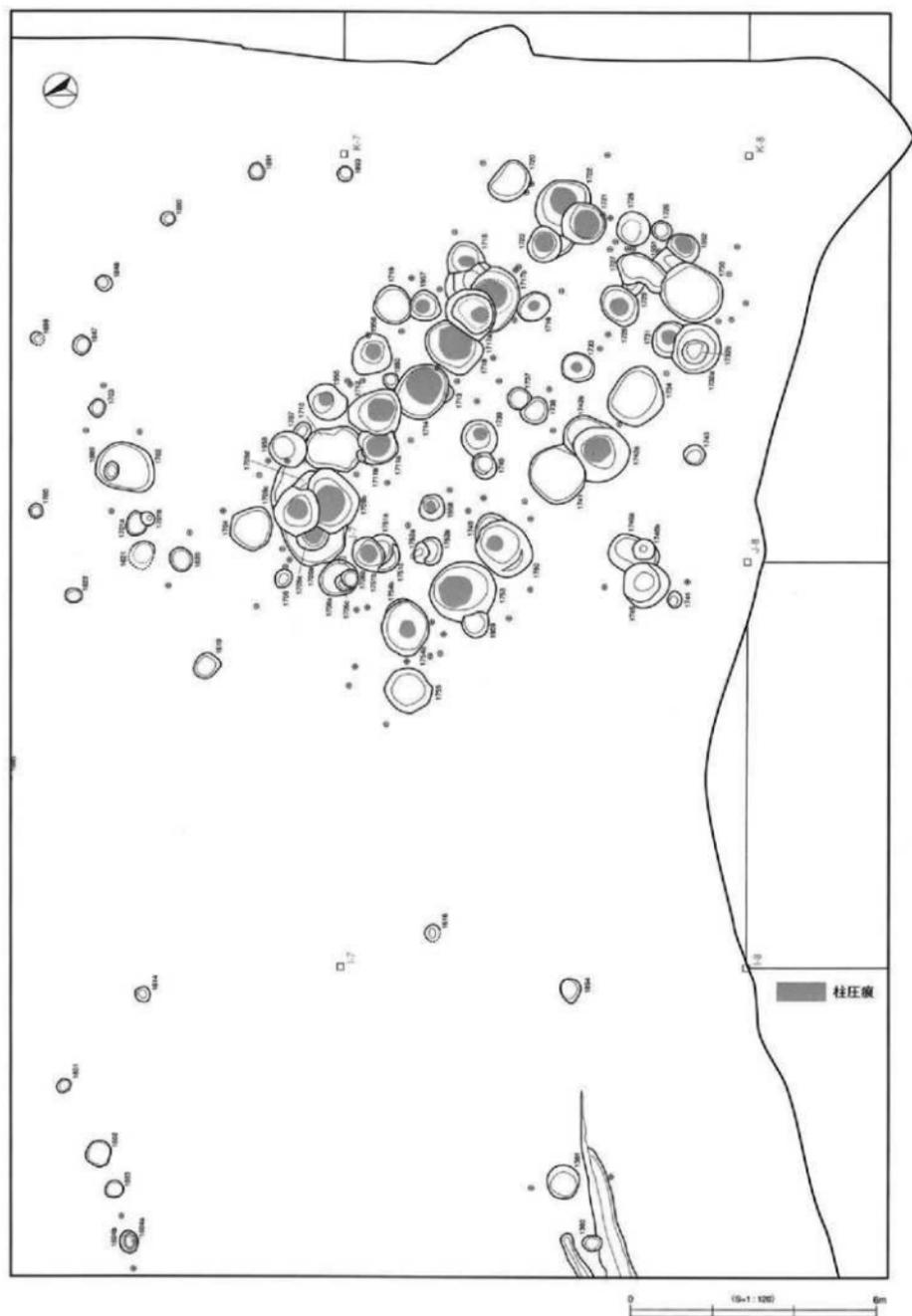


遺構配置分割図7



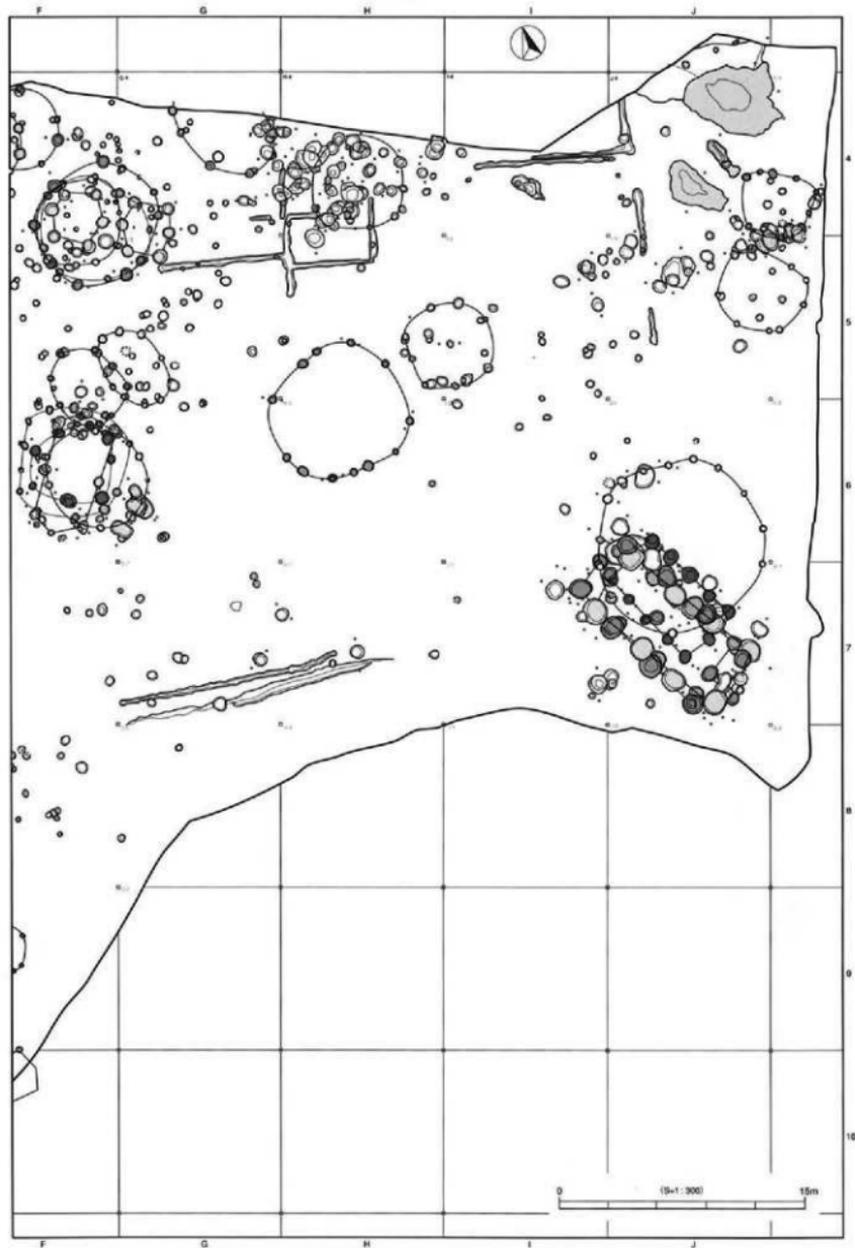


遺構配置分割図9



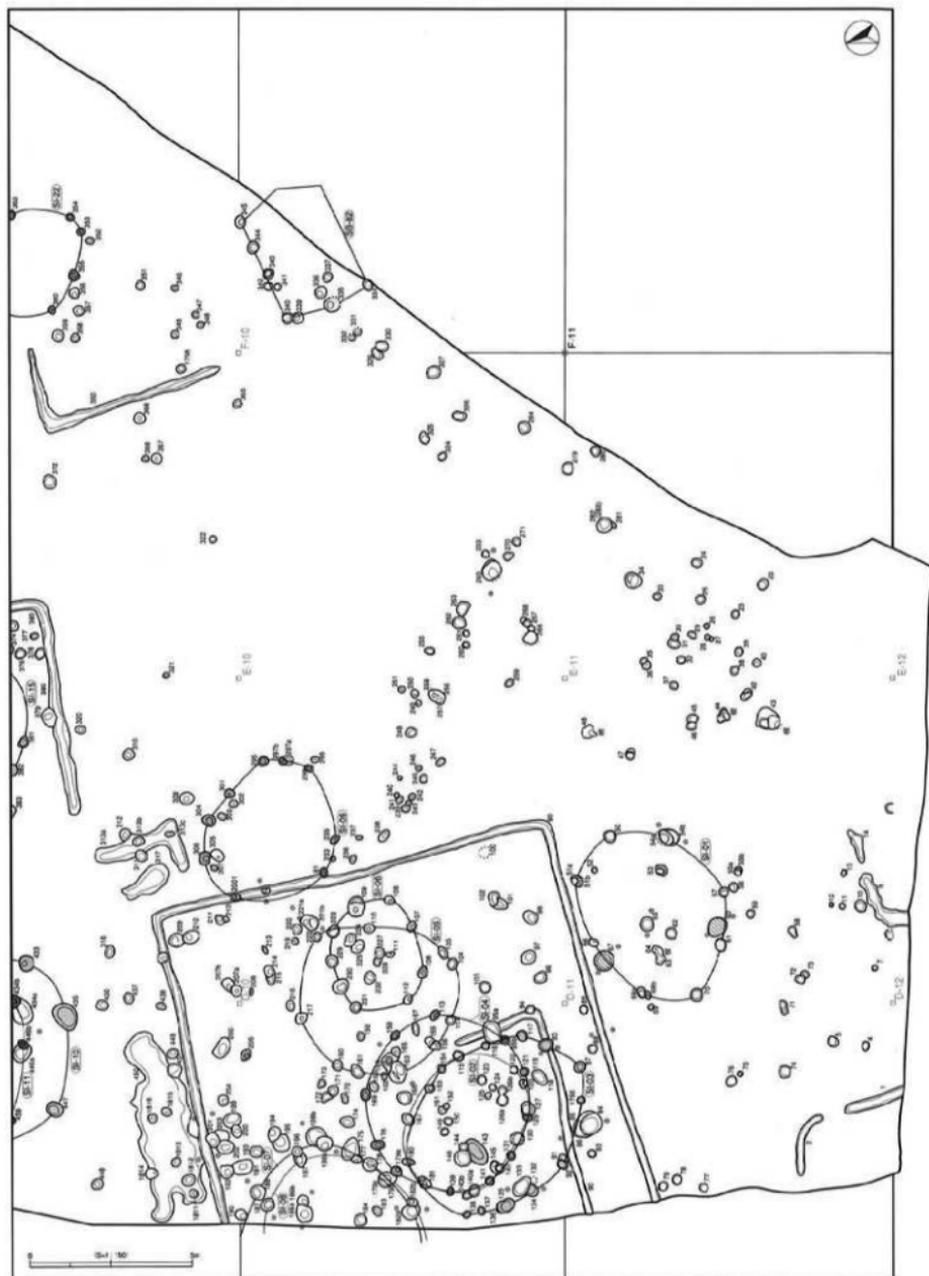
遺構配置全体図 1

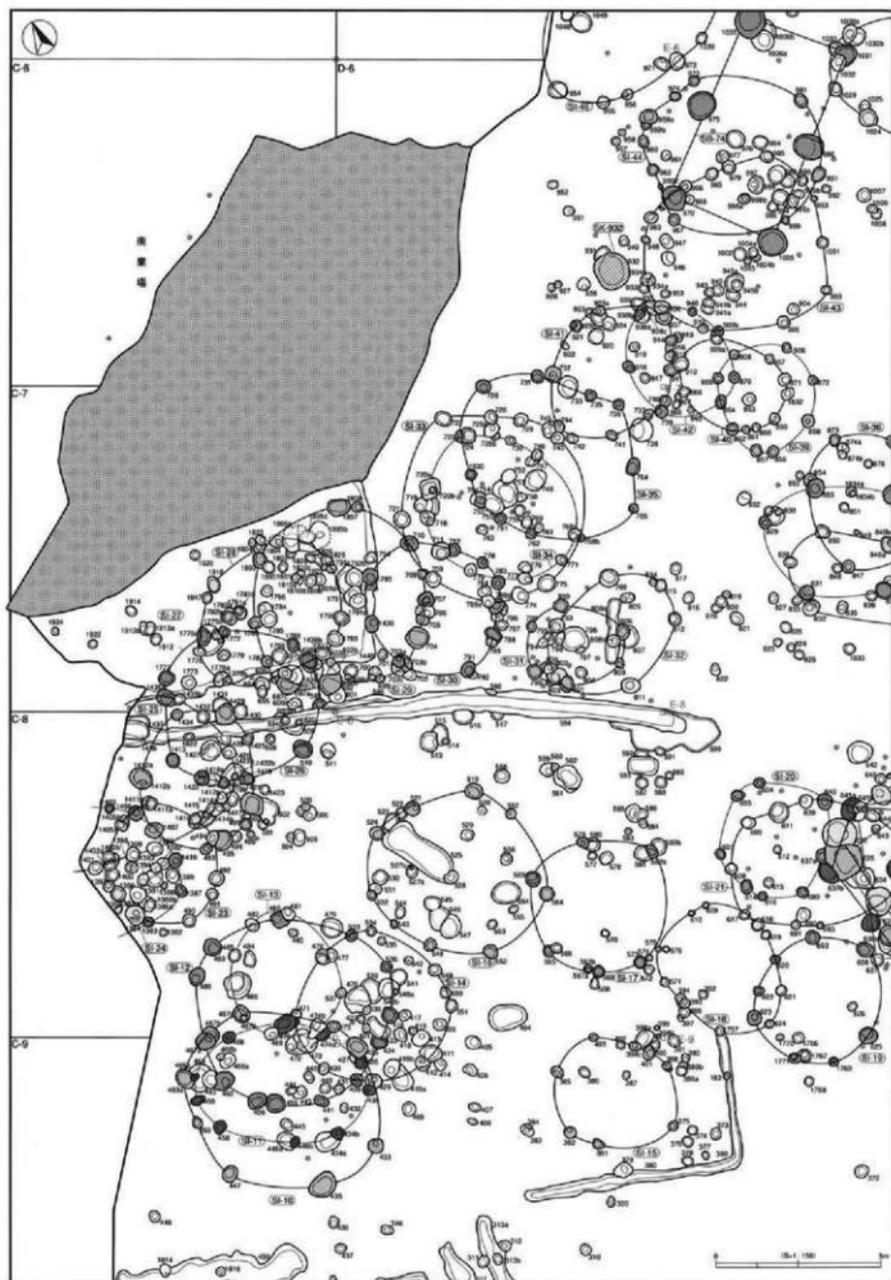




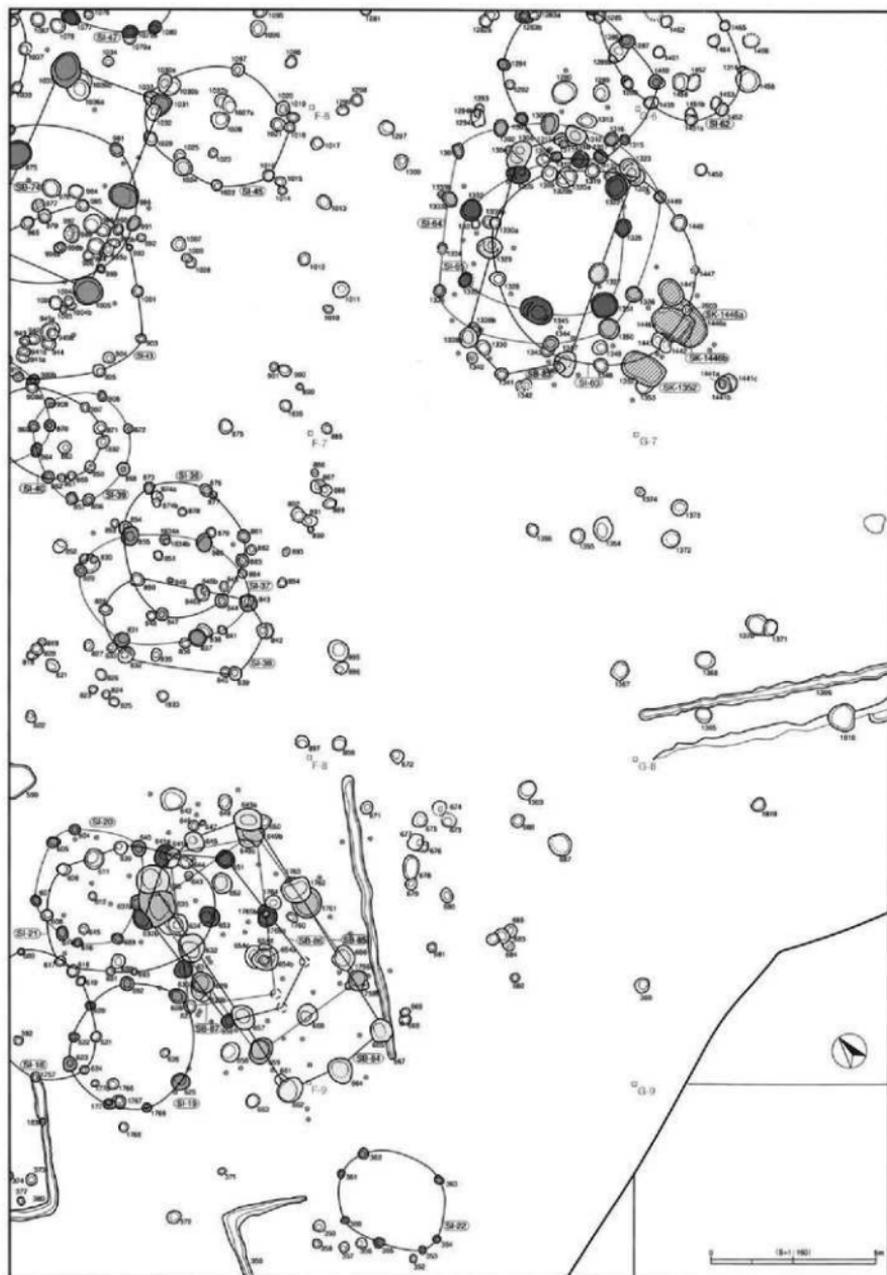


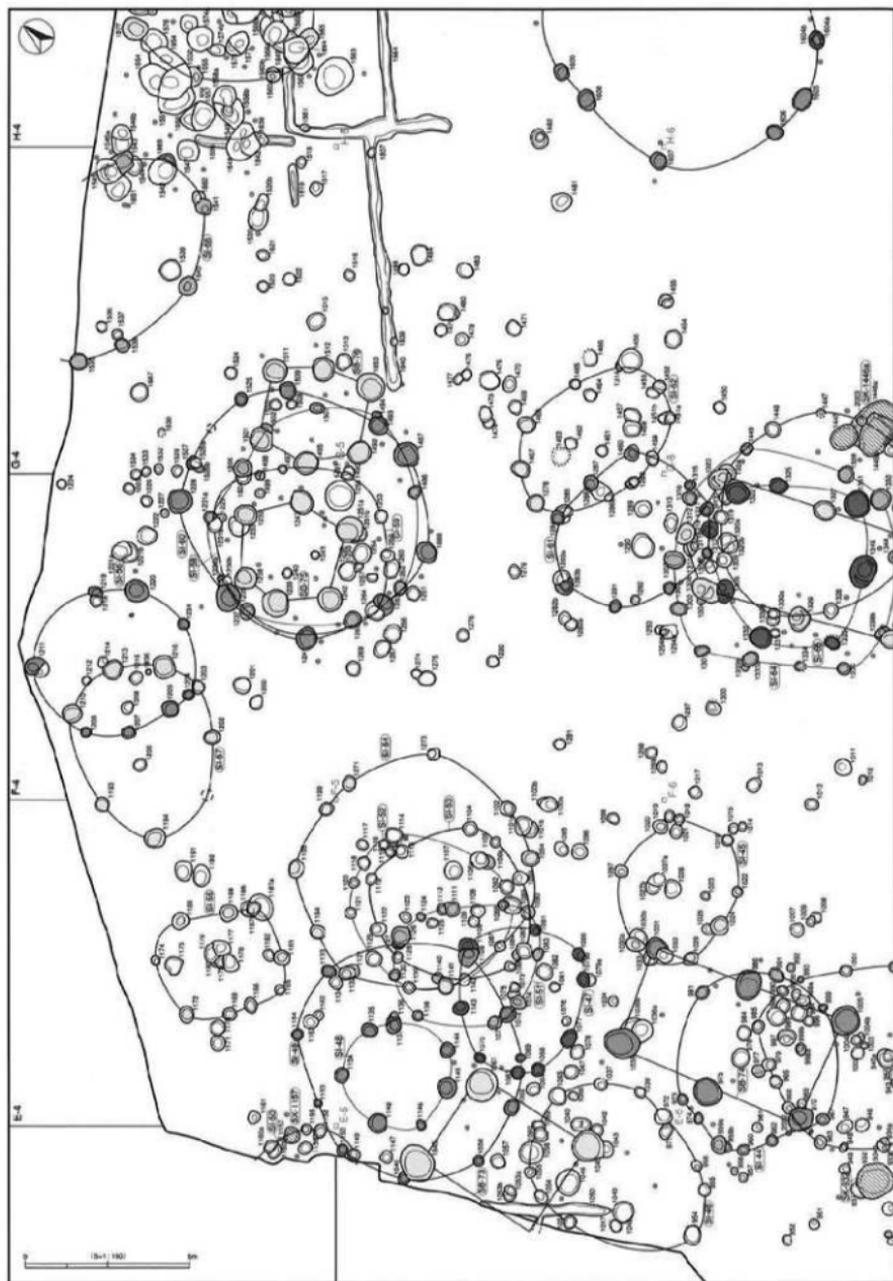
住后・建物跡等配置図1



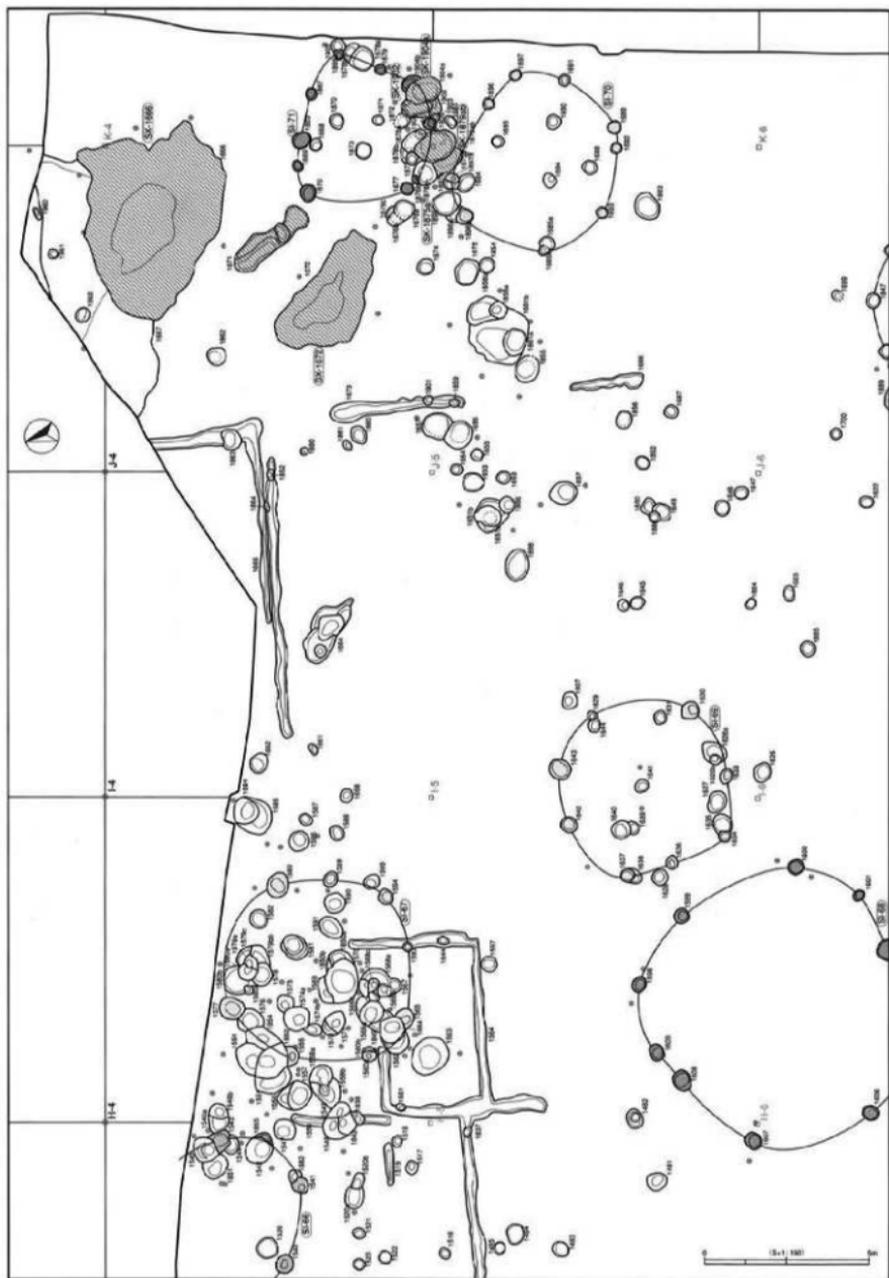


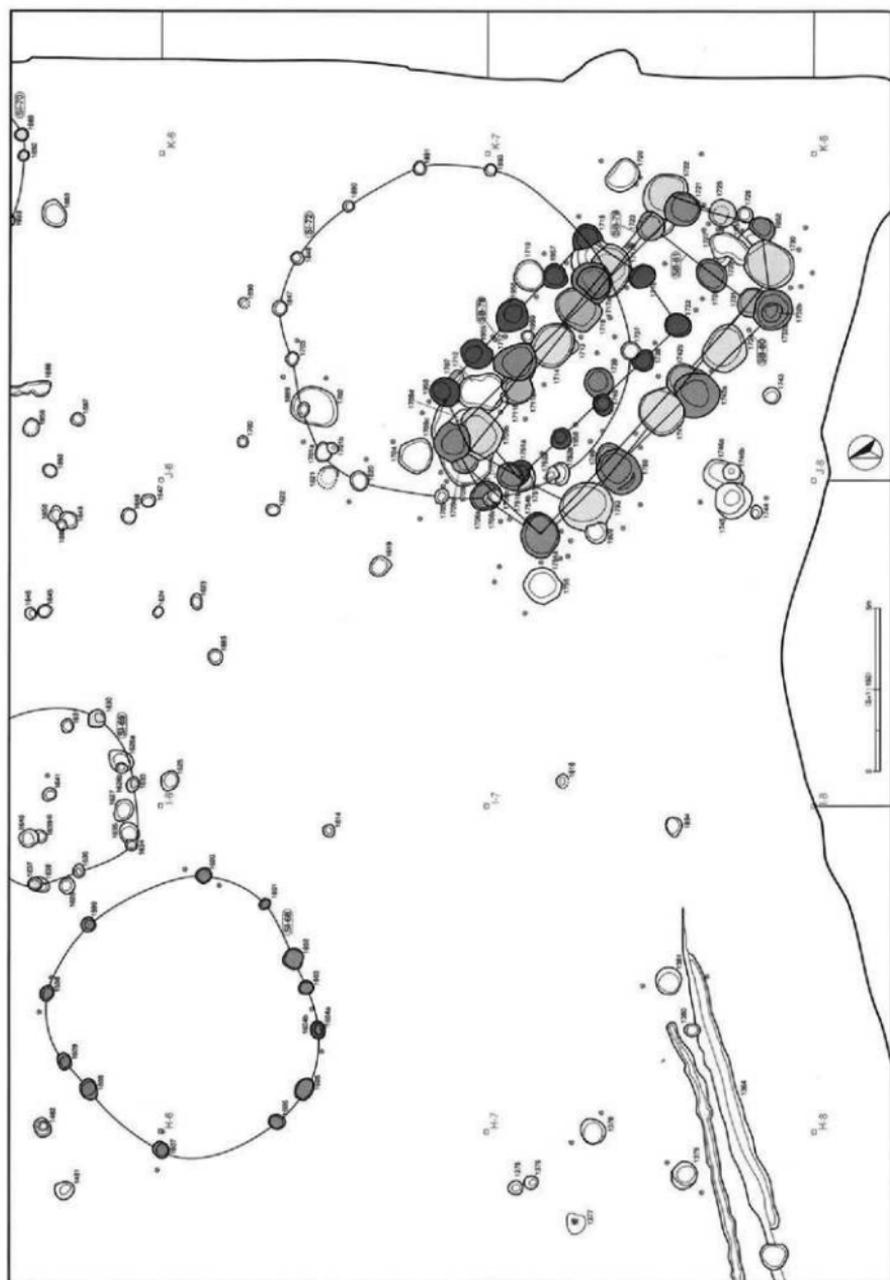
住居・建物跡等配置図3

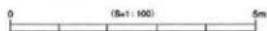
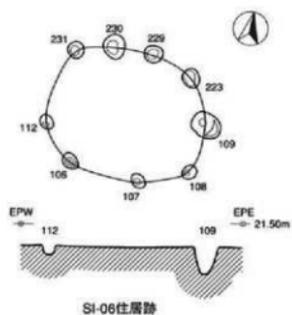
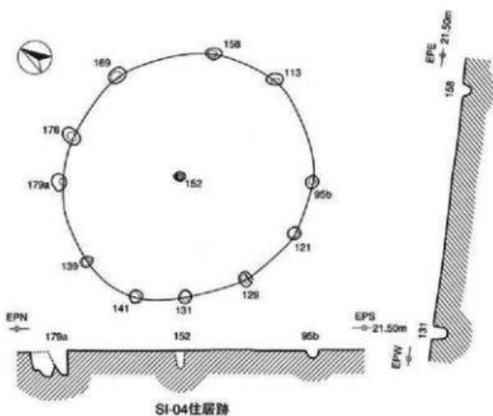
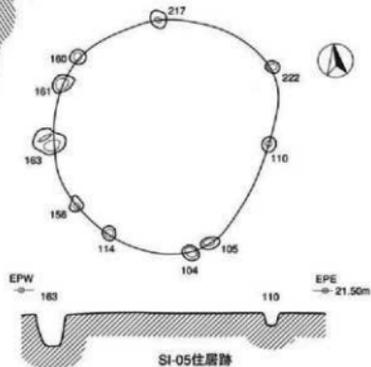
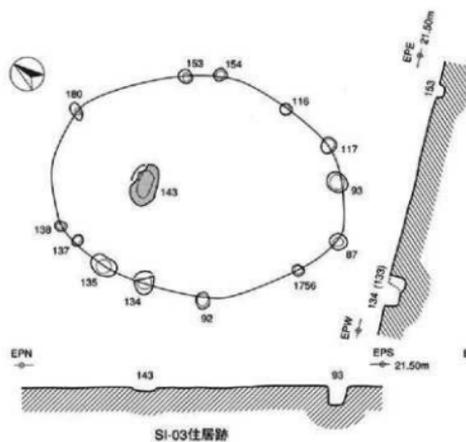
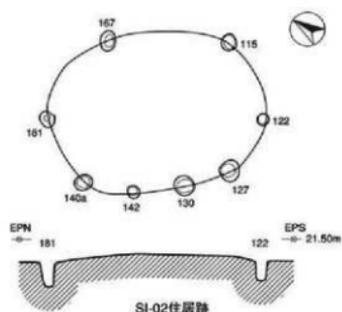
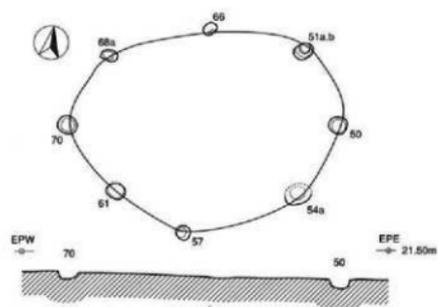


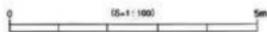
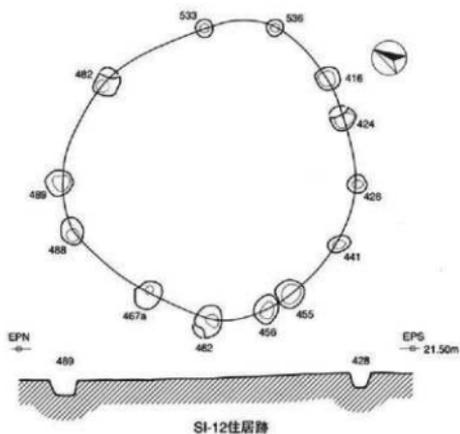
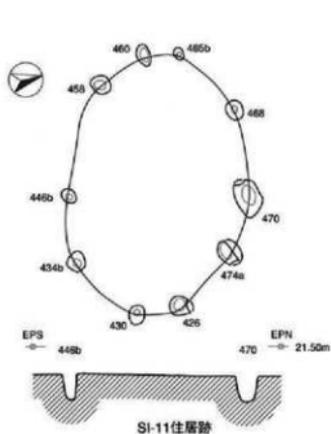
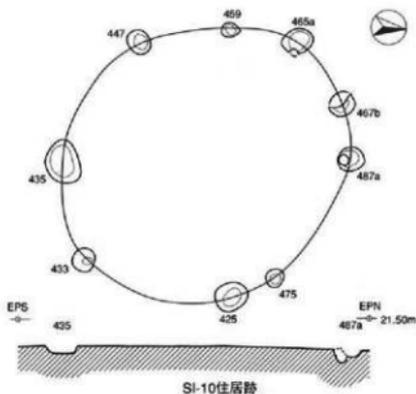
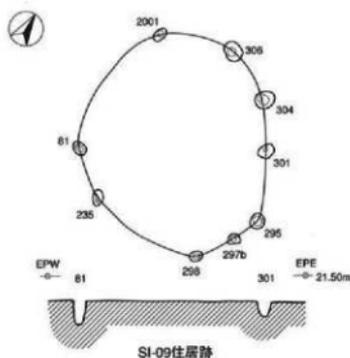
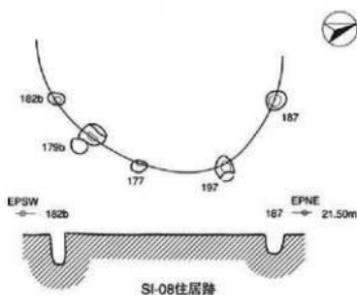
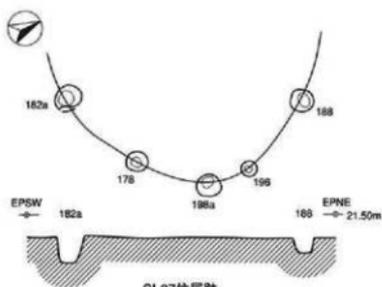


住居・建物跡等配置図 5

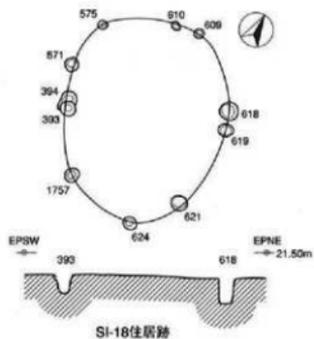
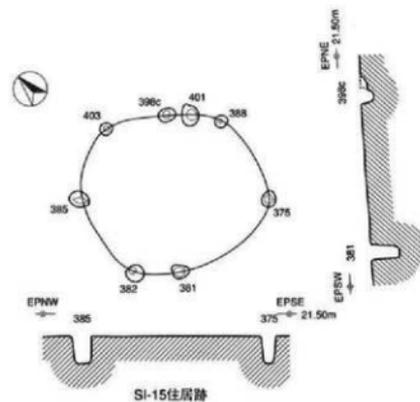
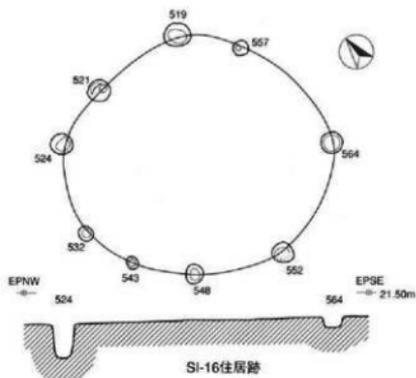
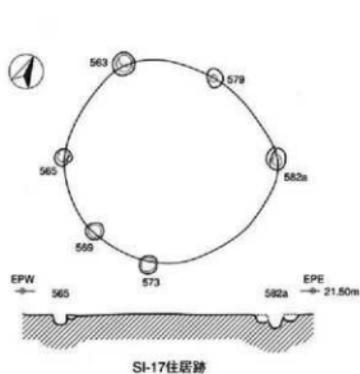
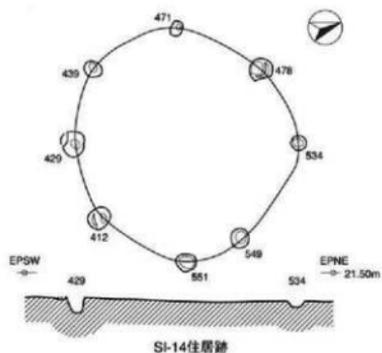
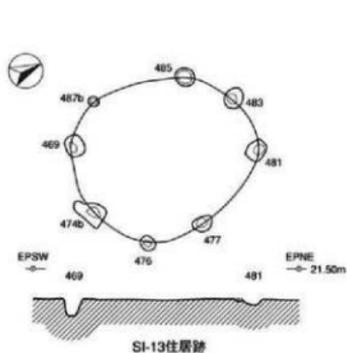


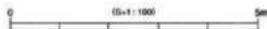
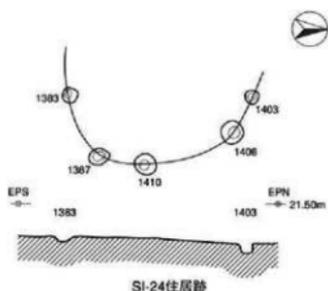
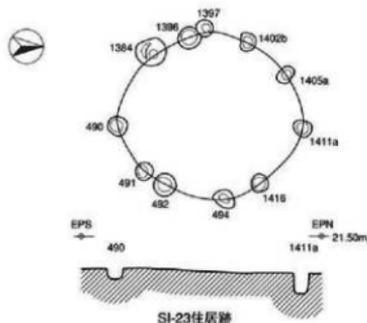
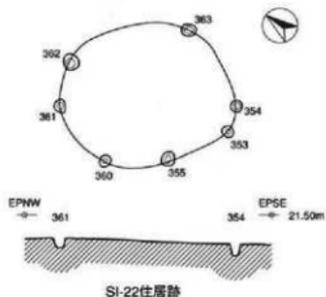
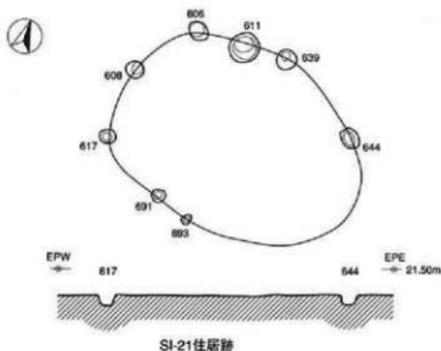
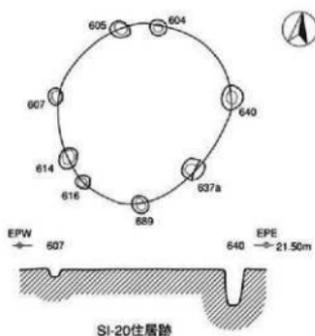
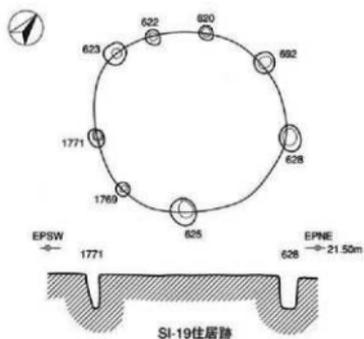


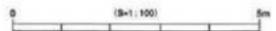
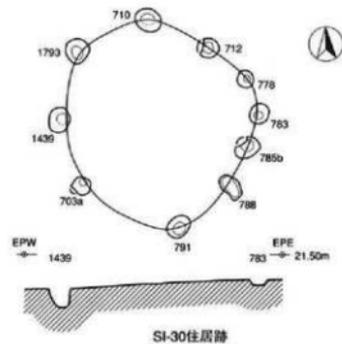
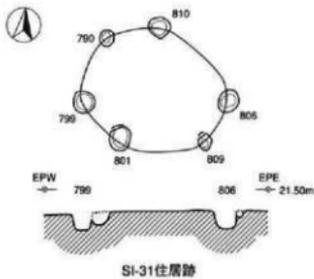
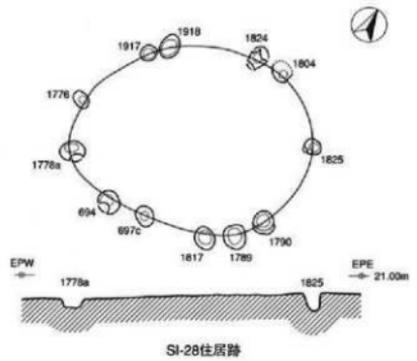
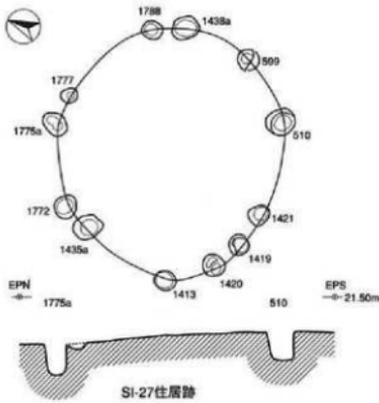
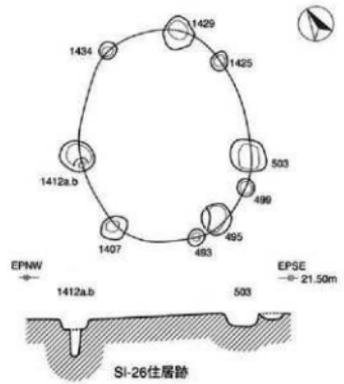
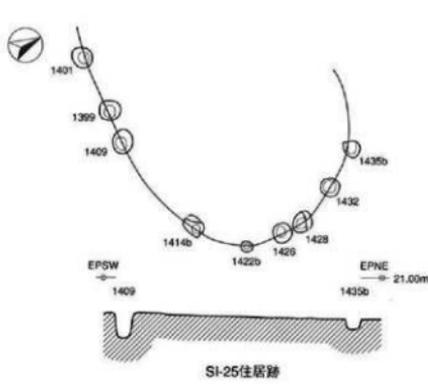


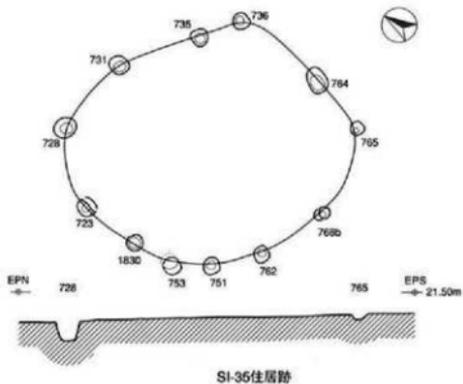
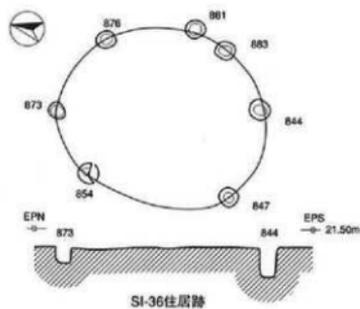
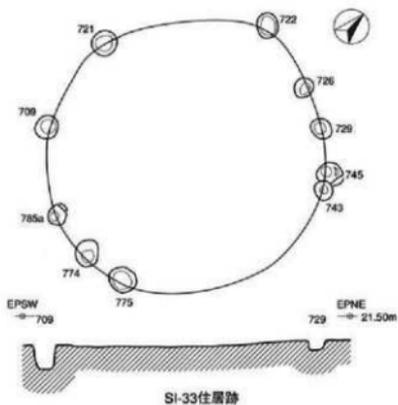
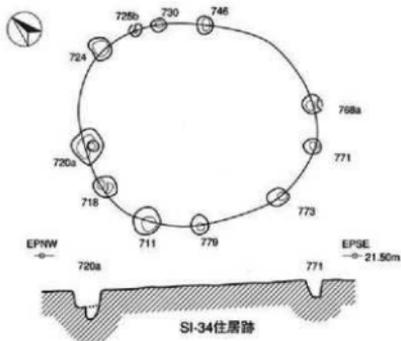
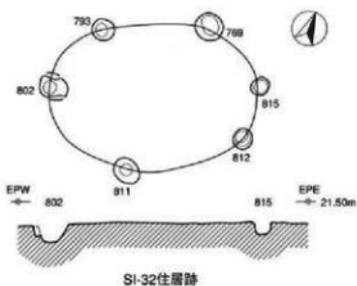
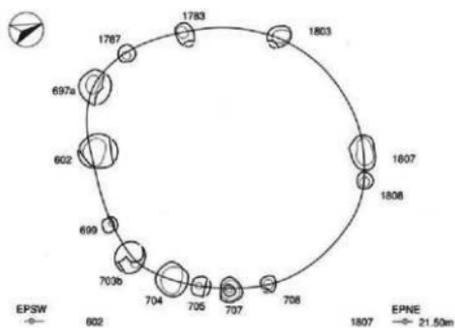


住居跡個別図3

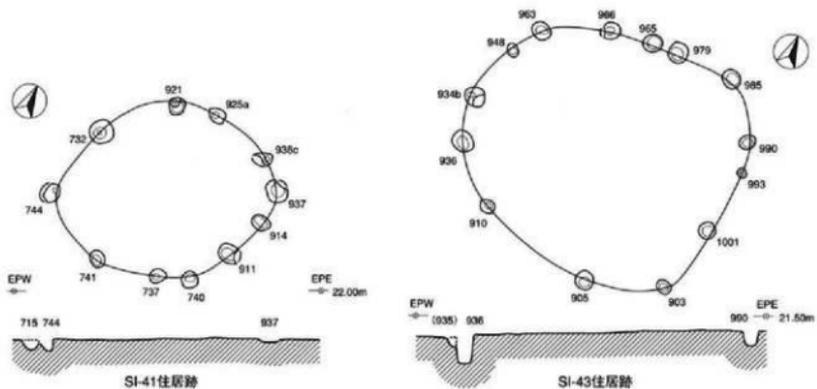
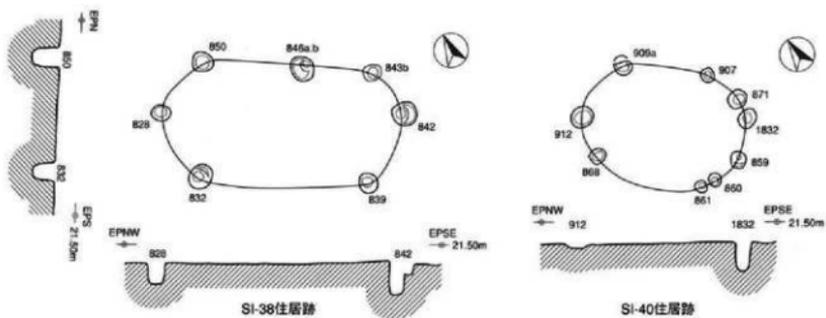
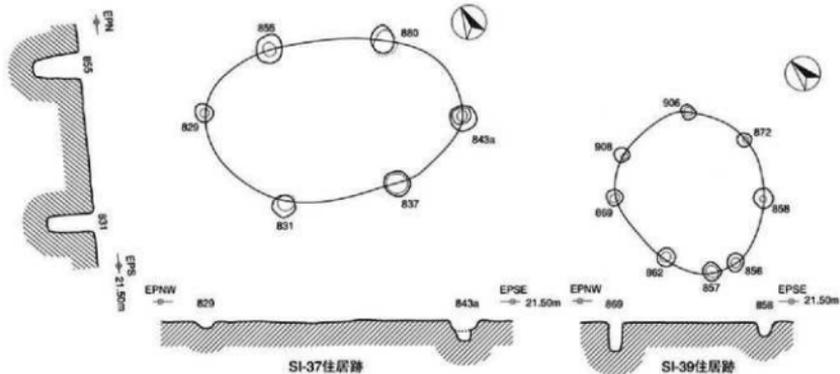


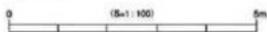
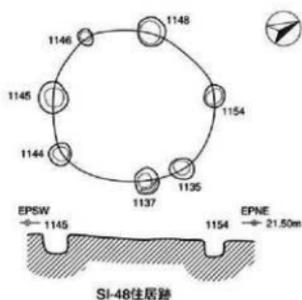
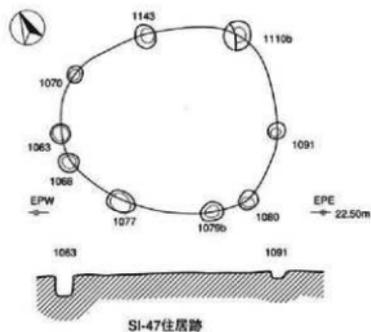
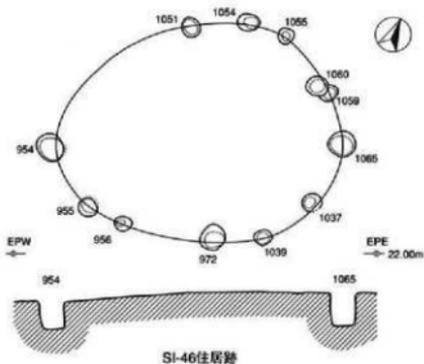
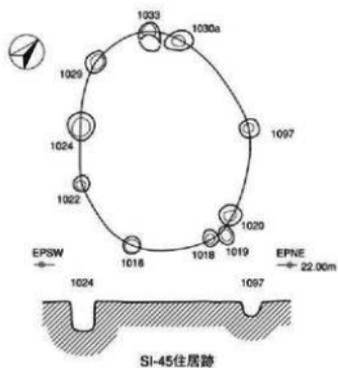
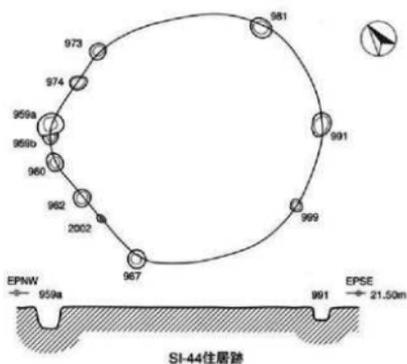
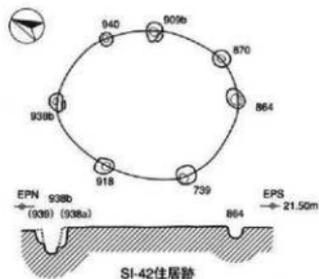


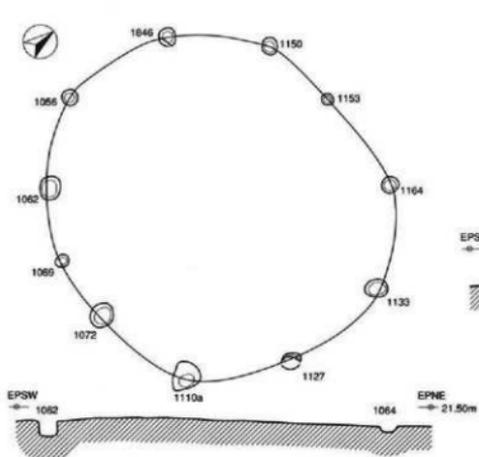




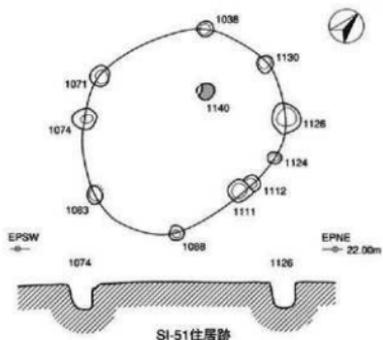
住居跡個別圖 7



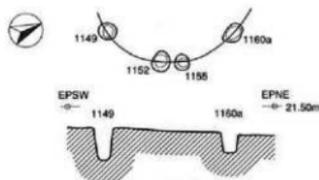




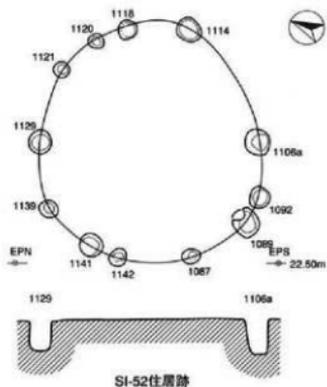
SI-49住居跡



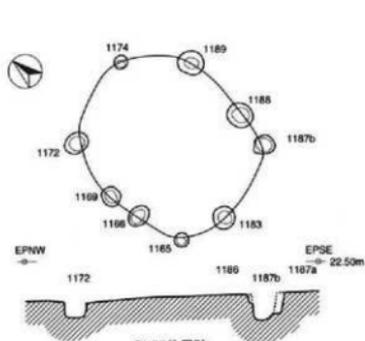
SI-51住居跡



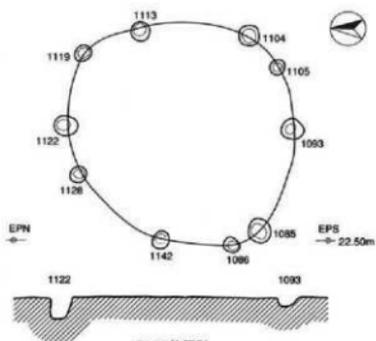
SI-50住居跡



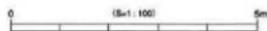
SI-52住居跡

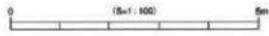
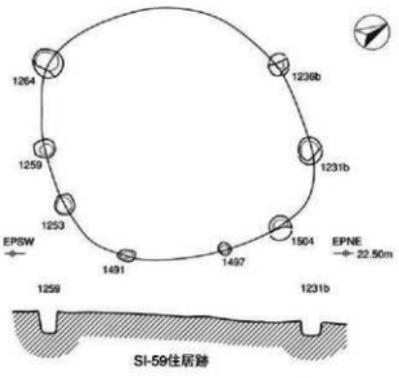
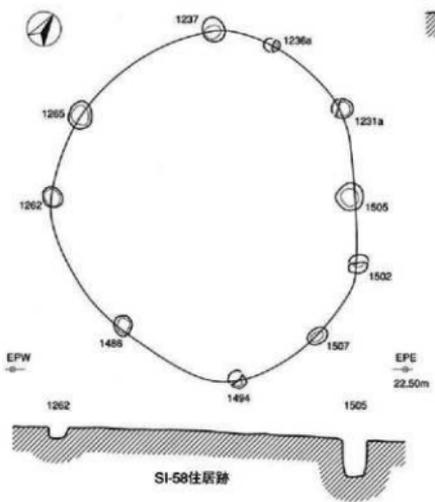
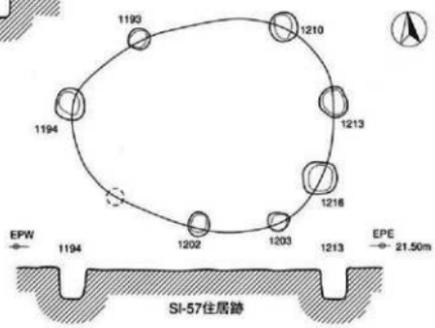
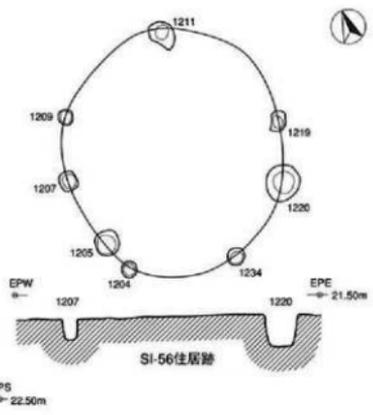
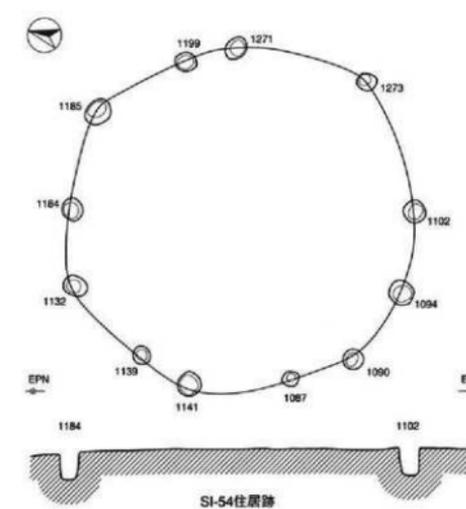


SI-55住居跡

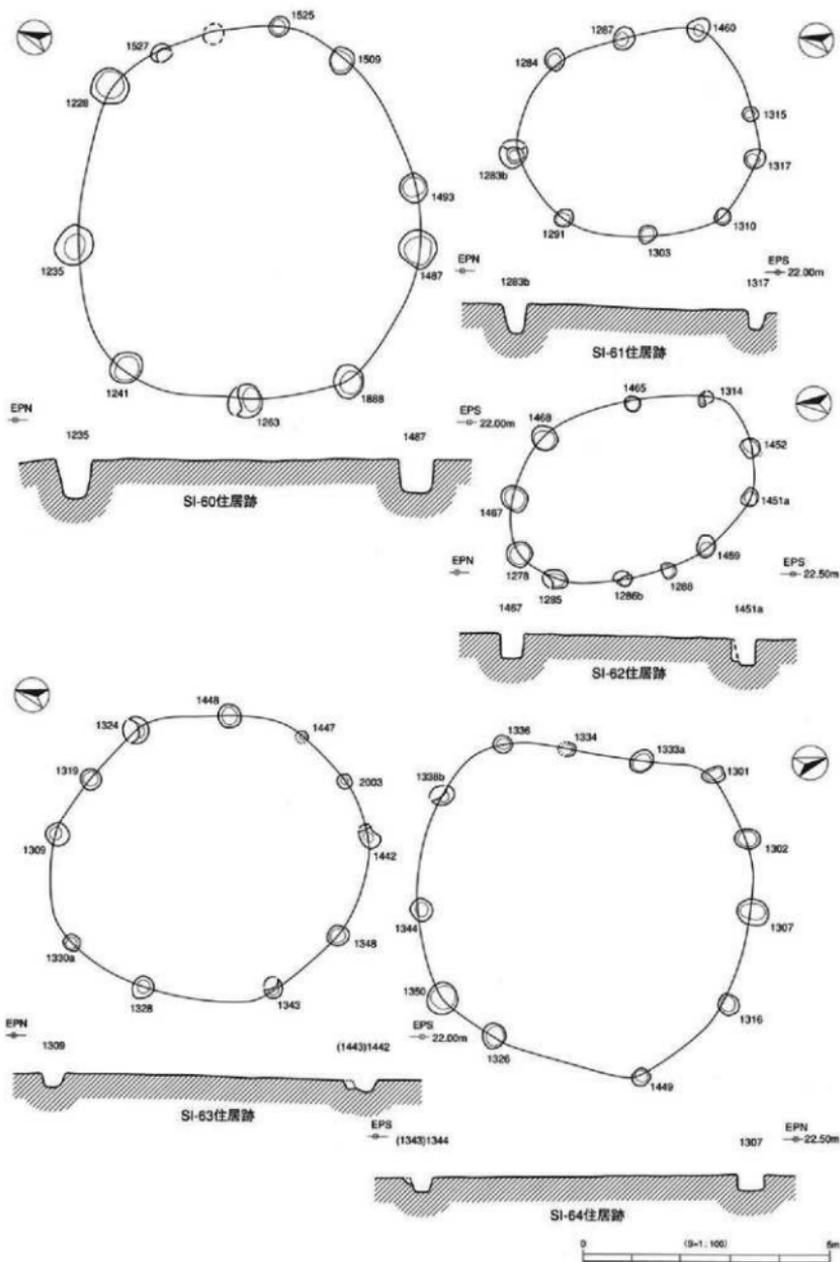


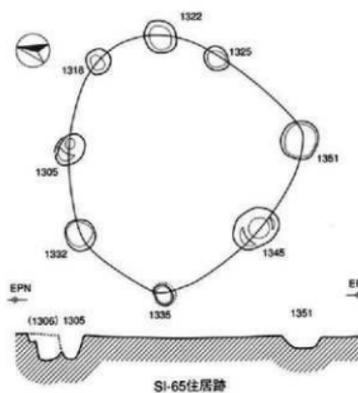
SI-53住居跡



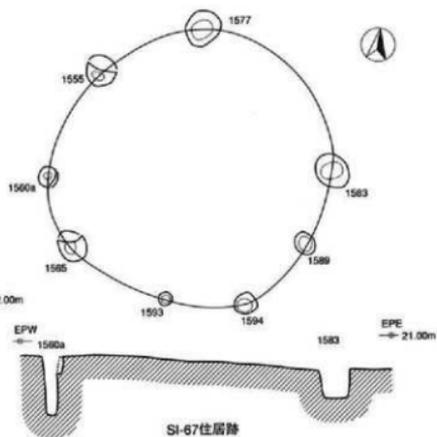


住居跡個別図11

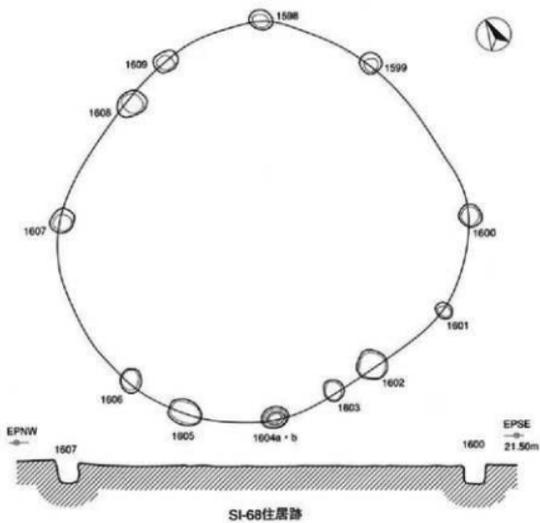




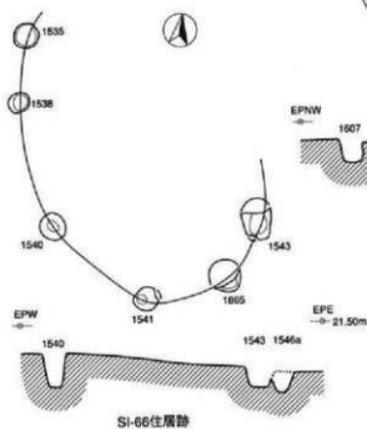
SI-65住居跡



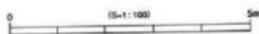
SI-67住居跡



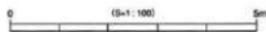
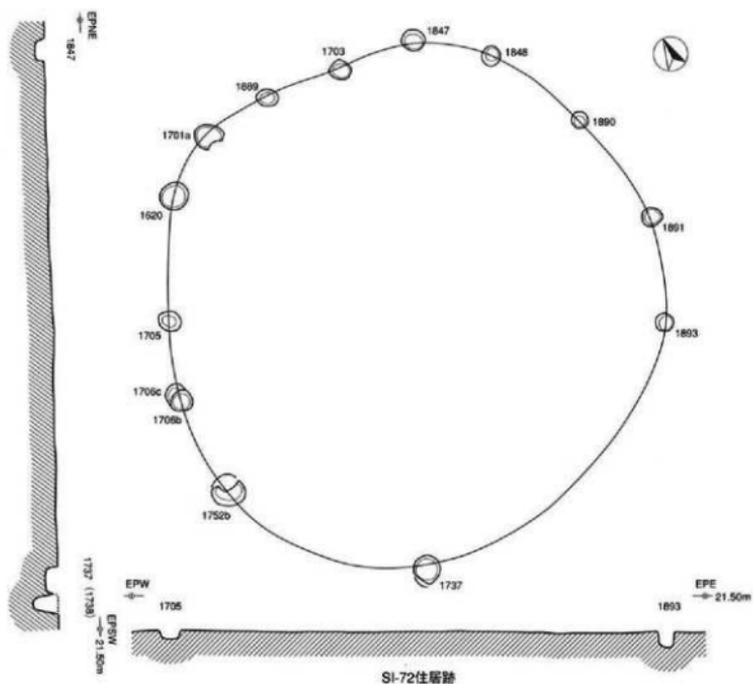
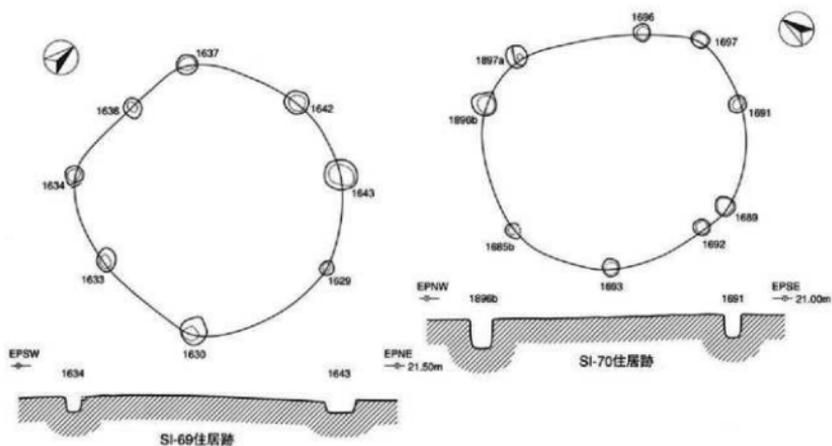
SI-68住居跡



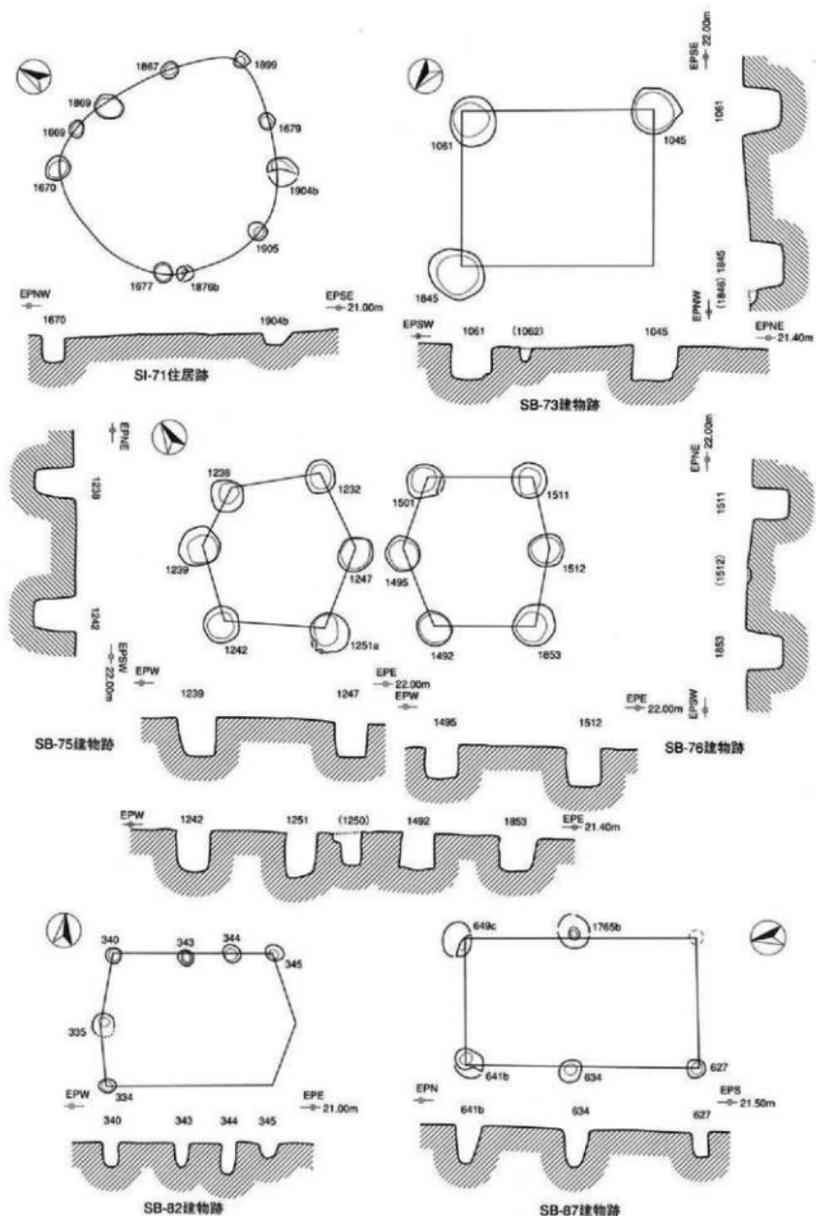
SI-66住居跡



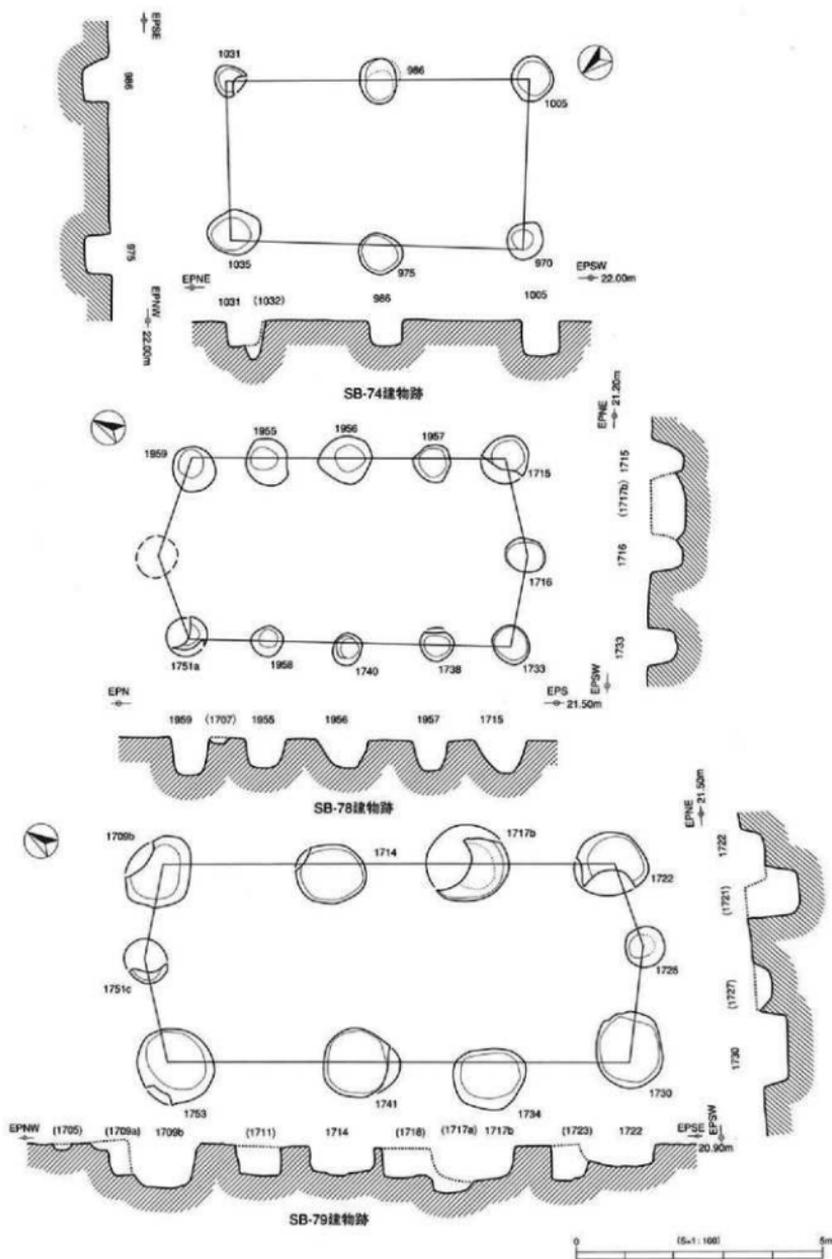
住居跡個別図13

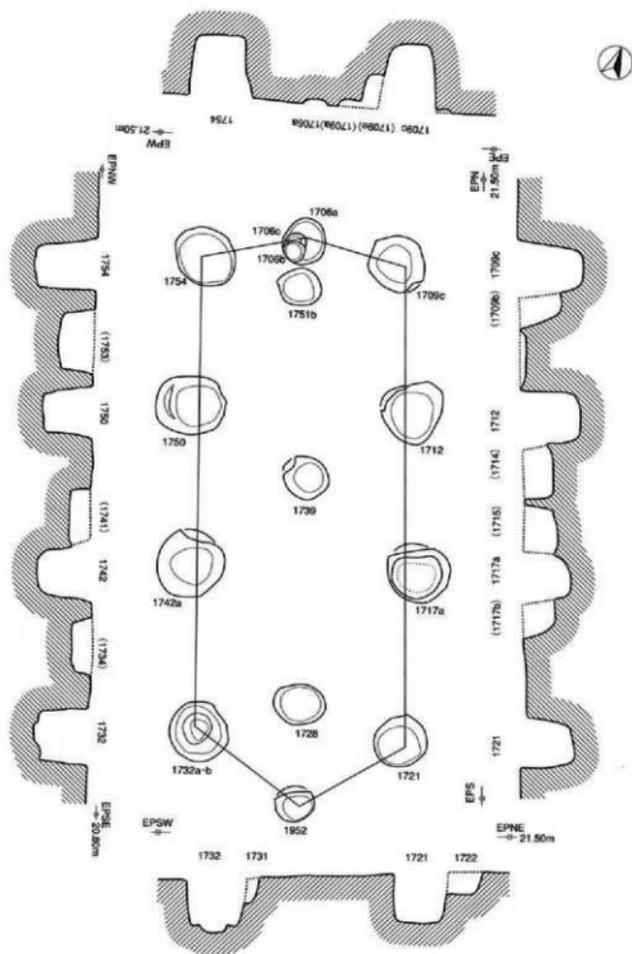


住居跡個別図14・建物跡個別図1



建物跡個別図 2

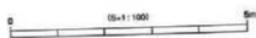
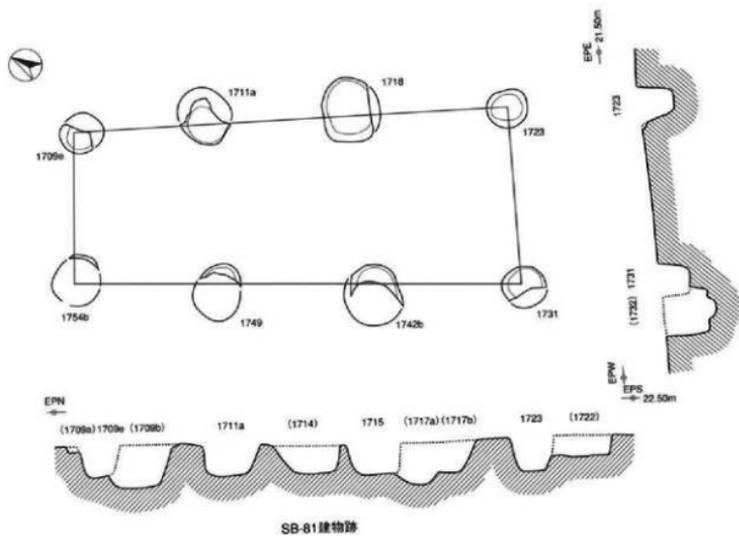
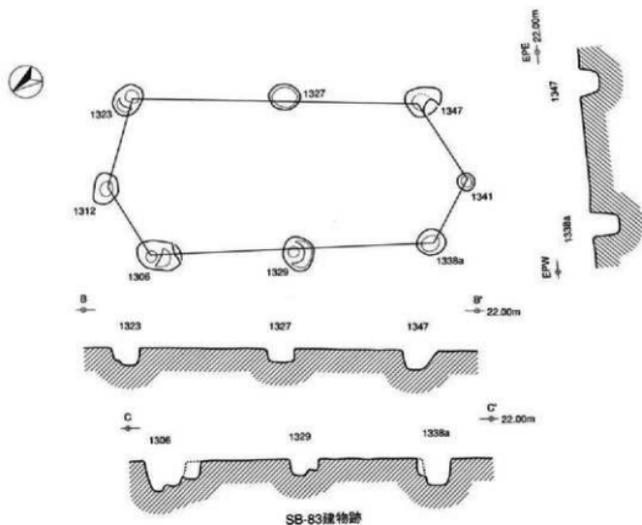


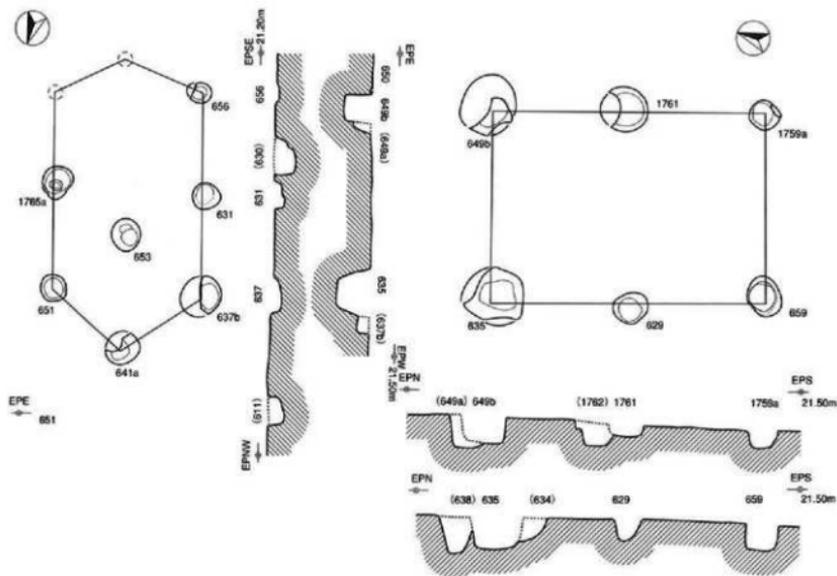


SB-80建物跡

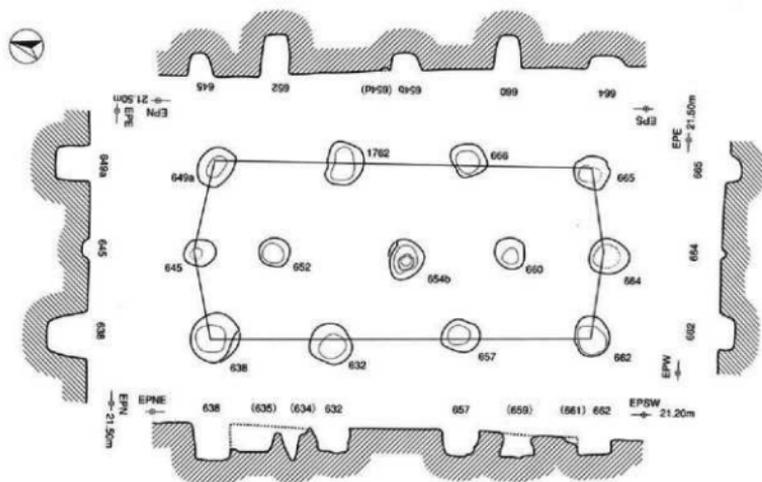


建物跡個別図 4





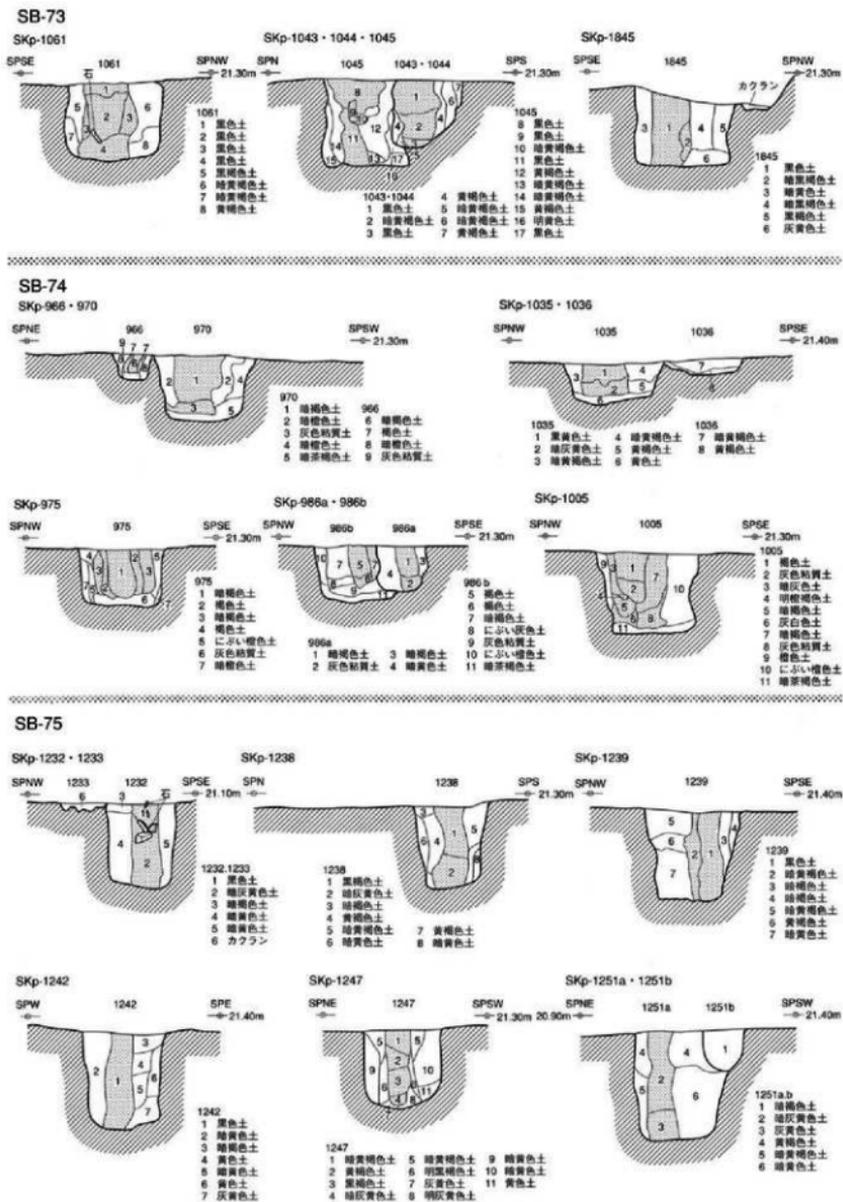
SB-85建物跡



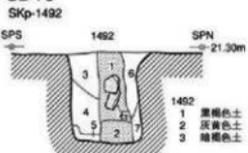
SB-84建物跡



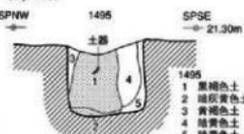
## 建物跡柱穴断面図 1



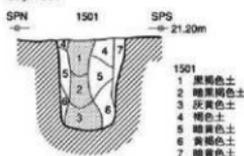
SB-76



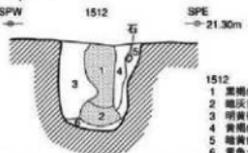
SKp-1495



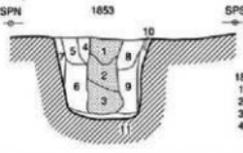
SKp-1501



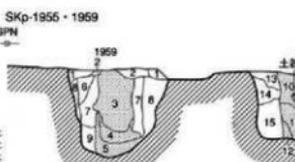
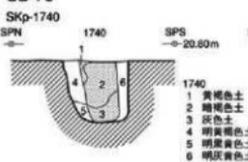
SKp-1512



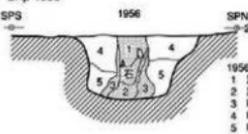
SKp-1853



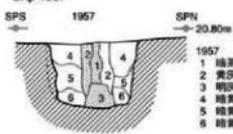
SB-78



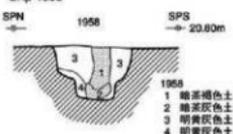
SKp-1956



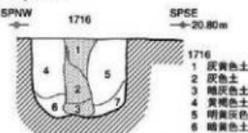
SKp-1957



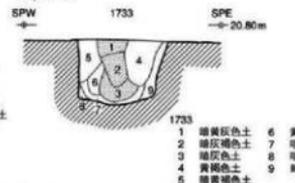
SKp-1958



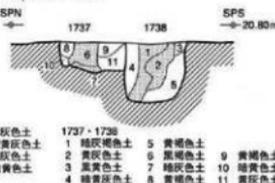
SKp-1716



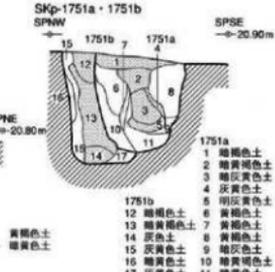
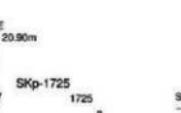
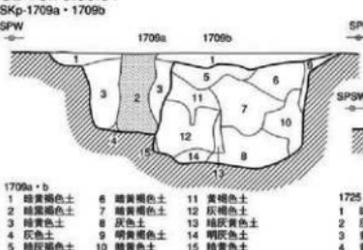
SKp-1733



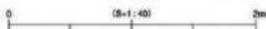
SKp-1737 · 1738



SB-78.79.80.81



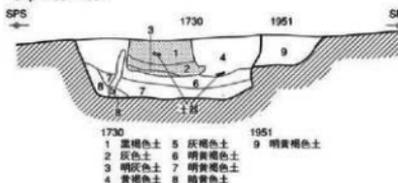
SB-72 : 1737 SB-76 : 1492 · 1495 · 1501 · 1512 · 1853  
 SB-78 : 1740 · 1955 · 1956 · 1957 · 1958 · 1959 · 1716 · 1733 · 1738 · 1751a  
 SB-79 : 1709b · 1725 · 1751b SB-81 : 1709a



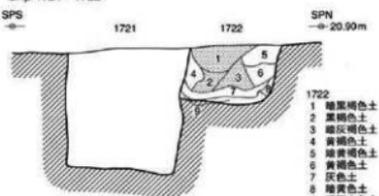
建物跡柱穴断面図 3

SB-78.79.80.81

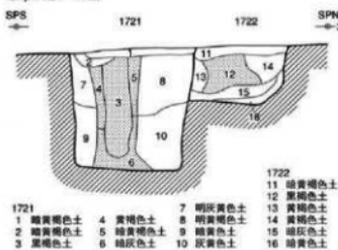
SKp-1730・1951



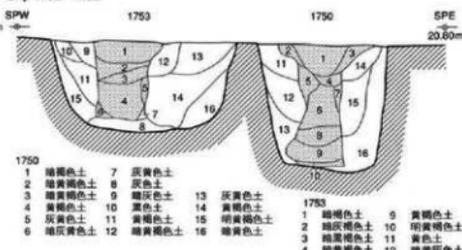
SKp-1721・1722



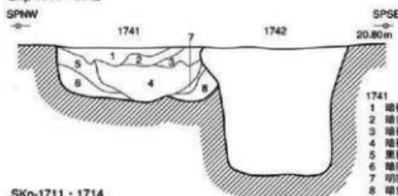
SKp-1721・1722



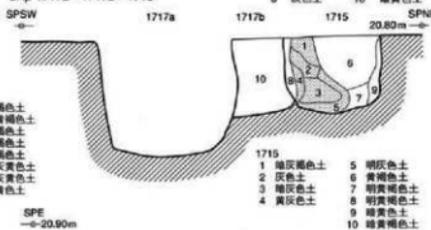
SKp-1750・1753



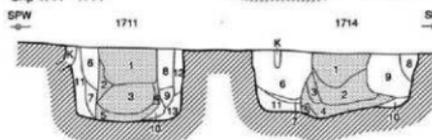
SKp-1741・1742



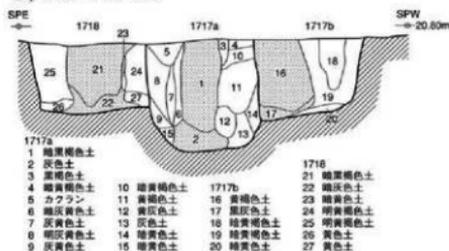
SKp-1717a・1717b・1715



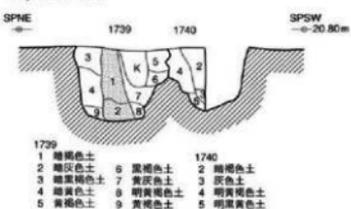
SKp-1711・1714



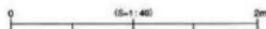
SKp-1717a・1717b・1718



SKp-1739・1740

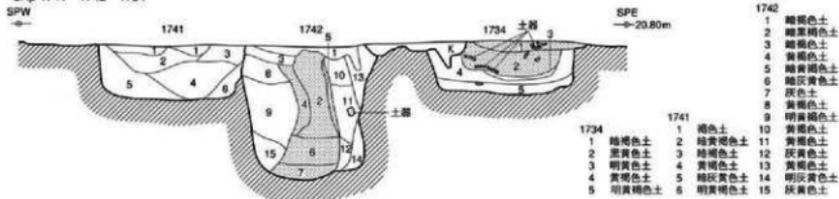


SB-78: 1715・1740 SB-79: 1714・1717b・1722・1730・1741・1753  
SB-80: 1717a・1721・1739・1742・1750 SB-81: 1711・1718

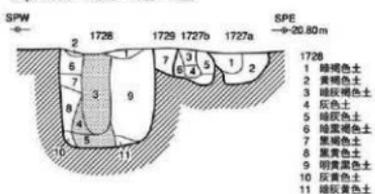


SB-79.80.81

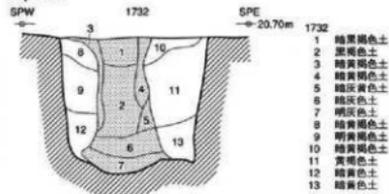
SKp-1741・1742・1734



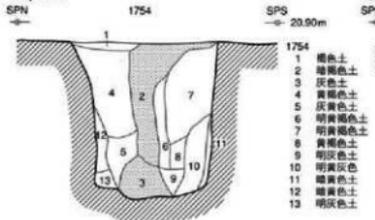
SKp-1727a・1727b・1728・1729



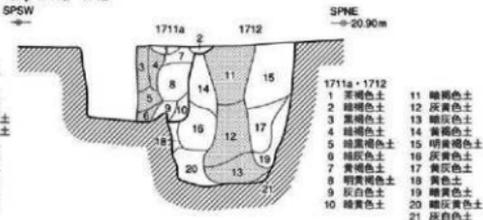
SKp-1732



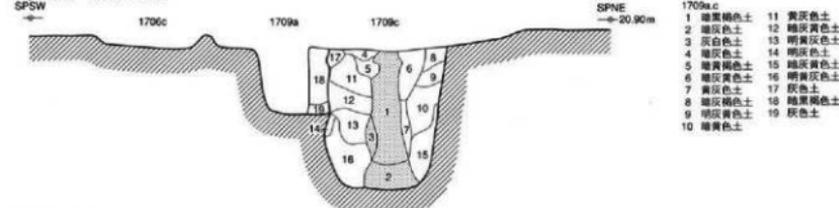
SKp-1754



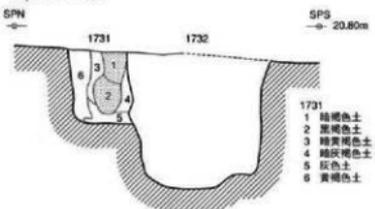
SKp-1711a・1712



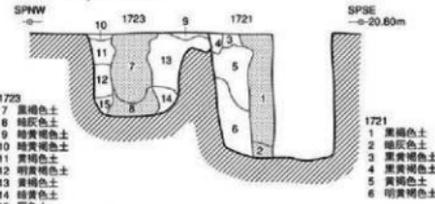
SKp-1706c・1709a・1709c



SKp-1731・1732



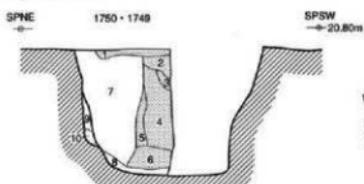
SKp-1721・1723



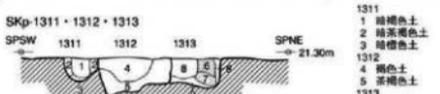
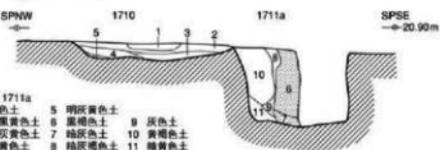
建物跡柱穴断面図 5

SB-80.81

SKp-1749・1750

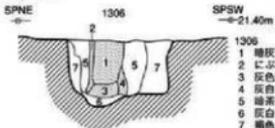


SKp-1710・1711a

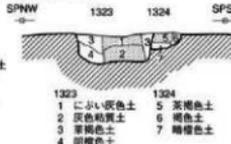


SB-83

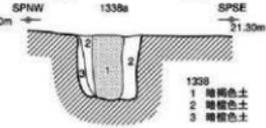
SKp-1306



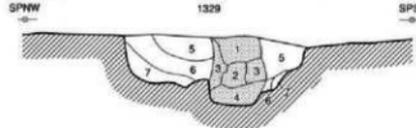
SKp-1323・1324



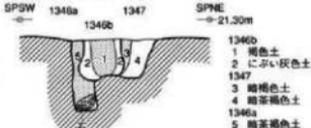
SKp-1338a



SKp-1329

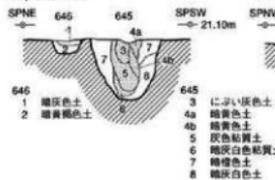


SKp-1346a・1346b・1347

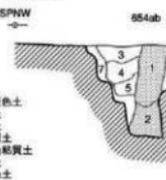


SB-84

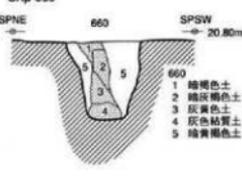
SKp-645・646



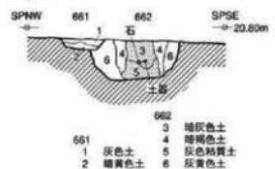
SKp-654ab



SKp-660



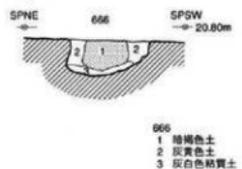
SKp-661・662



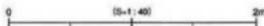
SKp-664



SKp-666

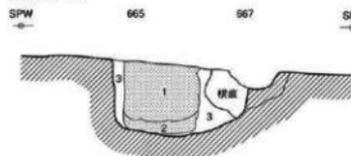


S1-63: 1324 SB-80: 1750 SB-81: 1711a・1749 SB-87: 654a  
SB-83: 1306・1312・1323・1329・1338a・1347 SB-84: 645・654b・690・662・664・666

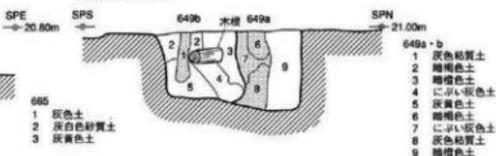


SB-84,85,86,87

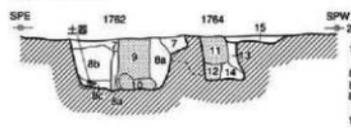
SKp-665・667



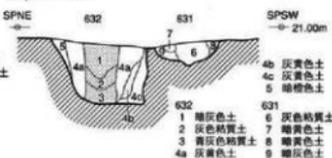
SKp-649a・649b



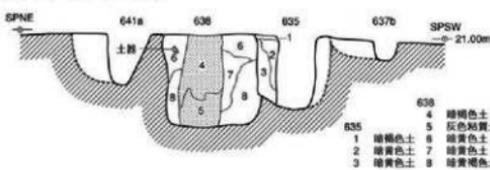
SKp-1762・1764



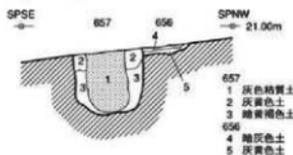
SKp-631・632



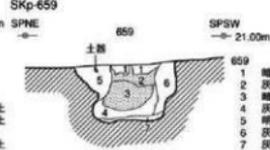
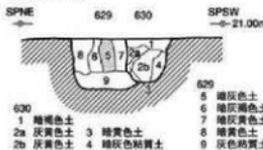
SKp-635・637b・638・641a



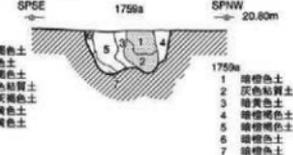
SKp-656・657



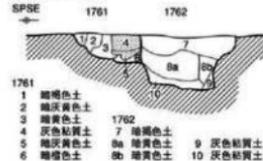
SKp-629・630



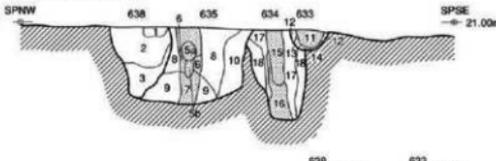
SKp-1759a



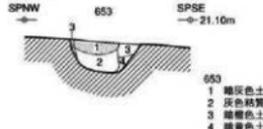
SKp-1761・1762



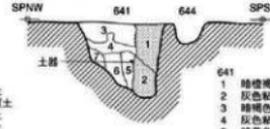
SKp-633・634・635・638



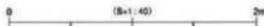
SKp-653



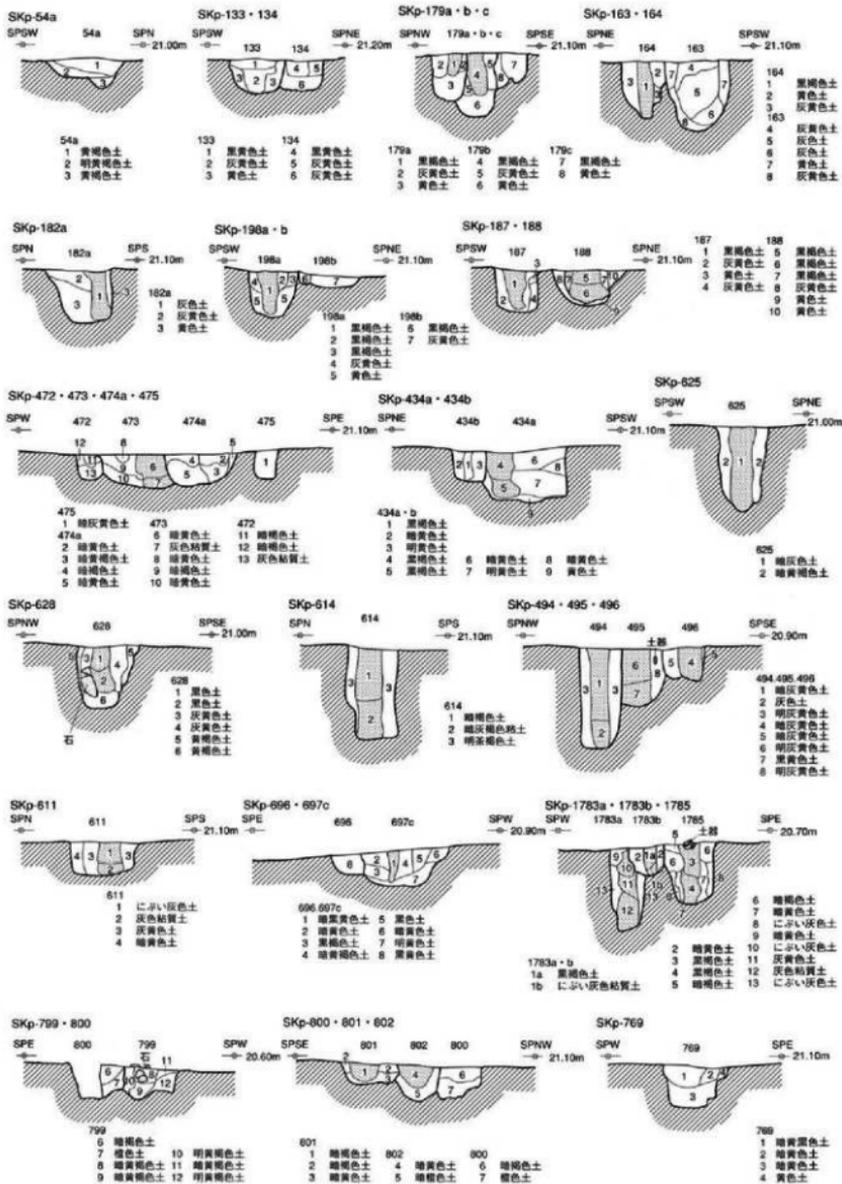
SKp-641・644



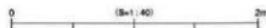
S1-21 : 644 SB-84 : 632・638・649a・665・657・1762 SB-87 : 634・641  
SB-85 : 629・635・649b・659・1759a・1761 SB-86 : 631・637b・641a・653・656

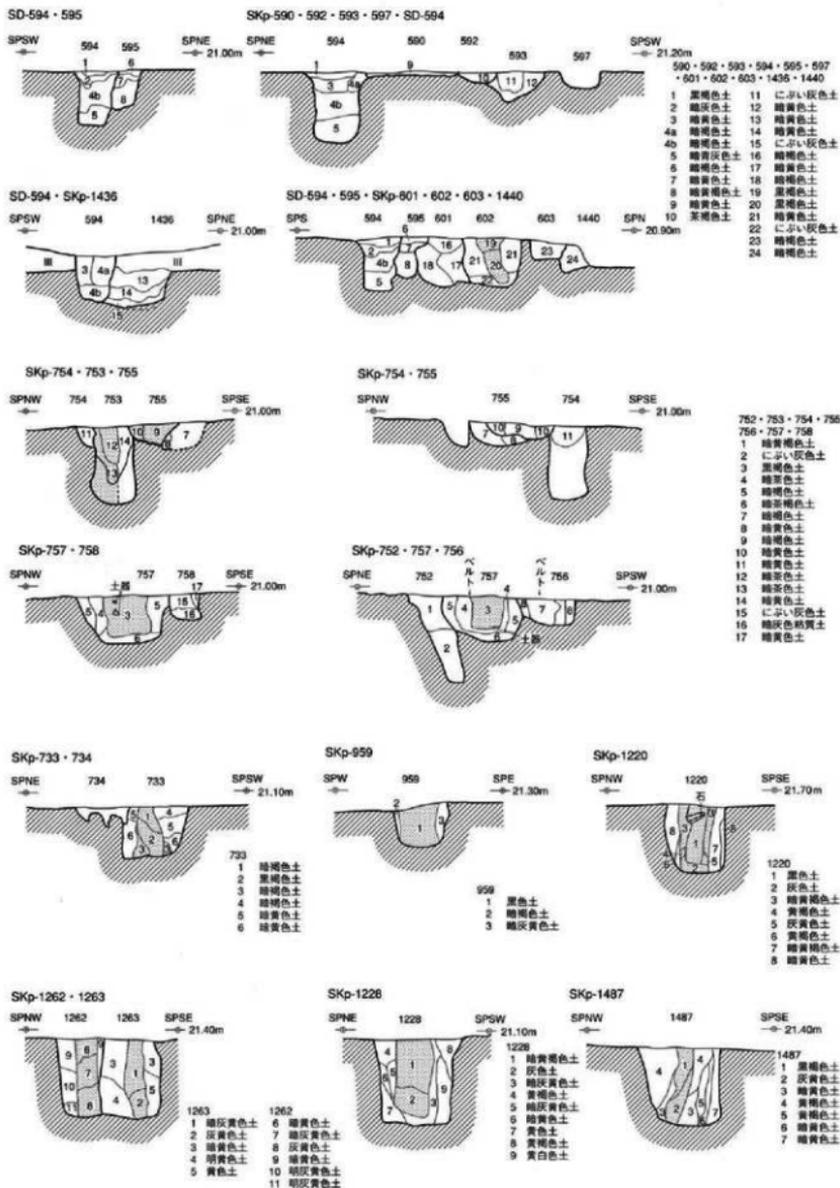


住居跡柱穴断面図 1

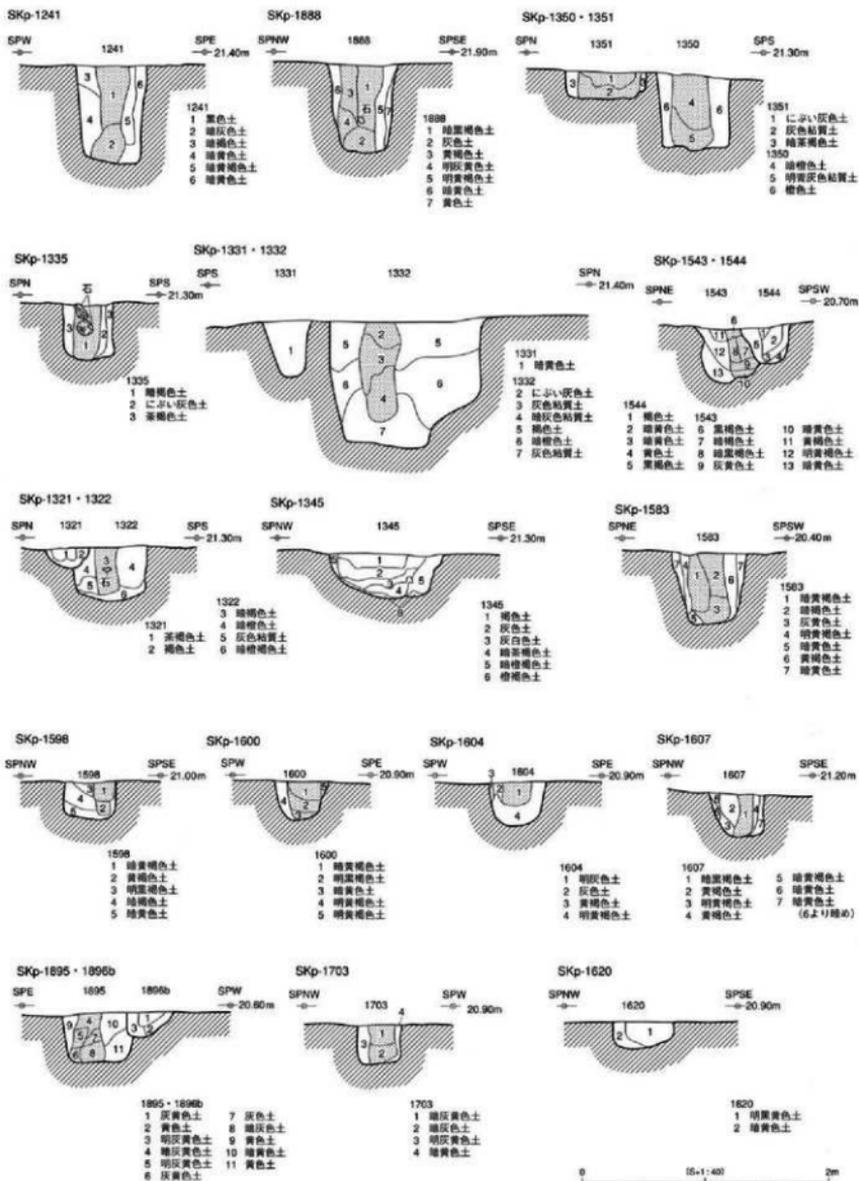


SI-1: 54a SI-3: 134 SI-4: 179a SI-5: 163 SI-7: 182a・188・198a SI-8: 179b・187  
SI-10: 475 SI-11: 434b・474a SI-19: 625・628 SI-20: 614 SI-21: 611 SI-23: 494  
SI-26: 495 SI-28: 697c SI-29: 1783a SI-31: 799・801 SI-32: 769・802

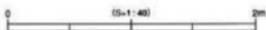
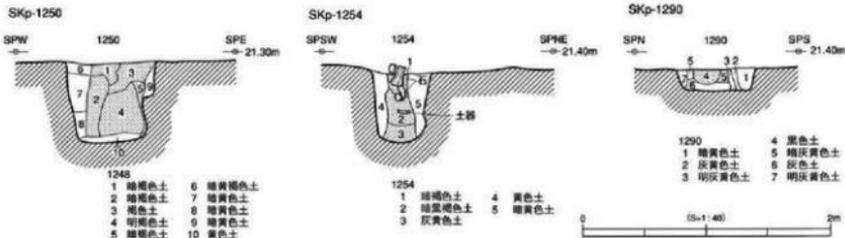
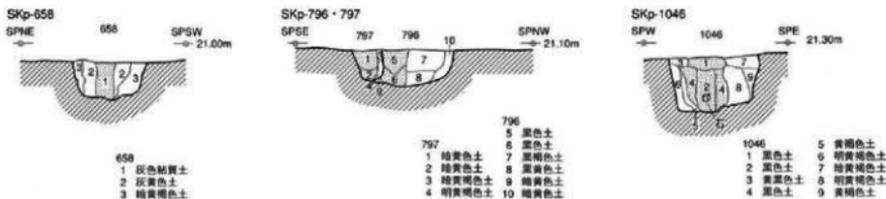
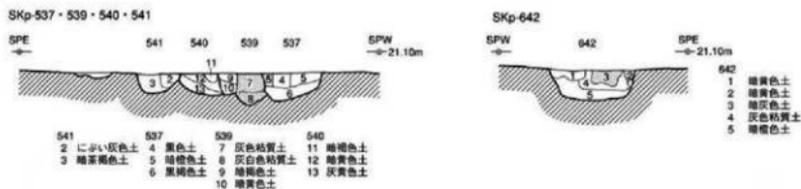
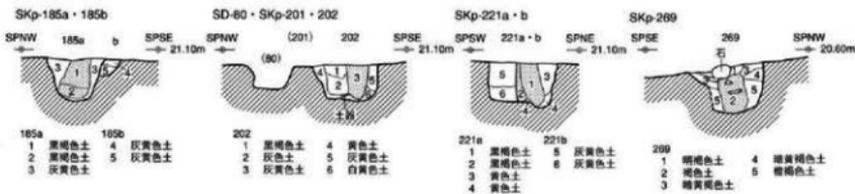
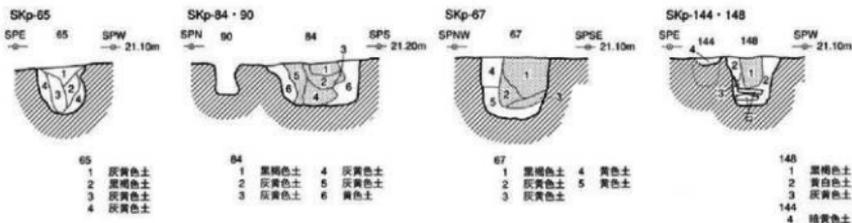


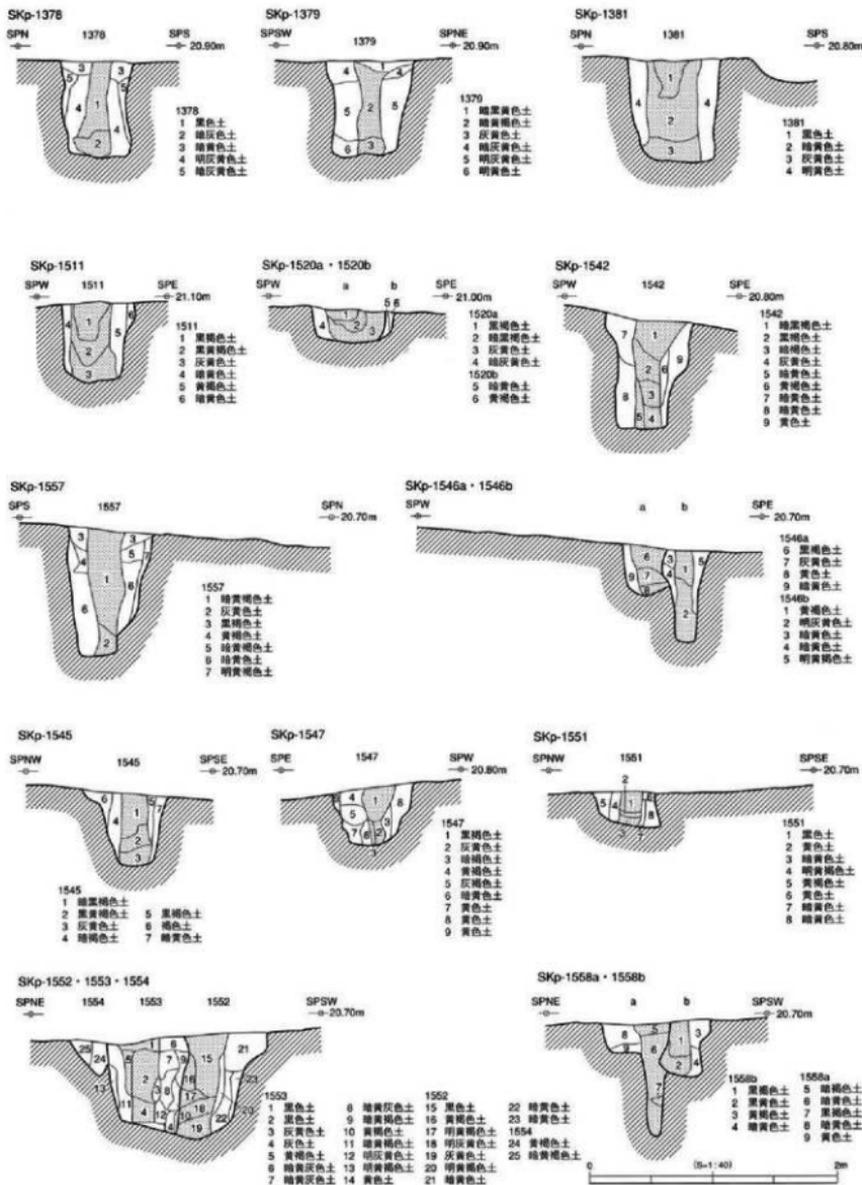


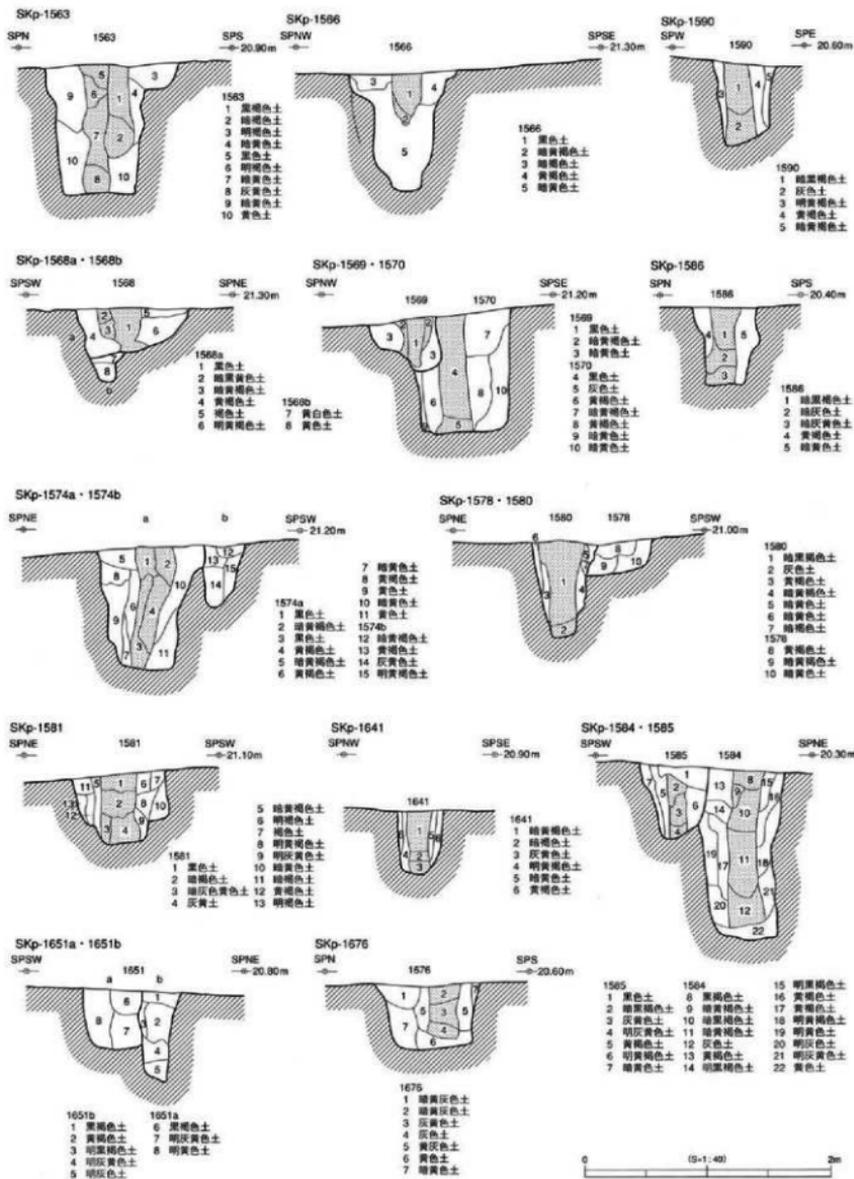
住居跡柱穴断面図 3



SI-60: 1241・1888 SI-64: 1350 SI-85: 1322・1332・1335・1345・1351 SI-66: 1543  
SI-67: 1583 SI-68: 1598・1600・1604・1607 SI-70: 1896b SI-72: 1620・1703

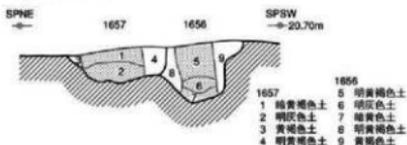




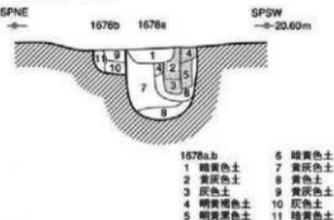


柱穴断面图 4

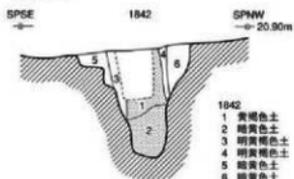
SKp-1656 · 1657



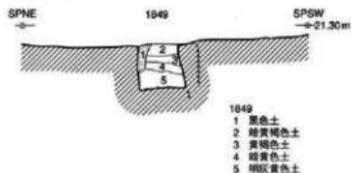
SKp-1678a · 1678b



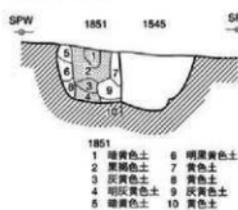
SKp-1842



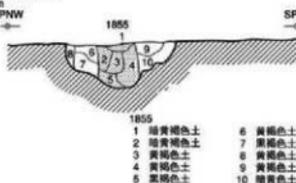
SKp-1849



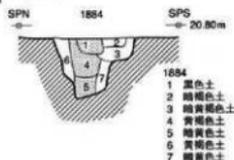
SKp-1851 · 1854



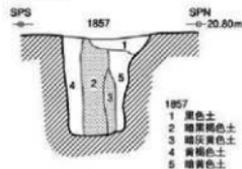
SKp-1855



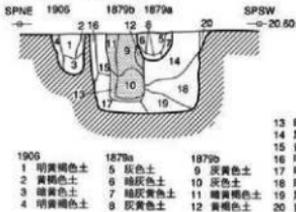
SKp-1884



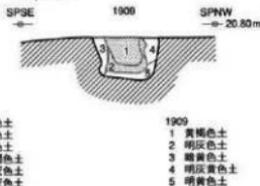
SKp-1857



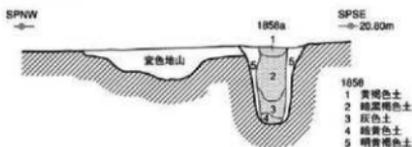
SKp-1879a · 1879b · 1906



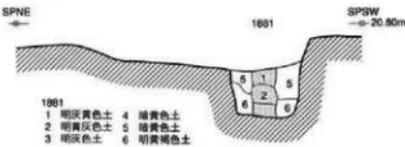
SKp-1909



SKp-1858a

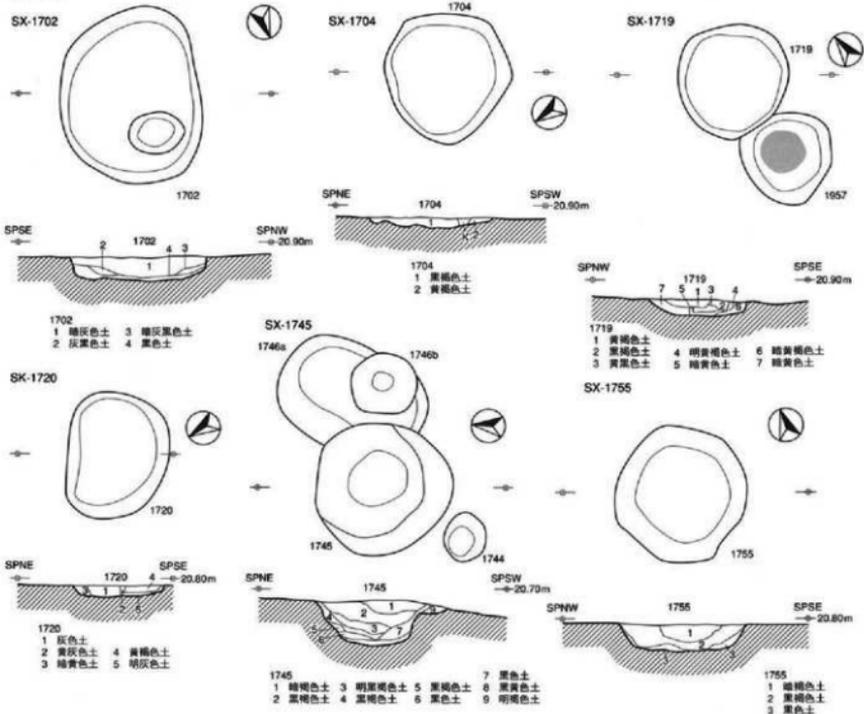


SKp-1861

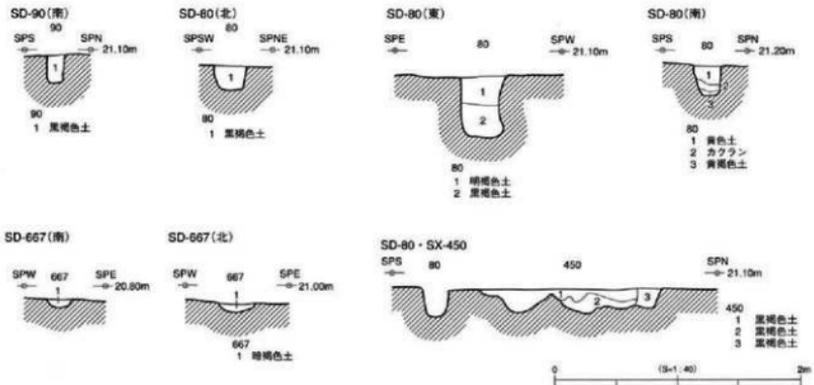


0 (5:1) 40 2m

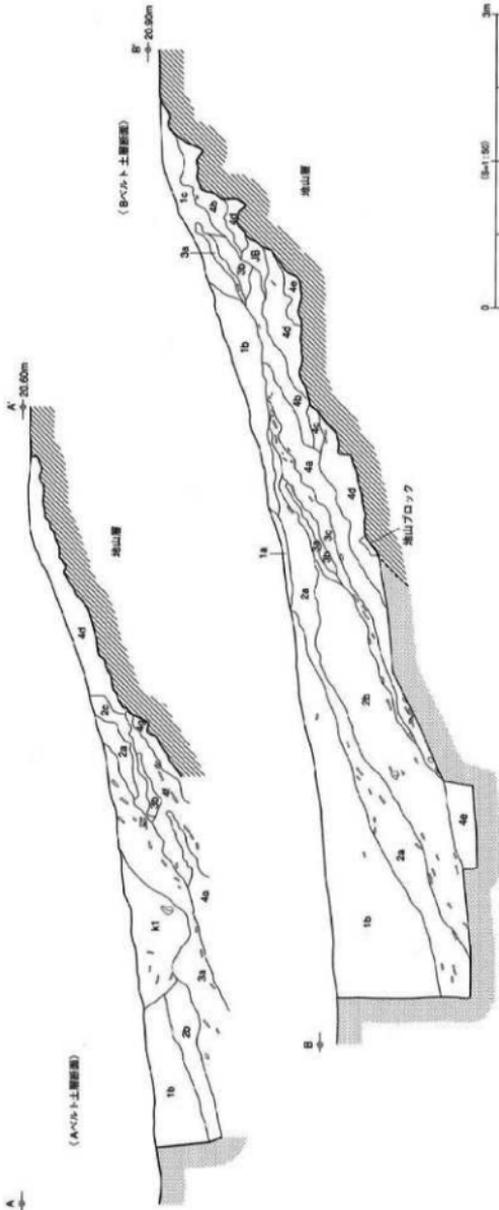
焼土坑



溝跡





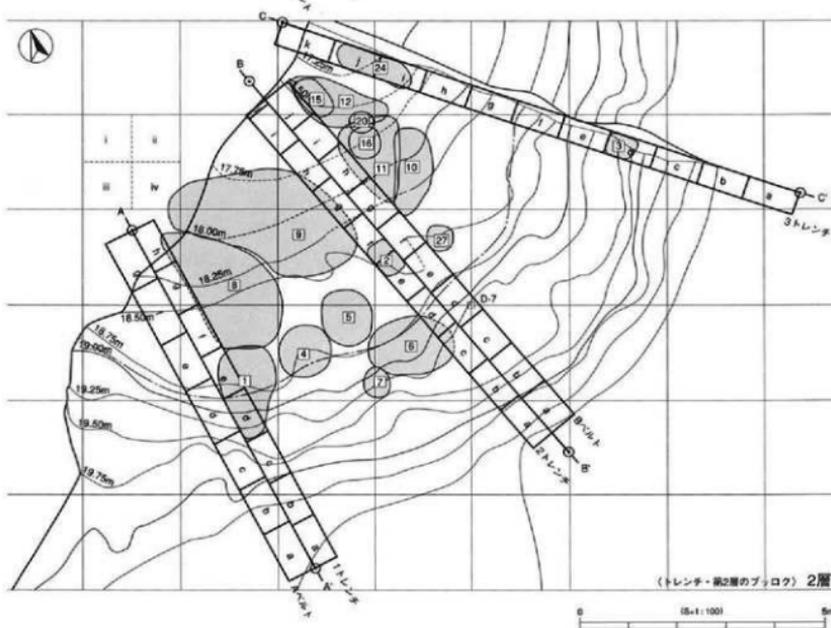
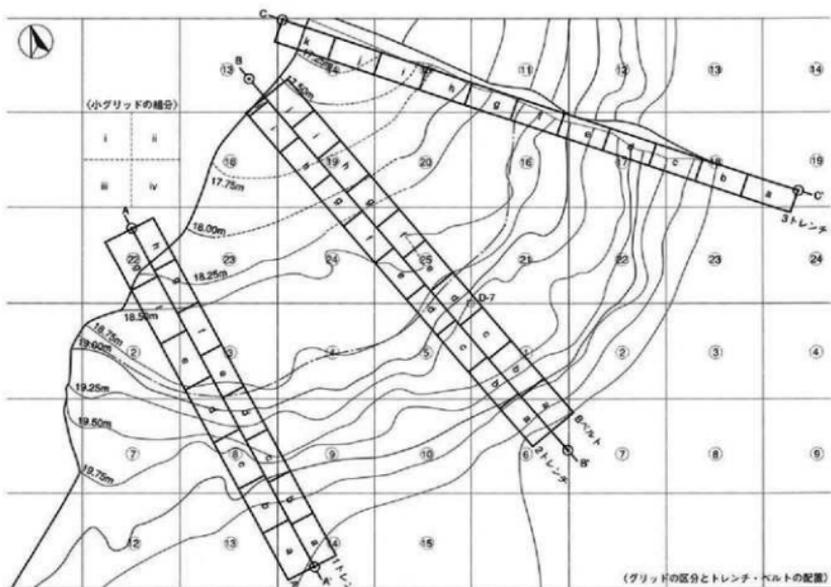


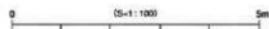
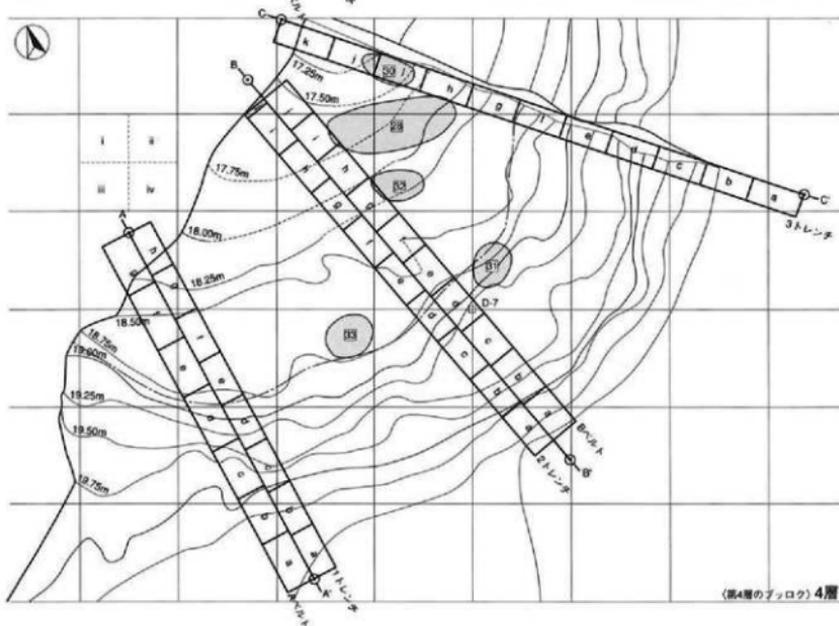
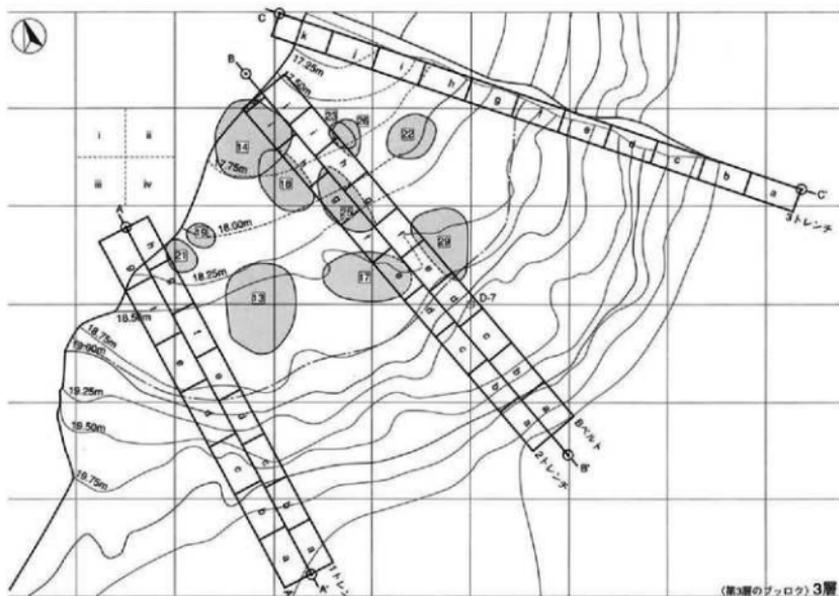
A・B・Cバクト工法

- 第1層 第2層 第3層 第4層 第5層 第6層 第7層 第8層 第9層 第10層 第11層 第12層 第13層 第14層 第15層 第16層 第17層 第18層 第19層 第20層 第21層 第22層 第23層 第24層 第25層 第26層 第27層 第28層 第29層 第30層 第31層 第32層 第33層 第34層 第35層 第36層 第37層 第38層 第39層 第40層 第41層 第42層 第43層 第44層 第45層 第46層 第47層 第48層 第49層 第50層 第51層 第52層 第53層 第54層 第55層 第56層 第57層 第58層 第59層 第60層 第61層 第62層 第63層 第64層 第65層 第66層 第67層 第68層 第69層 第70層 第71層 第72層 第73層 第74層 第75層 第76層 第77層 第78層 第79層 第80層 第81層 第82層 第83層 第84層 第85層 第86層 第87層 第88層 第89層 第90層 第91層 第92層 第93層 第94層 第95層 第96層 第97層 第98層 第99層 第100層

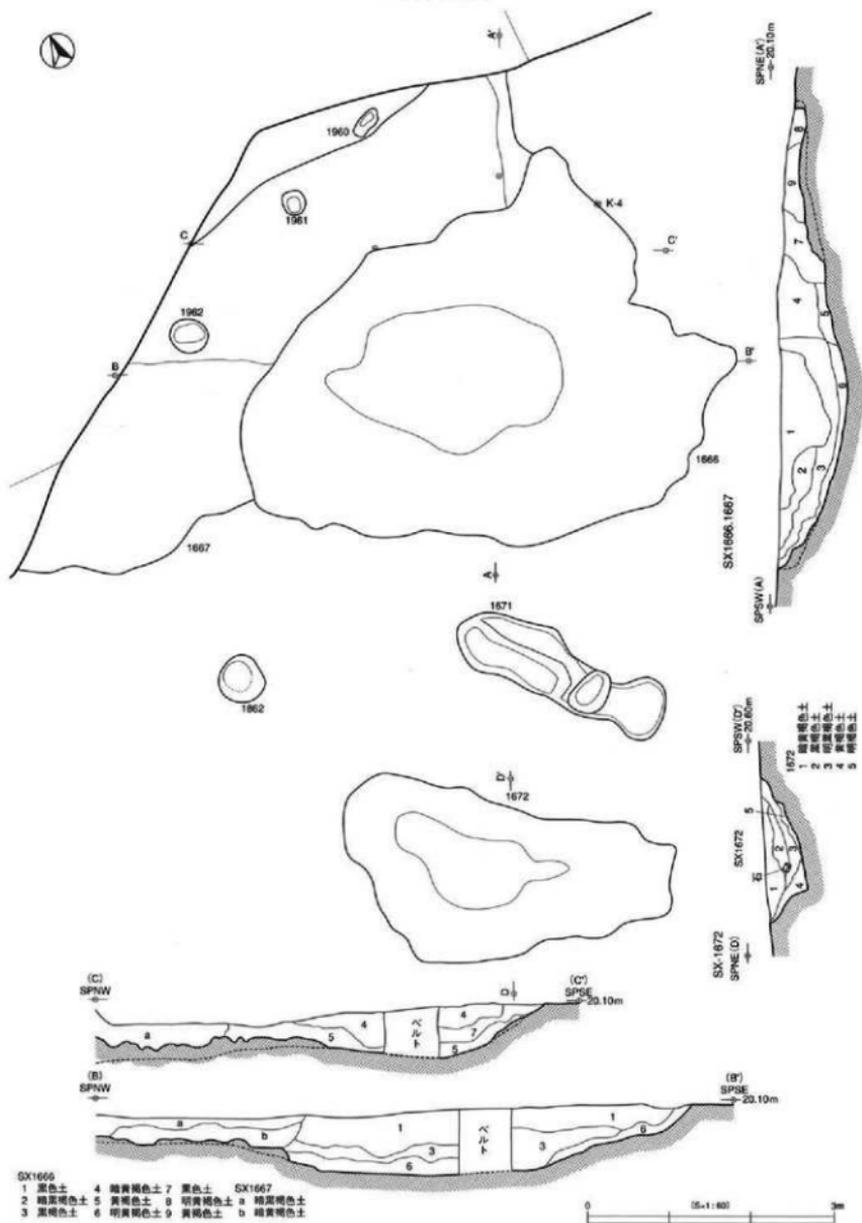
第1層 第2層 第3層 第4層 第5層 第6層 第7層 第8層 第9層 第10層 第11層 第12層 第13層 第14層 第15層 第16層 第17層 第18層 第19層 第20層 第21層 第22層 第23層 第24層 第25層 第26層 第27層 第28層 第29層 第30層 第31層 第32層 第33層 第34層 第35層 第36層 第37層 第38層 第39層 第40層 第41層 第42層 第43層 第44層 第45層 第46層 第47層 第48層 第49層 第50層 第51層 第52層 第53層 第54層 第55層 第56層 第57層 第58層 第59層 第60層 第61層 第62層 第63層 第64層 第65層 第66層 第67層 第68層 第69層 第70層 第71層 第72層 第73層 第74層 第75層 第76層 第77層 第78層 第79層 第80層 第81層 第82層 第83層 第84層 第85層 第86層 第87層 第88層 第89層 第90層 第91層 第92層 第93層 第94層 第95層 第96層 第97層 第98層 第99層 第100層

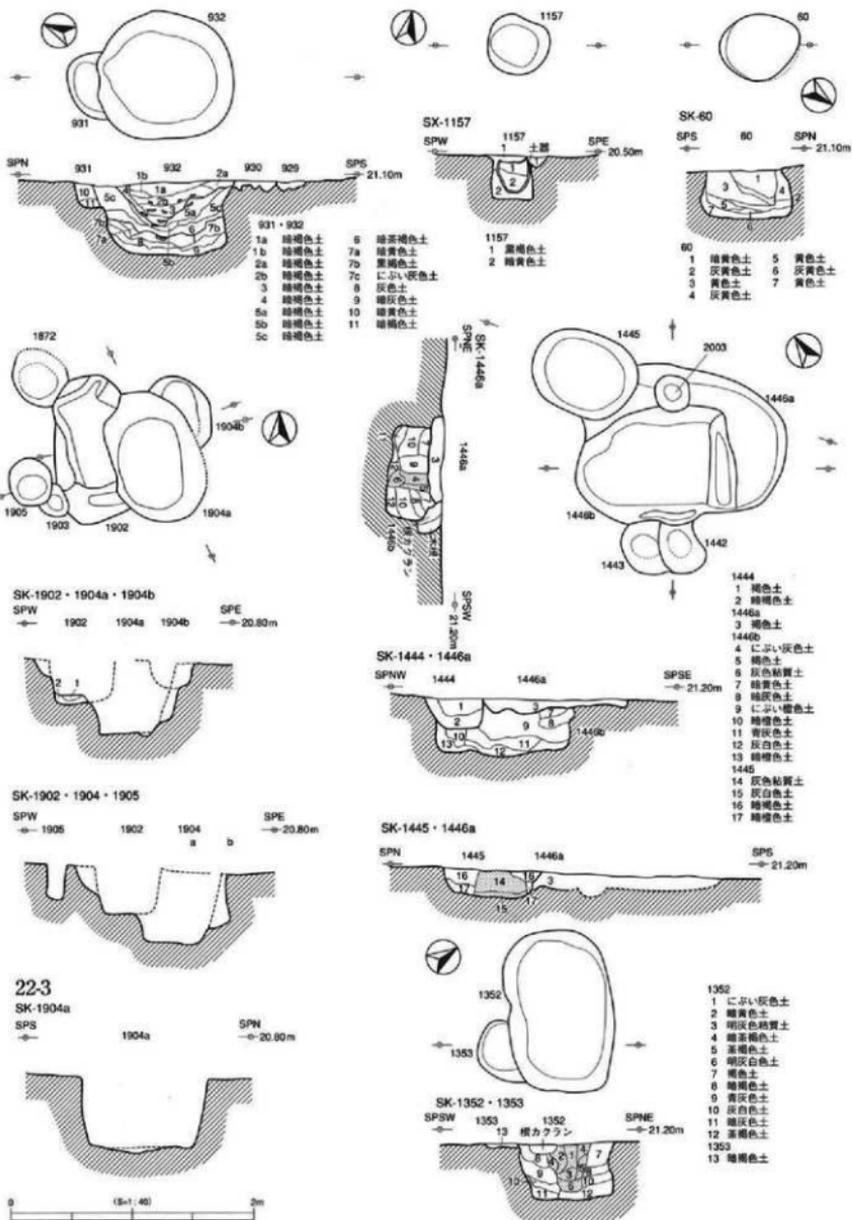




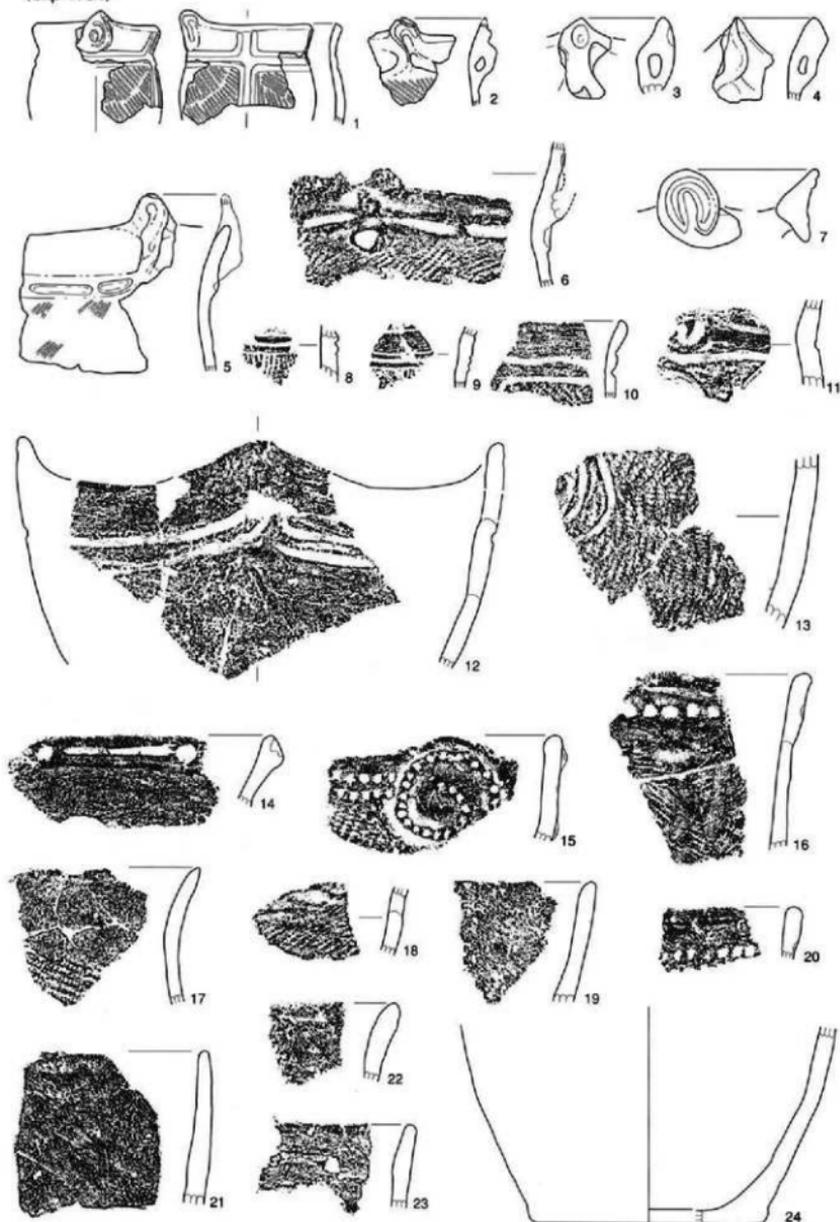


風倒木個別図

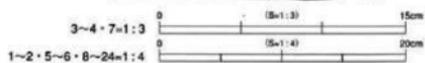




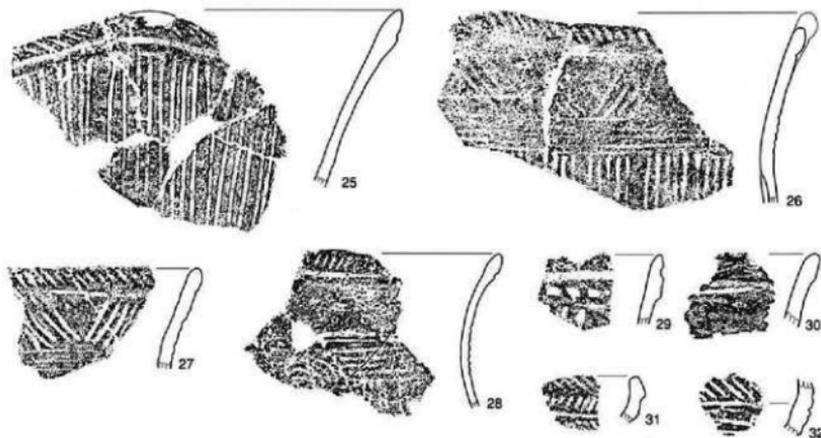
(Skp-1734)



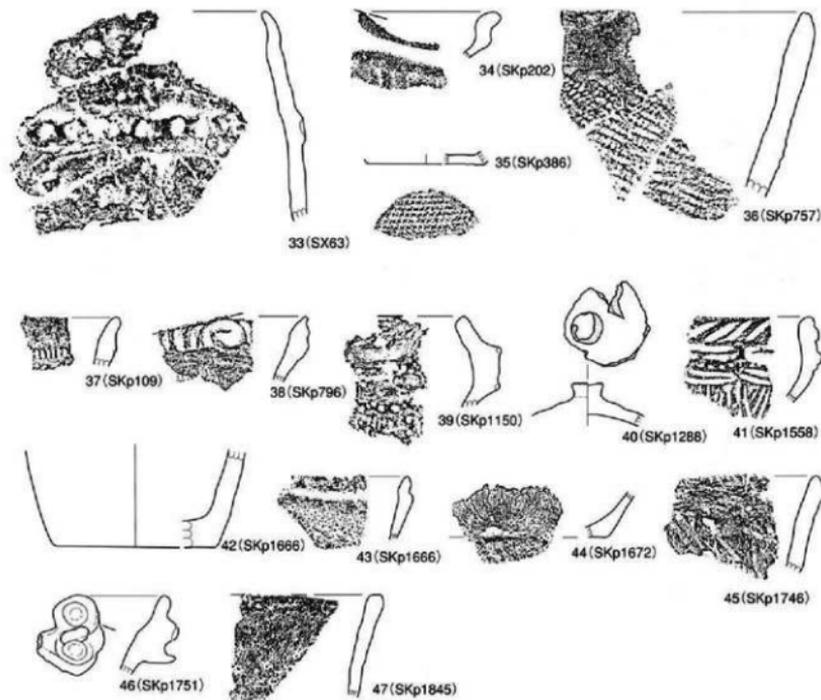
SKP-1734 : 1~24



(SK-932)



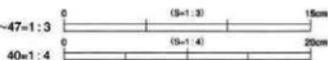
(柱穴・ピット出土土器①)



SK-932: 25~32

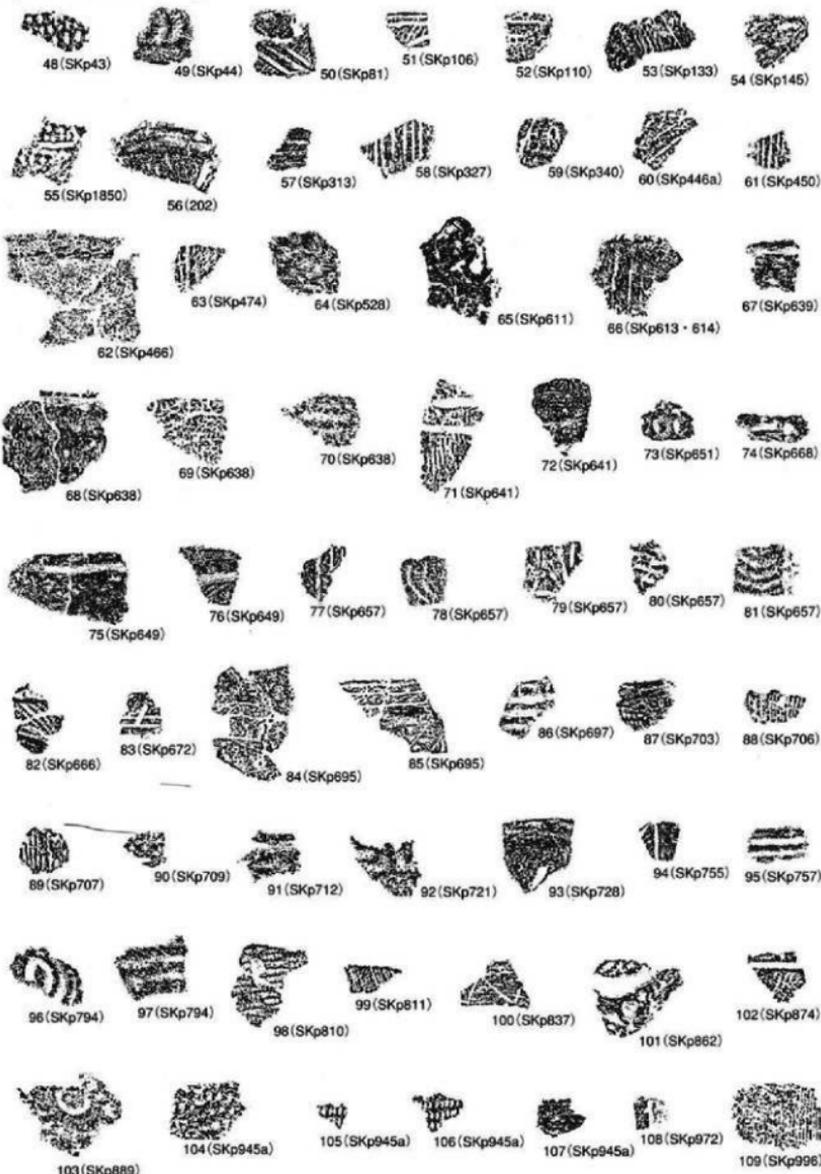
柱穴・ピット: 33~47 ( ) 内は遺構番号

25~39・41~47=1:3



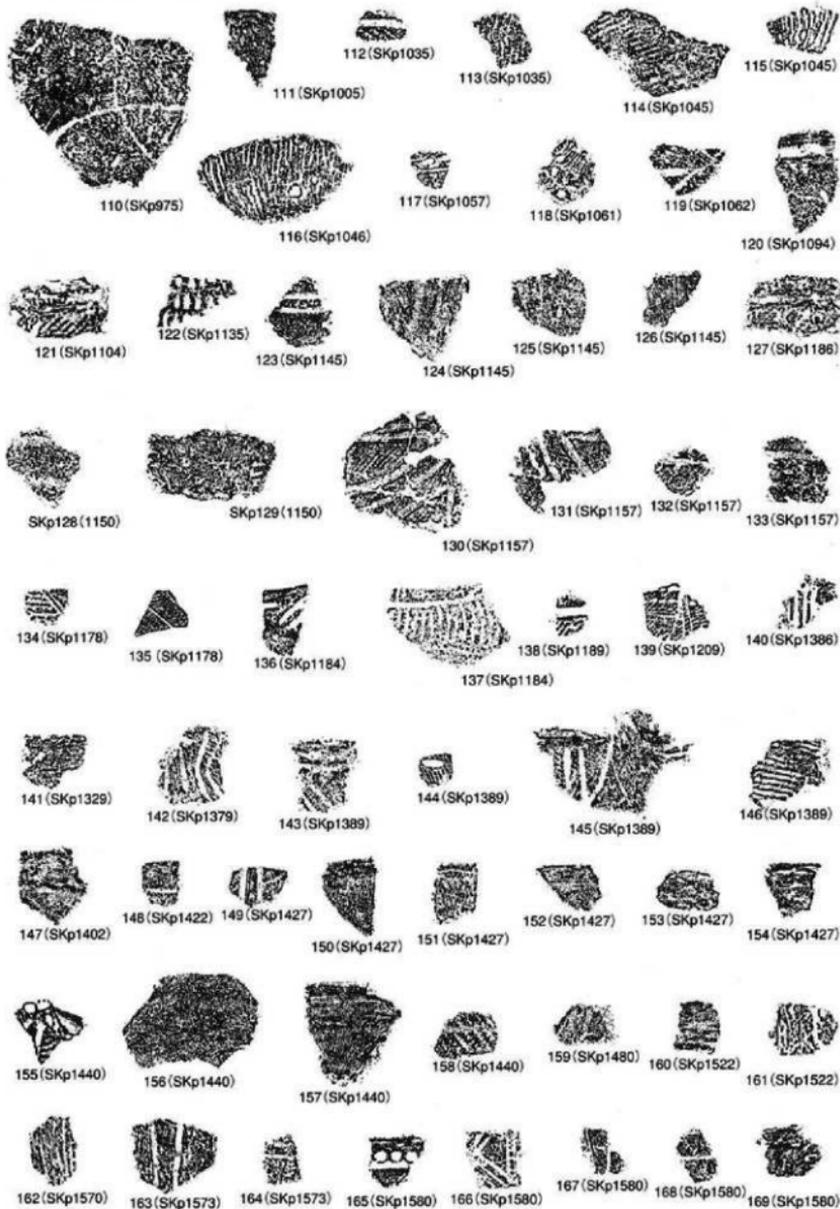
40=1:4

(柱穴・ピット出土土器②)



縄文土器 遺構 4

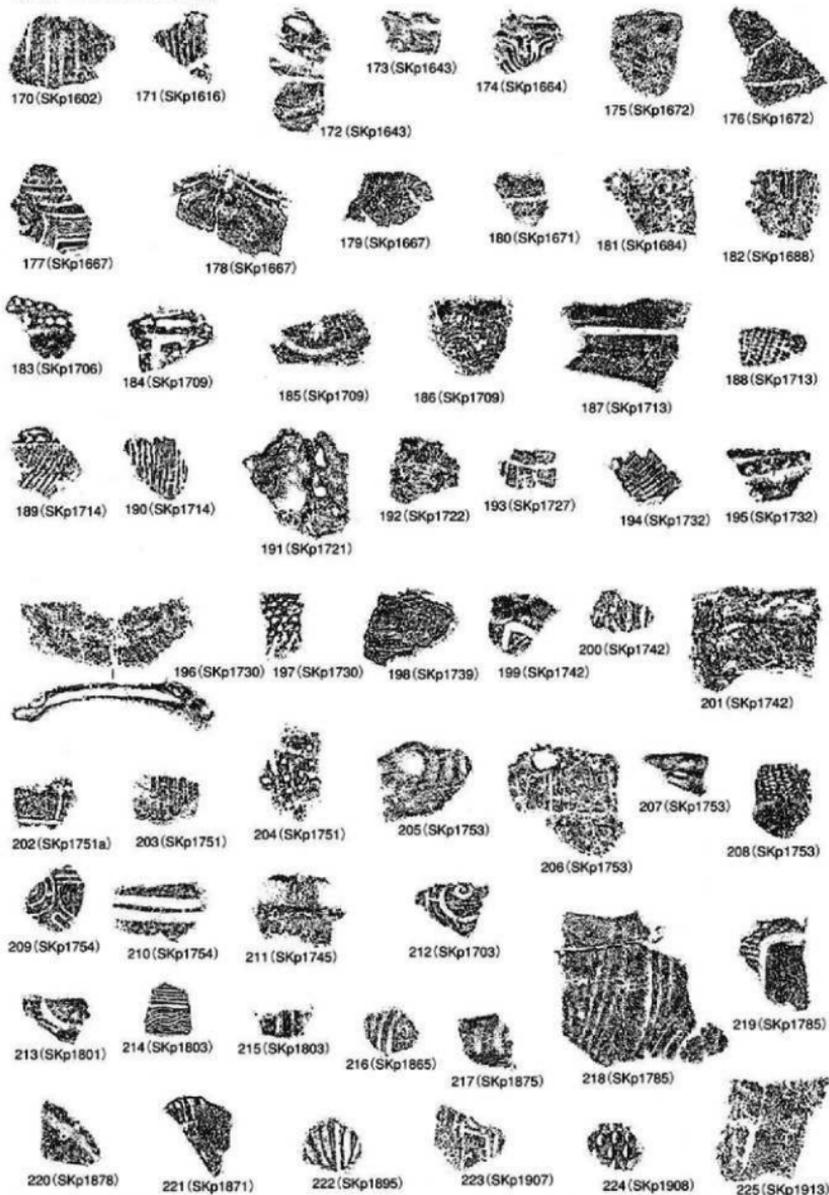
〈柱穴・ピット出土土器③〉



110~169 : ( ) 内は遺構番号

110~169=1:3 15cm

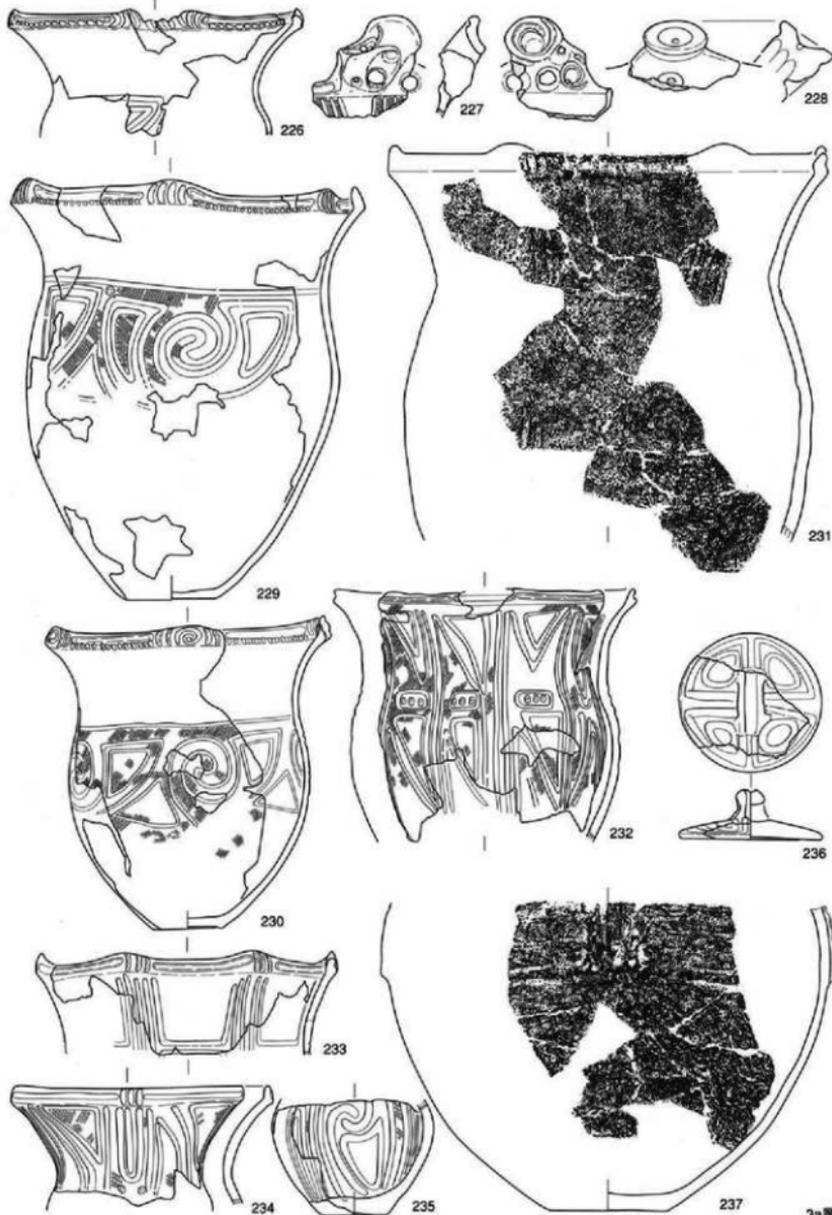
(柱穴・ピット出土土器④)



170~225 : ( ) 内は遺構番号

0 15cm (5:1=3)

(Aベルト①)



3a層 : 226~237

0 15cm (5=1:3)

0 20cm (5=1:4)

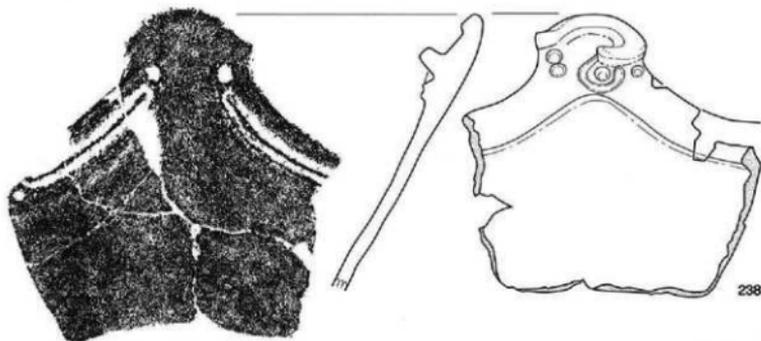
227・231~232・234~237=1:4

226・229~230・233=1:6

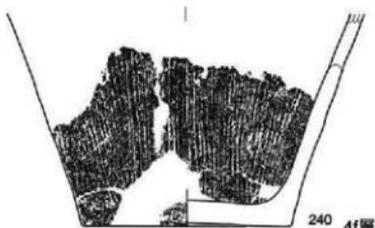
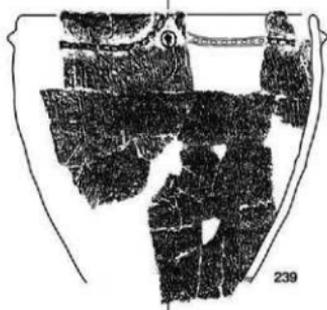
0 30cm (5=1:6)

3a層

〈Aベルト②〉



3a層

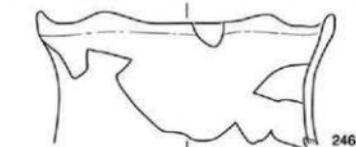


4f層

〈Bベルト①〉



2a層



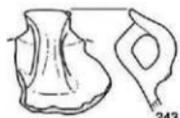
246



243



244



245



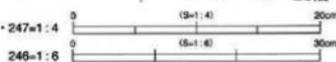
247

2b層

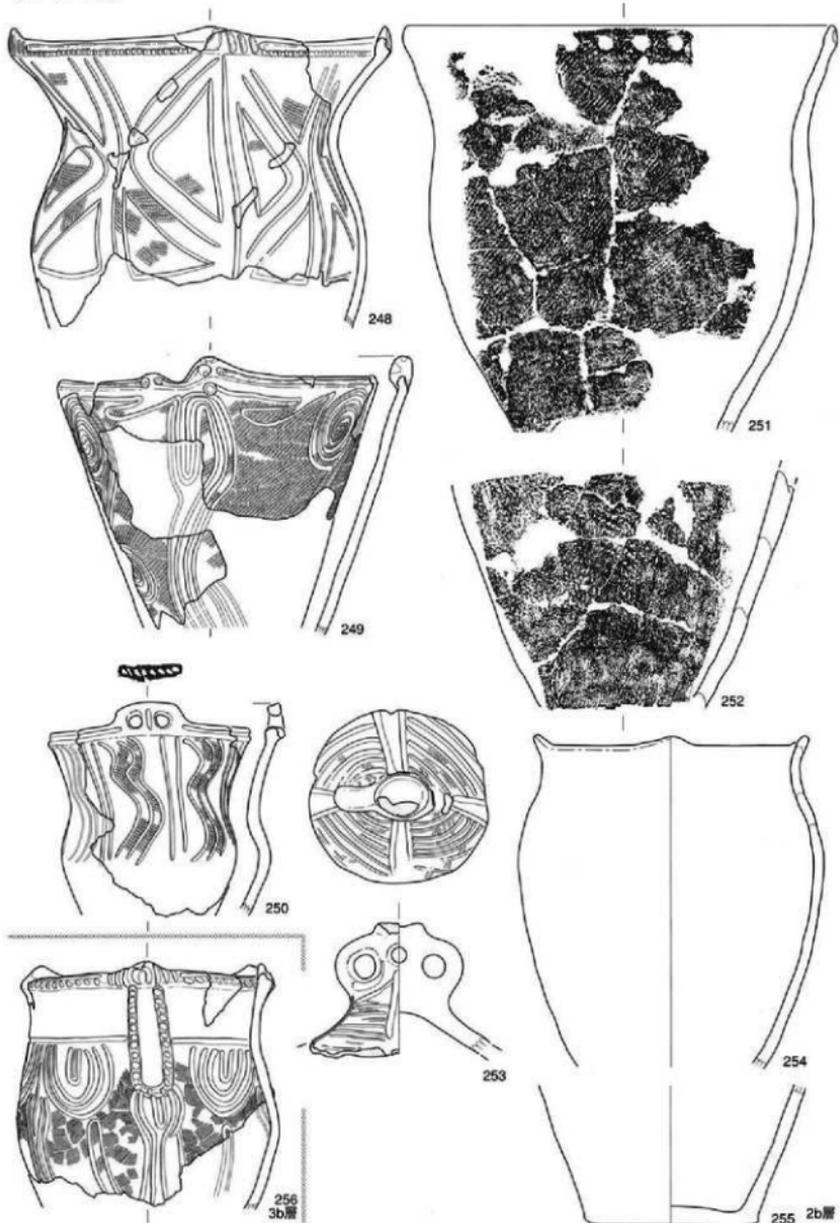
Aベルト 3a層：238  
4f層：239~240

Bベルト 2a層：241  
2b層：242~247

238~245・247=1:4



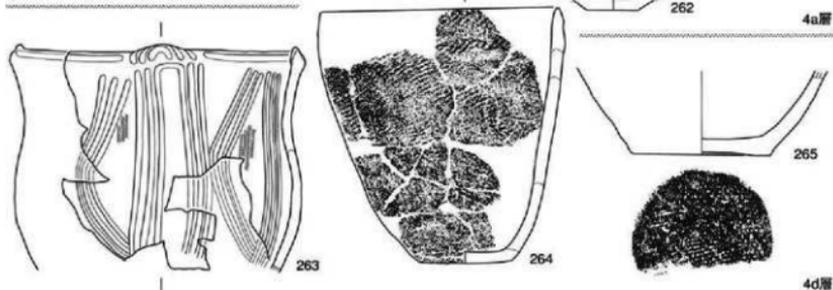
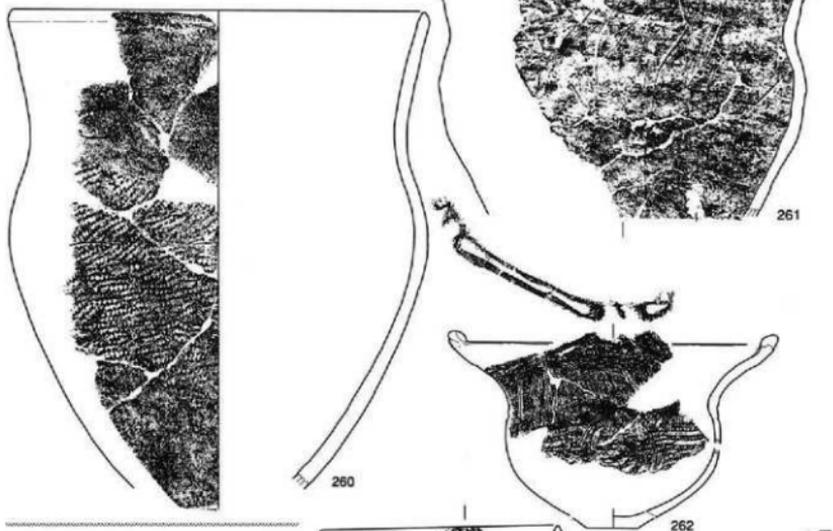
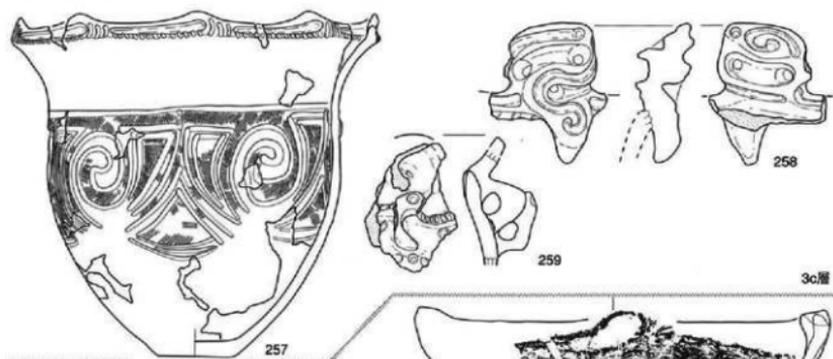
〈Bベルト②〉



2b層 : 248~255  
3b層 : 256

0 (S=1:3) 15cm  
0 (S=1:4) 20cm  
248~252・254~256=1:4

〈Bベルト③〉



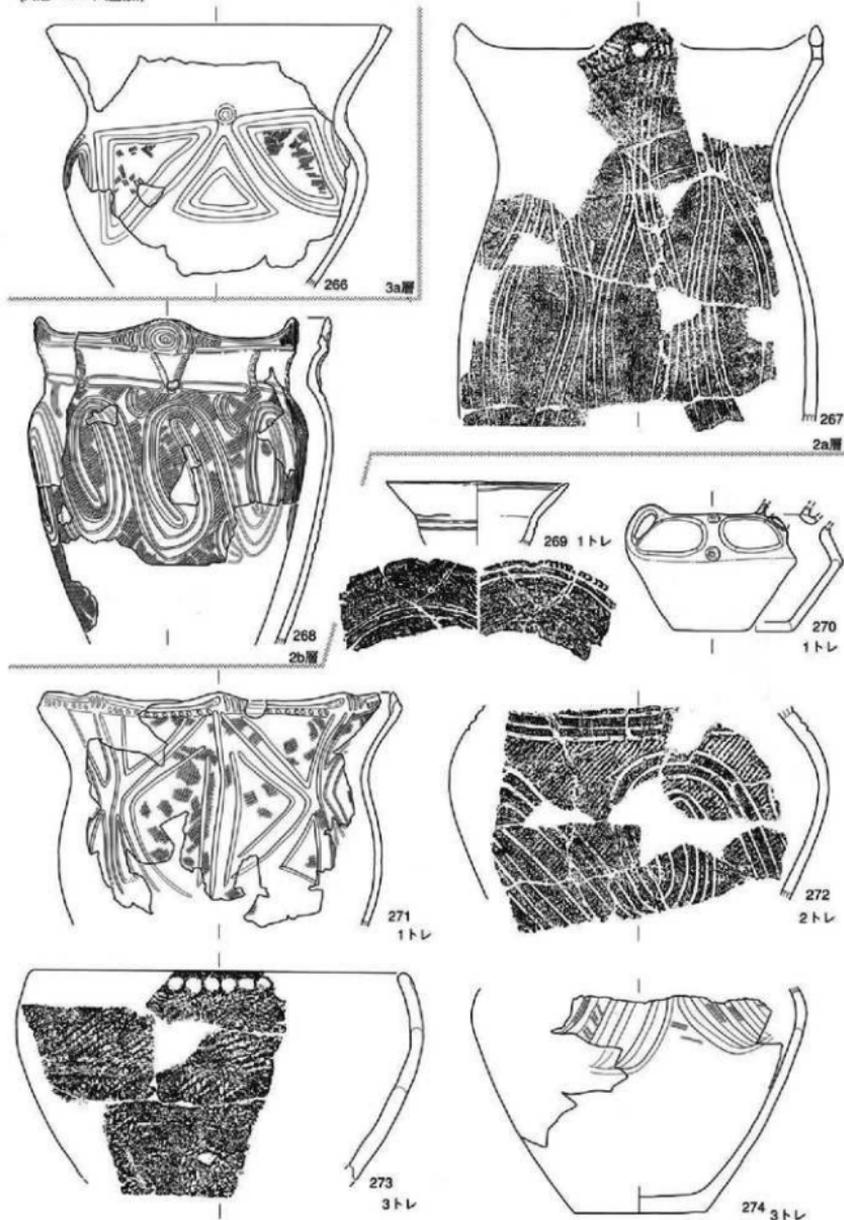
3c層 : 257~259  
4a層 : 260~262  
4d層 : 263~265

257-1 : 8 (S=1:8) 40cm

258-1 : 3 (S=1:3) 15cm  
259-1 : 4 (S=1:4) 20cm

258~265=1 : 4

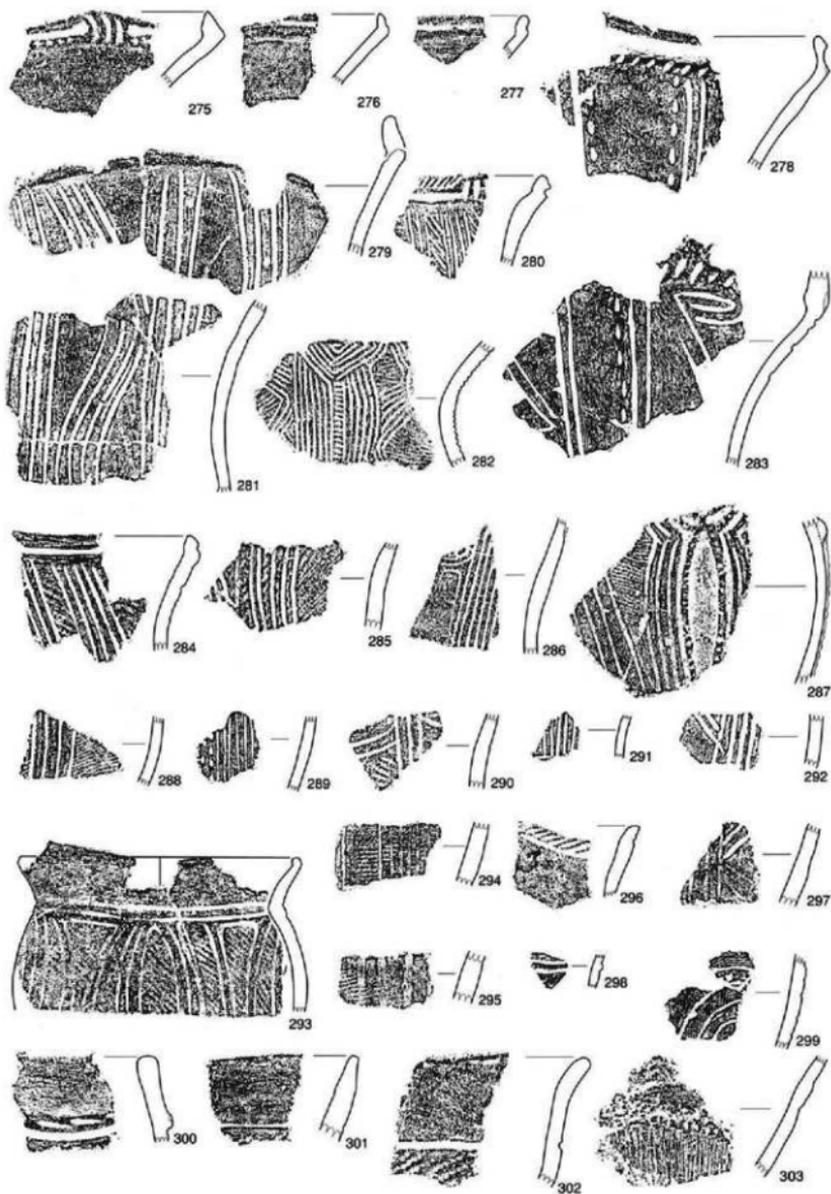
〈A,Bベルト追加〉



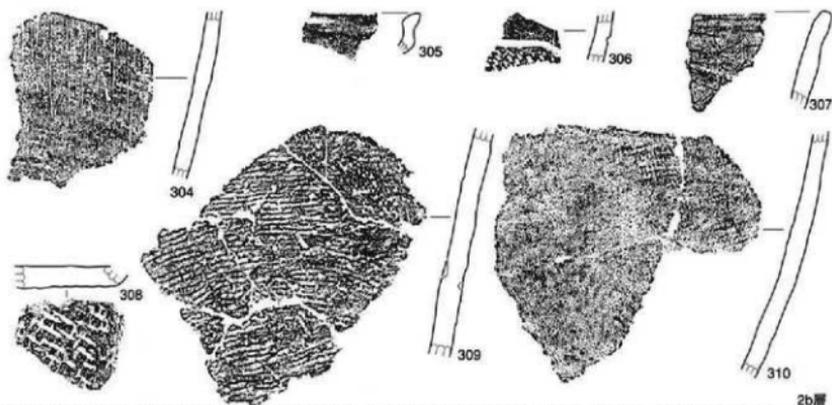
Bベルト2a層: 267 1トレ: 269~271  
 Bベルト2b層: 268 2トレ: 272  
 Aベルト3a層: 266 3トレ: 273~274

266~267・269~274=1:4  
 268=1:6  
 0 (S=1:4) 20cm  
 0 (S=1:6) 30cm

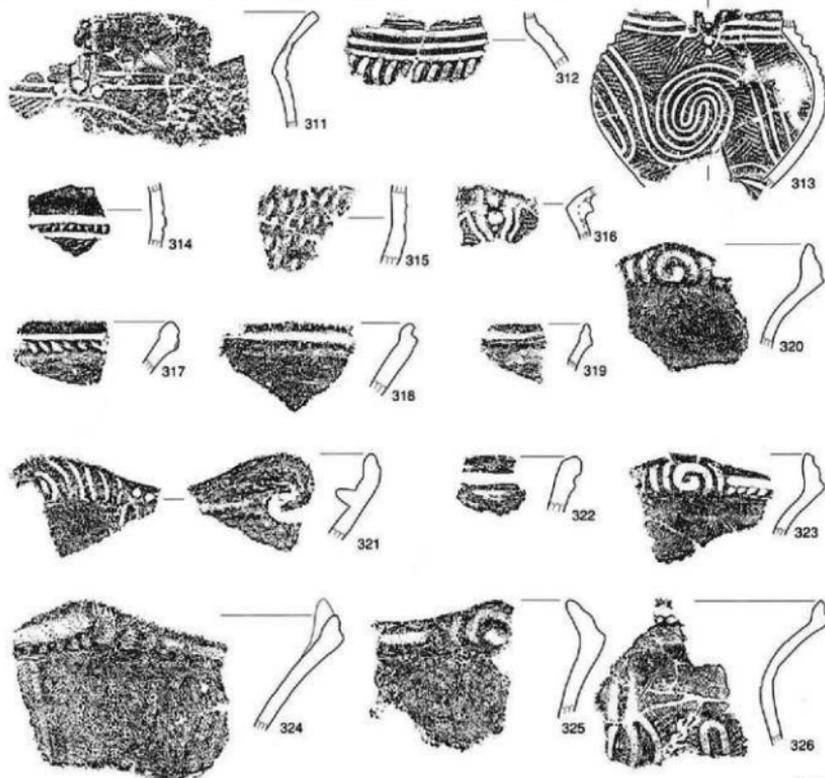
(Aベルト③)



(Aベルト④)



2b層

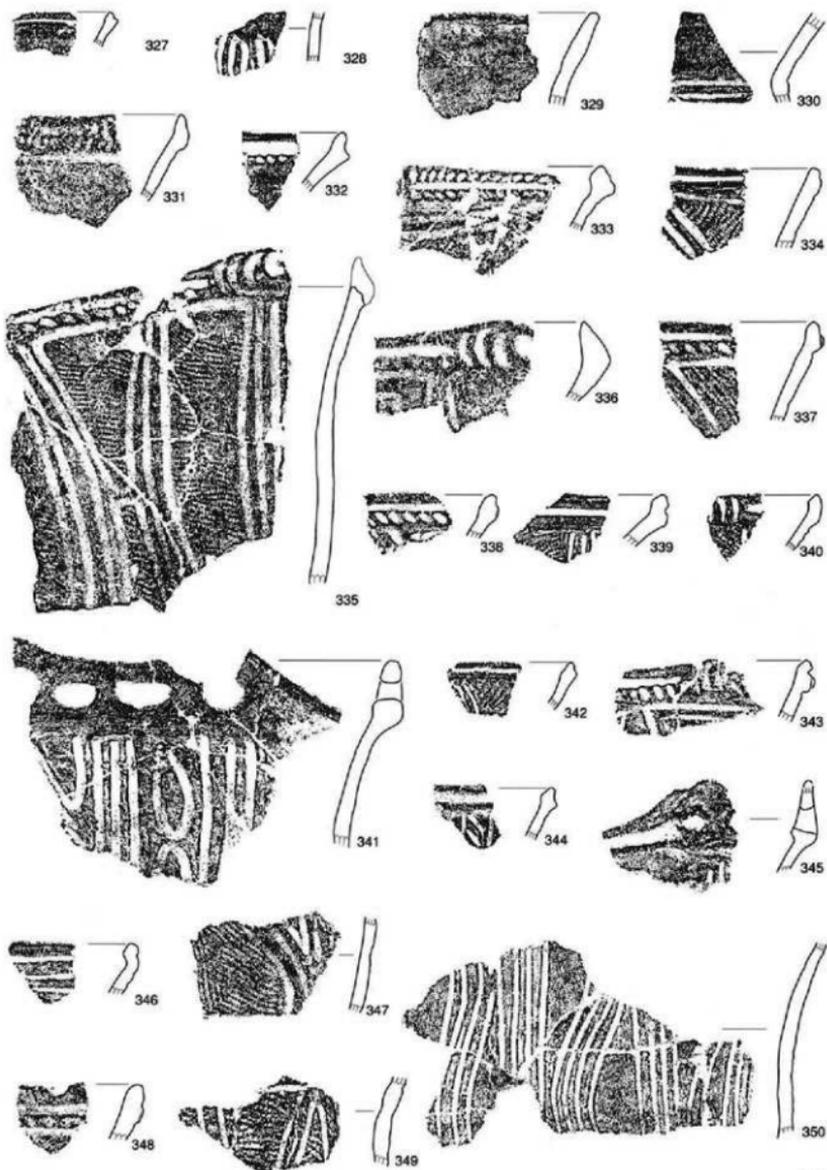


3a層

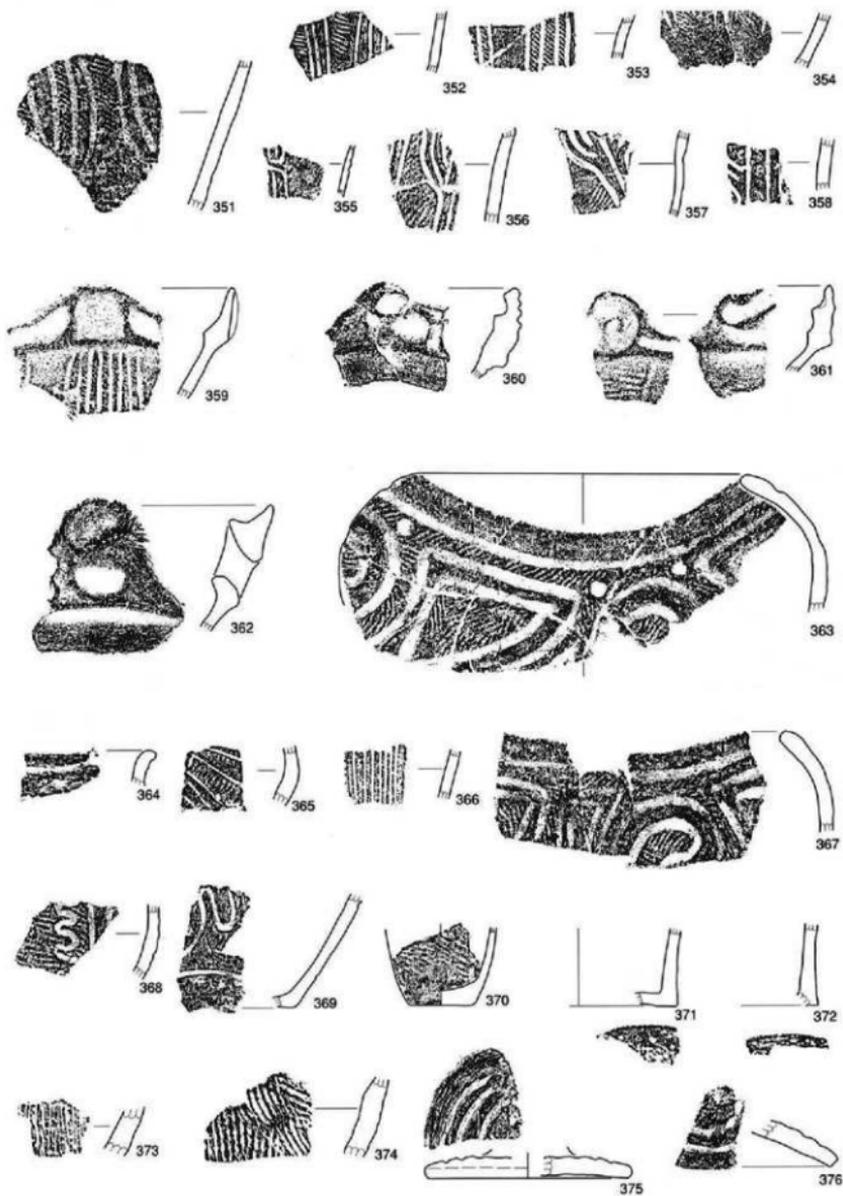
2b層 : 304~310  
3a層 : 311~326

0 (9=1:3) 15cm  
304~326=1:3

〈Aベルト⑤〉



(Aベルト⑥)

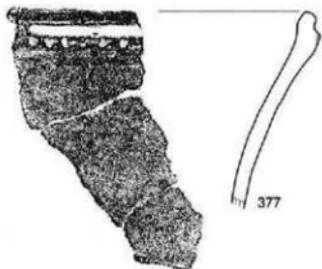


3a層 : 351~376

0 (5=1:3) 15cm  
351~376=1:3

3a層

〈Aベルト⑦〉



377

2a層



378



379



380

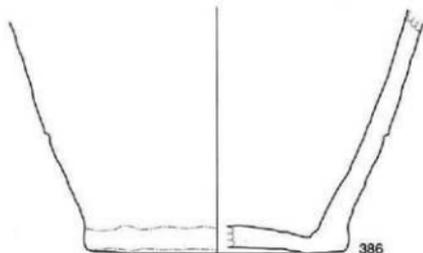


381

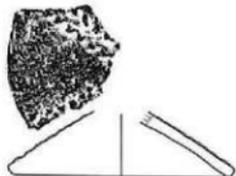
2c層



382



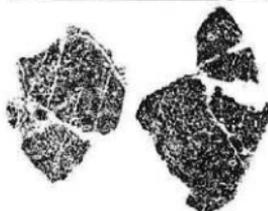
386



383



384



4f層



385

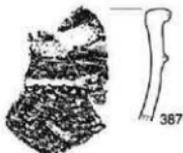
4a層



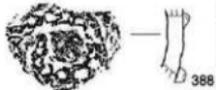
389



390



387



388

4f層



391

4g層

2a層 : 377  
2c層 : 378~381

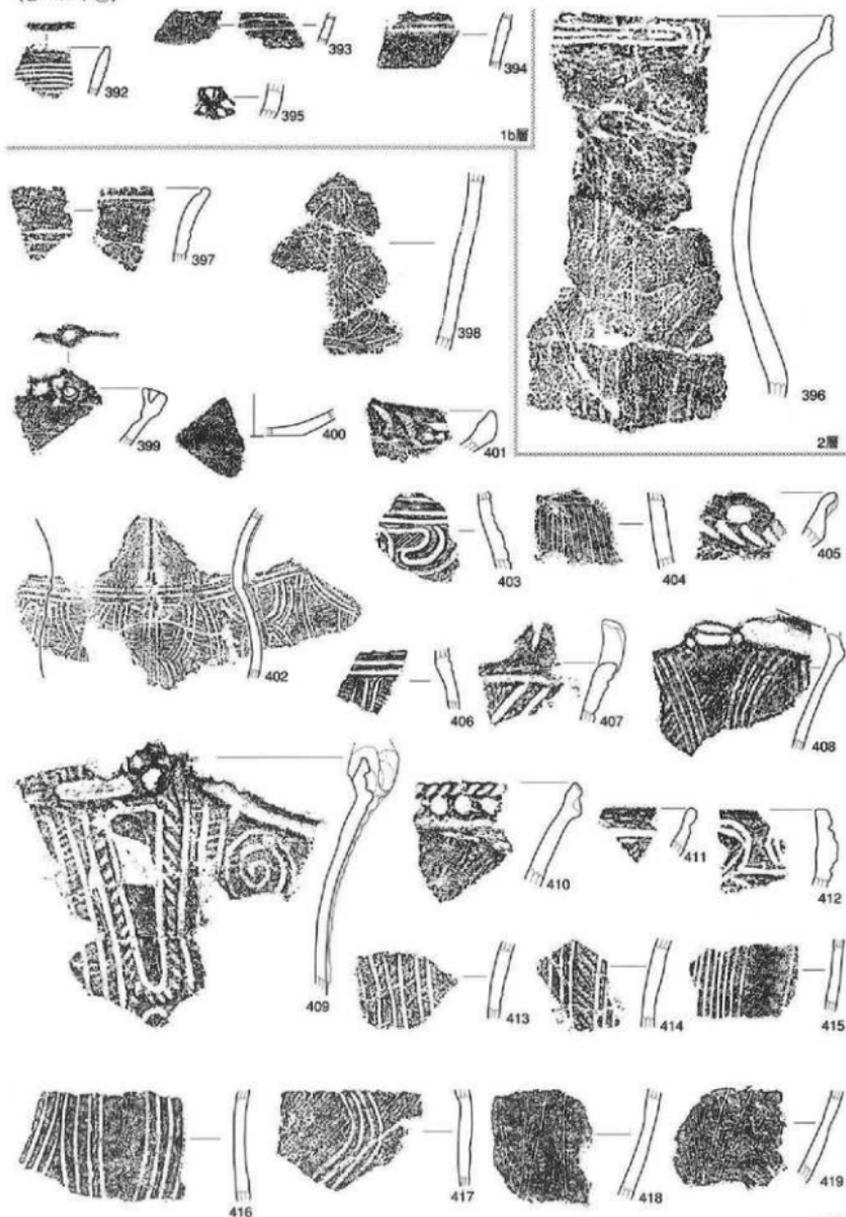
4a層 : 382~385  
4f層 : 386~388

4g層 : 389~391

377~391=1:3



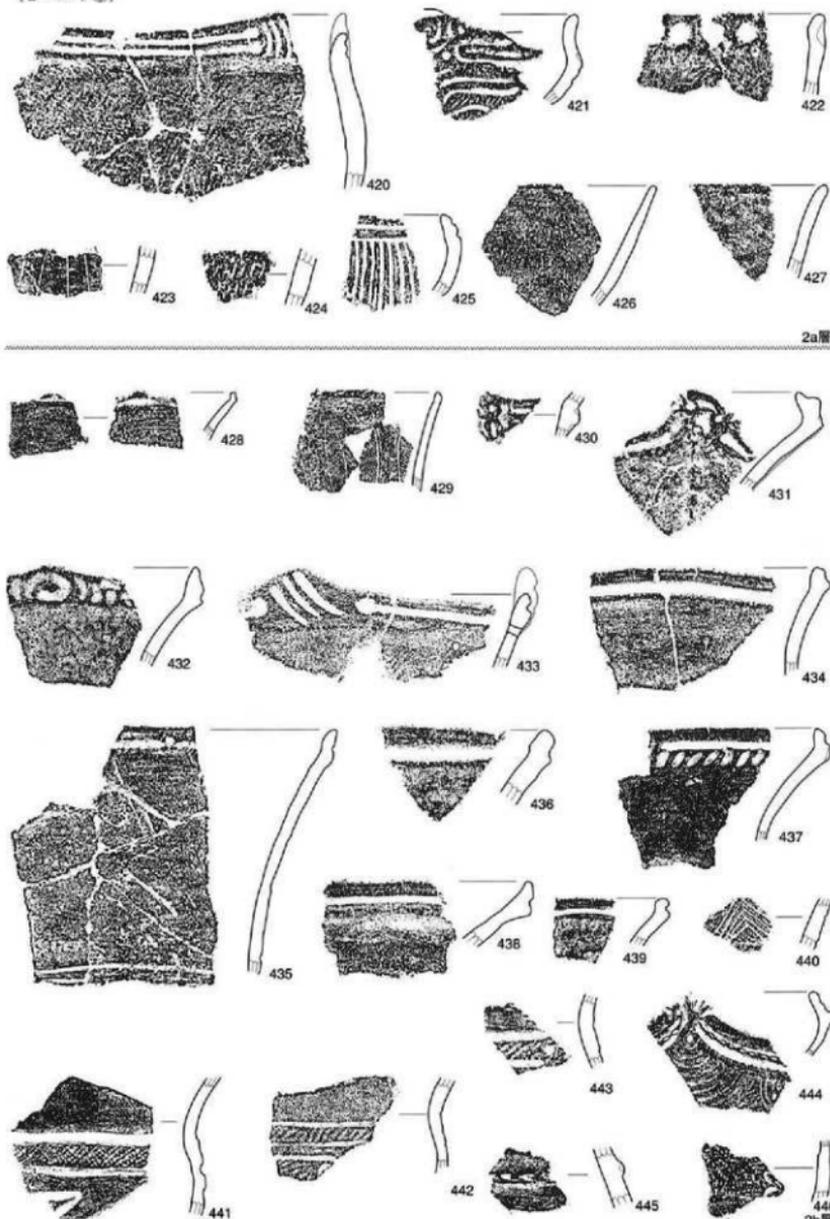
〈Bベルト④〉



1b層 : 392~395    2a層 : 397~419  
 2層 : 396

0 15cm (5=1:3)  
 392~419=1:3

(Bベルト⑤)



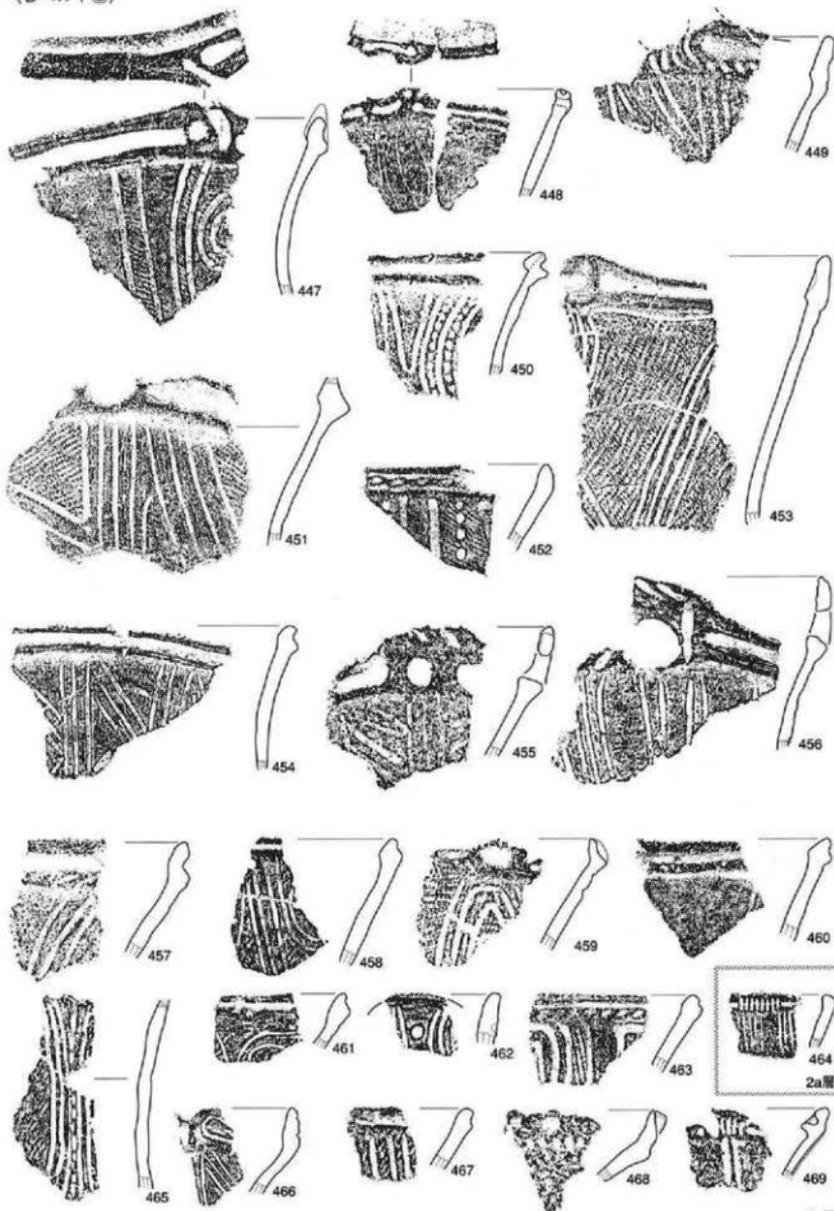
2a層

2b層

2a層 : 420~427  
2b層 : 428~446

420~446=1:3 0 5 10 15cm

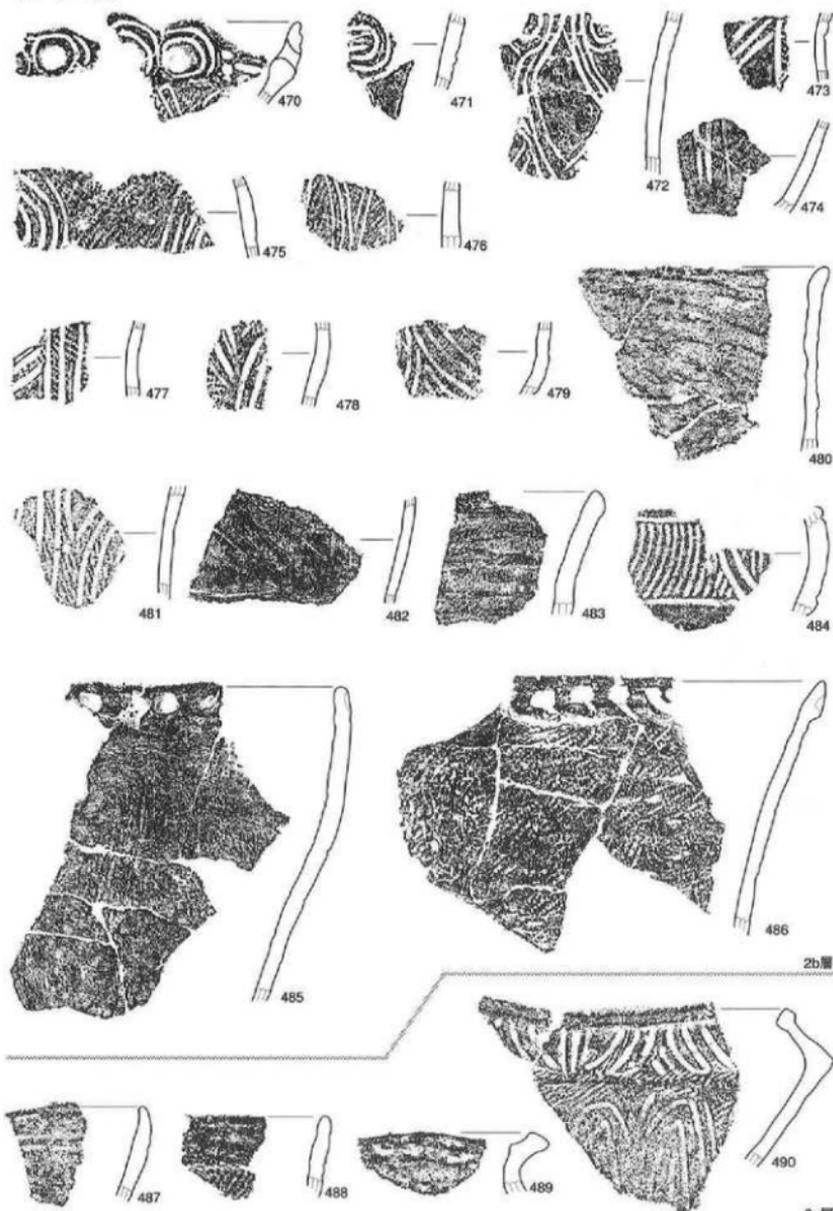
(Bベルト⑥)



2a層 : 464  
 2b層 : 447~463・465~469

0 15cm  
 447~469=1:3 (5=1:3)

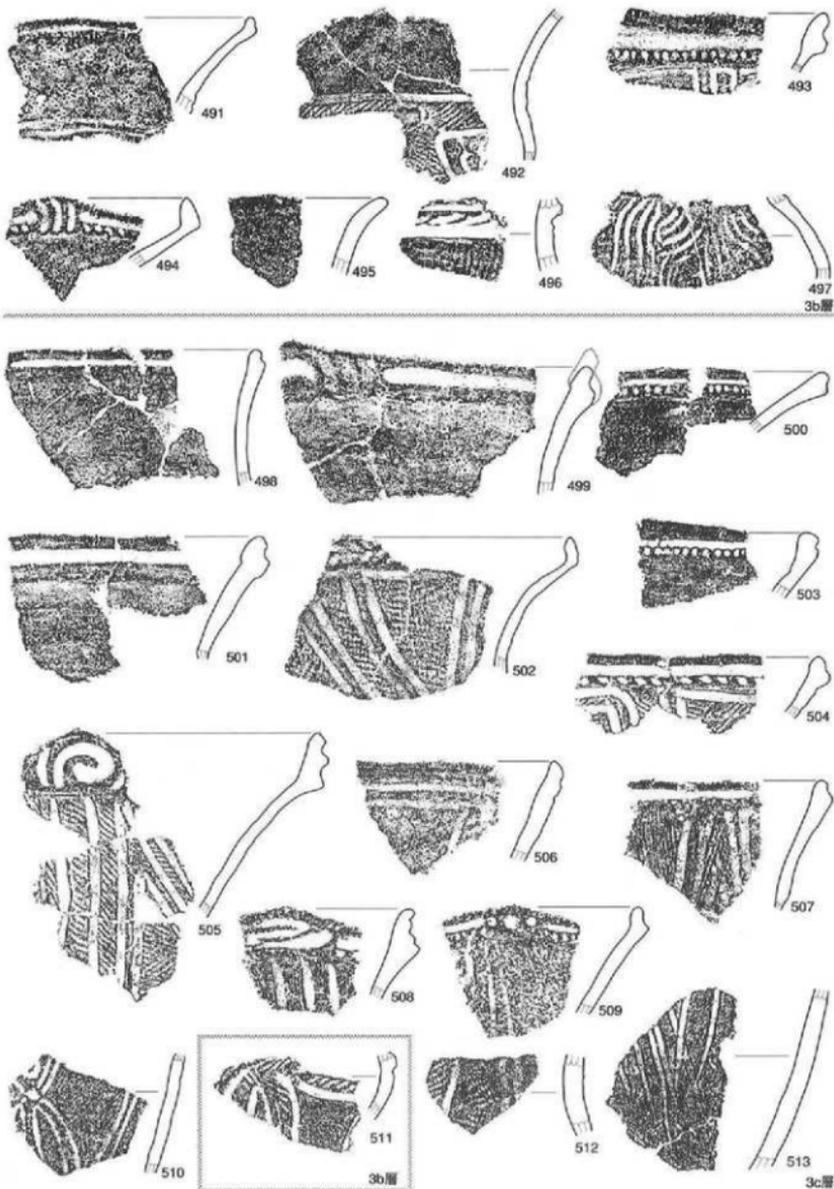
〈Bベルト⑦〉



2b層 : 470~486  
3a層 : 487~490

0 15cm  
1:3  
3a層

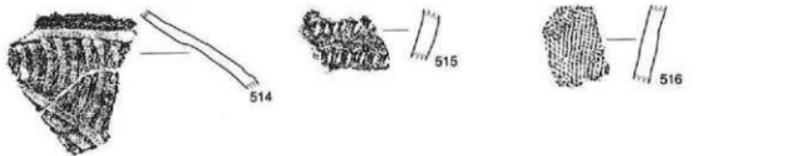
(Bベルト⑧)



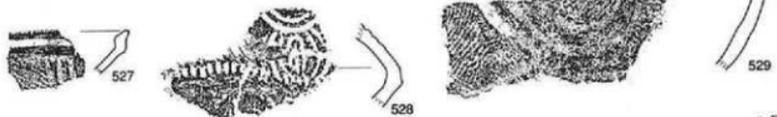
3b層：491～497・511  
3c層：498～510・512～513

0 5(1/3) 15cm  
491～513=1:3

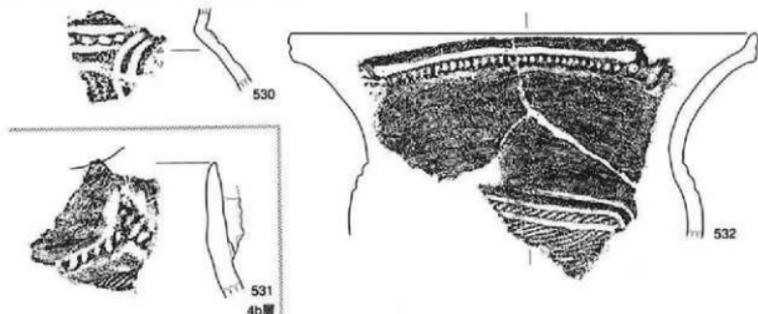
(Bベルト⑨)



3c層



4a層



4d層

3c層 : 514~516  
4a層 : 517~529

4b層 : 531

4d層 : 530・532

514~532=1:3  
0 5 10 15cm

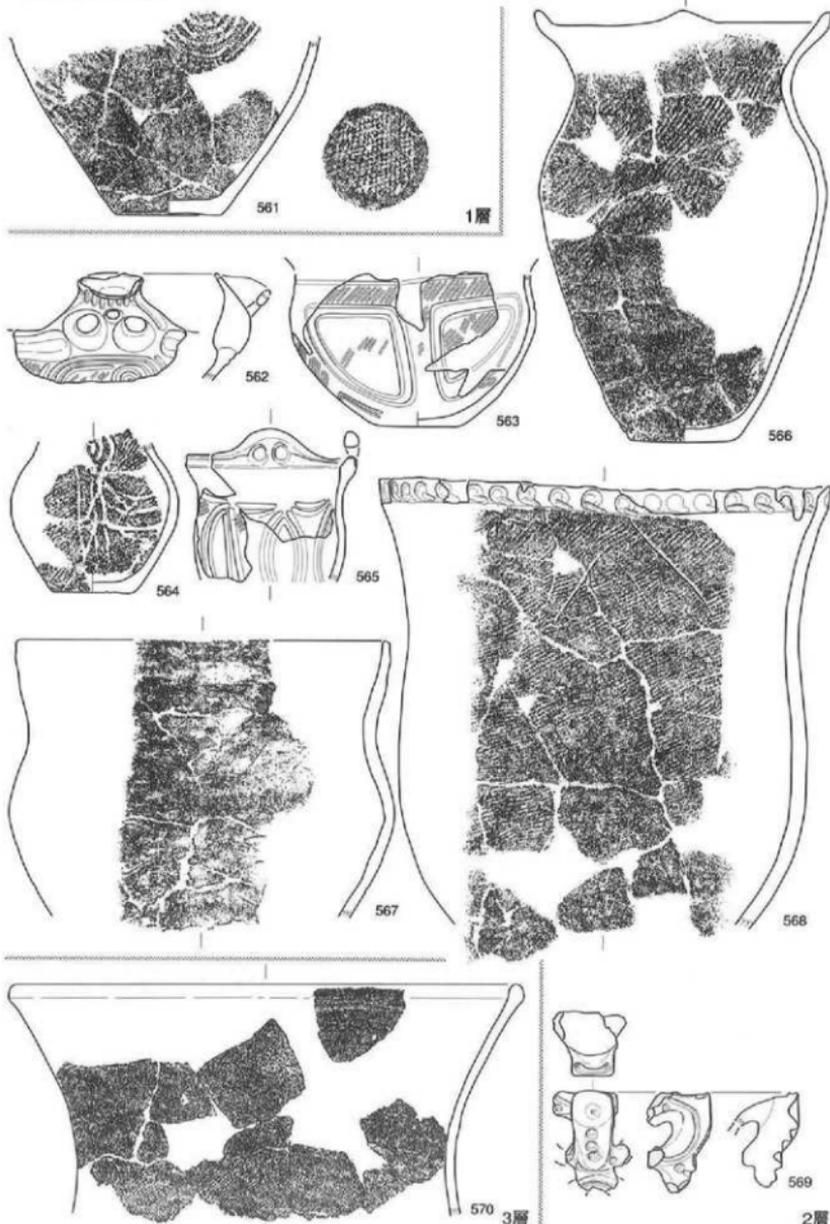
(Bベルト⑩)



4d層 : 533-554  
4e層 : 555-560

533-560-1:3 0 15cm (5:1:3)

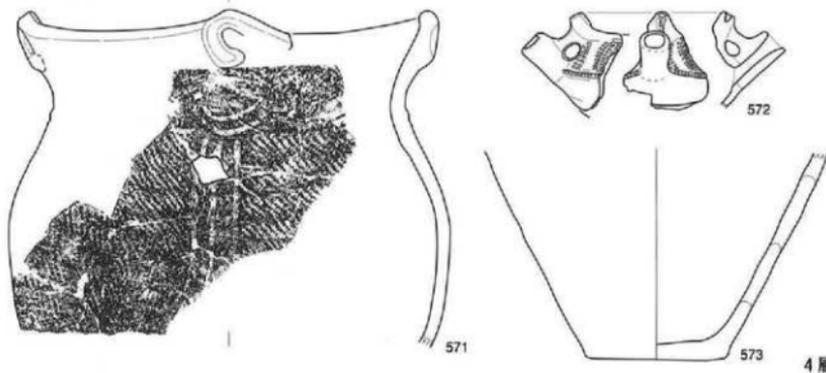
(C6-14グリッド①)



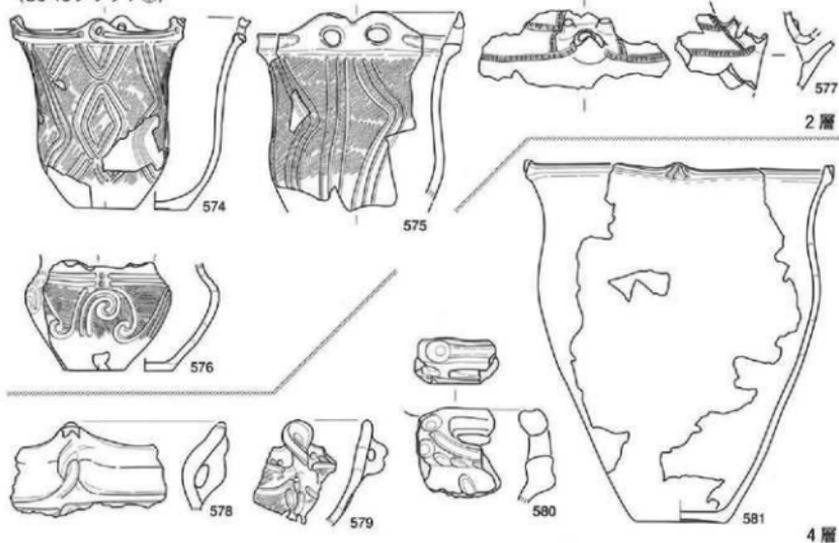
1層 : 561  
 2層 : 562~569  
 3層 : 570

0 20cm  
 561~570=1:4 (9=1:4)  
 2層

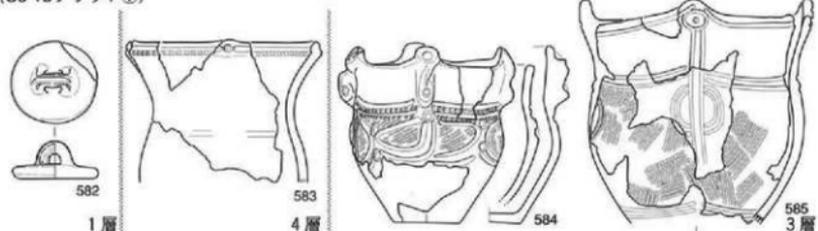
## (C6-14グリッド②)



## (C6-15グリッド①)



## (C6-18グリッド①)

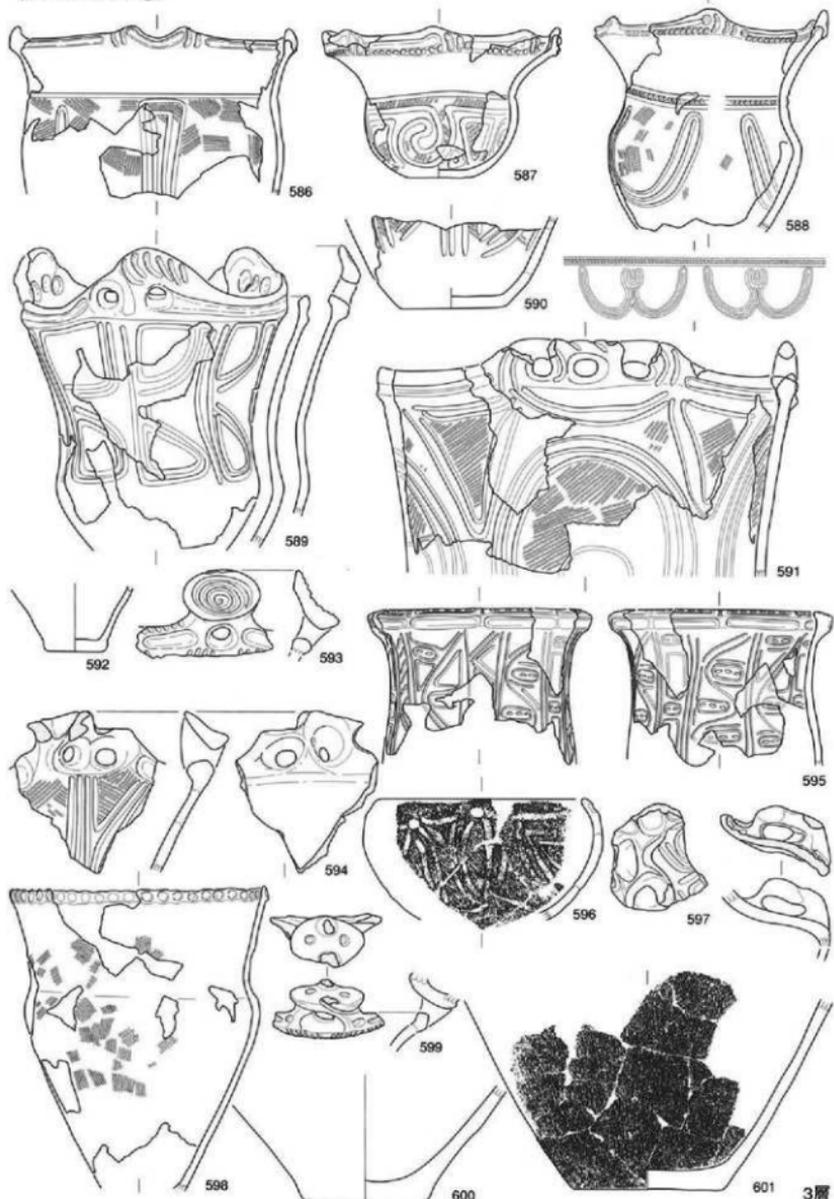


C6-14グリッド4層：571～573

C6-15グリッド2層：574～577 4層：578～581

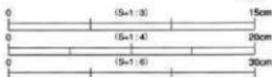
C6-18グリッド1層：582 4層：583 3層：584～585

0 (S=1:3) 15cm  
 580=1:3 (S=1:4) 20cm  
 571～579・582～585=1:4 (S=1:6) 30cm  
 581=1:6



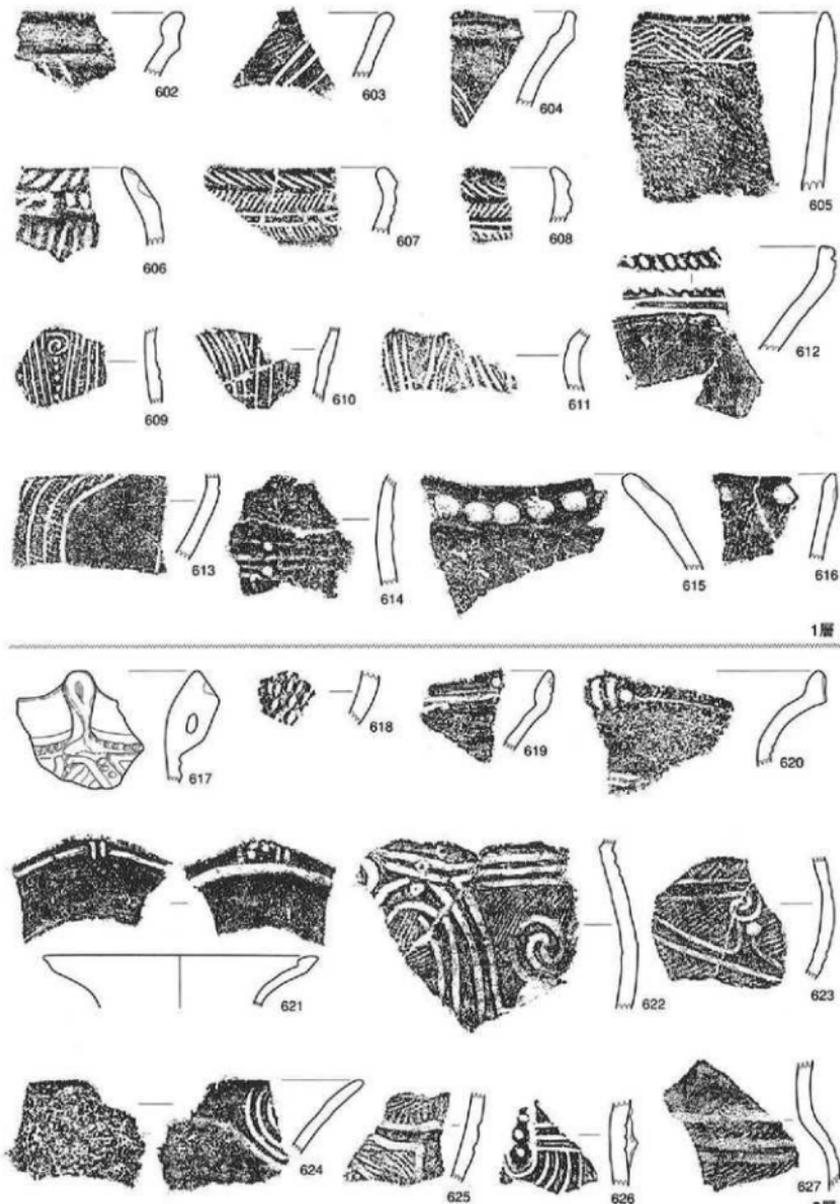
3層: 586~591・593~601  
C6-19グリッド ②層: 592

599=1:3  
587~597・600~601=1:4  
586・598=1:6



3層

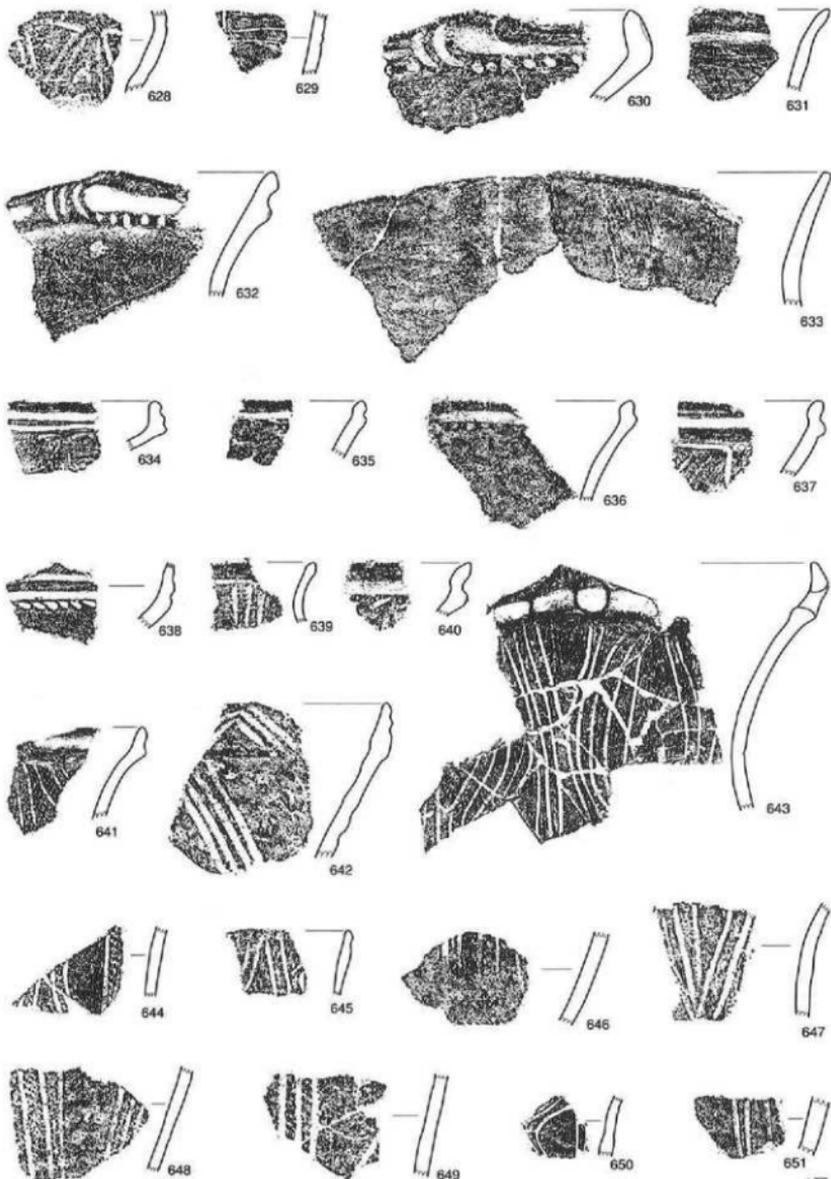
(C6-14グリッド③)



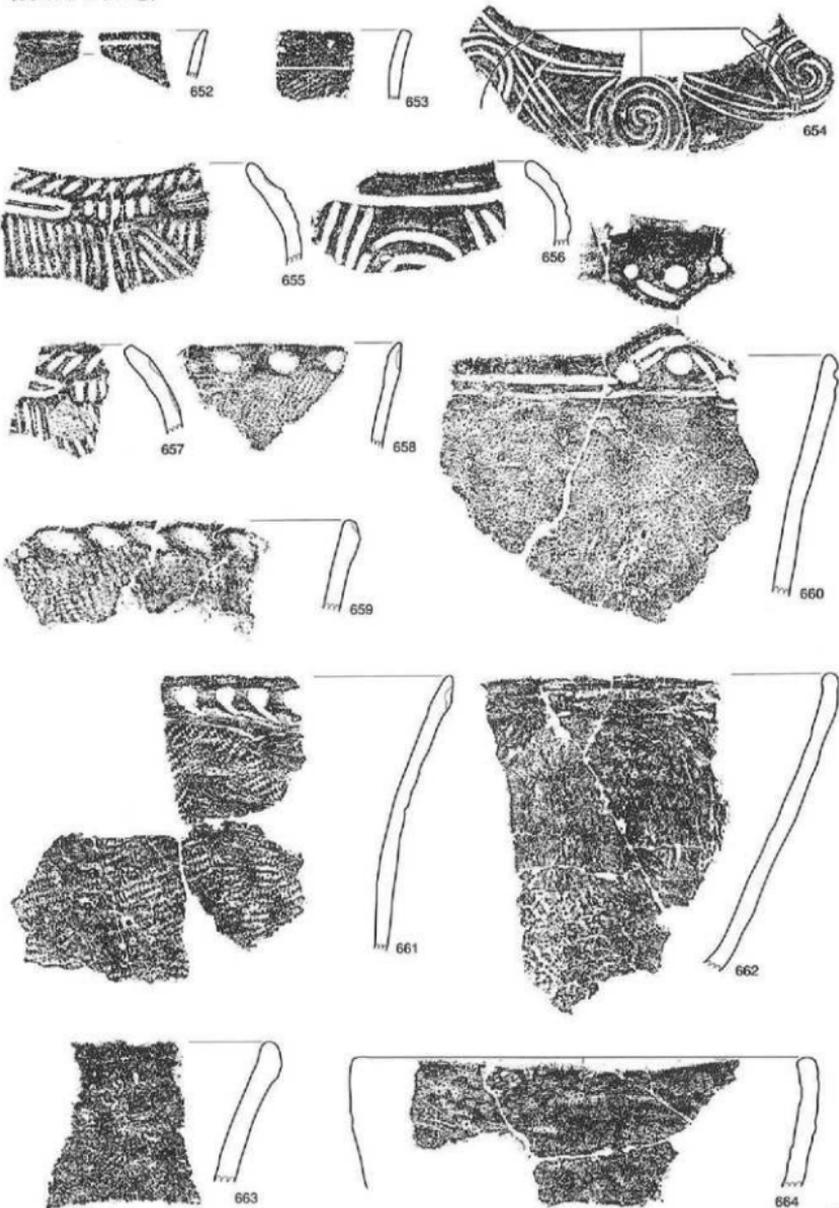
1層 : 602~616  
2層 : 617~627

0 15cm (5=1:3)  
602~627=1:3

(C6-14グリッド④)



〈C6-14グリッド⑤〉



2層 : 552~664

0 5(=1:3) 10cm  
652~664=1:3

2層

〈C6-14グリッド⑥〉



665



666



667



668

3層



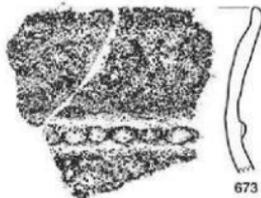
669



670



672



673



671



674



675



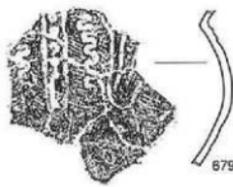
676



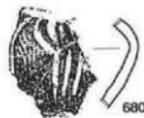
677



678



679



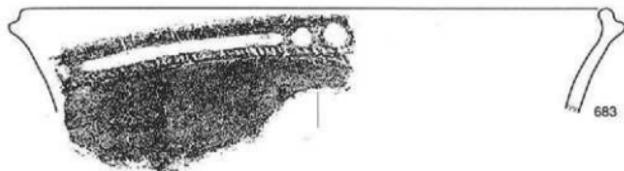
680



681



682



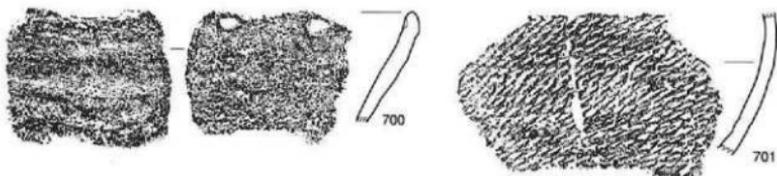
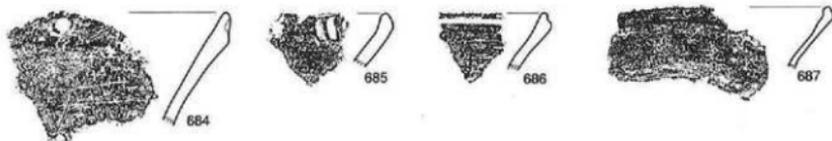
683

3層 : 665~666  
4層 : 667~683

665~683=1 : 3 15cm

4層

(C6-14グリッド⑦)

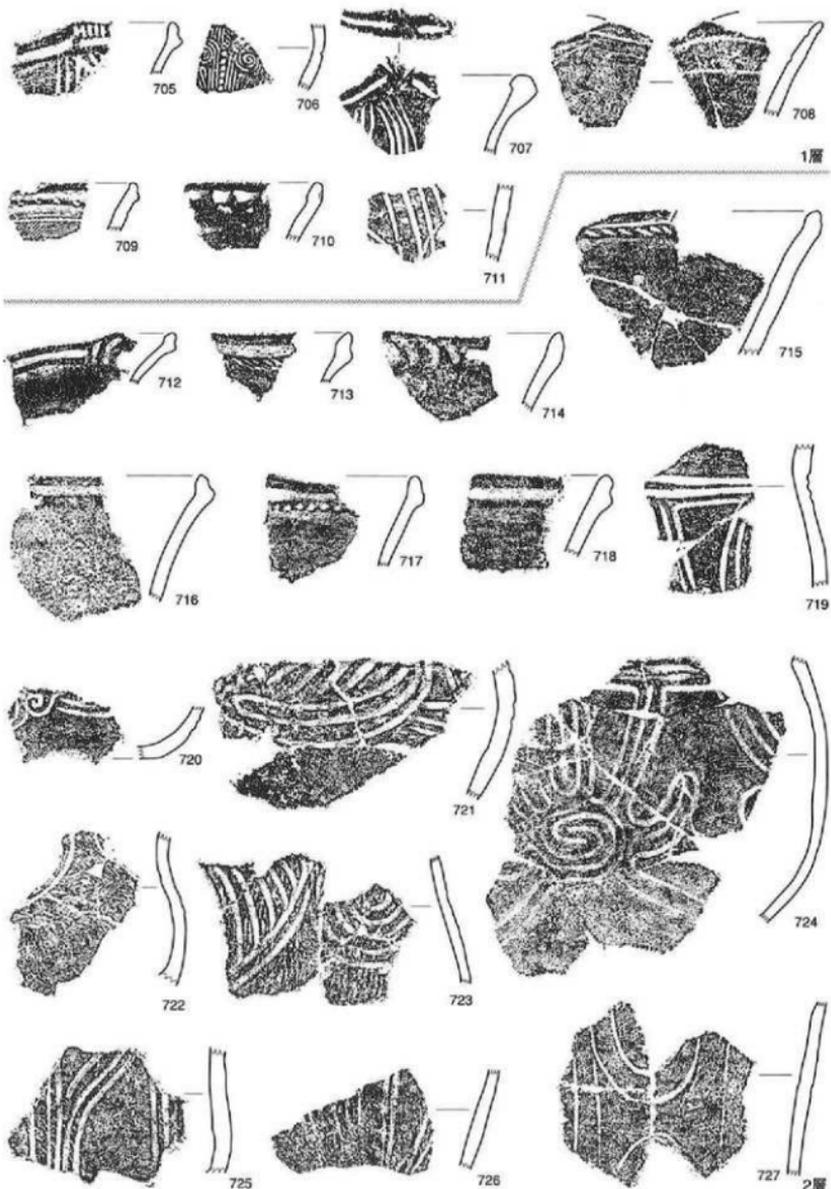


4層

4層 : 684~704

0 (5=1:3) 15cm  
684~704=1:3

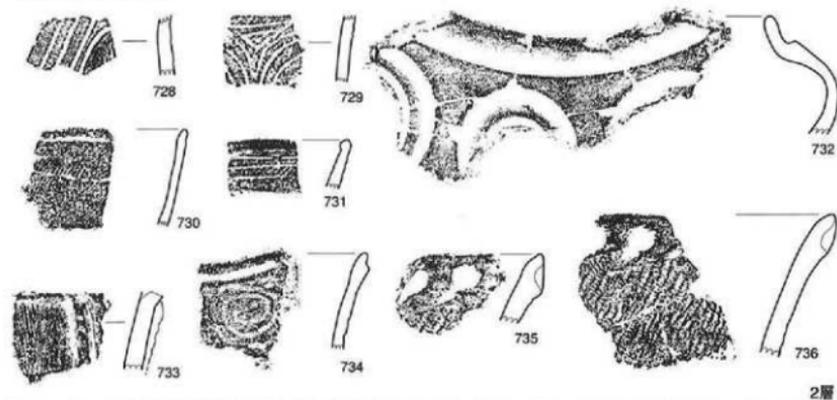
(C6-15グリッド②)



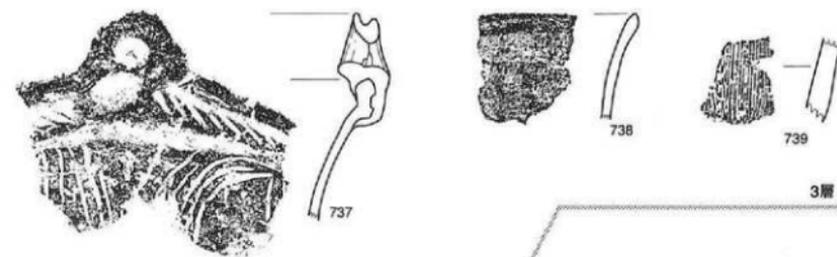
1層 : 705~711  
2層 : 712~727

0 15cm  
705~727=1:3 (3=1:3)

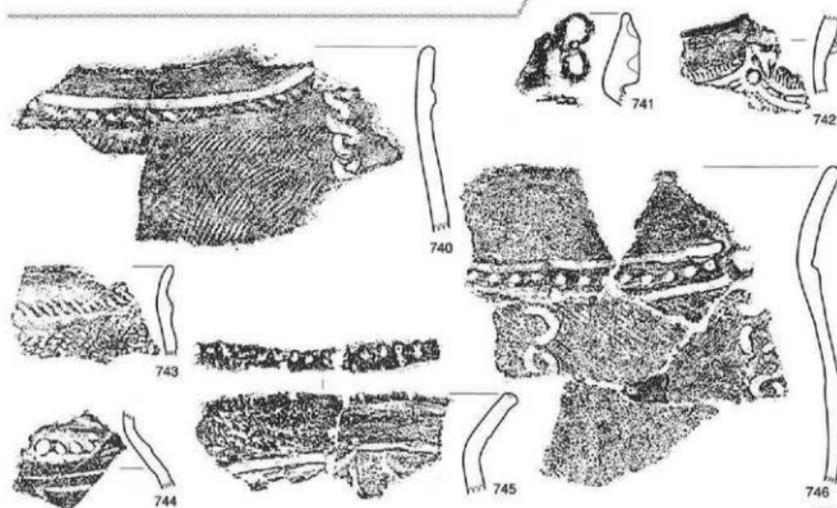
(C6-15グリッド③)



2層



3層



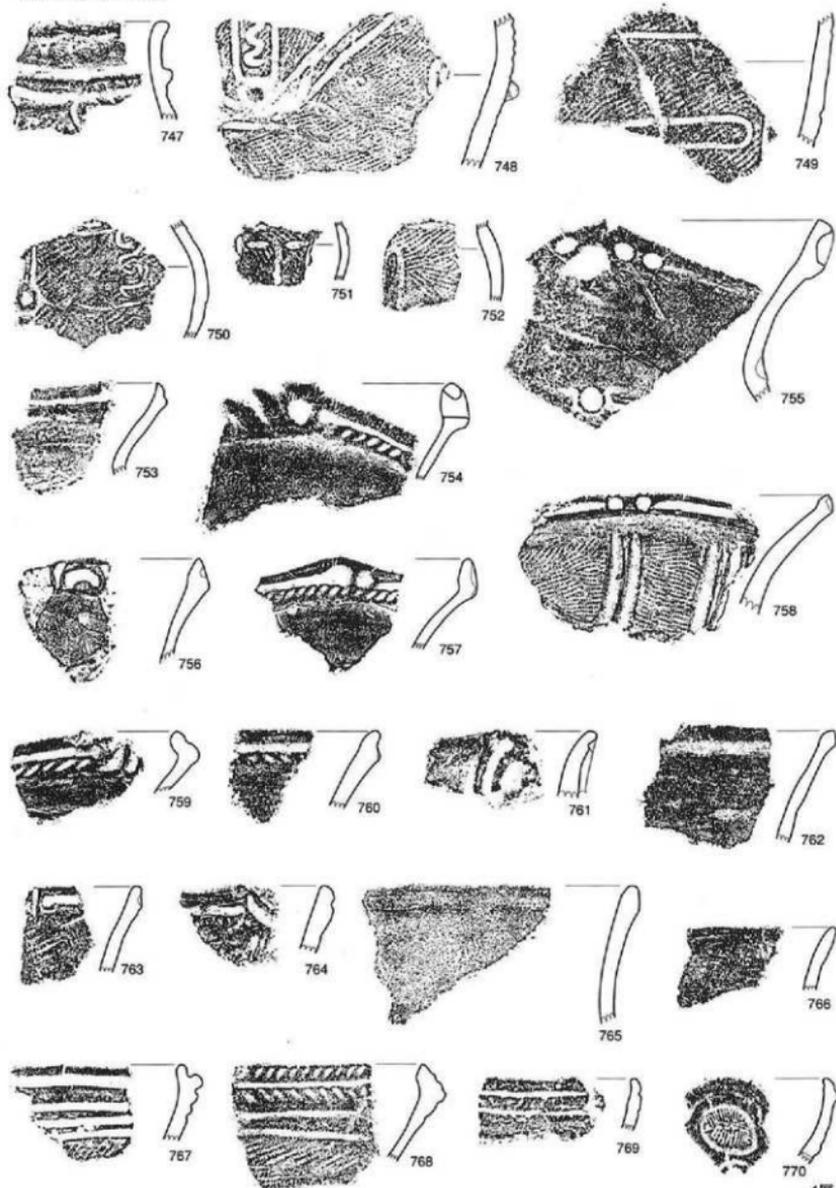
4層

2層 : 728~736  
3層 : 737~739

4層 : 740~746

0 4cm (S=1:3)  
728~746=1:3

(C6-15グリッド④)



4層

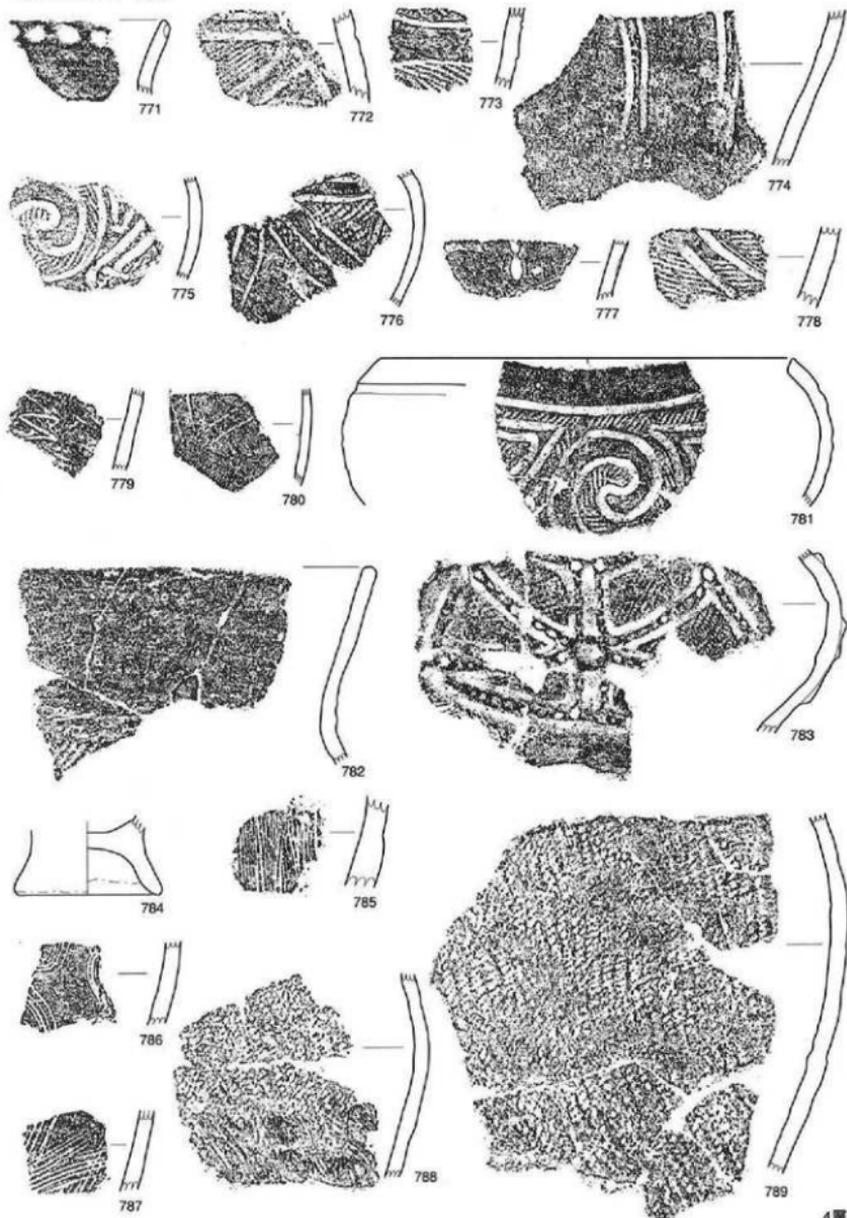
4層 : 747~770

747~770=1 : 3

(5x1 : 3)

15cm

〈C6-15グリッド⑤〉

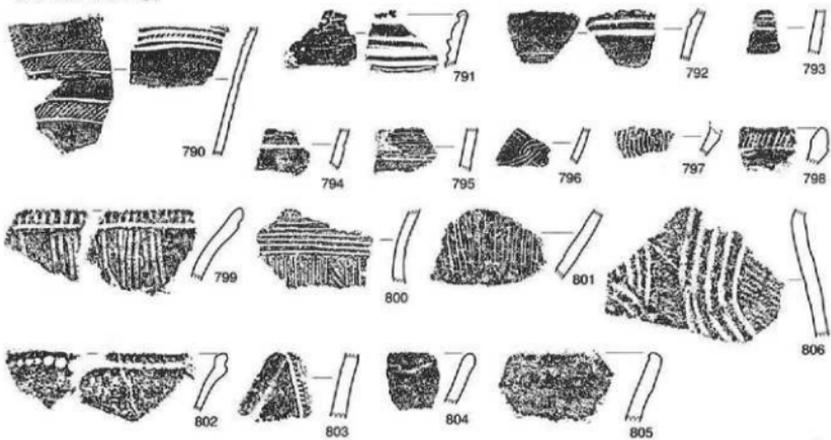


4層 : 771~789

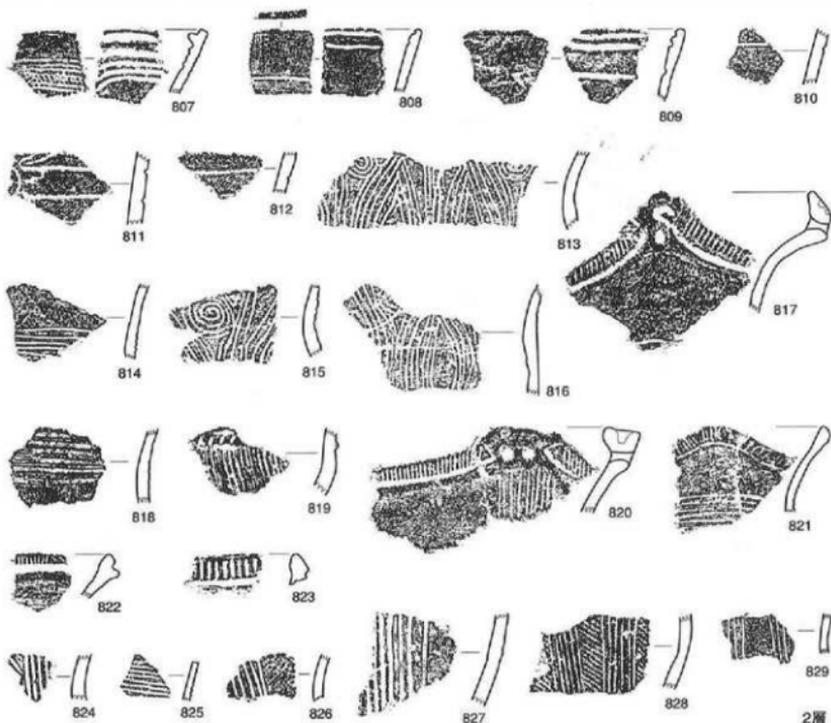
0 15cm  
771~789=1:3

4層

(C6-18グリッド③)



1層

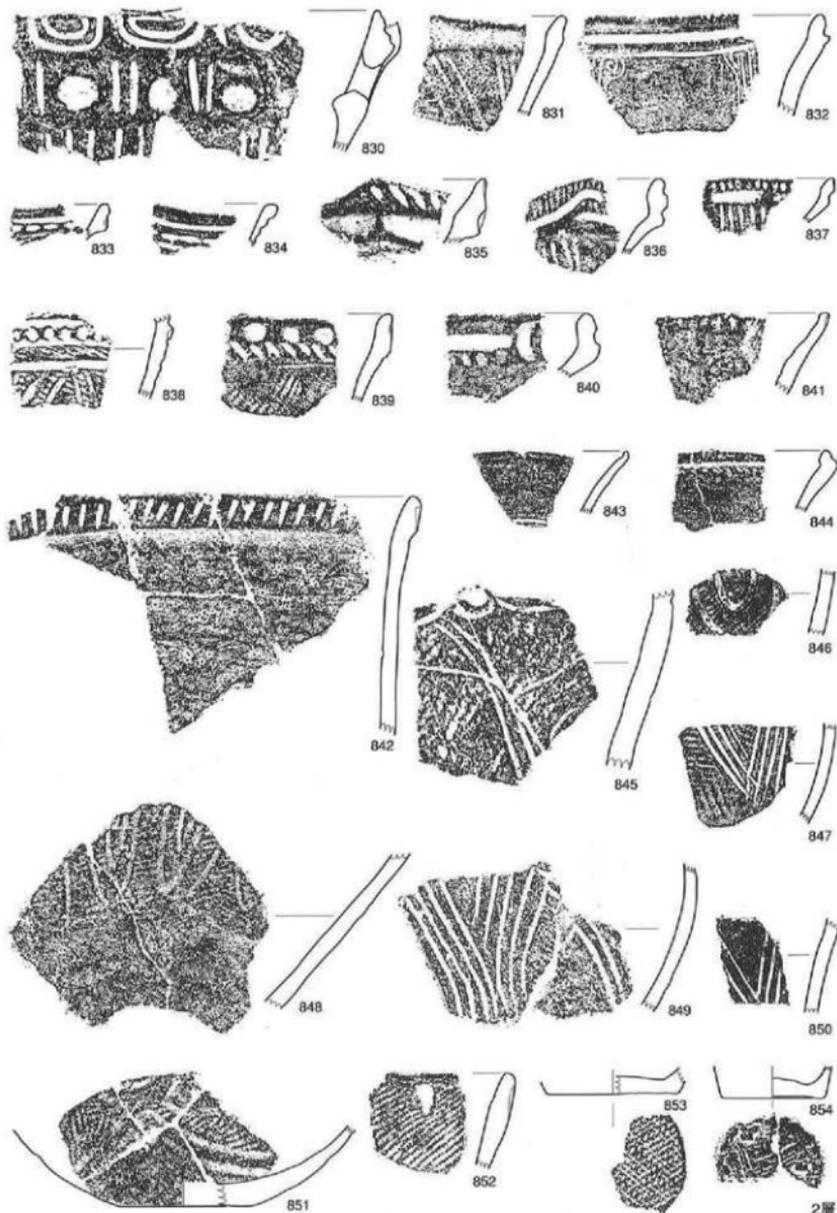


2層

1層：790～806  
2層：807～829

790～829=1:3 0 5cm

(C6-18グリッド④)



2層 : 830~854

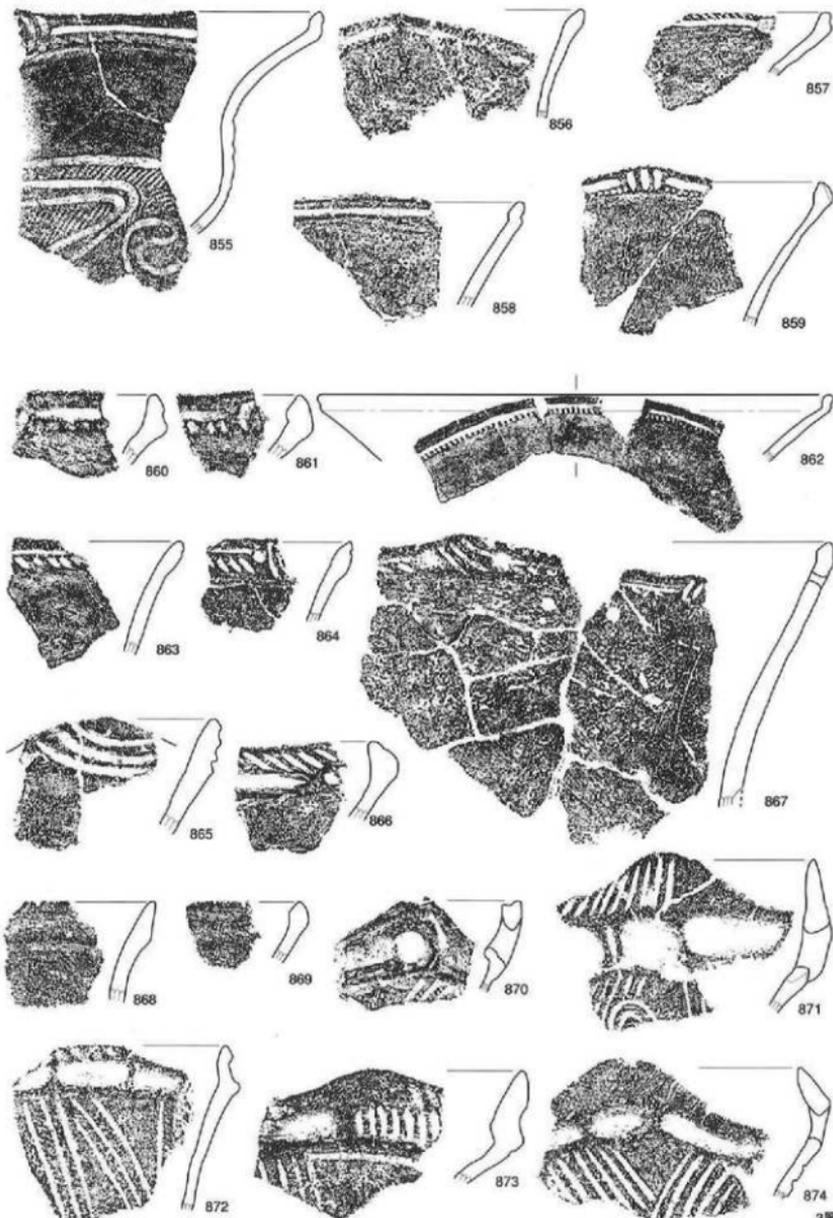
830~854=1:3

(5=1:3)

15cm

2層

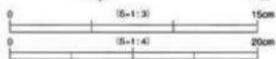
(C6-18グリッド⑤)



3層 : 855~874

855~861・863~874=1:3

862=1:4



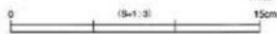
3層

(C6-18グリッド⑥)



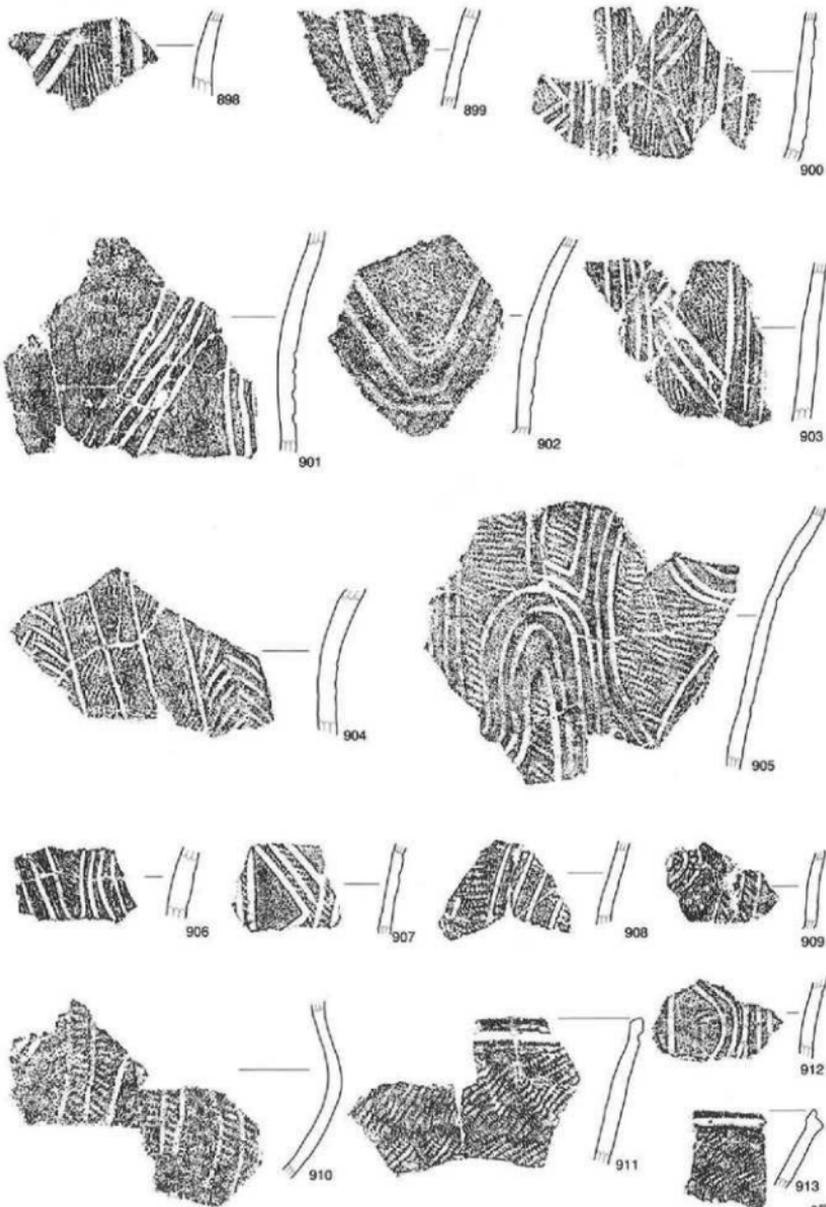
3層 : 875-897

875-897=1:3

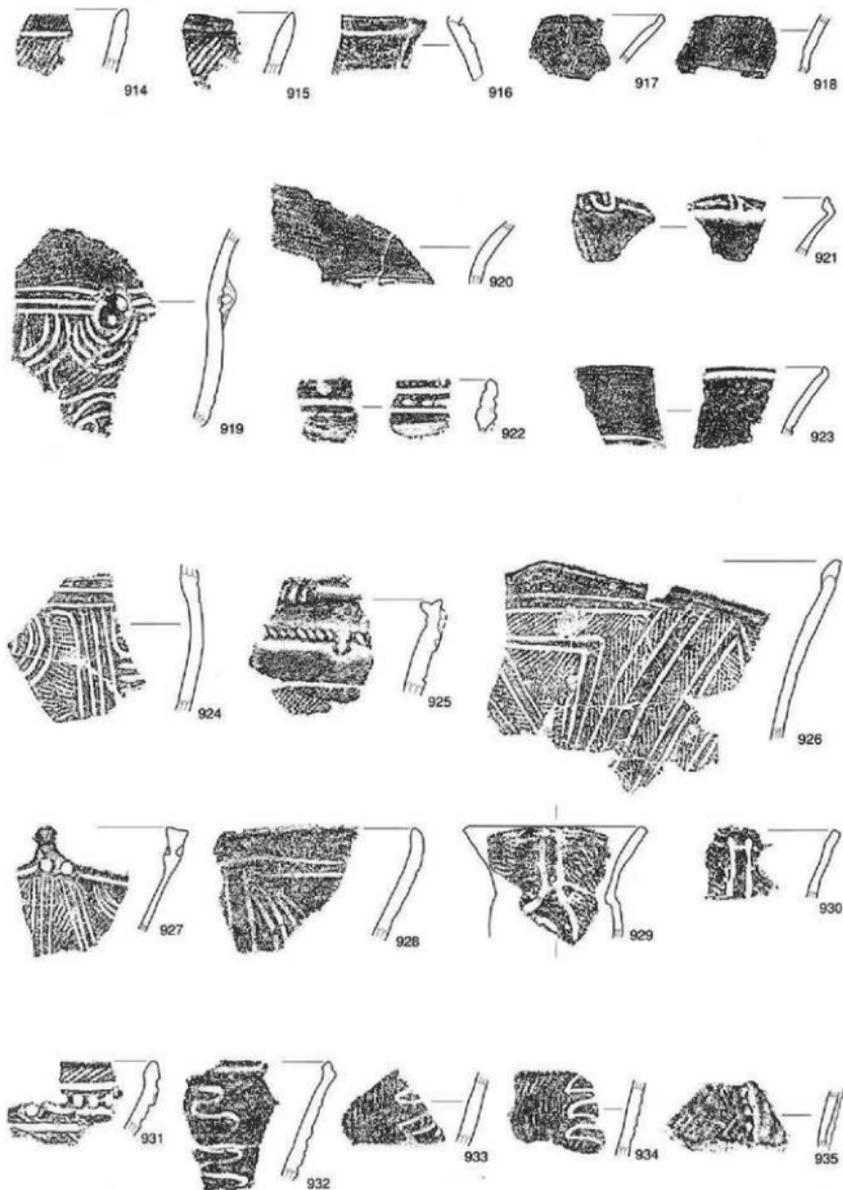


3層

〈C6-18グリッド⑦〉



〈C6-18グリッド③〉

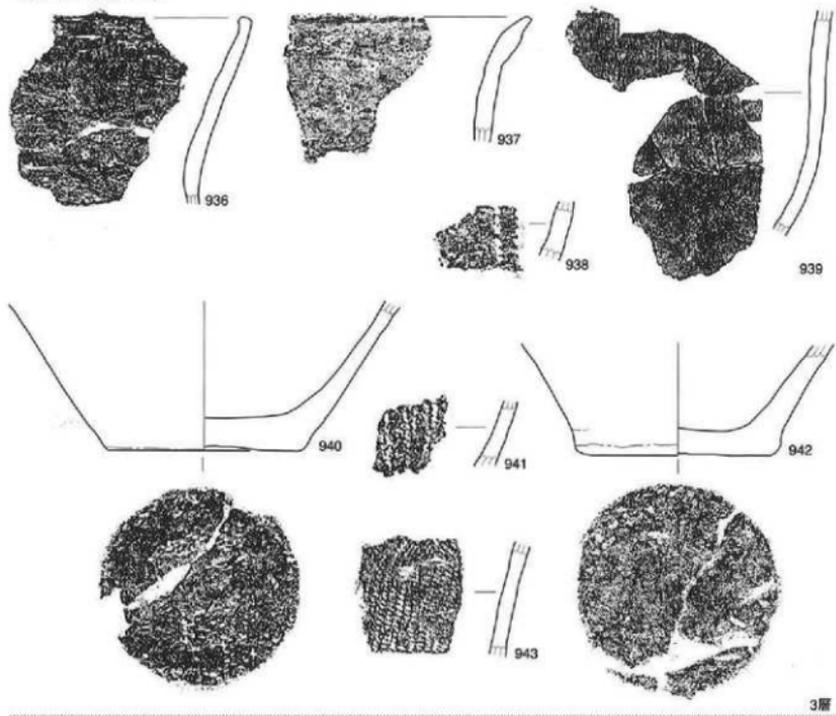


3層

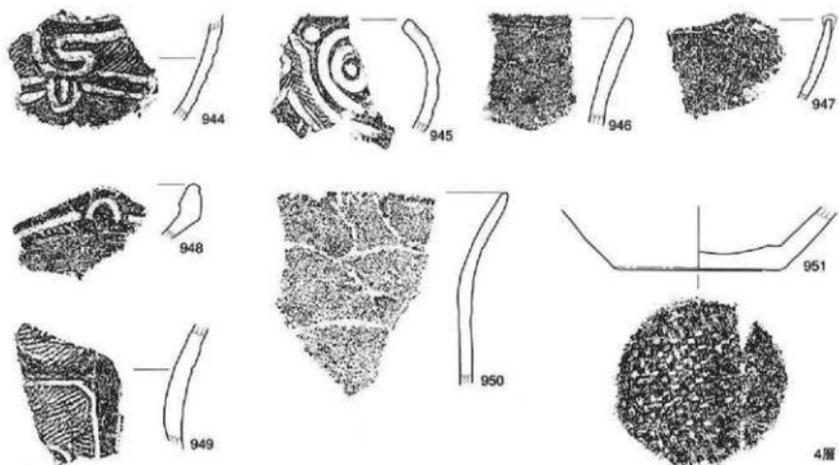
3層：914～935

0 15cm  
914～935=1:3

(C6-18グリッド⑨)



3層



4層

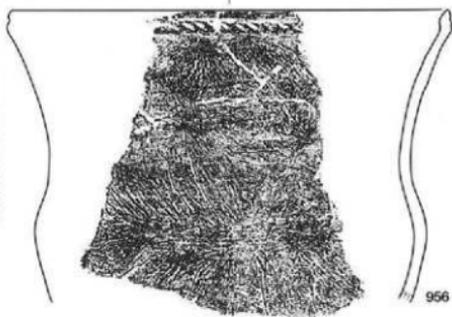
3層：936～943  
4層：944～951

0 15cm  
936～951=1:3 (9=1:2)

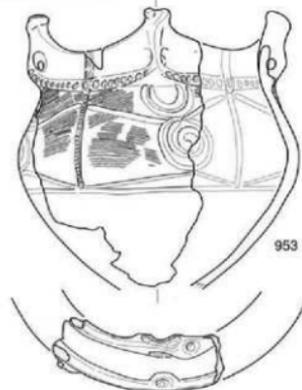
(C6-19グリッド①)



952 上層



956



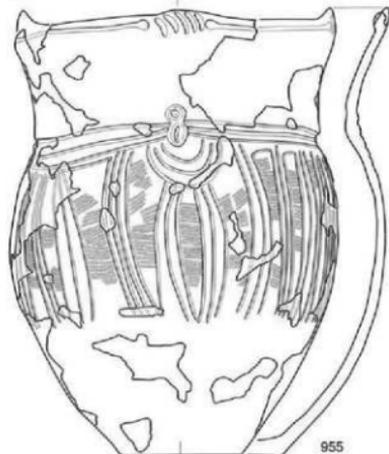
953



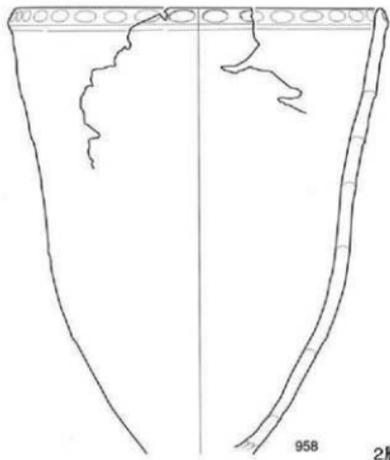
957



954



955

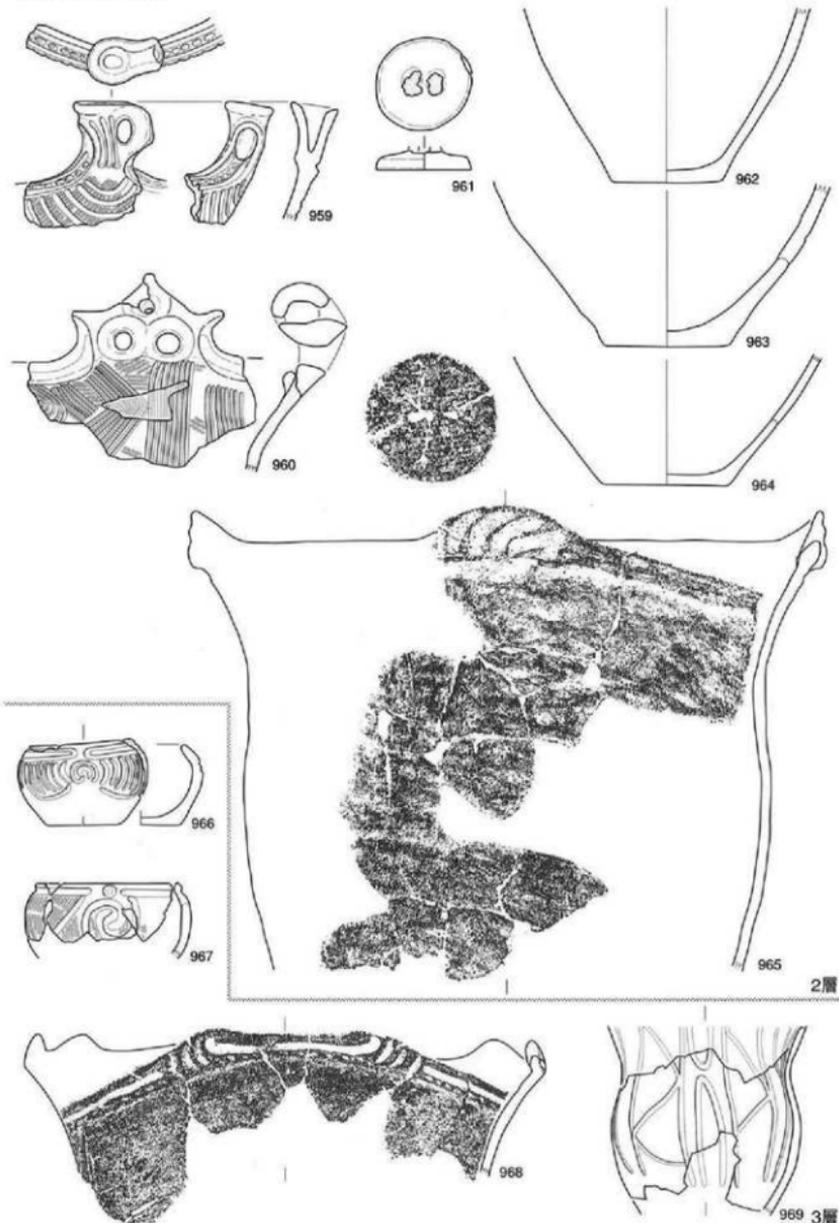


958 2層

上層 : 952  
2層 : 953~958

0 (S=1:4) 20cm  
952~957=1:4  
0 (S=1:6) 30cm  
958=1:6

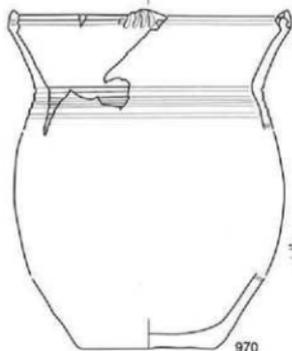
〈C6-19グリッド②〉



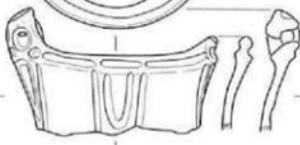
2層 : 959~965  
3層 : 966~969

0 (3-1.4) 20cm  
959~969=1:4

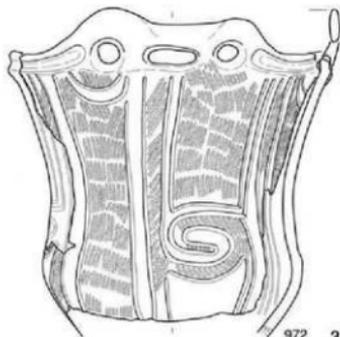
(C6-19グリッド③)



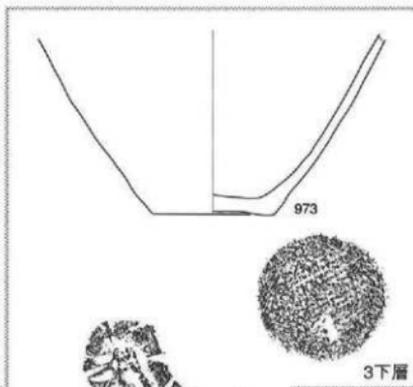
970



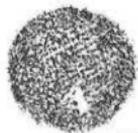
971



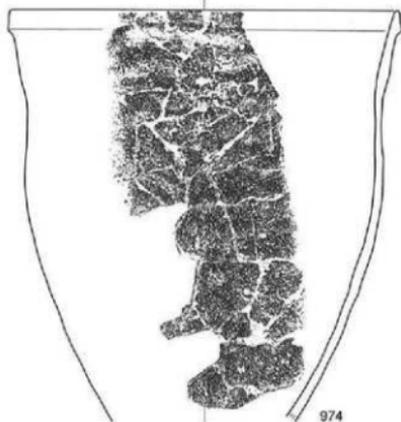
972 3層



973



3下層



974



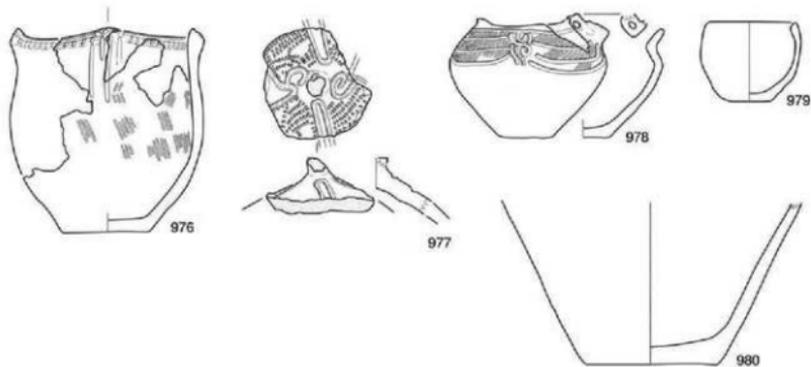
975

4層

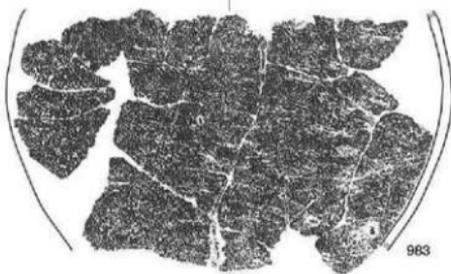
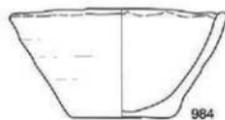
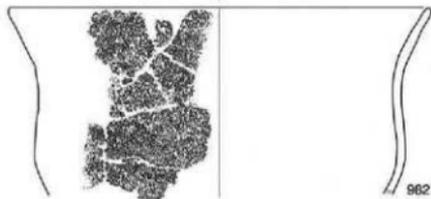
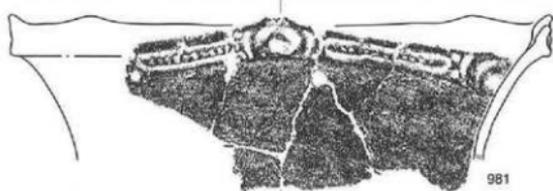
3層 : 970~972  
3下層 : 973  
4層 : 974~975

970~975=1:4 0 10-1.4 20cm

〈C6-19グリッド④〉



4層



③層

4層 : 976~980  
3層 : 981~984

976~984-1 : 4

(C6-19グリッド⑤)



1層 : 985

2層 : 986~1012

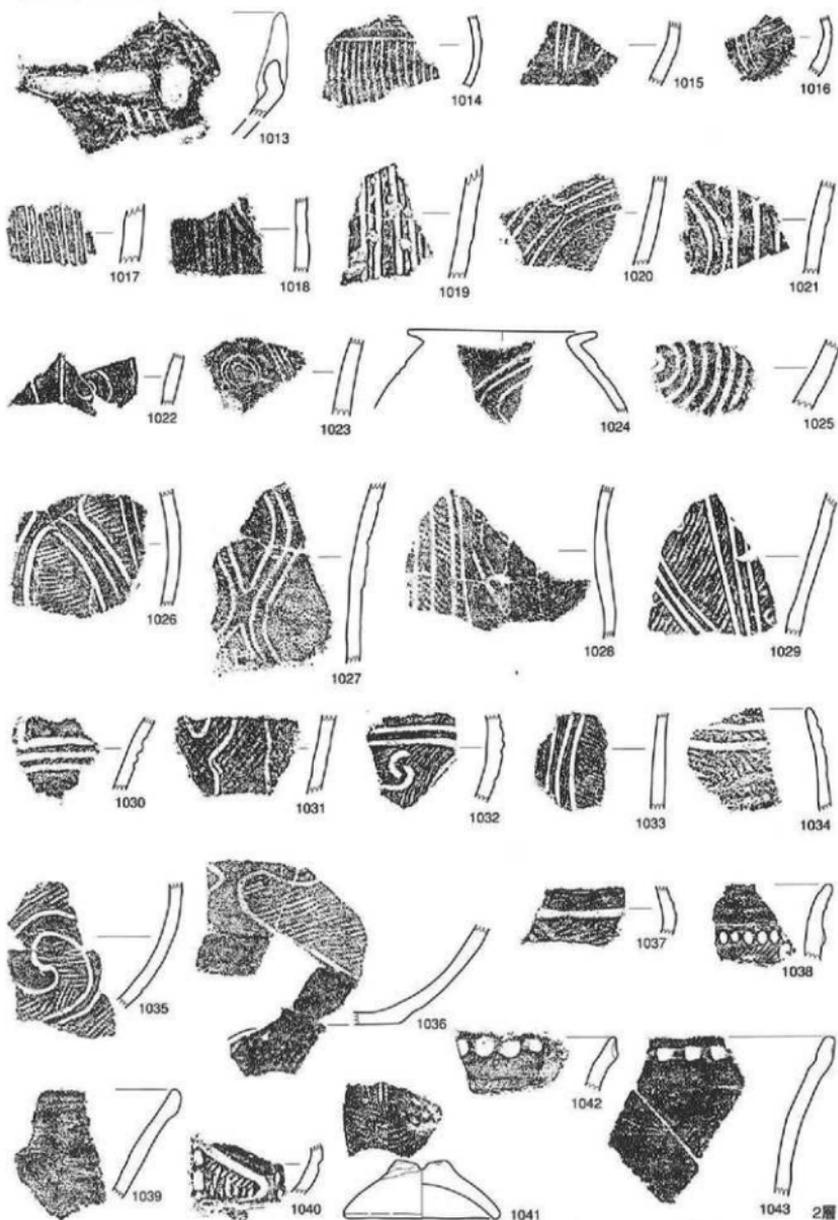
985~1012-1 : 3

(98-1 : 3)

2層

15cm

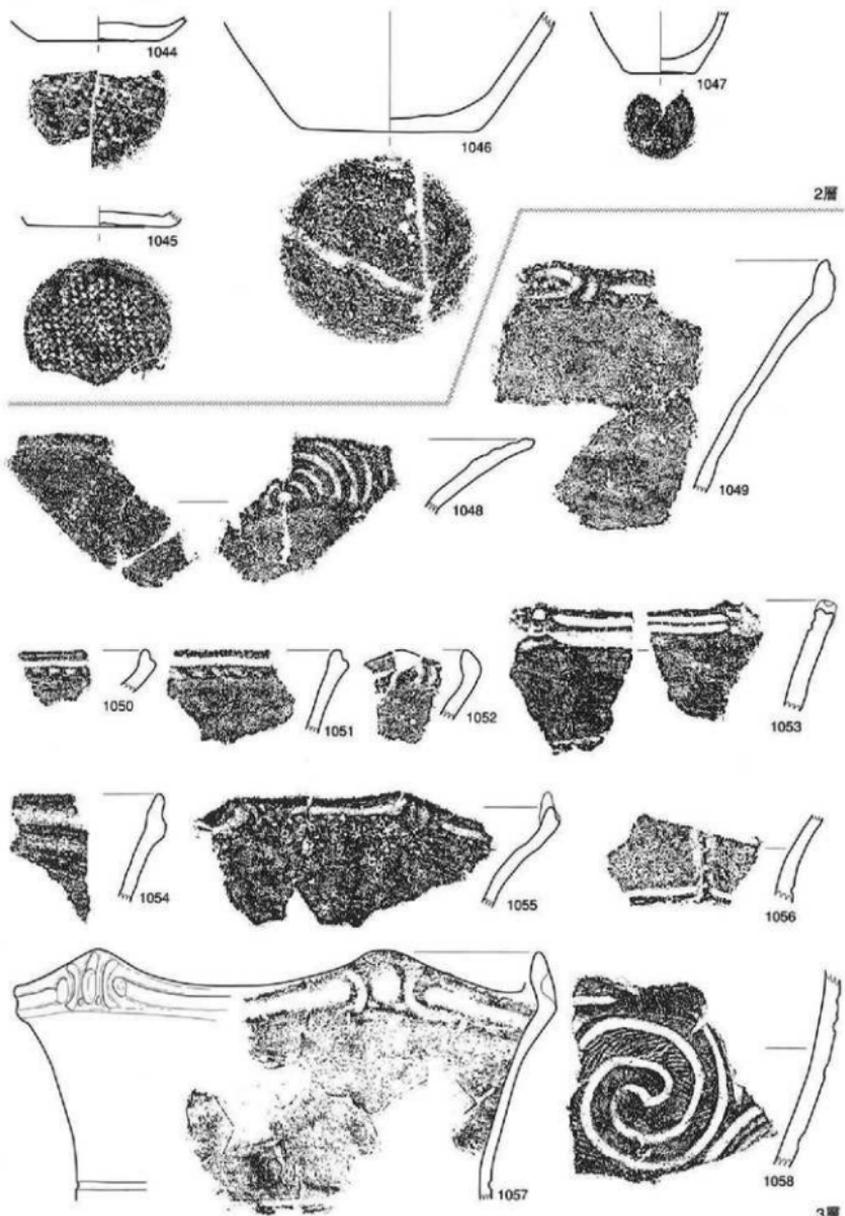
〈C6-19グリッド⑥〉



2層 : 1013~1043

1013~1043-1 : 3 6 (9=1.2) 15cm

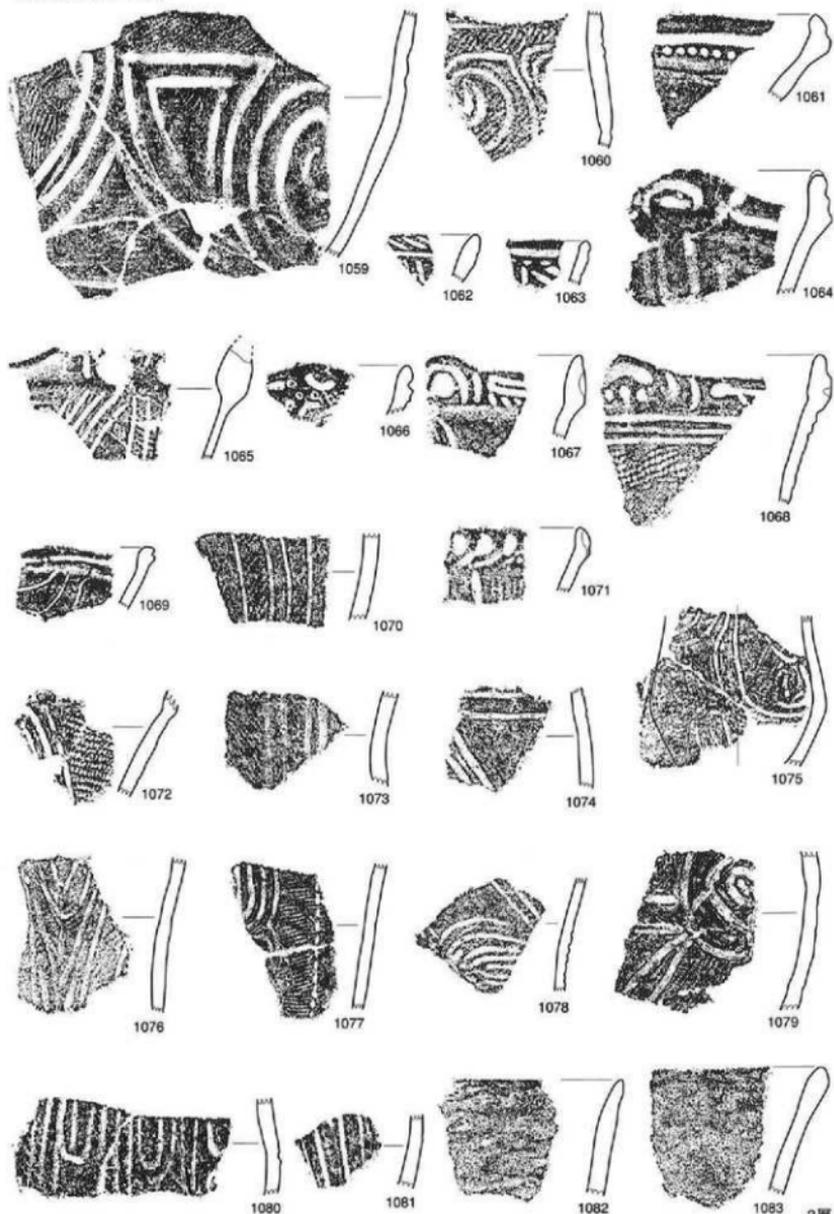
(C6-19グリッド⑦)



2層 : 1044~1047  
 3層 : 1048~1058

0 5(=1:3) 10cm  
 1044~1058=1:3

(C6-19グリッド⑧)



3層 : 1059~1083

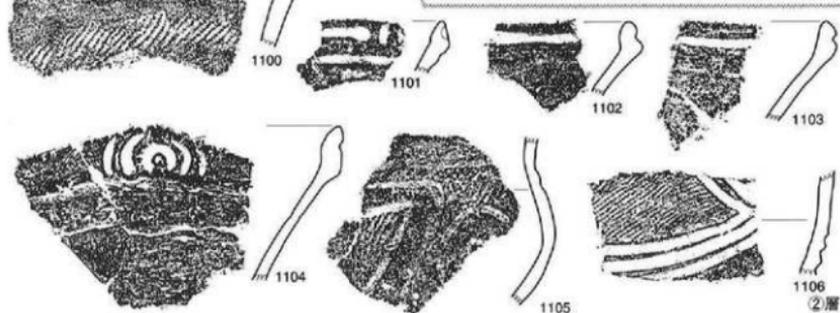
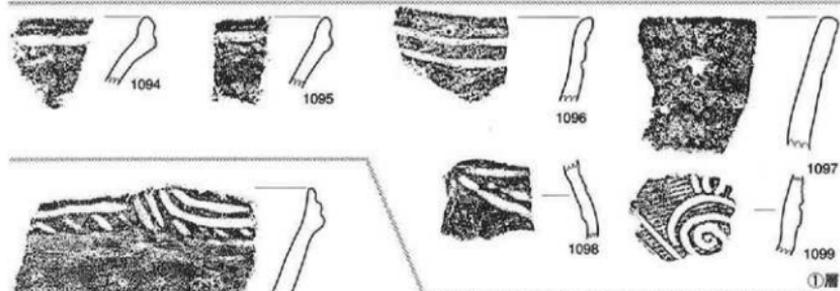
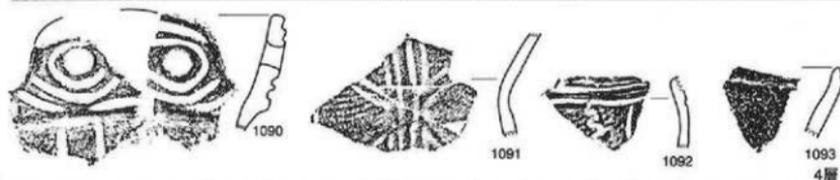
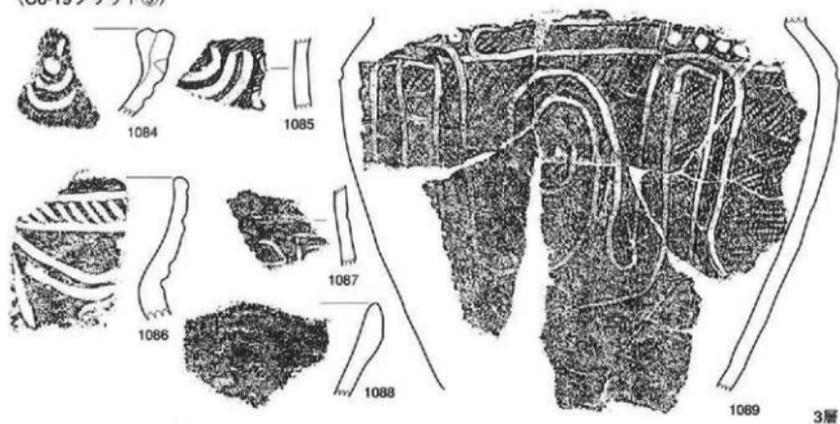
1059~1083=1 : 3

(5x1 : 3)

3層

15cm

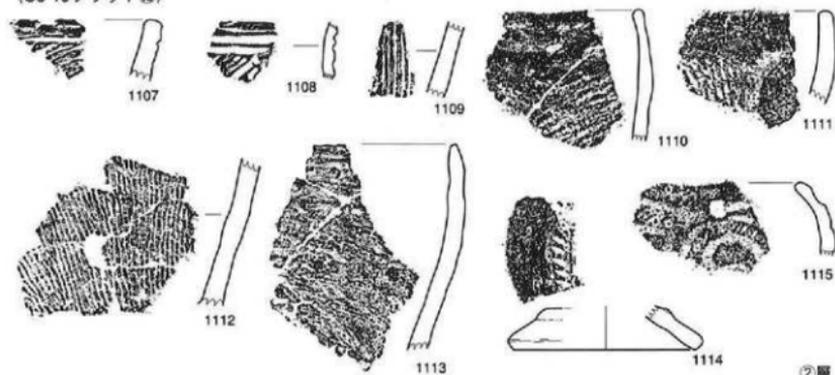
(C6-19グリッド⑨)



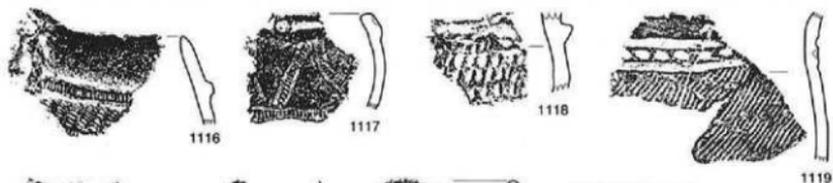
3層：1084～1089    ①層：1094～1099  
 4層：1090～1093    ②層：1100～1106

0 (5:1:3) 15cm  
 1084～1106=1:3

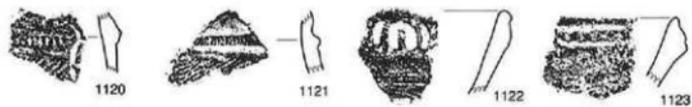
〈C6-19グリッド印〉



②層



1119

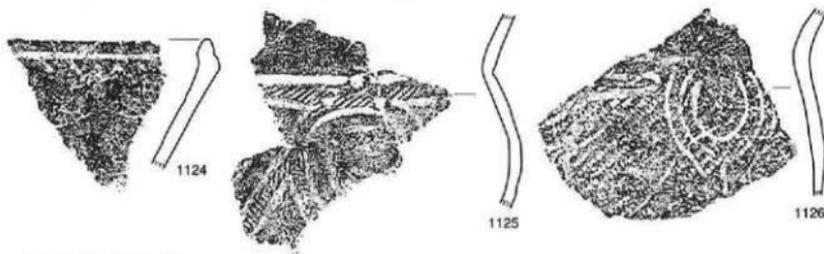


1120

1121

1122

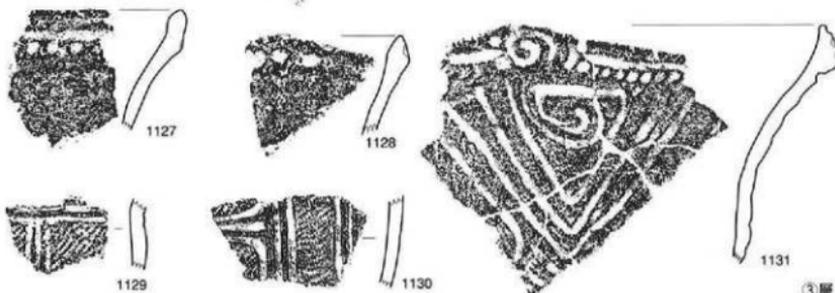
1123



1124

1125

1126



1127

1128

1131

1129

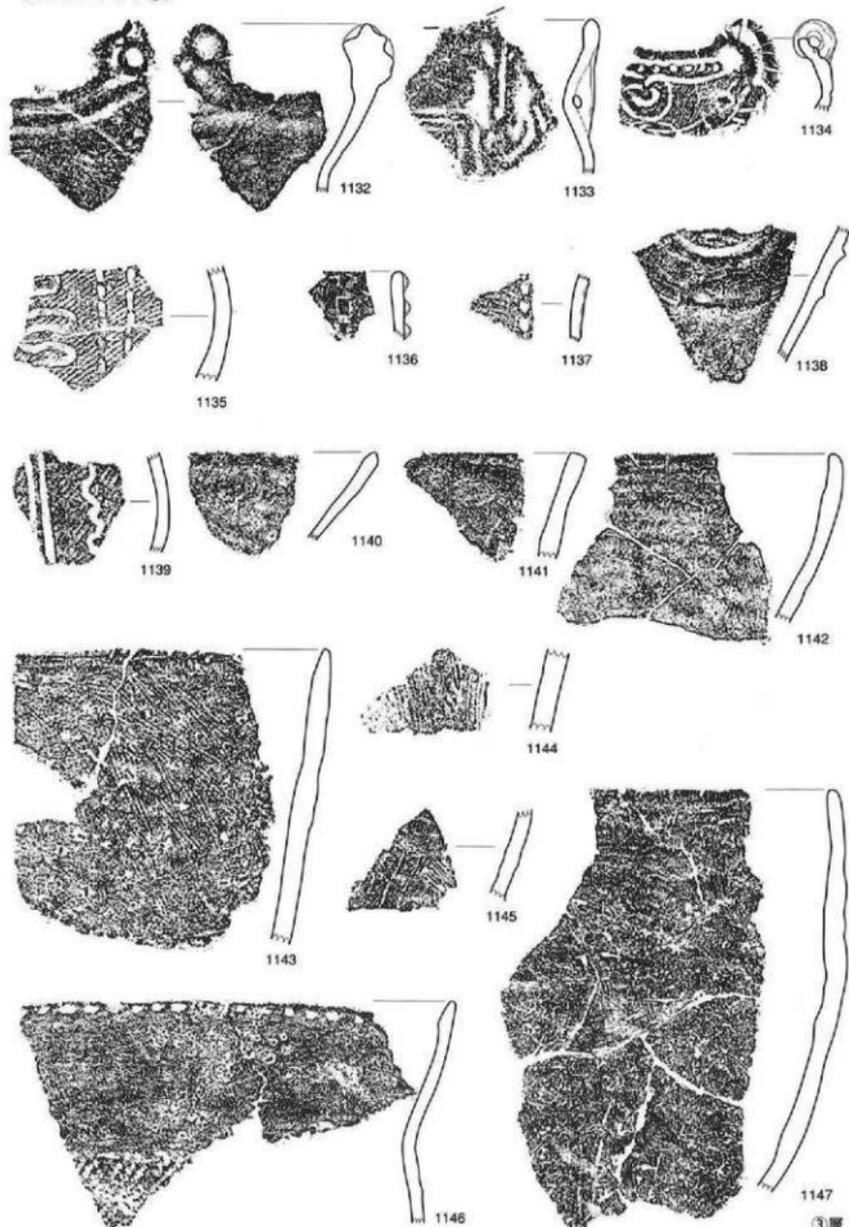
1130

③層

②層 : 1107~1115  
③層 : 1116~1131

1107~1131=1:3  
0 5 10 15cm

(C6-19グリッド①)



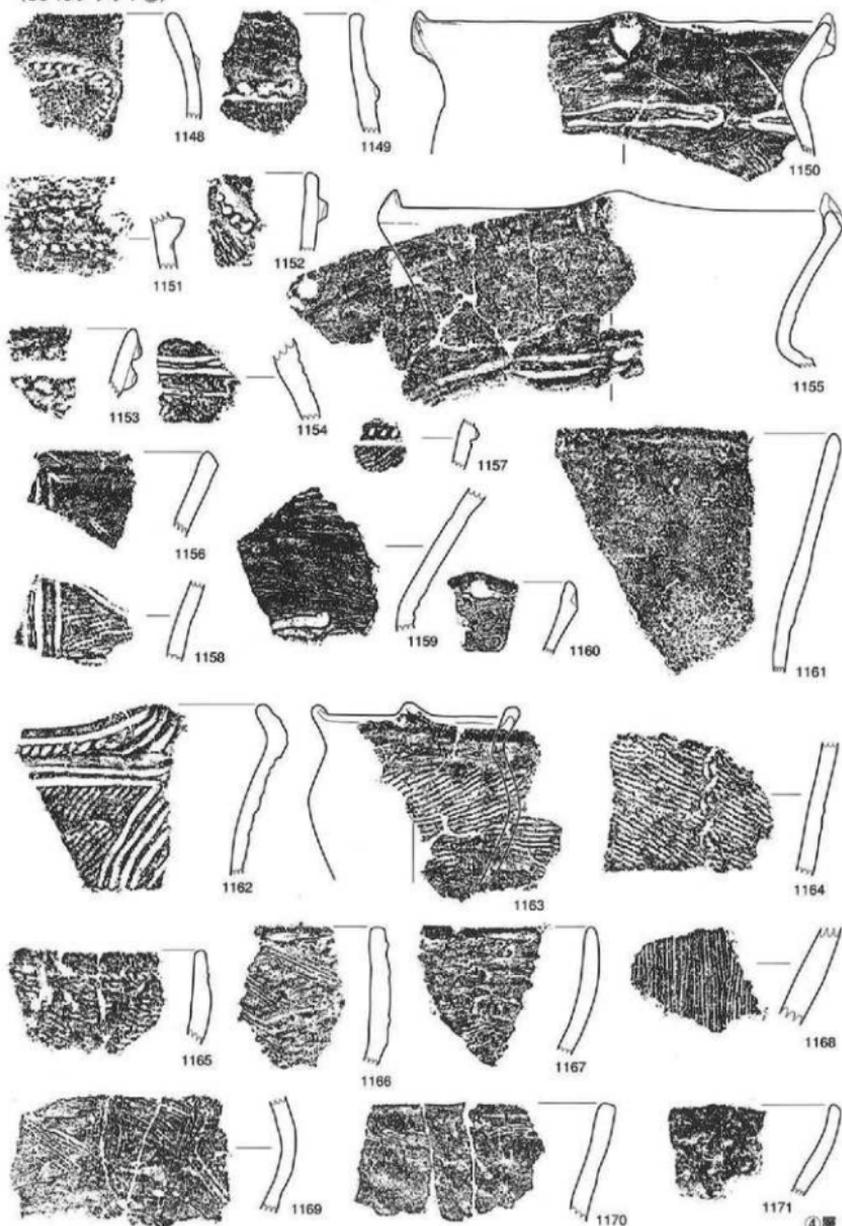
③層：1132~1147

1132~1147-1:3

0

15cm

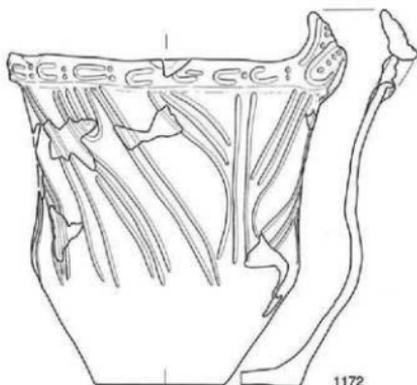
〈C6-19グリッド②〉



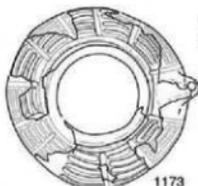
4層 : 1148~1171

0 150mm (3-1) ④層

(C6-20グリッド①)



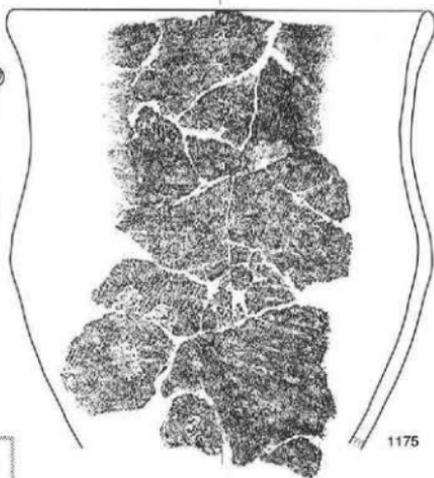
1172



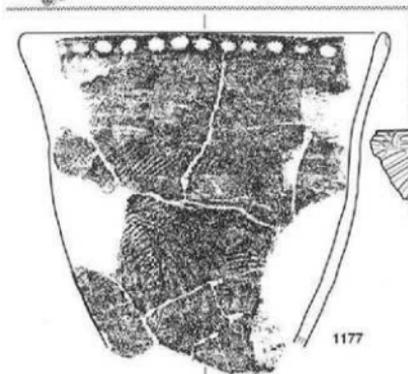
1173



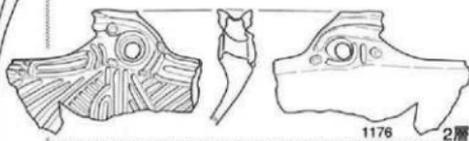
1174



1175



1177



1176

2層



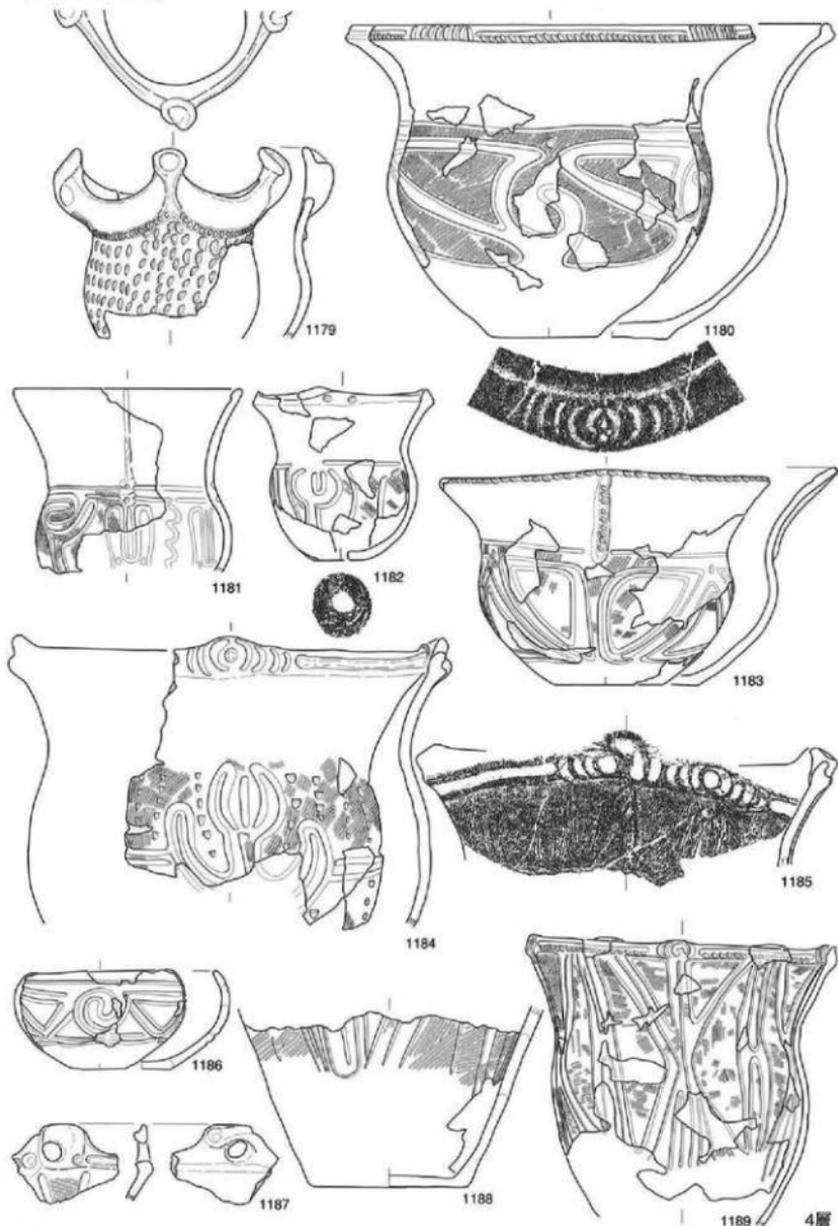
1178

3層

2層 : 1172-1176  
 3層 : 1177-1178

0 (9-1.4) 20cm  
 1172-1178=1:4

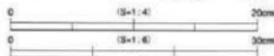
〈C6-20グリッド②〉



4層 : 1179~1189

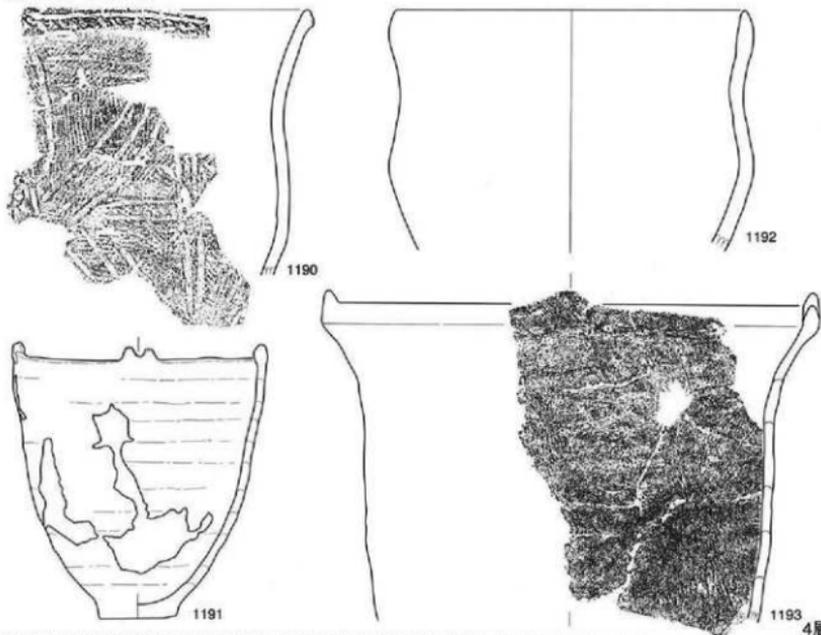
1179~1188=1:4

1189=1:6

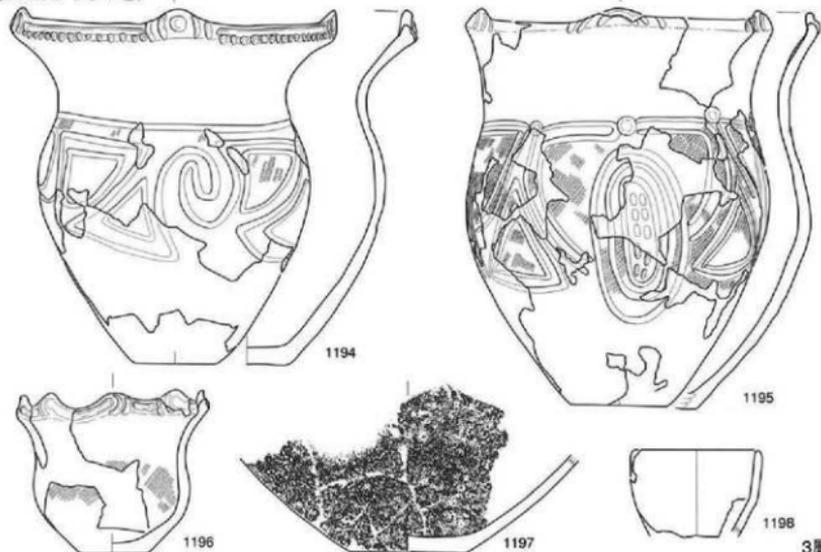


4層

(C6-20グリッド③)



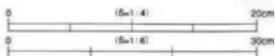
(C6-22グリッド①)



C6-20グリッド 4層：1190～1193  
C6-22グリッド 3層：1194～1198

1190・1192～1198=1:4

1191=1:6



(C6-20グリッド④)



1199



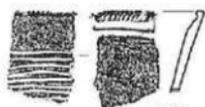
1200



1201

1層

3層



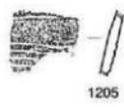
1202



1203



1204



1205



1206



1207



1208



1209



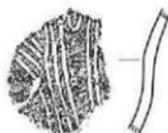
1211



1212



1213



1210



1214



1215



1216



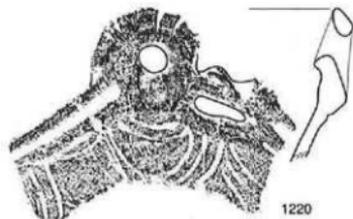
1217



1218



1219



1220



1221



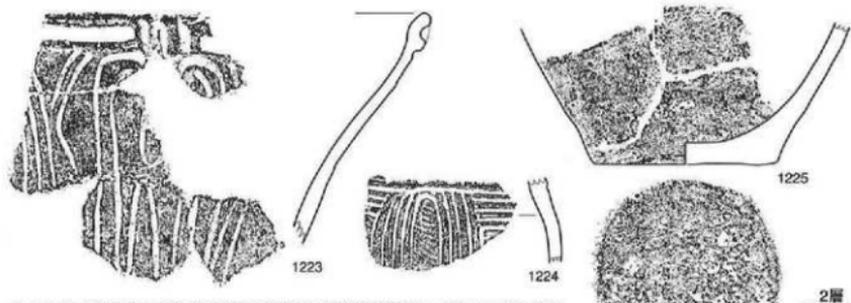
1222

2層

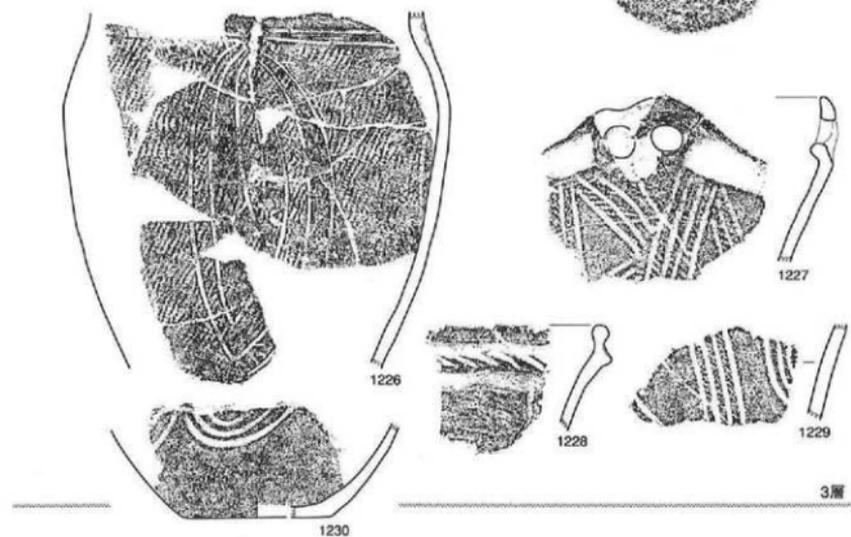
1層 : 1199~1200 3層 : 1201  
2層 : 1202~1222

0 15cm (5:1:3)  
1199~1222=1:3

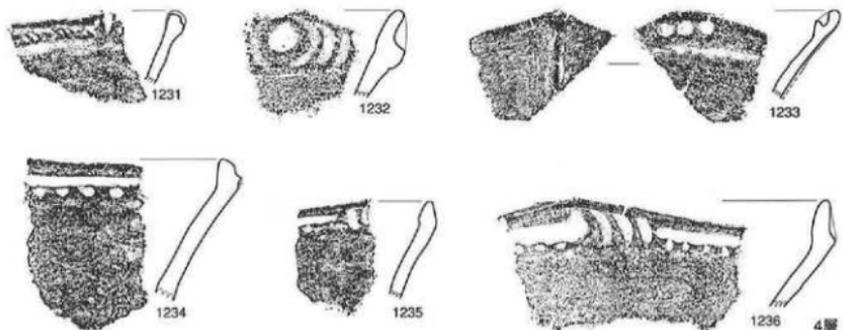
(C6-20グリッド⑤)



2層



3層

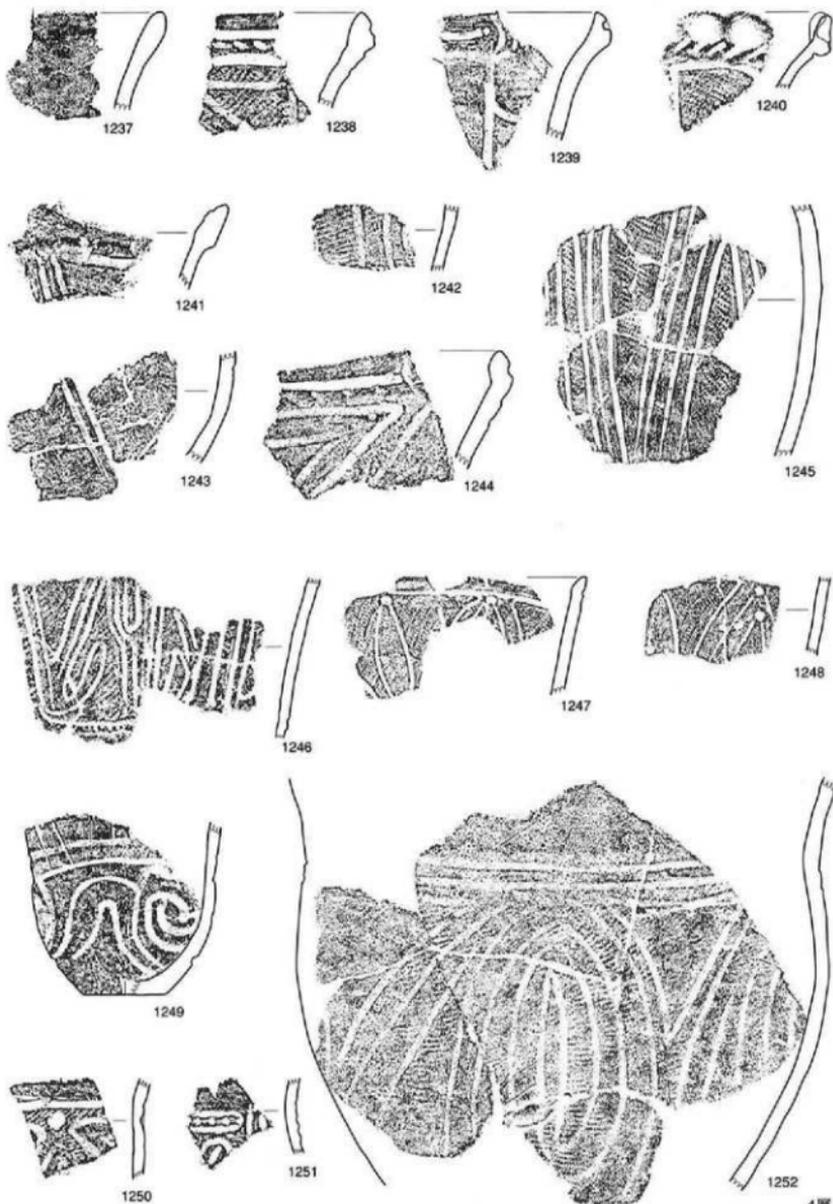


4層

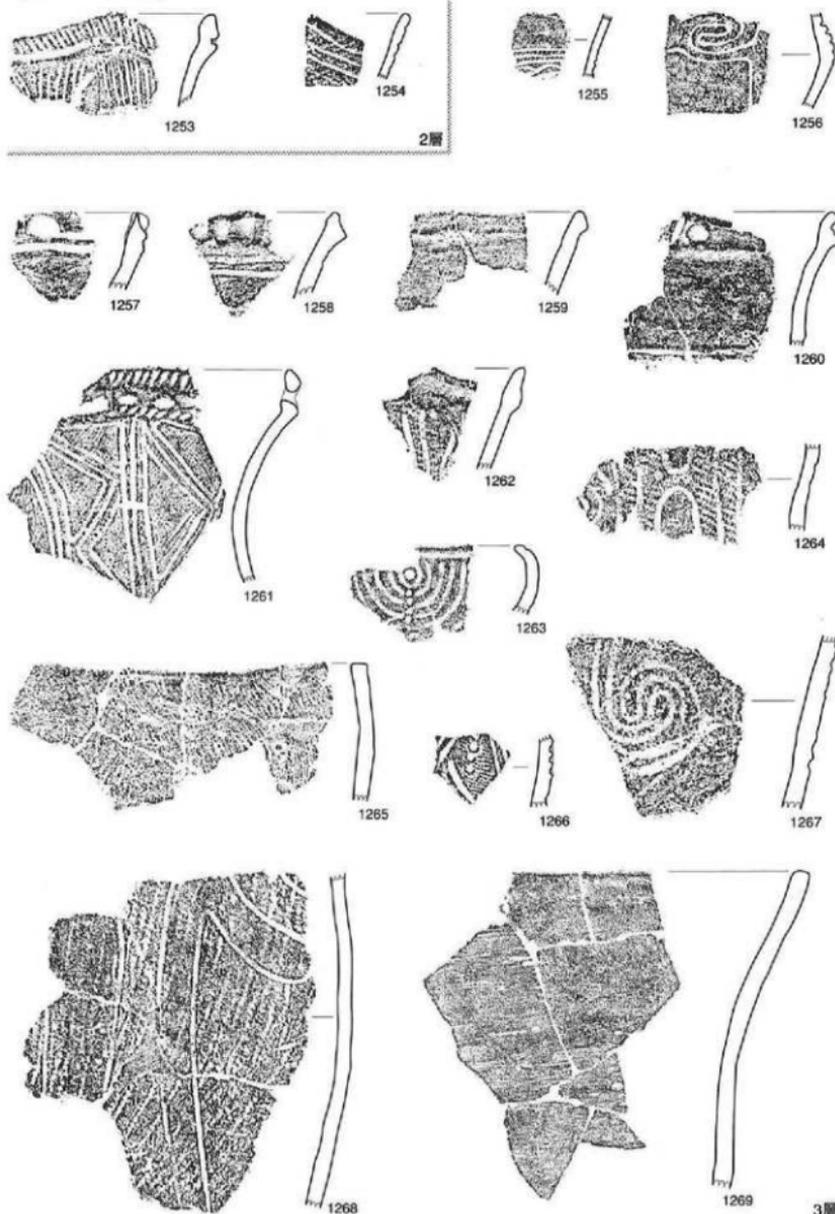
2層 : 1223~1225    4層 : 1231~1236  
 3層 : 1226~1230

1223~1225・1227~1236=1 : 3    0 (S=1:3) 15cm  
 1226=1 : 4    0 (S=1:4) 20cm

〈C6-20グリッド⑥〉



〈C6-22グリッド②〉

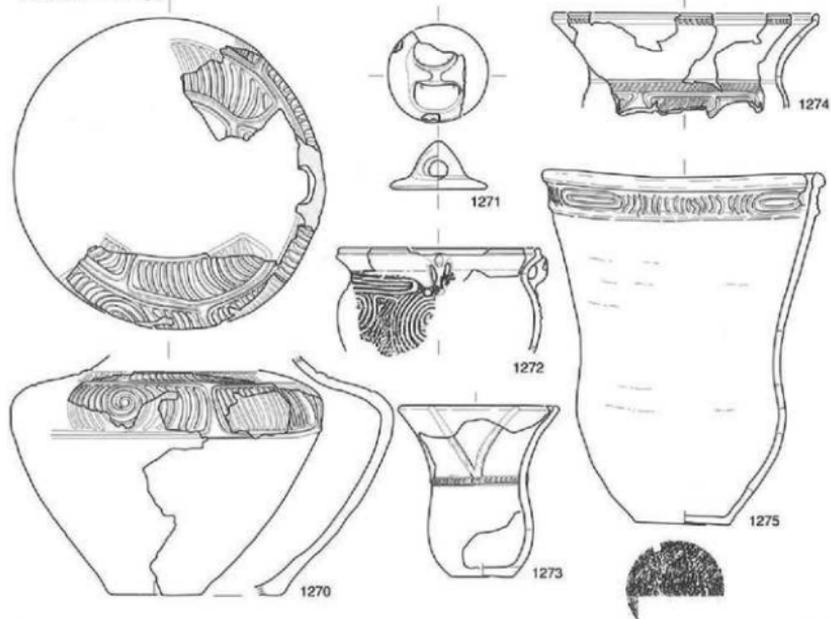


2層 : 1253~1254  
 3層 : 1255~1269

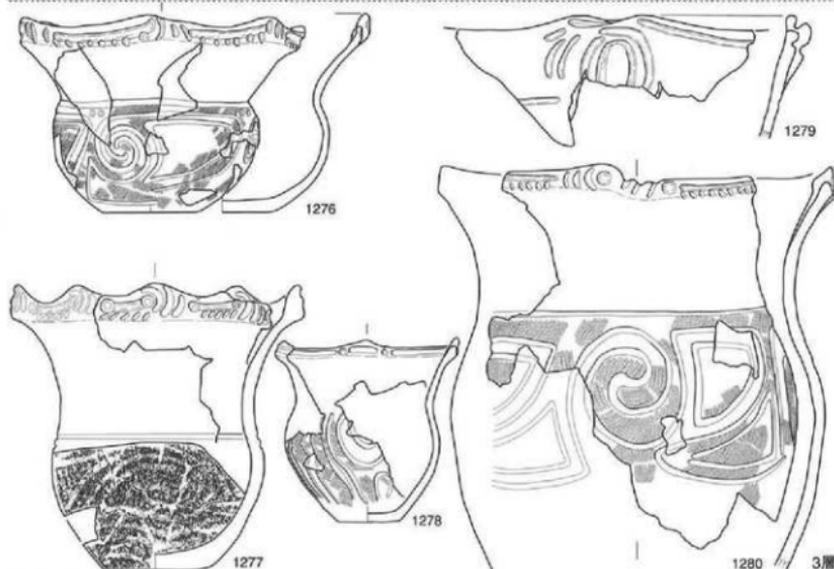
1253~1269=1:3 0 5(=1:3) 15cm

3層

(C6-23グリッド①)



2層

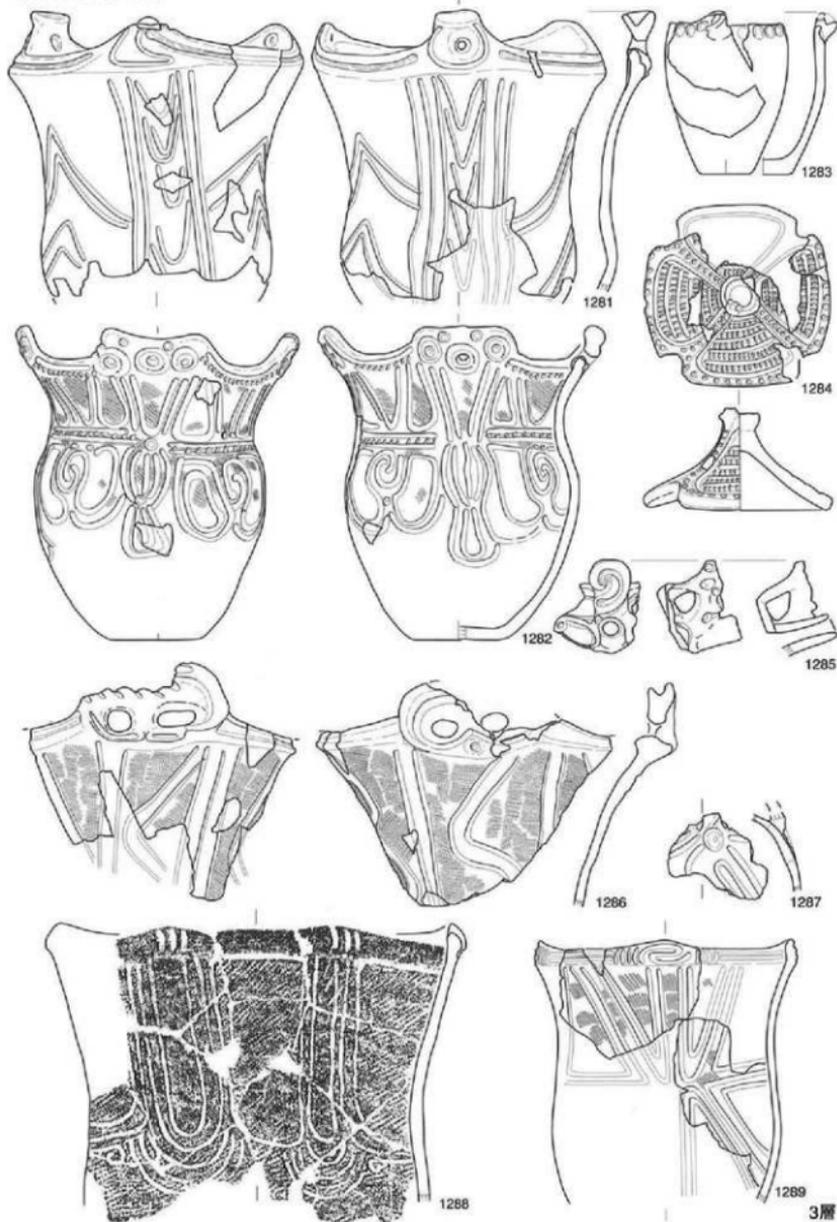


3層

2層 : 1270~1275  
3層 : 1276~1280

0 20mm (S=1:4)  
0 30cm (S=1:6)  
1270~1274・1276~1280=1:4  
1275=1:6

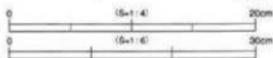
(C6-23グリッド②)



3層 : 1281~1289

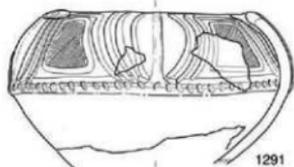
1281~1288=1:4

1289=1:6

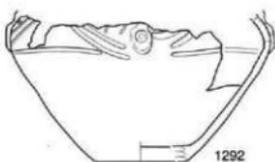




1290



1291



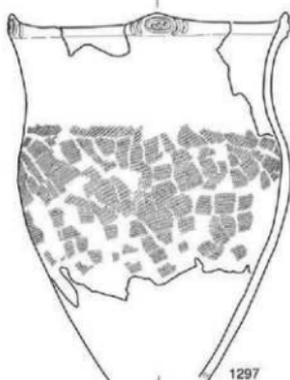
1292



1295



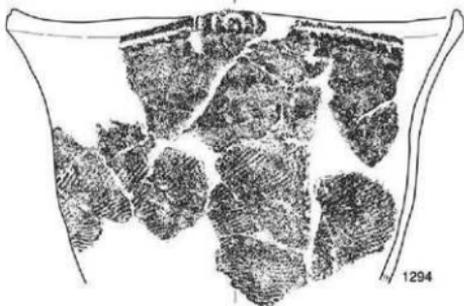
1296



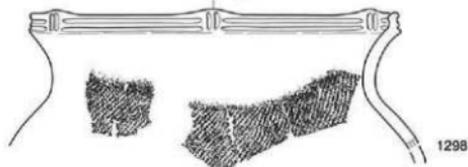
1297



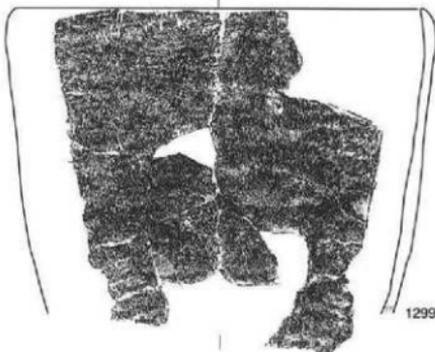
1293



1294



1298

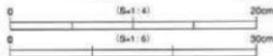


1299

3層 : 1290～1299

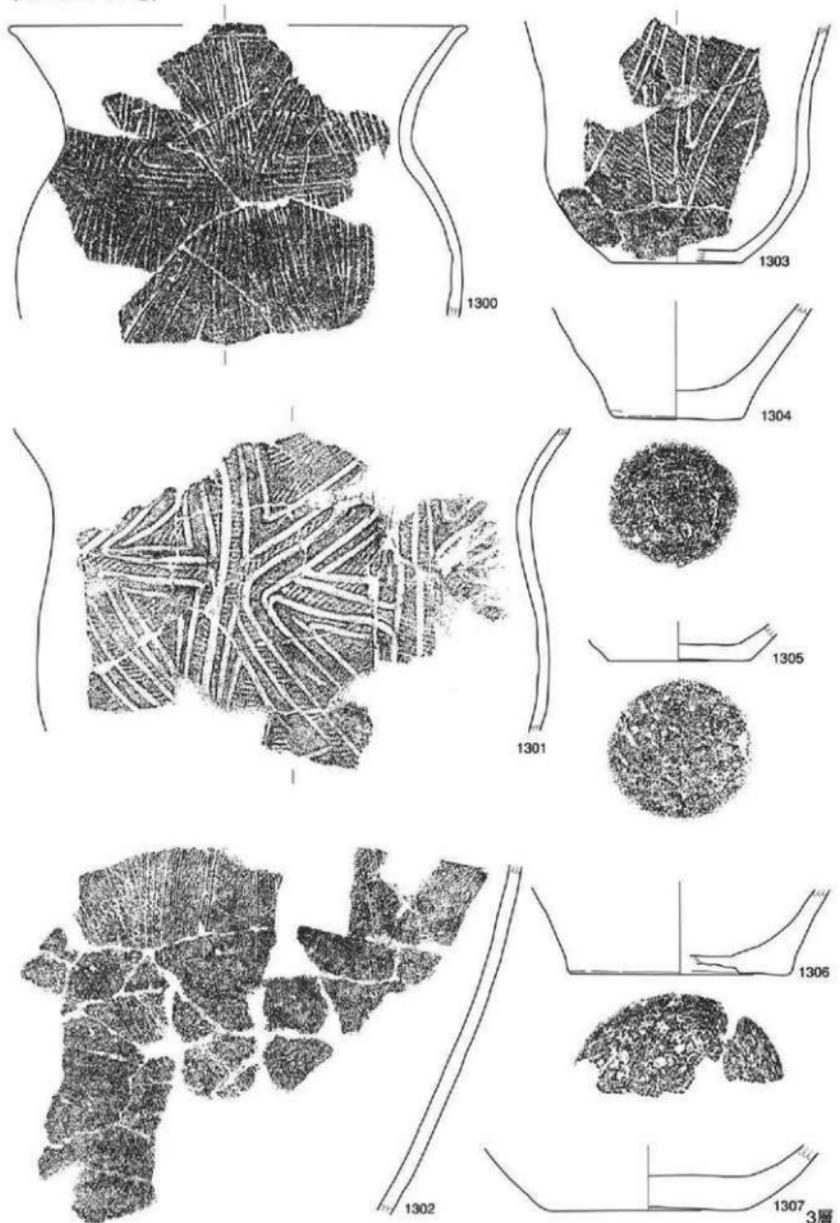
1290～1295・1298・1299=1:4

1297=1:6



3層

(C6-23グリッド④)



2層 : 1305

3層 : 1300~1305・1307

1303~1307=1:3

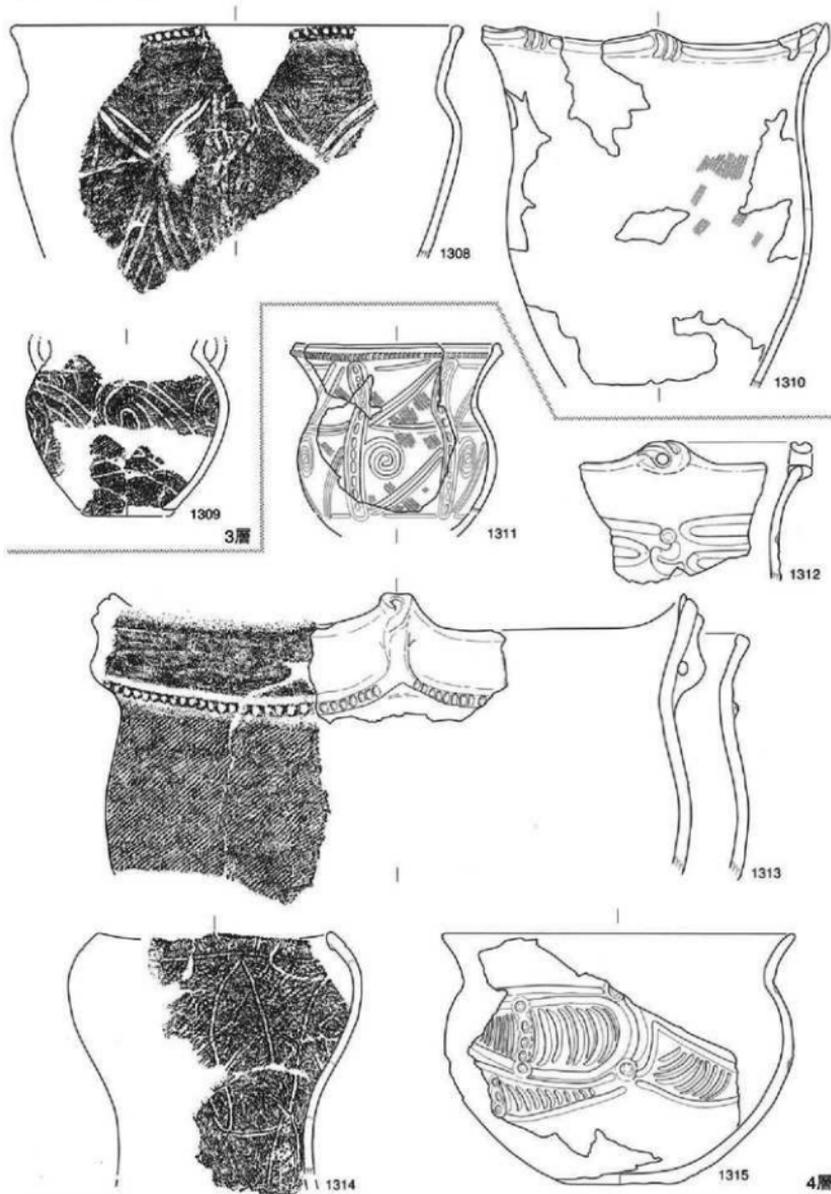
0 0 15cm

1300~1302=1:4

0 0 20cm

3層

〈C6-23グリッド⑤〉

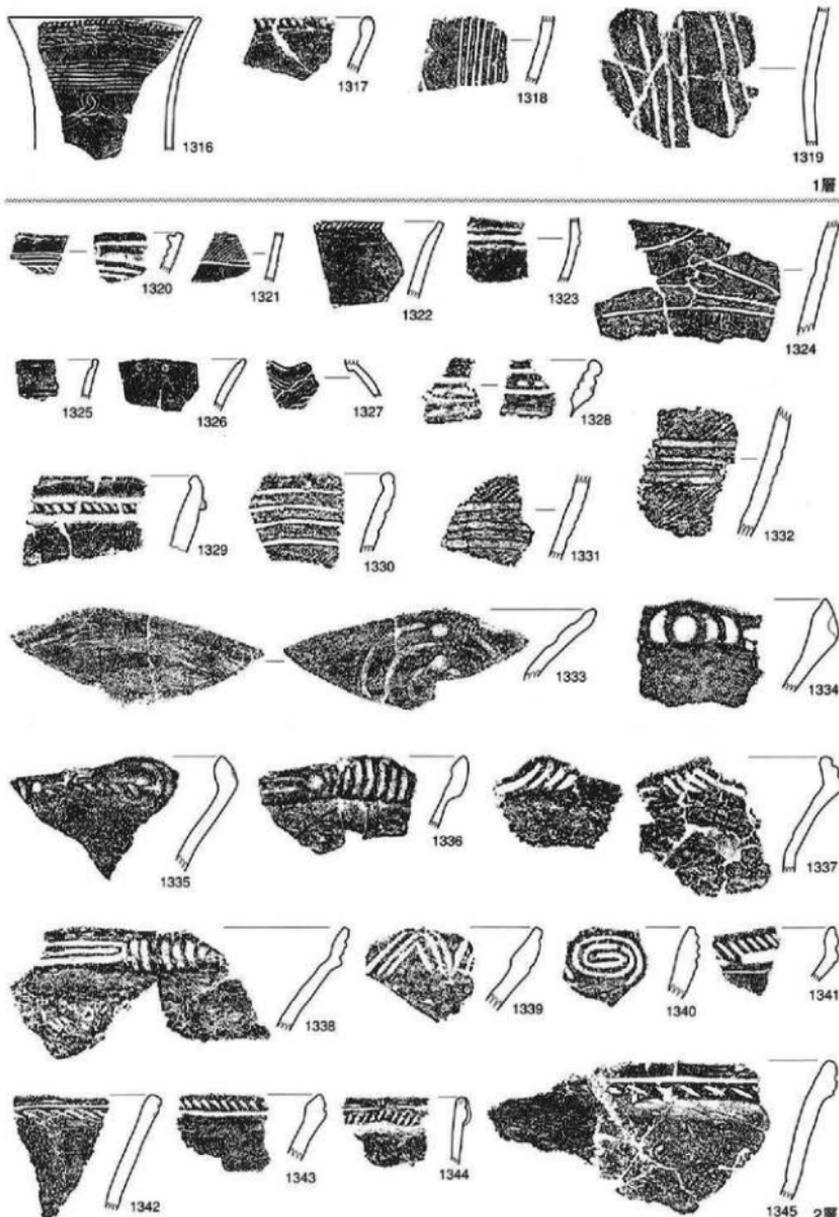


3層 : 1308~1310  
4層 : 1311~1315

1308~1309・1311~1315=1:4  
1310=1:6

0 50cm 100cm  
(5=1:4)  
(5=1:6)

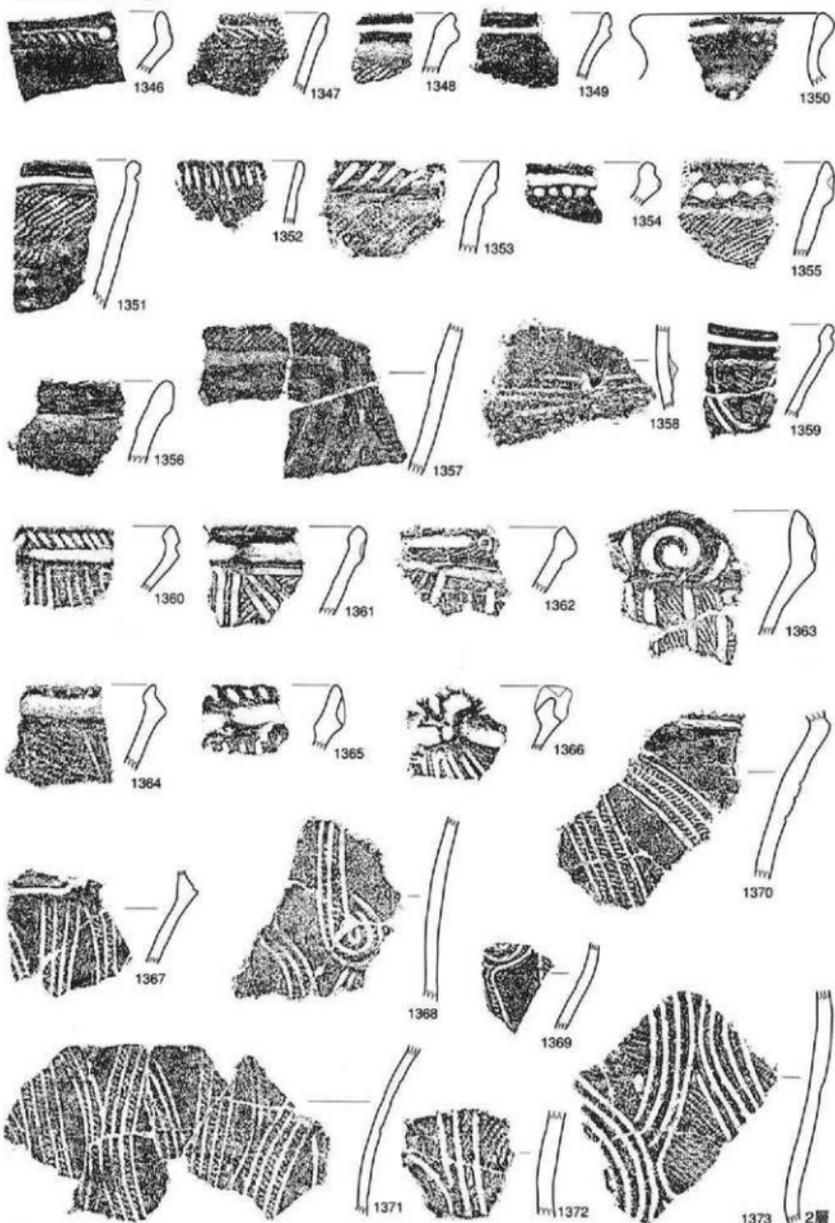
(C6-23グリッド⑥)



1層 : 1316—1319  
 2層 : 1320—1345

0 (9=1:3) 15cm  
 1316~1345=1:3

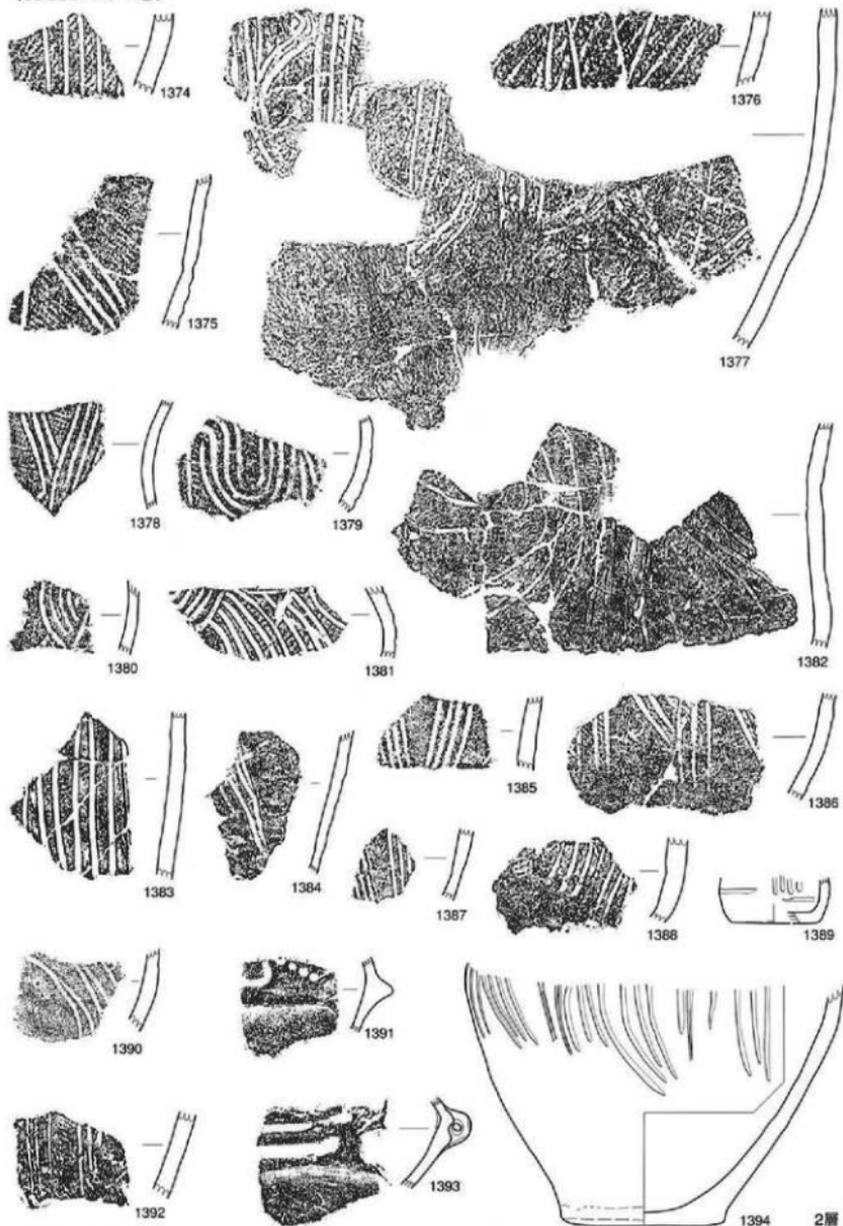
(C6-23グリッド⑦)



2層 : 1346~1373

1346~1373-1 : 3 0 15mm (5x1 : 2)

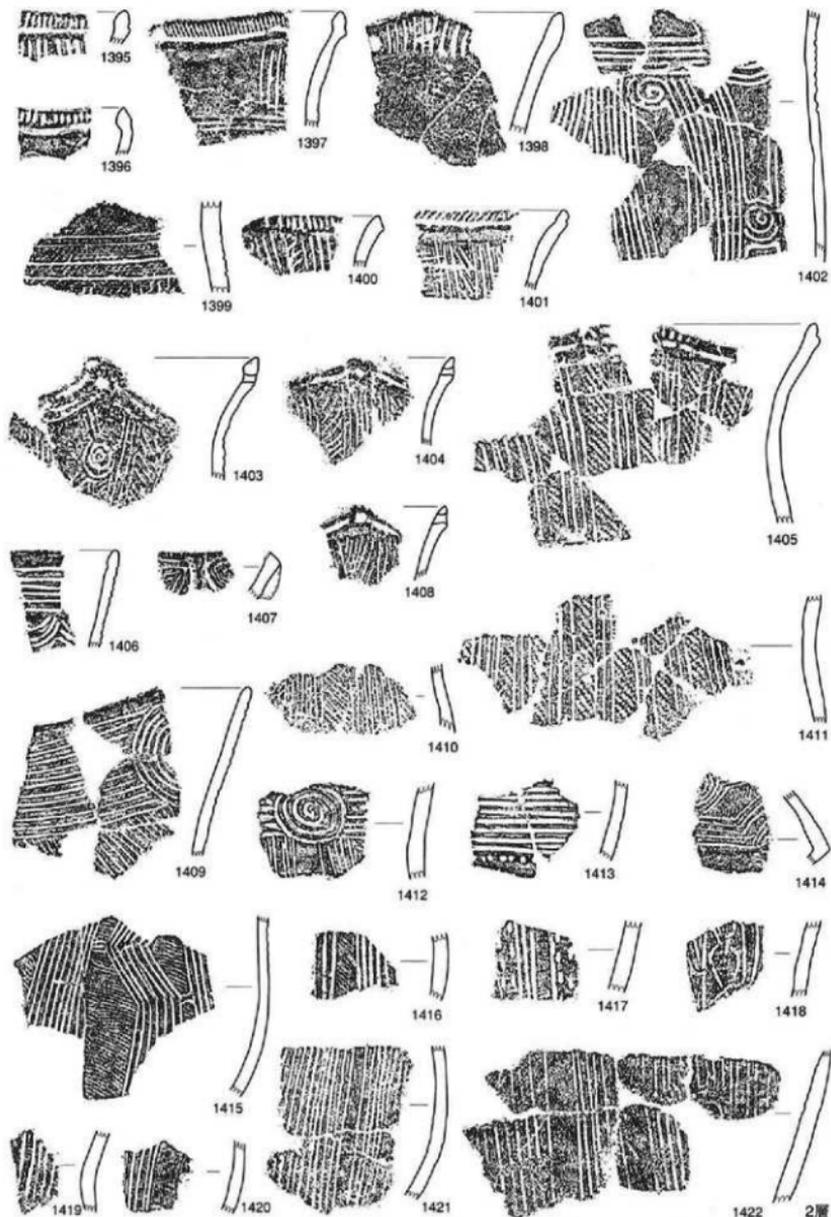
〈C6-23グリッド⑧〉



2層 : 1374~1394

0 15cm  
1374~1394=1 : 3 (5=1 : 3)

〈C6-23グリッド⑨〉



2層 : 1395~1422

0 (5:1:3) 15cm  
1395~1422=1:3

(C6-23グリッド00)



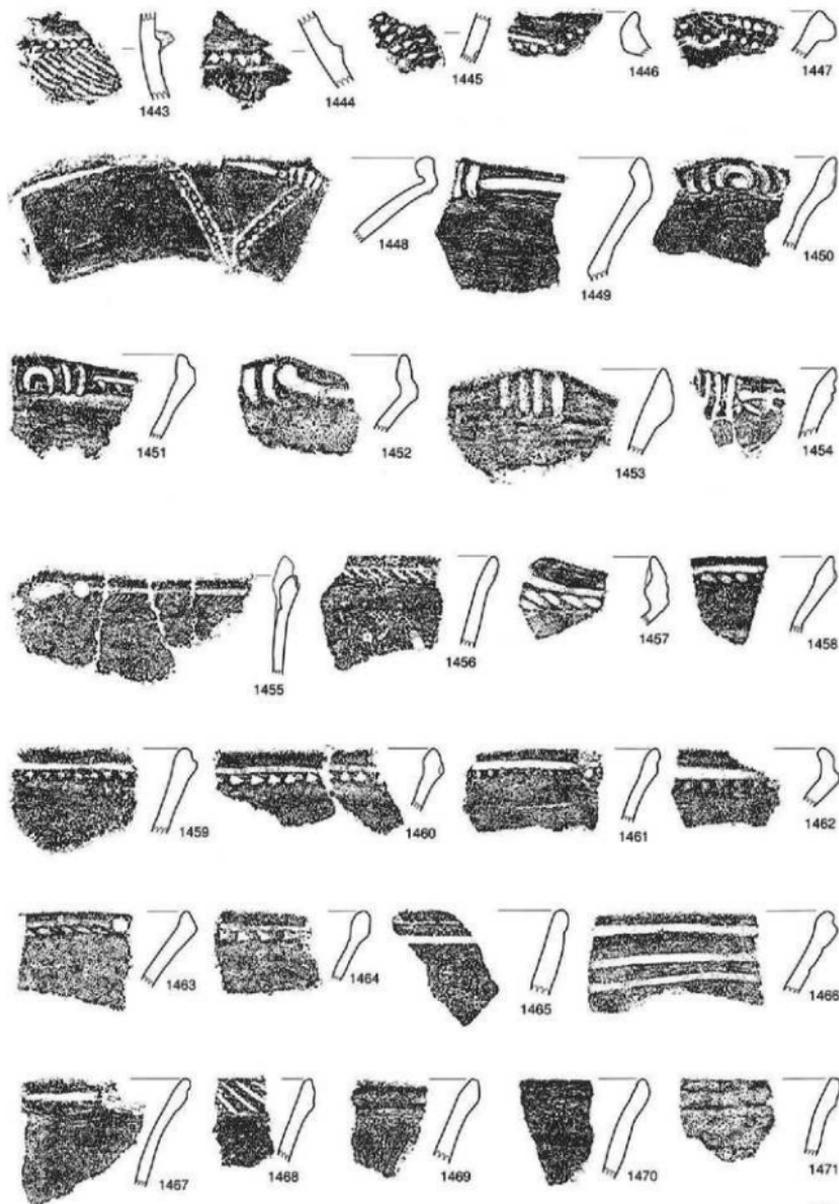
2層 : 1423~1442

1423~1442=1:3

0 5(=1:3) 10cm

2層

〈C6-23グリッド印〉

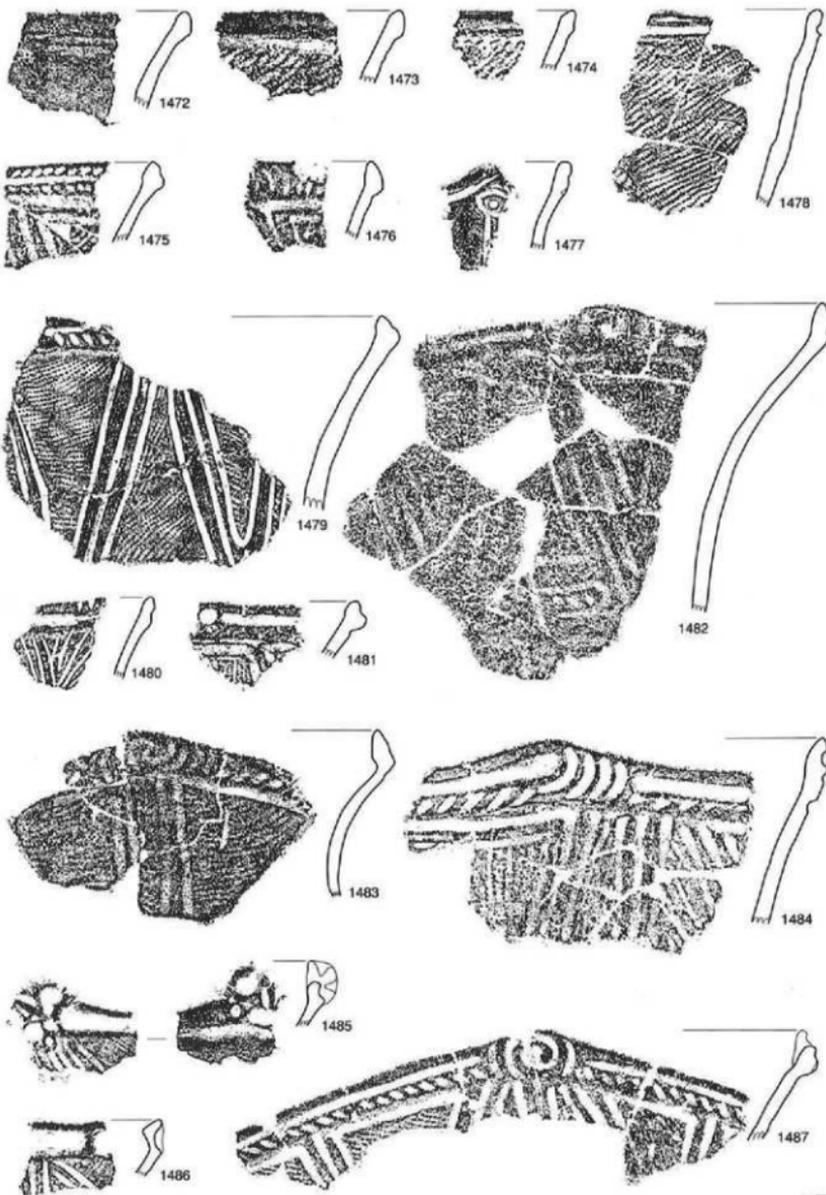


3層 : 1443~1471

0 5(=1:3) 15cm  
1443~1471=1 : 3

3層

〈C6-23グリッド②〉

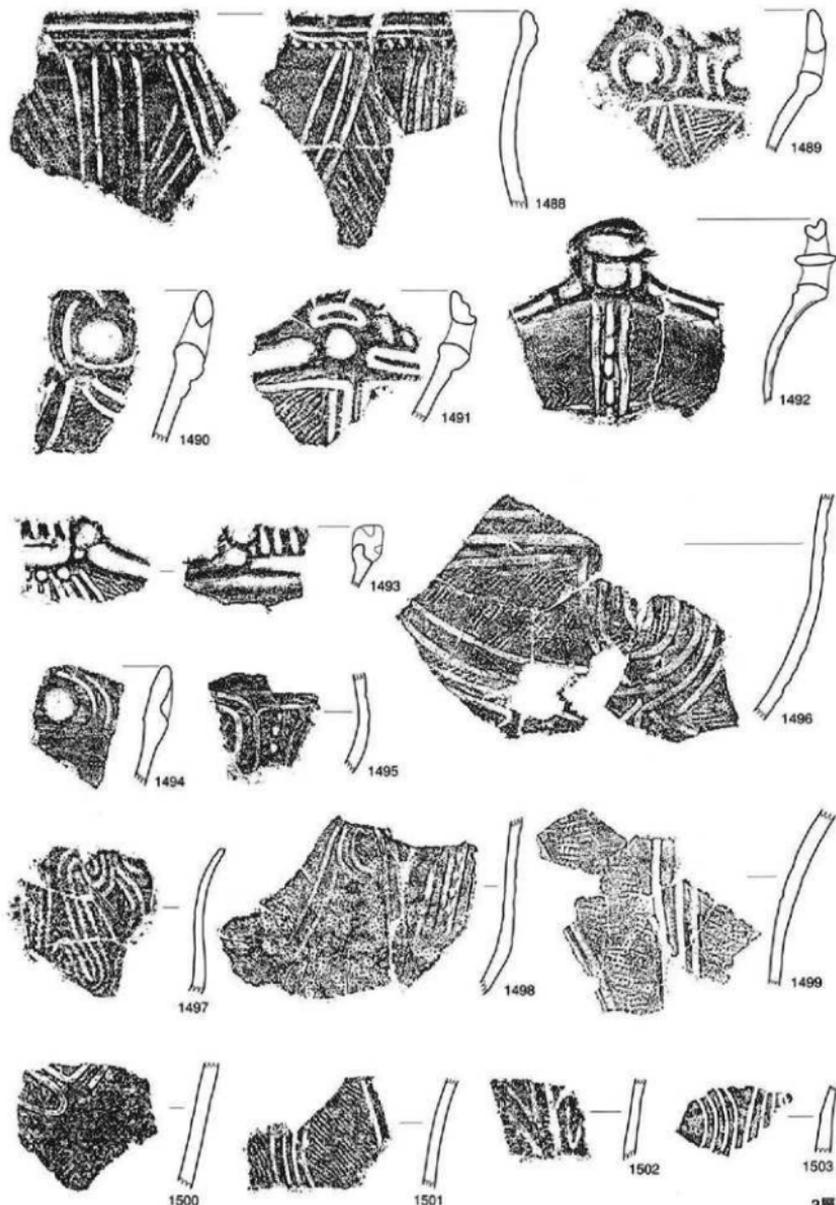


3層 : 1472~1487

0 (5=1:3) 15cm  
 1472~1487=1 : 3

3層

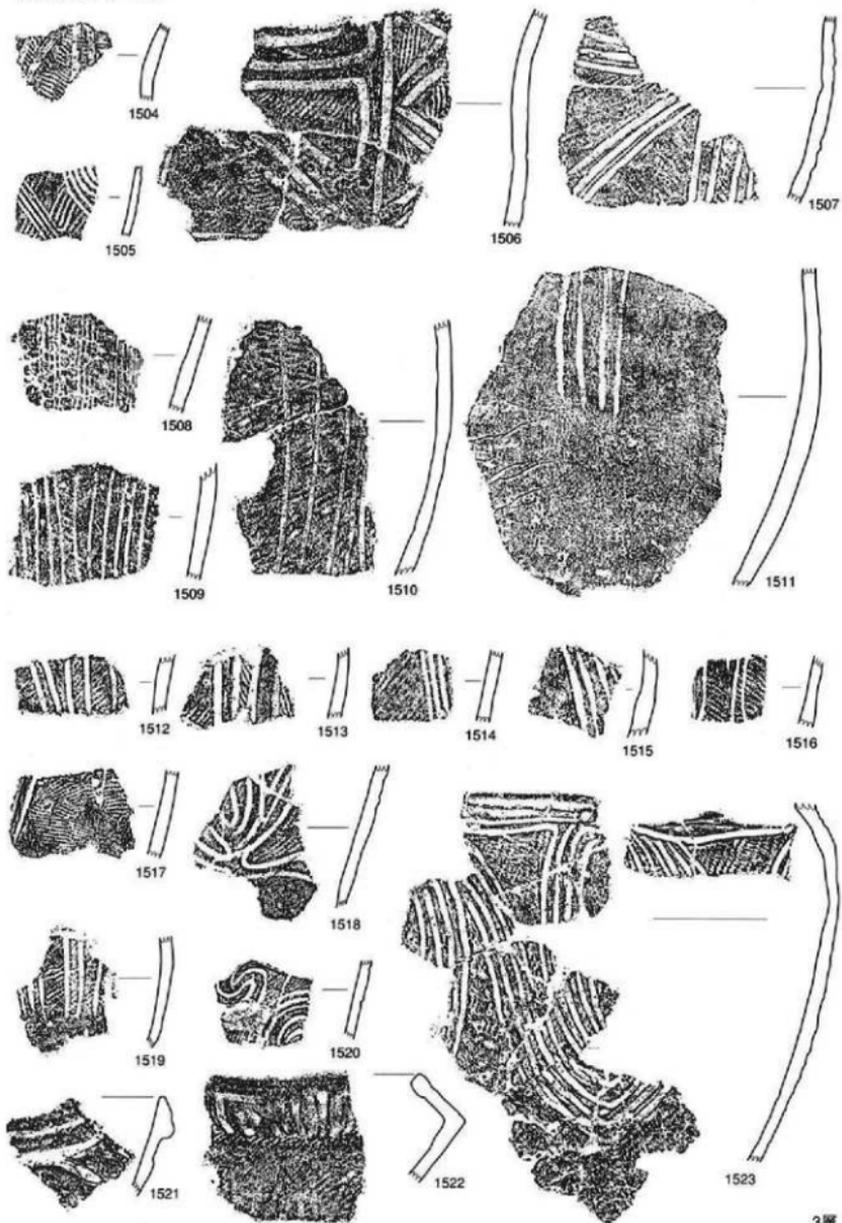
(C6-23グリッド⑬)



3層 : 1488~1503

1488~1503-1 : 3 0 (5:1:3) 15cm

〈C6-23グリッド④〉



2層 : 1521

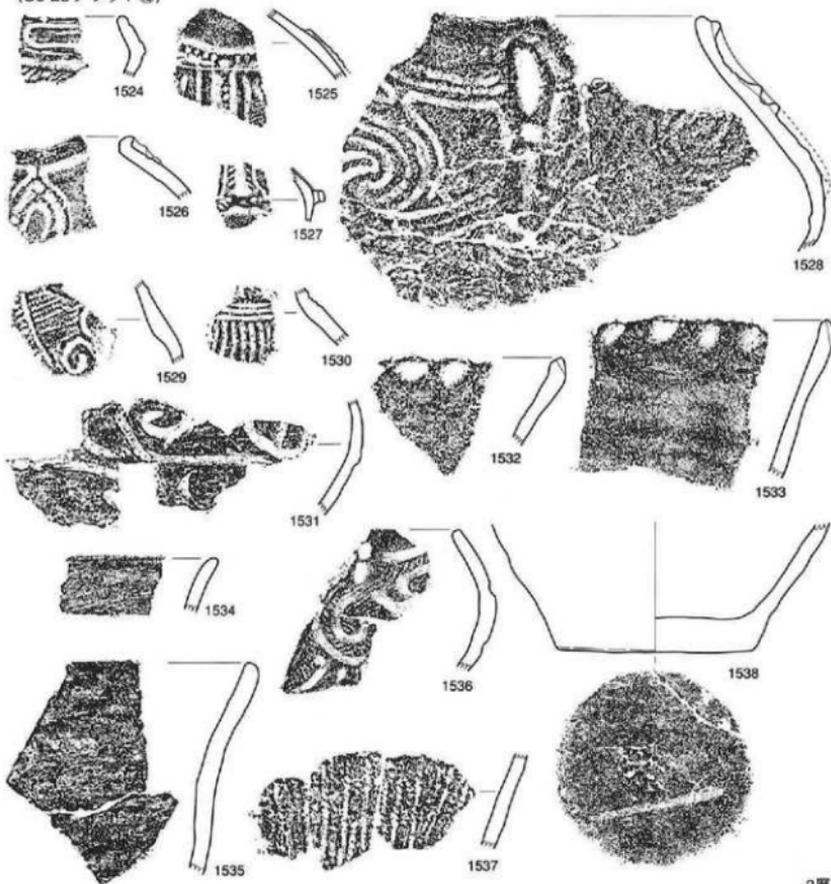
3層 : 1504~1520・1522・1523

1504~1523=1:3

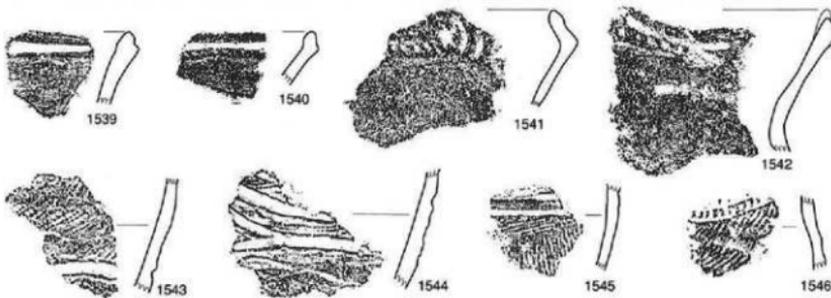
0 (5x1:3) 15cm

3層

〈C6-23グリッド⑤〉



3層

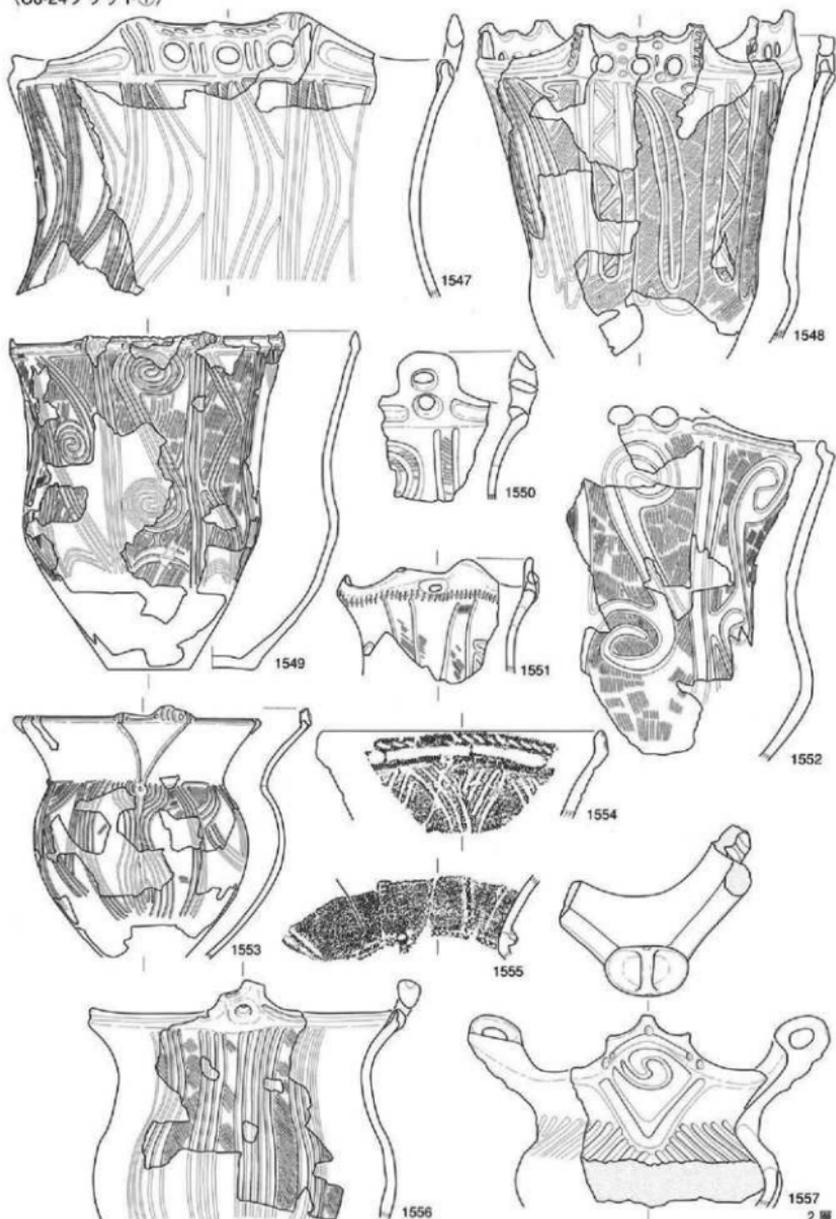


4層

3層 : 1524~1538  
4層 : 1539~1546

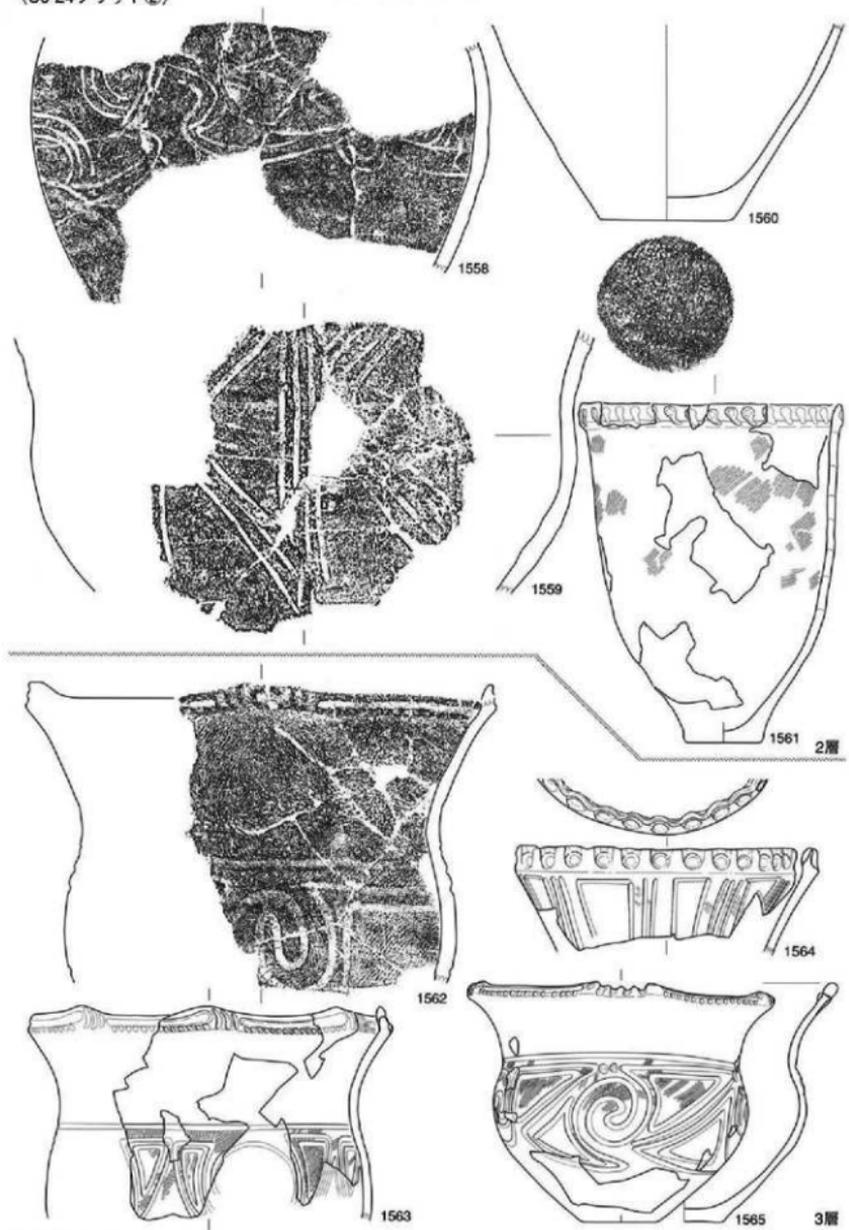
0 15cm  
1524~1546-1 : 3 (3x1.2)

(C6-24グリッド①)



2層 : 1547~1557





2層 : 1558~1561  
3層 : 1562~1565

0 (B-1:4) 20mm  
1558~1580・1562・1564-1:4  
0 (B-1:6) 30mm  
1561・1563・1565-1:6

〈C6-24グリッド③〉



3層：1566～1578

0 (S=1.3) 15cm

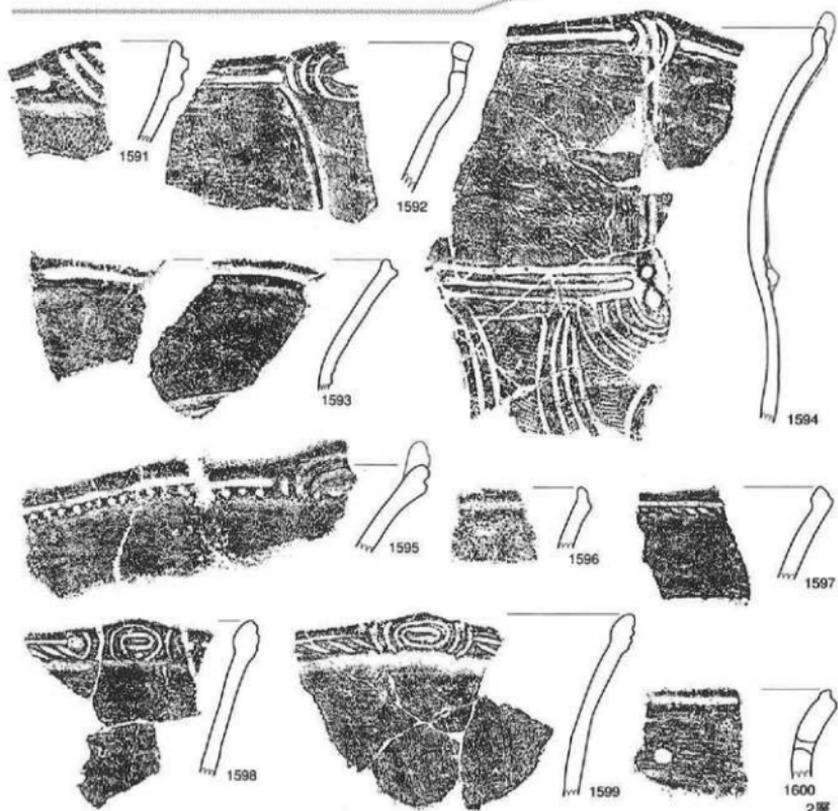
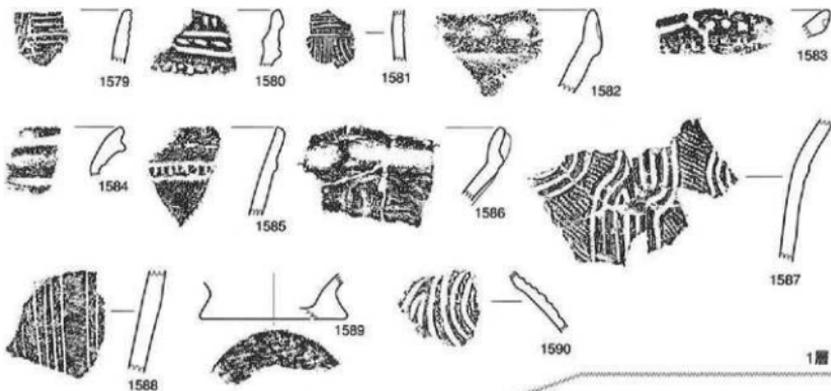
1566～1567・1575～1577=1：3 0 (S=1.4) 20cm

1568～1570・1572～1574・1578=1：4 0 (S=1.6) 30cm

1571=1：6

3層

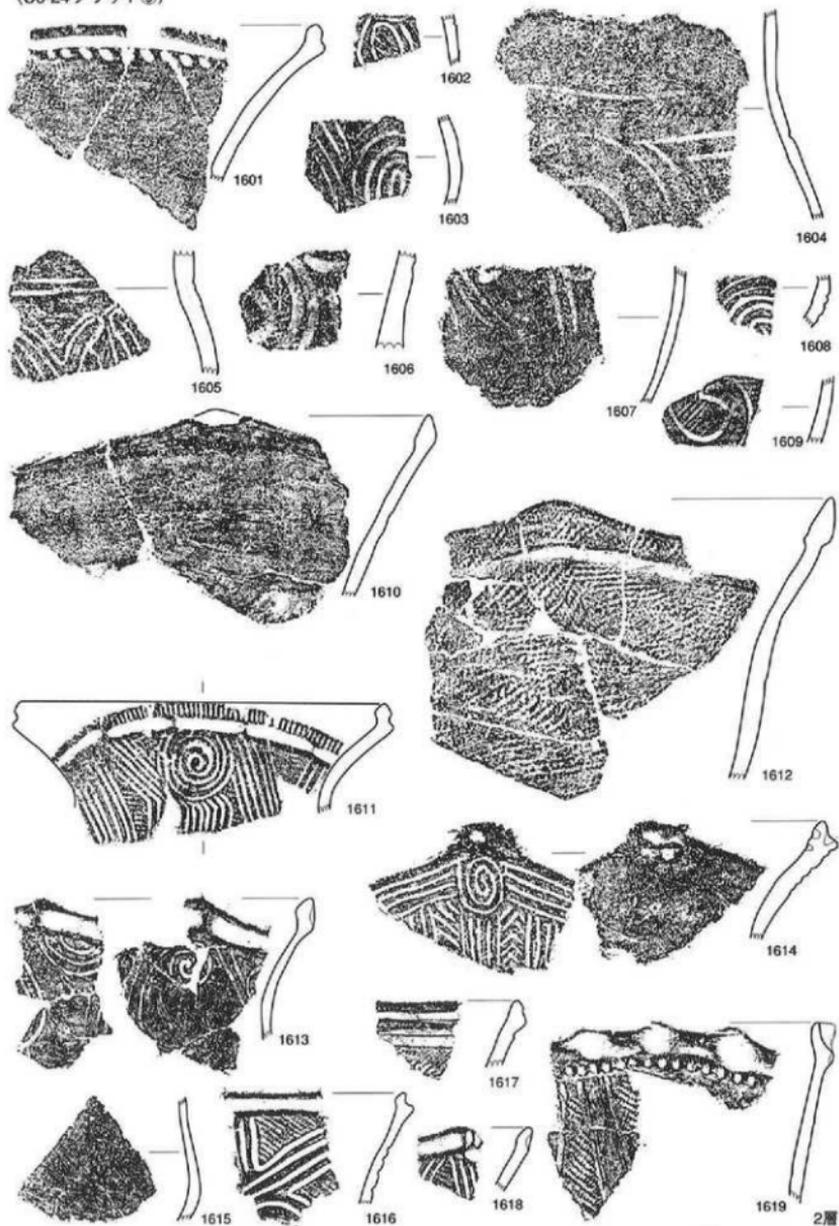
〈C6-24グリッド④〉



1層 : 1579~1590  
2層 : 1591~1600

0 (Scale: 1:3) 15cm

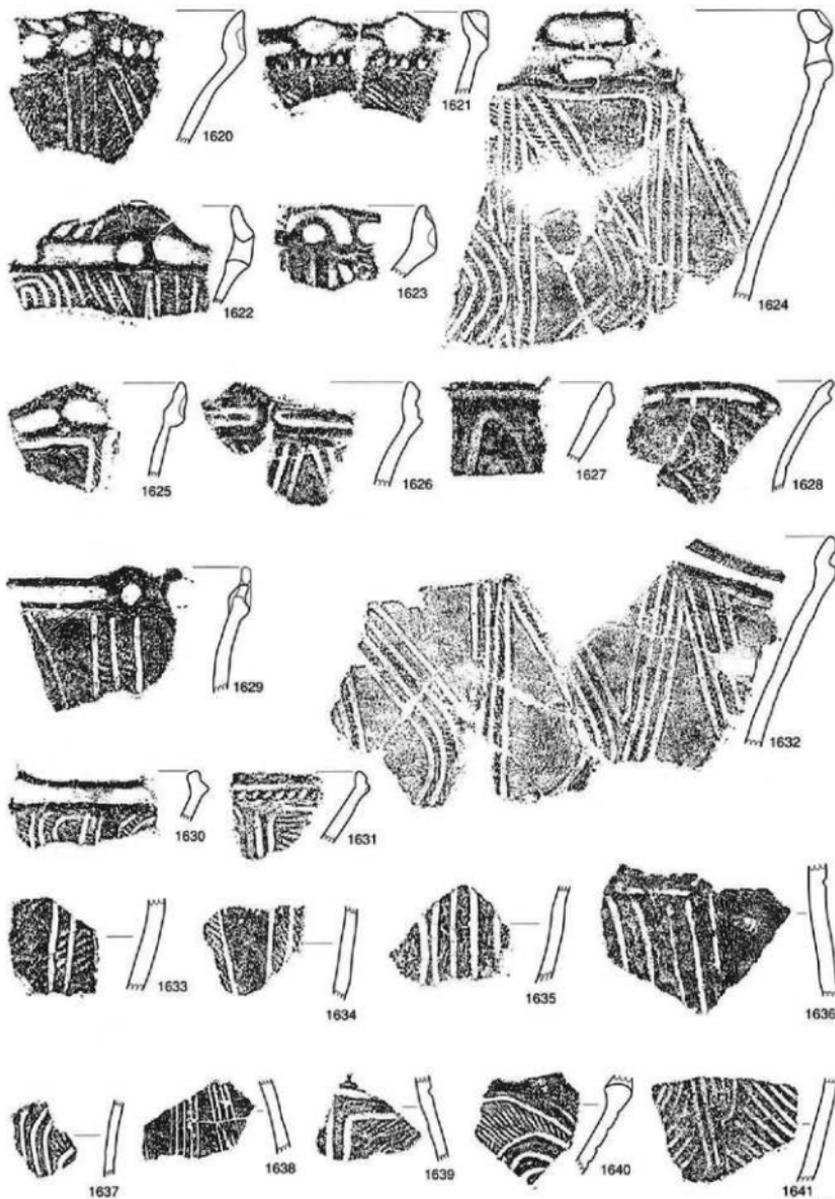
〈C6-24グリッド⑤〉



2層 : 1601~1619

0 15cm  
1601~1619=1 : 3 (5x1.3)

〈C6-24グリッド⑥〉

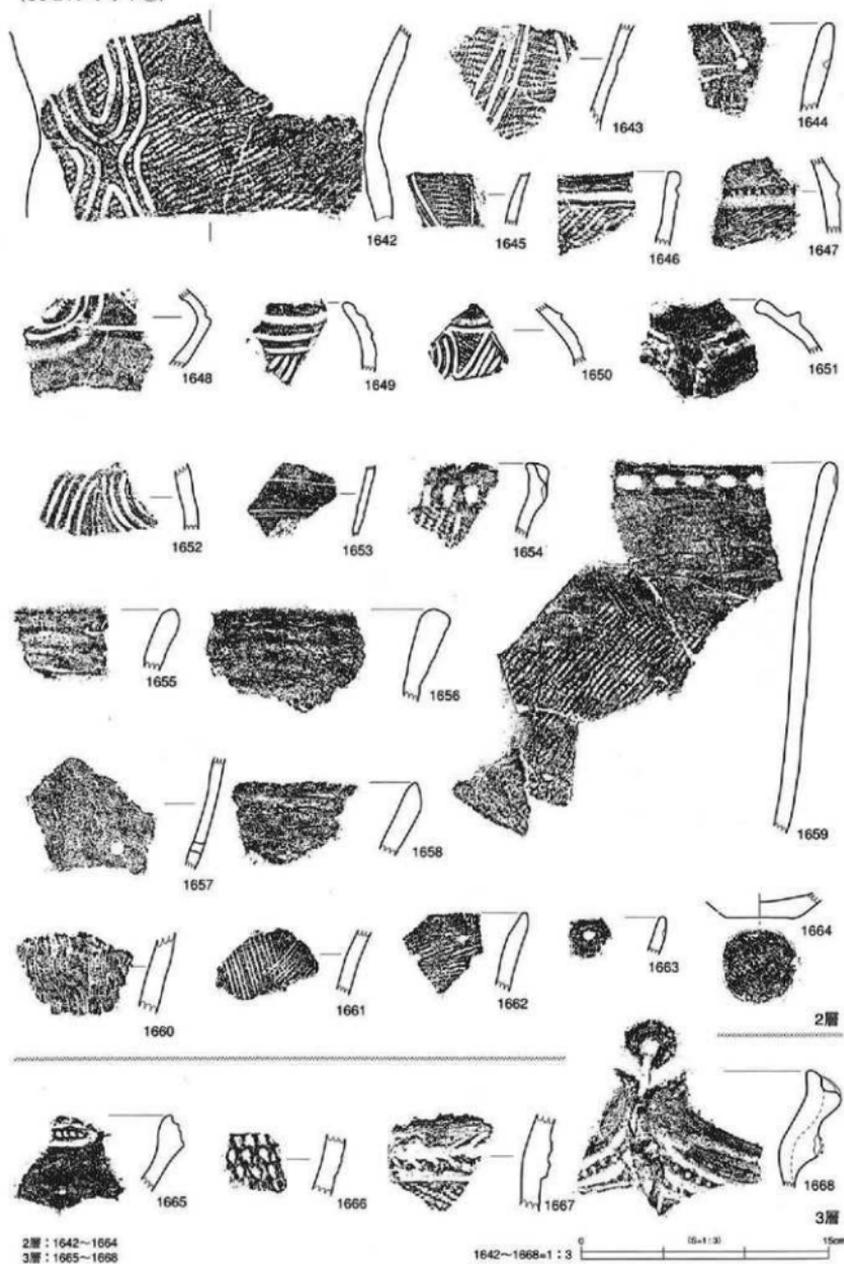


2層 : 1620~1641

1620~1641=1 : 3



(C6-24グリッド⑦)



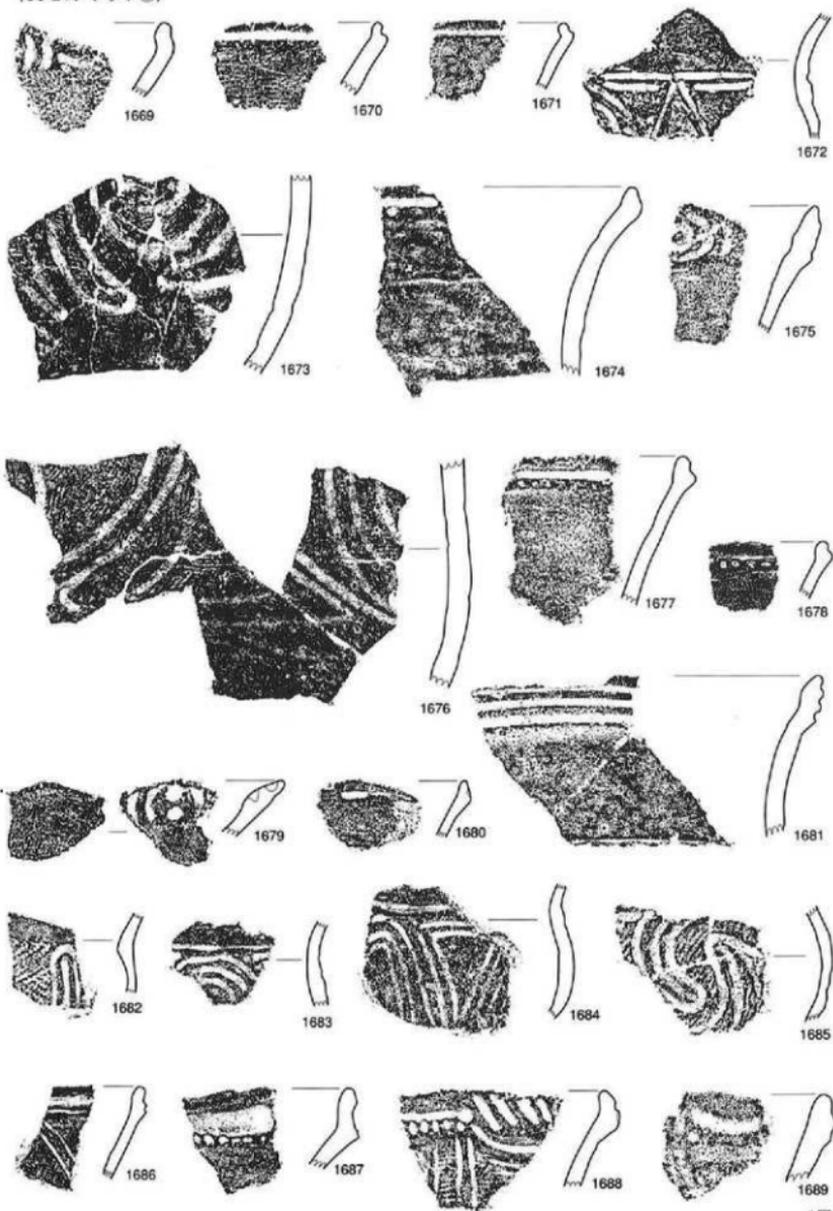
2層: 1642~1664  
3層: 1665~1668

1642~1668=1:3

(5-1:3)

15cm

〈C6-24グリッド⑧〉

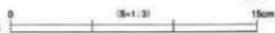


3層

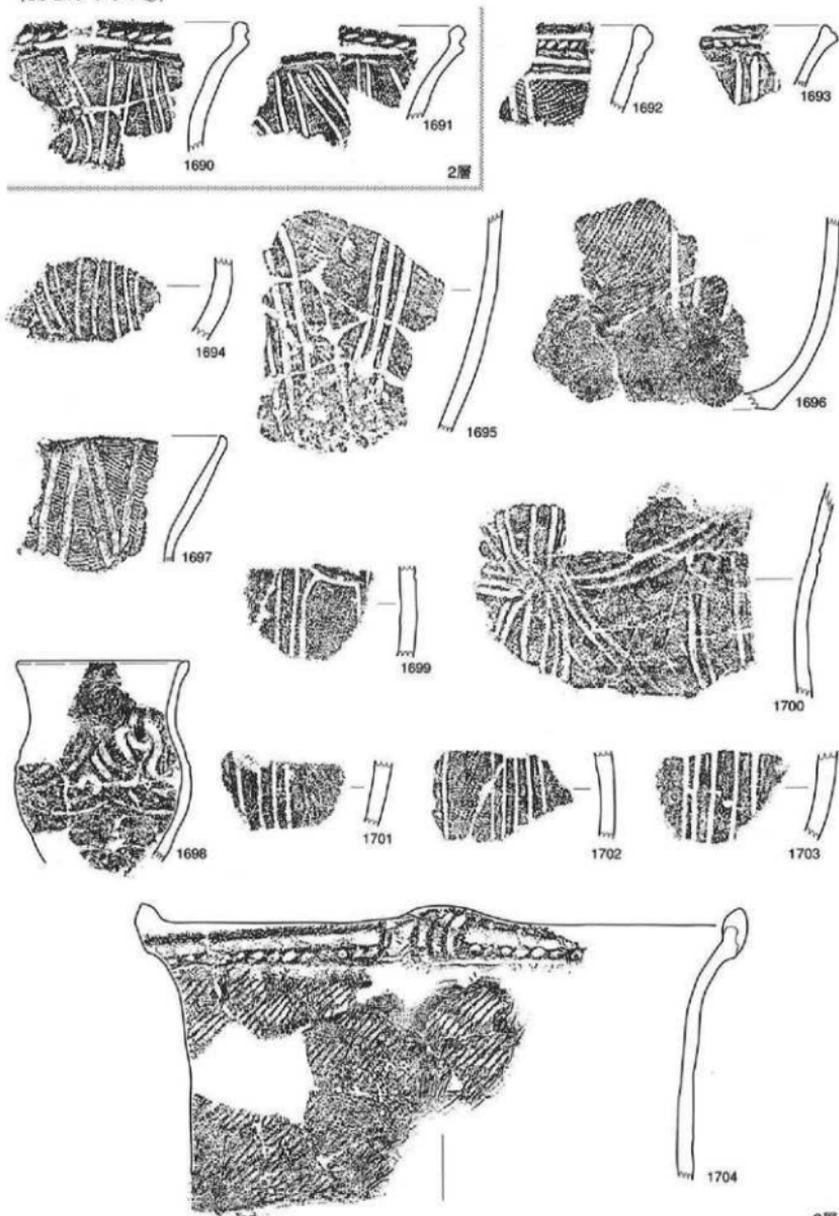
3層 : 1669・1671~1673・  
1675~1689

1670 : C6-20 3層  
1674 : C7-3 3層

1669~1689-1:3

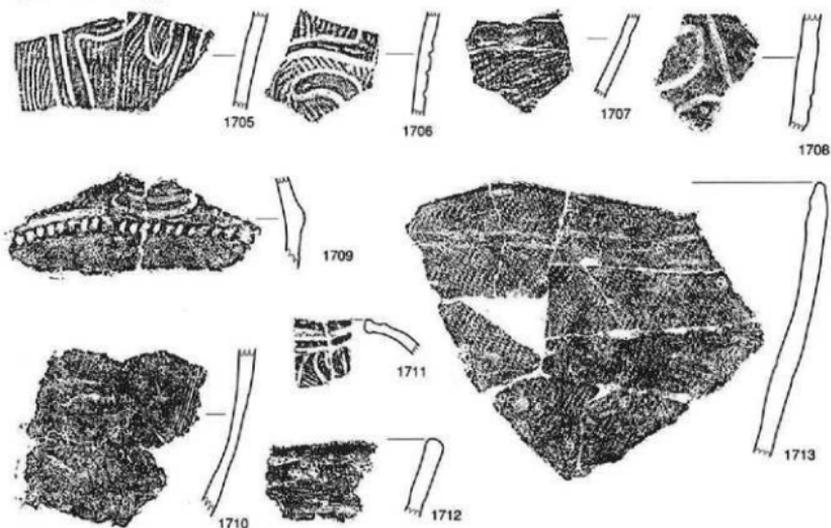


〈C6-24グリッド⑨〉

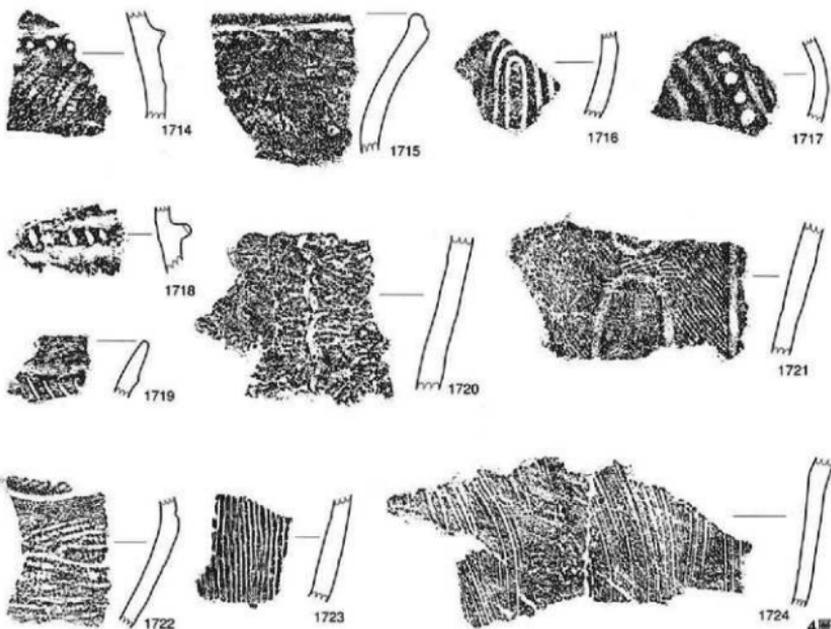


2層：1690～1691 3層：1692～1693・1695～1704  
1694：C6-23 3層

1690～1704-1 : 3  
0 5cm 15cm



3層

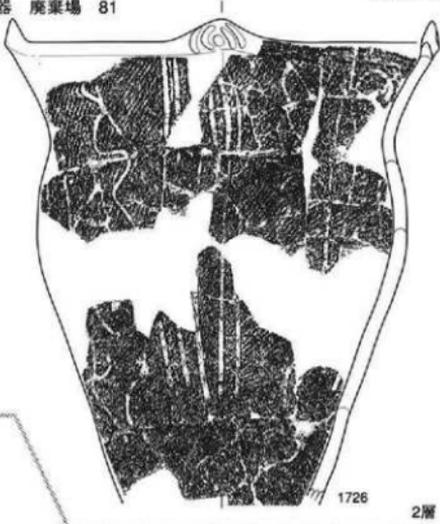
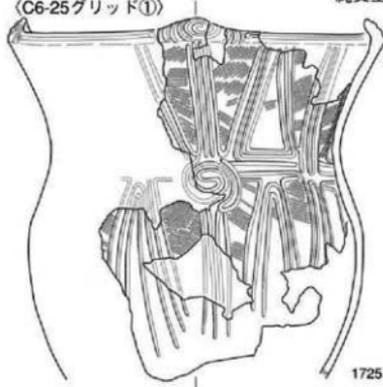


4層

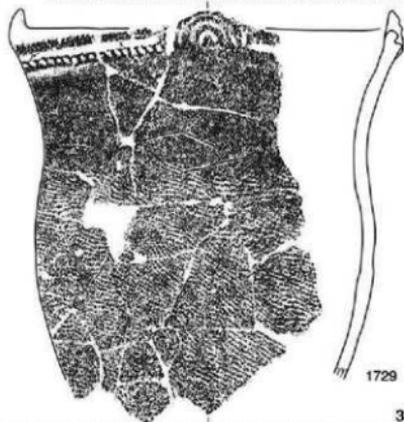
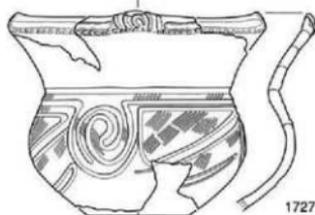
3層 : 1705~1713  
4層 : 1714~1724

1705~1724-1 : 3  
0 10cm  
1:1

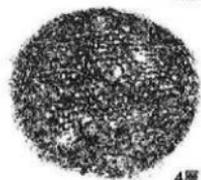
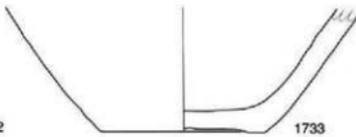
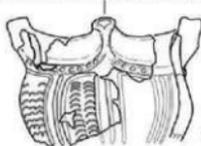
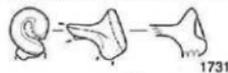
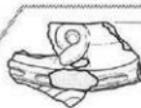
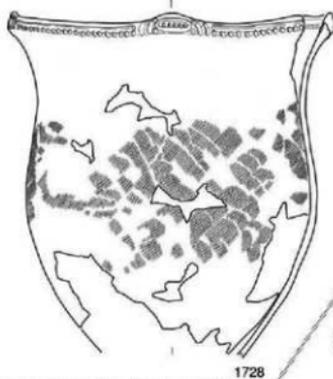
(C6-25グリッド①)



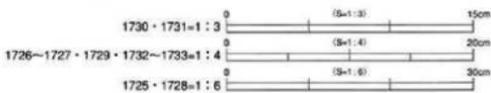
2層



3層



2層 : 1725—1726  
 3層 : 1727—1729  
 4層 : 1730—1733



〈C6-25グリッド②〉



1734

上層



1736



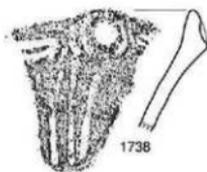
1735

1層



1737

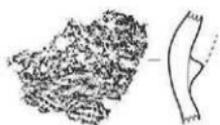
2層



1738



1739



1740

3層



1741



1743



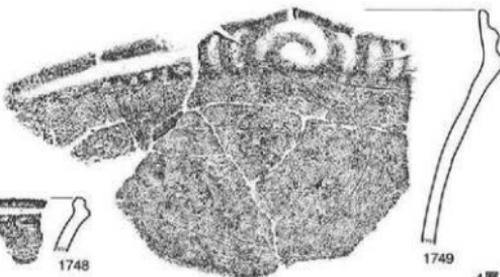
1742



1744



1745



1749

4層



1746



1747



1748

上層 : 1734

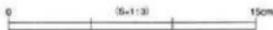
1層 : 1735

2層 : 1736~1737

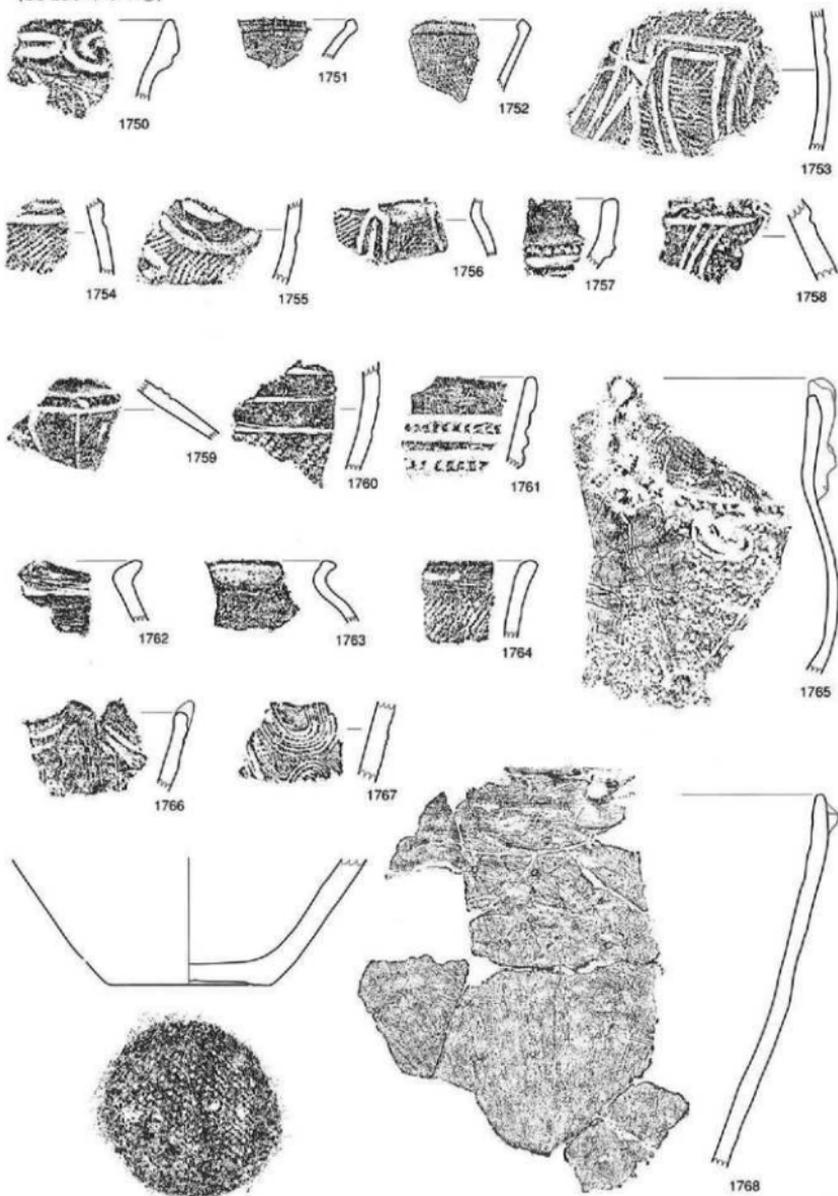
3層 : 1738~1740

4層 : 1741~1749

1734~1749=1:3



〈C6-25グリッド③〉



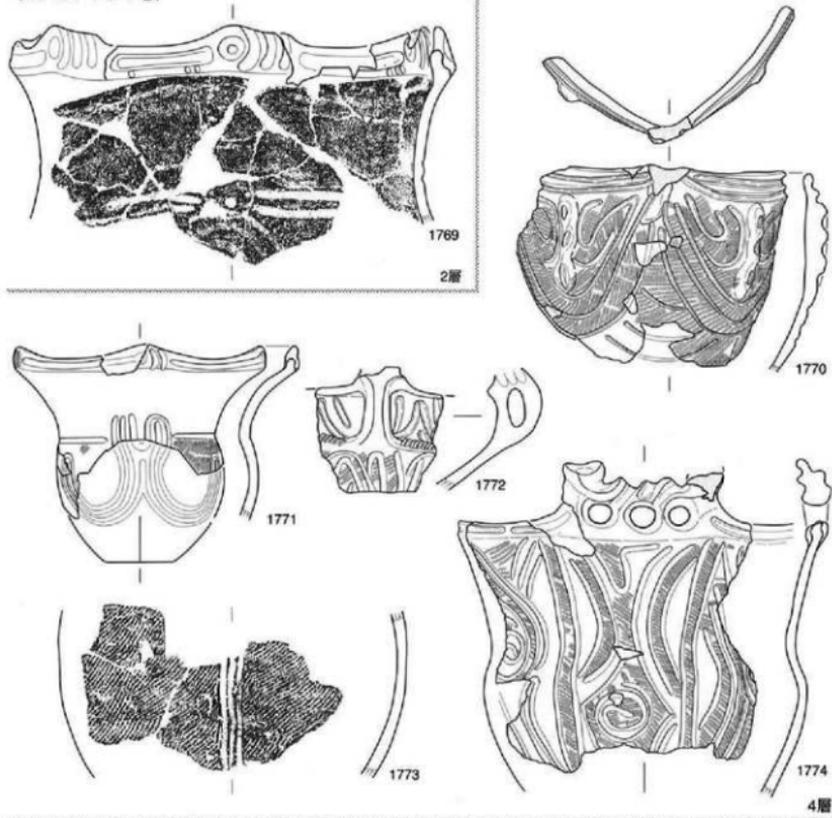
4層 : 1750-1768

1750-1768=1:3

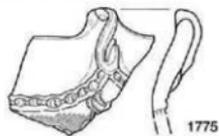
0 15cm

4層

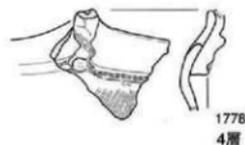
〈D6-16グリッド①〉



〈D6-17グリッド①〉



2層

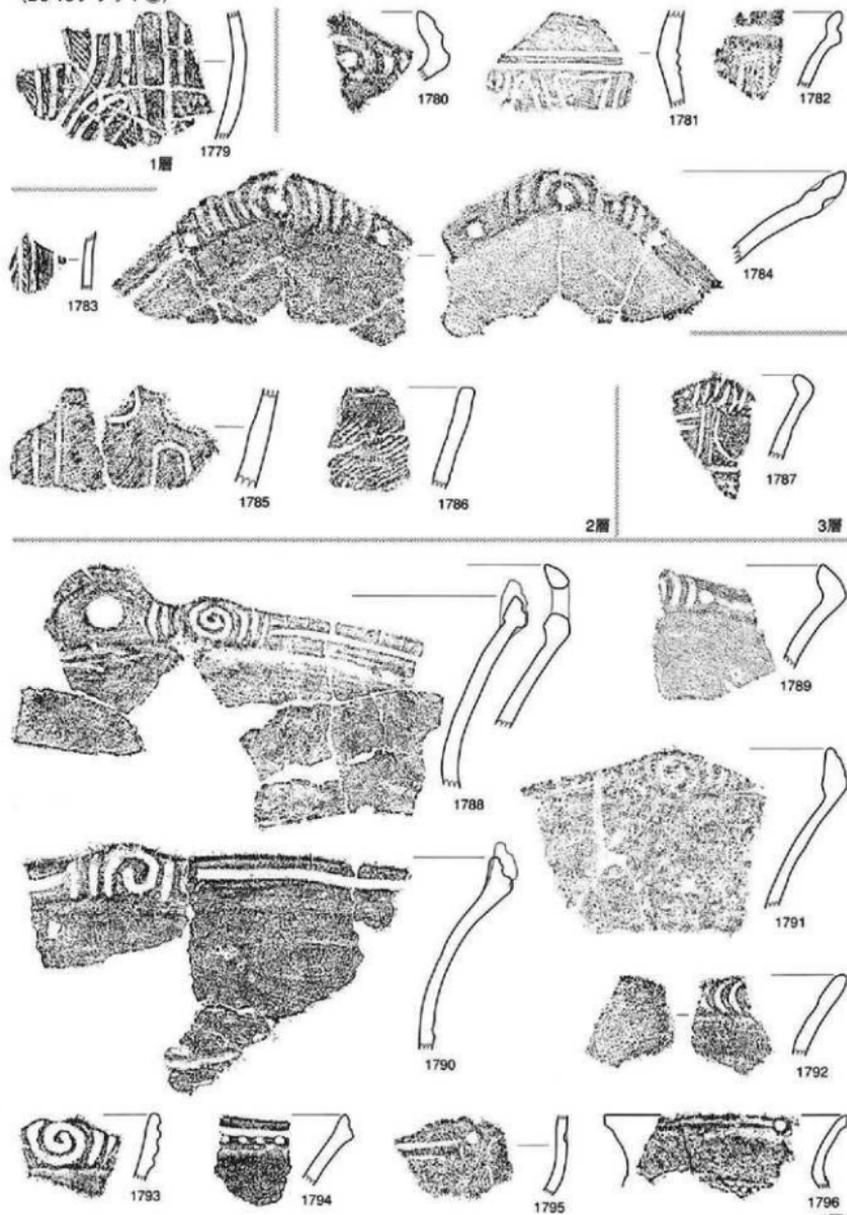


4層

D6-16グリッド 2層：1769  
4層：1770～1774  
D6-17グリッド 2層：1775  
4層：1776～1778

1769～1778a 1 : 4 0 (B-1: 4) 20cm

〈D6-16グリッド②〉



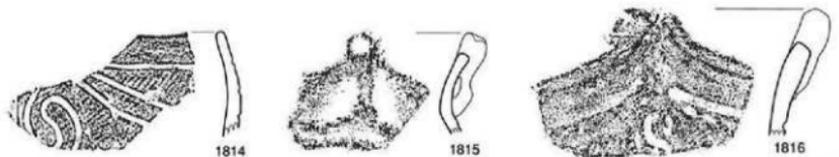
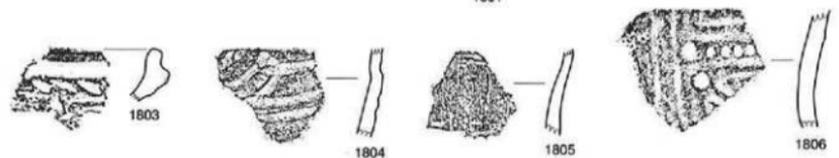
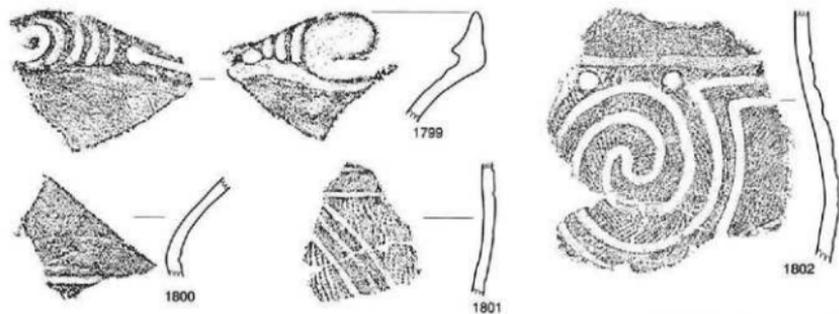
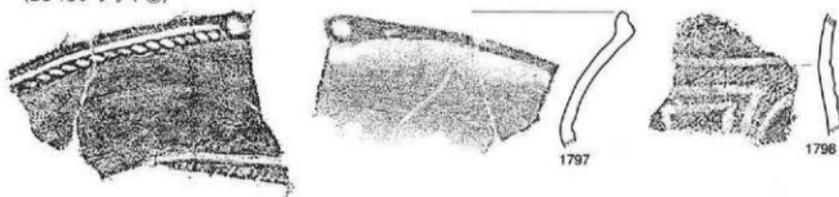
1層: 1779

3層: 1787

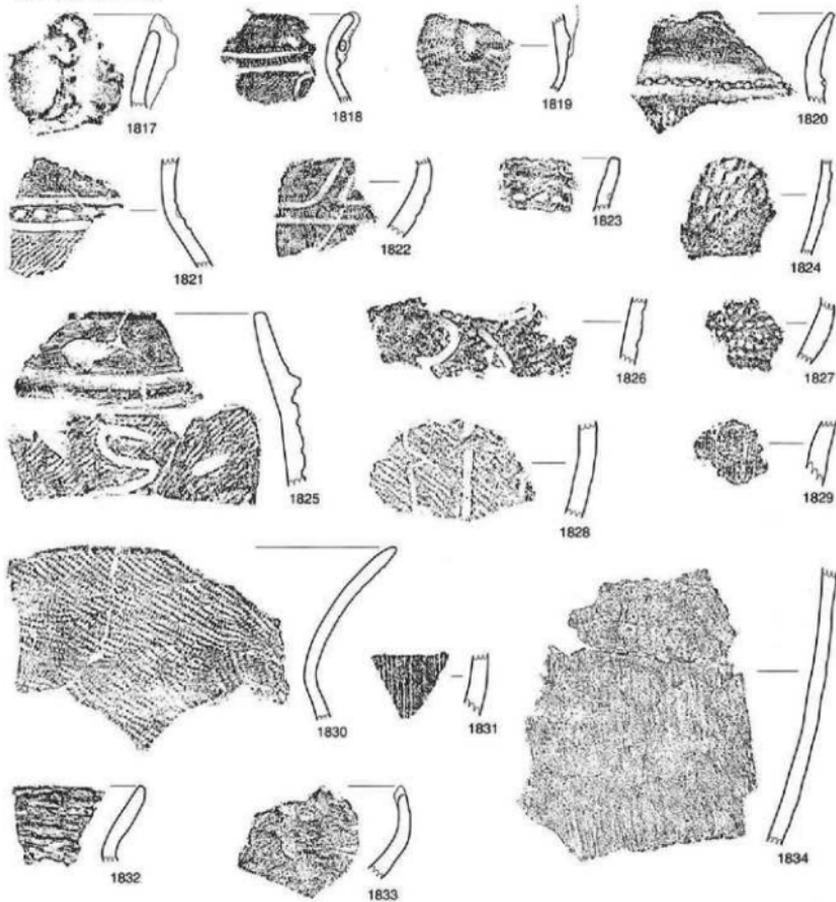
2層: 1780~1786

4層: 1789~1796

1779~1796-1: 3

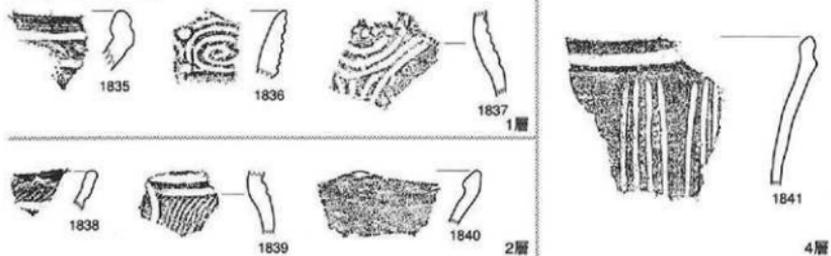


## 〈D6-16グリッド④〉



4層

## 〈D6-17グリッド②〉

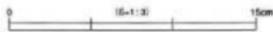


4層

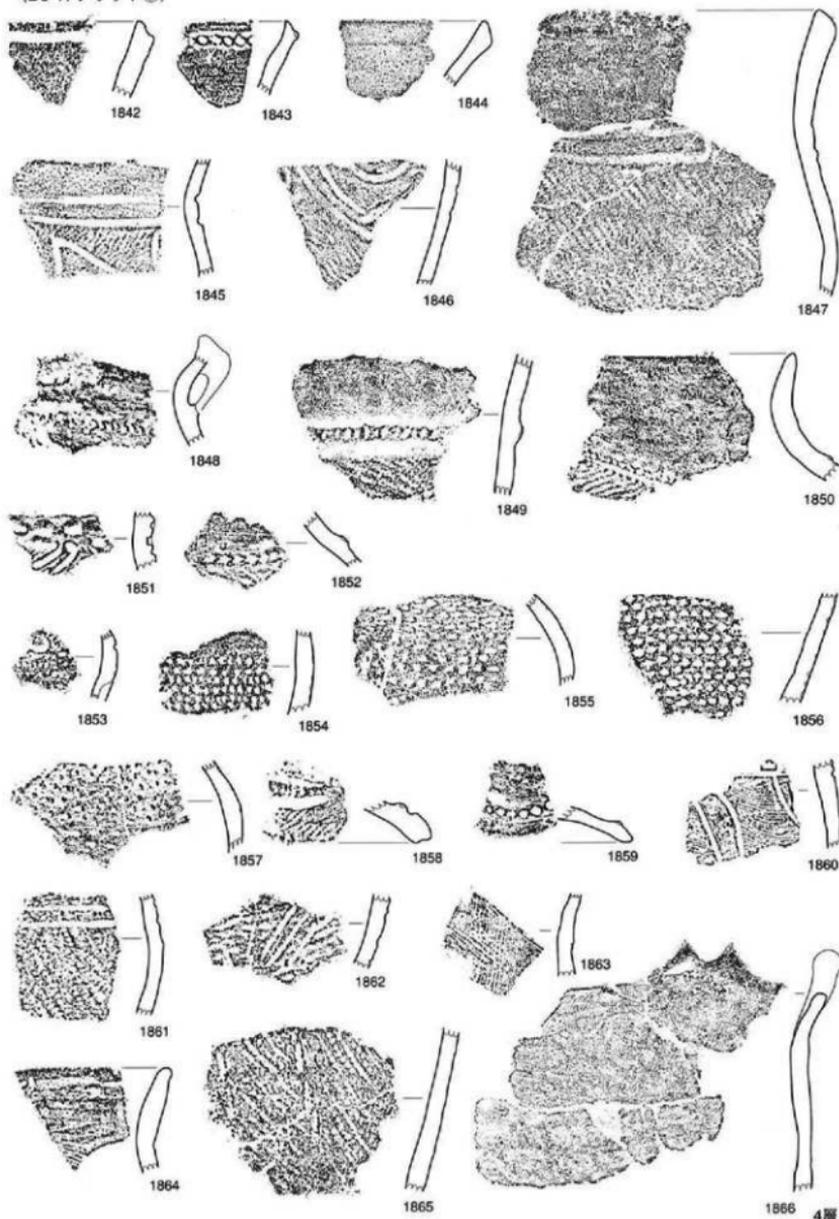
D6-16グリッド 4層：1817～1834  
D6-17グリッド 1層：1835～1837

D6-17グリッド 2層：1838～1840  
4層：1841

1817～1841=1:3



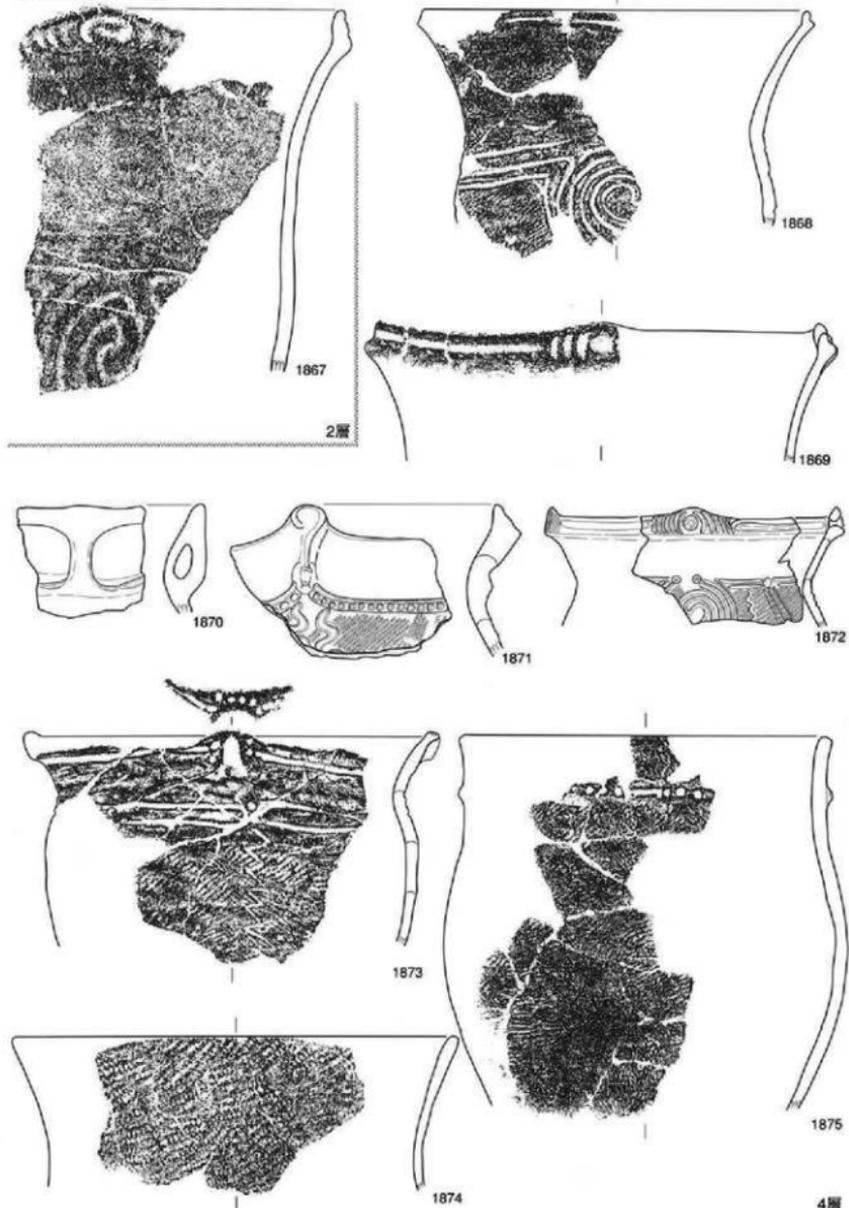
〈D6-17グリッド③〉



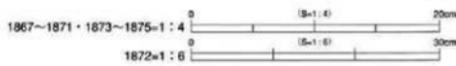
4層 : 1842~1866

1842~1866=1:3  
0 5 10cm

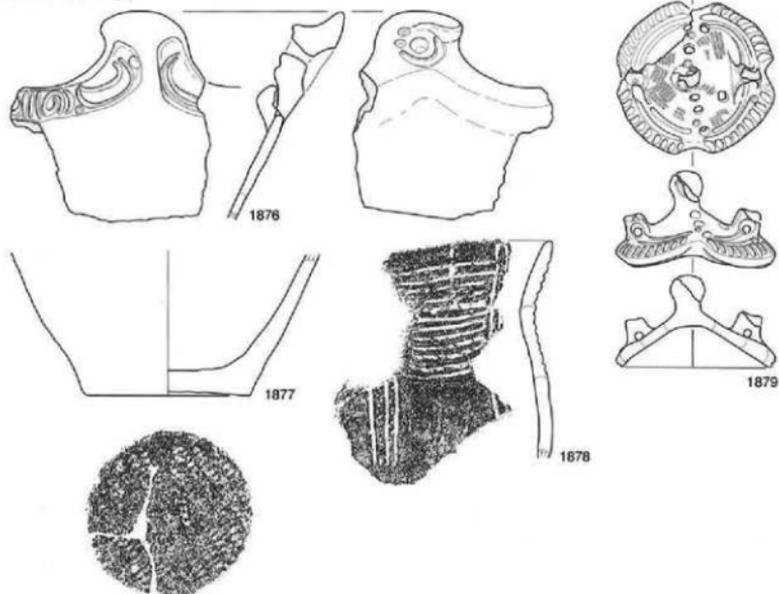
〈D6-21グリッド①〉



2層 : 1867  
4層 : 1868~1875

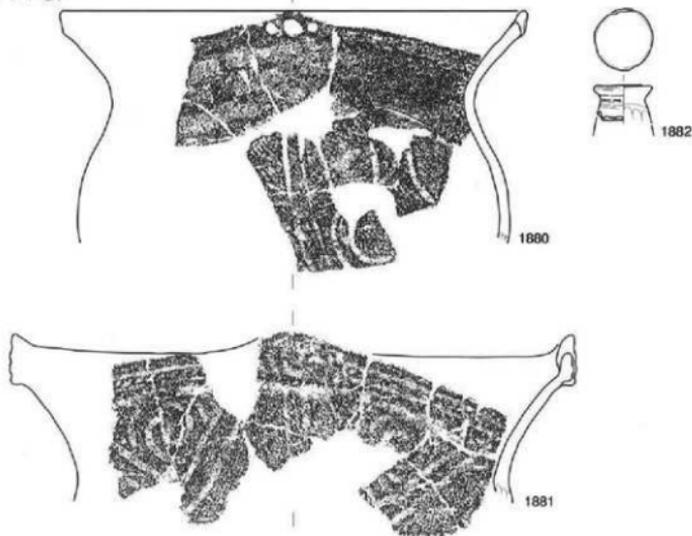


(D6-21グリッド②)



4層

(D6-22グリッド①)

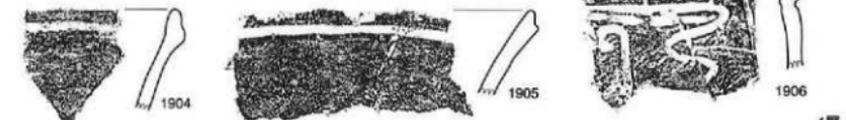
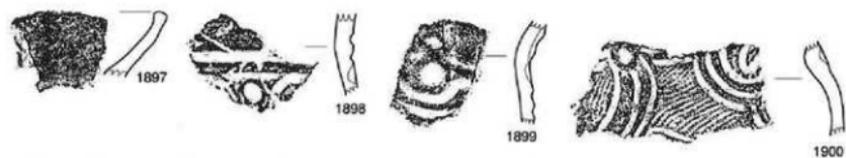
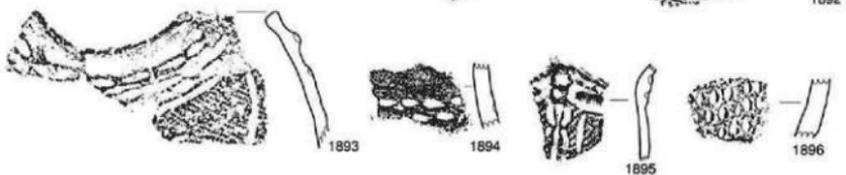
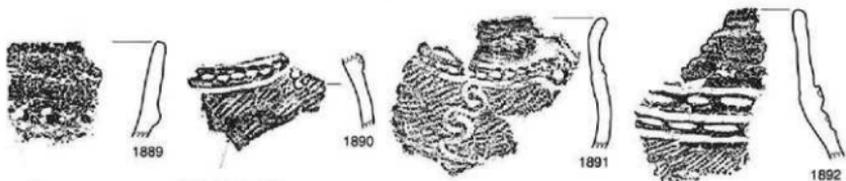
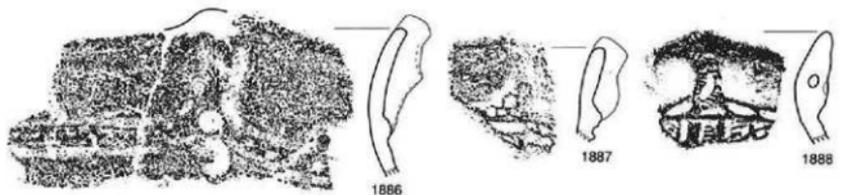
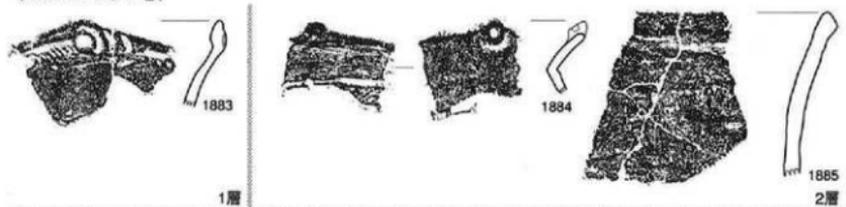


4層

D6-21グリッド 4層：1876～1879  
D6-22グリッド 4層：1880～1882



〈D6-21グリッド③〉



1層 : 1883

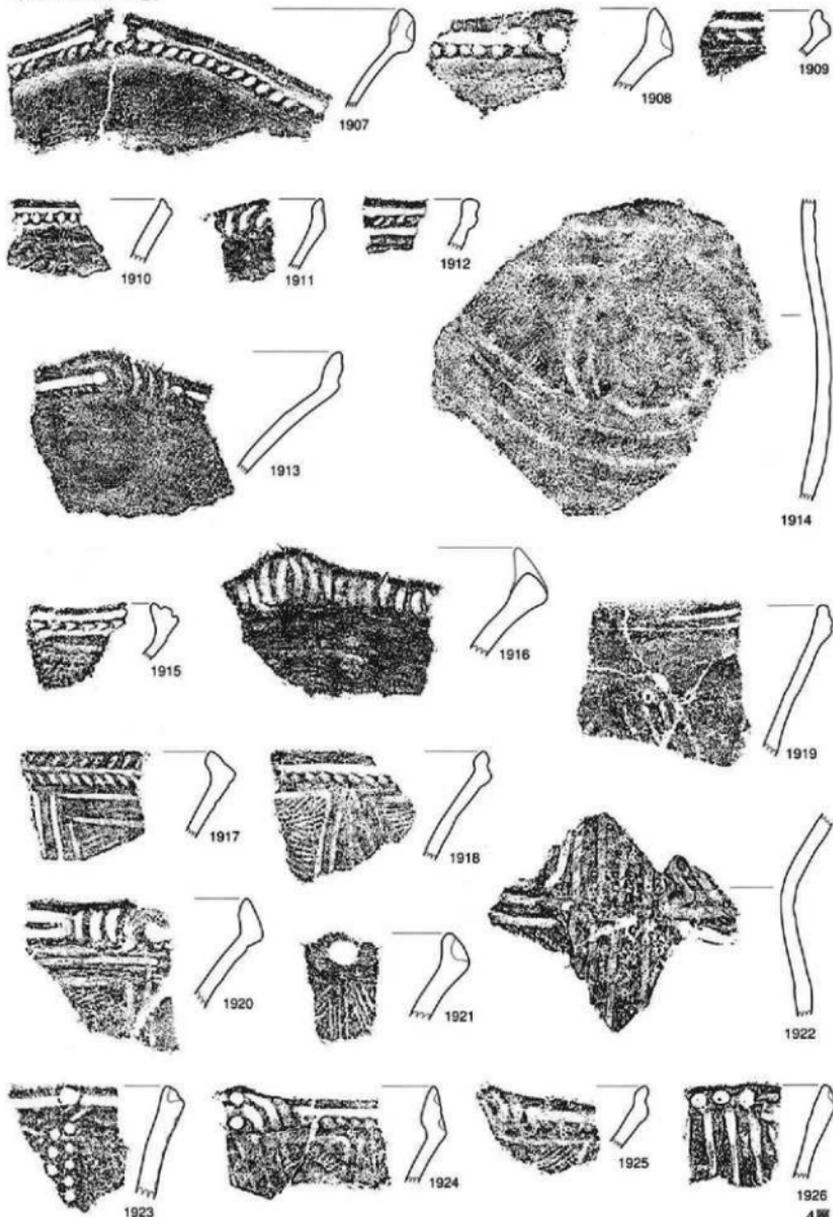
4層 : 1886~1906

2層 : 1884~1885

1883~1906-1:3



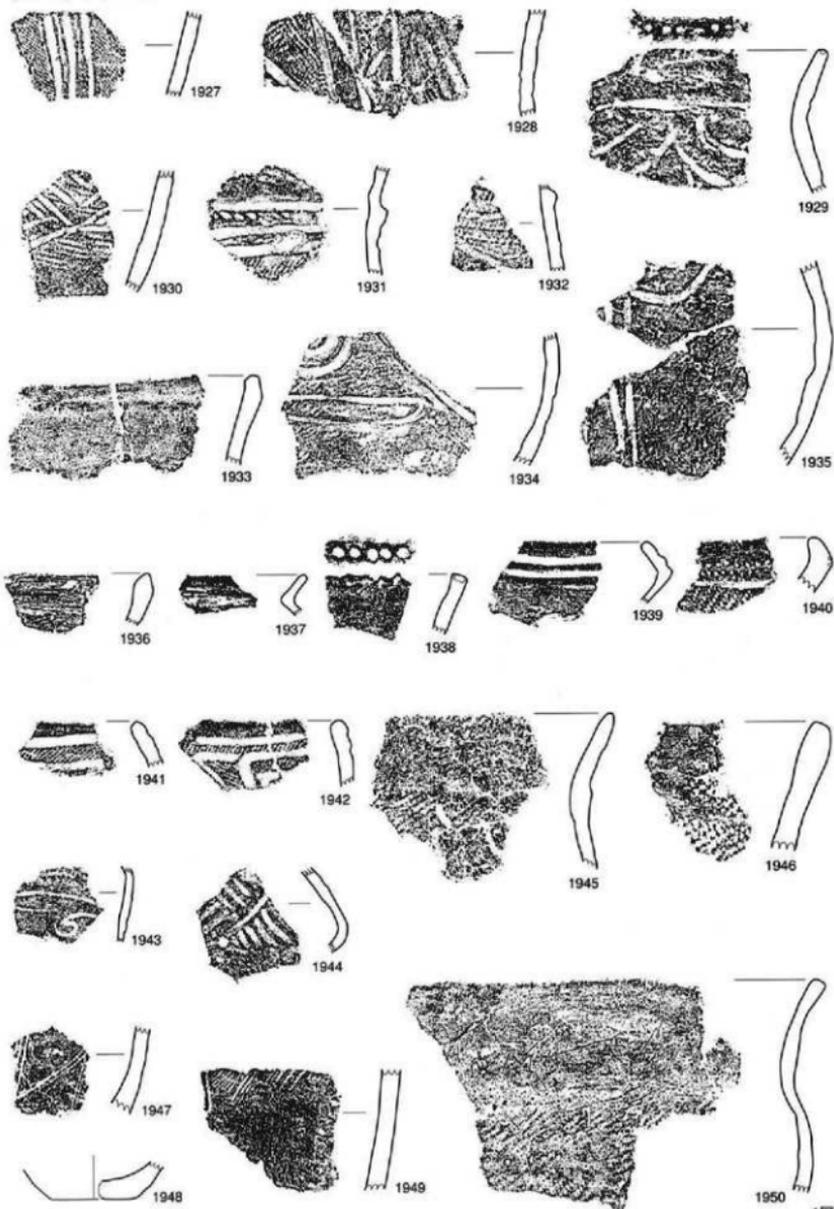
〈D6-21グリッド④〉



4層 : 1907~1926

0 15cm (5x1:3) 1907~1926=1:3

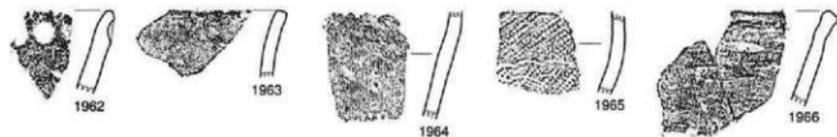
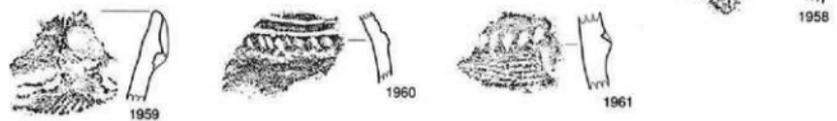
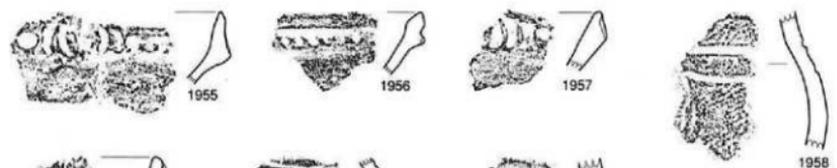
〈D6-21グリッド⑤〉



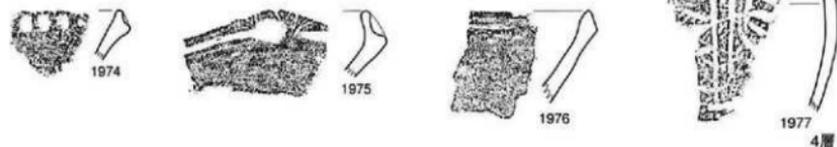
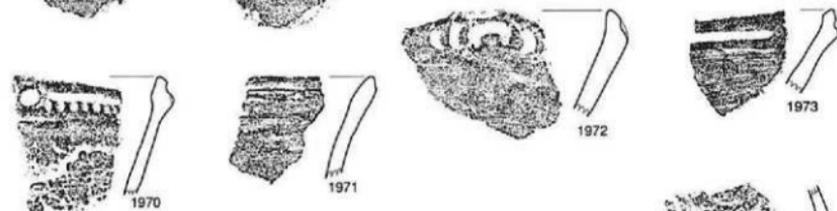
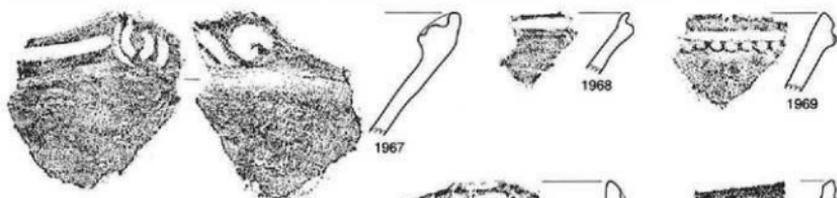
4層 : 1927~1950

0 15cm  
27~1950-1 : 3 (5-1:3)

〈D6-22グリッド②〉



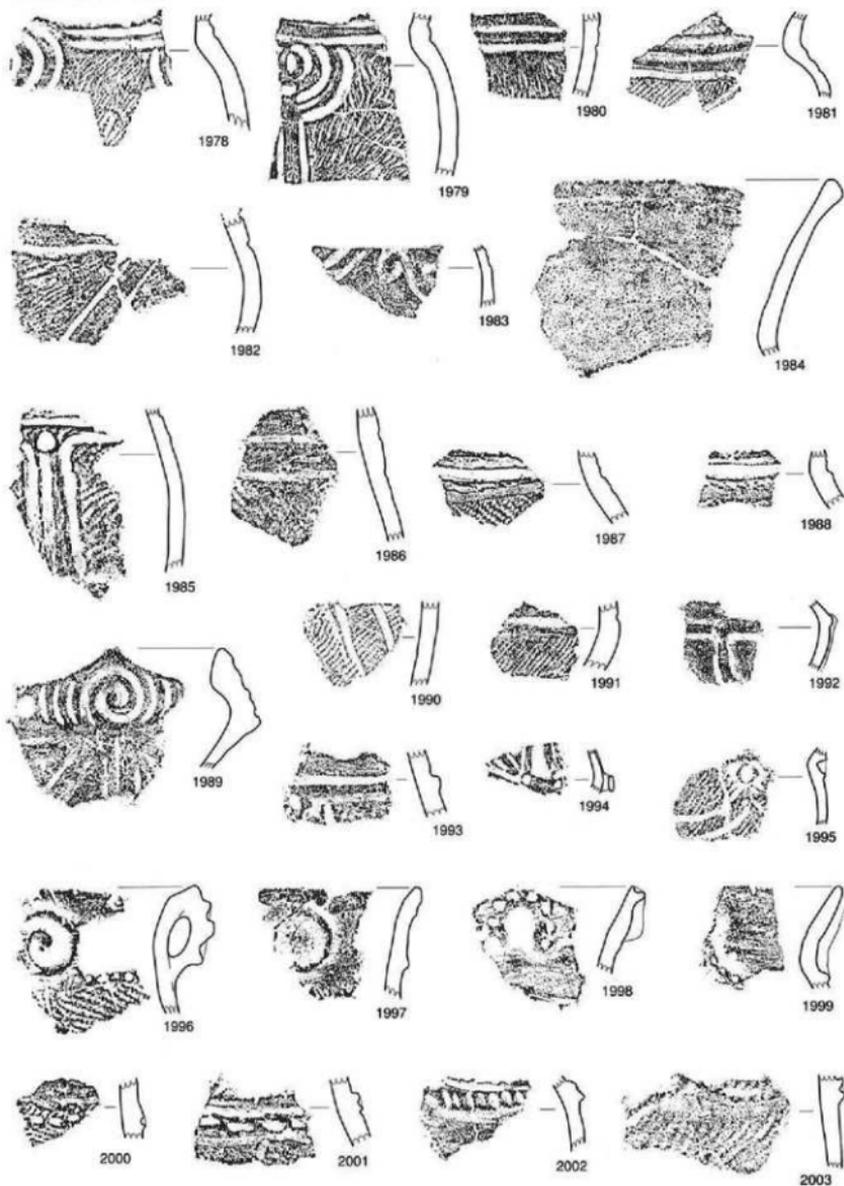
2層



1層：1951～1954 4層：1967～1977  
2層：1955～1966

1951～1977=1:3 0 (5x1:3) 15cm

〈D6-22グリッド③〉



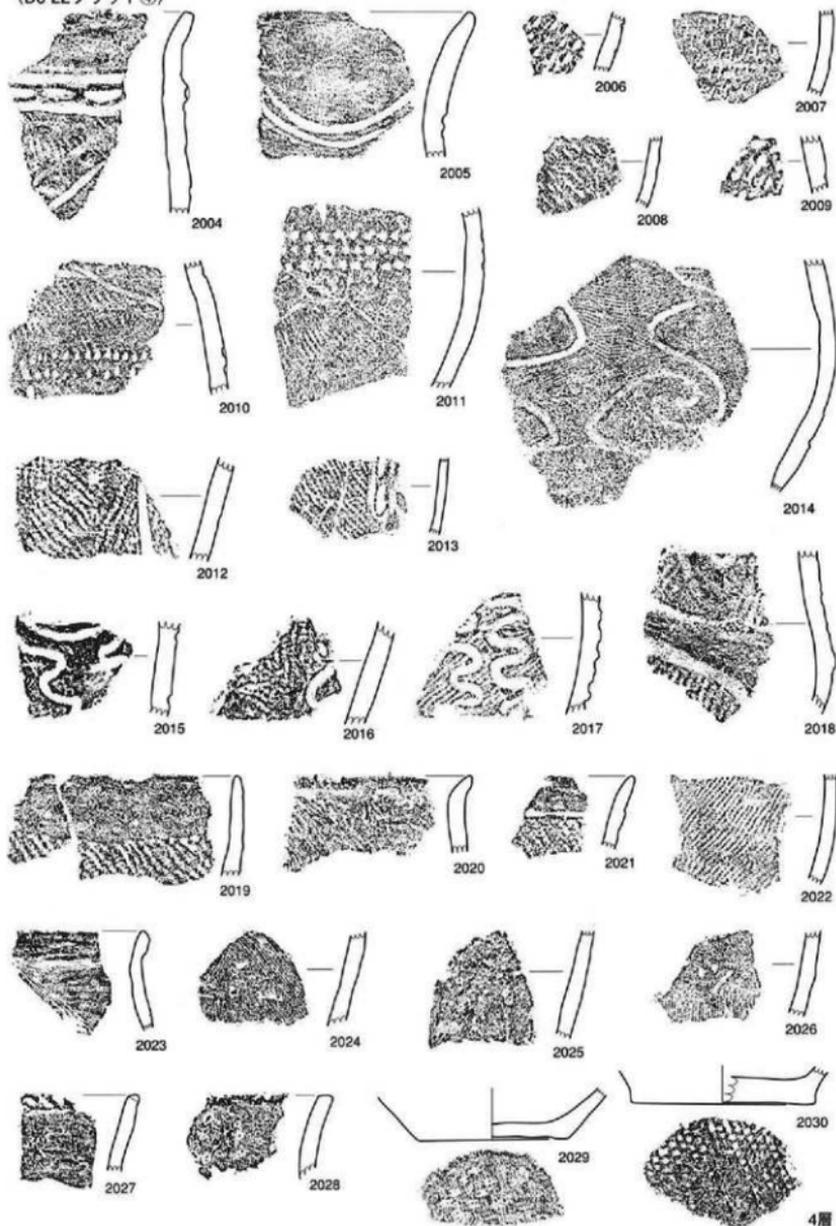
4層

4層：1978～2003

1978～2003=1:3



〈D6-22グリッド④〉



4層 : 2004~2030

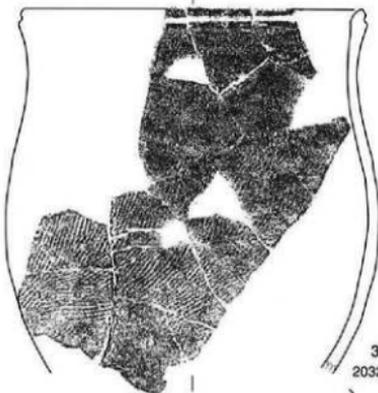
2004~2030=1:3 0 (5+1.3) 15mm

縄文土器 廃棄場 97

〈C7-2グリッド①〉



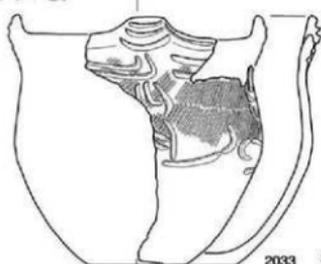
2031 1層



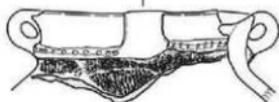
3a層

2032

〈C7-3グリッド①〉



2033 3層



2034 4層



2036 3層

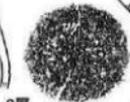


2037

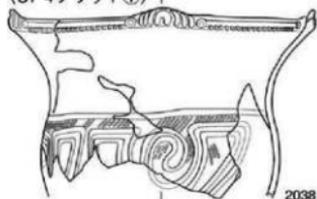
2層



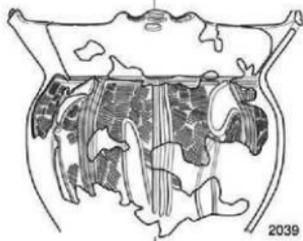
2035



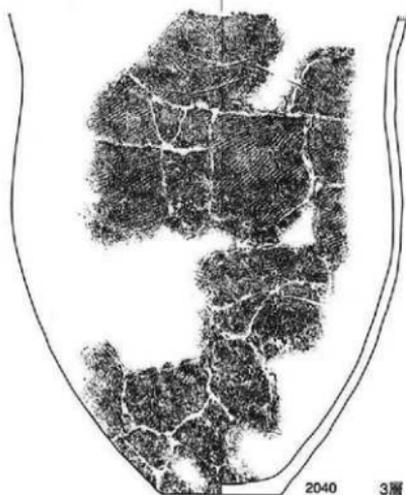
〈C7-4グリッド①〉



2038



2039



2040 3層

C7-2グリッド 1層: 2031

3a層: 2032

C7-3グリッド 2層: 2035・2037

3層: 2033・2036

4層: 2034

C7-4グリッド 3層: 2038~2040

2031~2034・

2036~2037・2040=1: 4

0

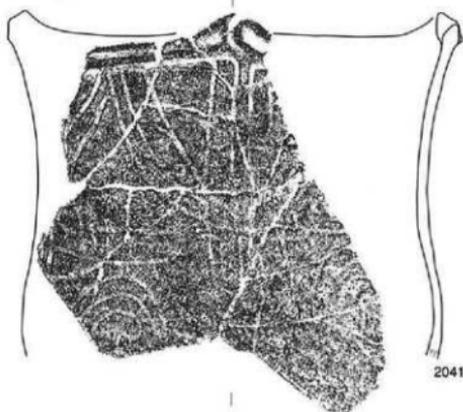
2035・2038~2039=1: 6

0 (S=1: 4) 20cm

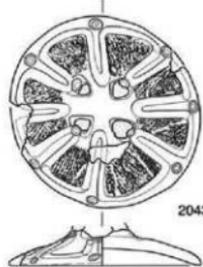
0 (S=1: 6) 30cm

0

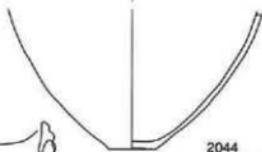
〈C7-4グリッド②〉



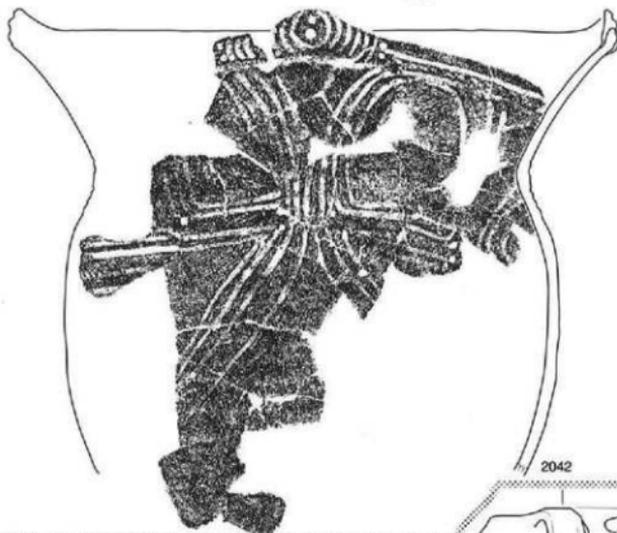
2041



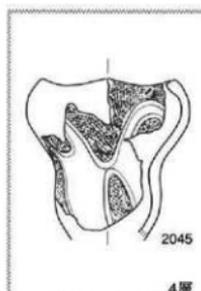
2043



2044  
3層



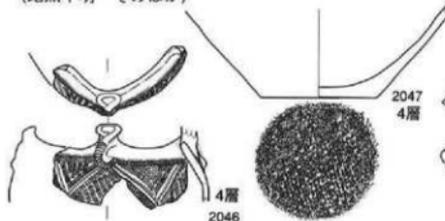
2042



2045

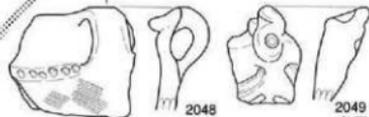
4層

〈地点不明・そのほか〉



4層  
2046

2047  
4層



2048  
鹿土層

2049  
表層



2050  
鹿土層

2051  
鹿土層

C7-4グリッド 3層: 2041~2044

4層: 2045

地点不明ほか 4層: 2046~2047

層不明: 2048~2051

2048~2051=1: 3 (5=1: 3) 15cm

2041~2043・2045~2047=1: 4 (5=1: 4) 20cm

2044=1: 6 (5=1: 6) 30cm

〈C7-2グリッド②〉

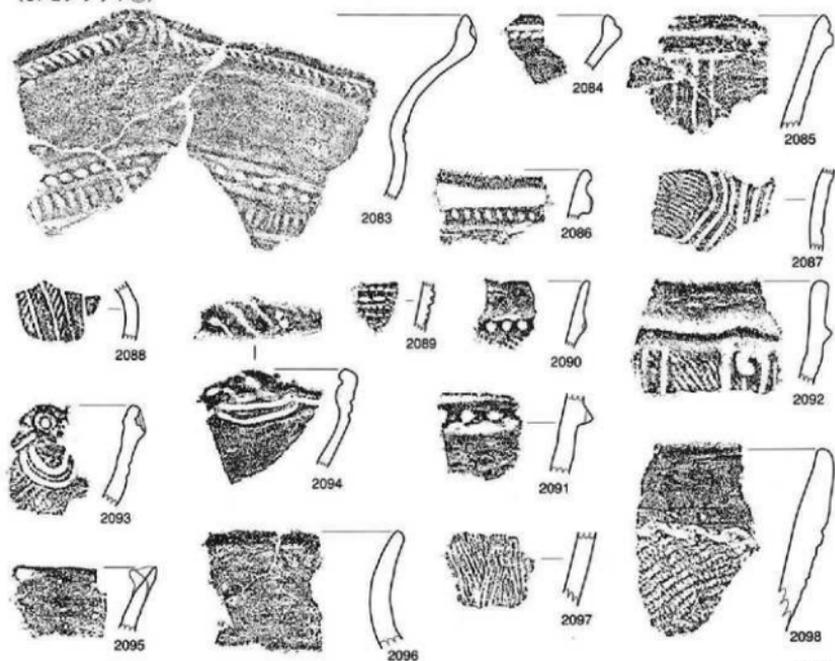


1層 : 2052~2057  
3a層 : 2058~2082

2052~2082=1:3

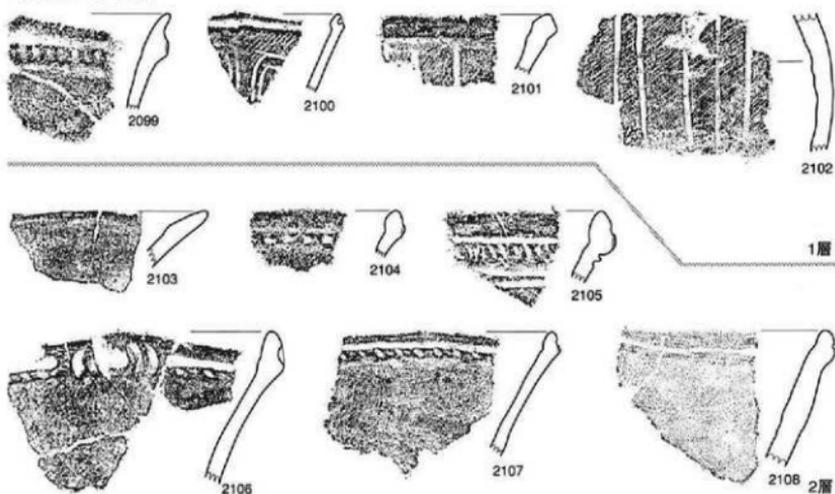
0 (5x1:3) 15cm

〈C7-2グリッド③〉



4a層

〈C7-3グリッド②〉



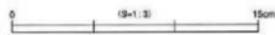
1層

2層

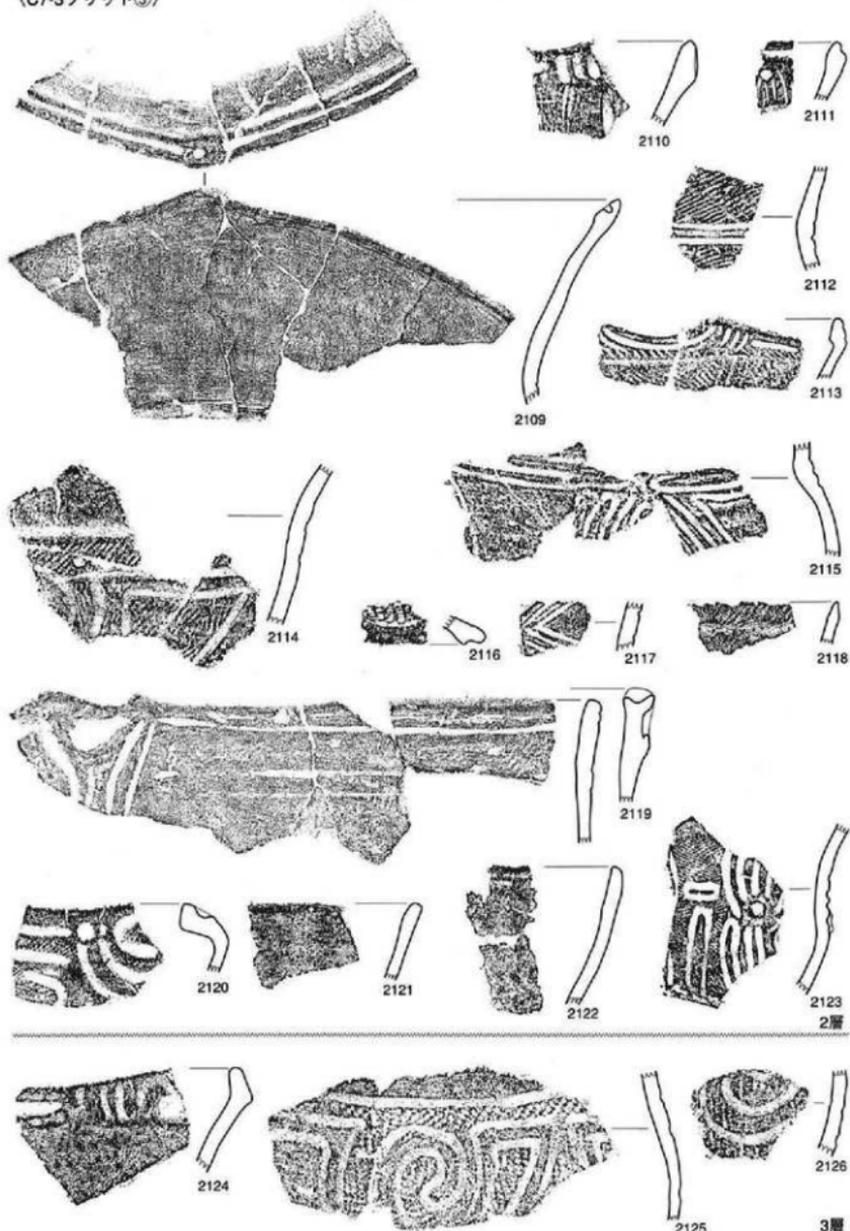
C7-2グリッド 4a層：2083～2098  
C7-3グリッド 1層：2099～2102

C7-3グリッド 2層：2103～2108

2083～2108-1:3



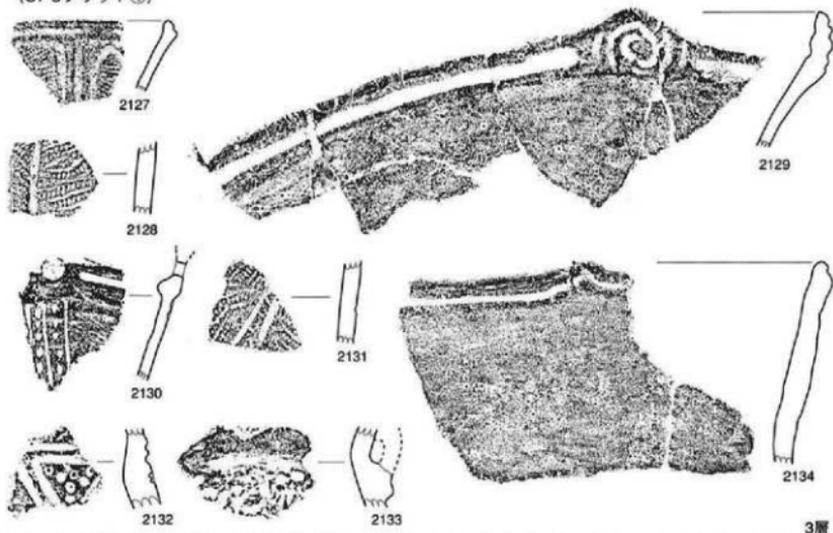
〈C7-3グリッド③〉



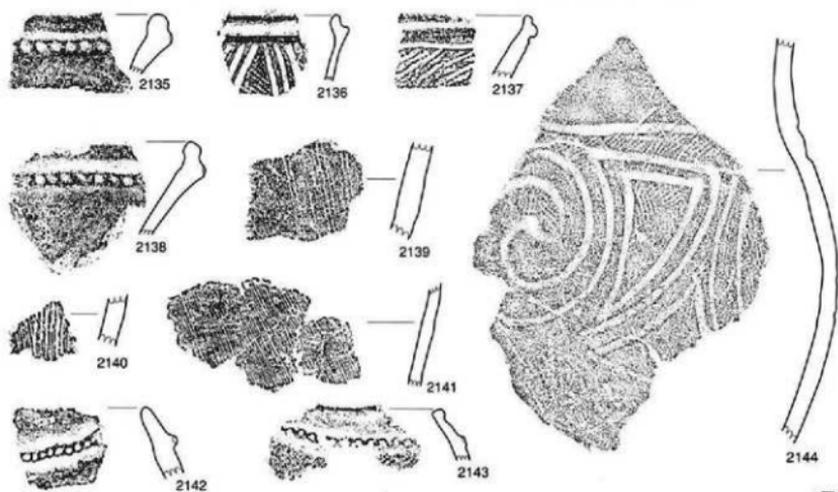
2層：2109～2123  
 3層：2124～2126

2109～2126=1:3

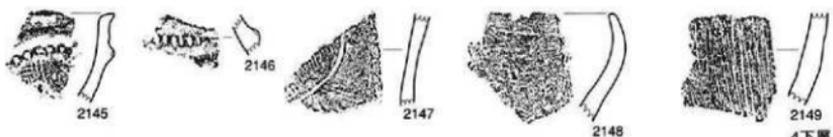
〈C7-3グリッド④〉



3層



4層

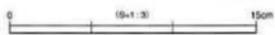


4下層

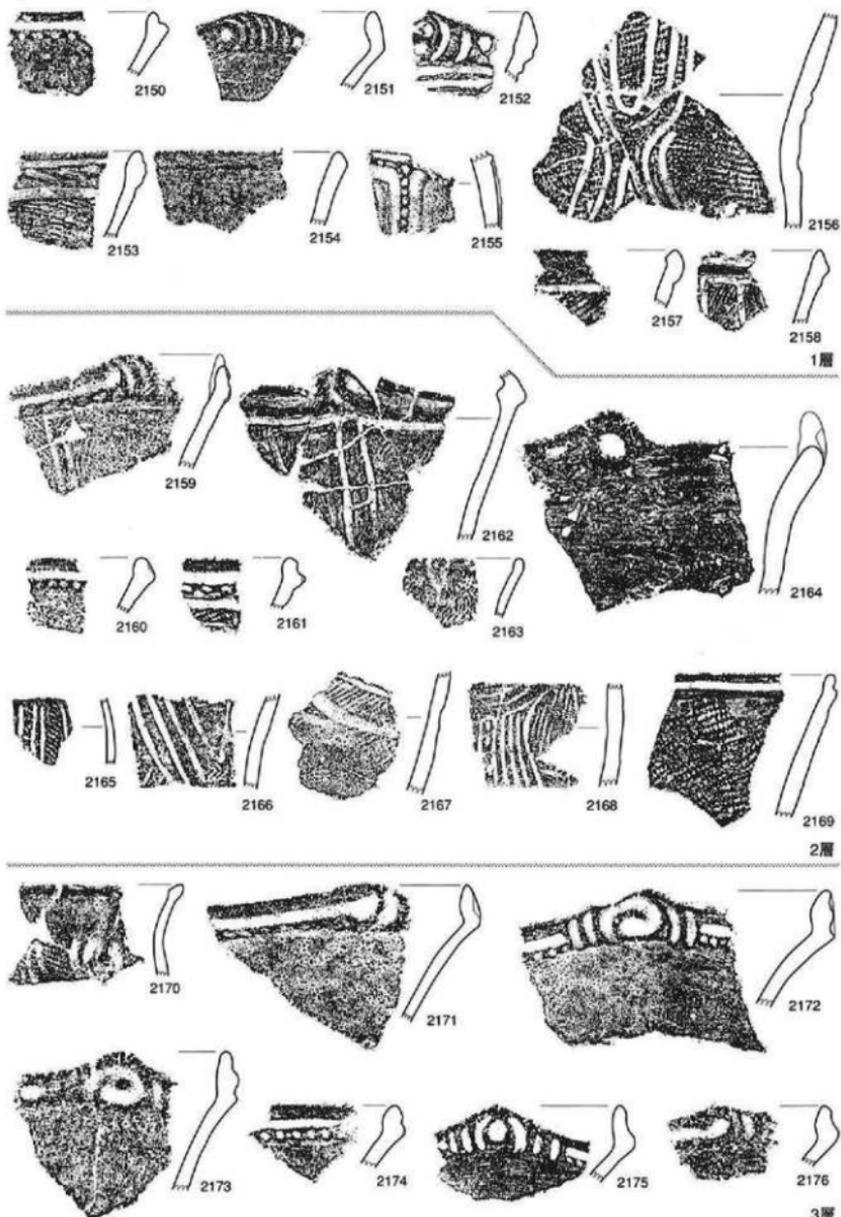
3層：2127～2134  
4層：2135～2144

4下層：2145～2149

2127～2149-1 : 3



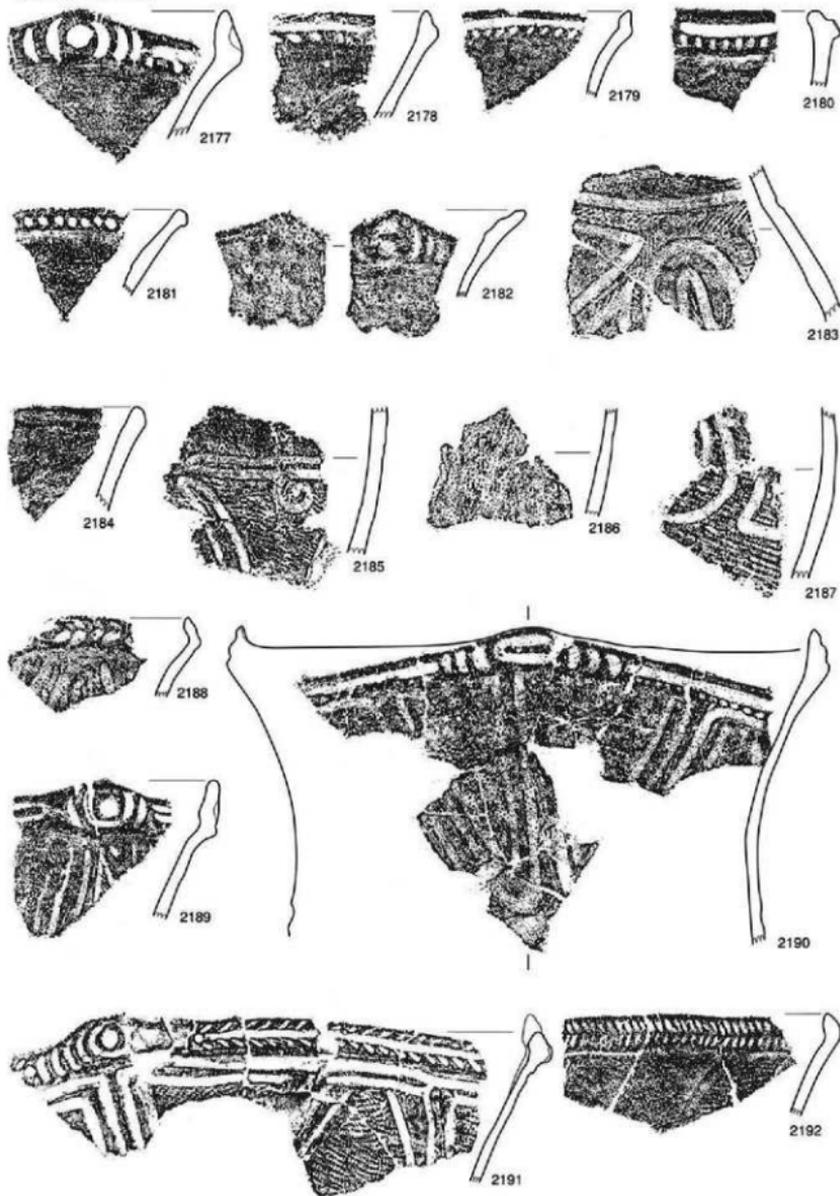
〈C7-4グリッド③〉



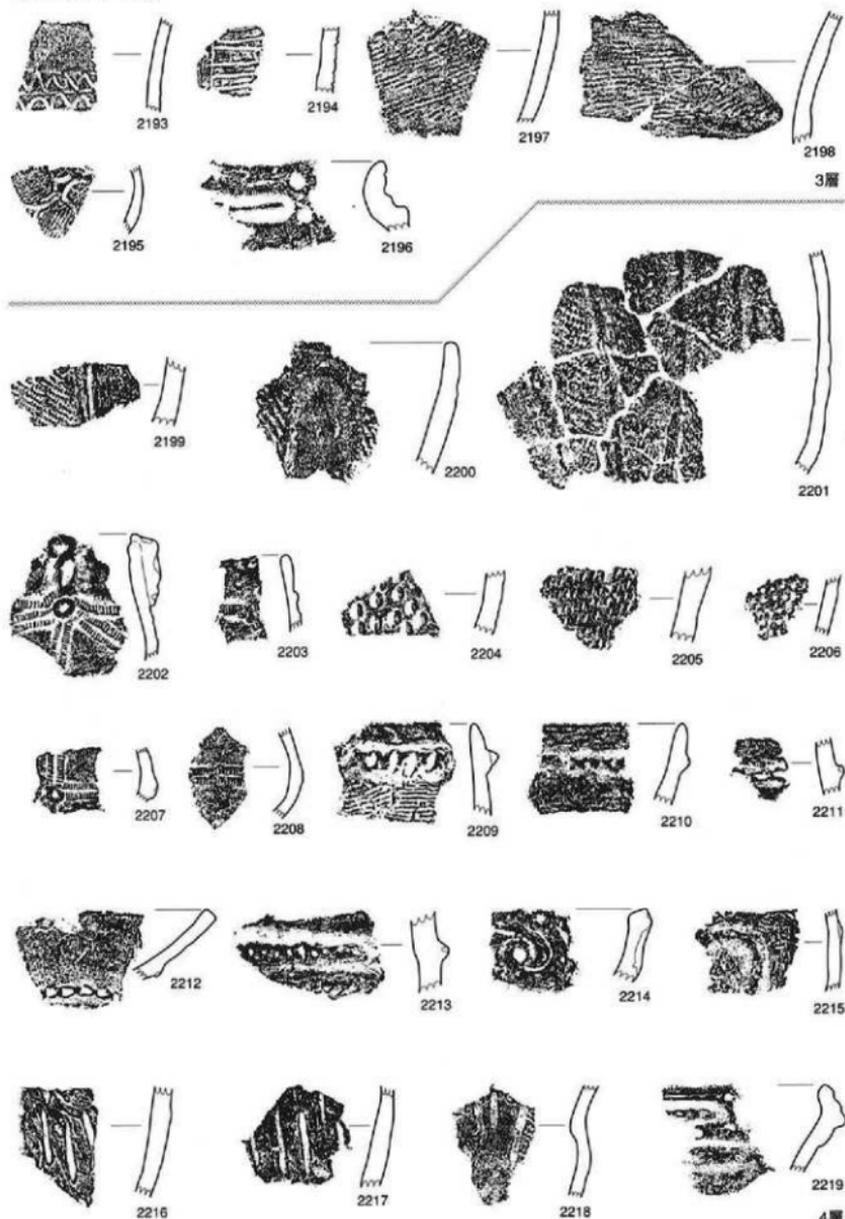
1層 : 2150~2158  
 2層 : 2159~2169  
 3層 : 2170~2176

2150~2176=1:3 150mm

〈C7-4グリッド④〉



(C7-4グリッド⑤)



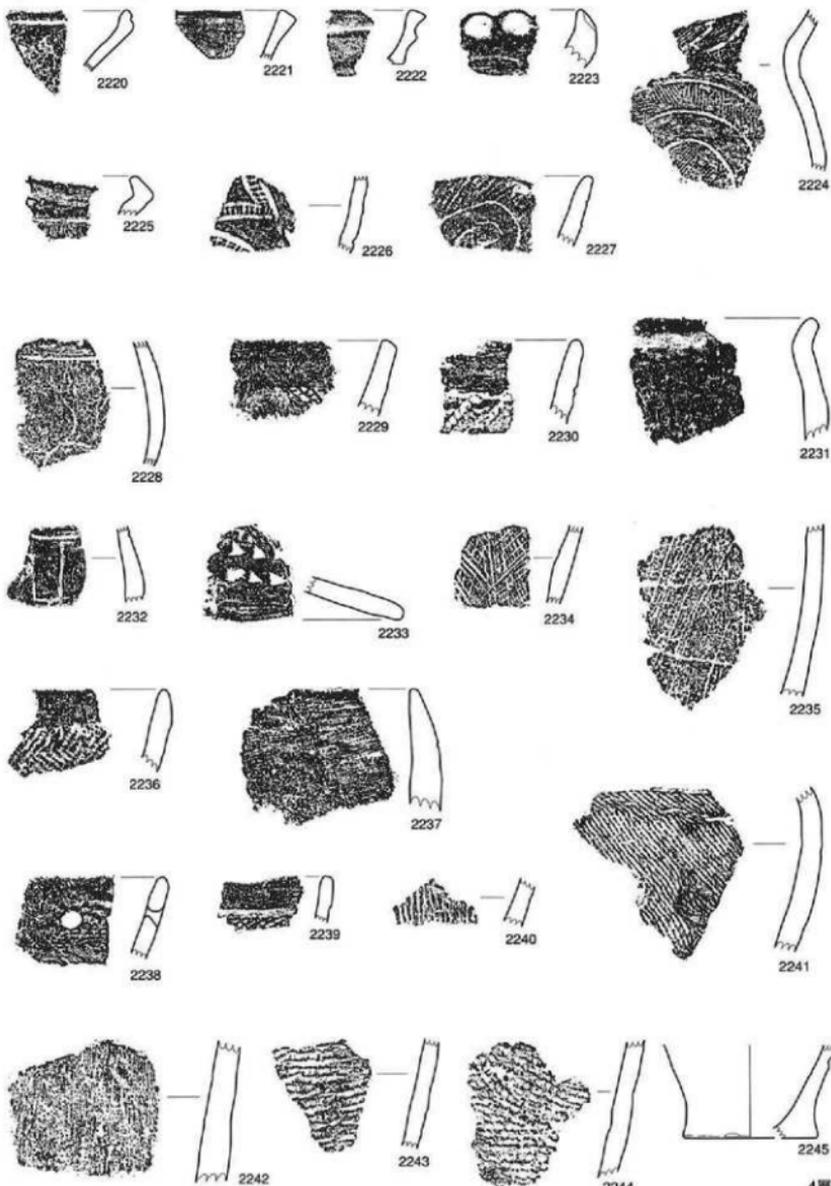
3層

4層

3層 : 2193~2198  
4層 : 2199~2219

0 15cm (5=1:3)

〈C7-4グリッド⑥〉

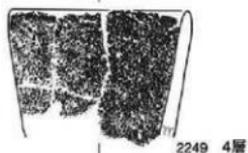
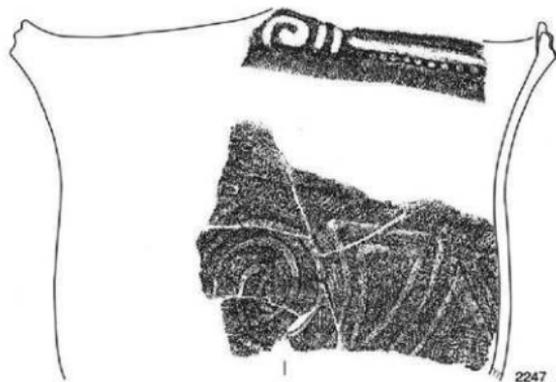
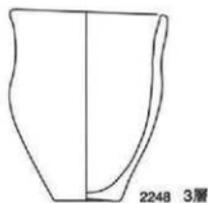
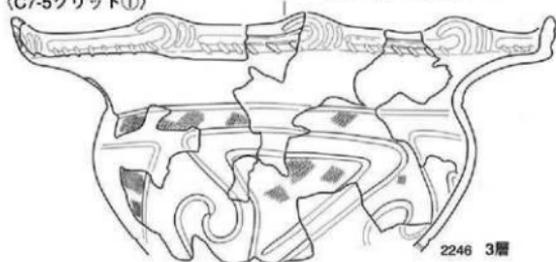


4層 : 2220~2245

2220~2245-1 : 3 0 (5x1:3) 15cm

縄文土器 廃棄場 107

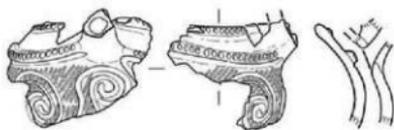
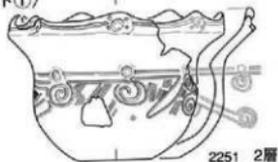
(C7-5グリッド①)



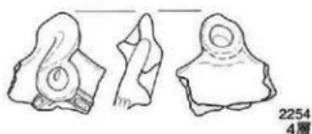
(C7-9グリッド①)



(D7-1グリッド①)

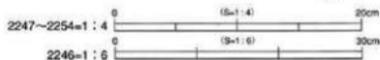


(D7-2グリッド①)

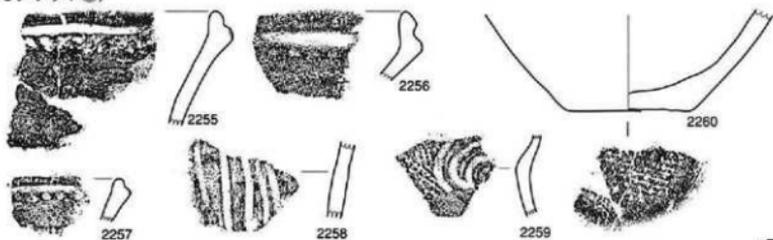


C7-5グリッド 2層：2247  
3層：2246・2248  
4層：2249  
C7-9グリッド 4層：2250  
D7-1グリッド 2層：2251・2252

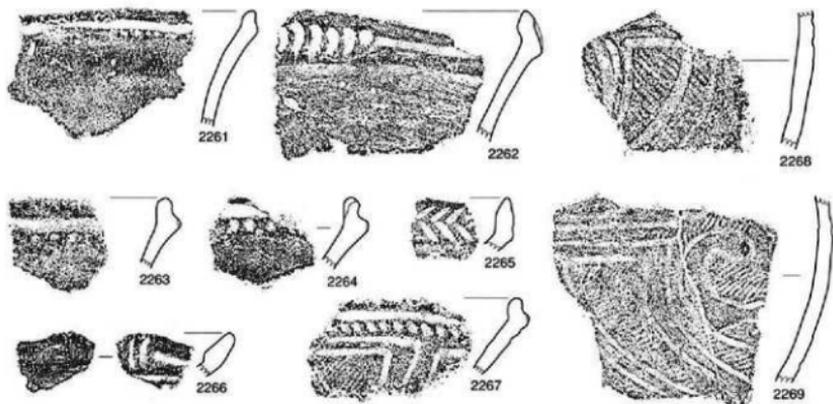
D7-2グリッド 4層：2253・2254



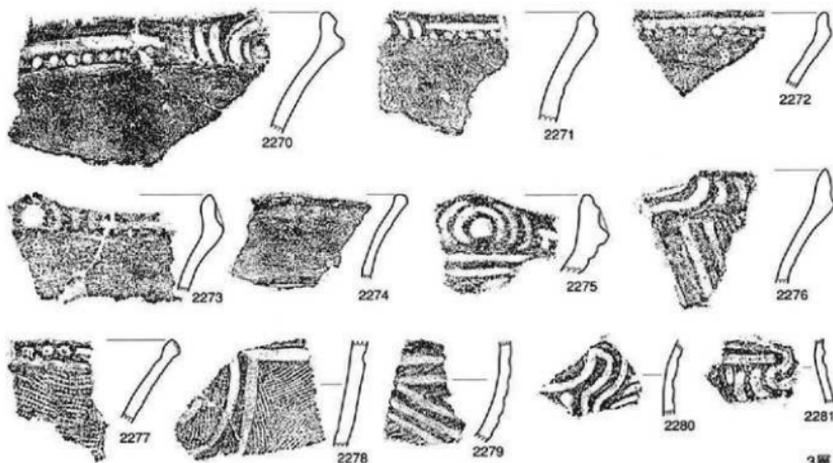
(C7-5グリッド②)



1層



2層

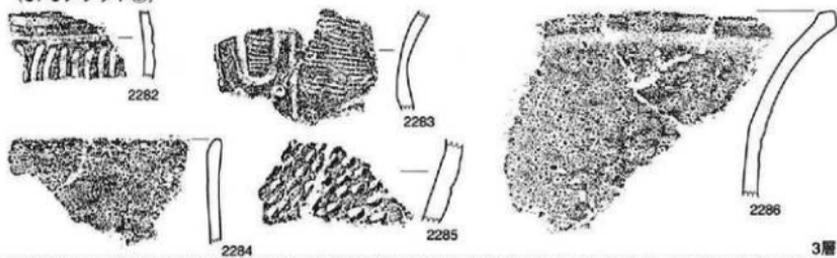


3層

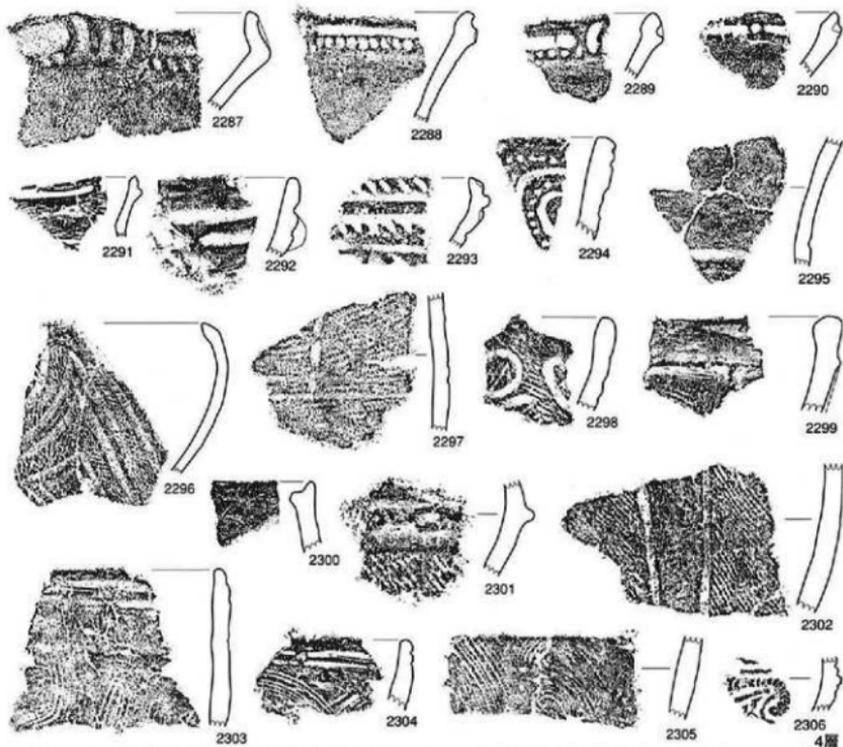
1層 : 2255~2260 3層 : 2270~2281  
2層 : 2261~2269

2255~2281=1:3 0 (5+1:3) 15cm

## (C7-5グリッド③)



3層



4層

## (C7-9グリッド②)



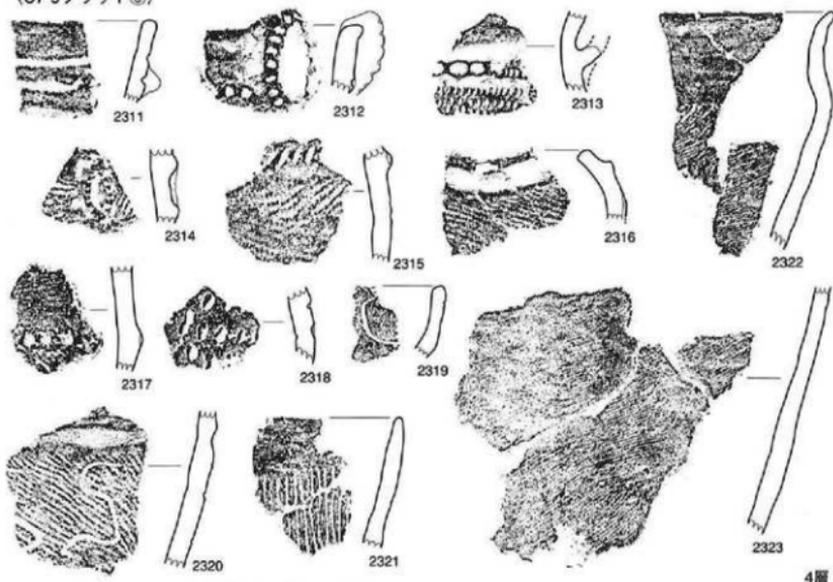
4層

C7-5グリッド 3層: 2282~2286  
4層: 2287~2306

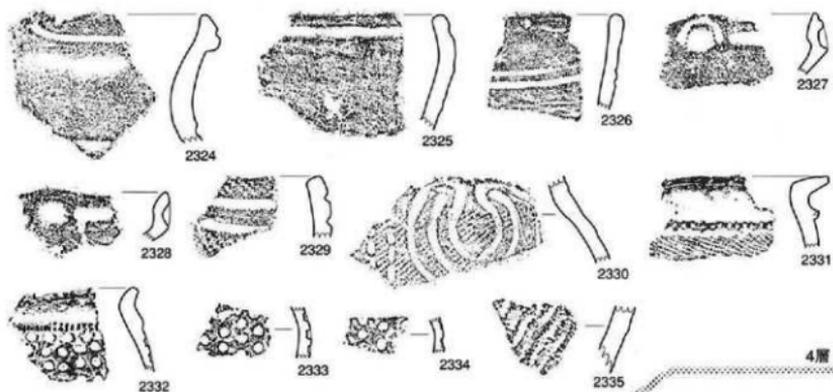
C7-9グリッド 4層: 2307~2310

2282~2310=1:3 0 (5=1:3) 15cm

〈C7-9グリッド③〉



〈D7-1グリッド②〉

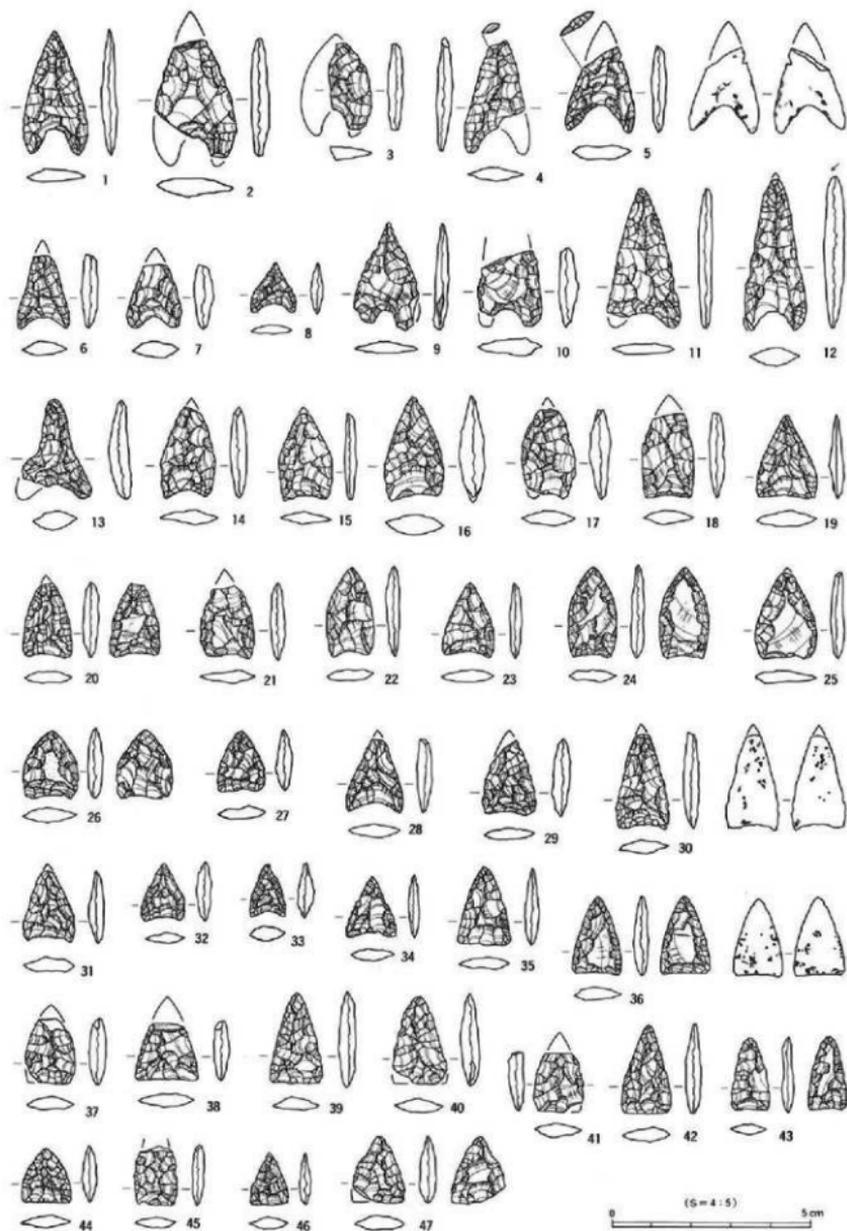


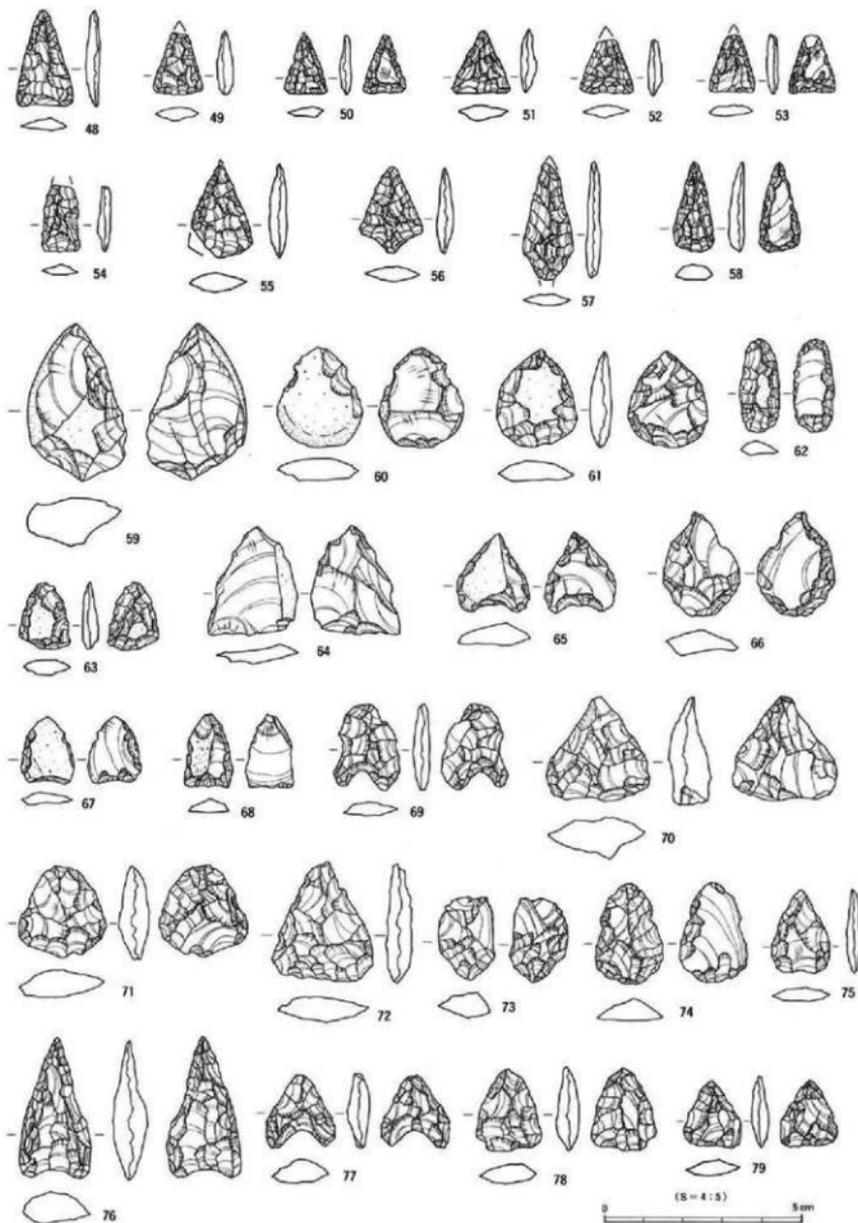
〈D7-3グリッド〉

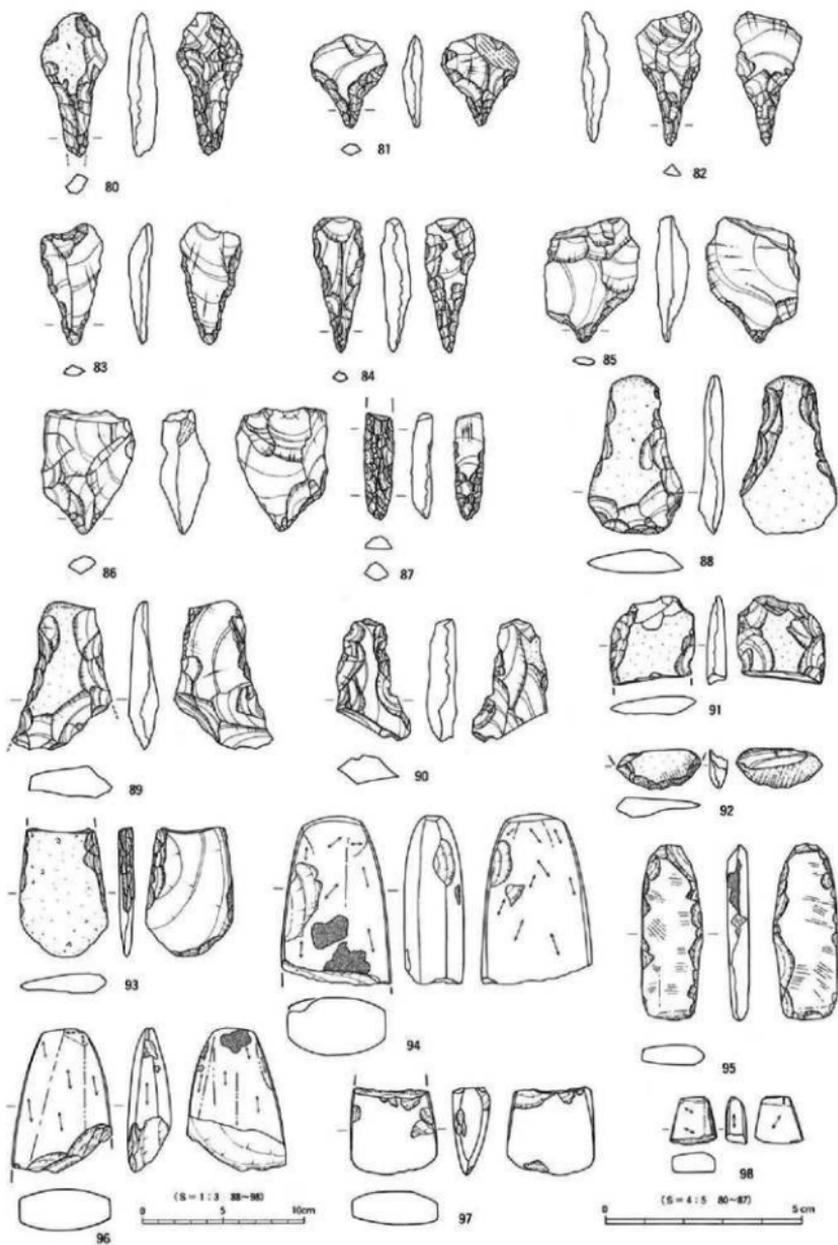


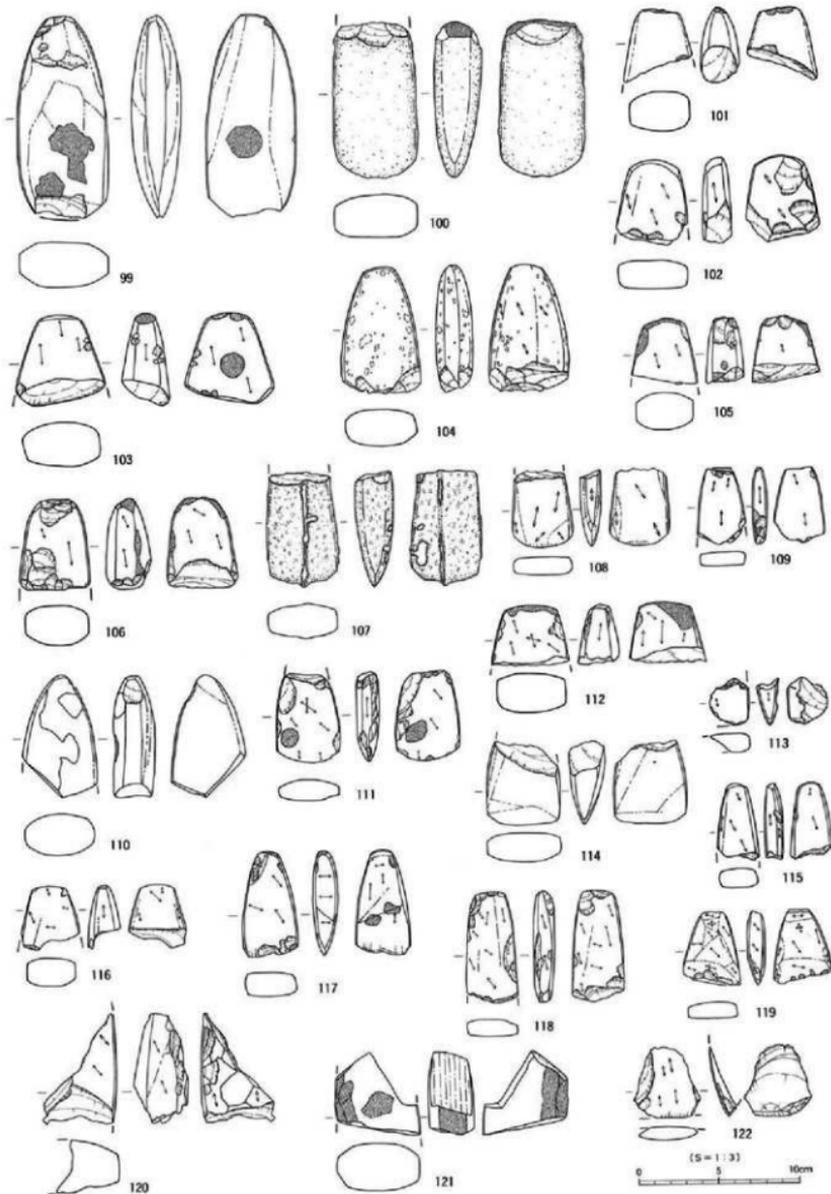
C7-9グリッド 4層：2311～2323 D7-3グリッド 4層：2336～2338  
 D7-1グリッド 4層：2324～2335

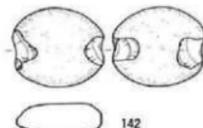
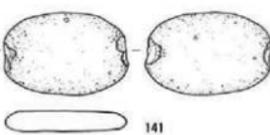
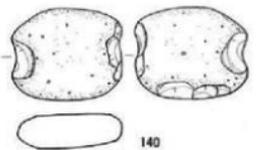
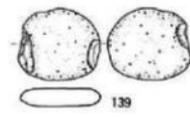
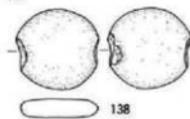
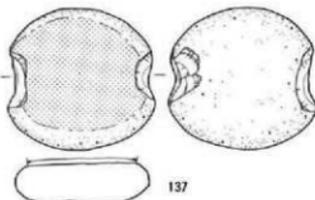
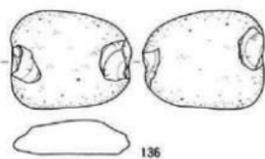
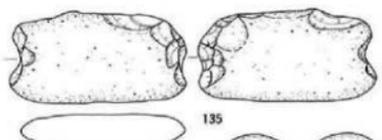
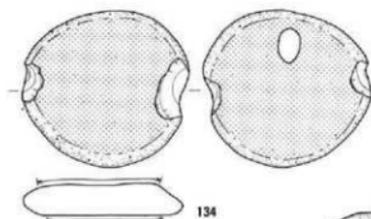
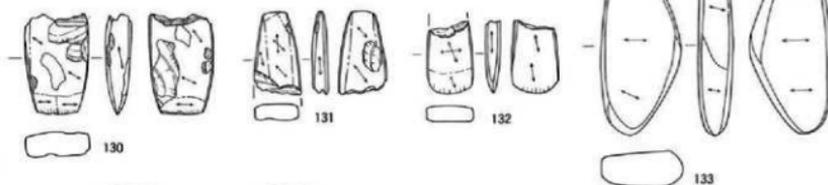
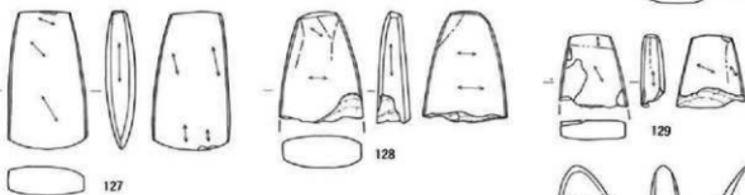
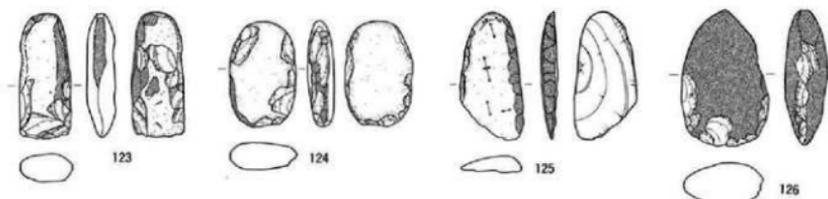
2311～2338=1:3 0 (5=1:3) 15cm





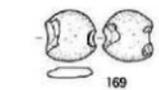
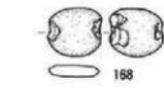
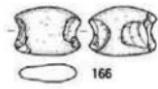
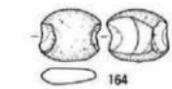
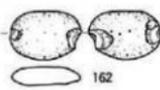
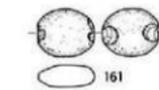
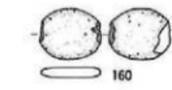
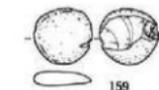
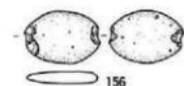
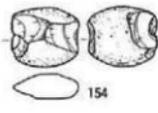
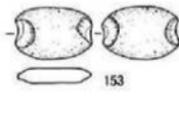
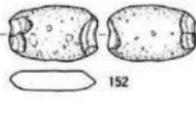
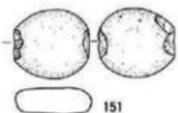
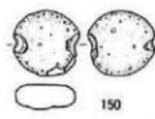
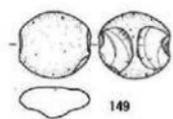
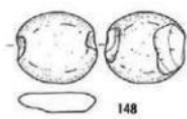
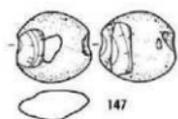
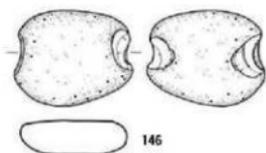
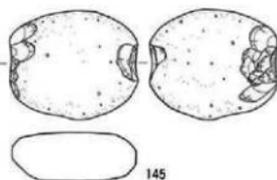
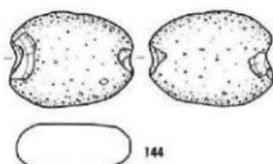
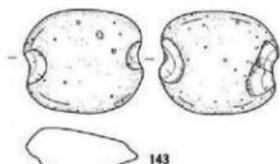


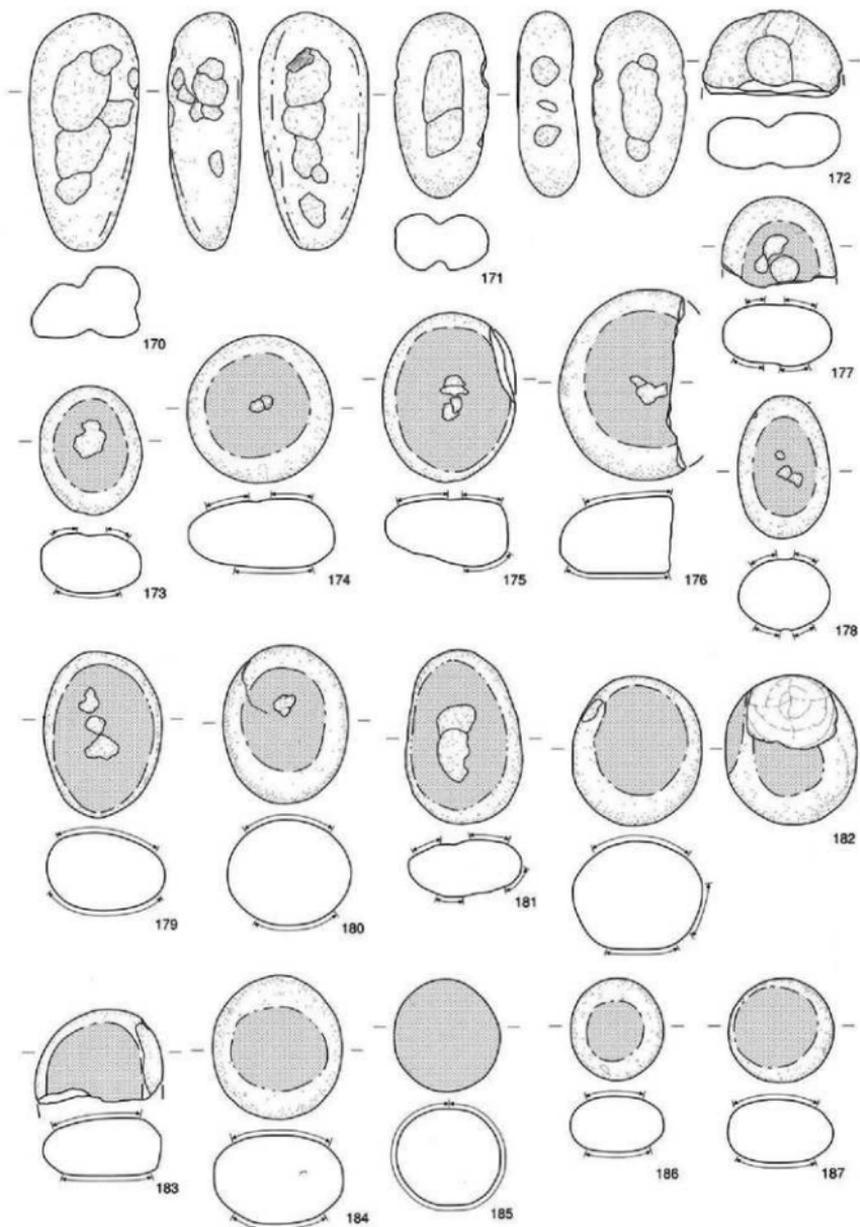


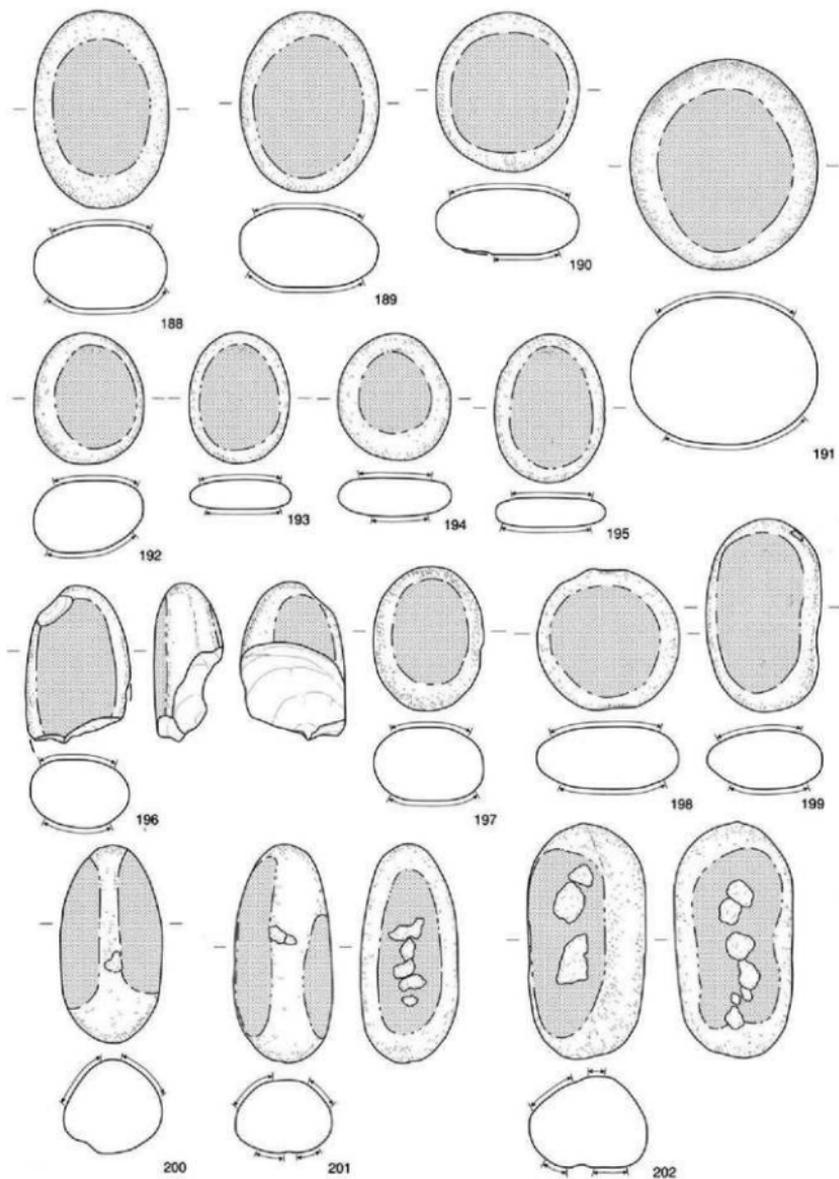


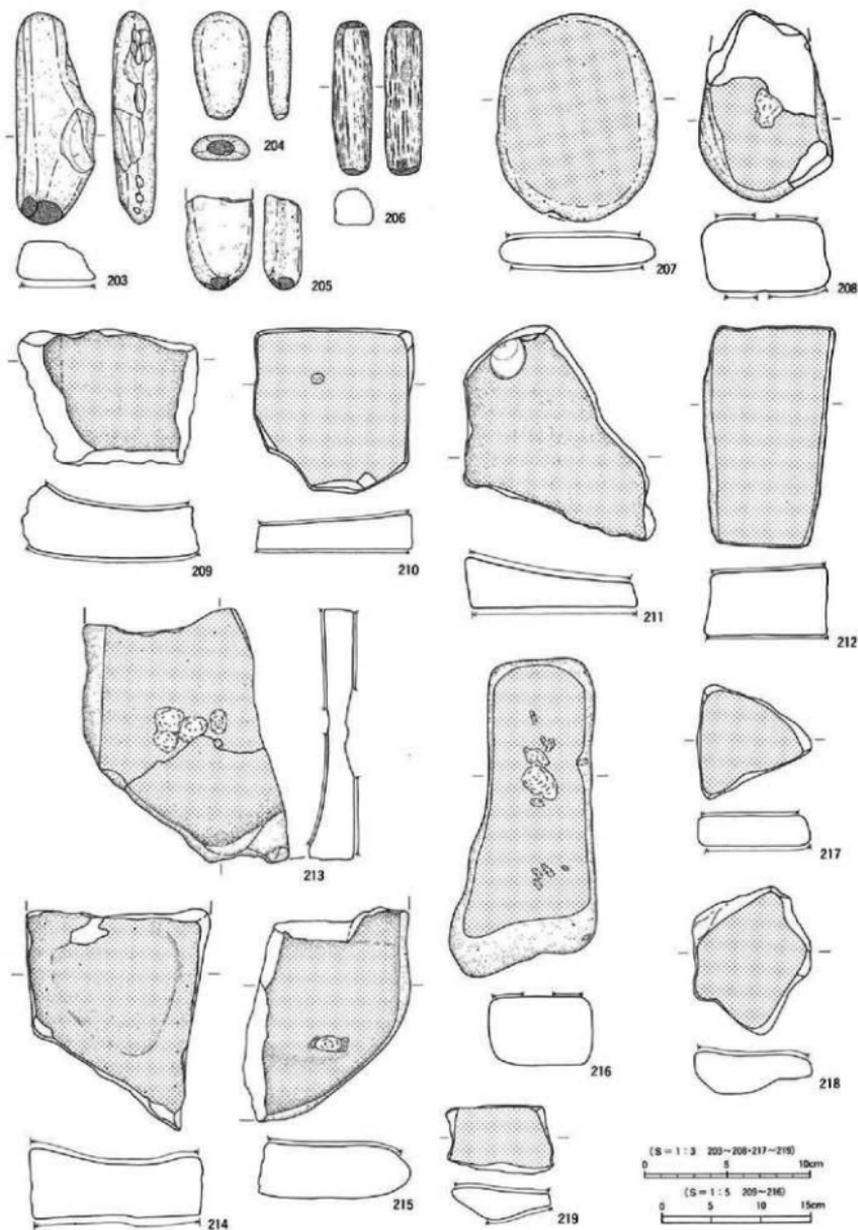
(S = 2 : 3 127~133) 5cm

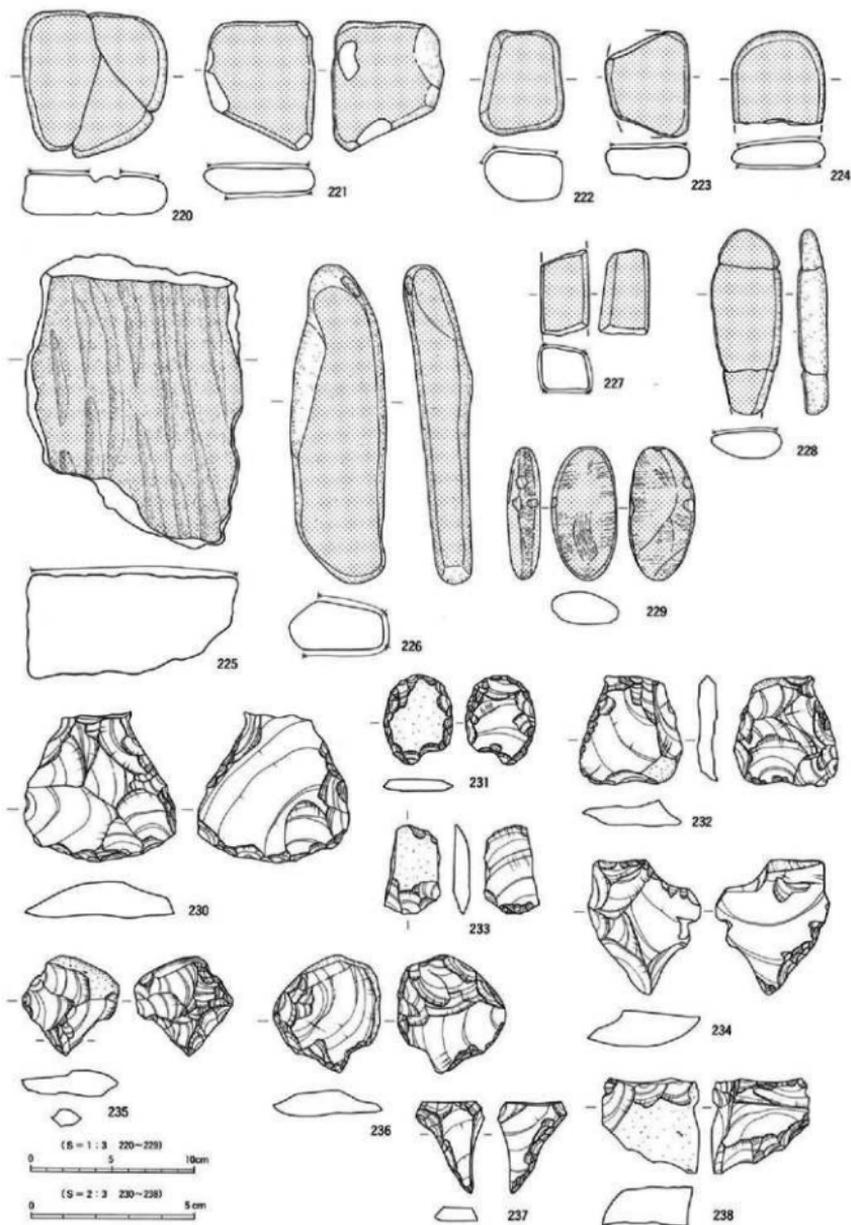
(S = 1 : 3 123~125, 134~142) 10cm

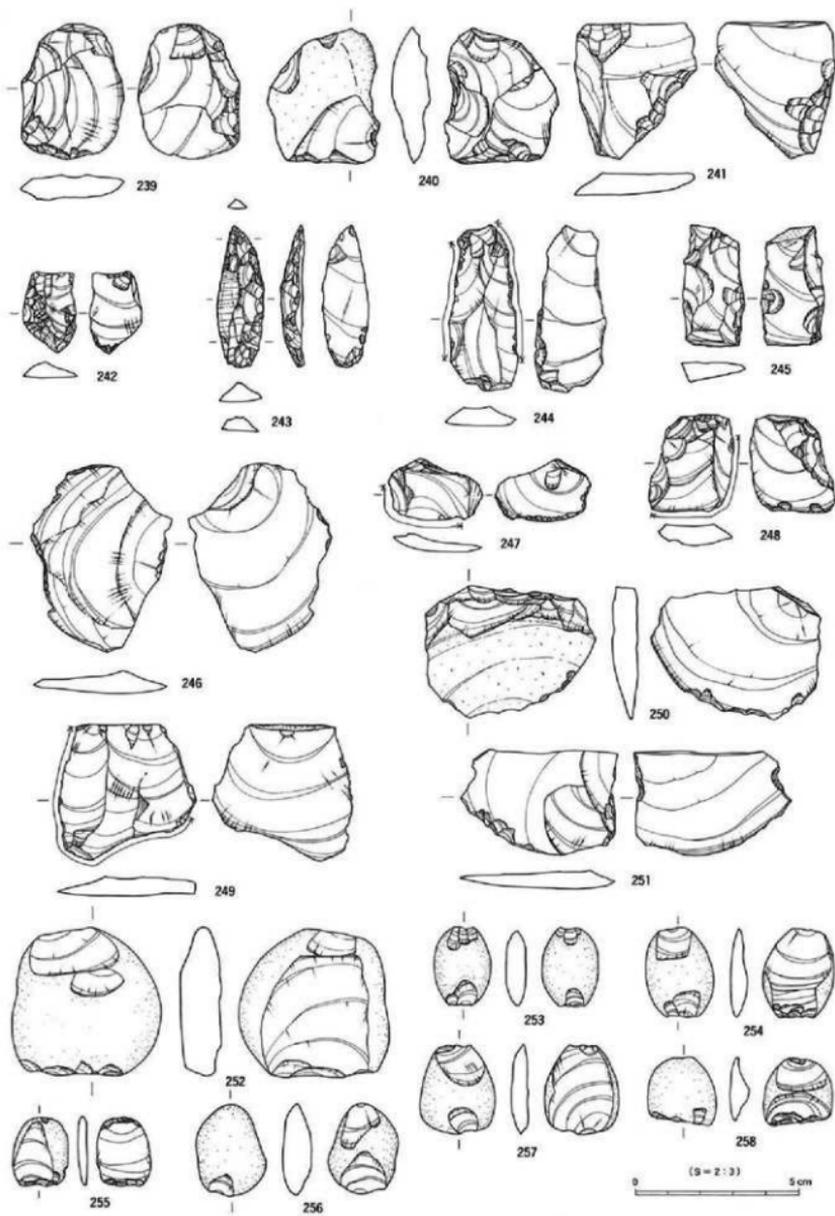


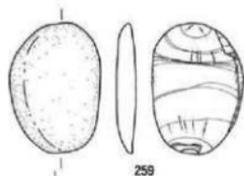




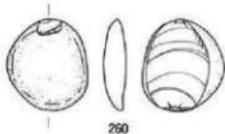




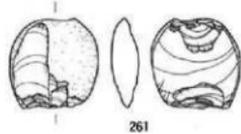




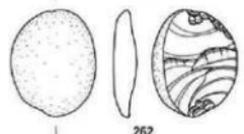
259



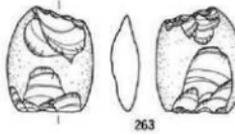
260



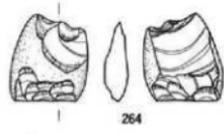
261



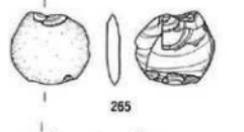
262



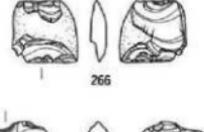
263



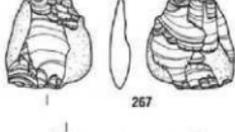
264



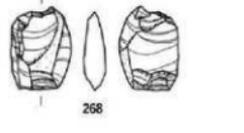
265



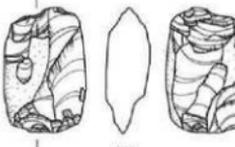
266



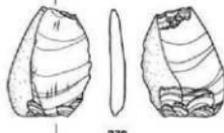
267



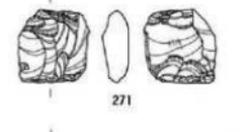
268



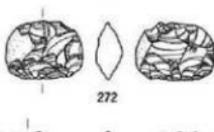
269



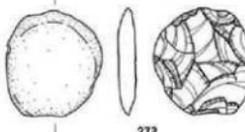
270



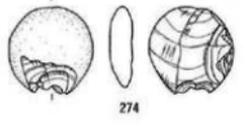
271



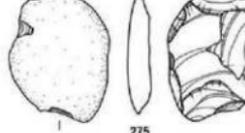
272



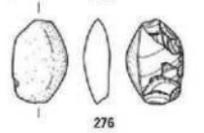
273



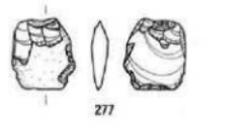
274



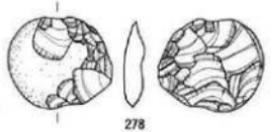
275



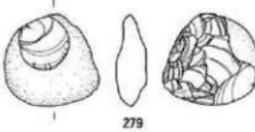
276



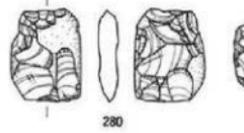
277



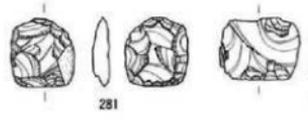
278



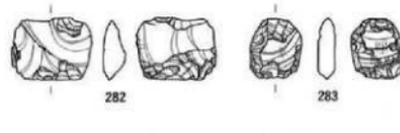
279



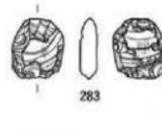
280



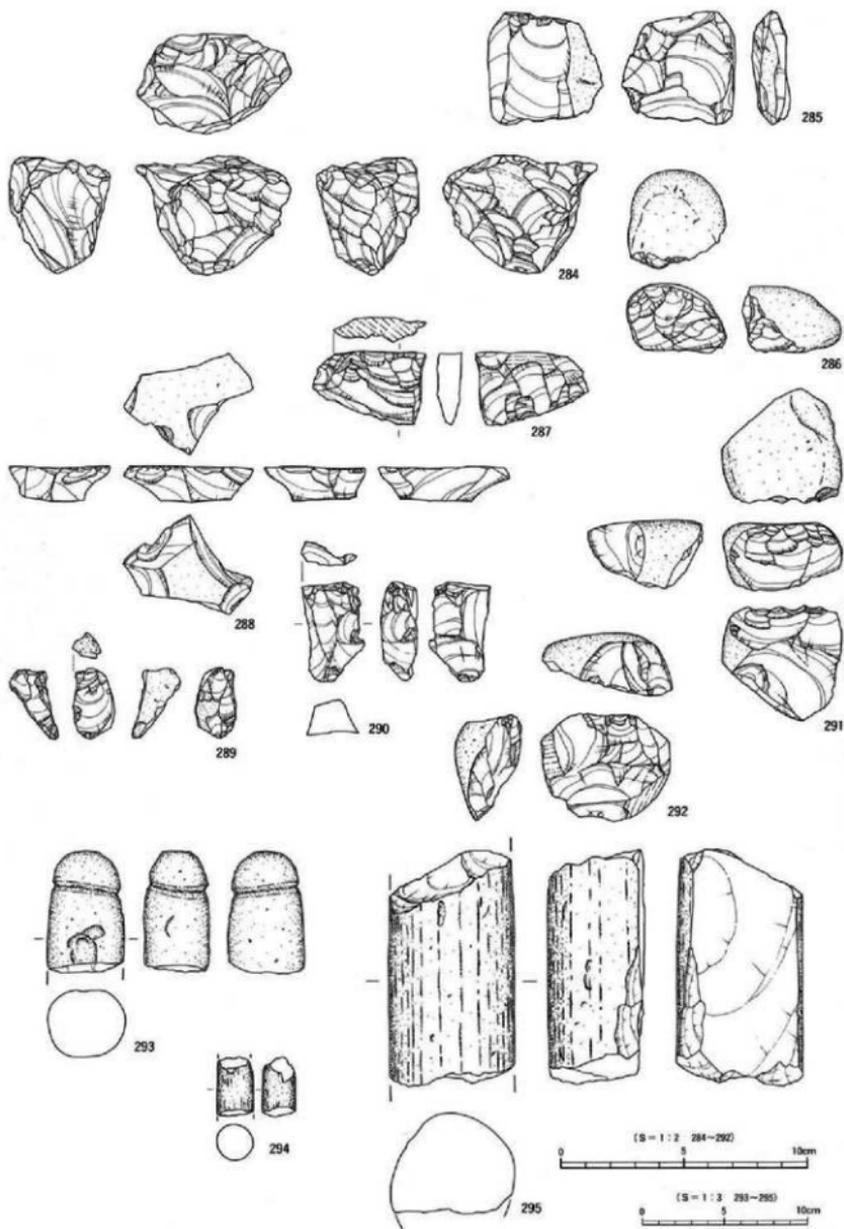
281

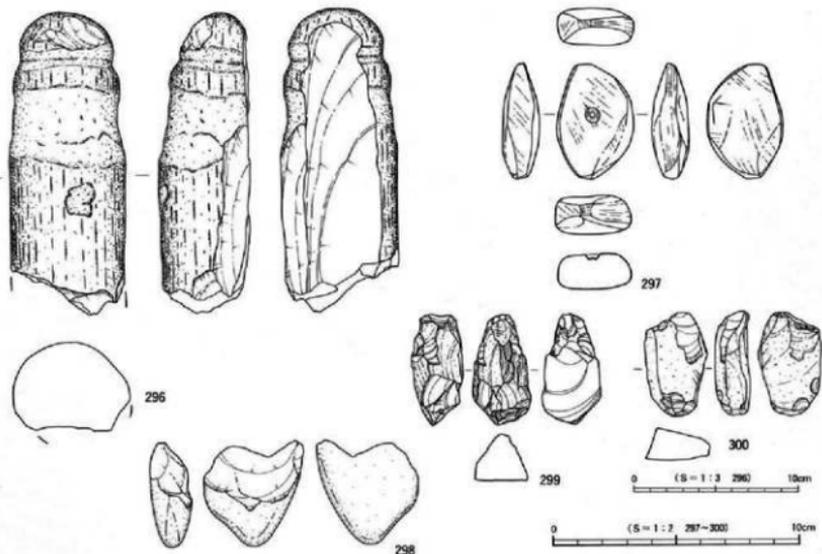


282

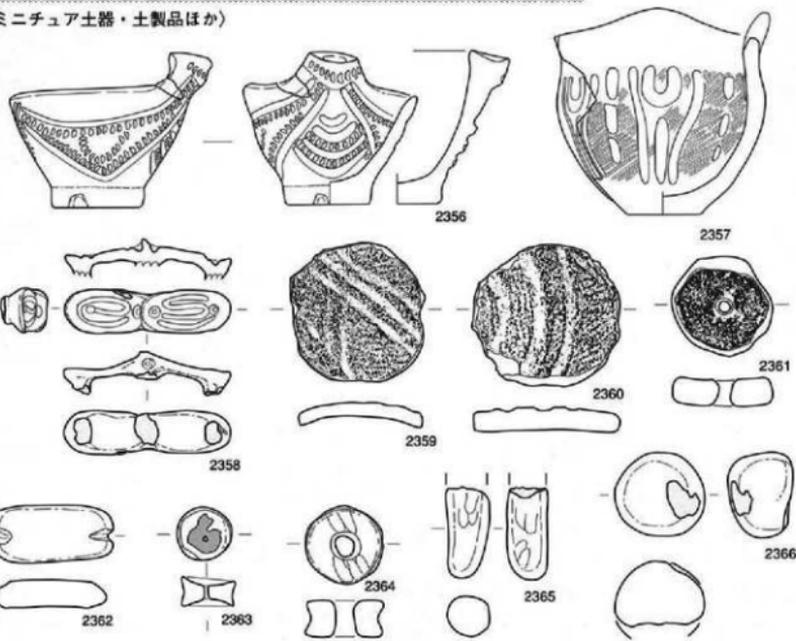


283





〈ミニチュア土器・土製品ほか〉



C7-10グリッド 4層: 2339~2345  
 腐土 2348~2355

2363-1:1

2356~2357・2359~2362

2364~2366=1:2

0 (S=1:1) 3cm

0 (S=1:2) 5cm

2339~2355=1:3

2358=1:4

0 (S=1:3) 15cm

0 (S=1:4) 20cm





a. 建物跡X群 (SB-78~81) 全景

南から



b. 廃棄場出土縄文土器群



a. 十三本塚北遺跡遠景

北から



b. 十三本塚北遺跡遠景

西から

調査 1



a. 調査区現況

北西から



b. 調査区現況



c. 表土剥ぎとジョレンがけ

北から



d. 表土剥ぎとジョレンがけ

北から



e. 遺構確認



f. 表土剥ぎと遺構確認

北から



g. 木根処理

北西から



h. 遺構確認

南西から



南から



西から



西から



南から



西から



南から



南西から



南東から



a. 調査区西辺部遺構群

南西から



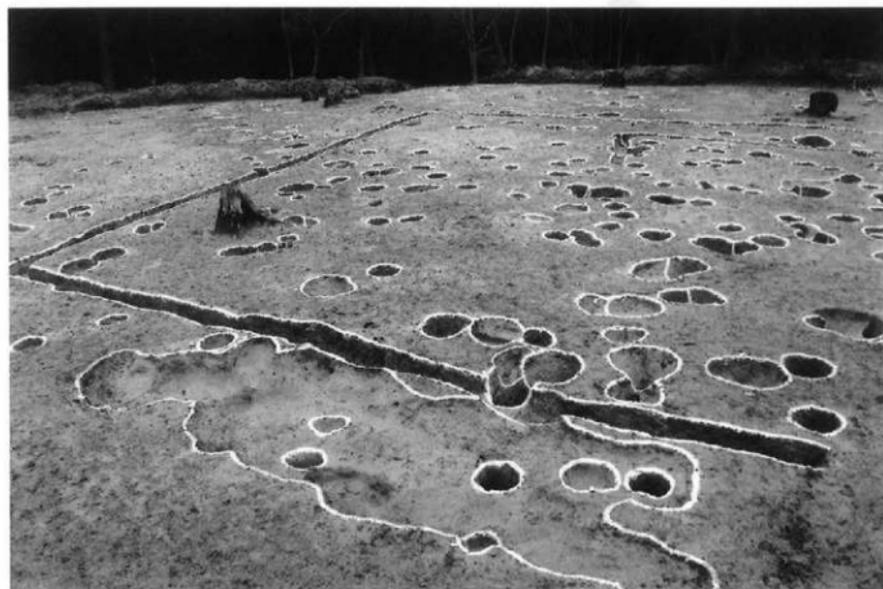
b. 調査区南東部遺構群

西から



a. 調査区中央部遺構群

西から



b. C~D-10~11グリッド遺構群

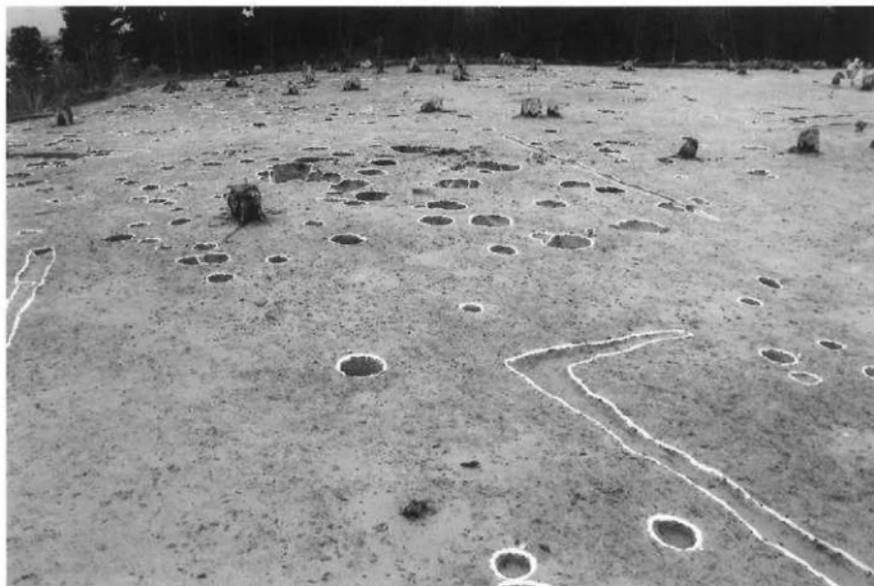
北から

遺構群 3



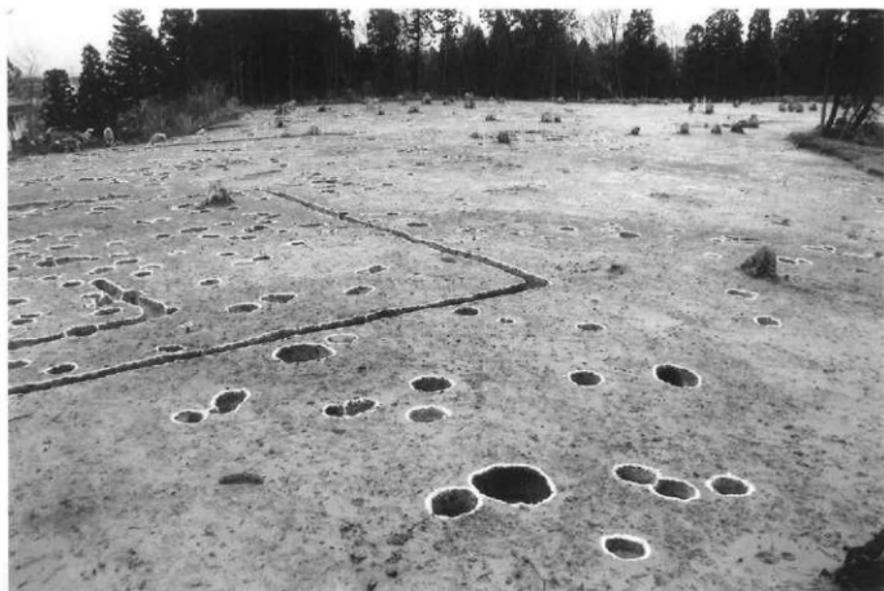
a. 調査区西辺部遺構群 (C~D-8~10グリッド)

南から



b. 調査区西半部中央遺構群

南から



a. 調査区西半部遺構群

南西から



b. E-7~8グリッド周辺遺構群

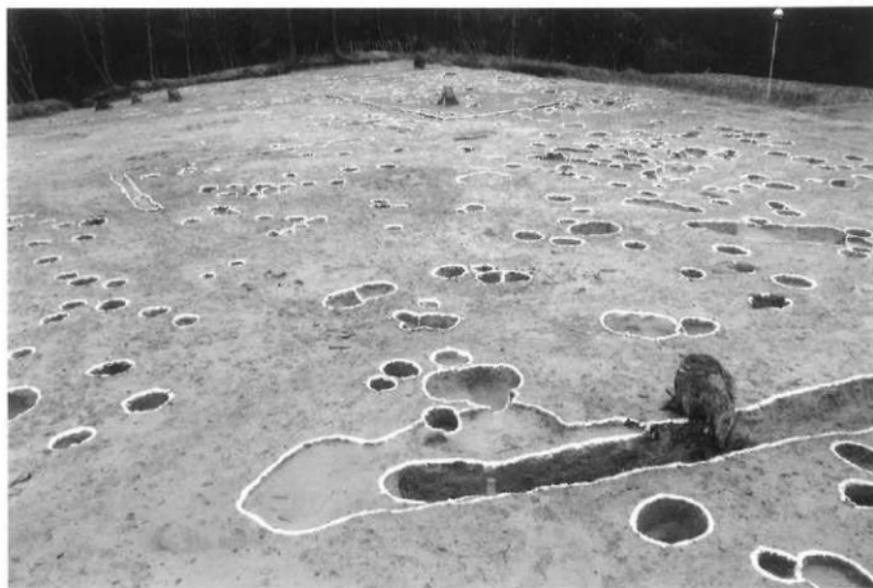
北から

遺構群 5



a. 調査区西半部遺構群

北から



b. 調査区西半部遺構群 (C~E-8~11グリッド)

北東から



a. C~D-9~10グリッド遺構群

北東から



b. C~D-9~11グリッド遺構群

東から

遺構群 7



a. C~D-7~8グリッド遺構群

南から



b. E~D-6グリッド周辺遺構群 (SB-74・SI-43-44)

東から



a. 調査区北辺部遺構群 (E~I-4~5グリッド)

南東から



b. 調査区北西部遺構群

南西から



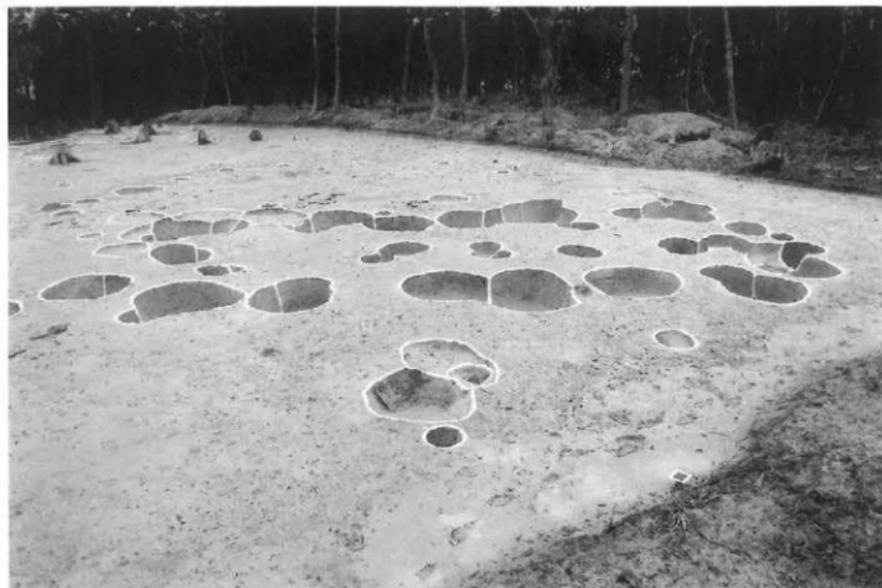
a. 調査区東半部遺構群

南東から



b. 調査区東辺部遺構群

南西から



a. 調査区東辺部遺構群 (建物跡X群)

南西から



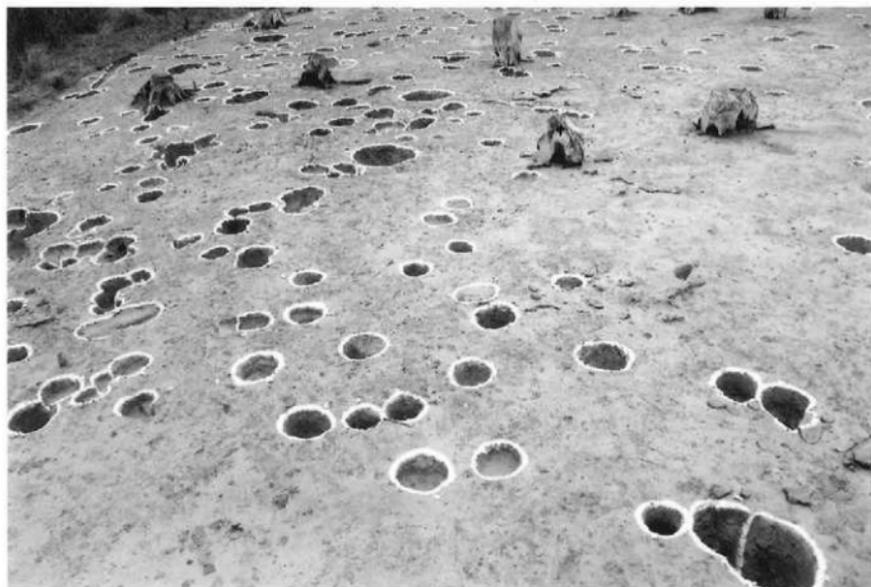
b. 調査区北東部遺構群 (土坑B群・SI-71)

南西から



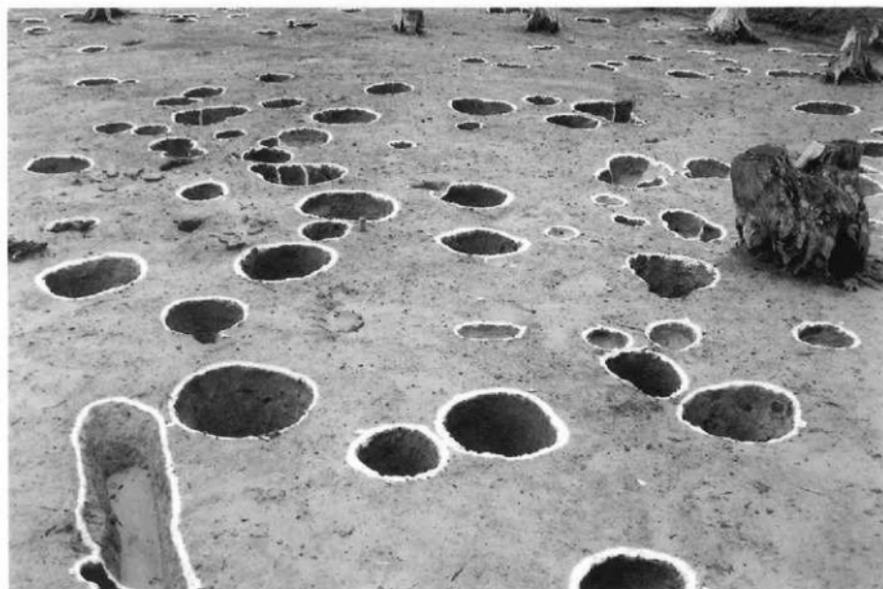
a. SB-73建物跡

南東から



b. SB-74建物跡・SI-39・40・43~45住居跡 (D-7グリッド周辺遺構群)

南から



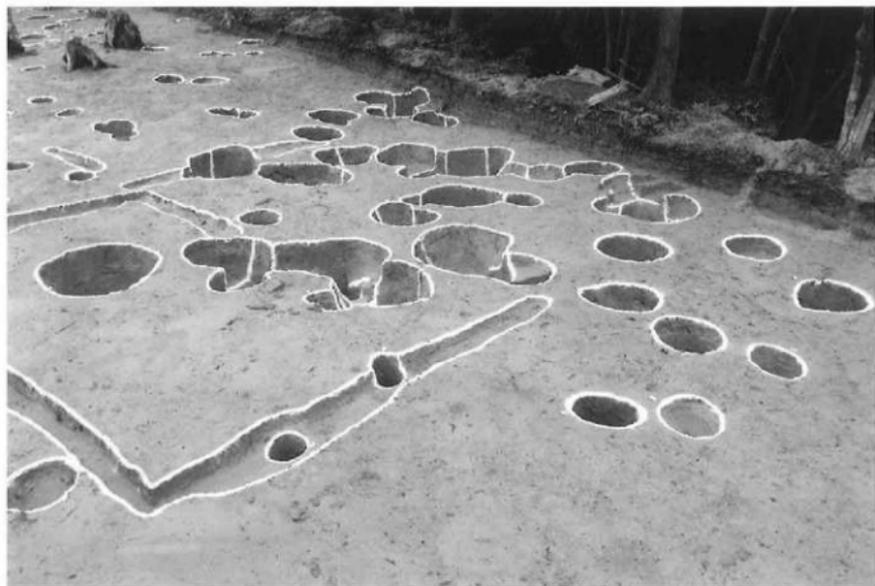
a. SB-75~76建物跡・SI-58~60住居跡 (G-5グリッド杭周辺)

南東から



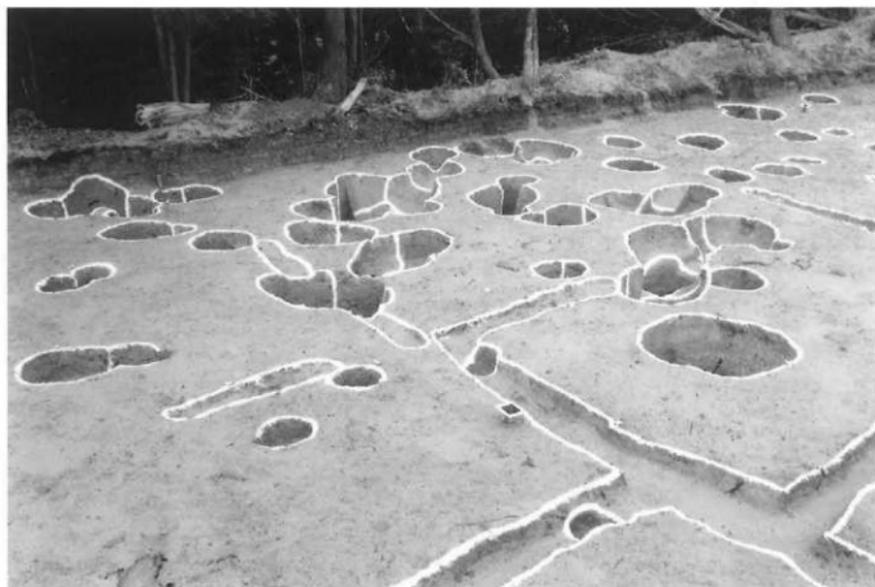
b. SB-75~76建物跡・SI-58~60住居跡 (F・G-4~5グリッド)

西から



a. SB-77群・SI-67住居跡 (G・H-4グリッド遺構群)

南東から



b. SB-77群・SI-67住居跡 (H-4グリッド遺構群)

南西から



a. SB-78建物跡

南西から



b. SB-78建物跡

南東から



a. 建物跡X群 (SB-78~81)

南西から

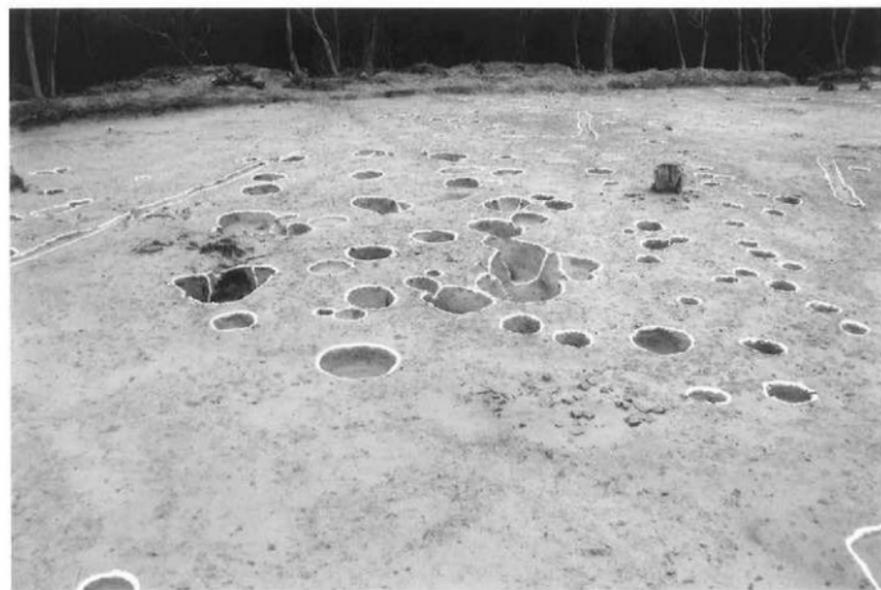


b. 建物跡X群 (SB-78~81)

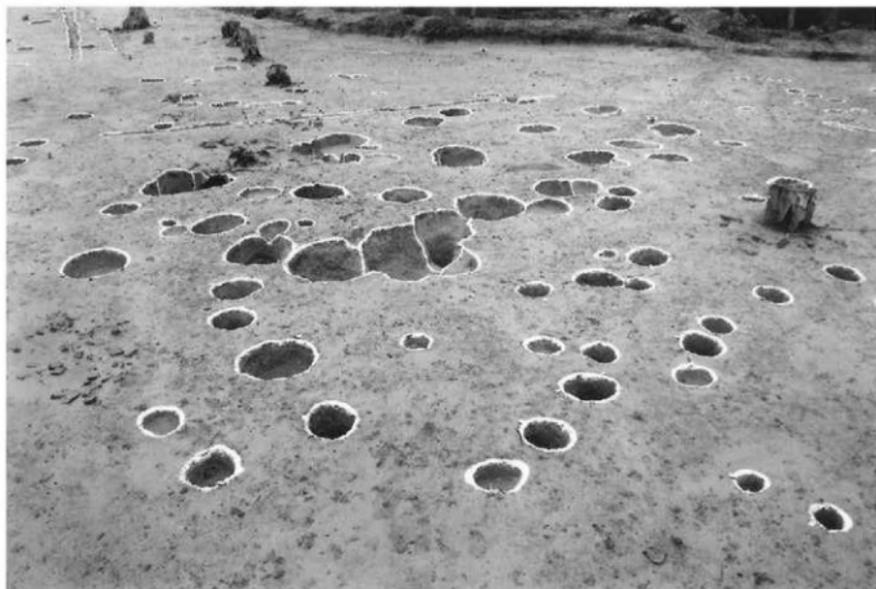
南から



a. 土坑A群・SB-83建物跡・SI-63~65住居跡 (F・G-6グリッド遺構群) 北西から



b. E・F-8~9グリッド周辺遺構群 北から



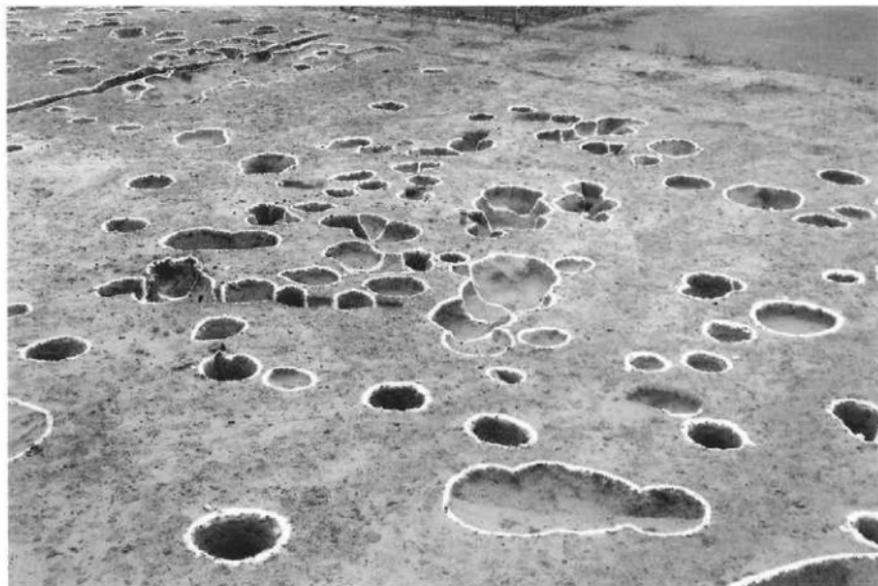
a. 建物跡Y群 (SB-84~87)

北西から



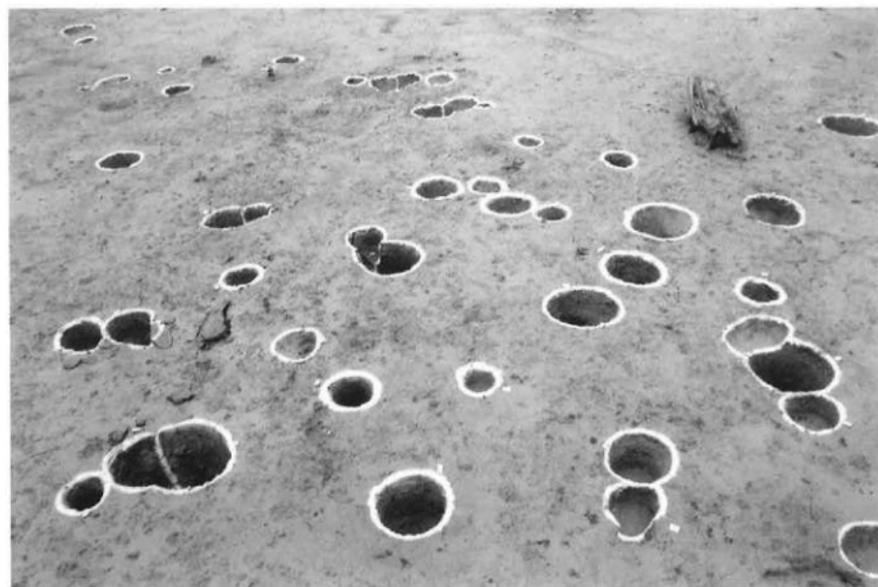
b. 建物跡Y群 (SB-84~87)

北から



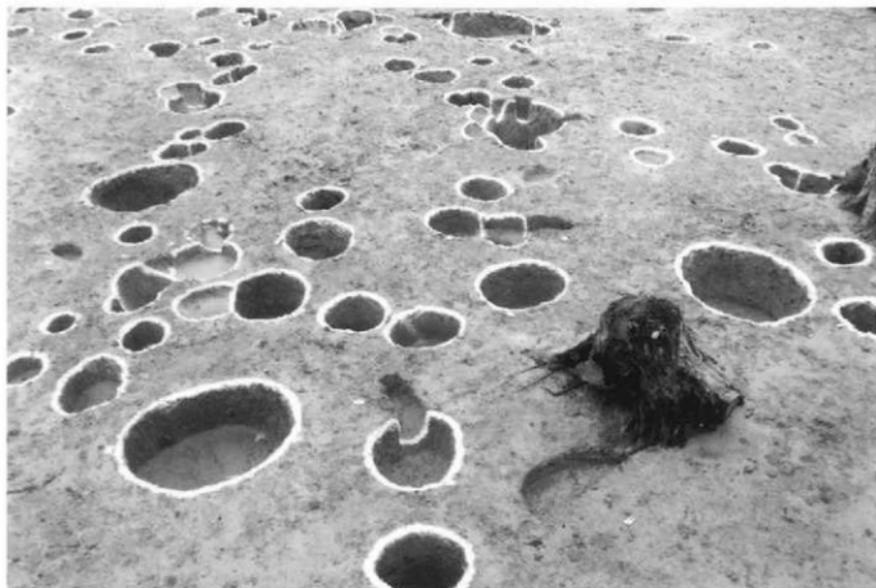
a. SI-10~14住居跡 (C・D-8~9グリッド遺構群)

東から



b. SI-36住居跡 (E-7グリッド)

西から



a. SI-43~44住居跡 (D・E-6グリッド周辺遺構群)

北東から



b. SI-47~54住居跡 (E-5グリッド周辺遺構群)

北から



a. SI-48~49・51~53住居跡 (D~E-4~5グリッド周辺遺構群)

南東から



b. SB-83建物跡・SI-61~65住居跡 (F~G-5~6グリッド周辺遺構群)

北東から



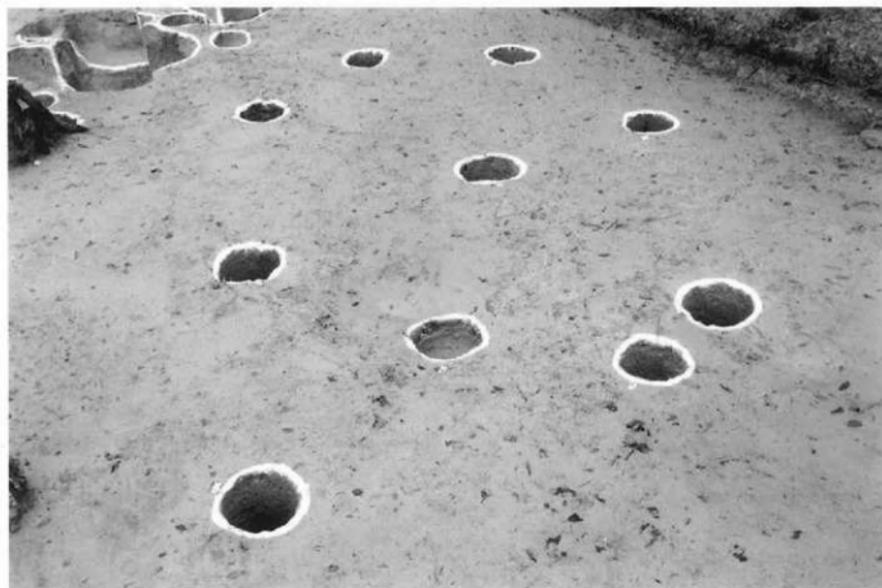
a. SI-68住居跡

南東から



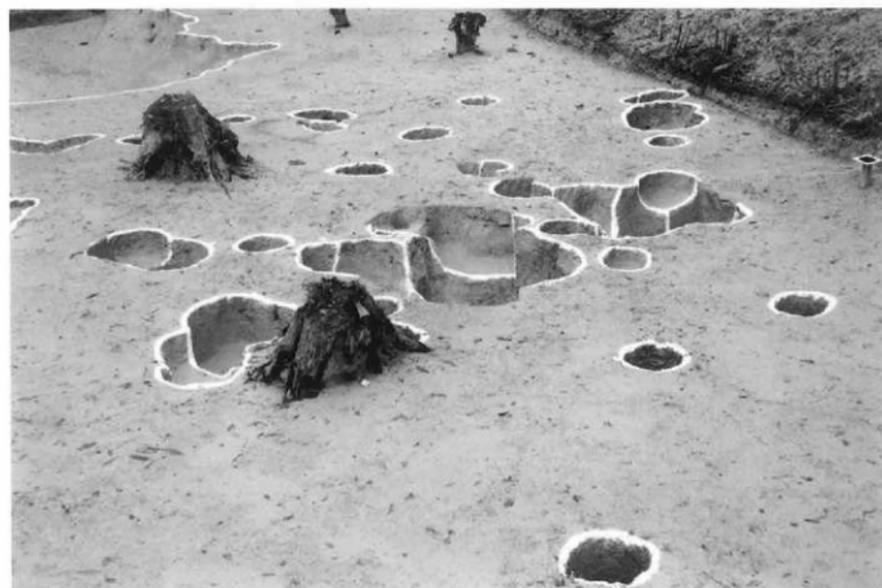
b. SI-69住居跡

南から



a. SI-70住居跡東 (J-5グリッド東~K-5グリッド西)

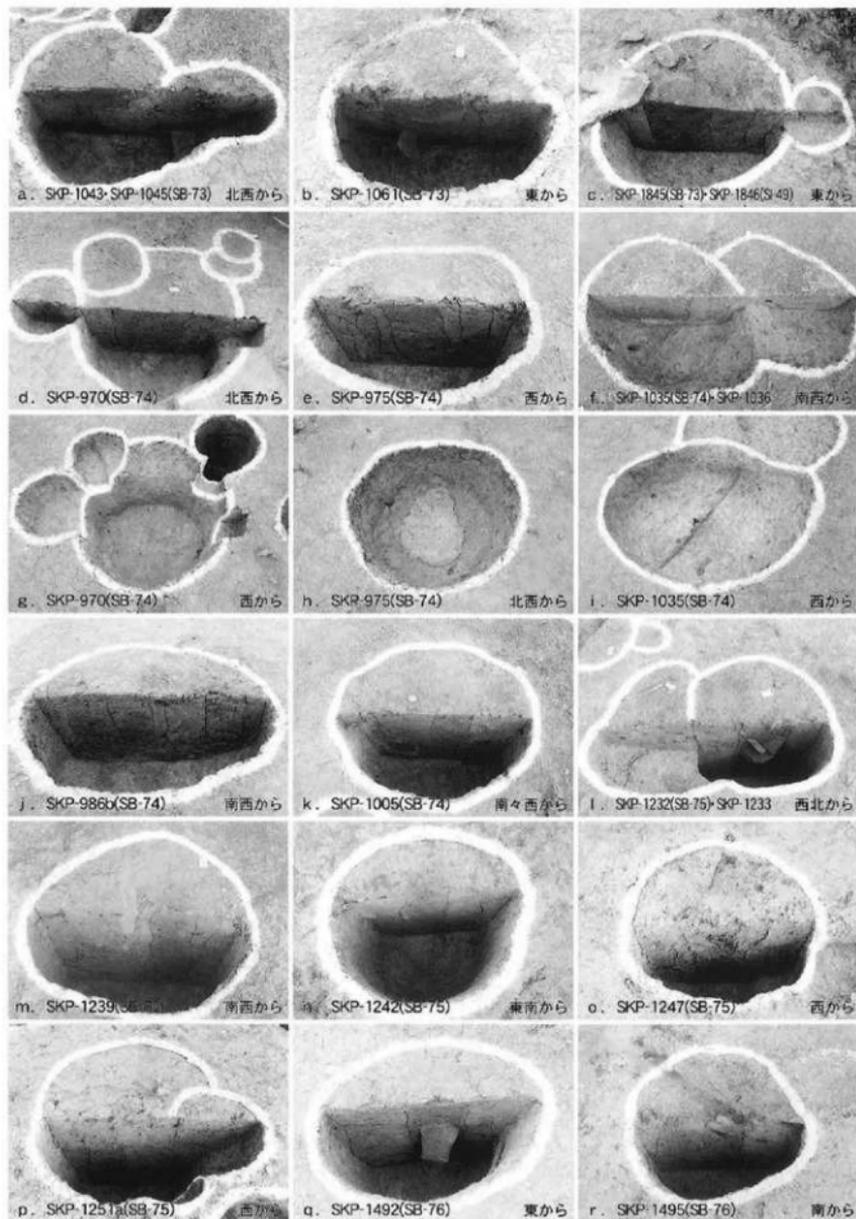
南西から



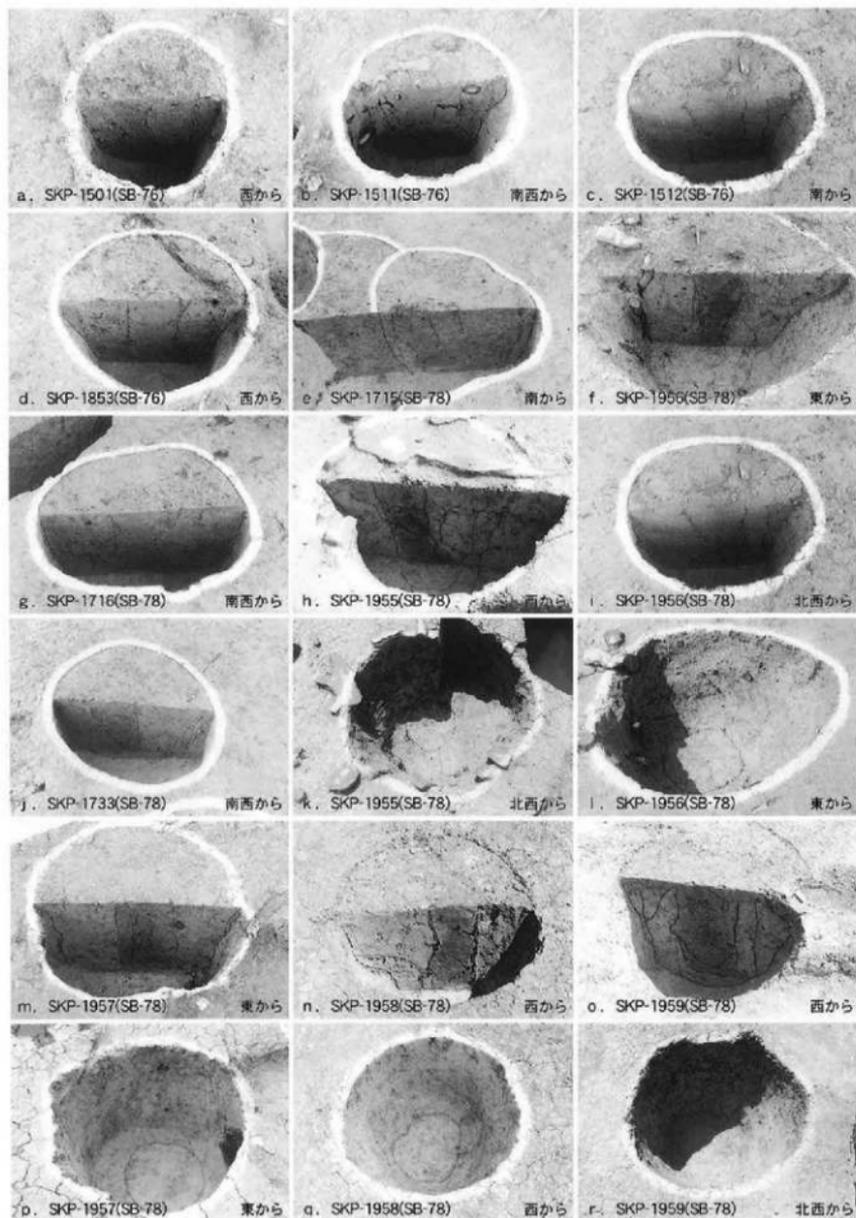
b. SI-71住居跡 (K-5グリッド杭付近土坑B群)

南西から

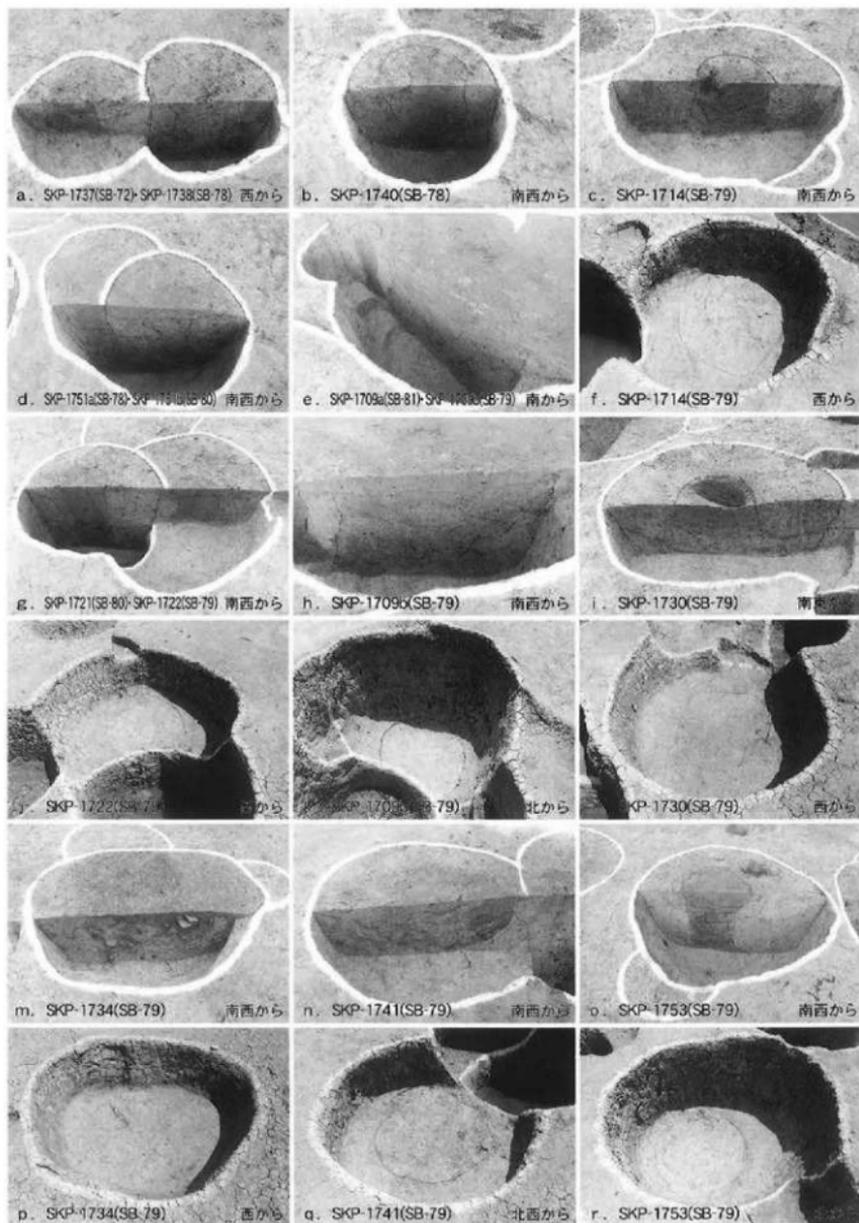
柱穴 1 (建物跡 1)



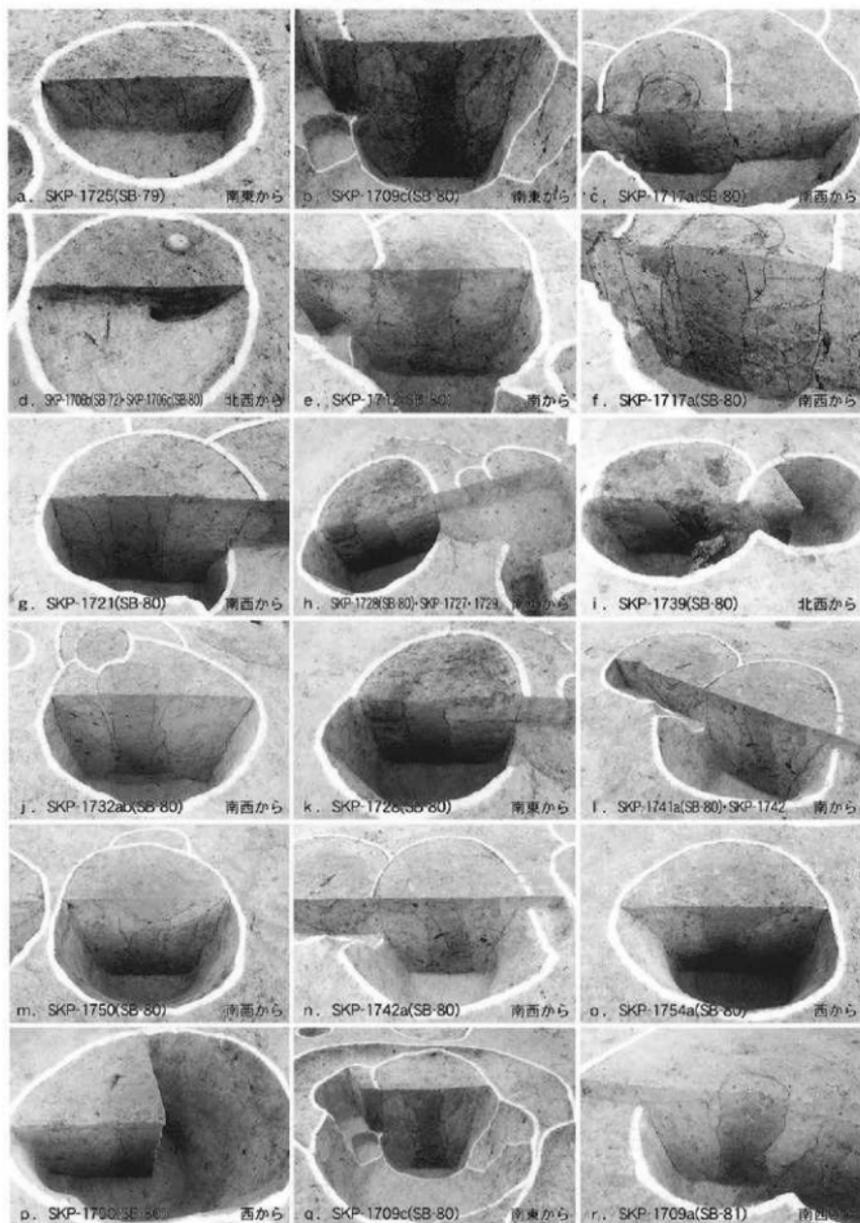
## 柱穴 2 (建物跡 2)



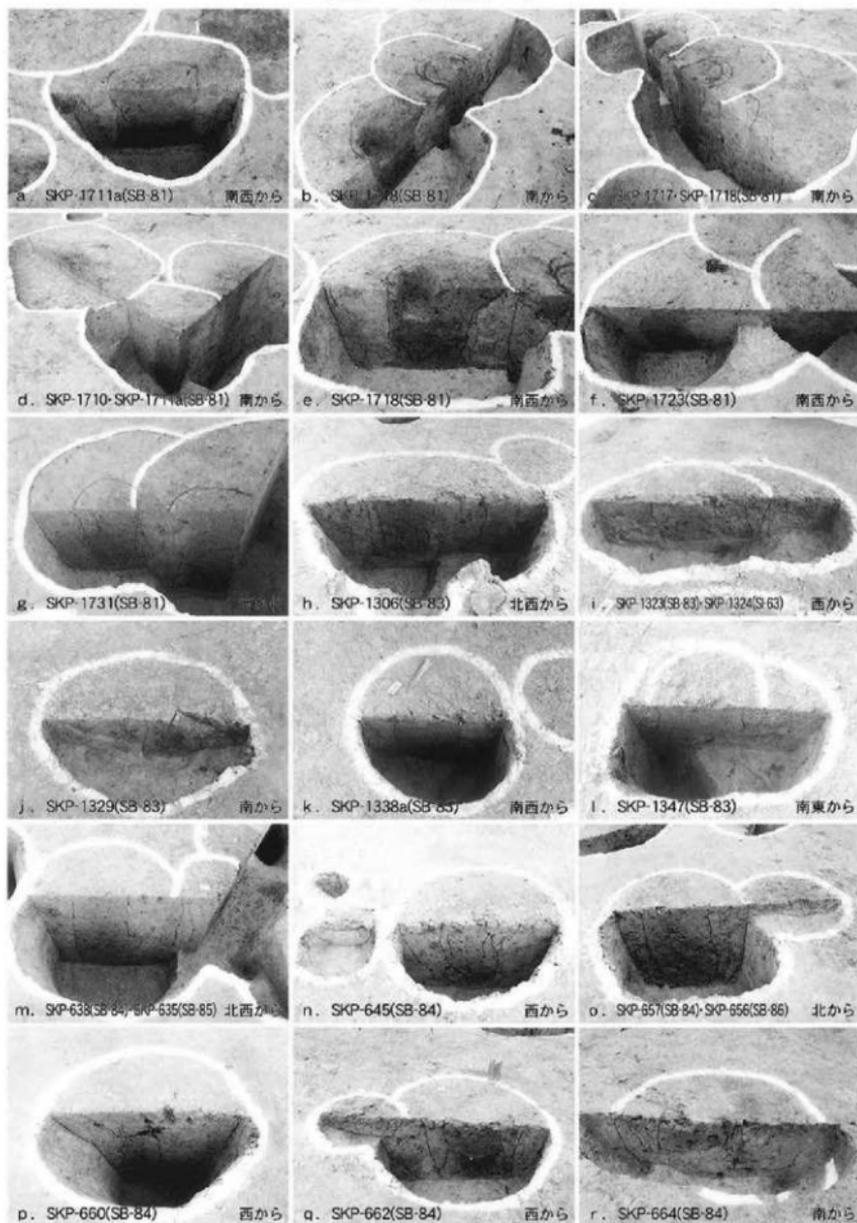
柱穴 3 (建物跡 3)



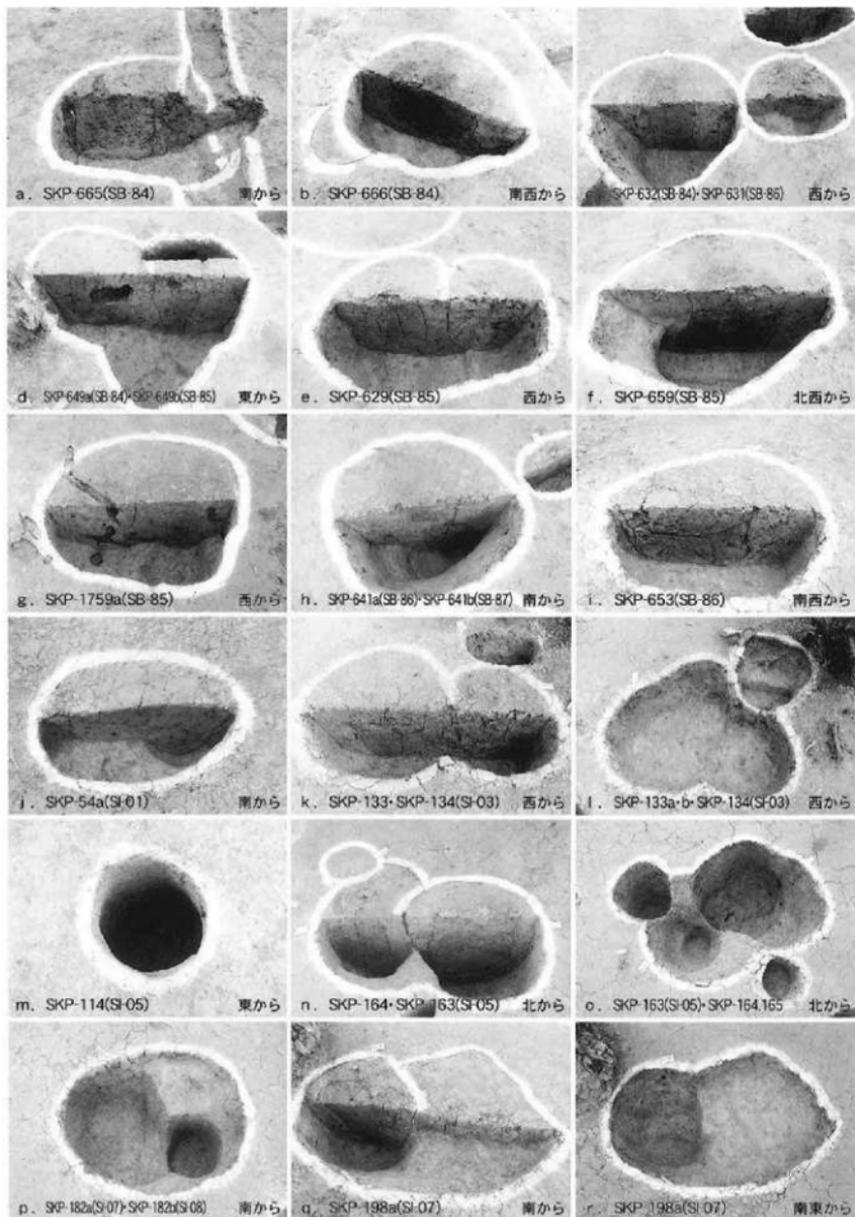
## 柱穴 4 (建物跡 4)



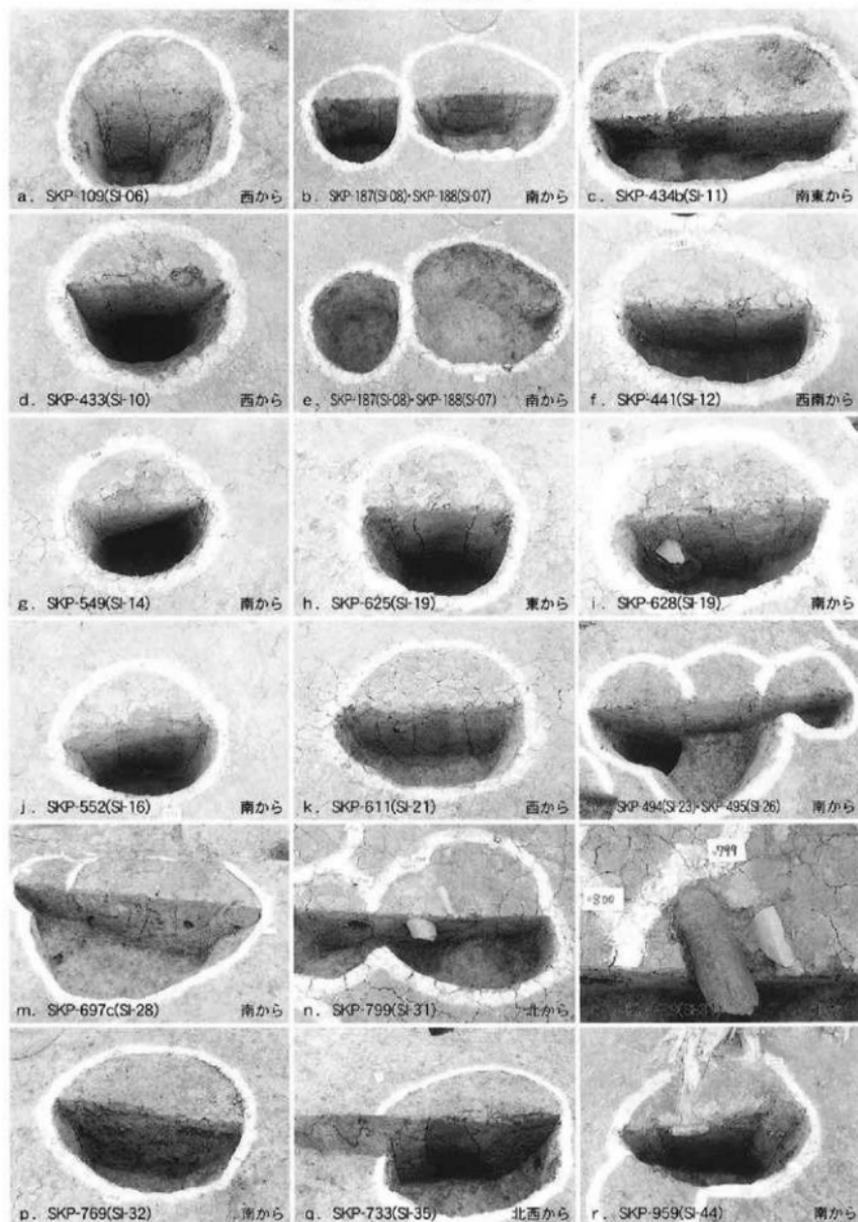
柱穴5 (建物跡5)



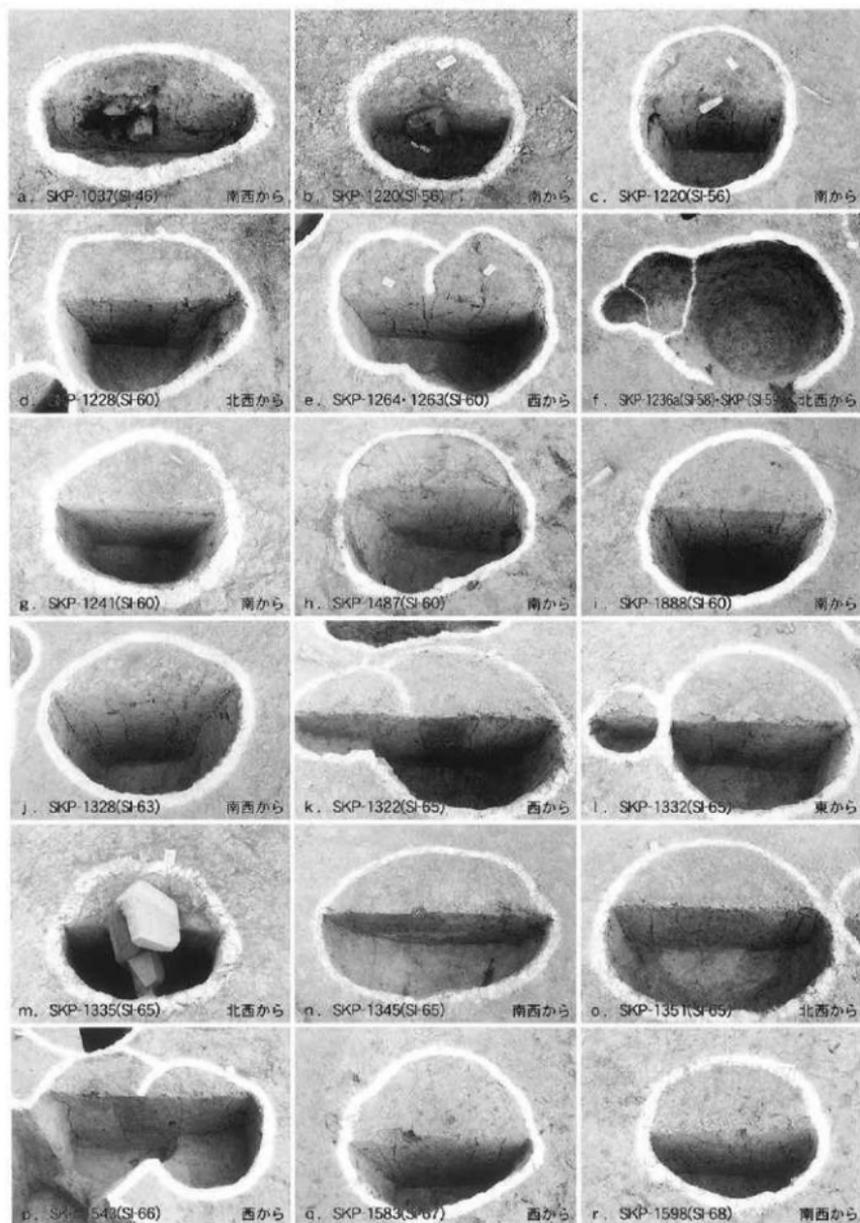
## 柱穴 6 (建物跡 6・住居跡 1)



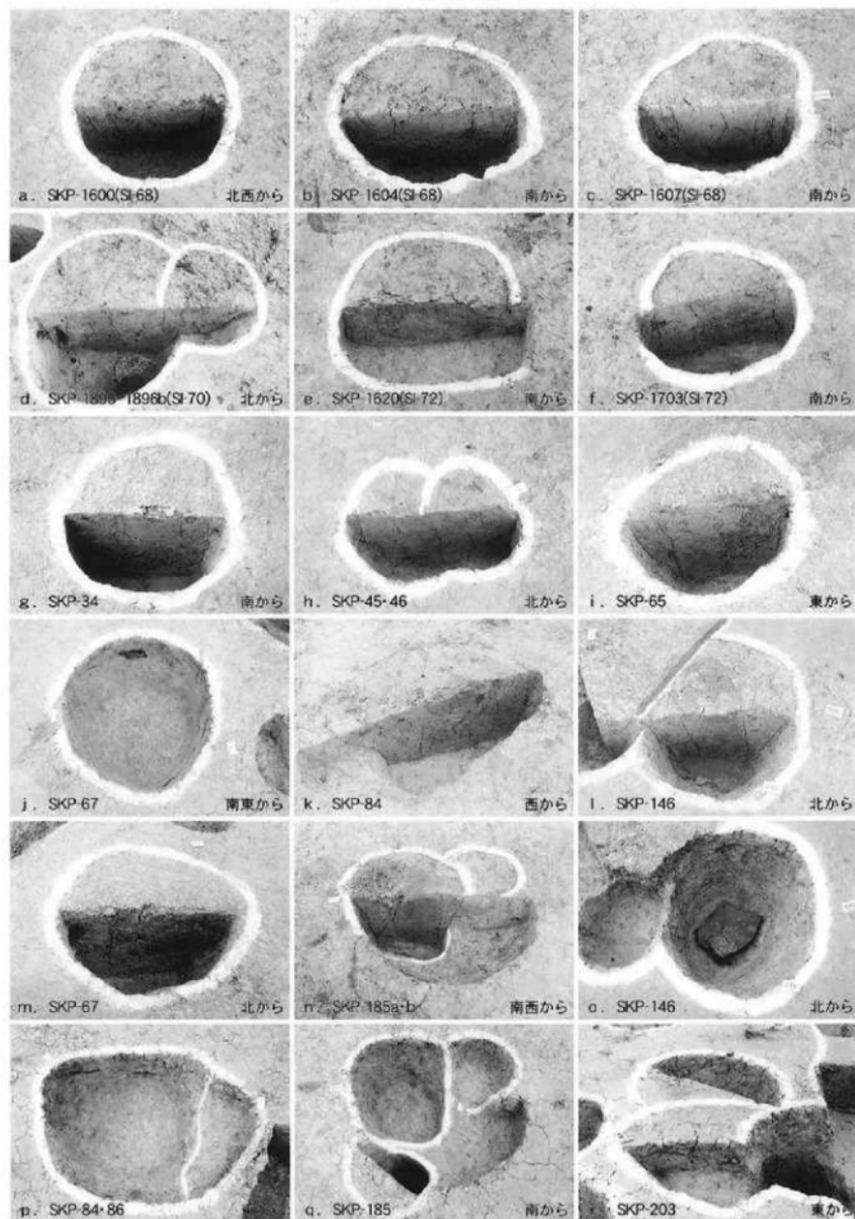
柱穴 7 (住居跡 2)

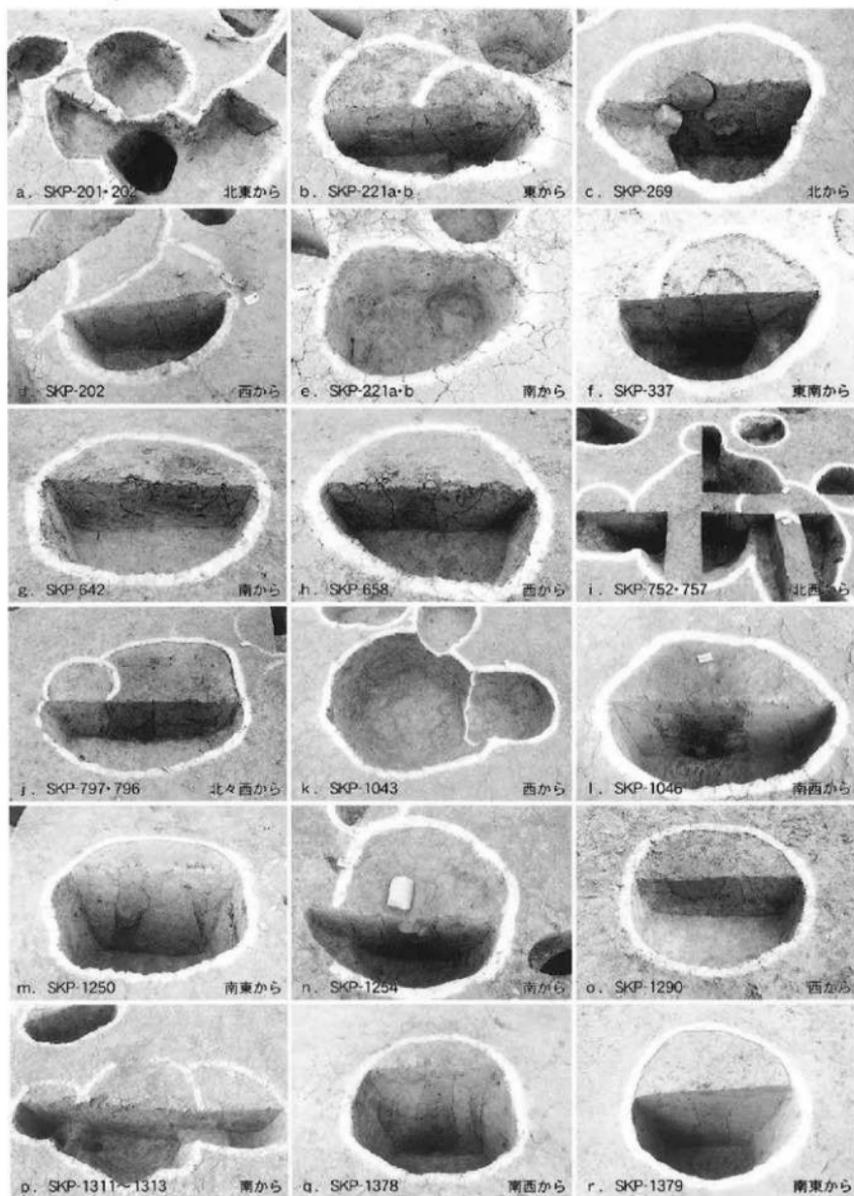


## 柱穴 8 (住居跡 3)

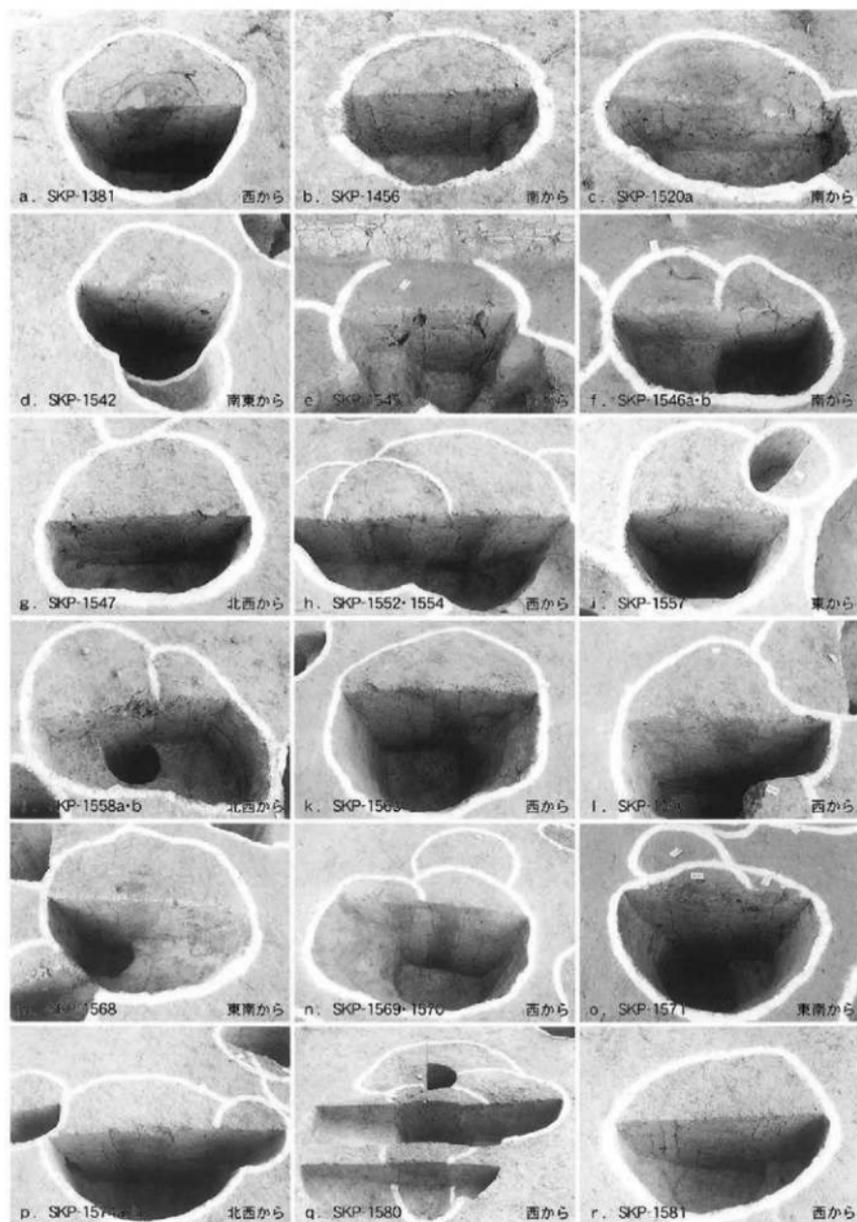


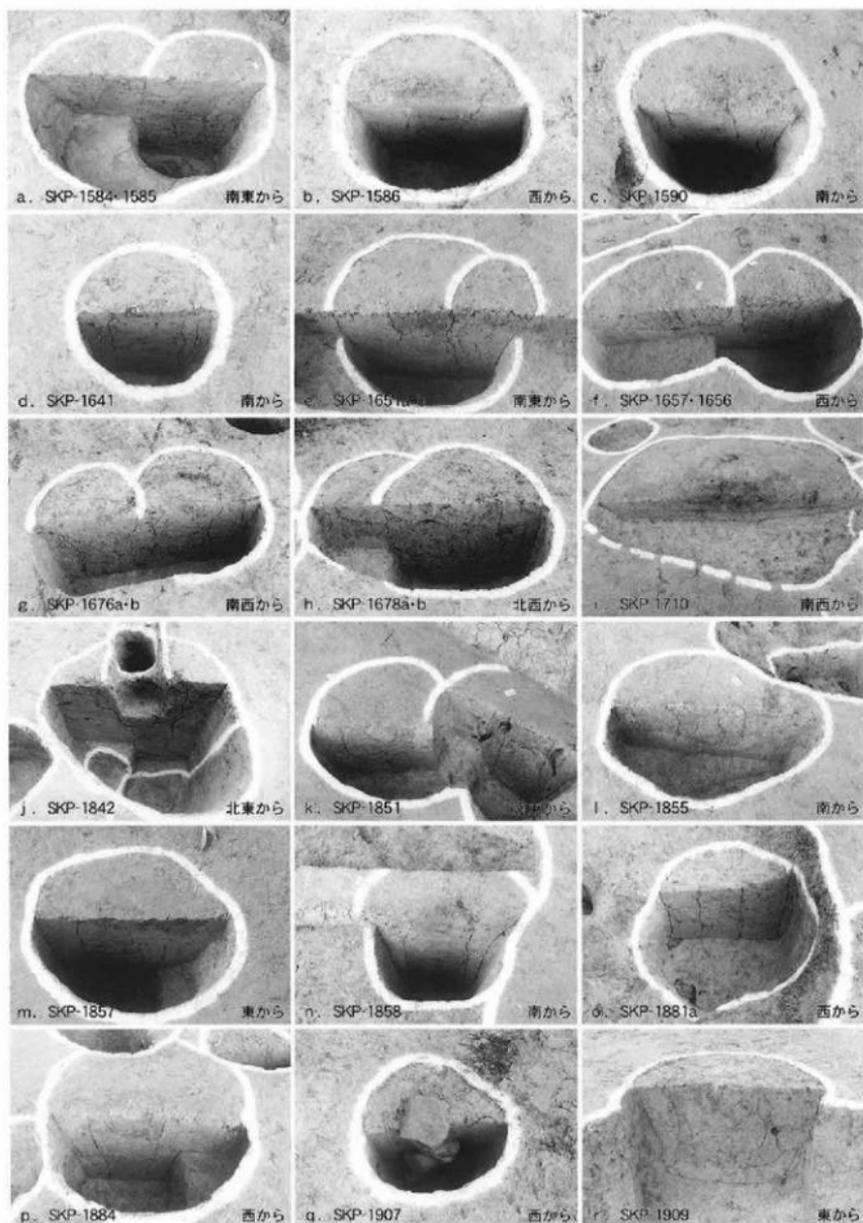
柱穴 9 (住居跡 4)



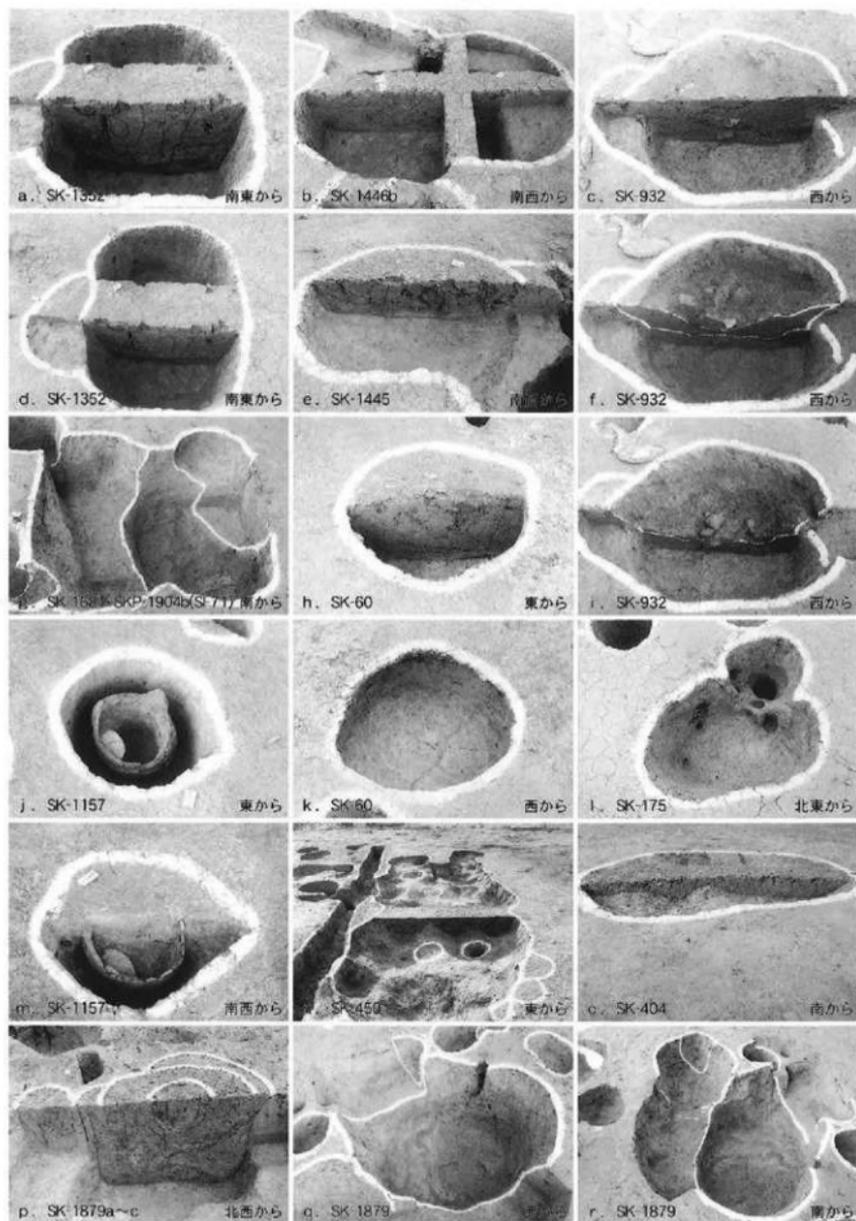


柱 穴 11





土 坑





a. 第2層出土遺物の取上げ



b. 第2層の発掘

南東から



c. 第2層の発掘



d. 第3層の発掘

北西から



e. 発掘作業風景

北から



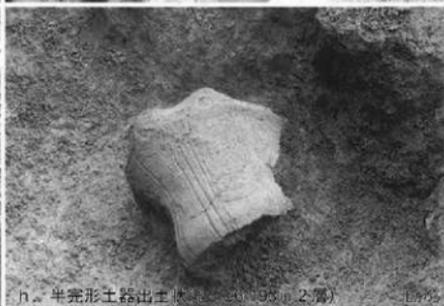
f. 3rd層下部部の発掘

北西から



g. 遺物出土状況(第1層)

北から



h. 半圆形土器出土体(No. 198, 2層)

北西から

廃棄場 2



a. 遺物出土状況 (第2層上面)

北西から



b. 遺物出土状況 (第2層上面)

北西から



a. Cベルト土層断面

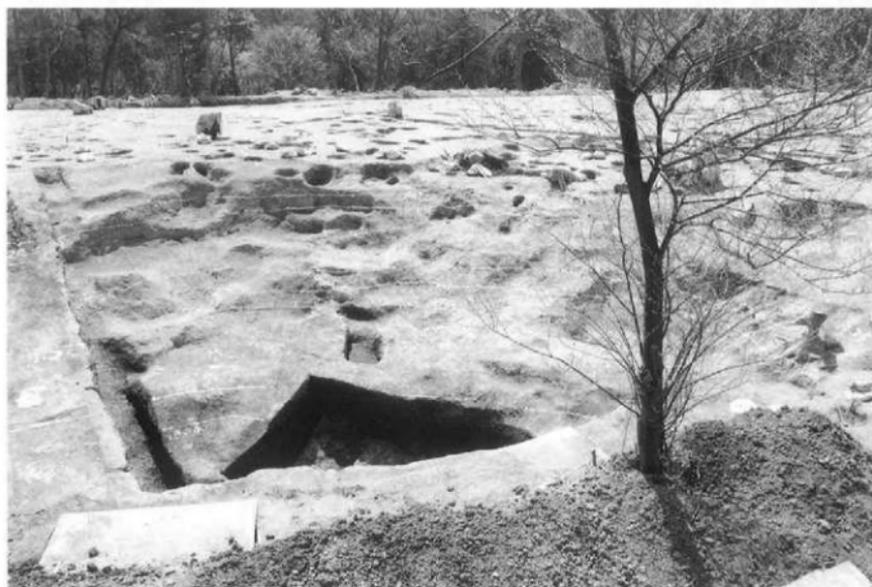
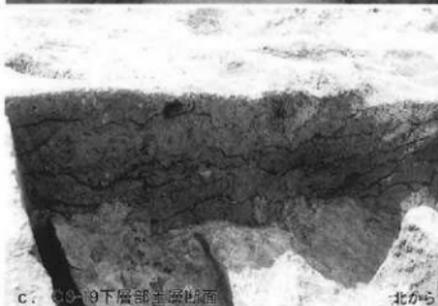
南東から



b. 第1トレンチ土層断面

西北から

廃棄場 4



e. 廃棄場完掘全景

北東から



a. SK-1666・1667

東南から



b. SK1666・1667

南西から



c. SK-1666・1667

南西から



d. SK-1666・1667

南西から



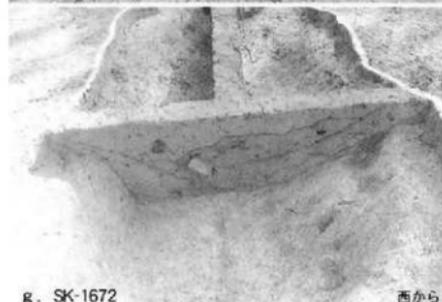
e. SK-1666・1667

東南から



f. SK-1666・1667

南東から



g. SK-1672

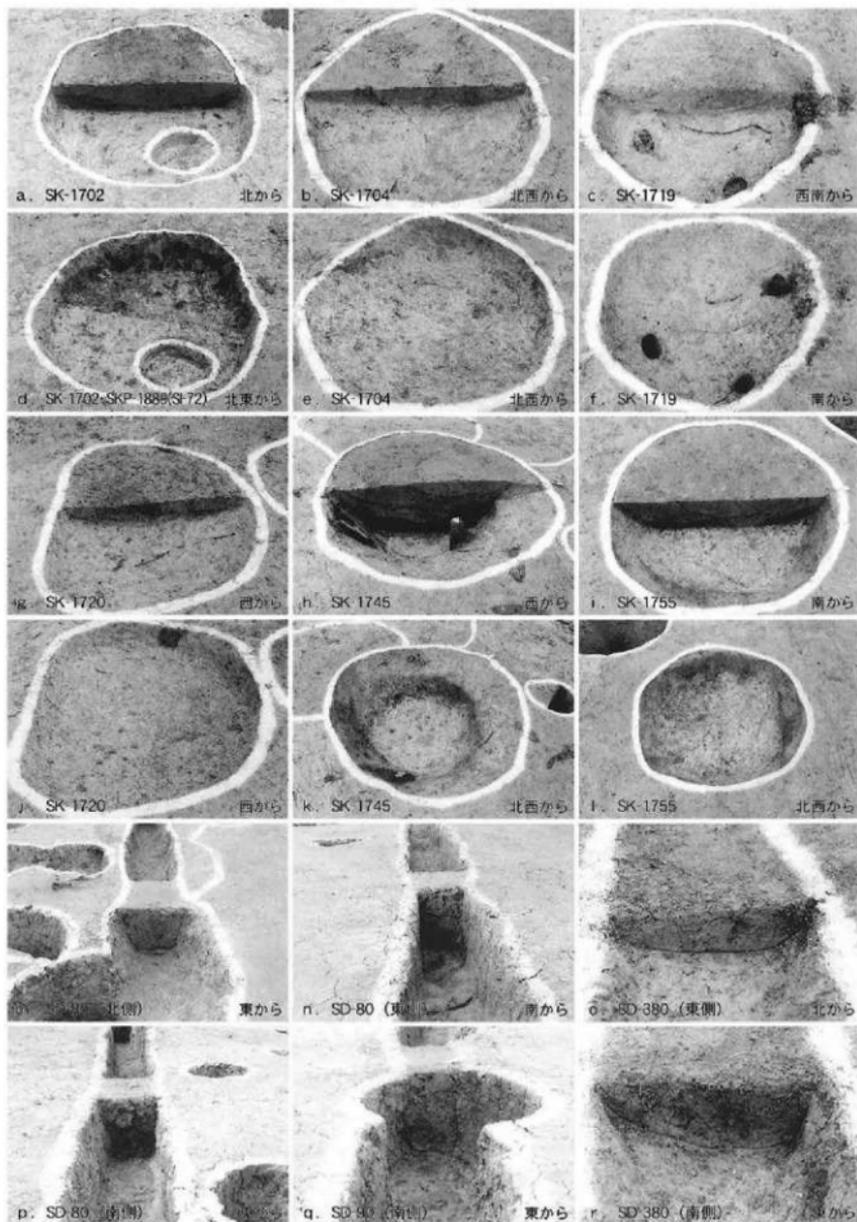
西から

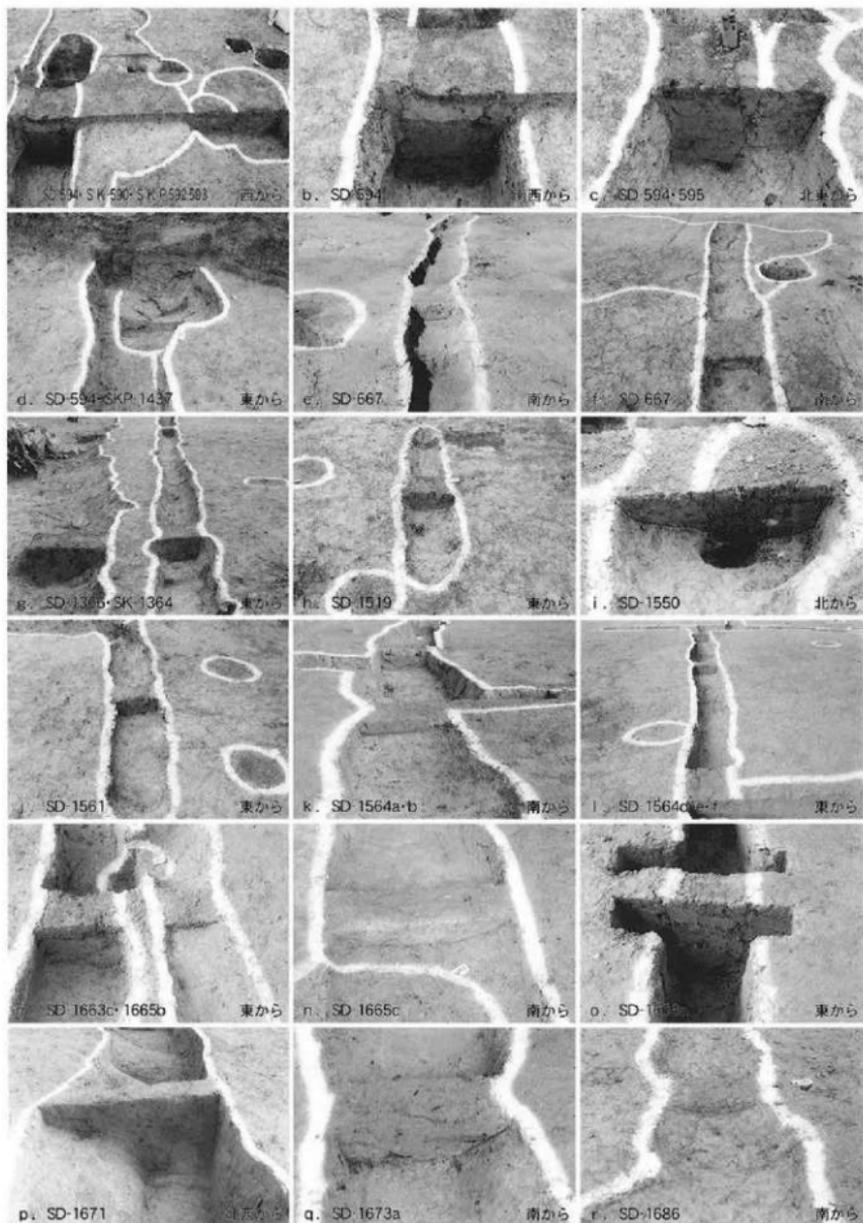


h. SK-1672

南西から

焼土坑 溝跡 1



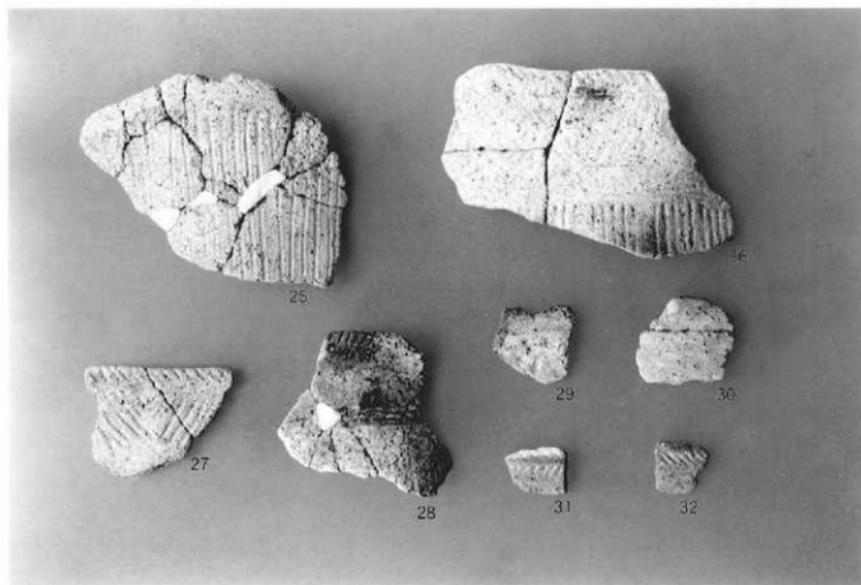


遺構出土縄文土器



a. SK-1734 出土縄文土器

(約1:3)



b. SK-932出土縄文土器

(約1:3)





230



576



1182



1194



1195



1278





1180



1565



2253



248



1189



1571















1572



972



1556



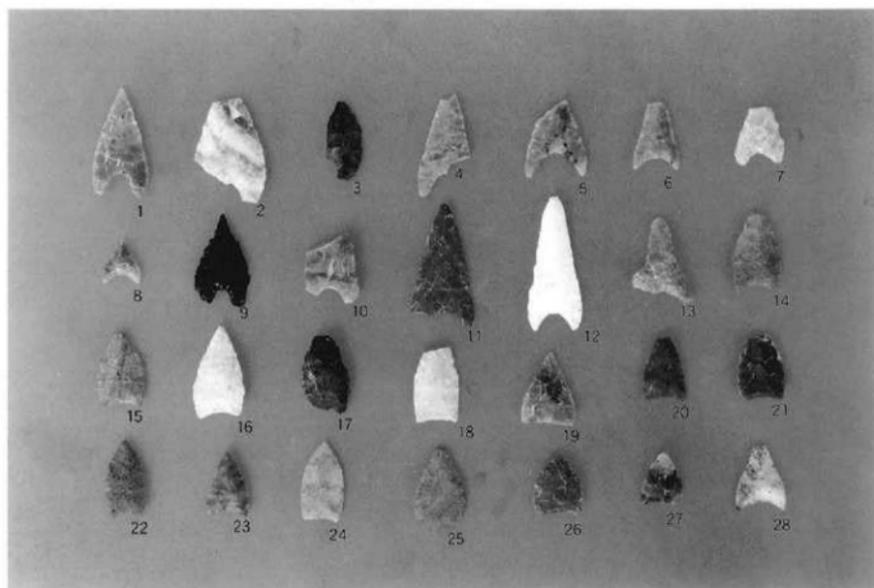
1270



270

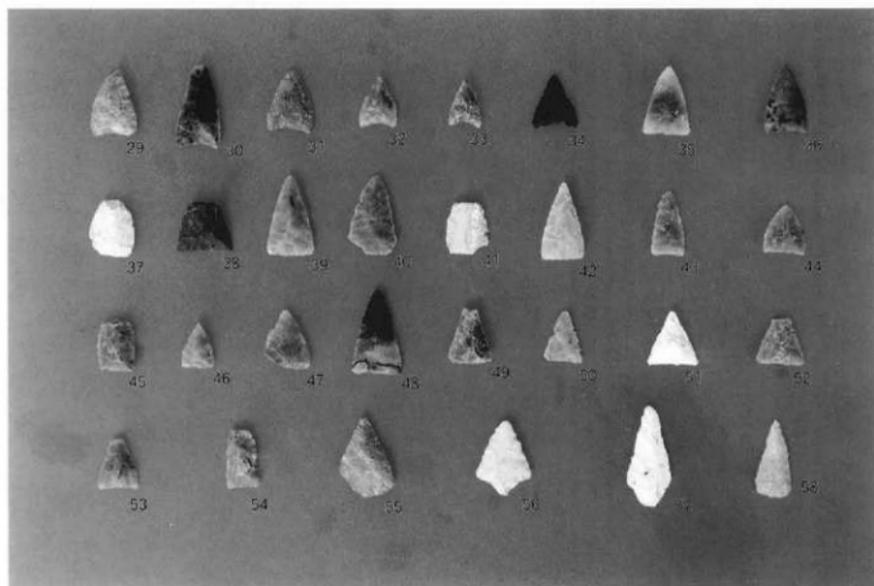


978



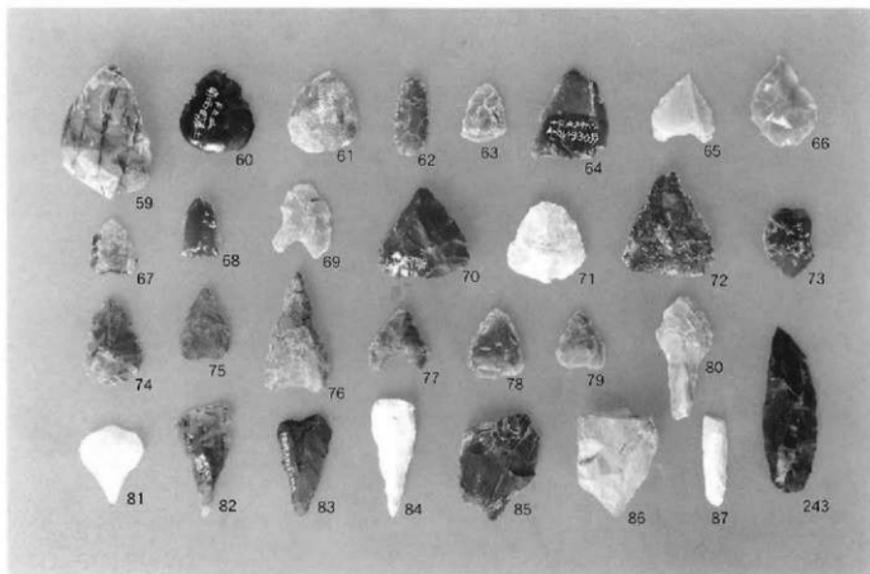
a. 石 鏃 (1)

(約 2 : 3)



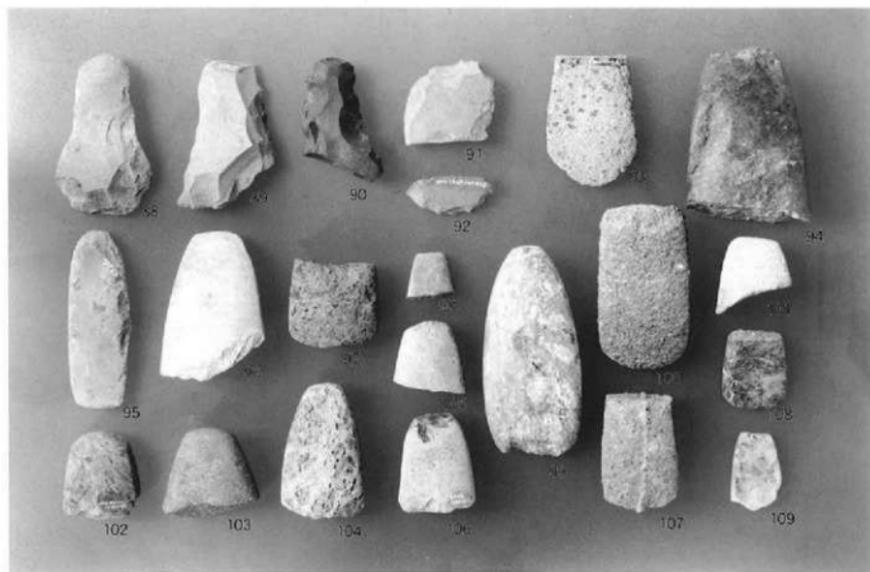
b. 石 鏃 (2)

(約 2 : 3)



a. 石鏃・石錘 他

(約 2 : 3)



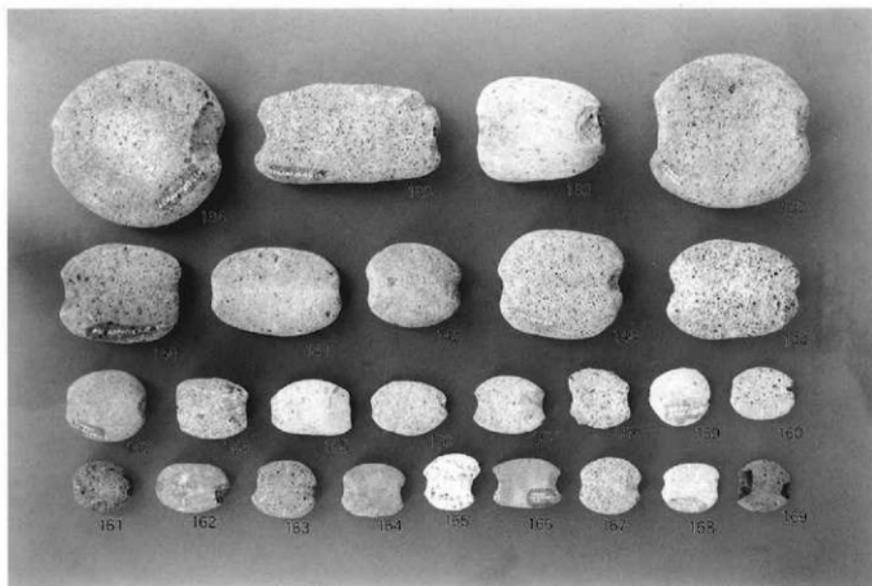
b. 打製石斧・磨製石斧

(約 1 : 3)



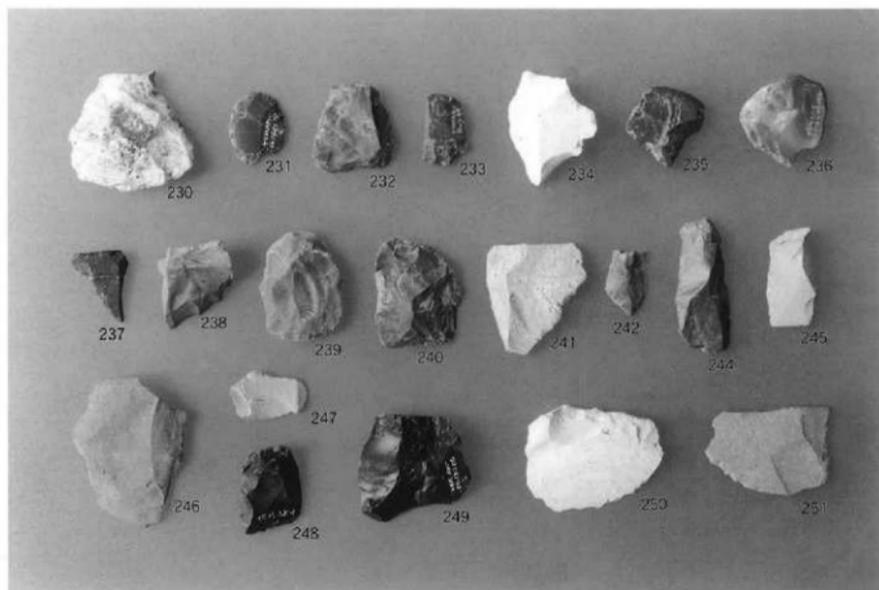
a. 磨製石斧

(約1:3)



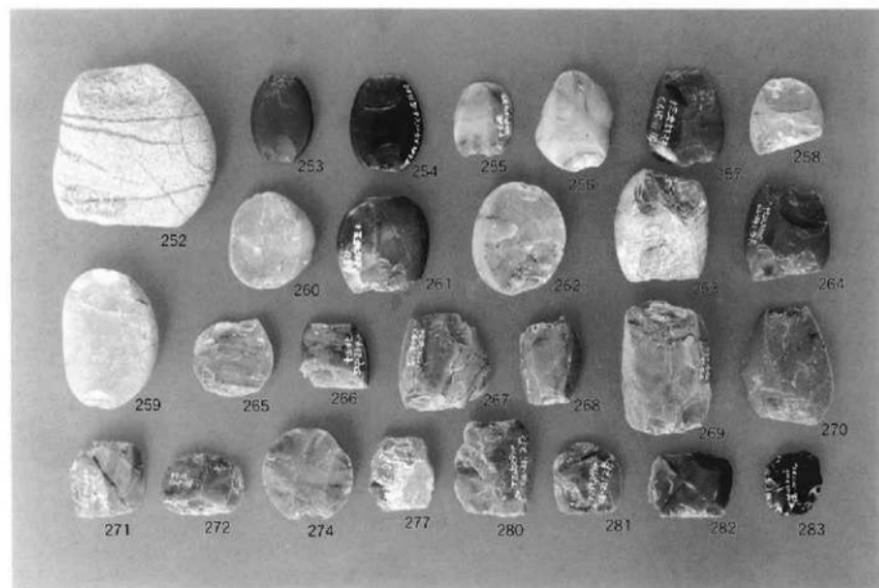
b. 石 錘

(約1:3)



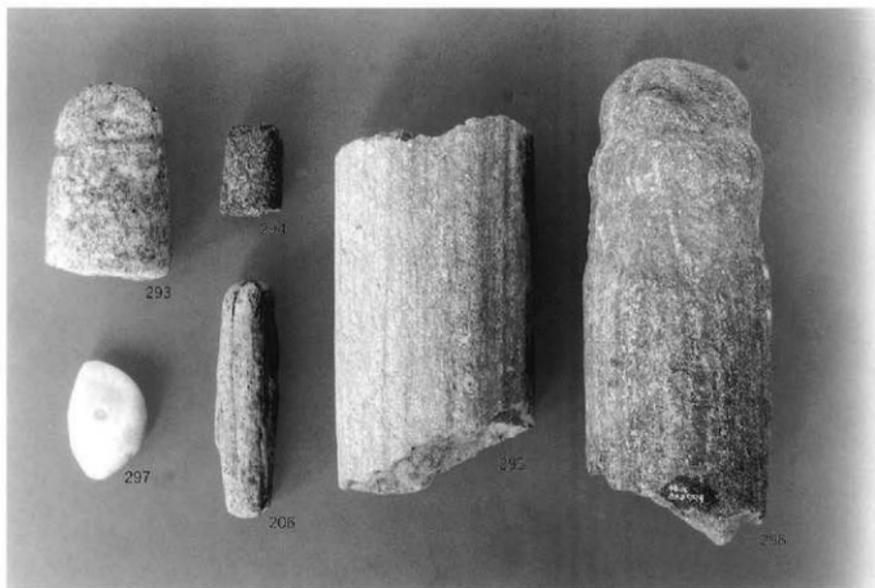
a. 不定形石器

(約 1 : 2)



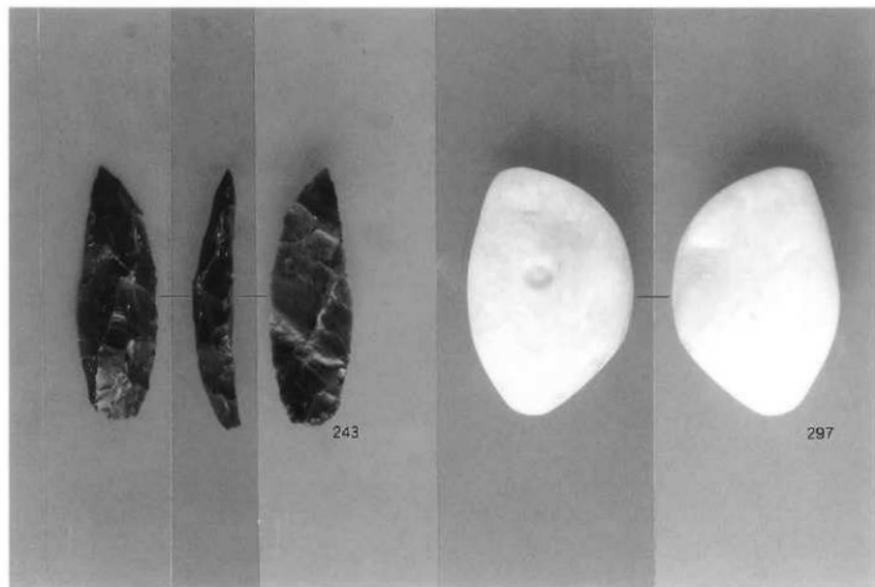
b. ビエス・エスキュー

(約 2 : 3)



a. 石棒・玉類

(約1:2)



b. スクレーパー・玉類 (原寸)

(約1:1)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	じゅうさんぼんづかきた							
書 名	十三本塚北							
報告書名	新潟県柏崎市十三本塚遺跡群・十三本塚北遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	品田高志・平吹 靖							
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室							
発 行 者	柏崎市教育委員会							
所 在 地	番 945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL. 0257-23-5111 内線365							
発行年月日	西暦 2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
十三本塚北 遺跡	新潟県柏崎市 軽井川	15205	651	37度 20分 40秒	138度 35分 54秒	19950828 ～19951225 19960321 ～19960426	約5,000㎡	老人保健施設増築 に伴う発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
十三本塚北 遺跡	集落跡	縄文時代  近 世	住居跡・建物跡  柱穴・土坑・鹿藪場  焼土坑・小溝	縄文土器  縄文時代石器  肥前系磁器		南三十稲場式期中核的集落  大型の建物跡		

柏崎市埋藏文化財調査報告書第37集

# 十三本塚北

—新潟県柏崎市十三本塚遺跡群・十三本塚北遺跡発掘調査報告書—

平成13年3月30日 印刷

平成13年3月30日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 協同組合 柏印会